

大阪市内埋蔵文化財包蔵地  
発掘調査報告書  
(2020)

2022.3

大阪市教育委員会  
(一財) 大阪市文化財協会  
(公財) 大阪府文化財センター

#### 例言

1. 本報告書は令和2年度の大阪市内埋蔵文化財発掘調査の概要を集めたものである。
2. 第1部の調査は大阪市教育委員会の指導のもと（一財）大阪市文化財協会、（公財）大阪府文化財センターが各原因者より委託をうけて実施したものである。  
第2部の調査は大阪市教育委員会が実施したものである。
3. 第1部の執筆は、（公財）大阪府文化財センターが担当した難波御藏跡・船出遺跡発掘調査（FD20-2）をのぞいては、（一財）大阪市文化財協会調査課長 高橋工の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。担当者の氏名は各報告書に記してある。  
第2部の執筆は大阪市教育委員会文化財保護課長 鈴木慎一の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。その氏名は各報告書に記してある。
4. 本報告書の編集は大阪市教育委員会事務局文化財保護課において行った。

## 目 次

### 第1部

#### 北 区

同心町遺跡発掘調査 (DC20-1) 報告書	1
天満本願寺跡発掘調査 (TN20-1) 報告書	11

#### 中 央 区

三津寺境内遺跡発掘調査 (MU20-1) 報告書	27
難波宮跡・大坂城跡発掘調査 (NW19-2) 報告書	39
難波宮跡・大坂城跡発掘調査 (NW19-3) 報告書	59
大坂城下町跡発掘調査 (OJ20-1) 報告書	81
大坂城跡発掘調査 (OS20-1) 報告書	109
大坂城跡発掘調査 (OS20-2) 報告書	119
大坂城跡発掘調査 (OS20-3) 報告書	145
大坂城跡発掘調査 (OS20-4) 報告書	153
大坂城跡発掘調査 (OS20-5) 報告書	171
上本町遺跡発掘調査 (UH20-3) 報告書	189

#### 天王寺区

大坂城跡発掘調査 (OS19-7) 報告書	209
四天王寺旧境内遺跡発掘調査 (ST20-1) 報告書	219
上本町遺跡発掘調査 (UH20-1) 報告書	243
上本町遺跡発掘調査 (UH20-2) 報告書	251
上本町遺跡発掘調査 (UH20-4) 報告書	257

#### 浪 速 区

難波御藏跡・船出遺跡発掘調査 (FD20-2) 報告書	267
-----------------------------	-----

#### 淀 川 区

宮原遺跡発掘調査 (MH20-1) 報告書	281
宮原遺跡発掘調査 (MH20-2) 報告書	303

#### 東淀川区

西淡路1丁目所在遺跡発掘調査 (WA20-1) 報告書	311
下新庄遺跡D地点発掘調査 (XA20-1) 報告書	325

#### 東住吉区

南住吉遺跡発掘調査 (MN20-1) 報告書	337
------------------------	-----

#### 旭 区

生江3丁目所在遺跡発掘調査 (IQ20-1) 報告書	345
----------------------------	-----

## 第2部

### 福島区

鷺洲2丁目所在遺跡発掘調査(SSU20-1)報告書	353
---------------------------	-----

### 中央区

島之内2丁目所在遺跡発掘調査(SSI20-1)報告書	357
大坂城跡発掘調査(SOS20-1)報告書	361
大坂城跡発掘調査(SOS20-2)報告書	365
大坂城跡発掘調査(SOS20-3)報告書	371
大坂城跡発掘調査(SOS20-4)報告書	377

### 天王寺区

伶人町遺跡発掘調査(SRJ20-1)報告書	381
-----------------------	-----

### 浪速区

大国遺跡発掘調査(SDK20-1)報告書	385
----------------------	-----

### 東淀川区

崇禪寺遺跡発掘調査(SSZ20-1)報告書	389
-----------------------	-----

### 平野区

平野環濠都市遺跡発掘調査(SHN20-1)報告書	393
長原遺跡発掘調査(SNG20-1)報告書	397

## 第 1 部



北区天満橋三丁目68-10における建設工事に伴う  
同心町遺跡発掘調査(DC20-1)報告書

調査個所 大阪市北区天満橋3丁目68-10  
調査面積 約124㎡  
調査期間 令和2年9月1日～9月23日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋工、南秀雄

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は大川(旧淀川本流)の右岸にあり、天満堀川を埋め立てた阪神高速12号守口線と、天満橋から北へ延びる天満橋筋の交点の南側街区に位置する(図1)。同心町遺跡は、調査地周辺から南約500m辺りまで続く弥生時代中期を主とした集落遺跡である。近辺では5件の本調査が行われており(図1)、DC96-1・02-3・15-1次調査で畿内第Ⅱ～Ⅲ様式の土壌などと土器・石器が、DC02-3次調査で畿内第Ⅴ様式～庄内式期の土器が出土している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998]・[同2004]・[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2017]。近年の成果としては、南西約700mの野崎町所在遺跡で多量の木質遺物を集めた弥生時代後期の貯水池が見つかり、同心町遺跡の住人の関与が推定されている[大阪市文化財協会2020]。また、DC96-1・02-3次調査では古墳時代以降と推定される溝や、奈良時代前後の土器などが出土し、この時期の集落等があったことが推測される。このほかにDC15-1次調査で大川岸の大規模な堤防跡が発見されており、豊臣期に遡る可能性がある[南秀雄2016]。

大阪市教育委員会の試掘調査では、地表下約2mで弥生～古墳時代と推測される地層や遺構が検出された。調査は東西13m×南北13mで計画されたが、事前打合せで隣地への影響を勘案して南北幅を10mに減じ、着手時に安全を期してさらに9.5mに縮めることになった。反転掘りによって東区(上端で東西8.5m)より始め、9月14日から西区を調査した。本報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することによって得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はTP値(東京湾平均海面値)を用いてTP±〇mと表記した。

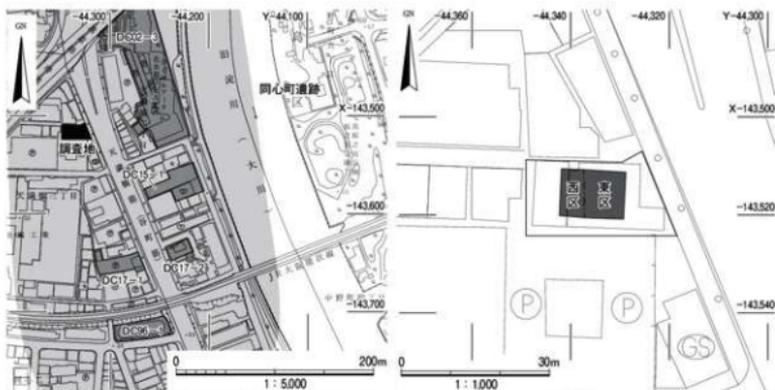


図1 調査地位置図

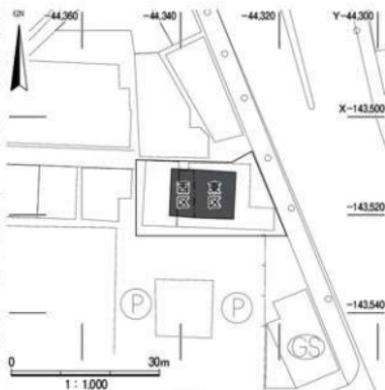


図2 調査区位置図

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

調査地の標高はTP+3.0mで、約1mの厚さの現代盛土より下の地層に層名を付した。第1・2層はSD401由来の窪みを埋めて平坦にした東側が厚く、東壁断面で代表して記した。

第1層：黒褐色(2.5Y3/2)中粒砂質シルト層で最大層厚25cmである。

第2層：細礫が混る黒褐色(2.5Y3/2)シルト質中粒砂層で、最大層厚35cmである。第1～2層は18世紀後半以降の盛土である。

第3層：第4層上面の大溝SD401の埋土を第3層とした。上層は暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒砂層で最大層厚60cm、下層はオリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂質シルト層で層厚は10cmである。第3層から豊臣期の瀬戸美濃焼皿13、徳川初期の肥前陶器皿14が出土した(図7)。上面にSD401がある程度埋めた後の溝SD301がある。

第4層：褐色(10YR4/4)粗粒～極粗粒砂層を主体にオリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土偽礫が混る盛土層で、層厚は70cmである。盛土後の地面の形成のためか、上方に粘土偽礫を集めた部分が見られる。第4層は遺物をほとんど含まないが、第3層出土遺物と、近接したDC15-1次調査の盛土(築堤後の第2層)との対比から、17世紀前葉の徳川初期と推定しておく。

第5層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒砂質シルト層や黄褐色(2.5Y5/4)シルト質細粒砂層からなり、層厚は5cmである。これらの地層を覆って西壁の一部にオリーブ褐色(2.5Y4/6)極粗粒～細粒砂の水成層が残っていた。この水成層を含め、第5層は前後の地層との関係と、瓦器片の出土から中世～豊臣期と推定した。

第6層：シルト偽礫混りのにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂質シルト層や褐色(10YR4/6)中粒砂層からなり、層厚は10cmである。図7の10・11のように出土遺物は弥生土器で占められるが、本層出土の土器器杯12からすると下限は8世紀末～9世紀初め頃となる(註1)。10は壺頸部に6条以上のヘラ描沈線文が、11は壺の口縁端部内面に櫛描波状文が施され円孔がある。10は弥生前期末に遡る。第6層上面にはSD601・602があった。

第7層：灰黄褐色(10YR5/2)シルト質粗粒砂～中礫の水成層で、層厚は120cm以上である。ラミナ

は不明で、固く締まった部分がある。下方にいくに従って細礫が増え、上面から約80cm(TP+0.3m)以深で細～中礫層となり、北から南へ傾く礫層のラミナが観察できた。第7層からは遺物は出土していない。上面にSD701・702やSP716～718などの弥生時代中期の遺構があった。

### ii) 遺構と遺物

#### a. 第7層上面の遺構と遺物(図5～7)

第7層上面で溝・柱穴・土壇を検出した(図5上図)。SD701は長さ3.3m以上、幅0.7m、深さ0.2mである。SD702は長さ4.4m以上、幅0.7m、深さ0.25m強で、底

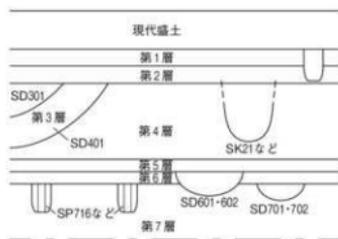


図3 地層と遺構の関係図

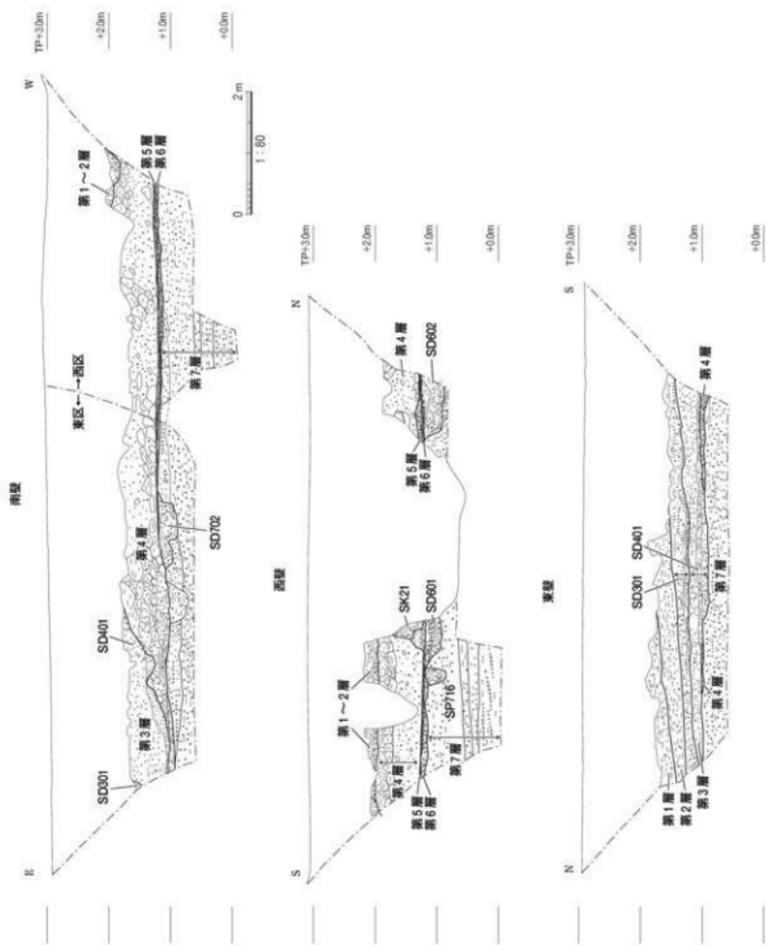


圖4 南・西・東壁地層断面図

は凹凸がある。いずれの溝も水が流れた痕跡はなかった。SD702からは弥生土器の壺口縁部1、甕底部2、壺底部3が出土した(図7)。1は端部には飾描文が残り、第Ⅱ様式である。

第7層上面では11個の円形のピットを検出した。柱痕跡が明瞭でないものもあるが、大部分は掘立柱建物の柱穴と推定される。掘形の直径は0.3m内外、深さは0.2~0.35m、柱痕跡は0.1~0.15mであった。南西のSP716・717・718は一つの建物や柵を構成していた可能性が高い。柱間寸法は0.90m・0.85mである。SP716-718の方向はSD701と近い。

SK714は東西1.5m、南北1.2m以上、深さ0.1mである。SK714はSP720より古い。埋土にはふい黄褐色(10YR4/3)粗粒~極粗粒砂で、完形の第Ⅱ様式の甕5が横倒しの状態で出土した。

SK708は南北1.6m、東西1.3m以上、深さ0.15mで、埋土に炭を多く含むのが特徴である(図6上段)。また、SK704から第Ⅲ様式の大型の甕の口縁部4が出土した。

本項で上層出土の石器遺物も報告する。16は第4層から出土した石槍の未製品またはクサビである。自然面を背面にもつ縦長剥片を素材とし、右図中央と右端に主剥離面の一部を残す。17は第6層上面のSD602出土の剥片で、横長剥片の側縁部に両面から加工して刃部をつくらうとしている。石鏃未製品の可能性がある。いずれも石材はサヌカイトである。

以上の出土遺物から、第7層上面の遺構は第Ⅱ~Ⅲ様式の弥生時代中期と推定される。

#### b. 第6層上面の遺構と遺物(図5~7)

第6層上面には平行した2条の溝SD601・602があった(図5下図)。SD601は幅1.1~1.2m、深さ0.3mであった。西区の東側断面によれば(図6の最下段中央)、加工時の地層(断面図の5)の上に粘土の薄い水成層(同4)が堆積し、浅くなった後に極粗粒砂の水成層(同2)が溜まっている。方向はW25°Nである。

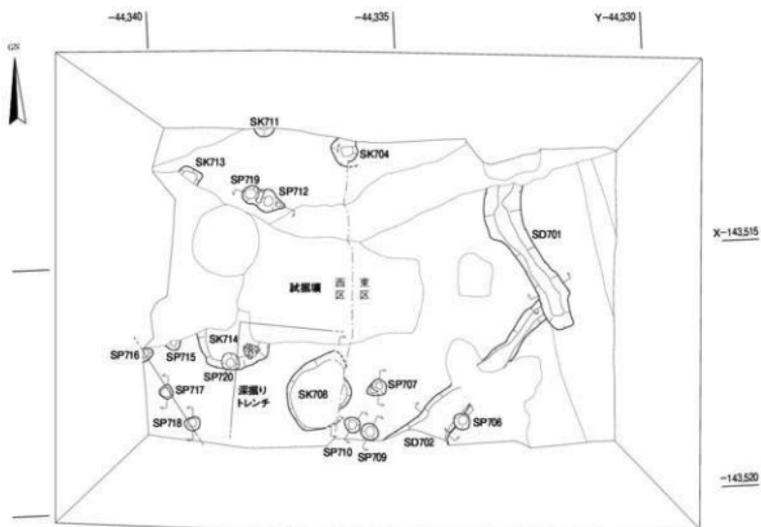
SD602は方向や埋土の類似から、SD601と同じ時期の遺構と考えられる。幅1m以上、深さ0.35mである。調査区北西角から上端が近いと推測され、規模はSD601と類似する。埋土は、下から偽礫混り褐色(10YR4/4)シルト質粗粒~極粗粒砂層(加工時)、水成層を挟んだ灰黄褐色(10YR5/2)粗粒砂質粘土層(機能時)で、黄褐色(10YR5/6)細粒砂層で埋められている。

SD601から弥生土器6~8、SD602からは9が出土した(図7)。6・7は壺の口縁部で端部に飾描文が施され、7には円形浮文が貼付けられている。第Ⅲ様式である。8はタタキメのある第Ⅴ様式の甕底部、9は壺の底部である。

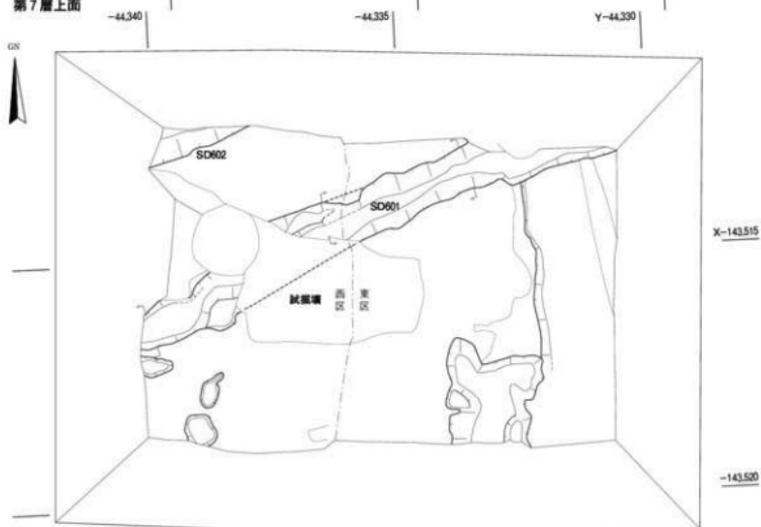
SD601・602は検出面、埋土とも第7層上面の遺構との違いは明らかであった。最新の出土遺物は7の壺であるが、第6層出土の土師器杯12などから古代の遺構と判断した。

#### c. 第4層上面~第3層上面の遺構と遺物(図7・8)

第4層上面で南北方向の大溝SD401を検出した(図8左)。SD401は深さ約1mで、底にある細い溝(幅0.4m、深さ0.1m)を中心に折り返すと幅約6mになる。方向はN12°Wである。最下の溝状部の埋土は偽礫混りの黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂層で、ラミナはほとんど見えない。その上の埋土も層序で記した通りで(第3層)、水成層はほとんど見られず、定期的に浚えるなどして管理されていたためと思われる。



第7層上面



第6層上面



図5 第7層上面・第6層上面遺構平面図

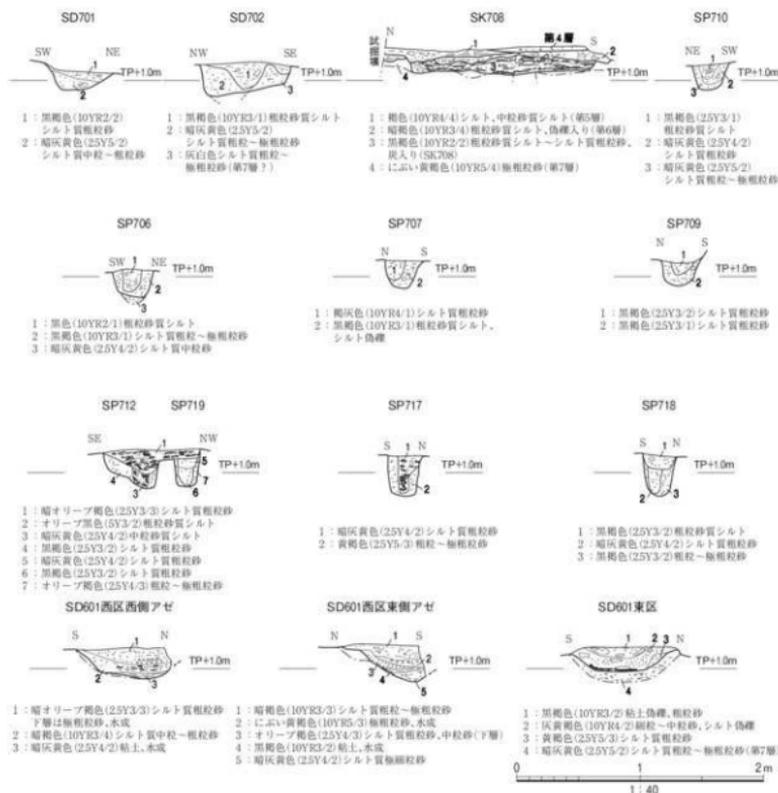


図6 第7・6層上面遺構断面図

SD401は第3層で埋められた後も機能し続けており、それをSD301とした(図8右)。SD301は深さ0.75m、幅1.5m以上である。埋土は、底にオリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土～シルト層があり(厚さ10cm以内)、その上は一部にラミナのある暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質中粒～極粗粒砂層であった。コンニャク印判手の肥前磁器染付碗15が出土し、SD301は18世紀前半～中頃と推測される。SD401埋土(第3層)から出土した肥前陶器皿14などと合せ、SD401は徳川期以降の17世紀前葉につくられ、18世紀には規模を縮小して機能し続けたと考えられる。周辺の田畠に対する基幹的な灌漑水路であろう。

このほかに第4層上面の遺構の可能性のあるものとして、西壁際のSK21がある。SK21は直径0.9m、深さ0.5m以上である。埋土は炭灰りの暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質中粒砂層であった。また、SE01によって壊されて一部が残るSK22も第3～4層上面の遺構の可能性が高い。SK22は深さ1.5mほどに復元でき、近世のごみ廃棄穴と推測される。

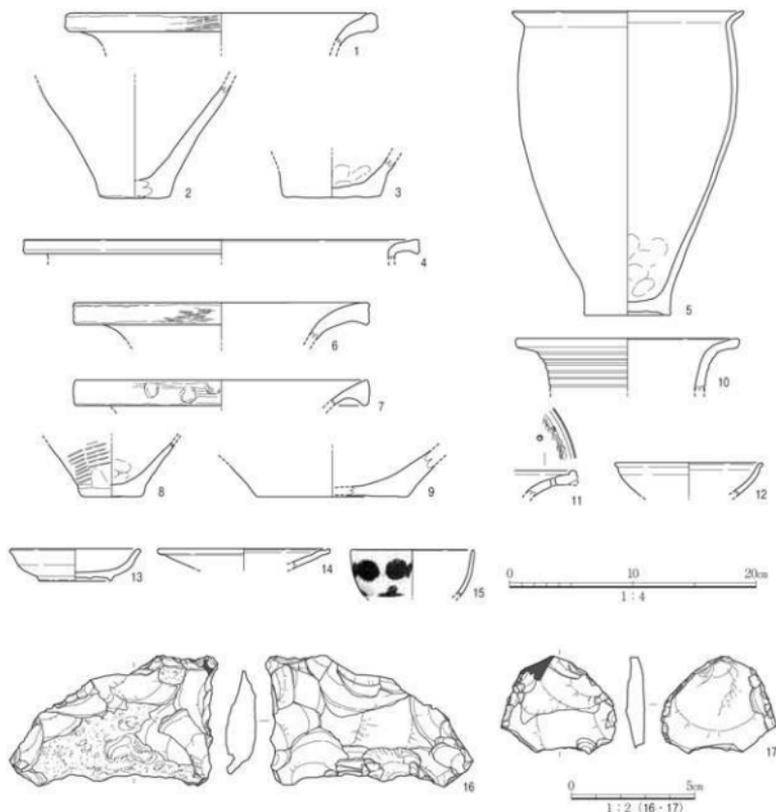


図7 出土遺物実測図

SD702(1~3)、SK704(4)、SK714(5)、SD601(6~8)、SD602(9・17)、  
第6層(10~12)、SD401(13・14)、SD301(15)、第4層(16)

図8に図示した上記以外の小穴などは、第1・2層かそれより上の地層に伴う遺構で、いずれも新しいものである。

### 3) まとめ

- ・第7層上面で弥生時代中期の第Ⅱ～Ⅲ様式期の溝・柱穴・土壇を検出した。柱穴の中には組み合うものもあった。
- ・第6層上面で平行する2条の溝SD601・602があった。これらは古代のものと推測される。
- ・徳川初期の盛土後につくられた、灌漑用と推測される南北方向の大溝SD401を検出した。溝は規模を縮小しつつ18世紀中頃までは機能していた。

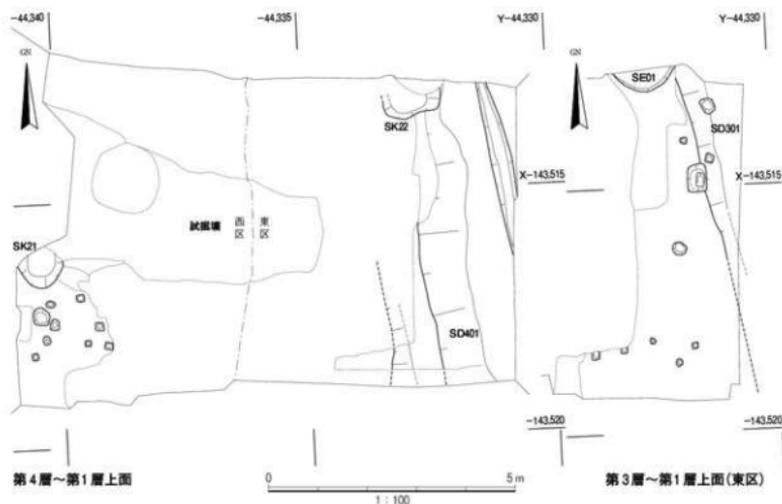


図8 第4層～第1層上面遺構平面図

註)

(1) 市内の類例では、長原遺跡出土資料を中心とした佐藤隆編年[佐藤隆1992]の平安時代I期の土師器椀A、鈴木秀典編年[鈴木秀典1983]のB-1期の土師器杯I DまたはI Cに近い(大阪市文化財協会「長原遺跡発掘調査報告」Vの346番など)。佐藤によればこれらの時期は8世紀末～9世紀初頭である。

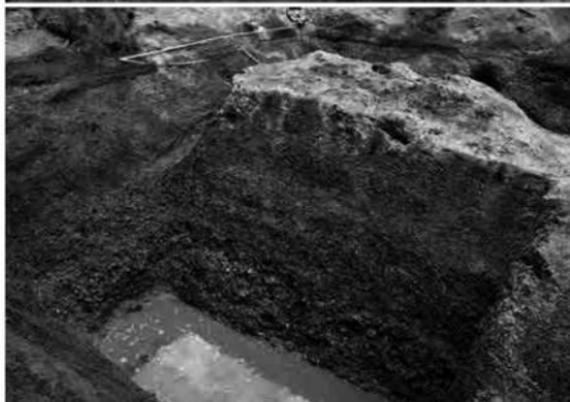
参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998、「信開ホテルによる建設工事に伴う発掘調査(DC96-1)」:「平成8年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.13-22
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2004、「同心町遺跡B地点発掘調査(DC02-3)」:「平成14年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.3-11
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2017、「北区天満橋二丁目34-3における建設工事に伴う同心町遺跡発掘調査(DC15-1)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2015)」, pp.1-8
- 大阪市文化財協会2020、「野崎町所在遺跡発掘調査報告」
- 佐藤隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」:大阪市文化財協会「長原遺跡発掘調査報告」V, pp.102-114
- 鈴木秀典1983、「B期における土器編年」:大阪市文化財協会「長原遺跡発掘調査報告」Ⅲ, pp.224-226・付図
- 南秀雄2016、「大川の堤の発掘」:大阪文化財研究所編「葦火」183号, pp.4-5

西区西壁断面  
(東から)



深掘りトレンチ西壁断面  
(北東から)



東区第7層上面全景  
(東から)





西区第7層上面全景  
(東から)



西区第7層上面SP716  
～718(南東から)



西区第7層上面SK714  
土器出土状況(南から)





西区第6層上面SD601・  
602(東北東から)



東区第6層上面SD601  
(東北東から)



東区第4層上面SD401  
(北から)





北区天満一丁目 5-2・3、35-2・3 における建設工事に伴う  
天満本願寺跡発掘調査(TN20-1)報告書

調査個所 大阪市北区天満1丁目5-2・3、35-2・3  
調査面積 75㎡  
調査期間 令和2年6月8日～6月25日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋 工、平田洋司、橋本 稔

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は大川の北側、谷町筋に面した場所に位置し、上町台地から北に続く天満砂堆上に立地する。豊臣秀吉により1585(天正13)年に本願寺が誘致され、周囲に城下町天満が形成されることとなる。また、江戸時代には大坂三郷の一つである天満組として栄えた地域である。

周辺では各所で発掘調査が行われており、各所で天満本願寺に関連して豊臣期以降の遺構・遺物が確認されている。また、豊臣期を遡る古墳～室町時代の遺構・遺物も検出され、この地域の開発の歴史を検討するうえで、重要な成果が得られている。周辺の調査に注目すると、東約80mのTN04-1次調査では古墳時代中期～後期の竪穴建物・掘立柱建物、平安時代～鎌倉時代の柵や土壇、豊臣期から徳川期の建物・土壇などが検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005]。道路を隔てた南のTN19-1次調査では古墳時代中期～後期の土壇、飛鳥時代から平安時代の遺構、豊臣期から徳川期の土壇などが見つまっている[大阪市文化財協会2020]。TN07-2次調査では古墳時代中期～後期の土壇、飛鳥時代前葉の土壇、室町時代後期の小穴、豊臣後期から徳川初期の土壇・井戸などが検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009]。TN13-2次調査では飛鳥時代中葉の土壇、豊臣期の建物・土壇などが検出されている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015]。

今回の調査地でも大阪市教育委員会による試掘調査の結果、地表下約1.2m以下で近世以前の遺構面および遺物包含層が検出されたことから調査を実施することとなった。敷地北半部は旧建物の基礎で破壊されていることから、敷地南半部に東西15m、南北5mの調査区が設定された。調査は令和2年6月8日から開始した。調査区東端から重機掘削を進め、攪乱の断面で観察したところ、試掘時に地表下1.5mで自然堆積層と判断された地層が、まだ徳川期の整地層であり、かつ西側にかけて大規模な

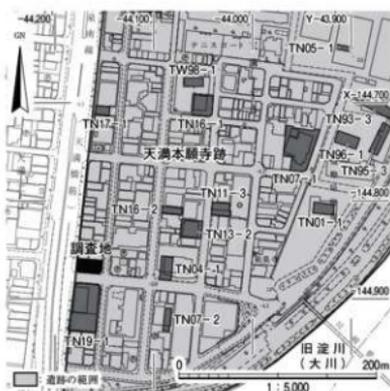


図1 調査地位置図

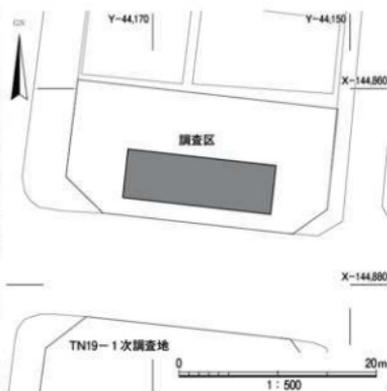


図2 調査区配置図

遺構が存在することが判明した。掘削の土量が増えることから排土置場の確保のため、調査区を東西に二分し、反転しての調査を余儀なくされた。それぞれ東区・西区と呼称する。重機による掘削は後述の第2層の除去までとし、以下は人力による掘削で進めた。

また、掘削深度が深くなることから途中、周囲にテラスを設けて掘削を行った。途中適宜に遺構検出・掘削作業、図面作成・写真撮影などの記録作業を行い、現地における記録作業は6月25日に終了した。

なお、基準点は街区基準点を用いたトラバース測量により、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP±〇mと記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3)

調査地の標高はTP+3.8~3.9mとほぼ平坦である。今回の調査では部分的な掘削を含め、現地地表より約3.2mまでの地層を確認し、第1~9層の9層に区分した。なお、今回の調査では東端部を除いた調査区のほとんどを占める溝としてSX601があり、東端部では整地による嵩上げが行われるのに対して、SX601内部は窪みとして放置された状態であり、地層の様相は東端部とSX601内部とで大きく異なっている。また、徳川期の井戸によって連続した地層として認識することができなかったため、地層の対比は困難であった。なお、SX601による削平によって、第6層以下は調査地の東端部にしか遺存しない。ここでは各層が遺存する調査区東壁の観察結果をもとに記述する。

第1層：現代の整地層および攪乱である。層厚は80~120cmで、東端を除く調査地南部では攪乱として層厚300cm以上ある。

第2層：炭を含むオリブ褐色(2.5Y4/3)シルト質細粒砂を主体とする整地層で、層厚20cm未満で部分的に遺存する。本層まで重機による掘削を行った。18世紀代に位置づけられる。遺物は出土しなかった。

第3層：褐色(10YR4/4)細礫混り細粒~中粒砂の上部(第3a層)と浅黄色(2.5Y7/4)細礫混り細粒砂の下部(第3b層)からなる整地層である。層厚は第3a層が20cm、第3b層が40cmである。一括して掘削したため区分できなかったが、土師器・肥前陶器・瓦片など17世紀中葉までの遺物が出土した。次項で記すように第3a層が17世紀の前半、第3b層が17世紀の中葉と区分できる可能性が高い。

第4層：炭・焼土偽礫を多く黄褐色(2.5Y5/4)シルト質細粒砂からなる整地層である。第5層上面は被熱しており、大坂の陣による被災に伴う整地層と考えられる。

第5層：シルト偽礫を含む黄褐色(2.5Y5/4)シルト質細粒砂からなる整地層で、層厚は20cmである。上半は炭とシルト質細粒砂が顕著に互層となり、それぞれが生活面となる。土師器・備前焼・瀬戸美濃焼・肥前陶器などを含み、豊臣後期に位置づけられる。

第6層：シルト偽礫を含むオリブ褐色(2.5Y4/4)シルト質細粒砂からなる整地層で、層厚は25cmである。遺物は出土しなかった。本層上面での遺構の時期から豊臣後期に位置づけられる可能性が高いが、豊臣前期にまで遡る可能性もある。本層以下は部分的な掘削および遺構の底で確認したのみである。

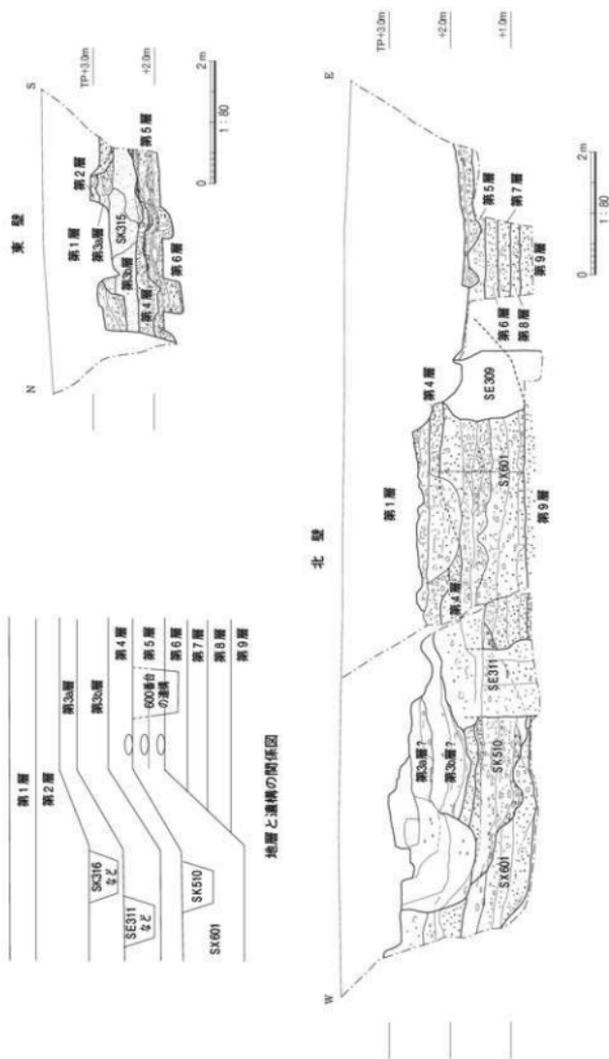


図3 地層と遺構の関係図および地層断面図

第7層：シルト偽礫を少量含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質中粒砂からなる作土層で、層厚は20cmである。時期は不明であるが、周辺の調査成果から中世に遡る可能性がある。

第8層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粗粒砂からなる古土壌である。層厚は20cmで、第9層との境は不明瞭である。遺物は出土しなかったが、周辺の調査から古墳時代から古代にかけて形成された古土壌と考えられる。

第9層：ぶい黄色(2.5Y6/3)粗粒砂～細礫からなる河成堆積層で層厚は30cm以上である。遺物は出土しなかった。

ii) 遺構と遺物(図4～10)

a. 豊臣期以前の遺構と遺物

豊臣期の整地層と考えられる第6層以下は調査区東端にて部分的な掘削により確認したのみである。なお、後述のSX601により第6～8層はこの部分にのみしか遺存していない。第8層は周辺の調査で古墳時代から平安時代の遺構が検出される層準であるが、遺構・遺物ともに確認されなかった。また、第7層は作土層であるが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

b. 豊臣期の遺構と遺物

豊臣期の整地層である第6層上面では東区東端部で礎石建物および土壇を、東区西部以西で溝を確認した。遺構の検出は第6層上面にて行ったため一括して図示するが、東端部の遺構は断面の観察から第5層中に遺構面があるものがある。

SX601：東区西半以西で検出した南北方向の溝である。遺構の東肩が徳川期の井戸等によって失われていること、西肩が調査区外であることから、本来の遺構面としては不明であるが、出土遺物や埋土の状況から第6層の整地に伴い掘削され、徳川期に至るまで存続したと判断した。幅10m以上としかわからないが、西区西端で斜面が認められたことから、それほど西へ広がらないと考えられる。底部は平坦で、第9層をわずかに掘り下げた時点で掘削を停止している。第6層上面からの深さは1.4m

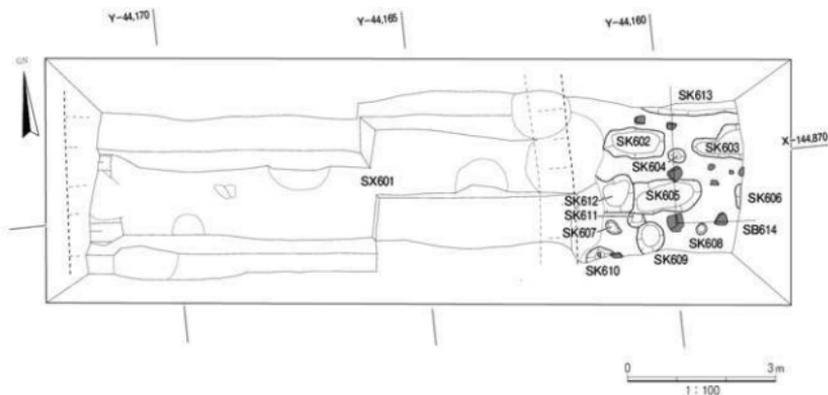


図4 第6層上面および第5層内の遺構

である。埋土は下部および肩口付近がシルト偽礫をわずかに含むシルト質粗粒砂～細礫で、水流や滯水の痕跡が認められず、遺物も少ないことから、掘削後、比較的短期間の間に埋没したとみられるのに対して、埋土上部は炭や遺物を多く含む周囲から徐々に土が流入した状況であった。道路を隔てた南のTN19-1次調査ではこれに対応する溝は検出されておらず、調査地の南で屈曲するのか、途切れるのかは不明である。屋敷地を造成する際に、東に位置する南北方向の道路に面して建物を配置するための整地土の確保と、敷地背後を一段低くしておくためと推定しておきたい。なお、SX601は徳川期以降も窪みとして残されるとともに、その東側とでは遺構の分布も異なるため、区画としての意味も大きいと考えられる。

SX601からは埋土上部を主体に多くの遺物が出土した。1は焼壺蓋の蓋である。2は土師器鍋である。3・4は瀬戸美濃焼で3は天目碗、4は志野向付である。5～10は肥前陶器で5・6・9は皿、7は小碗、8は碗、10は向付である。8～10は鉄絵を施す。

SB614:敷地東端で検出した礎石建物である。南北方向に0.9m間隔で3石、南端の礎石から東に0.9mで1石を確認したことから建物として復元した。調査区南に続く可能性もある。建物内と想定できる場所にも土壌があることや、炭とシルトからなる互層の整地が礎石設置後も施されていることから、建物には床や壁がなかったものと推定できる。また、建物内外や第5層の整地途中にも礎石とみられるものがあり、この建物に関係する施設が存在した可能性がある。

SK602:調査地東側で検出した平面形が方形の土壌である。東西1.2m、南北0.6mで、深さは0.2mである。埋土は炭・焼土、シルト偽礫を含むオリブ褐色シルト質極細粒砂である。多くの陶磁器類ともに銅銭・貝・骨・金属片などが出土した。11は土師器皿で、底部は平底である。12・13は備前焼で、12は瓶、13は底部に窪印を有する平皿である。14・15は瀬戸美濃焼で、14は天目碗、15は折縁皿である。16・17は中国産青花で、16は皿、17は碗である。いずれも型押成形である。18は北宋銭の皇宋通宝である。

SK603:東西1.0m以上、南北0.8m、深さ0.4mである。土師器・備前焼・瀬戸美濃焼・肥前陶器などが出土した。19・20は肥前陶器で、19は底部糸切りの小碗、20は鉢で、口縁端部を折り曲げて四角形とする。20は上野高取焼の可能性もある。21～24は瀬戸美濃焼である。21は灰釉の折縁皿、22～24は志野皿で、22・23は菊花皿である。24は鉄絵を施す皿である。

SK605・612:一つの土壌と認識していたが、掘削したところ二つの土壌が重なっていることが判明した。先行する東側のSK605は、東西1.4m以上、南北0.7m、深さ0.2m、後出する西側のSK612は、東西0.8m以上、南北0.8m、深さは0.4mである。一括して掘削したため、区別できなかったが、土師器・備前焼・肥前陶器などが出土した。25・26は肥前陶器で、25は皿、26は碗である。

SK606:調査区東端で検出した。東西0.1m以上、南北0.5m、深さ0.2mである。中国産青花皿が出土した。

SK613:調査区東北端で検出した。東西1.9m以上、南北0.3m以上、深さ0.2mである。遺物は出土しなかった。

上記の各土壌は平面形の形状が長方形で埋土が共通する。また、東西方向に列状となり、機能とし

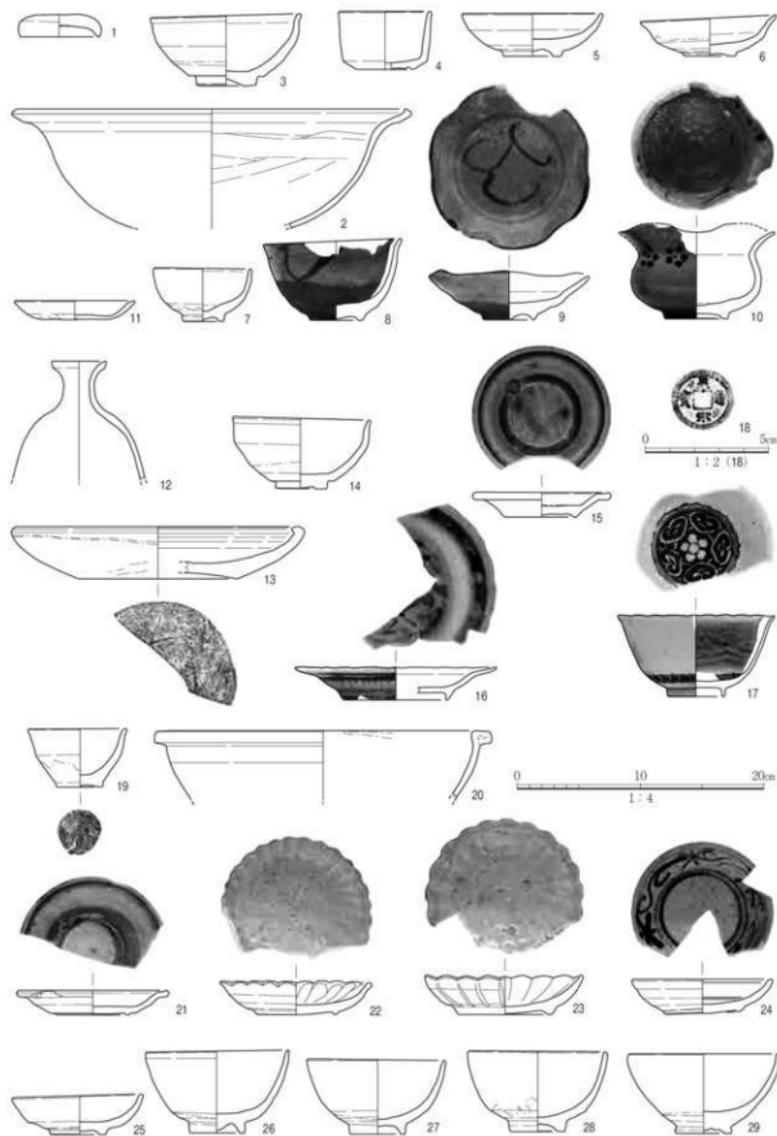


图5 出土遗物实测图(1)

SX601(1-10), SK602(11-18), SK603(19-24), SK605·612(25-26), SK609(27-29)

ては不明であるが、同じ意図のもとに掘削されたと考えられる。

SK604:東西0.4m、南北0.3mの平面形が円形の土壌で、深さは0.1mである。遺物は出土しなかった。

SK607:東西0.4m、南北0.2mの平面形が不整形の土壌で、深さは0.1mである。遺物は出土しなかった。

SK608:直径0.2mの平面形が円形の土壌で、深さは0.1mである。遺物は出土しなかった。

SK609:直径0.6mの平面形が円形の土壌で、深さは0.3mである。埋土は炭を含むシルト質細粒砂である。土師器・備前焼・瀬戸美濃焼・肥前陶器が出土した。27～29は肥前陶器碗である。

SK610:東西0.6m以上、南北0.2m以上の平面形が円形の土壌で、深さは0.1mである。埋土は炭を含むシルト質極細粒砂である。土師器・瓦質土器・備前焼壺・中国産青花皿のほか瓦、金属片が出土した。30は土師器皿で、底部は丸底でユビオサエによる変形が著しい。

SK611:東西0.4m、南北0.3m以上の平面形が不整形の土壌で、深さは0.1mである。SK605・609に先行する。埋土は炭を含むシルト質細粒砂である。土師器・備前焼・丹波焼・肥前陶器・中国産青花のほか瓦片が出土した。31は土師器皿で、底部は平底気味である。32は土師器の大皿である。33は丹波焼播鉢で、摺目は一条単位である。34は備前焼壺で、体部に篆刻、底部に窯印を有する、35は肥前陶器で、鉄絵を施す向付である。

これらの遺構が形成される第5層からは土師器・備前焼・瀬戸美濃焼・肥前陶器・中国産青花などが出土した。36は土師器皿で灯火具として使用している。37は焼塩壺の身である。38は瓦質のミニチュア釜である。39-40は瀬戸美濃焼で、39は灰釉皿、40は灰釉の折縁皿である。41～48は肥前陶器である。41は口縁が屈曲して立ち上がる向付である。42は小碗である。43は皿で、口縁部は輪花である。44は小型の甕である。45～48は鉄絵を施した向付で、46は香茶碗の可能性がある。49は口縁部が端反りの中国産白磁皿である。50は犬形土製品で、胴が薄く長いタイプである。51は北宋銭で、紹聖元寶である。

上記の遺構および第5層からの出土遺物は豊臣後期に位置づけられる。

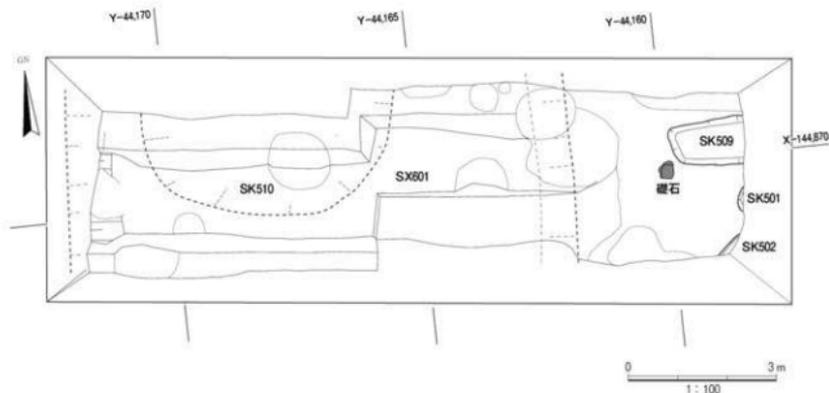


図6 第5層上面の遺構

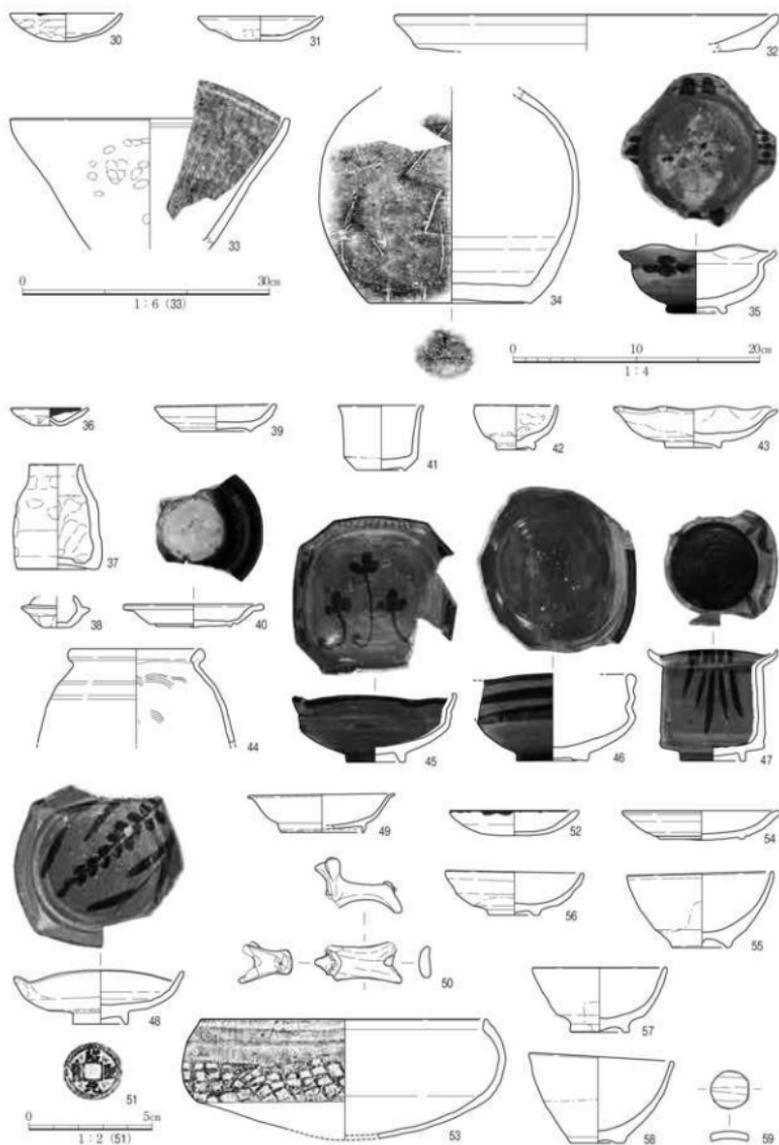


图7 出土遗物实测图(2)

SK610(30)、SK611(31~35)、第5層(36~51)、SK510(52~59)

焼土層である第4層で覆われる第5層上面では東部で礎石を、西部でSX601が第5層段階で埋まり切らなかった深さ0.6m程度の窪み、およびこれを切るゴミ穴等が検出された。

**礎石**：調査区東部で1基の礎石を検出した。直接組合うものは確認できなかったが、第6層上面で検出した建物と関係するものであろう。

**SK501**：調査区東端で検出した土壌である。東西0.2m以上、南北0.5mで、深さは0.4mである。埋土は下部がシルト偽礫を含むシルト質細粒砂、中部が炭・シルトの互層、上部が焼土層である第4層である。遺物は出土しなかった。

**SK502**：調査区東南端で検出した土壌である。調査区外に続くため形状は不明である。深さは0.1mである。遺物は出土しなかった。

**SK509**：調査区東端で検出した土壌である。東西1.5m以上、南北1.0mの平面形が方形で、深さは0.3mである。埋土は焼土層である第4層である。遺物は出土しなかった。

**SK510**：調査区西部、SX601の上位で検出した土壌である。掘削開始時には遺構として認識できなかったが、壁面等の観察によって遺構として復元した。東西5.0m程度、南北3.5m以上の平面形が円形で、深さは1.1mで、挿針状に深くなる。埋土は炭・シルト偽礫を多く含む中粒砂質シルトが主体で、上部は焼土・瓦片を多く含む。上部は明瞭でないが第4層に対応するものであろう。SX601は第5層上面の段階でも0.6m程度の窪みとして残っており、この部分がゴミ穴として利用されたと推定できよう。土師器・備前焼・瀬戸美濃焼・肥前陶器・瓦片など多くの遺物が出土した。52・53は土師器で、52は灯火具として用いられた皿、53は焙烙で、体部外面に格子タキを施す。54は瀬戸美濃焼灰釉皿である。55～58は肥前陶器碗である。59は肥前陶器を加工した円盤状製品である。

これらの遺構から出土した遺物は豊臣後期に位置づけられる。

### c. 徳川期の遺構と遺物

続く徳川期には、東側では第3a・3b層の砂を主体とする整地が施される。第3層は一括して掘削し

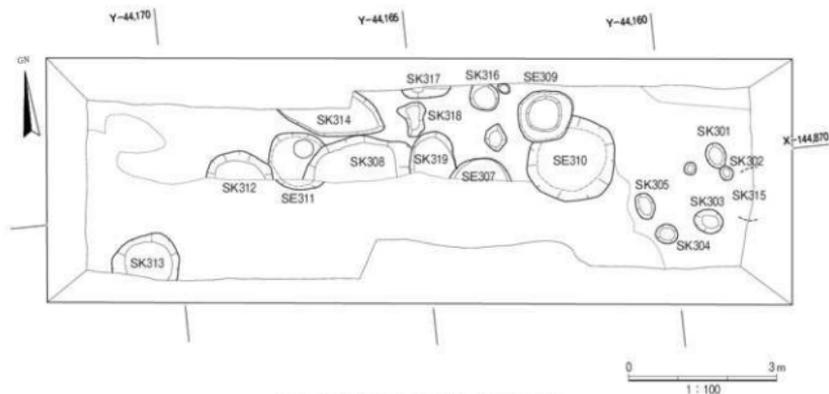


図8 第3b層上面および第3a層上面の遺構

たが、17世紀中葉までの遺物を含む、SX601の上部では明瞭な第3a・3b層としては認識できなかったが、17世紀前葉と考えられるゴミ穴のほか、遺物も少なからず検出されている。一方で、屋敷表面に当る東側が大坂の陣後、17世紀中葉まで整備されないのは不自然であることから、第3b層が大坂の陣後ほどない17世紀前葉、第3a層が17世紀中葉と区分できる可能性が高い。砂を主体とする第3a・3b層は敷地全面に当る東側のみみられ、SX601のあった部分はそのまま残され、第3a・3b層の時期を通じてゴミ捨て場として利用されたと考えられる。

第3b層段階の遺構としては、井戸・土壇がある。

SE311:調査区西部で検出した井戸である。直径1.2mの平面形が円形で、井戸側は直径0.5mである。腐植して遺存していないが、井戸側は桶と考えられる。深さは1.0m以上である。埋土上部から土師器・瓦質土器・丹波焼・瀬戸美濃焼・肥前陶器など17世紀前葉に位置づけられる遺物が出土した。60は肥前陶器溝縁皿で、底部内面には砂目痕を有する。

SE310:調査区東部で検出した直径1.8mの井戸で、深さは1.4m以上である。土師器・備前焼・肥前陶磁器など17世紀前葉の遺物が出土した。

SK308:東西2.3m以上、南北0.9m以上の土壇で、深さはもっとも深い部分で0.5mである。SE311より新しい。埋土は下部がシルト偽礫主体、上部が炭・シルト偽礫を含む中粒砂質シルトである。土師器・丹波焼・備前焼・瀬戸美濃焼・肥前陶器など17世紀前葉の遺物が出土した。61は丹波焼播鉢で、播目は4条1単位である。62～65は肥前陶器である。62は刷毛目文を施す皿、63は碗である。64は高杯状を呈する器種不明品で、軸調からは上野高取焼の可能性があり、65は小型の甕である。

SK312:直径1.3mの平面形が円形の土壇で、深さは0.4mである。SE311の掘形を切る。埋土は下部が細粒砂質シルト、上部が炭を多く含む細粒砂質シルトである。土師器・丹波焼・瀬戸美濃焼・肥前陶器・中国産青花など17世紀前葉の遺物が出土した。66は丹波焼播鉢で、播目は6条1単位である。

SK313:調査区西南端で検出した。直径1.4mの平面形が円形の土壇で、深さは0.4mである。埋土は炭を多く含む細粒砂質シルトとシルト質細粒砂の互層である。土師器・備前焼・瀬戸美濃焼・肥前陶器・瓦片のほか砥石が出土した。17世紀前葉に位置づけられる。67は瀬戸美濃焼皿で、底部中央は無軸である。

SK314:SE311の北側で検出した東西2.2m以上、南北1.0m以上の土壇で、深さは0.3mである。土師器・瀬戸美濃焼・肥前陶器など豊臣後期の遺物が出土したが、遺構の時期を示すものではなく下部に位置するSK510に伴う遺物であろう。

これらSX601の上部から検出した土壇はいずれも埋土に炭を含み、遺物も少なからず出土することからゴミ穴として使用されたと考えられる。

SK315:調査地東部に位置する土壇である。平面的な調査では認識できず、調査地東壁面の観察にて確認した。南北1.2m以上、深さ0.5m以上であるが、形状は不明である。埋土はシルト偽礫を少量含む粗粒砂質細粒砂である。SX601の上部から検出した土壇群とは埋土が大きく異なり、用途としては不明である。

SX601の上部の窪みからは17世紀第2四半期に位置づけられる遺物が出土しており、第3b層上面の

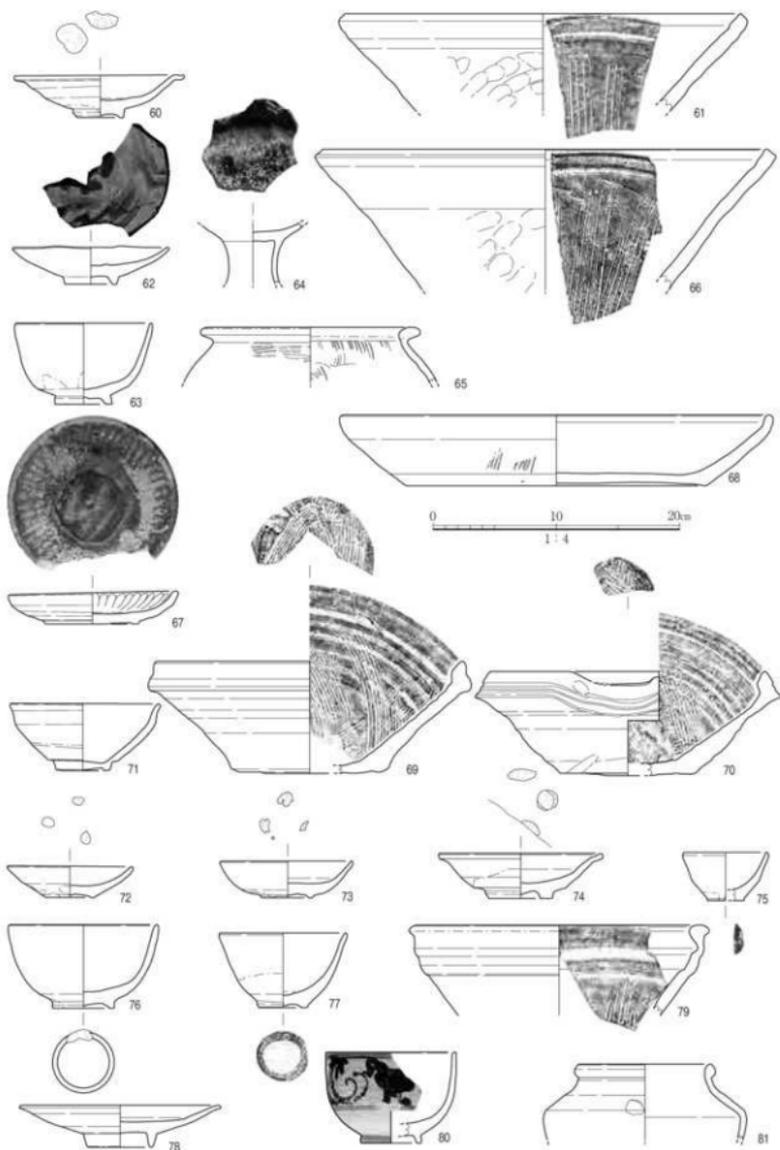


图9 出土遗物实测图(3)

SE311(60)、SK308(61~65)、SK312(66)、SK313(67)、第3b层相当(68~81)

生活面に伴い、廃棄されたものと考えられる(図9第3b層相当)。68~70は備前焼で、68は平皿、69・70は播鉢である。

71は瀬戸美濃焼天目碗である。72~77・79は肥前陶器である。72~74は皿で、75は小碗、76・77は碗である。75・77は底部に糸切痕が見られる。79は播鉢である。78は肥前白磁の皿で、朝鮮白磁を模した器形である。高台は厚みがある。80は肥前磁器染付碗である。81は産地不明の褐釉壺で、肩に目痕が残る。

第3a層段階の遺構としては、井戸・土壌などがある。重機掘削後の最初の平面的な調査であり、第2層より上位に遺構面がある遺構も同時に検出している。このうち17世紀中葉以降の遺構(SK316~319など)が第3a層上面の遺構、18世紀以降の遺構(SE307・309など)が第2層に伴うと考えられる。

東部の第3a層上面で検出した遺構には土壌・小穴がある。なお、第3a層は砂層であり、重機による掘削時、および遺構検出時に削りすぎてしまったため、これらの遺構の本来の規模は検出時よりも本来大きいことを断っておく。

SK301:直径0.4mの平面形が円形の土壌で、深さは0.1mである。埋土は炭・焼土を多く含むシルト質細粒砂である。瀬戸美濃焼・瓦片が出土した。

SK302:直径0.3mの平面形が円形の土壌で、深さは0.3mである。埋土はシルト質細粒砂である。平瓦片が出土した。

SK303:直径0.5mの平面形が円形の土壌で、深さは0.2mである。埋土は下部が細粒砂、上部がシルト礫層・炭を含むシルト質細粒砂である。肥前陶器のほか丸瓦片が出土した。肥前陶器は豊臣後期の特徴を持つが、遺構の時期を示すものではない。

SK304:直径0.4mの平面形が円形の土壌で、深さは0.1mである。埋土は炭・焼土を多く含むシルト質細粒砂である。肥前陶器が出土した。

SK305:東西0.4m、南北0.5mの土壌である。埋土中の遺物として平瓦、丸瓦、壁土がある。丸瓦は二次焼成を受けている。

これら東部の遺構は後述のSX601上で検出された土壌とは規模・形状が明らかに異なり、建物にほど近い部分と考えられる。

SX601上で検出された遺構には土壌・井戸がある。

SE309:直径1.1mの井戸で、直径0.7mの瓦組みの井戸側を有する。SE310より新しい。深さは1.4m以上である。

SE307:直径1.3mの井戸で、深さは1.4m以上である。土師器・丹波焼・瀬戸美濃焼・肥前陶磁器・中国産青花のほか瓦片など18世紀中葉を中心とする遺物が出土した。瓦片には被熱したものを含む。82は肥前陶器の甕で、口縁部に貝目痕がある。83は黄瀬戸の鉢である。84・85は肥前磁器で、84は碗、85は皿である。82は17世紀代、84・85は18世紀前半のもので、遺構の時期を示すものではない。

SK316:直径0.6mの平面形が円形の土壌で、深さは0.1mである。埋土には炭を多く含む。土師器・備前焼・丹波焼・瀬戸美濃焼・肥前陶器など豊臣後期の遺物が出土したが、これらは本来、下位層に伴うものであろう。

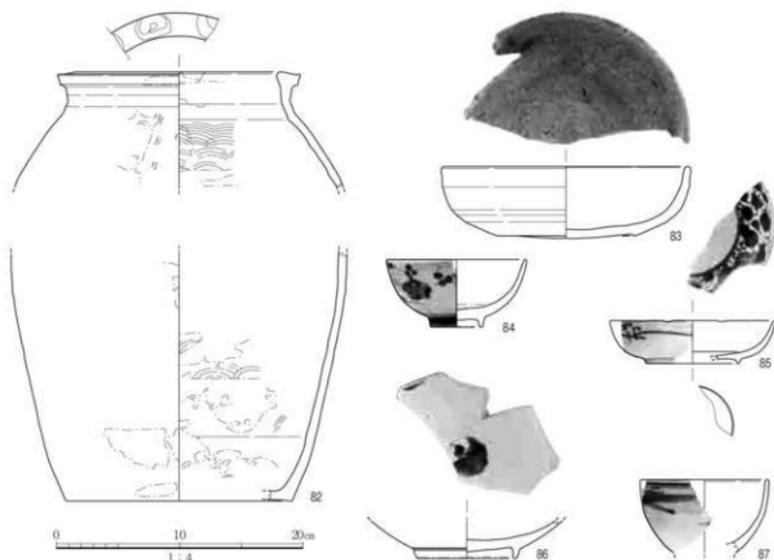


図9 出土遺物実測図(4)  
SE307(82~85)、SK317(86・87)

SK317：東西1.0m以上、南北0.3m以上で、調査区外に続く。深さは0.3m以上である。土師器・瀬戸美濃焼・肥前陶磁器など17世紀中～後葉の遺物が出土した。86・87は肥前磁器で、86は皿、87は染付碗である。

SK318：南北0.7m、東西0.5mの平面形が不整形な土坑で、深さは0.1mである。遺物は出土しなかった。

SK319：南北1.0m以上、東西0.9m以上の平面形が楕円形の土坑で、深さは0.2mである。土師器・備前焼・肥前陶磁器など17世紀中葉の遺物が出土した。

### 3)まとめ

今回の調査は小面積であったが、いくつかの成果を上げることができた。

豊臣期では大規模な溝であるSX601を検出したことである。これに対して、東の南北道路に面した部分は整地土が施されており、屋敷の表に当る高い部分と背後の低い部分が明瞭に区分されていた。この状況は徳川期を通じても継承されており、SX601は屋敷割りに係わって計画的に掘削したものと考えられよう。

一方、周辺の調査で多く検出されている古墳時代および古代・中世など豊臣前期以前の遺構については、検出することができなかったが、これは今回の調査地点がSX601による削平を受けて、地層が

遺存する部分が少なかったことによるものであろう。古墳時代から徳川期にかけて遺構・遺物が濃密な地域であり、周辺の調査では十分に調査を行えるような調査計画を策定していくことが望まれる。

引用・参考文献)

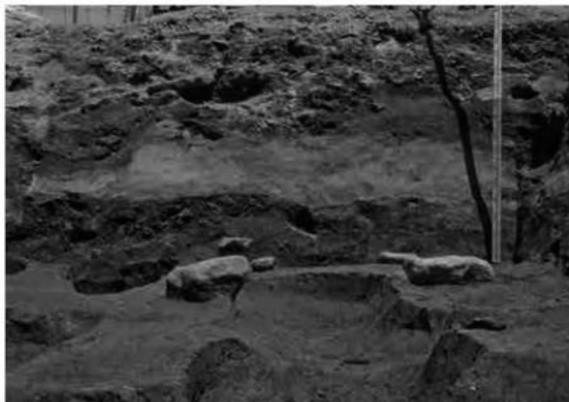
大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005、「天満本願寺跡発掘調査(TN04-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』、pp.13-32

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009、「天満本願寺跡発掘調査(TN07-2)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)』、pp.33-50

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015、「天満本願寺跡発掘調査(TN13-2)報告書」：『平成25年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.17-24

大阪市文化財協会2020、「北区天満一丁目2他における建設工事に伴う天満本願寺跡発掘調査報告(TN19-1)報告書」

東区東壁断面  
(西から)



東区北壁断面  
(南東から)



西区北壁断面  
(南から)





東区第6層上面  
(東から)



西区第6層上面  
(西から)



東区第3層上面  
(東から)





中央区心斎橋筋二丁目7-12における建設工事に伴う  
三津寺境内遺跡発掘調査(MU20-1)報告書

調査個所 大阪市中央区心斎橋筋2丁目7-12  
調査面積 約49㎡  
調査期間 令和2年7月1日～7月10日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋 工

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は大阪市街地のメインストリートである御堂筋の東に面し、奈良時代行基による創建と伝えられる真言宗御室派三津寺内にある(図1)。三津寺境内遺跡は新発見の遺跡で、同寺境内が近世社寺跡の埋蔵文化財包蔵地として指定されている。

周辺における既往の発掘調査は少ないが、本調査地から南へ道頓堀川を隔てた地域で2件の調査例がある(図1)。難波1丁目所在遺跡NA05-1次調査では、離水した沿岸砂州の堆積物とみられる地層から奈良時代の土器が出土し、中世の柱列や遺物も発見された[大阪市教育委員会・大阪文化財協会2006]。難波1丁目所在遺跡NB09-1次調査では、古墳時代中期・奈良時代の遺物が出土した他、鎌倉～室町時代前半頃の瓦が検出されている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011]。

当該地において建築工事が行われることになったため、平成31年3月と令和2年6月、大阪市教育委員会によって事前の試掘調査が行われた。その結果、本格的な発掘調査を必要とする近世の遺構面および遺物包含層が検出されたため、本調査が実施されることとなった。

調査は令和2年7月1日から開始し、頭書の期間で行ったが、雨天により妨げられる日が多かった。調査地内南東部に東西7m、南北7mの調査区を設定し(図2)、後述の第3層下面(地表下約1.2m)までを重機によって除去した。以下は地層の掘下げを重機により、遺構の検出と掘下げは人力によって行い、適宜に実測図と写真による記録作業を行った。連日の降雨の影響は大きく、第6層上面(地表下約1.7m)で湧水し、四壁の崩壊が始まった(図版上)。これ以下、地表下約3.1mまでは、掘り下げると同時に水没して壁が崩落し、調査区内に立ち入ることすら危険な状態となった。このため、重機による揚土で地層の観察と遺物の捕集を行い、地層断面図は柱状図の作成を行うにとどまった。

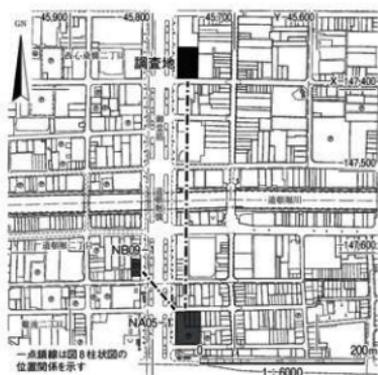


図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

以下の本文等に示す標高はTP値(東京湾平均海面値)で、TP+○mと記した。また本報告で用いた方位は、現場で作成した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより世界測地系座標に乗せたものであり、座標北を基準とした。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

調査地の現況地形は平坦で、地表面の標高はTP+3.2m前後であった。地表面を構成する現代の整地層の下位の地層を以下の7層に分層した。第7層を除いていずれも人為堆積層である。

第1層：黄褐色細粒～中粒砂からなる整地層で、層厚は最大で45cmである。

第2層：にぶい黄褐色砂礫からなる整地層で、層厚は20～45cmである。

第3層：中粒砂～シルトからなる薄い整地層の累重を一括した。整地層は4層がみとめられ、それぞれの層厚は最大で15cm、薄いものは数cmで、全体としては20～35cmである。各層の上面が生活面で、そこから掘り込む遺構があるはずだが、下位の第4層上面で一括して検出した。後述する本層出土の遺物や第4層上面の遺構の年代からみて本層の年代は17世紀末から18世紀後半である。

第4層：オリーブ褐色細粒～中粒砂からなる整地層で、層厚は30～50cmである。上位層との関係でいえば、本層で土地造成を行い、第3層で複数時期の整地が行われたとみられよう。

第5層：シルト～中粒砂からなる整地層の累重を一括した。整地層は3～4層がみとめられ、それぞれの層厚は厚いものでも10cm程度で、全体としては10～15cmである。

第6層：分厚い整地層である第6b層とそれを耕起した第6a層に分かれる。第6a層は黄褐色極細粒砂質シルトからなる作土層で、層厚は10cmである。上面で畝間が検出された。第6b層はオリーブ褐色細粒～中粒砂や黄褐色シルト質砂などからなる整地層で、層厚は135cmである。後述する出土遺物からみて、本層の年代は17世紀後半～同末である。下位層は湿地の自然堆積層であり、本層によって利用可能な土地が造成され、その後第6a層に伴う耕作が行われたと考えられる。

第7層：オリーブ黒色もしくは灰色シルトからなり、植物遺体を多く含む。層厚は10cm以上である。NA05-1次調査第7層との対比により、沿岸の堤間低地に堆積した泥炭質の沼沢地性層と目される。詳細は後述する。

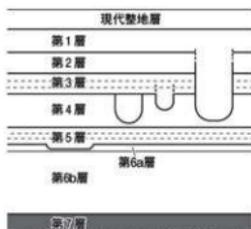
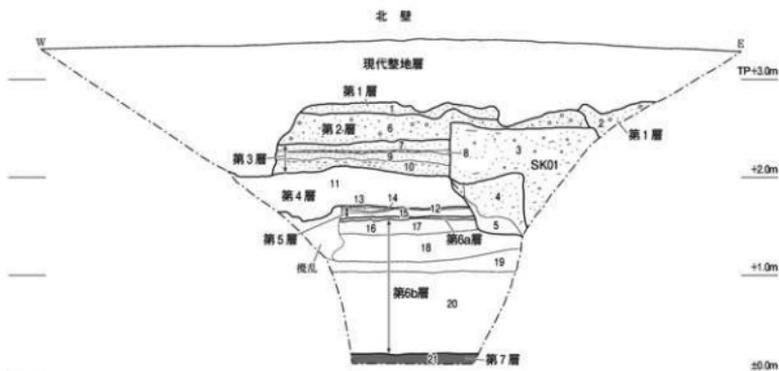


図3 地層と遺構の関係図

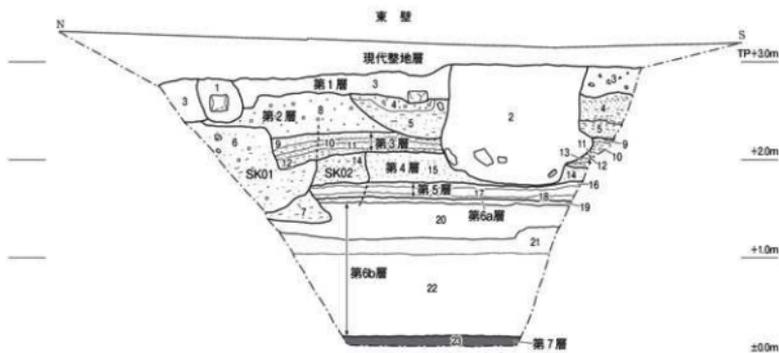
### ii) 遺構と遺物(図5～7、図版中・下)

a. 第6a層上面 畝間2条(SX10・12)と不整形な浅い落込み1基(SX11)を検出した。

SX10-12 東西性の畝間で、SX10は幅60cm以上、深さ5～8cm、SX12は幅30～40cm、深さ5～8cmであった。埋土はいずれも第5層のシルト～極細粒砂であった。両者間の畝の幅は78～113cmであった。第6b層の埋立て後に耕起され、第5層の整地によって廃絶した畝に関する遺構である。年代が判明する遺物はなかったが、上層・下層の形成時期を援用すれば17世紀末～18世紀初頭



- |                           |                               |
|---------------------------|-------------------------------|
| 1: 黄褐色(25Y5/3)細粒～中粒砂      | 12: 灰オリーブ褐色(5Y4/2)砂質シルト       |
| 2: 褐色(10YR4/4)中粒砂         | 13: オリーブ褐色(25Y4/4)細粒～中粒砂      |
| 3: 黄褐色(25Y5/3)細粒混りシルト質砂   | 14: オリーブ褐色(25Y4/4)極細粒砂～シルト    |
| 4: オリーブ褐色(25Y4/3)シルト質砂    | 15: 黄褐色(25Y5/3)シルト質極細粒砂       |
| 5: 黄褐色(10YR5/6)砂          | 16: 黄褐色(25Y5/4)極細粒砂質シルト       |
| 6: にぶい黄褐色(10YR6/3)砂礫      | 17: にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質細粒砂    |
| 7: にぶい黄褐色(10YR6/4)細粒～中粒砂  | 18: オリーブ褐色(25Y4/4)細粒～中粒砂      |
| 8: オリーブ褐色(25Y4/4)シルト      | 19: にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質中粒～粗粒砂 |
| 9: オリーブ褐色(25Y4/4)細粒砂      | 20: 黄褐色(25Y5/6)シルト質砂          |
| 10: オリーブ褐色(25Y4/6)シルト～細粒砂 | 21: オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト        |
| 11: オリーブ褐色(25Y4/4)細粒～中粒砂  |                               |



- |                              |                               |
|------------------------------|-------------------------------|
| 1: 褐色(10YR4/4)シルト質砂          | 13: オリーブ褐色(25Y4/4)シルト         |
| 2: 褐色(10YR4/4)砂              | 14: 暗褐色(10YR3/4)砂質シルト         |
| 3: 黄褐色(25Y5/4)細粒～中粒砂         | 15: オリーブ褐色(25Y4/4)細粒～中粒砂      |
| 4: オリーブ褐色(25Y4/4)砂礫          | 16: 灰オリーブ褐色(5Y4/2)砂質シルト       |
| 5: オリーブ褐色(10YR4/6)シルト質細粒砂    | 17: オリーブ褐色(25Y4/4)極細粒砂～シルト    |
| 6: 黄褐色(25Y5/3)細粒混りシルト質砂      | 18: 黄褐色(25Y5/3)シルト質極細粒砂       |
| 7: オリーブ褐色(25Y4/4)シルト質砂(骨片混る) | 19: 黄褐色(25Y5/4)極細粒砂質シルト       |
| 8: 浅黄褐色(10YR8/3)砂礫           | 20: オリーブ褐色(25Y4/4)細粒～中粒砂      |
| 9: オリーブ褐色(25Y4/6)細粒砂         | 21: にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質中粒～粗粒砂 |
| 10: 褐色(10YR4/4)シルト質細粒砂       | 22: 黄褐色(25Y5/6)シルト質砂          |
| 11: 黄褐色(25Y5/5)細粒～中粒砂        | 23: オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト        |
| 12: オリーブ褐色(25Y4/4)シルト～細粒砂    |                               |

0 2m  
1:50

図4 北壁・東壁地層断面図

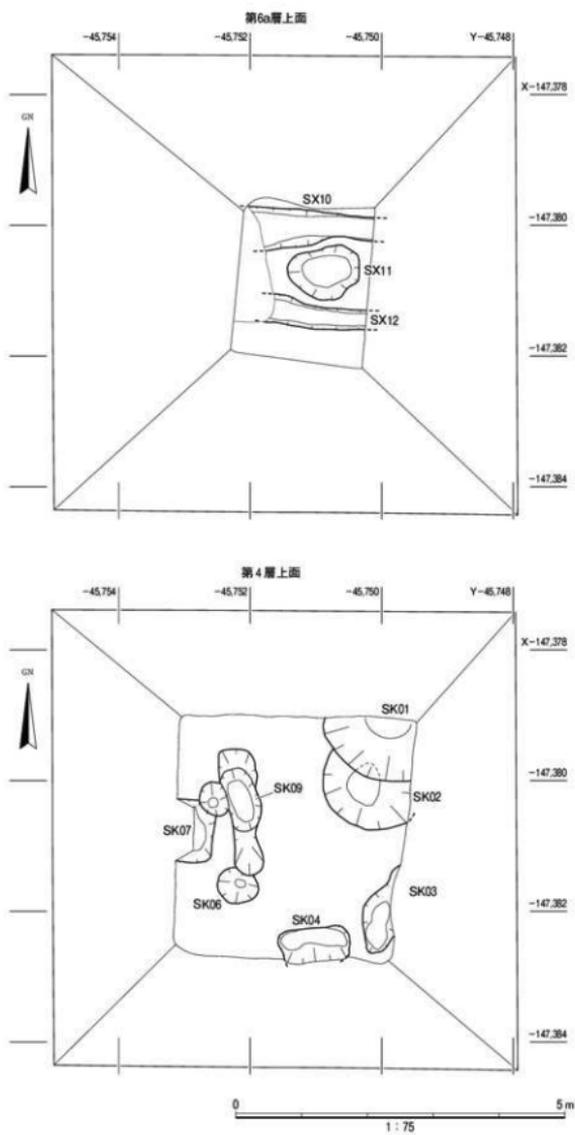


图5 第6a層上面・第4層上面遺構平面図

の間ということになる。

**SK11** 東西110cm、南北83cm、深さ9cmで、埋土は畝間と同様であった。

b. 第4層上面 土壌7基(**SK01**~**04**・**06**・**07**・**09**)を検出した。ただし、本層上面までは重機を用いて除去しており、これらの遺構にはより上位の層準から掘り込まれたものも混在している。

**SK01** 北東隅で検出された。東壁地層断面から第2層より上位から掘り込まれたことがわかり、**SK02**を切る。平面形は円形基調とみられ、東西1.4m以上、南北1.1m以上、深さ1.1mで、細雑混りのシルト質砂などで埋められていた。土師器・肥前磁器・瓦が出土し、そのうち肥前磁器染付碗8、同青磁鉢9を図示した(図6)。これらの年代は17世紀末~18世紀初頭であるが、遺構の年代は18世紀後半(第3層の年代)より新しいことは確実である。

**SK02** 東壁地層断面より第4層上面から掘り込まれたことがわかる。平面形は円形基調で、東西1.3m以上、南北1.2m以上、深さ0.6mで、暗褐色砂質シルトで埋められていた。土師器・肥前陶器・肥前磁器・軟質釉陶器・関西系陶器などが出土し、そのうち土師器皿10、関西系陶器向付11、肥前磁器染付碗12・13、泥面子19を示した。これらの年代は17世紀末~18世紀初頭で、遺構の年代を代表するものである。他に人骨とみられる骨片が出土した。

**SK03** 南東隅で検出され、平面形は不整な楕円形を呈する。東西0.6m以上、南北1.4m以上、深さ0.3mで、暗灰色砂で埋められていた。埋土の特徴から本遺構も第4層より上位の地層から掘り込まれたものとみられる。図化し得たものはないが、備前焼・肥前磁器などが出土しており、18世紀後半に下る遺構である。

**SK04** 南壁際で検出され、方形基調の平面形を呈する。東西1.1m、南北0.5m以上、深さ0.3mで、暗灰色砂で埋められていた。埋土は**SK03**に類似し、本遺構も上位層から掘り込まれたものとみられる。肥前磁器などが出土し、肥前磁器染付広東碗14、堺播鉢20を図化した。これらから本遺構の年代は18世紀末頃である。花崗岩の石材破片が出土し、廃材を埋めたものとみられた。

**SK06** 平面形は円形を呈し、**SK09**に切られる。直径約0.6m、深さ0.3mで、灰色シルト質砂で埋められていた。17世紀後半の土師器皿が出土した。

**SK07** 西壁際で検出され、平面形は方形を呈するものとみられる。東西0.6m以上、南北1.0m、深さ0.6mで、暗灰色砂礫で埋められていた。土師器・肥前磁器・丹波焼などが出土し、土師器皿15、同焼壺蓋16、肥前磁器白磁碗18・香炉とみられる肥前磁器色絵染付17を図示した。これらの遺物は17世紀後葉のものである。

**SK09** 平面形は不整な長楕円形を呈し、東西0.6m、南北2.0m、深さ0.2mで、暗褐色シルト質砂で埋められていた。肥前磁器片が出土したが、年代の知れるものはなかった。

第4層上面の遺構の年代は、上位層から掘り込まれた遺構を除けば17世紀後葉から18世紀初頭である。上位の第3層からは18世紀後半、下位の第6層からは17世紀中葉から17世紀末頃の遺物が出土しているため、遺構の年代は17世紀末から18世紀後半の間に絞り込むことができる。

c. 各層出土の遺物 第3層からは土師器・肥前陶器・肥前磁器・関西系陶器などが出土し、そのうち肥前磁器染付碗1・2・同筒碗3を掲載した(図6)。これらは18世紀後半のものである。

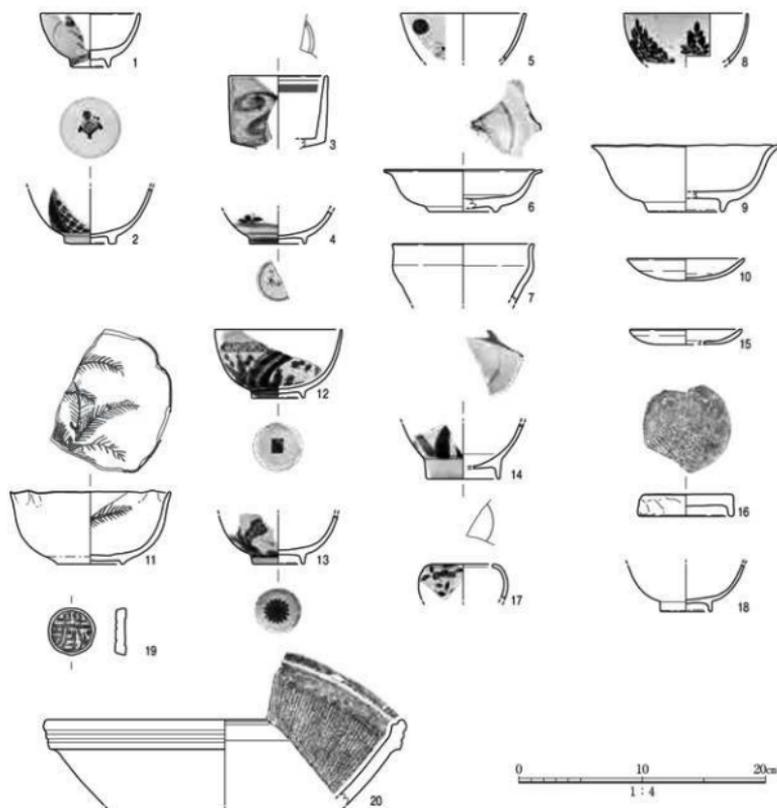


図6 出土遺物実測図

第3層(1~3)、第6・7層一括(4~6)、第6層(7)。

SK01(8・9)、SK02(10~13・19)、SK04(14・20)、SK07(15~18)

第6・7層からは土師器・備前焼・瀬戸美濃焼・肥前磁器などが出土した。これらは重機で掘り上げた土から採集したもので、両層一括として記録したものが多いが、第7層は以下に述べるように古代に遡る可能性が高く、本来、第6層に所属したものとみて大過ない。肥前磁器は染付4~6があり、4・5は碗、6は皿である。5はコンニャク印判による施文を行っている。瀬戸美濃焼7は天目碗で底部を欠く。これらは17世紀中葉~末に属する。

また、現代の整地層からは墓石21が出土した。本来の所属層準から遊離したものである。砂岩製の角石形墓標で、横断面は正方形を呈し、天辺を屋根状に削り出している(図7)。天地32.5cm、幅(奥行)15.7cm(14.5cm)である。四面のうち三面に銘があり、各面に二名の戒名と没年月日が刻まれている。

最も古い没年は正徳3(1713)年、新しいものは元文4(1739)年である。遺構の年代と対比すると第4層上面で検出したものと近く、この頃当地に墓地があった可能性がある。同面で検出したSK02から骨片が出土したこともこれに符合するのかもしれない。

### 3) 既往の調査地との地層の対比と埋没古地形

周辺における既往の調査地として、NA05-1次調査地(南へ約300m)とNB09-1次調査地(同250m)があり、年代・地層を手がかりに両調査地との地層の対比を行い、それをもとに復元研究がなされている埋没古地形の中で当調査地の位置を明らかにしておきたい。以下、煩雑を避けるため各調査地を遺跡略号で代表させ、続けてその調査地での地層番号を記すこととする(例:NA05-1次調査地の第7層は「NA7層」と表記)。

まず、地層の中で容易に対比できるのがMU7層(当調査地)とNA7層である(図8)。両層は植物遺体を含み泥炭質という点で共通し、上面の標高も近い(NAが20cm高い)ことから同一層準とすることができる。NA7層は奈良時代の土器を含むので、MU7層も同時代とみなすことができる。

一方、NA5層とNB5層はともに中世(鎌倉～室町時代)の遺物を包含しているので同時代の層準と捉えることができるが、MU層序ではこの時代の地層を欠く。

近世(近代も含む可能性あり)の地層について、NA・NB層序では各層準に詳しい年代を付与していないので詳しい対比はできないが、大まかにNB1～4層、NA1～4層、MU1～6層が近世の地層として対比可能である。

次に、地層の対比をもとに埋没古地形との関係を考える。古地形の復元は[趙哲濟2014]を参考にする(図9)。泥炭質のNA7層は古代には形成されていた浜堤

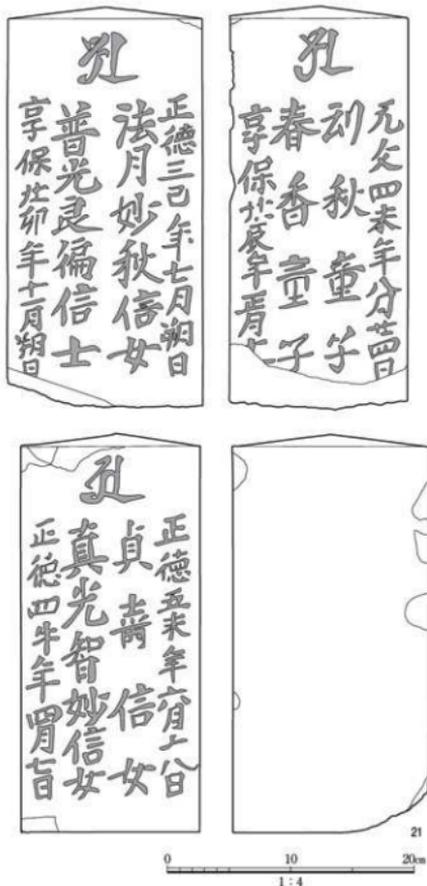


図7 墓石実測図

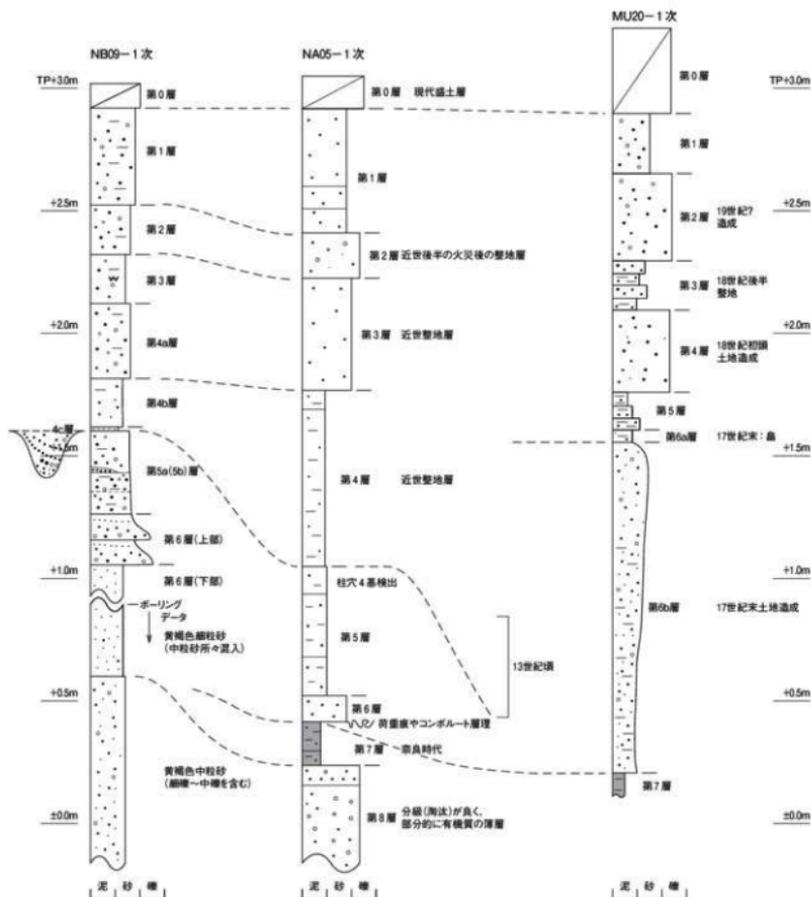


図8 周辺における地層柱状対比図

3Aとその内(陸地)側の同2Aの間の堤間低地3A/2A内に堆積した沼沢地性層とされている。MU7層は同一層準とみられるので、古代において本調査地が南北に延びる同堤間低地内に位置したことがわかる。下位NA8層は分級のよい海浜の堆積層で、上面は西へ高度を上げ、浜堤3Aを形成するものとされている。

本調査地に中世の地層(NA5層・NB5層相当)が分布しないことは、当地において堤間低地3A/2A内がまだ埋め立てられず低湿地として残っていたか、中世の地層が削剥されてしまったかのいずれかであることを示しているのであろう。いずれにしても、中世においては周辺より低い堤間低地の名残

があったとみて間違いはない。

MU6層上面の標高から考えて、この層の埋立てによって堤間低地は克服されて平地化したとみられる。以後の堆積はこの平地をさらに嵩上げる方向で進行し、詳しくみれば時期の差はあろうが、3地点ともほぼ同じ状況にあったとみられる。

#### 4)まとめ

以下、本調査の成果を箇条書きにまとめる。

- ・古代において当地は沿岸に形成された浜堤間の低地の中にあった。
- ・中世の地層はひとめられず、この頃にも当地は堤間低地の名残である低地内にあった。
- ・近世17世紀末頃には低地は埋め立てられて平地化した。その直後には耕作地となり、畠が営まれていた。以後、嵩上げによる土地造成が繰り返され、18世紀には墓地であった可能性がある。

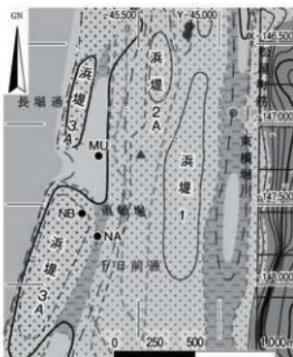


図9 古代の周辺地形復元図  
(概ねMU7層段階：趙哲済原図提供)

#### 引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006、「難波1丁目所在遺跡発掘調査(NA05-1)報告書」：「平成17年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.27-31
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011、「難波1丁目所在遺跡発掘調査(NB09-1)報告書」：「平成21年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2009)」、pp.105-114
- 趙哲済2014、「難波砂州北部～天満砂州南端部の表層地質に関する覚書」：「上町台地の総合的研究—東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型—」平成21～25年(独)日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(A)、公益財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所
- 三津寺ホームページ(<https://mitsutera.jp/about/>)



地層断面と  
壁面崩落状況  
(南から)



第6a層上面  
(南から)



第4層上面  
(北から)





中央区上町一丁目15-15における建設工事に伴う  
難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW19-2)報告書

調査個所 大阪市中央区上町1丁目15-15  
調査面積 366㎡  
調査期間 令和2年2月17日～4月2日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋 工、積山 洋、小田木富慈美

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地の北端の高台を占める難波宮跡の南東の縁辺部に位置する。難波宮は飛鳥時代に大火改新に際して造営された前期難波宮と奈良時代に聖武天皇が再建した後期難波宮があるが、今回の調査地は前期難波宮の南限に北接する宮内にあたり、宮城南門からは東北東約170mの位置である(図1)。

この周辺では過去に多数の発掘調査が行われている。そのうち西に隣接するNW13-5次調査[大阪文化財研究所2015]では、東に落ち込む埋没谷(上町谷の「支谷d」と呼ばれる)が検出され、それを埋めた7世紀中頃の整地層から「スター古(ししいっこ)」と記された木筒が発見されて注目を集めた。これは「穴一籠(ししいっこ)」のことであり、獣肉を入れた籠に付けられた荷札木筒である。7世紀中頃、いずれかの地から難波に貢納された食品の一端が明らかになった。

調査地南西の隣接地で行われたNW04-2次調査では前期難波宮宮城南門から東へ延びる一本柱の塀が見つかった[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005]が、それより東は先述した支谷にあっていた。その南隣で行われたNW17-1次調査では支谷dの西辺と東辺を検出し、この埋没谷の東西幅が約40mであることが確認されている[大阪市文化財協会2019]。調査地の東隣で行われたNW18-2次調査では上記の一本柱塀のラインが想定される位置でそのような施設はみつからず、調査区の北東隅で北東へ下る別の埋没谷と掘立柱の建物または橋脚跡がみつかった[大阪市文化財協会2019]。

また、近世の豊臣期には当地は大坂城内にあり、豊臣後期(1598~1615)には三の丸地域の武家屋敷にあたると思われる[松尾信裕2014]。徳川期にも近世の絵図類ではこの地は武家地となっ



図1 調査地位置図

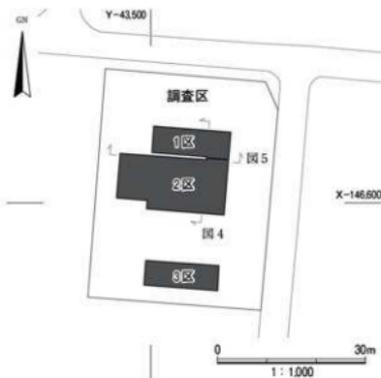


図2 調査区配置図

ている。

調査地において開発計画の届け出があり、大阪市教育委員会が当地で行った試掘調査(2019年9月、2020年1月)により、地表下0.15m以下の深さで近世以前の遺物包含層とともに難波宮の建物跡とみられる柱穴が検出されたため、本調査を実施することとなった。

調査区は南北2箇所に設けたが、北側の調査区が広いので、中央付近に土層観察用畔を設けて二分割し、計3箇所に分けて進めることになった。本報告では北から順に1～3区と呼ぶことにする。(図2)。試掘調査で発見された難波宮の柱穴は調査範囲外とされたが、今回併せて報告する。実際の調査は2区、1区、3区の順に進めた。機械掘削は、第2層と呼ぶ近世の整地層の上面までとし、それ以下は人力による調査と掘下げを行った。ただし、1・2区では深い埋没谷が検出されたため、調査は地山(上町層)まで及んでいない。また2区の南部はかなり攪乱されていた。一方、3区には第2層が分布せず、また地山が地表下0.2mと、きわめて浅く検出されたので、それ以下を人力で調査した。調査の最終段階で降雨による壁面崩壊などが発生し、記録に不十分な面が残った。

調査期間は2020年2月17日～4月2日である。調査面積は現地での打ち合わせにより、当初予定の400㎡から366㎡になった。

以下の本文などに示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、 $TP \pm \text{〇} \text{m}$ と記した。また本報告で用いた国土座標値は原因者側から提供されたデータに拠っており、方位は座標北を基準とした。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3～5)

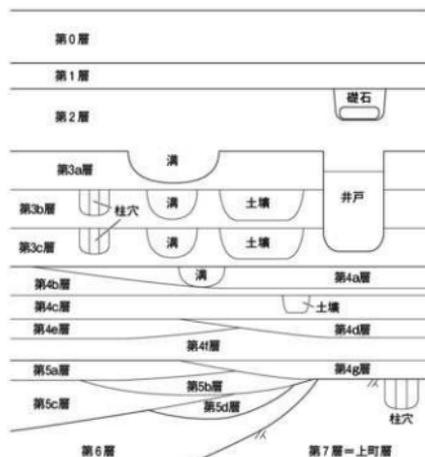


図3 地層と遺構の関係図

現地は上町台地の東斜面の上部にあたり、地形は北西部が高く、南東に向かって低く傾斜している。地表面の標高は調査区の最北西部で $TP+17.5\text{m}$ 、最南東部で $TP+15.8\text{m}$ である。検出された地層は一部を除いてほぼすべてが人為的に施された整地層であった。以下に述べる第2・3層は近世の豊臣期、第5・6層は古代の難波宮にかかわる地層である。

第0層：現代の攪乱層である。最大層厚は150cmである。

第1層：後述する第2層の整地層の上位層をまとめて第1層とした。層厚は20～70cmである。重機で掘削したので詳細は不明であるが、徳川期以降の地層である。

第2層：上町層に由来する黄褐色系のシ

ルトを主体とする偽礫で構成される整地層である。最大層厚は1区北西部で70cm余であったが、地山が浅い3区には分布していない。

第3層：最大層厚約50cmで、3層に細分される。第3a層は黄褐色シルトなどからなり、上面は井戸や蛇行する溝などが検出される生活面であった。第3b層は黄灰色砂混りシルトなどからなり、上面は建物の柱穴や板組溝などが検出される生活面である。第3c層は灰黄褐色粘質シルトなどからなり、層厚20~30cmと第3層の中で最も厚い。上面で柱穴や土壌などが検出された。これら第3層の年代は豊臣前期(1583~1598年)であろう。

第4層：層厚80~100cmで、7層に細分された。第4a層は1~2区の東部に分布し、おもに褐色系の礫混りシルトが主体である。第4b層は褐色系の礫混りあるいは粘質のシルトを主体とする。第4c層は褐色系の礫・砂混りシルトや中粒砂などの偽礫からなる。最大層厚は約40cmである。上面で柱穴などが検出された。第4d層は灰黄褐色の礫混りシルト・中粒砂・砂混りシルトなどの偽礫からなる。1・2区の西端や1区東端には分布していない。第4e層は1・2区西半部のごく浅いくほみを埋めたもので、暗灰色～黄褐色のシルト・砂・粘土などの偽礫からなる。第4層は1・2区のはほぼ全域で認められた黒褐色～灰黄褐色シルト・砂などの偽礫からなる。最大層厚は60cm弱であるが、1・2区の東半部では薄く、そのため上面がやや窪んでいる。第4g層は1・2区の北東部に分布していた褐色系のシルト

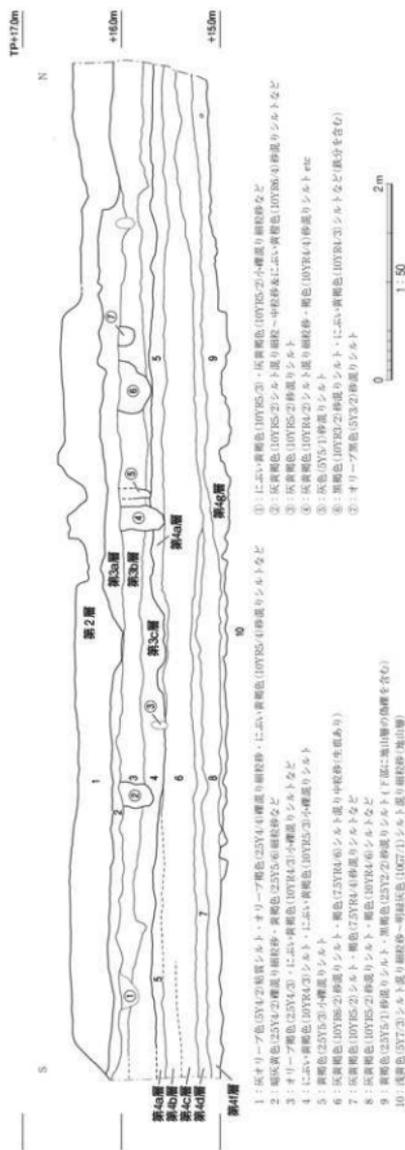


図4 1・2区南北地層断面図



混り砂などからなる。下部に上町層に由来する偽礫を含んでいた。第4層は比較的識別しやすい偽礫からなり、連続的にあるいは一気に施された整地層の可能性がありそうだが、第4c層の上面は生活面であった。その年代は12～13世紀の瓦器碗の出土により、鎌倉時代か、それ以後であろう。

第5層：1・2区では西部の地山が大きく西に落ち込む埋没谷となっており(図6)、以下に述べる地層はこれを埋めた整地層である。第5層はその上部層であり、上面の標高はTP+14.6mである。5層に細分された。第5a層は灰色砂混りシルトであり、最大層厚は約30cmである。顕著な偽礫などを含まず、本調査地で唯一の作土層であるかもしれないが、確定はできなかった。第5b層は灰色シルト・黄褐色砂などからなり、1・2区西部でも部分的な分布にとどまる。第5c層は2層に大別された。第5c-1層は、灰色系の粘質シルト・砂などで、部分的にはさらに2層に細分された。第5c-2層も細分が可能であったが、一括した。いずれも灰色粘質シルトを主体とし、上部は黒褐色シルトを含む。下部は地山(上町層)に由来する偽礫を多く含む。第5d層は暗緑灰～オリーブ褐色の砂混りシルトの偽礫からなり、これは上町層に由来するとみられる。第5層の遺物は古墳時代のものがめだつが、第5b層から少量の飛鳥時代の土器と、凸面縄タキの平瓦片が出土しており、第5層は前期難波宮または後期難波宮に伴う整地層とみられる。

第6層：西に落ち込む埋没谷を埋めた下層の整地層である。1・2区の西部では調査の深度を超えてさらに深くまで連続していた。層厚は1.0m以上である。第6a層は灰色系のシルト・砂、第6b層は灰色シルトに地山の偽礫を含んでいた。第6c層は黒褐色・黄灰色粘質シルトや砂などからなり、第6d層は第6c層と大きく変わらないが、地山の偽礫を含んでいた。第6層にも古墳時代の土器が多いが、飛鳥時代中頃までの須恵器・土師器も含んでおり、前期難波宮に伴う整地層と考えられる。

第7層：灰色～灰オリーブ色のシルト混り砂などからなる。調査地の地山にあたる上町層である。地山が非常に浅い3区では、その上面で豊臣期の井戸SE73を検出した。

## ii) 遺構と遺物

a. 第7層上面の遺構(図6・7) SP01は2020年1月の試掘調査で見えられた柱穴である。東西0.95m、南北1.0mの規模で、柱痕跡は直径0.25m弱である。この規模から、難波宮の柱穴と考えられる。そのため、平面検出にとどめて保存されることとなった。深さは不明である。遺物は出土していない。

b. 第6層出土の遺物(図8・9) 1～8、10は土師器である。1は杯Cで、外面下半部はケズリである。内面に暗文を施す。口径13.5cm、器高4.5cmで径高指数は33.3である。2は高杯、3は鉢である。3の内面の暗文はやや不規則である。4は何かの脚台部かとみられる。かなり分厚いので大型の器種と思われる。焼成は硬質で陶質に近いが、須恵器のような回転ナデはみられず、裾部内外面のみヨコナデし、ほかはナデである。胎土に直径2mm以下の砂粒を多く含む。類例を知らない。5・6は小型の壺で、5は外面の主たる調整がハケメである。完形に近い残りであるが、肩部に割れた欠落があり、焼成後の穿孔を意図したものかもしれない。体部外面に粘土の剥離と赤い被熱痕がみられ、二次的に火を受けた可能性がある。6は5よりやや作りが悪く、外面調整は粗いナデである。内部には粘土のような塊りが遺存している。完形品であるが、体部外面に顕著な粘土の剥離と赤い被熱痕がみられ、二次的に火を受けた形跡とみられる。7は甌の把手で、細く薄いへら先のような工具で溝状の

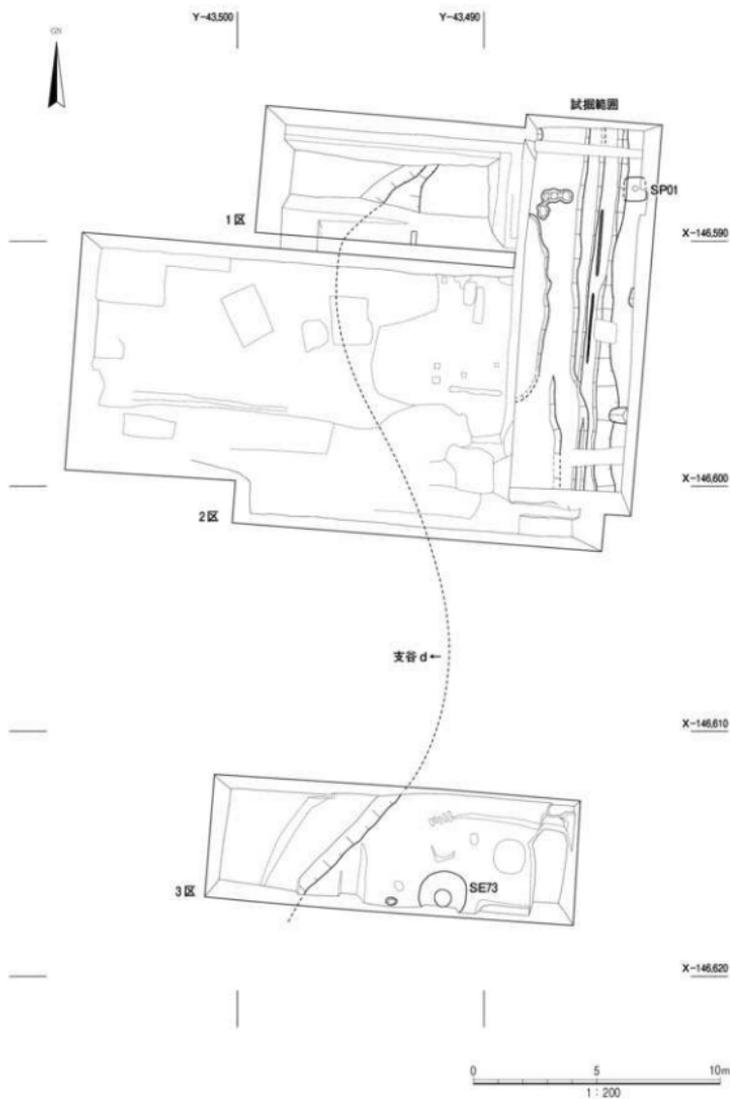


图6 地山上面検出遺構平面図

穿孔を平行して施している。8は鍋である。10は甕である。11は製塩土器で、古墳時代中期のF2aタイプ[横山洋2012]である。図化できない細片でF2bタイプも出土している。12も製塩土器で、歪みにより、復元口径は正確でない。焼成は堅緻で外面は灰色を呈する。椀形を呈し、外面のタタキメは底面に及ぶ。類例は備讃方面にある「小椀タイプ」の製塩土器[大久保徹也2007]であり、古墳時代後期前半が年代の中心である。

13～31は須恵器である。13～16は杯蓋、17～27は杯身、28・29は壺、30・31は器台である。13は天井部内面に漆が付着しており、天地を逆にして漆容器または漆皿に転用されたものである。蓋杯は時期の異なるものが出土している。16の蓋が最も古くTK208～23型式頃であるが、最新は23・27の杯身で、難波Ⅲ古段階かそれ以後である。28は漆壺である。29は器壁が薄く、焼成も堅緻で、平底という特徴的なスタイルである。外来系陶器である可能性が高いが、類例が判明

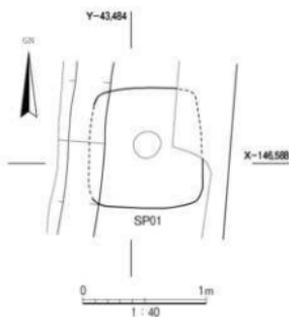


図7 SP01平面図

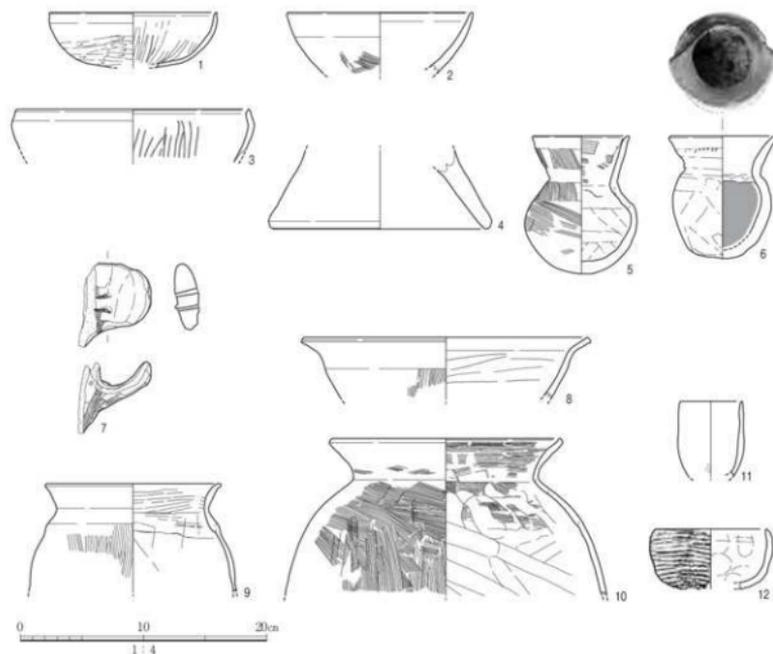


図8 第6層・第5層出土遺物実測図(1)  
第6層(1～8・10～12)、第5層(9)

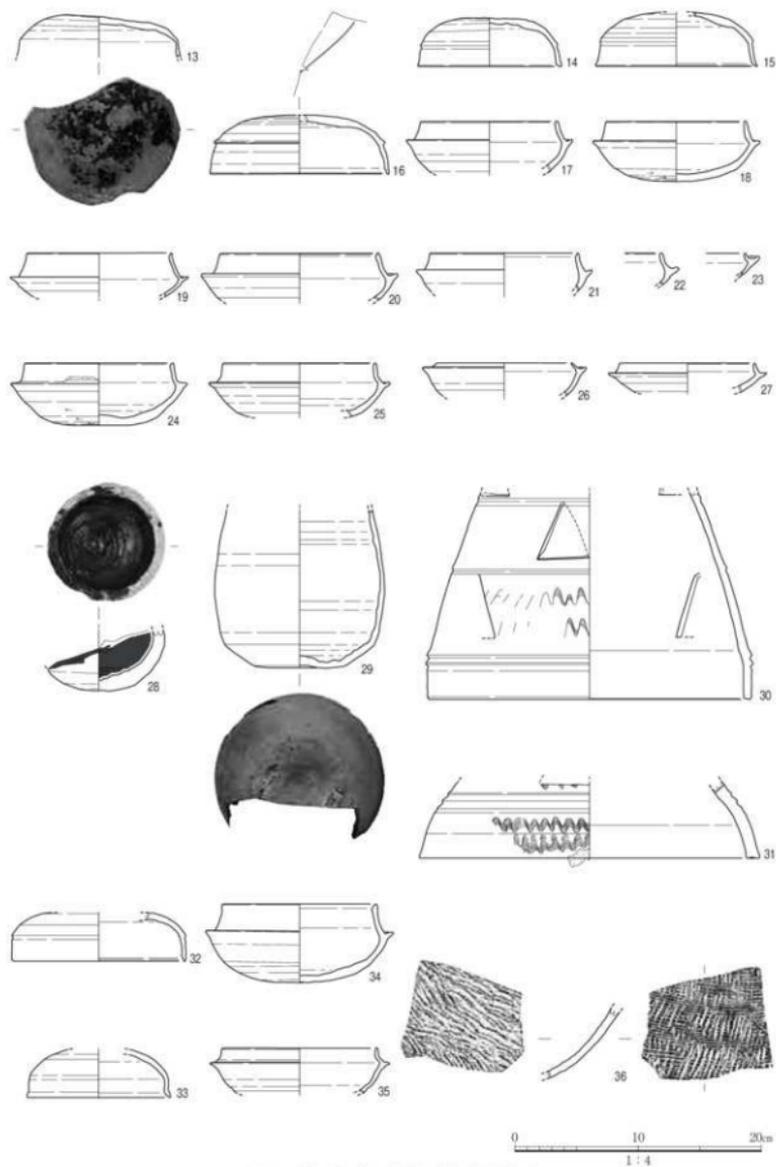


图9 第6层·第5层出土文物实测图(2)  
第6层(13~31)、第5层(32~36)

していない。30は波状文などの文様の退化が目立ち、年代的にも新しいのであろう。

第6層出土土器は、須恵器では難波Ⅲ古段階かそれ以後、土師器では1の杯Cが最も新しく、その径高指数33に合致するのは難波Ⅲ中～新段階である。第6層による整地の年代は難波Ⅲ中～新段階の範囲に収まるが、この年代幅で大規模な整地を行う契機としては前期難波宮の建設が考えられる。



図10 第4層出土遺物実測図

c. 第5層出土の遺物(図8・9) 9は土師器甕で、内面に粘土紐接合痕が残るなど粗雑な作りである。32～36は須恵器で、32・33は杯蓋(33は短頸壺の蓋の可能性もある)、34・35は杯身、36は甕である。32・34は古墳時代、33・35は飛鳥時代に属する。須恵器甕36は内面の当て具痕が特徴的で、下部は同心円文であるが、上部は弧状文の連続のように見える。焼成は瓦質である。なお、第5層には後期難波宮の瓦が含まれていることは前項で述べたとおりであり、本層の年代は奈良時代である。

d. 第4層出土の遺物(図10) 第4層から出土した遺物は少ない。土師器・須恵器・瓦など古代の遺物のほか、瓦器碗が少量出土している。実測できたのは1点だけであり、37は比較的浅い器形の瓦器碗であり、12～13世紀頃のものと思われる。第4e層または第4層からの出土である。

e. 第4a層上面の遺構 SD51は北端で幅0.6m、深さ0.1mの規模であるが、1区では検出されていない。2区北壁の断面観察では板材が認められ(図5)、板組溝であったと思われるが、平面的には検出できなかった。なお、前項の層序で述べた第4c層上面の柱穴は、図5の断面以外では検出されなかった。

f. 第3c層出土の遺物(図11) 38は土師器皿で、底部は比較的平たい。39・40は瀬戸美濃焼で、39は天目碗、40は外底面に窯道具の痕跡を残す無文の内禿皿である。41・42は少量の非鉄金属を溶解した小型埴塼である。41は内側の付着痕より、底から約1/2までの容量の金属を溶解したことがわかる。42は内面に緑青が付着する。分析は行っていないが、恐らく真鍮の溶解に用いたと考えられる。43は中国産の白磁皿で、内外面に型押しした文様がみられる。口縁部は残りが悪いが輪花に作っている。第3c層の陶磁器は中国産と瀬戸美濃産が中心で肥前陶器を含まないので、豊臣前期であろう。

g. 第3c層上面の遺構と遺物(図11～13)

SB301: 1区で検出された東西棟の建物であるが西の調査区外に及ぶため、桁行は1間分しか判明していない。柱間寸法は、北側柱列は1.88m、南側柱列は1.75mで、東の妻側柱列は北から1.07m、0.96mである。柱材は直径約10cmの丸材であった。

SB302: 2区で検出された桁行2間、梁間1間の東西棟建物である。柱間寸法は、南側柱列は総長4.05mで、東の妻側柱列は1.98mである。柱材は幅10cm以下、一辺数cmの角材であった。南西の隅柱SP26の柱材57とその西のSP25の柱材には大きな納穴が認められた。

なお、このほかにも柱穴は多数みつまっているが、建物に復元できたのは上の2棟だけであった。また柱材は比較的多く遺存しており、SB301を除く大半の柱材がSB301と同様の角材であった。また、SP21から棒状土製品54が出土した。直径9mmで両端が折れている。表面は被熱する。菊田4丁目遺跡で類似品が出土しており[大阪市文化財協会2008]、茶釜の環付部分用の鋳型に類似例がある。

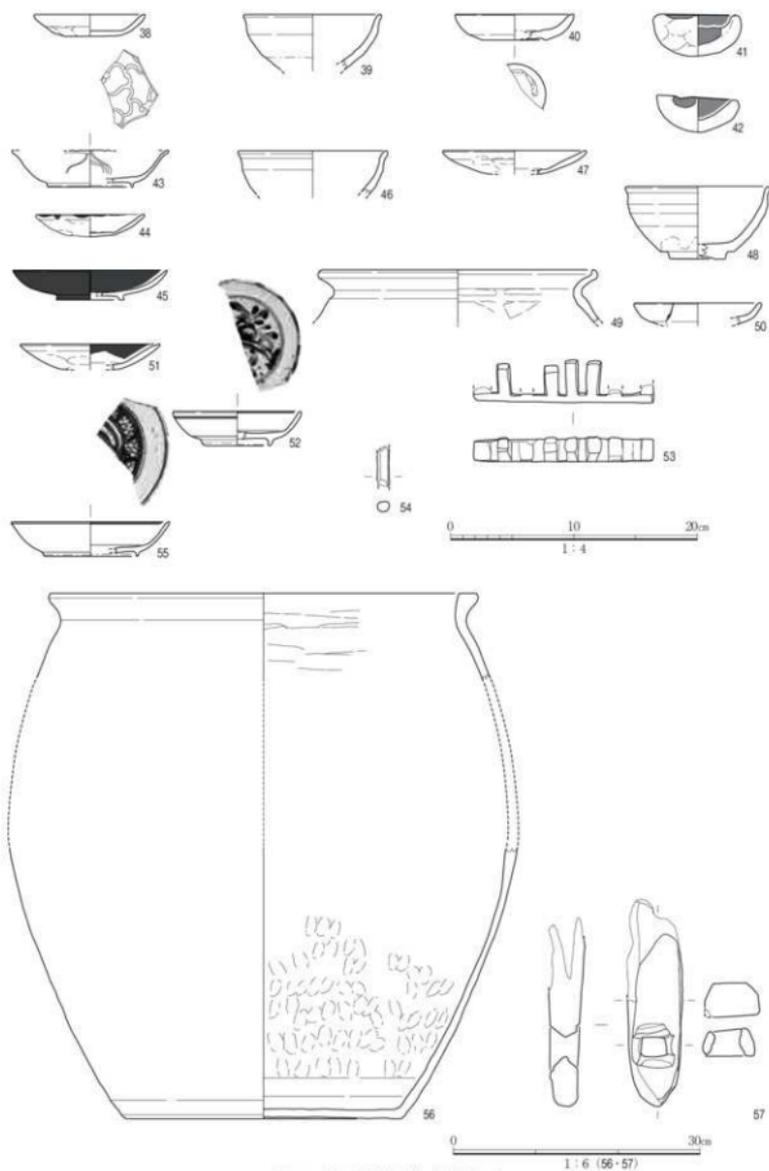


图11 第3层出土遗物实测图(1)

第3c层(38~43)、SK50(44~46)、SK49(47~50)、SD51(51~53)、SP21(54)、SK19(55·56)、SP26(57)

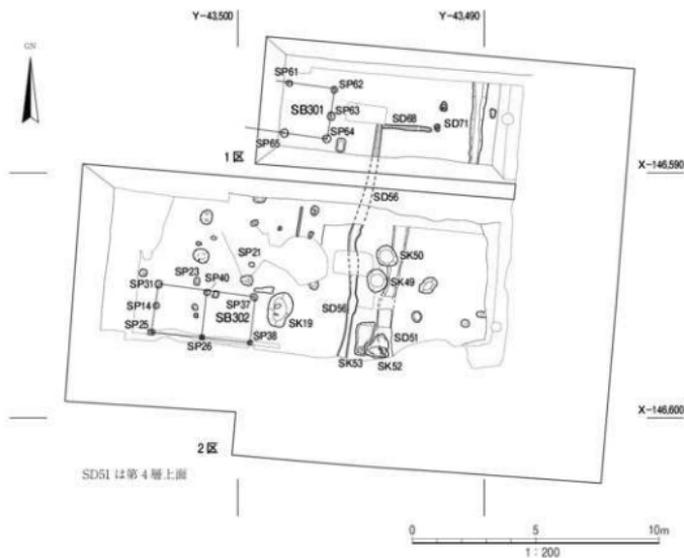
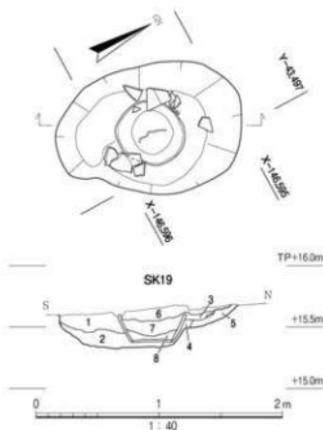


図12 第3c層上面検出遺構平面図

SK19: 埋壺土壌である。壺は瓦質土器で、下半部が残存していた。東西1.1m余、南北約1.5m、深さ0.35mほどが残存していた。埋壺遺構にしては、壺本体より土壌がかなり広く掘られているのがやや異例である。トイレ遺構の可能性もあるが、それに特有の白色系で膜状の付着物はまったくない。この瓦質土器56は体部上半を欠くが、遺構内より口縁部が出土しており、復元して図示した。外面は非常に滑らかに仕上げられている。内面は口縁部直下がナデ、また底部近くもユビオサエである。青花皿55も出土している。薄手で精巧な作りであり、割れた断面に漆とみられる付着物があり、漆継ぎの例である。

SK49: 東西0.75m、南北1.0m弱、深さ0.2m弱の土壌である。出土遺物は土師器皿47、



- 1: 黒褐色(10YR2/3)粘土・褐色(10YR4/4)砂混じりシルトの偽継ぎ
- 2: 黒褐色(10YR3/1)粘土
- 3: 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)灰混じりシルト質粘土
- 4: 暗褐色(10YR3/3)砂混じり粘土質シルト
- 5: 黒褐色(10YR2/3)砂混じり粘土
- 6: 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト混じり粘土
- 7: 黒色(2.5Y2/1)・褐色(10YR4/6)灰混じりシルト質粘土
- 8: 褐灰色(10YR4/1)砂混じりシルト質粘土

図13 SK19平面・断面図

羽釜49、瀬戸美濃焼天目碗48、同皿50である。50は見込みが無軸かどうか不明である。

SK50：東西0.7m、南北0.8m、深さ0.25m余の土壌である。出土遺物は土師器皿44、瀬戸美濃焼天目碗46、木製漆皿45である。45には赤漆が塗布されている。

なお、このほかにも土壌が検出されている。

SD71・56：SD71は1区でのみ検出された南北溝で、北端で幅0.6m、深さ0.1mほどだが、南端では幅0.3m、深さ0.05mに規模が減じている。そのためか、2区で検出されなかった。SD56は2区と1区の南半部で検出された。北端で幅0.2m、深さ0.04m、南端で幅0.35m、深さ0.03mと非常に浅い。北端では重複する東西溝SD68(幅0.2m、深さ0.03m)より新しいことが確認された。以上の南北溝は同時に存在したのか、前後関係があるのか、不明である。SD51から土師器皿51、青花皿52、不明木製品53などが出土している。53は幅3.5cm、長さ14.5cm、厚さ2.0cm弱の材を加工したもので、太い突起が節菌状に並んでいる。用途はわからないが、何かの部材であろう。

h. 第3b層出土の遺物(図14) 土師器皿58、瀬戸美濃焼皿59が出土している。59は見込みにも施釉されており、外底面には窯道具の痕跡が残っている。

i. 第3b層上面の遺構と遺物(図14・15)

SA303：2区の西部では比較的多数の柱穴が検出されたが、確実に建物として組み合うのはSP05～07のみであった。ここでは塀としておく。南北2柱間分の検出である。柱間寸法は北側が1.37m、南側は1.33mである。柱痕跡は明瞭に認められ、一番大きいSP06の柱材は方10cmの角材であり、ほかの柱穴はそれよりわずかに小さい柱材であった。掘形はいずれも直径0.3m前後の不整形円形で、遺存していた深さは0.1m前後である。南端のSP05より南は地形が大きく南へ落ち込むため、この塀がさらに南へ連続していた可能性は小さいとみられる。

SD18：2区の中央を走る東西溝で、長さ13.5m分を検出した。水が流れた痕跡は確認していない。重複関係により、柱穴群に先行することがわかっている。遺存幅は最大で0.2m、深さは0.1mに満たない。土師器皿60、瀬戸美濃焼皿61、同天目碗62が出土している。61は口縁部を折り曲げ、端部を溝縁状に作り、見込みに施釉している。

SD03：2区の南端で検出された最大幅0.2m、深さは0.05m以下の溝である。水が流れた痕跡は確認していない。西端で南へ折れていた。東端では細くなって消失していた。西端でSP05と重複しておらず、SA303との前後関係は不明である。

SK44：2区東端で検出された小土壌である。東西0.5m、南北約0.3mで深さは0.15m余である。備前焼播鉢63が出土している。

このほか、2区西部のSP16から出土した64は少量の非鉄金属を溶解した小型埴場である。内面は黒変し、付着物は認められない。口縁部は内傾する。つまみを有するものとみられる。また第3b層上面で、SD18の南隣にて羽口65が出土した(図15)。これは41・42・64のような小型埴場で金属溶解に伴う輪羽口である。これらの埴場や羽口は大坂城下町跡のほか、大坂城跡OS93-28次調査でも出土例があり[大阪市文化財協会2003]、OJ13-3次調査地では未使用品も含めて多数出土している[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015]。



图14 第3层出土遗物实测图(2)

第3b层(58·59)、SD18(60~62)、SK44(63)、SP16(64)、第3b层上面(65)、第3a层(66~76)、SE12(77·78)

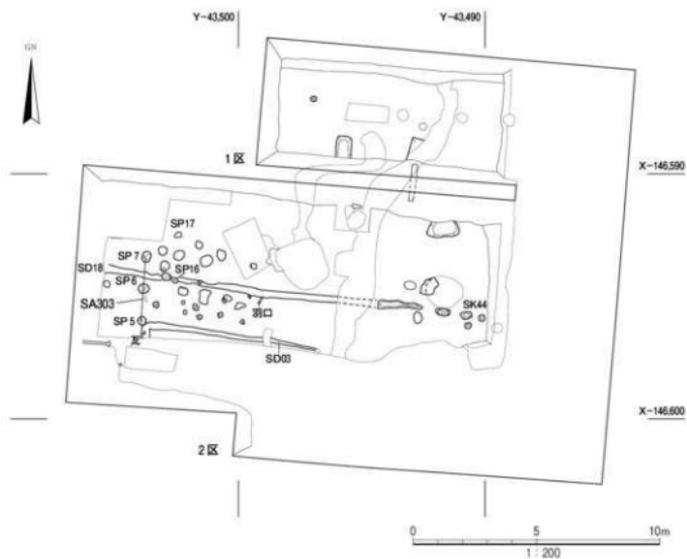


図15 第3b層上面検出遺構平面図

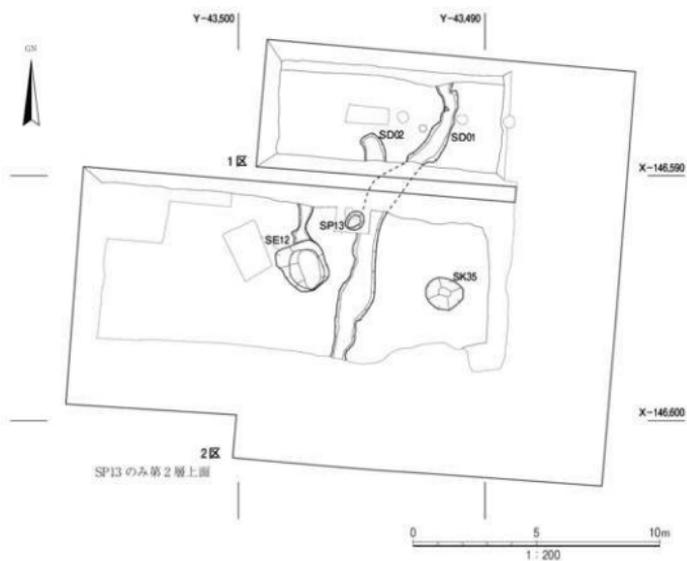


図16 第3a層上面検出遺構平面図

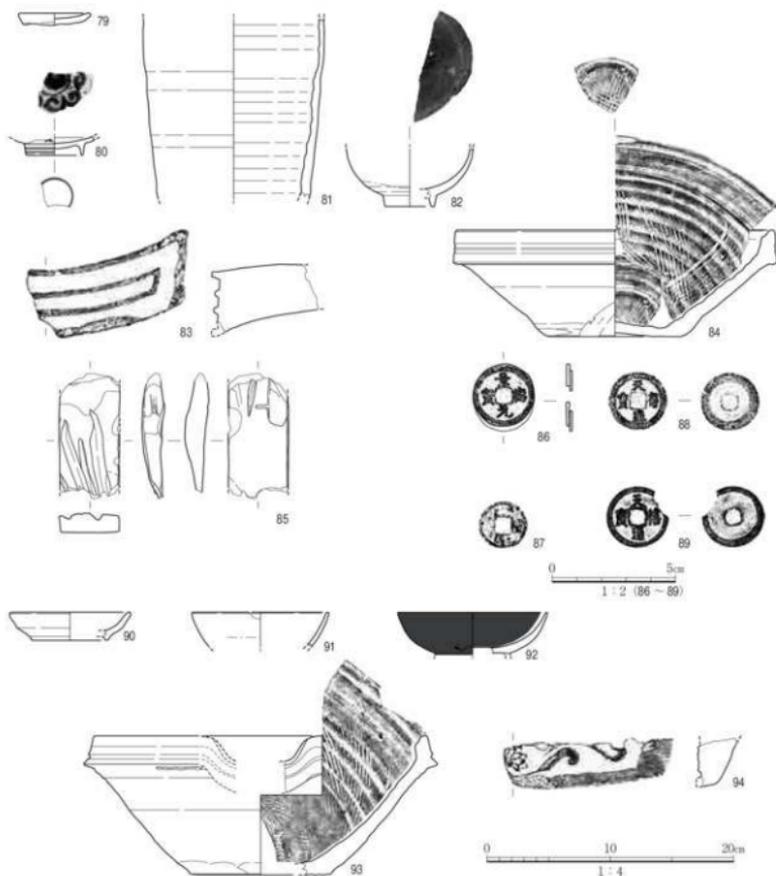


図17 第2層出土遺物実測図  
第2層(79~89), SE73(90~94)

j. 第3a層出土の遺物(図14) 66・67は瀬戸美濃焼皿である。66は口縁部を輪花とし、見込みと外底面に窯道具の痕跡を残す。67は内壳皿で、高台を作り出していない。窯道具痕は外底面にみられる。68~71は瀬戸美濃焼天目碗である。72は朝鮮半島産の白磁皿、73は粗製の青花小碗で、見込みは蛇の目釉剥ぎである。74は瓦質土器火入れである。75は中心飾りに菊花を置いた唐草文軒平瓦で、瓦当と平瓦との接合方法は明瞭に読み取れる。76は硯で、海側の端部が破損している。

k. 第3a層上面の遺構(図16)

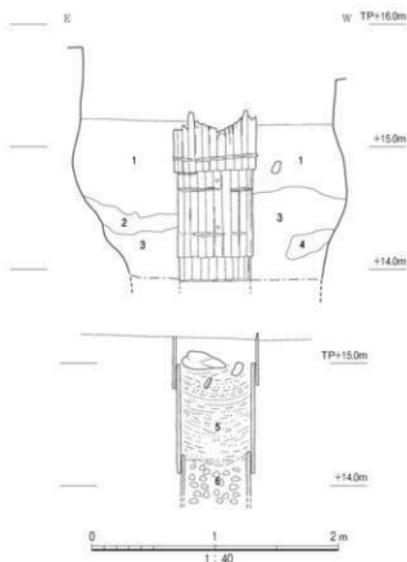
SD01: 1区、2区で検出された。北から南へ蛇行しながら走る溝で、第2層で埋められていた。

幅は一定せず、南端で0.7m前後である。深さも一定でないが、0.2mを超えない。人工の溝とは考え難いが、性格は不明である。

SD02：SD01の西側で部分的に検出された溝で、第2層で埋められていた。幅は南端で0.7m前後で、深さは一定でないが、0.2mを超えない。2区北壁断面にはこの遺構が確認できないので、同じ埋土であるSD01に合流していた可能性が高い。

SE12：東西1.8m、南北2.0mで、深さ1.4m足らずの井戸である。埋土は二層に分かれ、下層は灰白色粘質シルトやオリーブ黒色砂混りシルトなどで埋められ、上層は第2層で埋められていた。北側にやはり第2層で埋る溝状の窪みが認められたが、北壁断面には明瞭に見られなかった。出土遺物は瀬戸美濃焼である。77は内壳皿であり、見込みは無軸である。78は黄瀬戸の大皿の下部で、内面に刻線と緑釉が施され、外面には窯道具の痕跡が残っている。黄瀬戸は豊臣後期に多く出土する。

SK35：東西1.5m、南北1.3mで、深さ0.2mの土壌であり、第2層で埋められていた。



- 1：灰色(7.5Y4/1)シルト混り中粒砂、灰色(5Y4/1)砂混りシルトなど
- 2：灰オリーブ色(10YR5/6)砂混りシルト + オリーブ灰色(2.5GY5/1)シルト混り中粒砂など
- 3：明黄褐色(2.5Y5/2)砂混りシルトなど
- 4：明黄褐色(10YR6/6)砂礫 + オリーブ灰色(2.5GY)砂礫
- 5：にぶい黄色(2.5Y6/3)砂混り粘土質シルト  
暗灰黄色(2.5Y5/2)砂混りシルトなど
- 6：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト混り砂礫  
同色粘上など(水成層)
- 7：黄灰色(2.5Y)シルト混り中粒～粗粒砂  
灰色(7.5Y3/1)礫・砂混りシルトなどの堆積

図18 SE73平面・断面図

#### 1. 第2層出土の遺物(図17)

79は粗製の土師器皿、80は青花碗で外底面は高台内で少しだが丸く窪んでおり一重の圏線が巡る。大坂城の青花では碗IV b類[森穀1992]が最も近似する。81はベトナム陶器の長胴瓶である。82は肥前陶器の碗で、内面に鉄絵を施している。83は後期難波宮の重圏文軒平瓦である。84は備前焼播鉢である。85は紙石かとみられる石製品であるが、板石に溝状の窪みが両面にみられ、棒状のものを研磨した痕跡かと思われる。86～89は銭貨である。86は景徳元宝(1004年初鑄)、87は無文線、88・89は天禧通宝(1017年初鑄)で、87を除いていずれも北宋銭である。第2層による整地の年代は、肥前陶器を含むこと、青花碗がIV b類に近似すること、下位のSE12に黄瀬戸を含むことなどから、豊臣後期と考えられる。

#### m. 第2層上面の遺構(図16)

SP13：2区で検出された花崗岩の礎石である。礎石は長さ0.6m、幅0.45

mで厚さは0.2m以上の大きさである。掘形は礎石の大きさを少し上回る規模である。底は第3a層に達しており、元来は深く埋め込まれていたようである。この礎石はほかに組み合うものが見当たらず、いかなる建築に伴うのか、不明である。なお、この礎石の掘形はより新しい層準から掘り込まれた可能性が残るが、確認できていない。

#### n. 地山上面の遺構と遺物

SE73：3区では非常に浅く地山が検出されたが、井戸SE73の年代から、ここで報告する。この井戸は直径1.9mの掘形に、板材を筒状に組み合わせた井筒を重ねたもので、現況で3段まで認められたが、それ以下は雨後の崩壊により不明である。2段目の井筒の大きさは直径約0.6m、高さ0.91mであり、上下2段で竹を編んだタガで締めていた。板材は幅0.078mである。桶の板材のように上から下へ幅が狭くなる材ではない。埋土は2層を認め、下部は粘土・砂礫などで埋めており、上部は、その後には滞水状態になったところへ土砂を投入していた。そのため、上部層ではラミナが顕著に観察された。最上部には人頭大より大きい石2個が埋められていた。出土遺物は瀬戸美濃焼内壳皿90、肥前陶器碗91、漆碗92、備前焼播鉢93、金箔押唐草文軒平瓦94などである。92には赤漆の上に部分的だが黒漆による文様が施されている。94は下地の赤漆の上に、かすかに金箔が遺存している。中心飾りは菊花である。この井戸が埋められたのは豊臣後期である。

### 3) まとめ

今回の調査の成果を、試掘調査の結果を含めて以下のようにまとめておく。

第一に、前期難波宮宮城南門の東方の微地形がより詳しくわかってきたことである。調査地の南方に東南東に開く谷筋(上町谷)があること、そこから派生する埋没谷(支谷)がいくつかあることなどが、近年、判明している。調査地の西隣や南隣でもそのような埋没谷(支谷d)が検出されていた[大阪文化財研究所2015、大阪市文化財協会2019]。今回の調査でも、支谷dの東辺が検出され、旧地形の詳細な復元が可能になった。ただ、第6層(前期難波宮段階)、第5層の段階で、谷の埋め立て工事は行われているわけであり、不完全ながら地形の改変は進んだといえる。

なお、調査地の東隣で行われたNW18-2次調査は南面大垣の想定ラインの位置にあたるが、ここで堀跡はみつかっていない。

第二に、このような地形環境にもかかわらず、難波宮の柱穴SP01が発見されたことである。SP01はその規模と方位から、試掘調査で発見された時点で難波宮の柱穴とされたが、これはその通りであろう。ただ、調査範囲ではこれと組み合う柱穴がみつかっておらず、いかなる建物なのか、また前期・後期難波宮のいずれに属するのかという点も不明であり、周辺のより細かい調査を待たねばならぬであろう。

第三に、豊臣期大坂城の様相がわかってきたことである。まず、調査地で認められた多くの整地層、次いで遺構について整理すると、以下の通りである。

第2層が豊臣後期、第3層が豊臣前期であることは述べた。第4a層上面もSD51が板組溝である可能性が高く、おそらく豊臣前期であろう。第4層の年代は、わずかに出土した瓦器37から単純に12~

13世紀頃とするには疑問が残る。厚さ1mに及ぶ整地層は、明応5(1496)年からの本願寺(大坂御坊)や豊臣氏大坂城に関わるとみるのが自然である。第4層は、豊臣氏大坂城建設時の整地層である蓋然性が高いであろう。

次に、遺構の様相であるが、第4a層および第3a～c層の上面に計4面の生活面が検出され、第3b・c層の生活面に各2時期ほどの重複がみられ、顕著な変遷があったとみられる。第3b・c層では遺構の変遷に大きな変動がみられず、掘立柱建物、溝、土壇などが構成要素である。建物は小規模であり、柱も細い。礎石建物はみつからない。また輪の羽口と小型の埴塼の出土は、この地で金属器(おそらく真鍮)の加工が行われたことを示す(ただし小規模)。こうした点から、この地の遺構群が武家屋敷にあたるとは考えにくい。町中屋敷替え以前の城内には武家以外に町人層もいたとされていることから、当地の住人は、そうした町人たちであったと推測される。

第3a層上面遺構は、SE12のように豊臣後期に多い黄瀬戸を含んでいた。遺構の様相にもかなり変動がみられ、建物等はみられなくなり、溝にも規則性がうかがわれぬ。土地利用が大きく変わったことは明らかであり、町中屋敷替えに伴い、町人たちが城外に移ったことを示すのであろう。

以上のように、今回の発掘調査では自然地形と難波宮、大坂城に関わるさまざまな成果をあげることができた。

#### 参考文献

- 大久保徹也2007「古墳時代の土器製壇」：『備讃瀬戸の土器製壇』吉備人出版、pp54～136
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005、「難波宮跡・大坂城跡試掘調査(NW04-2)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』、pp.51～59
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015、「大坂城下町跡発掘調査(OJ13-3)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2013)』、pp.217～234
- 大阪市文化財協会2003、「大坂城跡」Ⅶ
- 大阪市文化財協会2008、「町田4丁目所在遺跡発掘調査報告」Ⅱ
- 大阪文化財研究所2015、「難波宮址の研究」第二十
- 大阪市文化財協会2019、「難波宮址の研究」第二十三
- 大阪市文化財協会2019、「中央区上町一丁目2-111における建設工事に伴う難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW18-2)報告書」
- 大阪文化財研究所2015、「難波宮址の研究」第二十
- 積山洋2012「埴塼業と漁業」：『講座日本の考古学』第8巻、青木書店、pp34～62
- 松尾信裕2014、「近世城下町大坂の誕生と拡大」：『大阪上町台地の総合的研究』大阪文化財研究所・大阪歴史博物館、pp.171～182
- 森毅1992「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」：『難波宮址の研究』第九、大阪市文化財協会、pp358～372

1～2区西端地層断面  
(北東から)



2区北壁下部地層断面  
(部分、南から)



SP01  
(東から)





1区第3c層上面  
SB301  
(西から)



2区第3c層上面  
SK19  
(南東から)



2区第3b層上面柱穴群  
(南から)





2区第3a層上面  
SE12  
(北東から)



3区SE73  
(北から)



2区SP13  
(南から)





中央区久宝寺町二丁目23-1・3・4における建設工事に伴う  
難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW19-3)報告書

調査個所 大阪市中央区内久宝寺町2丁目23-1・3・4  
調査面積 340㎡  
調査期間 令和2年3月2日～4月16日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋 工、浅田洋輔、橋本 稔

## 1) 調査に至る経緯と経過

難波宮はわが国最初の本格的な中国式宮殿とされ、大化改新による難波遷都に続いて650(白雉元)年に建設が開始され、652(白雉3)年に難波長柄豊碕宮(すなわち前期難波宮)として完成した。大化改新などの重要な政策が行われた舞台となり、686(朱鳥元)年の火災によって大部分が焼失したとされる。その後、聖武天皇によって726(神亀3)年から再建され(後期難波宮)、744(天平16)年には短期間ではあるが皇都となった。

難波宮は上町台地北端付近の脊梁部に立地し、東西は台地縁辺の斜面となっている。調査地は難波宮の中でも西南部に当り、複雑に蛇行する籠造寺谷に画されて南へ瘤状に突出する地形の上にある。現在、瘤状の地形の上には銅座公園があり、調査地は公園の東に隣接する(図1・2・16)。以後、この地形を「銅座公園高地」と仮称する。

調査地周辺の発掘調査ではやはり難波宮に関する成果が目立っている。北側の大阪医療センター敷地では1970年代から多次にわたる発掘調査が行われているが[大阪市文化財協会1984]、最近では特に南半部で難波宮の遺構が良好に残ることがわかってきた。敷地南西隅付近のNW12-4次調査では、籠造寺谷の谷頭附近の地形と、掘立柱建物群が発見され、前期難波宮の官衙と評価されている[大阪文化財研究所2013]。その北東、NW15-1次調査では、後期難波宮の五間門区画の南面掘立柱塀と、その南に広がる官衙地区を検出した。官衙は実務的な政務を行った曹司と評価され、後期難波宮としては初めての調査例となった。また、調査地の東では、NW90-7・06-2次調査などで籠造寺谷などの古地形が把握されている[大阪市文化財協会2004a、大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008]。特に、NW06-2次調査では、谷内の前期難波宮期の地層から万葉仮名を用いて和歌を記し



図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

た木簡が出土して耳目を集めた。直近では、調査地の東30mでNW19-1次調査を行い、前期難波宮造営時に龍造寺谷を埋めた客土層、前期難波宮期の東西溝を発見した[大阪市文化財協会2019]。また、医療センター敷地南辺以南地域では、上記発掘調査により豊臣期(前期)の屋敷地が展開することがわかっていてる。

当地において集合住宅の建築が計画されたため、大阪市教育委員会では2019年8月などに遺跡跡掘調査を行った。その結果、地表下0.4m以下で本格的な発掘調査を必要とする近世以前の地層が発見され、今回の発掘調査が行われることになった。調査区は敷地中央の東西10m、南北34mの範囲でほぼ敷地いっぱい設定され、排土等の置き場を確保するために4分割(1~4区)で行うこととし(図2)、1区→4区の順で実施した。令和2年3月2日に着手し、地表から約0.4m下、第2層(後述の近世客土層)の上面までを重機を用いて除去した。以後の掘削は人力により、遺構の検出と掘下げ、遺物の採集を行い、適宜に実測図・写真による記録をとった。ただし、第2層上面の徳川期以降の遺構については、調査期間内に全調査工程を終了できない恐れがあったため、遺構断面での埋土の記録作成を省略した。同年4月16日に現地における調査を終えて機材等を撤収した。

以下の本文等に示す標高はTP値(東京湾平均海面値)で、TP+○mと記した。また本報告で用いた国土座標(世界測地系)は事業主側により取付けを行い、図中の方位記号は座標北を示している。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3~5、図版1)

調査地の現況地形は、北側の内久宝寺通りに面する1・2区で標高がTP+18mほど、南側の3・4区ではTP+19m前後で約1mの比高がある。1・2区は3区から斜面をなして前面道路とほぼフラットとなり、道路は大阪病院と銅座公園の間を切通し状に西へ降る。3・4区は西隣の銅座公園とほぼ同じ高さで平坦である。大阪病院内の発掘では前面道路より高く地山が検出されていたので、内久宝寺通りは銅座公園高地の北部を切り通して敷設され、調査地1・2区は道路面に高さを合わせるために削平されたであろうことが想像された。

現地表面を構成する近代から現代の整地層・攪乱土層(第0層に一括)の下位で、以下の3層がみとめられた。なお、第0層の最下部には被熱による赤変がみとめられる地層があり、第二次世界大戦の空襲による火災を被っているとみられた。このことは第0層が形成された時期の上限を示している。

第1層：オリブ褐色~黄褐色わずかに地山偽礫混り砂などからなる整地層で、2層に細分できる箇所もあった。上面を激しく削剥されていて、層厚は最大で25cmであった。重機によって掘削したので、本層に伴う遺物を捕集できていないが、上・下位の地層の年代から概ね徳川期に属するものとみられる。

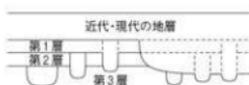


図3 地層と遺構の関係図

第2層：明黄褐色地山偽礫や黄褐色地山偽礫混り砂などからなる整地層である。ほぼ全域に分布し、平坦面を形成するほか、遺構内の埋土ともなっている。下位層準の遺構を埋積するとともに平坦面を造成した整地に伴う地層とみられた。上面を削剥されて

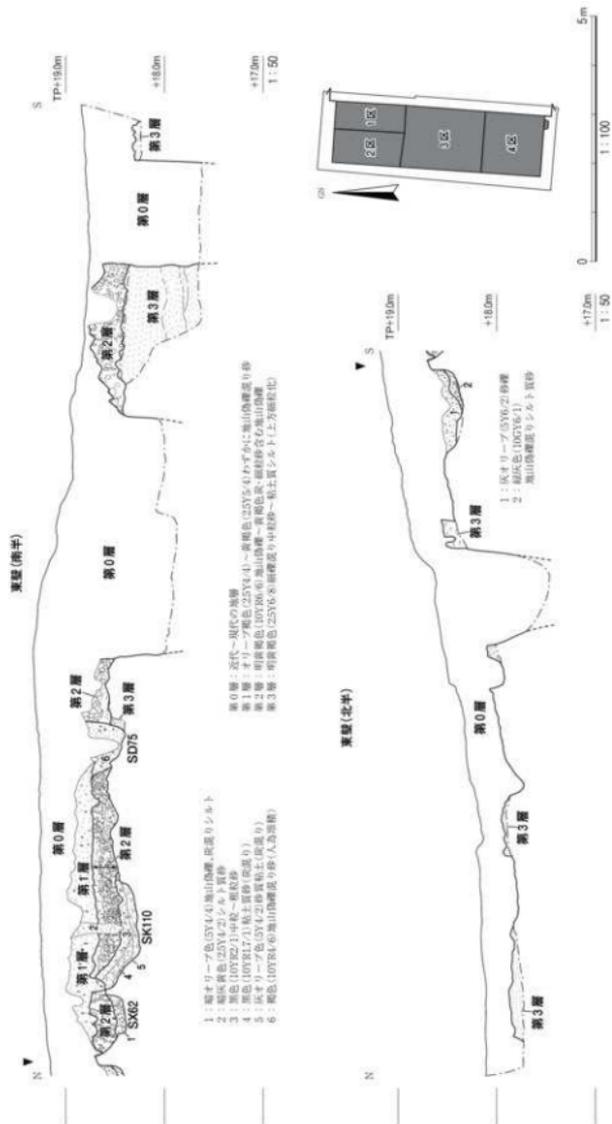


図4 東壁地層断面図

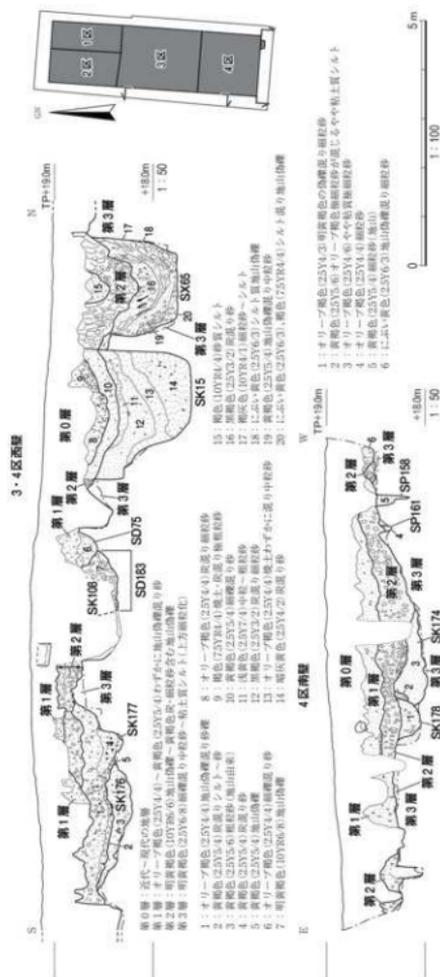


図5 北・西側地層断面図

遺存しない箇所もあるが、層厚は最大で30cmほどで、本層上面では17世紀前葉から19世紀にかけての遺構が検出された。土師器、備前焼、丹波焼、瀬戸美濃焼などが出土し、瀬戸美濃焼天目碗3・同皿4を図示した。地層の年代は、これらの遺物の特徴から徳川初期(17世紀前葉)とみられる。本層は地山の偽礫を多く含む特徴的な岩相を呈しており、NW19-1次調査の第1層、NW90-7次調査の第3a層と対比が可能で、時間的にはNW12-4次調査の第4a・4b層とも同時期の整地である可能性もある。このことは、本層が大阪病院以南地域の土地整備と関係する可能性を示しており、これについては後に詳しく触れることとする。

第3層：明黄褐色細礫混り中粒砂～粘土質シルトからなる地山層である。層厚は75cm以上で、上方に細粒化していた。本層上面では古代から近世にかけての遺構が検出され、それらは時間的に難波宮期のものと豊臣期のものに二大別される。また、北側の1・2区では上面を大きく削られており、近代の住宅跡が検出された。この頃に前面道路の高さに合わせた切土による造成が行われたのであろう。

ii) 遺構と遺物

a. 難波宮期の遺構と遺物(図6・7・12、図版2・3)

3区南側から4区にかけて、第3層上面で掘立柱建物1棟と柱穴1個、溝1条を検出した。

SB1 掘立柱の柱穴を3個(SP185-187)検出したのみであるが建物として復元した。SP186を隅柱とし、その東にSP185、南にSP187があり、建物の北西隅部とみた。両柱筋の延長は後世の遺構や近年の掘乱によって遺存していなかった。SP185は隅丸方形の平面形を呈し、掘形は東西105cm、南北82cm、深さ15cmで、直径15cmの柱痕跡がみられた。SP186も同様な平面形で、東西90cm、南北

94cm、深さ45cmであった。柱抜き取り穴がみられ、この部分の東西は75cm、南北94cm、深さ38cmで、掘形の大部分を壊して掘られていた。柱痕跡は見られなかった。SP187は東西15cm以上、南北49cm以上、深さ23cmで、柱掘形西辺のごく一部が残っていた。柱の位置を特定できないが、柱間寸はSP186-SP185が259cm(約9尺)、SP186-SP187が210cm(約7尺)ほどと推定した。妻・平の向きは特定できないが、柱間寸法を参考にすれば東西が妻側であろうか。方位はSP186-SP185で、東に北に約30°振っている。遺物は土師器、須恵器の細片がわずかに出土したが、時期を特定できるものはなかった。方位や、柱穴の規模と柱間寸法からみて難波宮の建物と考えた。

**SP190** 南壁際で検出した柱穴とみられる遺構で、東西83cm、南北38cm以上、深さ12cmであった。全体を検出するために調査区を南側へ拡張したが、その部分は攪乱を被り残っていないなかった。SB1を梁間2間の南北棟と仮定した場合、東側柱筋の北から5本目に該当する可能性はあるが定かではない。

**SD183** SB1の北を東西に延びる溝で、幅は最大で135cm、深さは28cmである。後世の遺構で破壊されていて一見すると蛇行しているようにみえるが本来は直線的に延びたものとみられ、調査区西端から約4mのところで見切れている。方位は計測しづらいが、SB1にはほぼ平行するように見える。埋土は2層からなり、下層は泥質の細粒～中粒砂で、溝が機能した期間に地山層が流入して堆積したものである。上層は地山偽礫からなり、人為的に投入されたものである。上層からは土師器・須恵器の細片、用途不明の土製品、榛原石の石材片が出土した。須恵器1はやや大型の杯蓋とみられ(図12)、難波IVに属し、7世紀後葉のものである。溝が埋められた年代を示している。

以上の遺構のうちSB1とSD183は位置関係の調和性、SD183の出土遺物から考えて前期難波宮の遺構と判断される。

難波宮に関する遺存は、上記の遺構に加えて後期難波宮の瓦がある。同宮に関する遺構は発見されおらず、古代の瓦はすべて近世以降の遺構や地層から出土したが、総数約20点を数える。少なくともは量であろう。そのうち重園文軒丸瓦5・8、重園文軒平瓦7、平瓦6を図示した。附近に後期難

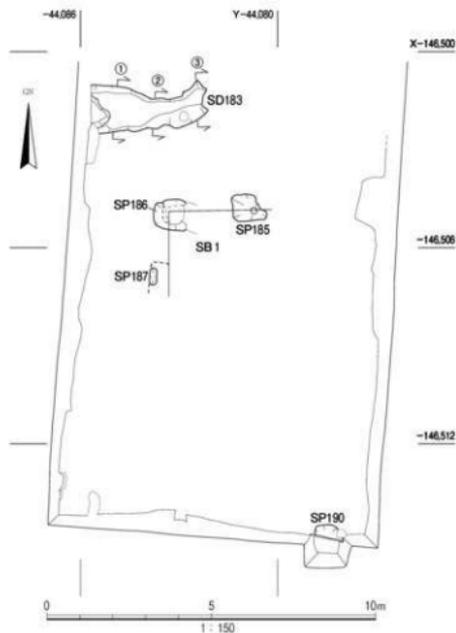


図6 第3層上面遺構(難波宮期)平面図

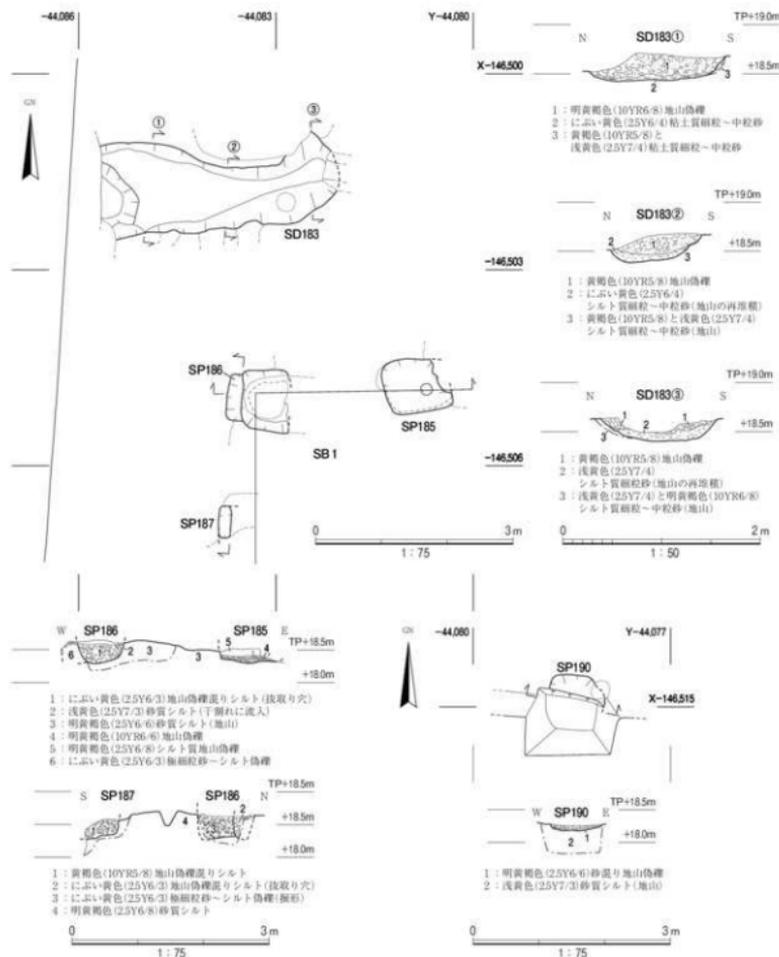


図7 SB1・SD183等平面・断面図

波宮の遺構があった可能性がある。

b. 豊臣期～徳川初期の遺構と遺物(図8～12、図版4)

17世紀前葉の第2層を除去した第3層の上上で、3区から4区にかけて土城・溝・柱穴・落込みなど多くの遺構が発見された。上位層の年代と遺構出土物の特徴からみて、これらの遺構は豊臣期から徳川初期に属するものである。以下、主要な遺構を報告する。

SB2 北西部で検出された掘立柱建物(図9)で、3個の柱穴からなる(SP50～52)。北側は遺存せず、

西側は調査区外へ続いており、建物の南東隅を捉えたものである。柱穴は長径約80cm、短径約60cmの楕円形を呈し、深さは残りの良いもので約60cmである。直径15cmほどの柱痕跡が各々に見られた。南面柱筋での柱間距離は195cm、東面では124cmである。方位は東で2°南に振る。

SP24 SX21の南の柱穴で、平面形は直径50cmほどの円形で、深さは20cmであった。掘形は地山偽磔で埋められ、直径10cmほどの柱痕跡がみられた。備前焼小壺14が出土した。豊臣期のものとみられ、水滴として用いられたものであろうか。

SP124 中央部西壁近くにあり、平面形は直径75cmの円形で、深さは15cmであった。南西に偏って長径40cmほどの楕円状に焼土が詰まった部分があった。その他は地山偽磔で充填されており、火災を被った建物の柱穴とみた。直径に比して深さが浅く、上部を削平されたものであろう。遺物は出土しなかった。

SP182 中央からやや南西にある小穴で、小片ではあるが鮮やかな緑色の釉をかけた高台部分の小片11が出土した。華南三彩の皿である可能性がある。

柱穴・小穴ではこの他にSP66・114・117・121・130・175・179・180・188・189の断面図を示した。SP66は深さ40cmを測り、柱痕跡がみられた。SP175には礎石の抜取り穴がみられた。SP188・189は直径

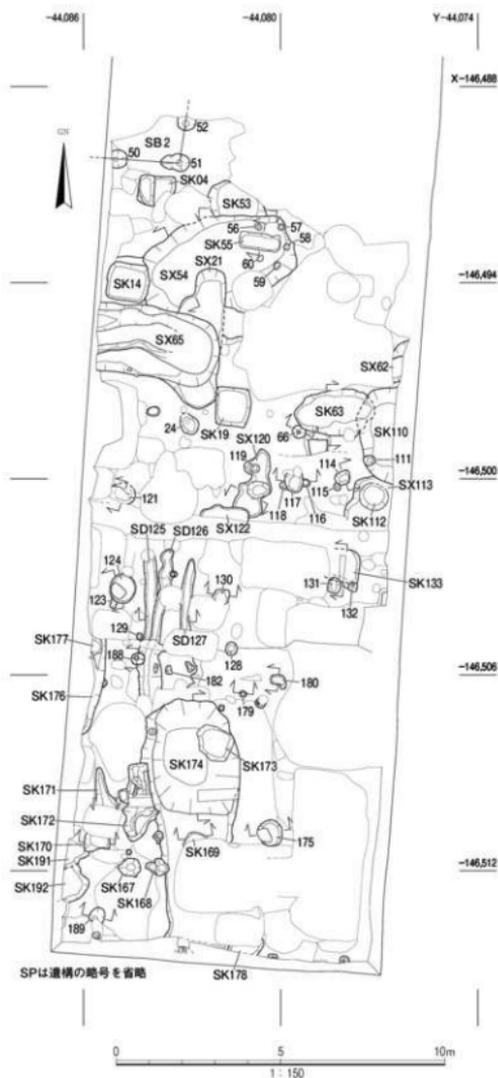


図8 第3層上面遺構平面図(豊臣～徳川初期)

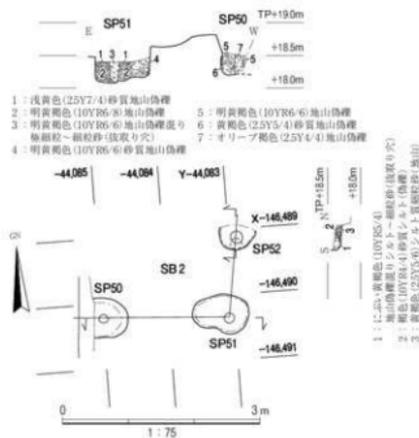


図9 SB2平面・断面図

ルトで埋められていた。

**SX54・SK55** 北部で検出され、**SX54**の平面形は不整な楕円形を呈し、東西478cm、南北330cm以上、深さ35cmである。底部には流入した砂の薄層が堆積し、大部分は地山偽礫(第2層)で埋められていた。備前焼、中国産青花が出土した。**SK55**は**SX54**の底部で検出され、平面形は長方形で、東西124cm、南北43cm、深さ10cmで、**SX54**と同様に地山偽礫で埋められていた。東半部には外縁を囲むように6個の小穴があったが用途はわからない。遺物は出土しなかった。

**SK63・110** 中央部の東壁沿いにある土壌で、**SK63**が**SK110**を切る。両者とも平面形は楕円形で、**SK63**は東西241cm、南北142cm、深さ43cm、**SK110**は東西107cm以上、南北373cm以上、深さ40cmであった。堆積状況も類似しており、下層は暗色系の砂や粘土で半ばまでを埋め、最終的には第2層の地山偽礫で埋め戻されていた。**SK63**からは備前焼、中国産青花が、**SK110**からは土師器が出土した。

**SK174** 南部で検出され、東西300cm、南北725cm以上、深さ最大52cmで、南の調査区外に続く。遺構の北側が一段深くなって終わっている。遺構底にはシルト～砂が流入して堆積し、その上は大型の礫や偽礫を含む砂で埋められていた。土壌としたが溝状に延び、上部を削平されているとすれば、屋敷地の区画溝である可能性もある。土師器、中国産青磁(中世)、備前焼、肥前陶器などが出土した。15は備前焼拵鉢である。22は石製品で、宝篋印塔笠部の剛飾の部分である。遺構の時期は豊臣後期である。

**SK176** 南部西壁際であり、東西45cm以上、南北294cm以上、深さ30cmで、西の調査区外に続く。地山由来の砂で埋められていた。土師器、信楽焼、肥前陶器などが出土し、豊臣後期の遺構とみられる。

土壌では他に**SK133・169・170・171**の断面図を示した。平面形の規模は1m前後、深さはせいぜい30cmほどで、地山偽礫で埋められるものが多い。

**SD125～127** 中央部西にある3条の溝で、**SD125**は幅33cm、**SD126**は幅30cm、**SD127**は幅31cmで、

が40cm前後で柱痕跡が残る比較的しっかりした柱穴であるが、この他はごく小規模なものが多く、残りが悪く浅い。

**SK04 SB2**の南にあり、平面形は隅丸方形を呈し、東西108cm、南北94cm、深さ30cmであった。灰褐色砂混り地山偽礫で埋められており、土師器、中国産青磁、瀬戸美濃焼、肥前陶器が出土した。瀬戸美濃焼皿9は底部外面に円錐ピン跡を残し、肥前陶器碗10は外面に鉄絵を施す。遺構の年代は豊臣後期である。

**SK53** 北部にあり下記**SX54**に切られる。東西185cm以上、南北108cm以上、深さは28cmであった。地山偽礫混りの砂質シルトで埋められていた。

深さはいずれも10cmほどである。SD126がSD125を切る。SD126には水流の痕跡があり、他2条は人為的に埋められていた。

SX21・65 北部の西壁際で検出された溝状の落込みで、SX65は東西374cm以上、南北219cm、深さ140cmであった。SX21はSX65の東部に取り付き、東西135cm、南北425cm、深さ24cmであった。両者に切合いはなく、同一の遺構とみられる。SX65の埋土は下部が地山偽礫を含むシルトや砂(図5の16~20)で、機能時に自然に堆積したものであった。上部は第2層の地山偽礫で埋められており(図版1中)、SX21も同様に埋められていた。このような堆積状況からは、この遺構が屋敷地を画する溝

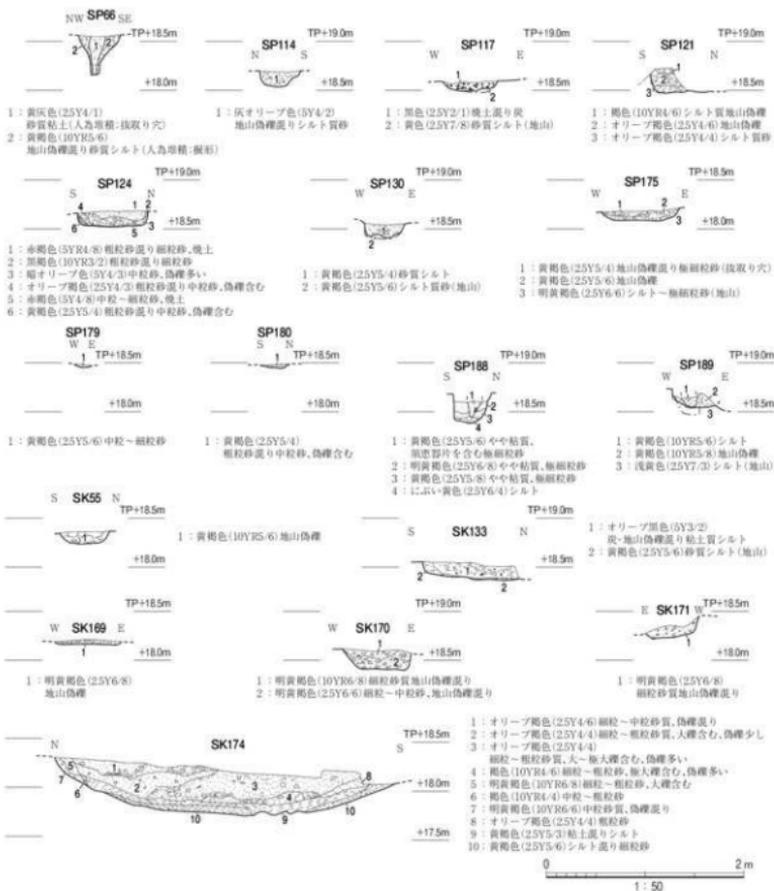


図10 遺構断面図(1)

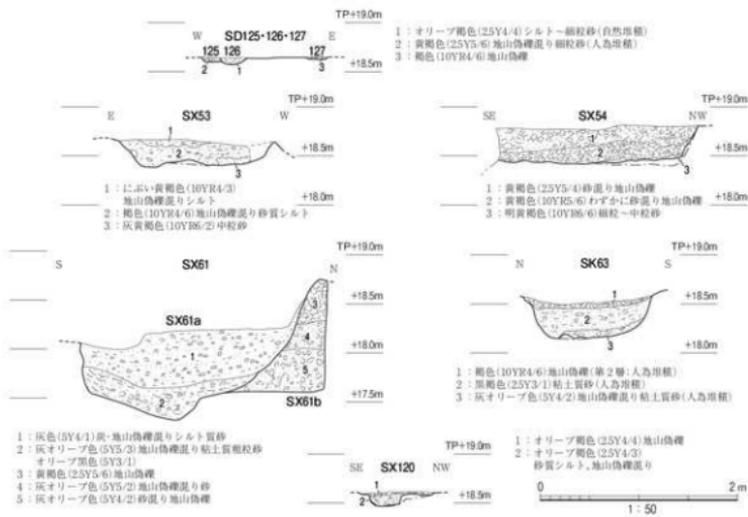


図11 遺構断面図(2)

である可能性が考えられた。SX65の埋土下部からは土師器、須恵器、備前焼、丹波焼、瀬戸美濃焼、中国産青花などが出土した。中国産青花皿16は内・外面に圈線を巡らせ、底部内面は蛇の目に釉刺ぎを施す。瀬戸美濃焼皿17・18は鉄軸をかけ、口縁を端反りに取める。同皿19は口縁にヒダをよせ、底部内面には格子状に線刻を施す。20は丹波焼大平皿である。SX21からは土師器、瀬戸美濃焼、中国産青花などが出土した。土師器皿12は内面に金箔が残る。瀬戸美濃焼皿13には底部外面に輪トチの跡が残る。21は鬼瓦の一部であろう。これらの遺物から遺構の年代は豊臣前期とみられる。

#### c. 徳川期の遺構と遺物(図11~15、図版4)

第2層の上面で3区から4区にかけて井戸・土塙・溝・柱穴など多くの遺構を検出した。第2層の年代が17世紀前葉なのでそれ以後の遺構である。ただし、第1層を重機で掘削しているので同層上面から掘り込まれた遺構も同時に検出しているはずである。また、中央部の柱穴・小穴が密集する辺りでは第2層が遺存しておらず、ここでは下位の豊臣期の遺構が混在した可能性もある。以下、出土遺物から年代が明らかになった遺構を中心に報告を行う。

**SE16** 北部中央で検出された井戸で、平面形は直径120cmの円形で、深さは100cmまで掘り下げたが、崩落の危険があったので底には達していない。瀬戸美濃焼、中国産青花碗、肥前磁器が出土し、そのうち瀬戸美濃焼天目碗23を図示した。17世紀後半の遺構である。

**SK06** 北部で検出された土塙で、東西133cm、南北121cm、深さ30cmであった。土師器、肥前陶器・同京焼風陶器、中国産青花・同青磁などが出土した。肥前陶器皿28は端反りの口縁をもつ。17世紀後半の遺構であろう。

**SK15** 中央部西壁際にあり、東西144cm以上、南北279cm以上、深さ105cmで、砂質の堆積物で埋

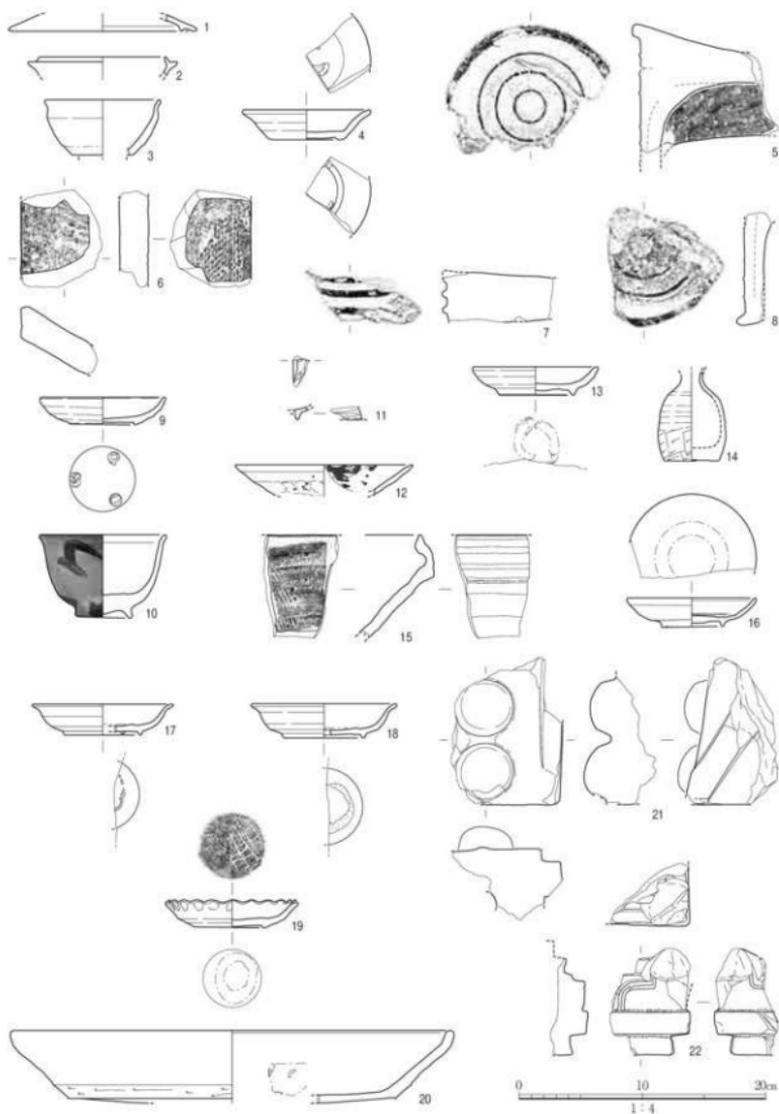


图12 遗址实测图(1)

SD183(1)、SK145(2)、第2层(3·4)、SK174(5·7·8·15·22)、SK04(9·10)、  
SP182(11)、SX21(12·13·21)、SP24(14)、SX65(6·16~20)

められていた(図5)。土師器、軟質施軸陶器、肥前陶器、肥前磁器などが出土し、そのうち土師器皿24、肥前陶器碗25を図示した。24は灯明皿に転用されたものである。18世紀前半の遺構である。

SK22 中央部北西にあり、東西485cm、南北279cm、深さ70cmである。土師器・丹波焼・肥前磁器・中国産青花など多くの遺物が出土し、廃棄土壌とみられる。肥前磁器染付仏飯具36と同染付碗37を図示した。17世紀後葉の遺構である。

SK70～74はSK15の南に密集する土壌群で、平面形は概ね円形基調を呈する。

SK70 東西68cm以上、南北80cm以上、深さ30cmである。肥前磁器が出土し、その特徴からみて17世紀末～18世紀初頭頃の遺構である。

SK71 東西93cm、南北102cm以上、深さ25cmで、土師器、備前焼、肥前磁器、泥面子が出土した。肥前磁器染付碗26は広東碗で八卦文を施す。18世紀末～19世紀初頭頃の遺構である。

SK72 東西98cm以上、南北105cm以上、深さ35cmで、土師器、肥前陶器・同磁器などが出土した。肥前陶器碗27は打刷毛目文を施す。17世紀末頃の遺構である。

SK73 東西178cm、南北157cm、深さ20cmを測り、土師器、肥前陶器・同磁器、関西系陶器・同磁器などが出土した。19世紀前葉の遺構である。

SK74 東西142cm以上、南北118cm、深さ30cmで、遺構底には角柱状の花崗岩石材が4個置かれていたが、用途は不明である。土師器、軟質施軸陶器、肥前磁器、近代磁器、ガラス製品などが出土した。近代磁器小杯40は底部外面に「サワカメ」銘をもつ。サワカメは堺の造酒屋である。土師器皿41～43は内曇りで、直径を少しずつ違えている。これらの遺物から遺構の年代は近代に下るものとみられる。以上、SK70～74は廃棄土壌とみられ、SK15も加えると17世紀末から近代にかけてほぼ同じ場所に繰り返し掘られたものとみられる。

SK76 中央部にあり後述のSD75を切る。東西327cm、南北149cm、深さ53cmで、土師器、備前焼、丹波焼、瀬戸美濃焼、軟質施軸陶器、萩焼、中国産青花、堺播鉢などが出土した。29は中国産青花小杯、30・31は泥面子である。やはり廃棄土壌とみられ、19世紀前葉の遺構である。

SK77 SK76の南東にあり、東西75cm以上、南北23cm以上、深さ20cm以上で、土師器、軟質施軸陶器、肥前磁器が出土した。18世紀中葉の遺構であろう。

SK78 中央部東壁際で検出され、東西90cm以上、南北152cm以上、深さ15cmで、備前焼、丹波焼、肥前陶器・同磁器などが出土した。肥前陶器には京焼風碗が含まれ、17世紀末頃の遺構である。

SK80 中央部南西の土壌で、東西163cm、南北91cm、深さ20cmであった。土師器、肥前磁器、関西系陶器などが出土した。関西系陶器32は土瓶の蓋である。18世紀末～19世紀初頭の遺構である。

SK106 SK80の東で、東西103cm以上、南北177cm以上、深さ15cmで、土師器、丹波焼、肥前陶器・同磁器、軟質施軸陶器などが出土した。33・34は土師器焙烙である。18世紀初頭の遺構である。

SK108 中央部西壁際で検出され、東西39cm以上、南北198cm以上、深さ10cm以上である。軟質施軸陶器、肥前磁器、関西系陶器が出土し、18世紀末の遺構である。

SK144 南部西壁際で検出され、東西38cm以上、南北69cm、深さ15cmで、土師器、肥前陶器・同磁器などが出土した。19世紀中葉頃の遺構である。

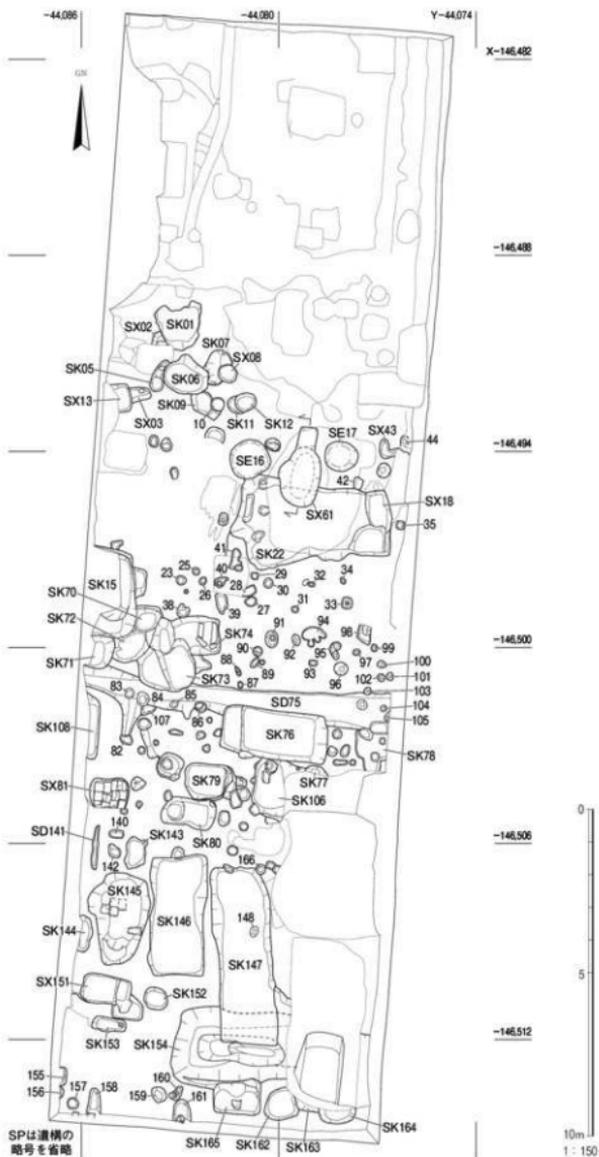


図13 第2層上面遺構平面図(徳川期)

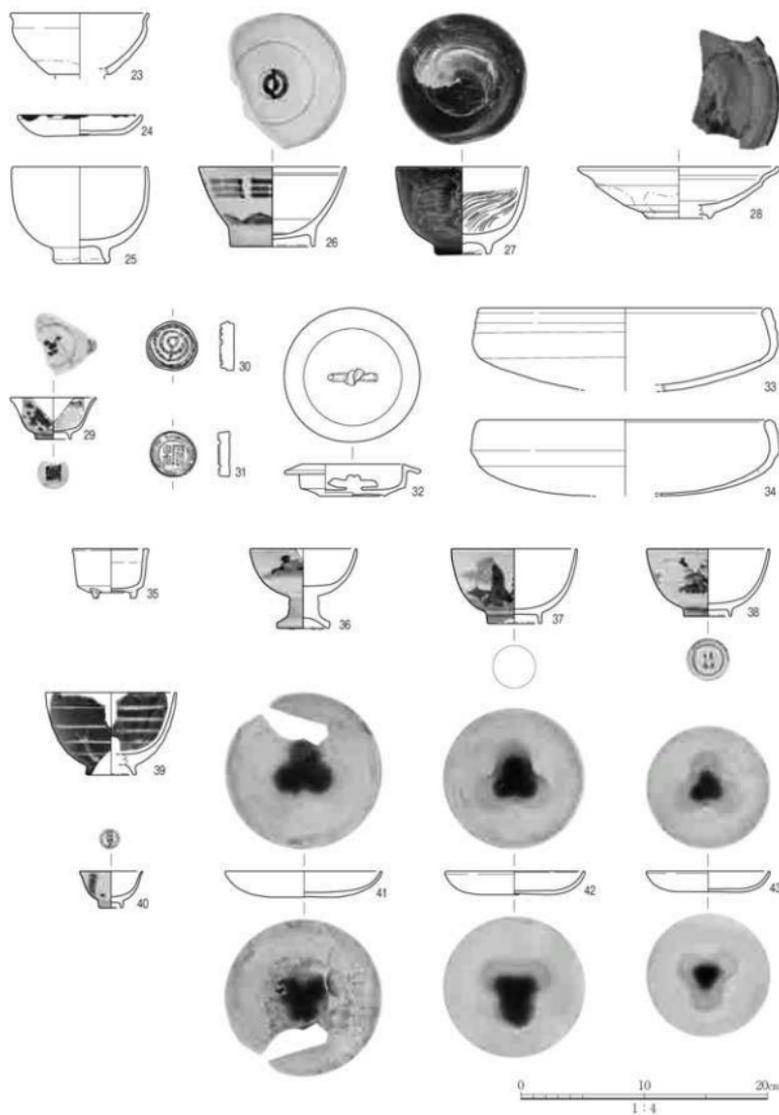


图14 遗物实测图(2)

SE16(23)、SK15(24·25)、SK71(26)、SK72(27)、SK06(28)、SK76(29-31)、  
SK80(32)、SK106(33·34)、SX61(35·38·39)、SK22(36·37)、SK74(40-43)

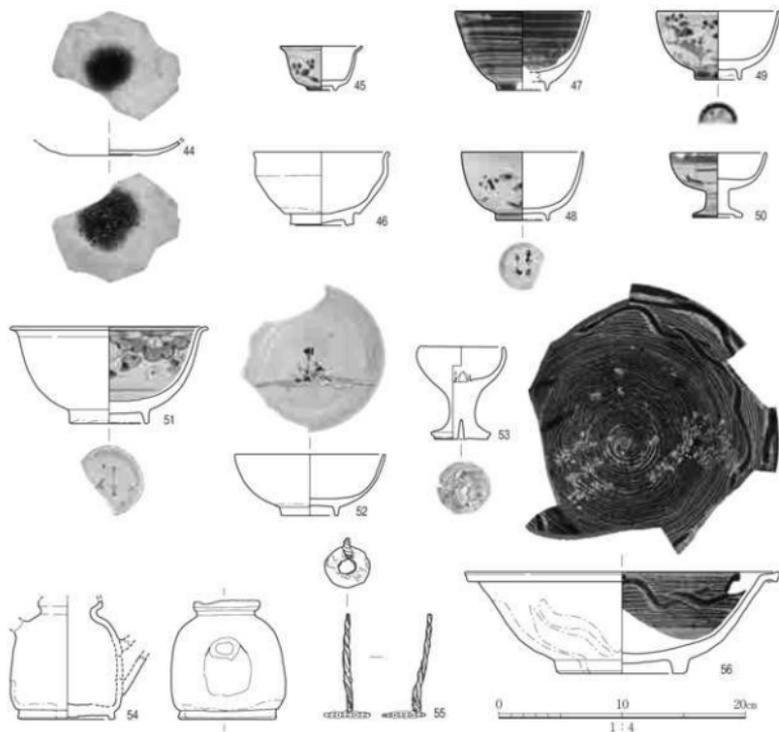


図15 出土遺物実測図(3)

SK154(44~56)

SK146 南壁西側にあり、東西174cm、南北378cm、深さ8cmで、肥前陶器が出土した。17世紀後葉の遺構である。

SK154 南壁近くにあり、東西354cm以上、南北256cm以上、深さ60cmであった。土師器、瓦質土器、瀬戸美濃焼、肥前陶器・同磁器、堺搦鉢など多くの遺物が出土し、廃棄土壇とみられた。土師器皿44は内曇りである。45は中国産青花小杯である。瀬戸美濃焼53は灯火具とみられる。同54は汁次である。46は瀬戸美濃焼天目碗、47は肥前陶器碗で刷毛目文を施す。56は同鉢で端反りの口縁をもつ大型品である。52は同京焼風碗で、内面に山水文を施す。48~51は肥前磁器染付で、48・49は碗、50は仏飯具、51は鉢である。55は銅製の灯芯押えである。これらの遺物から遺構の年代は17世紀末~18世紀初頭頃とみられる。

SK162 南壁近くにあり、東西105cm、南北106cm、深さ15cmであった。瀬戸美濃焼、肥前磁器などが出土した。18世紀初頭頃の遺構とみられる。

SK165 SK162の西にあり、東西142cm、南北114cm、深さ22cmであった。土師器、瀬戸美濃焼、

肥前磁器などが出土し、17世紀後葉の遺構である。

SD75 中央部を東西に横切って延びる溝で、幅は最大で108cm、深さは40cmほどで、方位は東で南に7°振る。地山偽礫混り砂で人為的に埋められていた。出土した遺物は多くはないが、土師器、瀬戸美濃焼、中国産青花などがあつた。遺物相は豊臣後期から徳川初期の様相を呈し、第2層の整地とさほど時期を隔てずに掘られた溝と考えられる。

SX61 SK22の北でこれを切る遺構である。東西128cm、南北246cm、深さ142cmで、断面を観察すると二つの遺構が重複しており(図11)、上位をSX61a、下位をSX61bとした。いずれも地山偽礫を混じる砂質土で埋められていた。SX61aからは土師器、瓦質土器、備前焼、丹波焼、瀬戸美濃焼、肥前陶器・同磁器などが出土し、瀬戸美濃焼香炉35、肥前陶器碗39を图示した。39は刷毛目文を施す。SX61bからは備前焼、丹波焼、肥前磁器などが出土し、肥前磁器碗38を示した。SX61a・同bはいずれも17世紀末から18世紀初頭頃の遺構とみられる。

SX151 南西部にあり、東西145cm、南北85cm、深さ5cmであった。瀬戸美濃焼、肥前磁器などが出土した。肥前磁器には焼き雑ぎをしたものがある。18世紀末から19世紀初頭頃の遺構であろう。

柱穴・小穴群 中央部のSD75の南北には柱穴・小穴が密集していた。せいぜい直径30cmほどのもので、柱痕跡をもつものもあつたが、配列に明確な規則性はなく、建物を復元できるものはなかった。明確に時期がわかるものもなく、前述のように下位の豊臣期の遺構も混在している可能性がある。

### 3) 若干の考察

#### i) 古代の建物SB1の評価

今回の調査では、地山層である第3層の上面で古代の建物であるSB1を検出した。柱穴3個のみの発見に留まったが、当該地域でみた場合、建物の方位や柱穴の規模から難波宮期の遺構と考えられた。また、溝SD183からは、その廃絶の時期を示す7世紀後葉の土器が出土し、溝が機能した時期が前期難波宮期であることを示し、これと平行する方位をもつSB1の時期も同様と考えた。それではこれらの遺構は前期難波宮の中でどのように位置づけられるのであろうか。

SB1の位置は前期難波宮の西を画するとされるSA303の西(外側)に当ることから、難波京(つまり宮外)の遺構とする見方も成り立つが、ここではこれを宮外に配された官衙群の一部と考える[高橋工2020]。前期難波宮において宮外に想定される官衙地区は以下の二箇所である(図16)。西南方宮外官衙地区は宮城南門の南西にあり、長大な建物が南北に直線をなして配される状況から、京に設けられた宅地ではなく官衙と考えた。東面の区画施設は未発見であるが、北・西・南面が掘立柱塀などで画されているものと考えられる。もう一個所は朝堂院西方の西方宮外官衙地区である。窟状に南へ突出した地形上(銅座公園高地)にあり、官衙と考えられている[大阪文化財研究所2013]。また、これに加えて、宮城南門の東南NW81-30次調査地周辺にも何らかの施設が置かれた可能性あり、ここにも官衙地区の存在を想定してもよいのではないだろうか。このように宮外にも官衙地区が広がる様相は、前期難波宮の段階において官衙機構が相応に整備されていたことを物語っている。

SB1はこれらのうち西方宮外官衙地区に含まれる。同官衙地区を構成する建物等の発見は多くはな

いが、以下になる。本調査地から北西約50mに当る場所では、NW12-4次調査で東西に延びる掘立柱塼とその南側に平行して配された掘立柱建物が3棟発見されている。塼は窟状に突出した銅座公園高地の付け根の部分を仕切っており、この独立した高地上に四面を区画された施設があったことを想起させる。また、冒頭でも述べた最近のNW19-1次調査では、正東西に延びる溝を検出しており、水流の痕跡から銅座公園高地から龍造寺谷への排水溝と考えられた。この官衙地区からの排水溝とみてよいであろう。こうした中において、SB1は高地の東縁辺に近い位置にあり、官衙地区の周縁部を構成する付属的な建物と考えることができるのではないだろうか。また、SD183は地区内の空間を区切る区画溝とみるのが適当であろう。

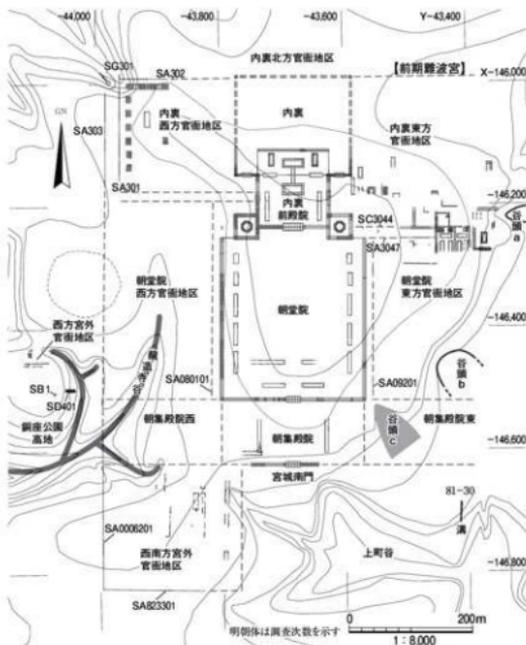


図16 前期難波宮と銅座公園高地

以上、少ない資料から推論を重ねたが、今回の調査により、この高地に前期難波宮の官衙と目される施設があったことが考えられる。その内容のさらなる解明は今後の課題であり、周辺での調査の進展が期待される。

ii) 17世紀前葉頃の地形改変

上に述べた難波宮の遺構は残存深度が非常に浅く、上面がかなり削平をうけているとみられる。このことは後世の地形改変と関係があるはずであるが、それは何時行われたのであろうか。本調査地と周辺調査の人為堆積層から探ってみたい。

まず注目される本調査地の第2層である。本層は主に地山層の偽礫からなり、層厚は最大でも30cmほどとさほど厚くはないものの、特徴的な岩相を示す。形成された時期は徳川初期とみられ、実年代では17世紀前葉頃であろう。東方NW19-1次調査の第1層も同様な岩相をもち、年代的にも近いことから同定が可能である[大阪市文化財協会2019]。また、さらに東方のNW90-7次調査の第3a層は灰色粘土偽礫を含む黄色シルト層とされ、調査時の写真を確認すると地山偽礫を含む地層であることがわかる[大阪市文化財協会2004]。年代は「元和年間以降」とされており、近似している。これらの調

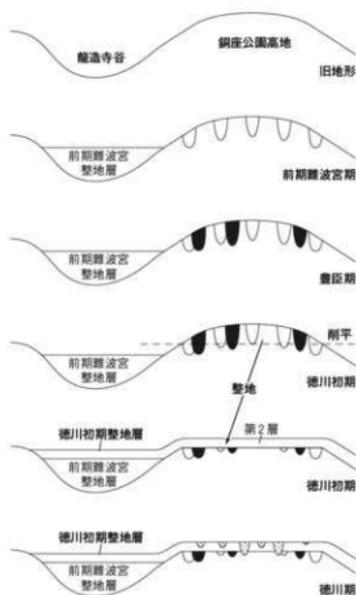


図17 銅座公園高地の地形改変

査地の地山偽礫を含む地層は岩相が共通し、年代的にも近いことから同一の客土層で、本調査地から東約100mの地点までは分布が確認できるということになる。このことからかなり大規模な敷き均し工事が行われたとみてよいであろう。

次にこの客土がどこから供給されたかを考えてみたい。本調査地で第2層の下位(地山層上面)では難波宮期・豊臣期の遺構が検出され、上面では徳川期の遺構が検出された。両者の遺構を比較すると、地山層上面では柱穴・小穴に類が少なく、第2層の上面では多い。さらに前者の柱穴は、SP124に代表されるように遺存する深度が浅い。このことから考えて第2層の堆積以前に地表面の削平が行われたのであろう。削平から客土の実施までは、SD75の遺物相が示すように時間的な間隙がほとんどない状況が考えられ、銅座公園高地の高所を削平して、その土砂を周辺に敷き均し・整地したのではないだろうか。

こうした地形改変を伴う整地工事は、第2層の年代(17世紀前葉)から考えて大坂城主松平忠明による

大坂ノ陣後の大坂市中の復興工事に当てて考えることが可能であろう。

#### 4)まとめ

本調査の成果を以下に箇条書きに記す。

- ・前期難波宮の建物と溝を発見した。前期難波宮の朝堂院西方に置かれた官銜を構成する遺構であることを考察した。
- ・豊臣期・徳川期の遺構を発見した。従来、大阪病院南部地域の同期の遺構は豊臣前期のものが主体であったが、後期の遺構も存在することがわかった。徳川期には蔵奉行などの役所が置かれた土地ではあるが、それとの関係を示す発見はなく、今後の調査に期待する。また、徳川初期に銅座公園高地を削平し、周辺に整地を行う工事あったことを考察した。

#### 引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW06-2)報告書」：「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2006)」, pp.61-81
- 大阪市文化財協会1984,「難波宮址の研究 第八」, pp.1-247
- 大阪市文化財協会2004a,「NW90-7次および85-39次調査」：「難波宮址の研究 第十二」, pp.119-149

- 大阪市文化財協会2004b, 「NW93-4・12次およびその周辺の調査」:『難波宮址の研究 第十二』, pp.95-118
- 大阪市文化財協会2019, 「中央区内久宝寺町二丁目22内における建設工事に伴う難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW19-1)報告書」
- 大阪文化財研究所2013, 『難波宮址の研究 第十九』, pp.1-167
- 大阪文化財研究所2017, 『難波宮址の研究 第二十二』, pp.1-74
- 高橋工2020, 「前期難波宮の曹司遺構」:『難波宮と大化改新』, 大阪市立大学難波宮研究会編、和泉書院, pp.105-130



東壁地層断面  
(3～4区：北西から)



西壁地層断面と  
SK15(左)とSX65  
(3区：東から)



東壁地層断面と  
SK63(3区：西から)







SB 1 と SD183(西から)



SB 1 と SD183(南東から)



SP186(東から)



SP185(南から)



SD183(西から)





3区 第3層上面  
(南から)



4区 第3層上面  
(北から)



4区 第3層上面  
(南東から)





3区 第2層上面  
(南から)



4区 第2層上面  
(南東から)



2区 第3層上面  
(南から)





中央区北久宝寺町一丁目48-1・2、50-2における  
建設工事に伴う大坂城下町跡発掘調査(OJ20-1)報告書

調査個所 大阪市中央区北久宝寺町1丁目48-1・2、50-2  
調査面積 約75㎡  
調査期間 令和3年3月15日～3月26日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋 工、趙 哲济

## 1) 調査に至る経緯と経過

大阪市中央区の西北部、上町台地の西に沿う難波砂堆の北部に位置する大坂城下町跡は、16世紀後半に豊臣秀吉が大坂城三ノ丸建設のために町人を上町台地から移転させて作らせた新造の町であり、ここで江戸期の商都大坂の基礎が築かれた。また、難波砂堆北部は、弥生時代中期以降の遺構・遺物が見つかっており、古代・中世には集落や港湾施設があったことが知られている。

大坂城下町跡は、北は土佐堀川、東は東横堀川、南は南久宝寺通、西は既ぬ御堂筋に囲まれた範囲にあり、その東南部にある本調査地は、遺跡南限の南久宝寺町通の一本北の北久宝寺通りに面し、東限の東横堀川からは西に約70mの距離にある。近隣では、1街区西のOJ12-8次調査地でTP+1.5m以上に豊臣後期以降の遺構が検出され、その下位は無遺物の砂礫層が分布した。この砂礫層は、より北方のOJ92-17次や97-7次調査地の古墳時代～古代の堆積層と対比されたが、[趙哲済2014]を踏襲した[趙・中条武司2017]では、弥生時代後期以前に形成された浜堤1の砂礫層としている。また、南西100m余りの南久宝寺通りに面するOJ11-4次調査地では、TP+1.6m前後に17世紀末の土壌が検出されたほか、TP+0.9m付近の泥質砂層中に古墳時代～古代の土師器・須恵器、上面に弥生時代中期の土器が見つかっており、この泥質砂層は古墳時代後期以前に形成された難波砂州の浜堤2と1とに挟まれた堤間湿地の堆積層とみられる[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013、大阪市文化財協会1999・2004、大阪文化財研究所2014]。

当該地での建設工事に先立って、令和3年1月12日に大阪市教育委員会により試掘調査が実施され、地表下1.8m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする近世以前の遺構面および遺物包含層が検出された。これを受けて、地表下1.8～3.5mに分布する地層の年代や遺構・遺物の分布状況などの、当該



図1 調査地位置図

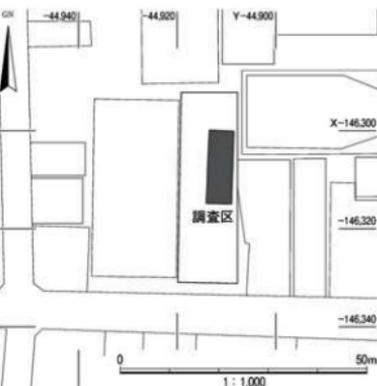


図2 調査区位置図

地の歴史の変遷の基礎資料を得ることを目的として、本調査が実施されることになった。

3月15日に東西5m、南北15mの調査区を設定して調査を開始した。調査区は敷地西半分にあった旧建物の攪乱を避けて、敷地の東北部に設定されていた。しかし、当初、調査区外になるよう設計されていた鉄道のレールを利用した土留め杭が調査区の中に南北に並んで見つかったため、調査区西部の幅約1mが旧建物の攪乱内に当たっていることが判明した。そのため、幅1mの範囲は実質的な調査は行えず、かつ、残りの幅4mで地表下3.5mの深さまでを広く平面調査することは困難になった。一方、地表下1.4m以下に近世の遺物包含層が幅4mの中に良好に残存していることも明らかとなった。そこで、当初計画の調査開始深度を少し上げ、地表下1.4mから下位(概ね後述する第2d層以下)を調査することにした。

調査は後述する重機掘削後の第2層内任意面と、以下、人間の生活面(活動面)である、第3層上面、第3b層上面、第4層上面、第6層上面を精査し、断面の記録の後、3月26日に下位層確認の掘削を部分的に行い、調査を終了した。

本報告で示した座標は、現場で作成した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標である。また、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)であり、TP±〇mと記した。

本報告の遺物に関する記述は、調査課学芸員の小田木富慈美が担当した。

また、本報告の3)自然科学分析は、令和3年度科学研究費助成事業基盤研究(C)(一般)「大阪中心部における5～17世紀の治水・水防遺構と都市形成過程の研究」(代表 南秀雄)の一部を使用し、株式会社古生態研究所(担当:辻本裕也氏)に委託した。

## 2)調査の結果

### i)層序

調査地が南面する北久宝寺通は、調査地のある街区の西端でTP+4.7m、東端でTP+4.0mであり、東横堀川に向かって緩やかに傾斜する。調査区は建物解体後の整地面であり、TP+4.5～4.6mであった。地表直下の現代盛土・攪乱層を第0層とし、その下位に分布する地層を、部分的な深掘りを含めてTP-0.4mまで、上位から下位へ第1層～第7層に区分し、必要に応じて細分した。なお、地層の層厚は微妙に変化するため、詳細な層厚値が必要な箇所以外は、5cm刻みの概数で示した。

第0層はコンクリートブロック、煉瓦、漆喰、焼土塊を含み、砂-礫質シルトが混在する現代の盛土層および攪乱埋土層で

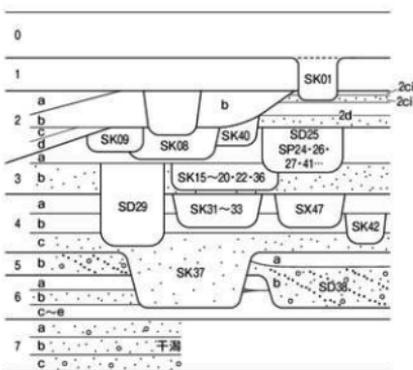


図3 地層と遺構の関係図

あり、層厚70～110cmであった。

第1層は炭、焼土塊、瓦、礫、砂などが混在する整地客土層であり、層厚は20cm前後であった。大阪空襲の焼跡片付けの整地による。

第2層は4セットの盛土・整地層で、全層厚は最大55cmである。いずれのセットも下部は一気の客土で厚い盛土層、上部は砂薄層や砂質シルト薄層の細互層の薄い整地層からなり、下部の第2d層から上部の第2a層が、下位層を一部削りながら、南の高所から北の低所へ嵩上げ前進するように客土される。第2層上面は調査区南部がTP+3.8m、北部が3.7mでほぼ平坦である。厚層の盛土層と薄層の整地層のセットは、豊臣後期以降の大坂城跡・大坂城下町跡でしばしば認められる一般的な盛土嵩上げ工法である。

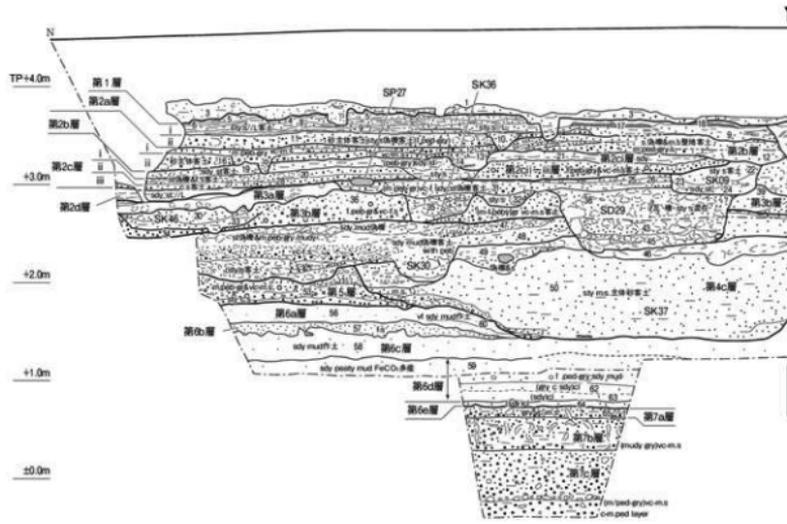
第2a層上部の第2a i 層は黒褐色(2.5Y3/2)シルト質砂薄層や明黄褐色(2.5Y6/6)・黄褐色(2.5Y5/3-4)・暗灰黄色(2.5Y4/2)を呈する各層厚5cm未満～10cm程度の泥薄層どうしの整地細互層であり、炭薄層を挟む。同下部の第2a ii 層は礫を含み黄褐色(2.5Y5/3)を基色とするシルト質砂礫質の砂客土層で、層厚は15cm以下であった。礫は細粒中礫が目立つ。第2a i 層上面には瓦捨て穴があり、調査区南部では、同層上面～上部数cmが黒褐色(10YR2/2)を呈して著しく焦土化しており、1945年3月13日深夜の大阪空襲により被災したものとみられる。

第2b層上部の第2b i 層は褐色(10YR4/4)中粒中礫～細礫質極粗粒～中粒砂層とシルト質砂整地薄層であり、層厚は10cm以下であった。同下部の第2b ii 層は暗灰黄色(2.5Y4/2)極粗粒～中粒砂主体の中粒中礫～細礫が混じる客土層であり、層厚は10cm未満であった。第2b ii 層上面には小規模の土壌が複数分布した。

第2c層上部の第2c i 層は、中礫～細礫を含む黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルトの客土層であり、層厚は10cm以下であった。同層中部の第2c ii 層はシルト偽礫と細粒砂が混在する客土層であり、層厚は5cm前後であった。同層下部の第2c iii 層は、細粒中礫～細礫混り極粗粒～中粒砂の客土層であり、層厚は20cmであった。第2c i 層上面には、中・小規模の土壌が複数分布した。

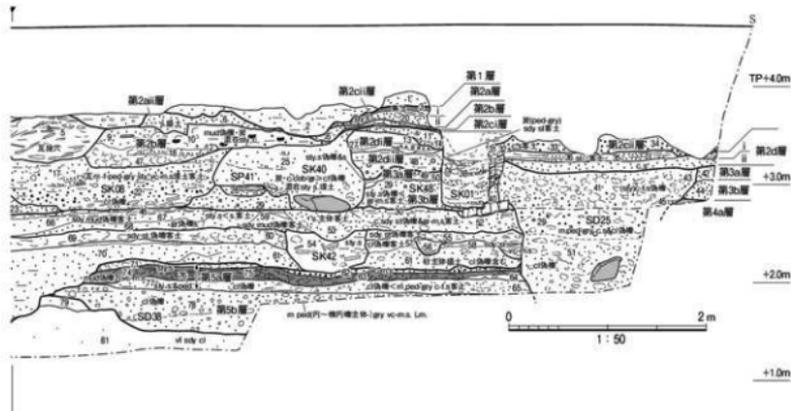
第2d層の上部・第2d i 層は、褐色(10YR4/6)シルト薄層・暗灰黄色(2.5Y4/2)細礫質粗粒砂薄層などからなる客土細互層であり、層厚20cm以下で調査区南部に分布する。同層下部の第2d ii 層は、にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒中礫～細礫をわずかに含む砂質シルト層であり、最大層厚は25cmであった。人力で調査した第2層の下半部(概ね第2d層)からは土師器・肥前陶器・肥前磁器などの17世紀代の遺物が出土したが、第2層上半部(概ね第2a～c層)の遺物は、深い遺構を除いて採取できていない。

第3層もまた盛土・整地層のセットであり、全層厚は50cmである。上部の第3a層はわずかに中粒中礫質極粗粒砂と細粒砂質シルト偽礫からなり、層厚は10～15cmであった。下部の第3b層はにぶい黄色(2.5Y6/4)細粒中礫～細礫質極粗粒砂～細粒砂層であり、層厚は30～35cmであった。第3a層上面はTP+3.0m～3.2mの南高低であり、SK09・SD25他が分布し、調査区北部には浅い凹地に層厚15cmの砂質シルトの客土細互層を伴った。また、第3b層上面にもSD29・SK46などが分布した。第3層には土師器・瓦質土器・丹波焼・備前焼・肥前陶器・肥前磁器・瓦・加



- |                       |                       |                        |                       |
|-----------------------|-----------------------|------------------------|-----------------------|
| 1 : 黒褐色 (10YR2/2)     | 16 : にぶい黄褐色 (10YR5/3) | 31 : 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) | 46 : 黄褐色 (2.5Y5/4)    |
| 2 : 黒色 (2.5Y2/1)      | 17 : 黒色 (2.5Y2/1)     | 32 : 黄褐色 (2.5Y5/4)     | 47 : 暗灰黄色 (2.5Y4/2)   |
| 3 : 暗褐色 (10YR3/3)     | 18 : 黒褐色 (2.5Y3/1)    | 33 : 暗灰黄色 (2.5Y4/2)    | 48 : オリーブ黒色 (5Y3/1)   |
| 4 : 明黄褐色 (2.5Y6/6)    | 19 : オリーブ褐色 (2.5Y4/3) | 34 : 褐色 (10YR4/4)      | 49 : オリーブ褐色 (2.5Y4/3) |
| 5 : 黒褐色 (2.5Y3/2)     | 20 : 黄褐色 (2.5Y5/3)    | 35 : 暗灰黄色 (2.5Y4/2)    | 50 : オリーブ褐色 (2.5Y4/3) |
| 6 : 黄褐色 (2.5Y5/4)     | 21 : 灰オリーブ色 (5Y5/3)   | 36 : にぶい黄色 (2.5Y6/4)   | 51 : 暗灰黄色 (2.5Y4/2)   |
| 7 : 黄褐色 (2.5Y5/3)     | 22 : 黄褐色 (2.5Y5/4)    | 37 : オリーブ褐色 (2.5Y4/3)  | 52 : 黄褐色 (2.5Y5/3)    |
| 8 : 黒褐色 (2.5Y3/2)     | 23 : 黄灰色 (2.5Y4/1)    | 38 : 黄褐色 (2.5Y5/3)     | 53 : 暗灰黄色 (2.5Y5/2)   |
| 9 : 黄褐色 (2.5Y5/3)     | 24 : 黄褐色 (2.5Y5/4)    | 39 : にぶい黄色 (2.5Y6/4)   | 54 : 黄褐色 (2.5Y5/3)    |
| 10 : 暗灰黄色 (2.5Y4/2)   | 25 : 黄褐色 (2.5Y5/3)    | 40 : 黄褐色 (2.5Y5/3)     | 55 : 暗灰黄色 (2.5Y5/2)   |
| 11 : 黄褐色 (2.5Y5/3)    | 26 : 黄褐色 (2.5Y5/4)    | 42 : 暗灰黄色 (2.5Y4/2)    | 56 : 灰色 (5Y4/1)       |
| 12 : 褐色 (10YR4/4)     | 27 : 黄褐色 (2.5Y5/3)    | 43 : 黄褐色 (2.5Y5/3)     | 57 : 灰色 (7.5Y4/1)     |
| 13 : にぶい黄褐色 (10YR5/4) | 28 : オリーブ褐色 (2.5Y4/3) | 44 : 灰オリーブ色 (5Y5/2)    | 58 : 灰 (7.5Y4/1)      |
| 14 : オリーブ褐色 (2.5Y4/3) | 29 : オリーブ褐色 (2.5Y4/3) | 45 : オリーブ褐色 (2.5Y4/3)  | 59 : オリーブ黒色 (5Y3/1)   |
| 15 : 暗灰黄色 (2.5Y4/2)   | 30 : オリーブ褐色 (2.5Y4/4) |                        | 59 : 黄灰色 (2.5Y4/1)    |

線の太さと種類	岩相の基本パターン	岩相パターンの組合せ例
明瞭な層理 明瞭な葉理 不明瞭な層理・葉理 相前境界	礫 粗粒砂 中粒砂 細粒砂	シルト 粘土 暗色帯 微細な植物片ラミナ 偽礫 (砂質シルトの偽礫)
		砂礫 シルト質砂礫 シルト質砂 砂質シルト 粘土質シルト



- |                              |                                   |                                      |
|------------------------------|-----------------------------------|--------------------------------------|
| 1: 暗褐色(10YR3/3)              | 29: にぶい黄色(2.5Y6/4)                | 56: にぶい黄色(2.5Y6/3)と暗灰黄色(2.5Y5/2)(粘土) |
| 2: 黒褐色(7.5YR3/2)             | 30: 褐色(10YR4/6)                   | 57: 灰オリーブ色(5Y5/2)                    |
| 3: 黒褐色(10YR2/2)              | 31: にぶい黄褐色(10YR4/3)               | 58: オリーブ黒色(5Y3/1)                    |
| 4: 暗褐色(10YR3/4)              | 32: にぶい黄褐色(10YR5/4)               | 59: 暗灰黄色(2.5Y5/2)                    |
| 5: 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)          | 33: 黄褐色(10YR5/6)                  | 60: オリーブ褐色(2.5Y4/3)                  |
| 6: 浅黄褐色(10YR8/4)             | 34: 褐色(10YR4/4)                   | 61: 黄褐色(2.5Y5/3)                     |
| 7: 褐灰色(10YR6/1)と黄褐色(10YR5/8) | 35: 暗灰黄色(2.5Y4/2)とにぶい黄褐色(10YR5/4) | 62: 灰白色(2.5Y8/2)                     |
| 8: 暗褐色(10YR3/4)              | 36: 褐色(10YR4/6)                   | 63: オリーブ黒色(5Y3/1)                    |
| 9: にぶい黄褐色(10YR4/3)           | 37: にぶい黄褐色(10YR4/3)               | 64: にぶい黄褐色(10YR4/3)                  |
| 10: オリーブ褐色(2.5Y4/3)          | 38: 黒褐色(10YR2/3)                  | 65: にぶい黄色(2.5Y6/3)                   |
| 11: オリーブ褐色(2.5Y4/4)          | 39: にぶい黄褐色(10YR6/4)               | 66: にぶい黄褐色(10YR5/3)                  |
| 12: にぶい黄褐色(10YR4/3)          | 40: にぶい黄褐色(10YR7/4)               | 67: 褐色(10YR4/4)                      |
| 13: 暗灰黄色(2.5Y4/2)            | 41: にぶい黄褐色(10YR4/3)               | 68: 灰黄褐色(10YR5/2)                    |
| 14: 黄褐色(10YR8/6)             | 42: 褐色(10YR4/6)                   | 69: 黄褐色(2.5Y5/3)                     |
| 15: オリーブ褐色(2.5Y4/3)          | 43: オリーブ褐色(2.5Y4/4)               | 70: 黄褐色(2.5Y5/3)                     |
| 16: 黒褐色(2.5Y3/2)             | 44: 黄褐色(10YR5/6)                  | 71: 暗灰黄色(2.5Y5/2)                    |
| 17: 灰黄褐色(10YR5/2)            | 45: オリーブ褐色(2.5Y4/3)               | 72: 暗灰黄色(2.5Y5/2)                    |
| 18: オリーブ褐色(2.5Y4/3)          | 46: 黒褐色(2.5Y3/2)                  | 73: にぶい黄色(2.5Y6/4)                   |
| 19: 明黄褐色(2.5Y6/6)            | 47: オリーブ褐色(2.5Y4/4)               | 74: 灰黄色(2.5Y4/1)                     |
| 20: 淡黄色(2.5Y8/4)             | 48: にぶい黄褐色(10YR4/3)               | 75: オリーブ黒色(5Y3/1)63と同じ               |
| 21: オリーブ褐色(2.5Y4/4)          | 49: にぶい黄褐色(10YR5/3)               | 76: 黒褐色(10YR3/2)                     |
| 22: にぶい黄褐色(10YR4/3)          | 50: 黄褐色(2.5Y5/3)                  | 77: にぶい黄色(2.5Y6/3)65と同じ              |
| 23: 黄褐色(2.5Y5/6)             | 51: 黄褐色(2.5Y5/3)                  | 78: にぶい黄褐色(10YR5/4)                  |
| 24: 暗灰黄色(2.5Y5/2)            | 52: 暗灰黄色(2.5Y4/2)                 | 79: 灰黄色(2.5Y4/1)                     |
| 25: にぶい黄褐色(10YR4/3)          | 53: 黄褐色(2.5Y5/3)                  | 80: 灰色(5Y4/1)                        |
| 26: にぶい黄色(2.5Y6/4)           | 54: 暗灰黄色(2.5Y5/2)                 | 81: オリーブ黒色(5Y3/1)                    |
| 27: 褐色(10YR4/4)              | 55: 黄褐色(2.5Y5/3)                  |                                      |
| 28: 赤褐色(5YR4/8)              |                                   |                                      |

#### 断面図の記載略号

礫/礫質: grv/grvy 細礫/細礫質: gr/grlr (gry) 砂/砂質: s/sdy シルト/シルト質: st/sty 粘土/粘土質: cl/clty 泥/泥質: mud/mdy、極粗粒/粗粒/中粒/細粒/極細粒: vc/c/m/l/vf、大型/小型: L/S (小型大礫: Scob.)

変理: L 平行/斜交: // /x (細粒砂とシルトの平行ラミナ: ms-st/L) 平板型/トラフ型: planar/trough  
正級化/逆級化: ↑N/↑R、上方粗粒化/上方粗粒化: \F/∇C、泥炭/泥炭質: peat/peaty 火山灰: ash 火山灰質(凝灰質): tuffaceous スコリア: sc 軽石(浮石・バミス): pm 褐鉄鉱(リモナイト): Lm マンガン: Mn 藍鉄鉱: Vv 図中の ( ) 内は少量を示す(例えば、ややシルト質(sty))

図4 東陸地層断面図

工骨など17世紀後葉の遺物を含む。

第4層も盛土・整地層であるが、第2・3層ほど整地層の単位が明瞭ではない。3セットが区分できる。上部の第4a層は暗灰黄色(2.5Y4/2)の細粒中礫～細礫混りて泥質粗粒～中粒砂が主体であり、全層厚は20～25cmであった。調査区の南半部北縁から約10m付近を中心に南北両側に緩く傾斜する層厚5～20cmの客土単位が累重する。南側は上半部だけが泥質となる。中部の第4b層も第4a層と類似するが砂質シルト偽礫を多量に含有し、黄褐～オリブ褐色(2.5Y5/4-4/3)を呈する。層厚は15～40cmであった。下部の第4c層は、SK37の埋土とその南外側に層厚15～20cmで客土された泥偽礫を含む黄褐色(2.5Y5/3)シルト質中粒砂主体の粗粒～細粒砂層である。第4a層上面はTP+2.45m～2.85mの南高北低であり、SK31・34・SX47などが分布した。また、第4b層上面には、瓦捨て穴SK42ほか分布した。第4層は中国産青花・肥前磁器・肥前陶器・丹波焼・瀬戸美濃焼・土師器・瓦・砥石など豊臣後期～17世紀中葉の遺物を含む。

第5層は河川の氾濫による砂礫層と整地層のセットであり、全層厚は30cmであった。上部の第5a層は極粗粒～中粒砂薄層、黒褐色粘土偽礫・粗粒砂層、粘土偽礫を含む中粒中礫～細礫質粗粒～細粒砂層などからなる整地層であった。黒褐色粘土偽礫・粗粒砂層は古土壤に由来するとみられ、土色が目立つので図4ではグレー表示した。同下部の第5b層は暗灰黄色(2.5Y5/2)を基色とする砂礫であり、SD38を埋積する。分級はやや悪いが、礫は中粒中礫～細礫、砂は極粗粒～中粒砂が主体であり、北壁にはトラフ型クロスラミナが、西壁には南へ緩く傾斜するフォーセットラミナが認められ、古流向は北から南へである。

第6層は泥主体の地層である。上位より下位へ、下限が不規則で塊状の灰色(5Y4/1)極細粒砂質泥層(第6a層、層厚15cm；水田作土層とみられる)、平行ラミナの認められる同色細粒砂層(第6b層、層厚5～15cm；氾濫堆積層)、同色砂質泥の偽礫密集層(第6c層、層厚25cm)、オリブ黒色(5Y3/1)泥炭質砂質泥層(第6d i層、層厚15cm)、黒褐色(2.5Y3/1)細粒中礫～細礫混り砂質泥層(第6d ii層、層厚10cm)、やや締まりの良い黒褐色(2.5Y3/1)わずかに細礫・砂質粘土層(第6d iii層、層厚10cm)、オリブ黒色(5Y3/1)わずかに砂質粘土層(第6d iv層、層厚10cm)、黒褐色(2.5Y3/1)わずかに砂質粘土層(第6e層、層厚5cm)が重なる。第6b層は層相から小規模の氾濫堆積層とみられる。第6層からは古代～中世の遺物のほか、還元土壤に生成する炭酸第1鉄の団塊も多産した。

第7層は黒褐色(2.5Y3/1)で泥質砂主体の干潟堆積層である。上位から下位へ、やや泥質な極粗粒～中粒砂(第7a層、層厚10～15cm)、泥質・細礫質粗粒～中粒砂層(第7b層、層厚30～35cm)、中粒中礫～細礫をわずかに含む極粗粒～中粒砂層(第7c層、層厚80cm以上)が重なり、TP-0.1m付近には中礫が並ぶラミナが認められた。TP-0.4mまで確認した。また、第7a・b層には砂質泥が埋める巢穴化石(直径3cm前後)が認められ、第7b層は生物攪拌が顕著であった。第7層の年代を絞りこむために、第7b層中の木片を用いて放射性炭素年代を測定し、弥生時代中期前葉～中葉の年代を得た。また、第7層の堆積環境を把握するために、第7b層の微化石分析を実施し、汽水域の干潟であったと考え得る証拠が見つかった(詳細は後述)。

## ii) 遺構と遺物

### a. 大坂本願寺期～豊臣前期の16世紀(第6層堆積・耕起期～第5層上面活動期)

第6b層と第6c層からは図6に示すような16世紀後半以降の漆器椀1、箱の一部とみられる2、曲物などの木質遺物が出土し、第6d i層からは瓦器椀や土師器甕などの古代～中世の遺物が出土した。

第6a層は岩おおよび微化石分析結果から水田作土層と考えられ、小規模の氾濫堆積層(第6b層)を挟んで下位の第6c層も類似した層相から作土層と推定できる。ただし、ともに畦畔等の水田の証拠は見つかっていない。

第6a層上面のSD38は長さ8.3m以上、幅2.3m以上、深さ0.5m前後の溝である。検出した幅は半分以下と思われる。調査区北部で検出した東肩は南北を向き、中央部東半で屈曲して東西を向く。南北溝が南でL字に曲がるか、南北溝と東西溝がT字に交わるか、であろうと思われる。東西部分が南北部分より少し深い。埋土は一連の第5b層の砂礫層である。

第5a層上面のSK37は長さ3.7m以上、幅1.0m以上、深さ0.8mの土壌である。東に広がる。第5・6層を掘り込むが、SD38で削られなかった第6層の厚い箇所を掘削していること、機能時堆積層が無く、掘削直後に埋め立てられていることから、第6層の泥の採掘を目的としたと考えられる。埋土は第4c層の砂客土である。

### b. 豊臣後期～徳川期の17世紀中葉(第4c層造成期～第4a層上面活動期)

SK30・42は第4b層上面の土壌である。SK42はトレンチ壁面で確認した見かけの長径が0.8m、深さ0.4mの土壌である。埋土は多数の瓦片と極粗粒～中粒砂、およびシルト質砂が混在する。瓦捨て土層とみられる。SK30は試掘堀に一部掛かって検出した土壌であり、平面が隅丸長方形の東西0.9m、南北0.8m以上、深さは0.4mあるが、北側の肩は低い。埋土は中礫サイズの砂質泥偽礫主体の第4a層である。底付近から複数の土師器皿が出土しており、6～8を図示した(図6)。いずれも底部中央に圏線状のナデを施し、灯火具として使用している。

第4a層上面にはSK31・34・SX47などが分布した。SK31は長径1.7m・短径1.4mの浅い土壌である。底近くの機能面上に割れ瓦が敷かれており、水利用の施設とみられる(図版4)。備前焼・肥前陶器・肥前磁器・平瓦などが出土した。SK34は西壁沿いに検出した東西に肩がある土壌状の落ちで、深さは0.1mである。埋土から出土した図6-9は奈良産の瓦質土器甕である。SX47は0.1mの浅い溝状の凹みに備前焼大甕の体部の破片を立てて縦列に並べたもので、甕の上端は凹み上端より上に出ている。埴列建物の埴に類似した建物基礎の防湿施設の一部とみられる(図版4下)。備前焼大甕は17世紀初頭まで付近に存在した油問屋から廃棄されたものを再利用した可能性がある[菅原正明1992]。

3・4は第4b層、5は第4層の出土遺物である(図6)。3は豊臣後期の肥前陶器皿で、胎土目痕が残る。4・5は肥前磁器の碗で、17世紀前半に属する。

### c. 徳川期17世紀後半(第3b層造成～第2d層上面活動期)

SD29・25・SK17～23・48は第3b層上面の遺構である。SD29は調査区北部中央を東西方向に横切る幅1.9～2.1m、深さ0.6m前後の溝である。埋土の下部15cmが機能時の偽礫泥層、上部が瓦・礫・

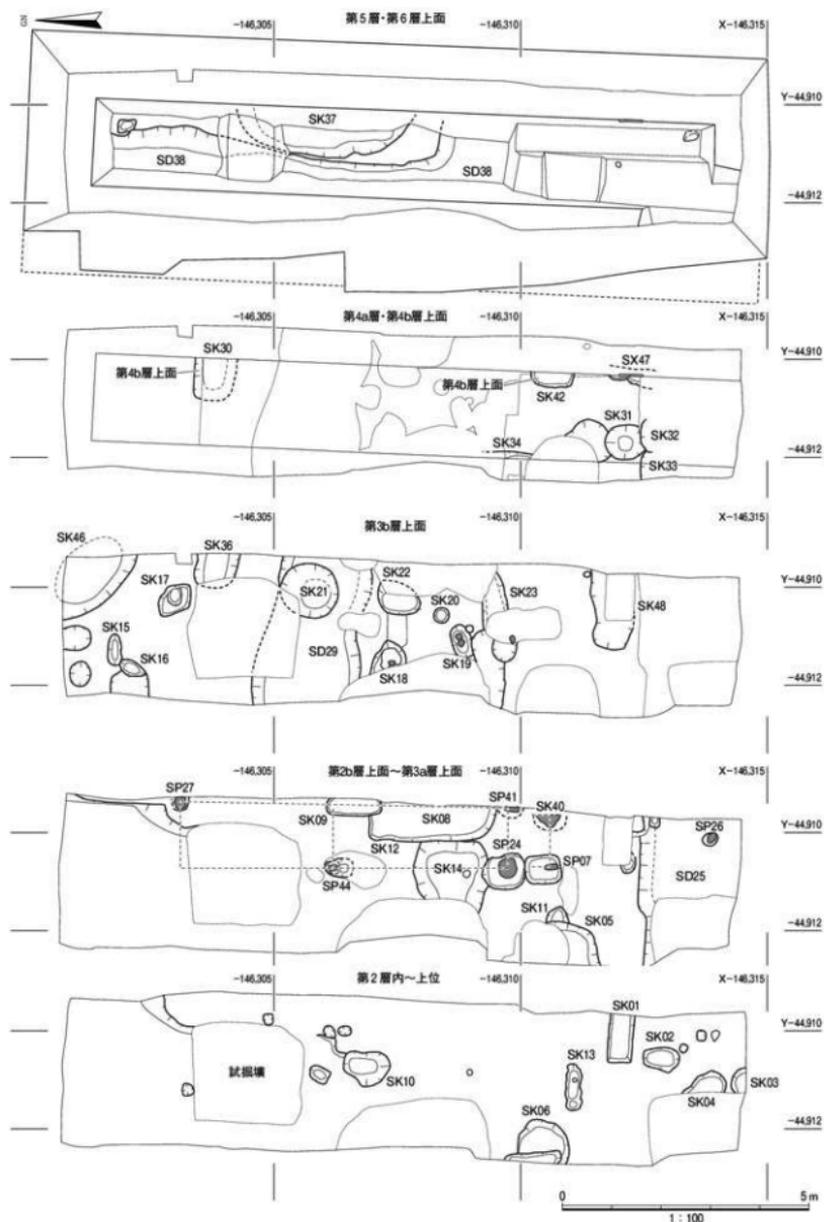


図5 第2b層以上の任意面、第2b層上面～第3a層上面、第3b層上面、第4a層、第4b層上面、第5層、第6層上面遺構平面図

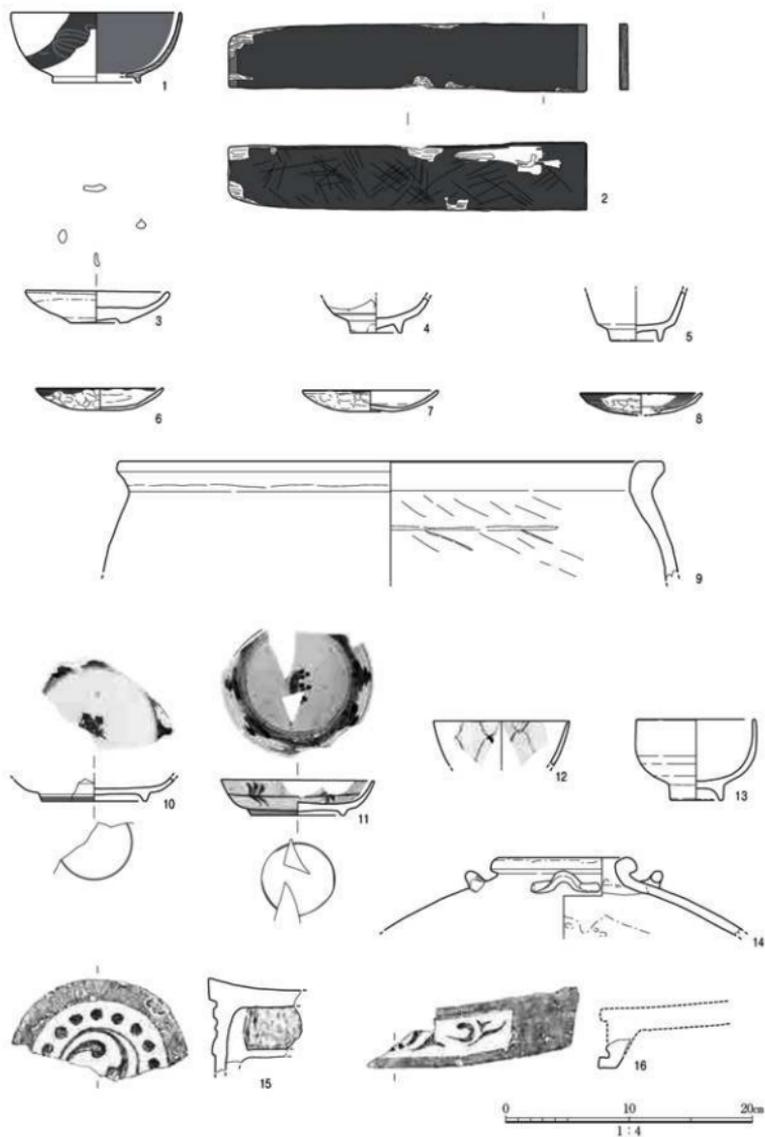


图6 出土遗物实测图

第6c层(1·2)、第4b层(3·4)、第4层(5)、SK30(6~8)、SK34(9)、SK23(10)、第3b层上部(11~16)

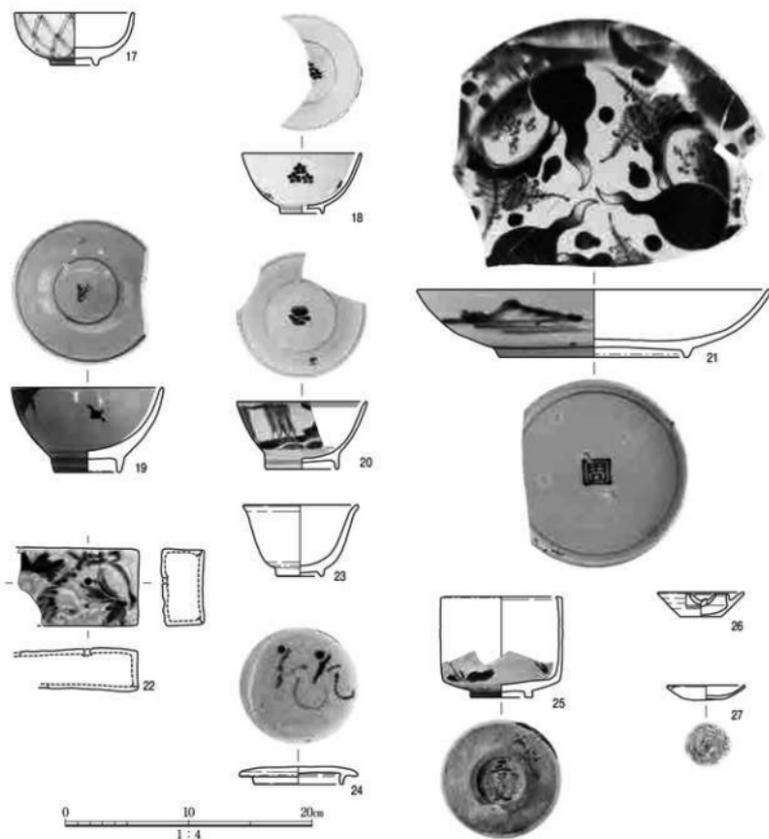


図7 出土遺物実測図  
SK01(17~27)

シルト質砂が混在する埋立て客土である。その他、第3b層上面には大小の土塊や凹みがある。SD29の埋め立て後に掘られたSK21は直径1.1m、深さ0.3mの土塊であり、これとSK17、SK20・22などは南北に揃うように見えるが、直線的ではない。SK22の南に位置するSK23からは肥前磁器皿10が出土した(図6)。17世紀末に属するものであろう。また、SK18とSK19の底には根石らしい礫があるが街区方向には並ばない。SD25は調査地南端で検出した東西に延びる溝である。幅2.0m以上、深さ1.3m以上あり、底は未確認であるが、規模の大きさから、敷地境を画する溝であった可能性がある。埋土は細礫質粗粒砂と粘土偽礫が混在する客土であり、礎石由来と思われる巨礫も含まれる。SK48は長さ21.6m以上、幅0.9mの浅い土塊であり、第3a層が埋める。これらのうち、SD29・SK22および第

3b層から骨加工関連の遺物が出土している(図版5-31~34)。

11~16は第3b層上部から出土した。11・12は肥前磁器の染付皿と碗である。13は肥前陶器の呉器手碗である。14は中国南方産の施釉陶器四耳壺である。15は三巴文軒丸瓦、16は唐草文軒平瓦である。以上は17世紀後葉に属する。

SP07・24・26・27・41・44は第2d層上面または第3a層上面の礎石裾付穴とみられるビットであり、同じくSK40は礎石らしい礫を下底に含む土壌である。第3a層上面のSP24は長径0.9m、短径0.7m、深さ0.1mの隅丸方形の礎石裾付穴で、一辺40cmで15cm程度の厚みのある礎石をもつ。同じくSP27は見かけの長径が0.5m、深さ0.1mの柱穴で、礎石は一辺20×30cmで厚み7cmの礎石をもつ。掘形が埋められた後、さらに層厚3cmの偽礫混り粗粒砂層で整地されるが、礎石は高さ約2cm露出している。調査区壁面で検出したSP27-41間が6.8m、SP24-44間が3.4mで、両組はほぼ平行しており、一連の建物施設を構成した可能性がある。第2d層上面のSP07の礎石とSK40底の礎石らしい礫は、SP24・41の0.8m南にあり、同一の施設の建て替えか、拡張を構成した可能性がある。並びがずれる南側のSP26は別施設であろう。

SK40の埋立て後に掘られたSK08・09も第2d層上面の遺構である。SK08は長さ2.6m、幅0.9m以上、深さ0.6mの土壌である。埋土は瓦を少量含む中粒~細粒中礫~細礫質シルト質極粗粒~中粒砂の客土であり、底付近に扁平な粘土偽礫を多数含む。SK09はSK08埋立て後に掘られた長さ1.1m、幅0.4m(推定)、深さ0.4mの土壌である。埋土は砂質偽礫客土である。SK08・09とも用途は不明である。

#### d. 徳川期18世紀(第2c層造成~第1層上面活動期)

第2c層以上のSK06・13は埋土が砂と炭が混在する土壌である。SK06には肥前陶磁器碗や土師器皿の破片、金属片などが含まれ、SK13には巴文軒丸瓦が含まれる。いずれも焼け痕はなく、埋土とともに他所から客土されたものである。

SK01は第1層上面の幅0.5m、長さ1.0m以上、深さ0.8mの細長い土壌であり、下部は第3層に達している。埋土は炭混りのシルト質砂であり、18世紀末~19世紀初頭の陶磁器類・土人形・骨・貝など多様な遺物が含まれる(図7)。17~22は肥前磁器の染付である。17~20は碗、21は大型の皿、22は水滴である。23は瀬戸美濃焼の端反碗、24は瀬戸美濃焼の蓋である。25は関西系陶器の火入れで、底部外面に「三ッ良」の墨書を施す。26は関西系陶器の灯明受皿、27は土師器の灯明皿である。このほか、漆器加工に用いたとみられる紋紙(図版5-28)、乾燥した朱漆液(図版5-29・30)が出土した。当該期に近隣で漆器加工を行っていたことを示す重要な資料である。層的には新しい遺構であるが、遺物のいくつかは下位層の遺構、例えばSK01が重なる第3b層上面のSK48から遊離した可能性もある。

### 3)自然科学分析

#### i)放射線炭素年代測定

第6b層から出土した炭(試料R80)、第7b層(試料R89)から抽出した植物遺体の2点について実施した。



図8 調査地の層序・試料採取位置

第6b層の炭は、樹皮が残る16年分の年輪を有するミカン割状の丸木で、硬く焼き締まっている。広葉樹のモチノキ属に同定された。モチノキ属は、山地や丘陵地等に生育する常緑あるいは落葉の低木～高木であり、木材は比較的重硬な種類が多い。最外年輪の形成状況は、散孔材のため、道管径の変化等で形成状況を判別することが困難であるが、他の年の年輪と比べても最外部の道管径と同様の径になっていること、観察した範囲で形成中の組織が認められないこと、樹皮がしっかりと残っており剥離しないこと等から、木材中の水分含量が少ない冬場に採集された可能性がある。

第7b層から抽出した植物遺体はイネ科の桿に同定された。破片で破損が激しいが、試料の残存状況から、直径が5～8mmで、桿が木質化する種類と考えられる。候補としては、径の細いササ類やヨシ属、木質化はしないが、桿が大きいススキ属などが挙げられる。

試料は超音波洗浄、有機溶剤処理、酸・アルカリ・酸洗浄の前処理を行い、調整後、加速器質量分析計を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別

効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。<sup>14</sup>C年代の暦年較正にはOxCal4.4(較正曲線データ: IntCal20)を使用した。なお、1 $\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 $\sigma$ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。

表1に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比( $\delta^{13}C$ )、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代、暦年較正結果を示す。また各試料の較正年代確率密度分布図を図9に示す。

第7b層(試料R89): 植物遺体は、<sup>14</sup>C年代で2166 $\pm$ 19yrBPを示す。暦年較正年代は、いずれの試料も較正曲線の凹凸が著しい範囲にあたり絞り込むことが難しく、2 $\sigma$ で354–283 cal BC (46.4%)、230–150 cal BC (47.9%)、131–121 cal BC (1.1%)と幅のある年代を示す。[小林謙—2009]に基づく大阪付近(河内地方)の考古年代と実年代の関係をみると、弥生時代前期(河内I期)が前7世紀(前600年代後半)～前4世紀(前380～350年頃)、弥生時代中期(河内II～IV期)が前4世紀(前350年頃)から紀元前後頃、と推定されている。これに基づく、今回の年代値は概ね弥生時代中期前葉～中葉に相当する。

第6b層(試料R80): 木炭の年代値は319 $\pm$ 18rBPを示す。暦年較正年代は、較正曲線の凹凸が著しい範囲にあたり絞り込むことが難しく、2 $\sigma$ で1499–1600 cal AD (76.7%)、1615–1642 cal AD

表1  $^{14}\text{C}$ 年代値および暦年校正結果

R番号	層位	試料状態	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP)	暦年校正用 年代 (yrBP)	暦年校正結果 (cal BC/AD)		Code No.
						1 $\sigma$	2 $\sigma$	
R80	第6層	炭化材 (竹/片炭)	-28.31 ± 0.19	320 ± 20	319 ± 18	1521-1531 cal AD (9.9%)	1499-1600 cal AD (76.7%)	PLD- 43928
						1538-1585 cal AD (46.1%)	1615-1642 cal AD (18.8%)	
						1623-1636 cal AD (12.3%)		
R89	第7層	植物遺体 (材料)	-27.91 ± 0.17	2165 ± 20	2166 ± 19	346-316 cal BC (33.0%)	354-283 cal BC (46.4%)	PLD- 43929
						204-172 cal BC (35.3%)	230-150 cal BC (47.9%)	
							131-121 cal BC (1.1%)	

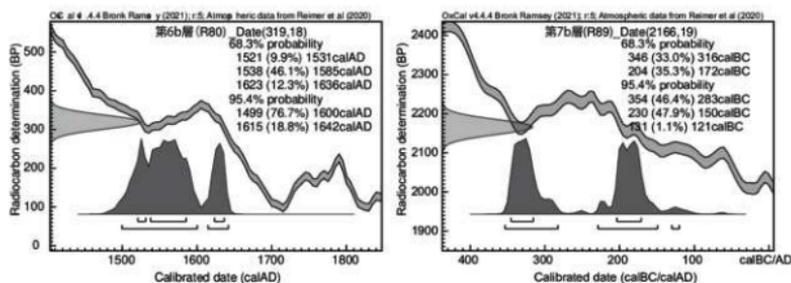


図9 較正年代確率密度分布

(18.8%)と幅のある年代を示す。

## ii) 微化石分析の目的と試料概要

発掘調査時の層序学的初見を踏まえて、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を実施し、調査地が位置する東横堀川前身の堤間低地の感潮堆積層(第7層)と、その後、河川及び海との連絡が途絶えた後の湿地堆積層とこれを耕起した作土層(第6層)にかけての古環境変遷情報を得ることを目的とした。本節では、各分析の分析方法と結果を記載し、考察は4)古環境・古植生の推定で述べる。

微化石分析は、調査時に採取された堆積物試料のうち、生物擾乱の顕著な泥質礫質砂の第7層、泥からなる第6e層、細粒砂質泥からなる第6a層について実施する(図8)。

## iii) 珪藻分析

### a. 方法

湿重約5g、過酸化水素水と塩酸による試料の泥化と有機物の分解・漂白を行い、分散剤を加え蒸留水を満たし放置後、上澄み液中の浮遊した粘土分を除去する。この操作を4~5回繰り返した後、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させ、ブリュウラックスで封入した永久プレパラートを作製する。検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数する。結果は、産出種類・個数・環境指標種群と合わせて一覧表として示す。

### b. 結果

分析結果を表2に示す。分析を実施した全層準で珪藻化石の産出数が少なく、保存状態は、壊れた

殻が多く、一部の殻に溶解の痕跡が認められるため、不良～極不良である。各層準から産出種の生態性等について以下に示す。

第7b層(試料R89)：わずかに産出した分類群は、汽水生種を主にして、海水～汽水生種および淡水生種を伴う種群で構成される。産出した種は、汽水生種の *Achnanthes brevipes*、*Nitzschia granulata* 等である。

第6e層(試料R91)：25個体産出した。産出した分類群は、淡水生種を主にして、汽水生種および淡水～汽水生種を伴う種群で構成される。産出した種は、淡水生種で流水不定性種の *Amphora ovalis* var. *affinis*、淡水生種で不明種の *Pinnularia* spp.等である。

第6a層(試料R95)：8個体産出した。産出した分類群は、淡水生種のみで構成される。産出した種は、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia borealis* 等である。

#### iv) 花粉分析

##### a. 方法

試料(湿重量約3-4g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、

表2 珪藻分析結果

種 類	生態性			環境 指標種	層位		
	塩分	pH	流水		6a層	6e層	7b層
<i>Diploneis interrupta</i> (Kuetz.) Cleve	Euh-Meh			B	-	-	1
<i>Diploneis</i> spp.	Euh-Meh				-	-	1
<i>Achnanthes brevipes</i> C. Agarth	Meh			D1	-	-	2
<i>Finnanosis suensis</i> (Grunow) H. Okuno	Meh			E1,E2	-	1	1
<i>Nitzschia</i> spp.	Meh				-	-	3
<i>Nitzschia coarctelliformis</i> Grunow	Meh			E1	-	-	1
<i>Nitzschia granulata</i> Grunow	Meh			E1	-	-	2
<i>Nitzschia</i> spp.	Meh				-	-	1
<i>Anomoeoneis sphaerophora</i> (Kuetz.) Pfitzer	Ogh-Meh	al-bi	ind	D,E	-	2	-
<i>Amphora ovalis</i> var. <i>affinis</i> (Kuetz.) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	4	-
<i>Amphora</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-
<i>Diploneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1
<i>Frugilaria</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	2	-
<i>Grossigma</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	3	2	-
<i>Pinnularia bonali</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	2	-	-
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	11	-
<i>Stauroneis phoenicenteros</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	N,O,U	-	1	-
<i>Stauroneis phoenicenteros</i> var. <i>signata</i> Meister	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	1	-
<i>Stauroneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-
海水生種					0	0	0
海水～汽水生種					0	0	2
汽水生種					0	1	10
淡水～汽水生種					0	2	0
淡水生種					8	22	1
珪藻化石総数					8	25	13

#### 凡例

塩分：塩分濃度に対する適応性    pH：水素イオン濃度に対する適応性    流水：流水に対する適応性  
 Euh-Meh：海水生種-汽水生種    al-bi：真アルカリ性種    l-ph：好止水性種  
 Meh    汽水生種    al-il：好アルカリ性種    ind：流水不定性種  
 Ogh-Meh：淡水生種-汽水生種    ind    pH不定性種    unk：流水不明種  
 Ogh-ind：貧塩不定性種  
 Ogh-unk：貧塩不明種

#### 環境指標種

N：内湾指標種    D1：海水砂質干潟指標種    E1：海水泥質干潟指標種    E2：汽水泥質干潟指標種(以上は小杉, 1988)  
 B：湖沼沼沢地指標種    O：沼沢地付着生種(以上は安藤, 1990)  
 U：広適応性種    T：好清水性種(以上はAsai and Watanabe, 1995)  
 R：陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分, 伊藤・堀内, 1991)

46%フッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。プレバート作成は、残渣を適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロベットで取り、グリセリンで封入する。検鏡は、プレバート全面を走査し、その間に産出する全ての種類について同定・計数する。結果は同定・計数結果の一覧表と花粉化石群集の層位分布図として示す。なお、複数の種類(分類群)をハイフンで結んだものは種類間の区別が困難なものである。

#### b. 結果

結果を表4、図10に示す。全試料から統計的に扱える花粉化石が産出するが、全般に保存状態は悪く、花粉外膜が壊れたり、薄くなっているものが多い。以下、詳細を下位層準から順に記す。

第7b層(試料R89): 群集の構成比は木本花粉が60%程度と多産する。木本花粉各々種では、常緑広葉樹のアカガシ亜属とシノキ属-マテバシイ属が多産する。次いで針葉樹のスギ属、落葉広葉樹のコナラ亜属が比較的多産する。草本花粉ではイネ科が最も多く、このほかカヤツリグサ科、ガマ属-ミクリ属、ヨモギ属が産出する。

第6e層(試料R91): 花粉化石群集に占める草本花粉の割合が増加し、木本と草本が同程度占めるようになる。木本花粉各々種では、針葉樹のマツ属とスギ属が増加する。これとは逆に常緑広葉樹のアカガシ亜属とシノキ属-マテバシイ属が減少傾向を示す。増加する草本花粉ではイネ科が増加し、高率を占めるようになる。また、産出種類数も増加し、オモダカ属、ミズオアイ属、ヒシ属、フサモ属といった水生植物のほか、オナモミ属、キク亜科などが産出する。

第6a層(試料R95): 構成比に占める草本花粉の割合が増加し、木本花粉を上回るようになる。木本花粉組成は変化し、増加傾向を示していたマツ属がさらに増加し、40%程度で多産するようになる。草本花粉ではイネ科が50%程度と高率を占めるようになる。抽水植物のガマ属-ミクリ属、オモダカ属、ミズオアイ属、沈水植物のフサモ属などを伴う。また栽培種のソバ属が産出する。

#### v) 植物珪酸体分析

##### a. 方法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法[藤原宏志1976]を用いて、次の手順で行った。

試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)後、試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加する(0.1mgの精度で秤量)。電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理、超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散、沈底法による20μm以下の微粒子除去の順に処理を行い、封入剤(オイキット)中に分散してプレバート作成する。プレバートの検鏡・同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行う。計数は、ガラスビーズ個数が500以上になるまで行う。これはほぼプレバート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率を乗じて、試料1g中の植物珪酸体個数を求める。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪

酸体1個あたりの植物体乾重)を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる[杉山2000]。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

#### b. 結果

分析結果を表4、図11に示す。各層における植物珪酸体の産状をみると、いずれも植物珪酸体含有量はやや少ないか少ない。植物珪酸体組成は各層とも草本で占められ、木本は認められない。以下、植物珪酸体の検出状況を下位層準から順に記す。

第7b層(試料R89):植物珪酸体総数は5,800個/gと非常に少なく、同定された分類群はヨシ属のみである。ほかには海綿骨針が低密度で検出される。

第6e層(試料R91):植物珪酸体総数は10,000個/g程度と少ない。植物珪酸体組成は、イネがやや優勢であり、ほかにはヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型が低密度で検出される。海綿骨針が低密度で検出される。

第6a層(試料R95):植物珪酸体総数は20,000個/g弱とやや少ない。植物珪酸体組成は、イネが優勢であり、これにススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型が続く。ほかにはシバ属型とチマキザサ節型が低密度で検出される。植物珪酸体以外に海綿骨針が低密度で検出される。

### 4)古環境・古植生の推定

#### i)珪藻化石の産状からみた水域環境

珪藻化石分析結果3)iii)に基づき、各層形成期の調査地点の水域環境について検討する。今回の調査を実施した各地層で珪藻化石の保存状態が悪く、産出数が非常に少なかった。その原因を特定することは難しいが、珪藻化石を構成するシリカ鉱物は温度が高いほど、流速が早いほど、水素イオン濃度指数が高いほど溶解度が大きくなり溶けやすいことが実験により推定されている[千木良雅弘1995]。また、[小杉正人1986]によると、珪藻の遺骸は、堆積する際には、その大きさからシルトと挙動と共にするとされており、粗粒堆積物の場合、珪藻殻は取り込まれにくい。

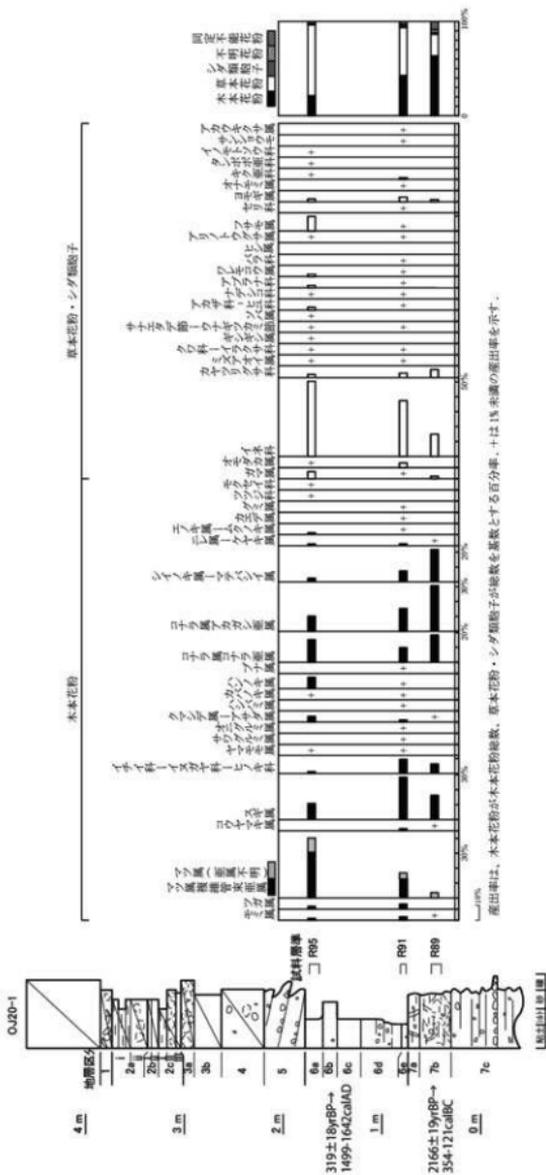
第7b層:珪藻化石の保存状態が悪く、産出数が少なかった。第7b層は粗粒な泥質礫質砂からなるため、珪藻化石がもともと取り込まれにくい環境であった可能性が高い。僅かに産出した珪藻化石のほとんどが汽水生種であった。そのうち、*Achnanthes brevipes*は海水砂質干潟の指標種群とされる[小杉1988]。海水砂質干潟とは、塩分濃度が26パーミル以上の水域の砂底(砂の表面や砂粒間)であり、このような場所にはウミナナ類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類が生活するとされる。*Nitzschia granulata*は、海水泥質干潟[小杉1988]の指標種で、その中でも代表的な種であり、閉塞性の高い塩性湿地や泥質の干潟域などに泥底に付着生活する種である。化石数が少ないため特定できないが、当時の水域は汽水域であった可能性が高い。本層が堤間低地の感潮堆積層であることと矛盾しない。

第6e層:第6e層も珪藻化石が少なかった。産出した珪藻化石種は僅かに汽水生種が確認されるが、ほとんどが淡水生種からなる。淡水生種で流水不定性種の *Amphora ovalis* var. *affinis*は、環境に対す

表3 花粉分析結果

種類名	Taxon	層位		
		6a層	6e層	7b層
木本花粉	Arboreal pollen			
モミ属	<i>Abies</i>	2	14	1
ツガ属	<i>Tsuga</i>	3	20	0
マツ属複雑管束亜属	<i>Pinus subgen. Diploxylo</i>	48	76	0
マツ属	<i>Pinus (indistinct)</i>	15	25	7
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	0	8	2
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	17	170	33
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	<i>Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae</i>	2	57	13
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	1	2	0
サワグルミ属	<i>Pterocarya</i>	0	1	0
オニグルミ属	<i>Juglans</i>	0	1	0
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus-Ostrya</i>	6	9	2
ハシバミ属	<i>Corylus</i>	0	2	0
カバノキ属	<i>Betula</i>	1	1	0
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	12	5	0
ブナ属	<i>Fagus</i>	0	1	0
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	24	59	37
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	16	92	62
シノキ属-マテバシイ属	<i>Castanopsis-Panus</i>	4	44	44
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus-Zelkova</i>	2	8	1
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	2	1	0
カエデ属	<i>Acer</i>	0	1	0
グミ属	<i>Elaeagnus</i>	0	1	0
ツツジ科	<i>Ericaceae</i>	1	0	0
モクセイ科	<i>Oleaceae</i>	1	0	0
草本花粉	Nonarboreal pollen			
ガマ属	<i>Typha</i>	34	6	5
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	1	41	0
イネ科	Gramineae	371	523	47
カヤツリグサ科	Cyperaceae	15	42	17
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	1	3	0
クワ科-イラクサ科	Moraceae-Urticaceae	1	1	0
ギンギク属	<i>Rumex</i>	1	0	0
サナエダ節-ウナギツカミ節	<i>Persicaria-Echinocaulon</i>	2	9	0
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	1	0	0
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae-Amaranthaceae	13	13	0
ナデシコ科	Caryophyllaceae	2	5	0
アブラナ科	Cruciferae	12	1	0
ワレモコ属	<i>Sanuisorba</i>	12	1	0
バラ科	Rosaceae	0	4	0
ヒシ属	<i>Trapa</i>	0	1	0
アリノコグサ属	<i>Haloragis</i>	1	1	0
フサモ属	<i>Myriophyllum</i>	71	1	0
セリ科	Umbelliferae	0	3	0
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	13	43	4
オナモミ属	<i>Xanthium</i>	0	1	0
キク亜科	Carduoideae	1	14	0
タンポポ亜科	Cichorioideae	1	0	0
シダ類胞子	Pteridophyta			
イノモトソウ科	Pteridaceae	1	0	0
サンショウモ	<i>Salvinia natans</i>	0	7	0
アカウキクサ属	<i>Azolla</i>	0	3	0
単条溝型胞子	Monolate type spore	3	16	2
三条溝型胞子	Trilate type spore	1	4	3
不明花粉	unknown	6	15	11
保存状態が悪く同定できない花粉	Weathered pollen	16	45	27
合計	Total			
木本花粉	Arboreal pollen	157	598	202
草本花粉	Non-Arboreal pollen	553	713	73
シダ類胞子	Pteridophyta	5	30	5
不明花粉	unknown	6	15	11
保存状態が悪く同定できない花粉	Weathered pollen	16	45	27
合計	Total	737	1401	318

TP-15m



産出率は、木本花粉が木本花粉の総数、草本花粉・シダ類孢子が地殻を基数とする百分率、十は1%未満の産出率を示す。

図10 花粉化石群集單位分布

表4 植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)		地点・試料		
分類群	学名	層位		
		6a層	6c層	7b層
イネ科	Gramineae			
イネ	<i>Oryza sativa</i>	37	12	
ヨシ属	<i>Phragmites</i>			5
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	25	6	
シバ属型	<i>Zoysia</i> type	6		
タケ亜科	Bambusoideae			
メダケ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Nipponcalamus</i>	19	6	
ネザサ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	19	6	
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	6		
未分類等	Others	12	6	11
その他のイネ科	Others			
未分類等	Others	68	61	42
海綿骨針	Sponge	6	12	11
植物珪酸体総数	Total	192	103	58
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m <sup>2</sup> ・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出				
イネ	<i>Oryza sativa</i>	1.09	0.35	
ヨシ属	<i>Phragmites</i>		0.38	0.32
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.31	0.07	
メダケ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Nipponcalamus</i>	0.22	0.07	
ネザサ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.09	0.03	
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.05		
タケ亜科の比率 (%)				
メダケ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Nipponcalamus</i>	62	71	
ネザサ節型	<i>Pleiblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	26	29	
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	13		
メダケ率	Medako ratio	87	100	

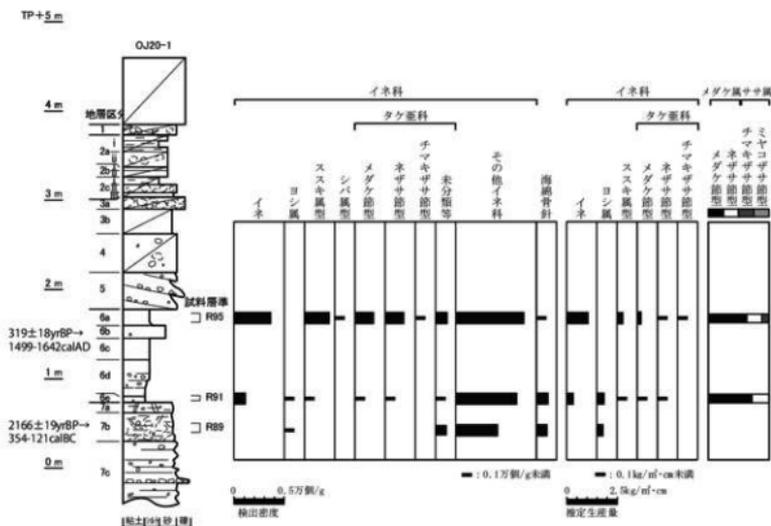


図11 植物珪酸体群集の層位分布

る適応能力が高い種で、さまざまな環境の水域で認められる。また、生育時の生産力が高いだけでなく、殻のシリカの沈着が厚く、堆積後も特に化石として残りやすい種である。淡水生種で不明種の *Pinnularia* spp. は数種類で構成されるが、本属はいずれも湿地に最も特徴的に認められ、主要な構成種になる属である。また、真アルカリ性種である *Anomoeoneis sphaerophora* は、小川、沼沢地、浅い湖に広く分布するが [Patrick and Reimer 1966] によると、塩分濃度のある内水でも確認されている。

珪藻化石の保存状態および化石として残りやすい種が特徴的に産出することから、堆積時に取り込まれたほとんどの珪藻化石が堆積後に分解・消失している可能性が高いが、湿地性を示す種が複数種産出したことから、調査地は汽水の影響を受けなくなり、湿地場に変化した可能性が示唆される。

第6a層：珪藻化石は少なく、保存状態が悪いことから堆積時に取り込まれたほとんどの珪藻化石は、堆積後に分解・消失した可能性が高い。産出種は陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*, *Pinnularia borealis* 等の淡水生種のみで構成される。陸生珪藻は、水中や水底の環境以外のたとえばコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壌の表層部など大気に接触した環境に生活する一群 [小杉1986] である。特に、本試料から産出した陸生珪藻は、離水した場所の中で乾燥に耐えることのできる群集で、優占 (70~80%以上) する結果が得られれば、その試料が堆積した場所は、水域以外の空気に曝されて乾いた環境であったことが推定できるとされる [伊藤良永・堀内誠示 1989・1991]。産出数が少なく特定できないものの、本層形成期の調査地は淡水域で、陸生珪藻が生育するような環境が一時的にせよ形成されていた可能性がある。

#### ii) 花粉化石群集による生層序対比

今回の調査地周辺では、南方600m、同じ堤間低地に位置する住友銅吹所跡 (DB91-1) において花粉化石群集変遷が確認されている [バリノサーヴェイ株式会社 1998]。ここでは、両地点の群集に生層序学的に比較する。地層の生層序分帯 (バイオゾーン) は、区間帯 (range zone)・間隔帯 (interval zone)・群集帯 (assemblage zone)・多産帯 (abundance zone)・系列帯 (lineage zone) の5つがある [国際層序区分小委員会 2001]。ここでは分類群の組み合わせで特徴づけられる群集帯を用いて比較する。

両遺跡の花粉化石群集のうち、広域要素である風媒性の木本花粉の層位的産状は概ね類似していることが認識できる (図12)。

今回の第7b層の群集は、アカガシ亜属・シノキ属といった常緑広葉樹の多産が特徴である。住友銅吹所跡の14g層の群集に生層序対比される。14g層の形成年代は不明であるが、層相変化も類似することから、生層序学的だけでなく、年代層序的にも対比される可能性がある。

今回の第6e層の群集は、アカガシ亜属の減少、マツ属の増加、構成比における草本花粉の増加が特徴である。住友銅吹所跡でこのような変化が確認されるのは14d層から13b層にかけての層準であり、生層序対比される可能性が高い。今回の第6e層の形成年代は不明であるが、住友銅吹所跡の13b層の考古年代が古代とされること、上町台地におけるマツ属花粉の増加が古墳時代後期頃と推定される [辻本裕也 2014] ことから、第6e層の形成年代は古墳時代後期~古代の可能性が推定される。第6e層は当該地が外水域と隔離され、細粒堆積物が堆積し始める層準に相当し、既往の調査成果から6・7世紀の古墳時代末から古代の初め頃と考えられている [趙 2006]。生層序対比結果は調和的な結果といえる。

今回の第6a層の群集は、マツ属花粉の急増、優占が特徴であり、住友銅吹所の11b層・11a層に生層序対比される可能性が高い。住友銅吹所の考古年代は、11b層が中世、11a層が16世紀であり、年代層序的にも対比される可能性がある。

### iii) 植物化石群集からみた古植生

花粉分析・植物珪酸体分析結果 3) iv)・v) に基づき、各層形成期の調査区および周辺の古植生について検討する。

第7b層：第7b層は中期前葉～中葉に形成された堤間低地の感潮堆積層である。産出した花粉化石や植物珪酸体は基本的に異地性で、水理的に淘汰されている可能性が高く、植物珪酸体含量密度が著しく少なかったのも、このような堆積環境が関係している可能性がある。

産出する草本類をみると、花粉では大型の抽水植物であるガマ属、水生植物の種類を含むイネ科、カヤツリグサ科、荒地に普通なヨモギ属、植物珪酸体では湿地の環境指標であるヨシ属のみが少量検出されている。産出草本類の多くが湿地や沼沢地などに生育する種類からなることから、当該期の堤間低地の周縁部や上流域には、大型の抽水植物であるヨシ属やガマ属などが生育していたとみられる。また、浜堤などの開けた場所にヨモギ属などが生育していたとみられる。

一方、堤間低地西側の上町台地などの安定した場所には、シイ類・カシ類などの常緑広葉樹林が成立していたとみられる。上町台地の谷部で行われた既往の花粉分析結果でも、常緑広葉樹が卓越しており、その林分の存在が確認されている[辻本2014]。

第6e層：本層形成期には感潮湿地が河川及び海との連絡が途絶え、湿地のような堆積場に変化する。花粉化石群集に占める草本花粉の割合・種類数が増加し、イネ科が増加し、抽水植物のオモダカ属、ミズオアイ属、浮葉植物のヒシ属、沈水植物のフサモ属などが産出するようになる。植物珪酸体では

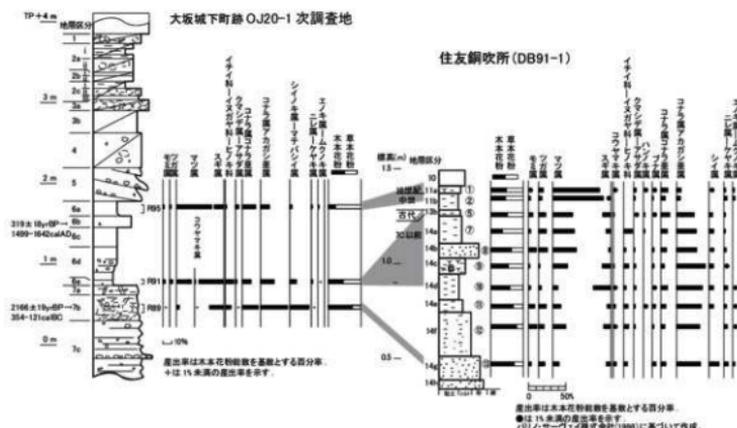


図2 大阪城下町跡OJ20-1次調査地・住友銅吹所(DB91-1)の花粉化石群集による生層序対比

栽培種のイネがやや優勢で、ほかにはヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型が低密度で検出されている。これらのことから、当該期の堤間低地一帯では草地領域が拡大し、堤間低地にはヨシ・オモダカ属・ミズオアイ属などの抽水植物やヒシ属などが生育する湿地ないし水域がみられたと推定される。低地周辺の浜堤などの比較的高燥な場所には、オナモミ属やヨモギ属、ササ類などが分布していたとみられる。なお、本層単では栽培種のイネが産出する。含量密度は1200個/gと、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準とされている3,000個/g [杉山真二2000]より少ないものの、考古遺跡の水田跡の植物珪酸体分析結果では低密度の場合も確認されることから、調査地での稲作の可能性を積極的に肯定できないものの、否定することもできない。この点については調査時所見を踏まえた評価が必要である。

一方、本時期には台地上などの森林植生も変化する。木本花粉組成において二次林の代表的な樹種である針葉樹のマツ属が増加し、常緑広葉樹のアカガシ亜属とシイノキ属-マテバシ属が減少傾向を示すことから、常緑広葉樹林の二次林化が進行したと推定される。ただし、低地の淡水化を踏まえると、沿岸林としてのマツ林の分布が拡大した可能性も充分考えられる。上町台地におけるマツ属の増加時期や変遷パターンは地点によって多少異なるが、概ね古墳時代後期以降である[辻本2014]。

第6a層：第6a層の形成期である16世紀頃には、花粉化石群集に占める草本花粉の割合が増加し、卓越するようになることから、第6e層形成期に比較して、さらに開けた場所に变化したと推定される。草本花粉ではイネ科の増加が顕著であり、植物珪酸体では栽培種のイネ植物珪酸体が3,700個/gと、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準とされている3,000個/g [杉山2000]を超過する比較的高い密度で検出された。このような産状から、第6a層形成期には低地において稲作が行われていた可能性が高い。産出した抽水植物のガマ属、オモダカ属、ミズオアイ属、沈水植物のフサモ属などの花粉は当該期の水田雑草として生育していたものに由来する可能性がある。また、イネ以外の栽培種として、畠作物のソバ属花粉が僅かであるが確認されている。虫媒性のソバ属花粉は耕作地を離れると産

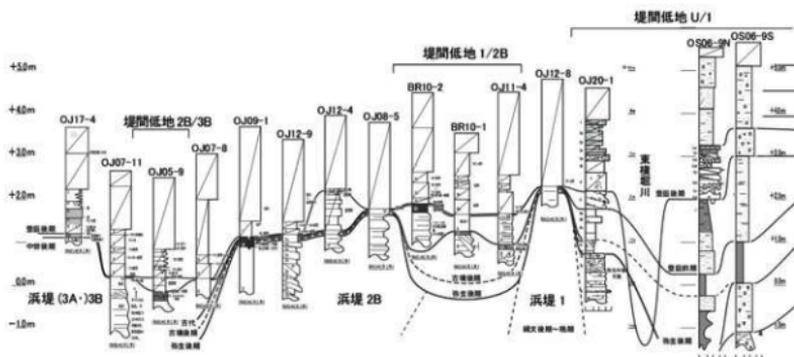


図13 大坂城下町跡の南限付近を通る地質柱状対比図(〔趙2018〕の図に加筆)

出率が極端に低率となる[中村1984]ことから、調査地点周辺での栽培が示唆される。

一方、台地上などの森林植生も大きく変化する。花粉化石群集に占める木本花粉の割合が著しく低下すること、二次林の代表的樹種であるマツ属花粉が優占するようになることから、第6e層形成期に比較して、二次林化が進行するだけでなく、林分自体が減少したと推定される。このような急激な植生変化は、台地から平野における人間活動が強く関係していると推定される。

## 5) 調査地の古地理環境について

層序と遺構・遺物、および自然科学分析結果から、本調査地の古地理環境について検討する。

a. 第7層の年代と環境 第7層は第7b層の14C年代から弥生時代中期を前後する頃と推定できる。第7b層は堤間低地の汽水堆積層であり、砂質泥が埋める直径2～3 cmの巣穴化石が認められることから砂礫干潟であったと考えられる。水辺にはヨシが生え、上流域にはヨシ属、ガマ属などが育成したと推定される。また浜堤の開けた場所にはヨモギ属が育成していたとみられる。

b. 第6層の年代と環境 層相から作土と推定した第6a層は、多量に検出されたイネ科花粉から水田作土層と考えられる。また、層相の類似した第6b層も水田作土とみられる。第6e層は湿地の堆積層であり、湿地から第6c層の耕地へ移行したと考えられる。

小規模の氾濫堆積層である第6b層の14C年代は、中世末と17世紀前半の2時期を得たが、上位の第4層に豊臣後期(16世紀末～17世紀初頭)の遺物を含むことから、第6b層は豊臣前期以前の中世末、概ね15世紀代の堆積と考えられる。第6e層の花粉化石群集が住友銅吹所[大阪市文化財協会1998]の第14c～13b層のそれと対比される可能性が高いことから、堆積年代は古代と考えられる。したがって、第6層は古代～中世末までの時間を内在すると考えられる。それでもなお、第7層とは弥生時代後期～古墳時代の時間間隙があり、この間に第7層上面が浸食されたか、無堆積の時期があったと考えられる。

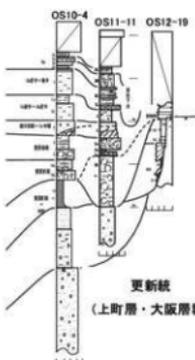


図13(続き)

c. 第5b層の年代と堆積イベント 第5b層の砂礫は、近隣では未確認の粗粒堆積物である。北から流入していることから、大川の氾濫により、1594年開削直後の東横堀川に流れ込んだ洪水が、台地をつくる上町層の崖や残丘を浸食して、堆積したのであろう。遺物は出土していないが、上位層出土遺物の年代との関係から、第5b層を堆積した洪水の発生は豊臣前期の末頃と考えられる。1596年には慶長伏見地震で大坂にも甚大な被害が出ており、第5b層の堆積は、東横堀川を遡った津波の可能性もある。

d. 豊臣後期～徳川期の造成 遺物が出土していないが、当該地が豊臣後期の大阪城下町造成地域に含まれていることから、第5a層は豊臣後期の造成土の可能性もある。また、上位の第4層には豊臣後期～徳川期(17世紀中葉)の遺物が含まれることから、徳川体制への交代期は第4層中にある。第3層上面に礎石建ちの建物が現れる。城下町の

外れの当該地も徳川期(17世紀末～18世紀)になって、都市化した城下町を構成するようになったとみられる。

## 6) まとめ

本調査と自然科学分析の結果、次のことが明らかとなった。

a. 調査地で確認した最下位層である第7層は、弥生時代中期頃の汽水域であった。当時の当該地は、縄文時代の後半の上町台地と難波砂州の浜堤列1とに挟まれた潟湖であった場所に位置し、海退後の当時もなお潮汐が及ぶ堤間低地の砂礫干潟であったと考えられる。

b. 第6層形成期は花粉分析結果から古代～中世末の幅広い年代が与えられ、小規模の氾濫を挟んで湿地から湿地周辺の耕地へ移行したと考えられる。第6a層や第6c層は豊臣前期の水田作土であったと推定される。なお、弥生時代後期～古墳時代は堆積間隙があったと推定できる。

c. 第5b層は突発的な洪水の堆積であり、堆積時期は豊臣前期末頃である。1596年発生の慶長伏見地震との関連が興味深い。

d. 第5a層から上位で、当該地の造成がはじまる。豊臣後期の城下町造成を示すものと考えられる。

e. 第5a層や第4a層の整地が比較的大まかであるのに対して、第3層から上位では造成技術が向上したとみられ、盛土と整地の造成単位が明瞭に区分でき、礎石建ち建物も現れる。城下町の外れの当該地も徳川期(17世紀末～18世紀)になって、都市・大坂城下町の一画を構成するようになったとみられる。

f. 出土遺物から17世紀後葉までは近隣で骨加工を行っていたこと、18世紀末～19世紀初頭にかけて漆器生産を行っていたことが判明した。

## 引用・参考文献

- Asai Kazumi&Watanabe Toshiharu.1995.Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saphrophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,35-47.
- Bronk Ramsey, C.2009 Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- Patrick, R. & Reimer, C. W. 1966. The diatoms of the United States Vol.1. 688pp. Academy of Natural Sciences of Philadelphia, Philadelphia.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann - Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0 - 55 cal kBP) . Radiocarbon, 62(4) , 725-757. doi : 10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

- 安藤一男1990、「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」：『東北地理』42, pp.73-88
- 伊藤良水・堀内誠示1989、「古環境解析からみた陸生珪藻の検討 - 陸生珪藻の細分 -」：『日本珪藻学会第10回大会講演要旨集』, p.17
- 伊藤良水・堀内誠示1991、「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」：『日本珪藻学誌』6, pp.23-44
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013、「大坂城下町跡発掘調査(OJ11-4)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)』, pp.219-228
- 大阪市文化財協会1998、「住友銅吹所跡発掘調査報告」, pp.1-601
- 大阪市文化財協会1999、「大坂城下町跡の調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告—1997年度—』, pp.99-105
- 大阪市文化財協会2004、「OJ91-24次および92-17次の調査」：『大坂城下町跡Ⅱ』, pp.327-336
- 大阪文化財研究所2014、「大坂城下町跡Ⅲ」, pp.1-38
- 国際層区分小委員会2001, 日本地質学会編『国際層序ガイド 層序区分・用語法・手順へのガイド』 共立出版, p.238
- 小杉正人1986、「陸生珪藻による古環境の解析とその意義-わが国への導入とその展望-」：『植生史研究』1, pp.9-44
- 小杉正人1988、「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」：『第四紀研究』27, pp.1-20
- 小林謙一2009、「近畿地方以東の地域への拡散」：『新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代』, (西本豊弘編), 雄山閣, pp.55-82
- 菅原正明1992、「舞台出現の意義-中世経済の側面-」：国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館 研究報告』第46集, pp.81-177
- 杉山真二2000, 『植物珪酸体(プラント・オパール)』：『考古学と植物学』, 同成社, pp.189-213
- 千木良雅弘1995, 『風化と崩壊』 近未来社, p.204
- 趙哲済2006, 『船場・道修町、その成り立ちに迫る』：『第13階道修町文化講演会(記録)』, pp.9-42
- 趙哲済2014, 『難波砂州北部～天満砂州南端部の表層地質に関する覚書』：『大阪上町台地の総合的研究成果報告書』, pp.23-36
- 趙哲済・中条武司2017, 『大阪海岸低地における古地理の変遷-「上町科研」以降の研究-』：『ヒストリア』第263号 大阪歴史学会, pp.3-23
- 辻本裕也2014, 『上町台地およびその周辺の植生史』：『平成21～25年度(独)日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(A) 大阪上町台地の総合的研究-東アジア史における都市の単条・成長・再生の一類型-』 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所 大阪歴史博物館, pp.37-42
- 中村 純1984, 『古代農耕とくに稲作の花粉分析学的研究』：『古文化財の自然科学的研究』, 古文化財編集委員会, pp.581-602.
- バリノ・サーヴェイ株式会社1998, 『第4節 住友銅吹所跡の古環境変遷』：大阪市文化財協会編『住友銅吹所跡発掘調査報告』, pp.378-389
- 藤原宏志・杉山真二1984, 『プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田址の探査-』：『考古学と自然科学』17, p.73-85
- 藤原宏志1976, 『プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法-』：『考古学と自然科学』9, pp.15-29





東壁地層断面(南西から)



西壁地層断面(北東から)





第5層上面・第6層上面の遺構検出状況



第3b層上面の遺構検出状況



第2b層上面～第3a層上面の遺構検出状況



第2層内(重機掘削後)任意面の遺構検出状況





SD38(第6層上面、南から)  
試掘坑より北(奥)側；掘上げ後  
同南(手前)側；検出状況



SD38地層断面(南から)



SK37掘上げ後  
(第5層上面、  
北西から)



SK31瓦敷土塙  
(第4層上面、  
東から)



SX47埵列建物に  
似た建物基礎に  
並べられた大甕  
体部の破片列  
(第4層上面、  
西から)

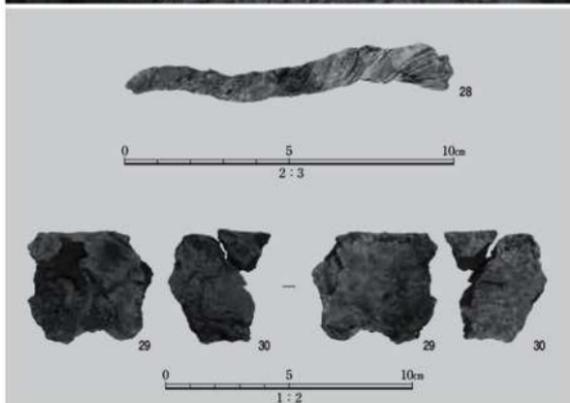




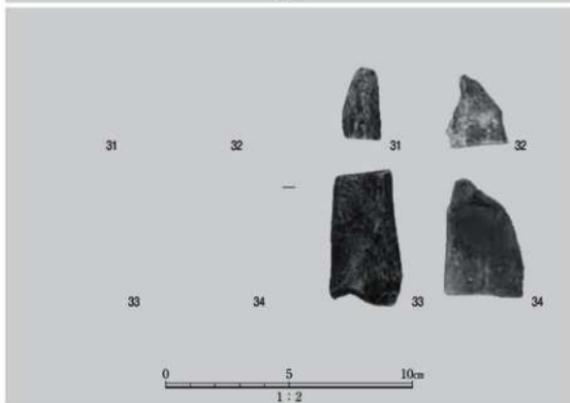
漆器R83  
(第6b層内)



漆加工関連遺物  
(SK01)



骨加工関連遺物  
(第3b層 : 31・33,  
SD29:34,  
SK22:32)





令和2年度特別史跡大坂城跡豊臣期石垣公開事業にかかる  
発掘調査業務委託(OS20-1)完了報告書

調査個所 大阪市中央区大阪城 大阪城公園内 本丸地区  
調査面積 368㎡  
調査期間 令和2年4月24日～令和3年3月26日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋 工、清水和明・鳥貫 聡・平田洋司・白井  
翔太郎

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は特別史跡大坂城跡の本丸地区に位置する。徳川期天守の南東にあって現存する金蔵(重要文化財)の東に当る(図1・2)。本調査地の北部では、1984年に配水管理設工事に伴ってOS84-17次調査が行われ、南北2つの調査区で豊臣期大坂城の詰ノ丸に係わる遺構が発見された[大阪市文化財協会1985・2002]。両調査区では詰ノ丸東南部の外周を巡る石垣が検出されたほか、北区では詰ノ丸の石組溝、南区では中ノ段の遺構も検出され、豊臣期大坂城を知る上で極めて重要な成果となった。

これに対して、大阪市により上記の豊臣期大坂城の石垣を再発掘して一般市民に公開するための整備事業が計画され、2012年度に試掘調査が行われた。その結果、本格的な発掘調査を実施して徳川期の遺構の状況を確認するとともに、豊臣期石垣の現況確認を行うことが必要と判断された。これにより、2013年度にOS13-11・38次の2調査が、2014年度にはOS14-4次の調査が実施された(図2)。

OS13-11次調査では徳川期大坂城の金蔵に係わる区画施設とみられる南北方向の石列と石組溝が検出されたほか、瓦廃棄土壌群が検出され、三葉葵文鬼瓦等徳川期大坂城の瓦が多数出土した[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015a]。

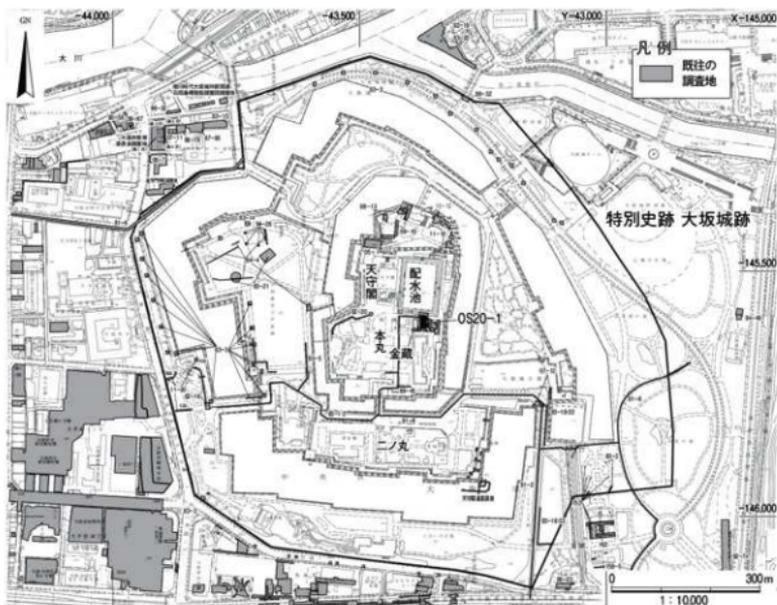


図1 調査地位置図

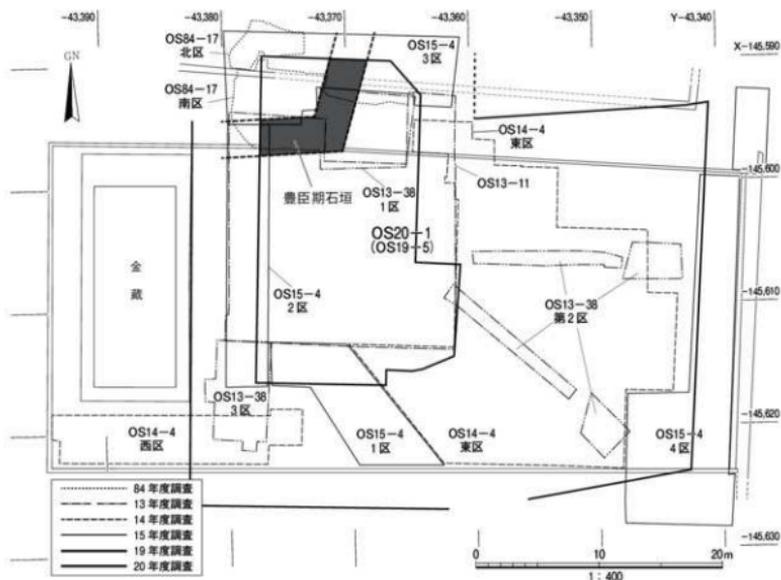


図2 調査区配置図

OS13-38次調査では、豊臣石垣の再発掘調査とOS13-11次調査で検出された金藏の区画施設とみられる石列および石組溝の南側への延伸状況確認のための発掘調査が行われるとともに、豊臣期大坂城中ノ段と下ノ段を区画する石垣の位置を確認する地中探査が行われた[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015b]。この調査により、金藏の区画施設に係わる石列の南の延長部分を検出したほか、金藏南側において東西方向の石組溝が新たに検出された。また、地中探査では豊臣期大坂城中ノ段の石垣あるいは裏込石が検出された。

これらの調査結果をもとに、工事予定範囲の徳川期の遺構確認と記録保存のためにOS14-4次の調査が行われ、西区では金藏に係わる南北方向の石列の南側への延長状況および東西方向の石組溝の西側への延長部分を確認するとともに、東区では小石や瓦細片を敷詰めた徳川期の舗道遺構が新たに確認された[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2016]。これは1783(天明3)～1848(嘉永元)年の大坂城を描いた『浪華城全図』に描かれた通路施設であると判断され遺構保存することになったため、建設予定施設の大幅な設計変更を行うことになった。

続くOS15-4次調査では、この設計変更の検討に伴って新たに遺構確認が必要になった箇所を含めた1～4区を設定した[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2017]。2区では金藏の区画施設となる南北塀を調査した。塀の礎石列を取上げ、将来の復元を前提に移動作業を行ったほか、それに平行した柱列が塀の控え柱であることを確認し保存した。4区では徳川期の雁木近くで石垣普請に伴うとみられる栗石堆積を含む盛土を確認し、雁木に平行する柱穴列等も検出した。3区では、南面・東面

石垣と内廻り石垣の間に挟まれた詰ノ丸上面で土壌を検出し、中井家「大坂御城小指図(本丸図)」や「大坂冬の陣図屏風」(東京国立博物館蔵)に描かれた隅構の礎石抜取り穴と推定された。

以上の調査成果から、徳川期の遺構保存と豊臣期石垣の恒久的な展示を両立させる公開施設を再設計し、2019年度からその工事掘削対象範囲の発掘調査を開始した(図2:OS19-5次)。

OS19-5次調査は、当初の予定では2019年8月頃に開始し、年度末までに徳川期一括盛土層の掘削と、南面・東面石垣および中ノ段遺構面における必要な調査を終了する計画であった。しかし、調査区東南部における土留杭の打設工事の過程で、中ノ段遺構面に近接して地中障害物が存在することが判明し、未知の構造物が中ノ段に存在する可能性が生じた。このため、その保存を図りつつ親杭の打設が可能な位置を探るため、サウンディング調査を実施した結果、図2の通り東南部の親杭の一部を北西方向に内側へずらして打設することとなった。こうした確認作業や設計変更等によって山留工事が当初予定よりも遅れ、2020年3月に旧調査区の埋戻し土をGL-1.0~1.5m程度まで掘削するにとどまった。

2020年度の本調査はGL-0.5mの第1段目の切梁設置工事の後に、2020年4月24日から開始した。当初は昨年度の作業で残った旧調査区の埋戻し土を掘削し、その後、豊臣期石垣の東面・南面の検出と、徳川期一括盛土層の構築に係わる土留遺構等を調査しながら、掘削作業を継続した。途中、GL-3.0mで第2段目の切梁設置工事、さらに調査区北壁を補強するため追加された親杭と東壁北部の一部にかけた第3段目の切梁設置工事を経て、層厚6mに及ぶ当該層(後述の第3d層)の掘削を終了した。その後は大坂夏ノ陣後の焼土層(同第4層)や豊臣期整地層(同第5層)上面の遺構等の調査を行い、豊臣期における詰ノ丸石垣と中ノ段における遺構群の様相、大坂夏ノ陣での焼亡に至る過程が明らかになるように務めた。これらの掘削作業は全て人力で行い、残土は城内の仮置き場へ搬出した。

中ノ段の調査終了後には、遺構を保護するため調査面に厚さ20cmの山砂層を敷設した。反対に詰ノ丸石垣の天端では、将来の展示に向けて旧調査時の保護砂を除去して裏込めの栗石等を再検出した。

また、調査成果の一部を公開するため、大阪市教育委員会・大阪市経済戦略局と共催で豊臣期石垣の一般公開事業を開催した(2021年2月19日~21日)。以上の経過で2021年3月26日までに調査で使用した機材を撤収し、現地における全ての作業を終了した。

なお、本報告で用いた方位は旧調査で得られた世界測地系に基づく座標北を基準とし、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文ではTP+○mと表記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序

調査地の標高はTP+30.6~30.8mとはほぼ平坦である。

前述のとおり、調査区内では再築後の大坂城本丸における徳川期~近代・現代の遺構群に関する調査を終了しており、それらの埋戻し土を除去し、豊臣期大坂城を埋め立てた徳川期の一括盛土層以下を調査の対象とした。

以下に、従来の調査における地層区分をまとめたOS15-4次調査の総合層序表に従い、新たに区

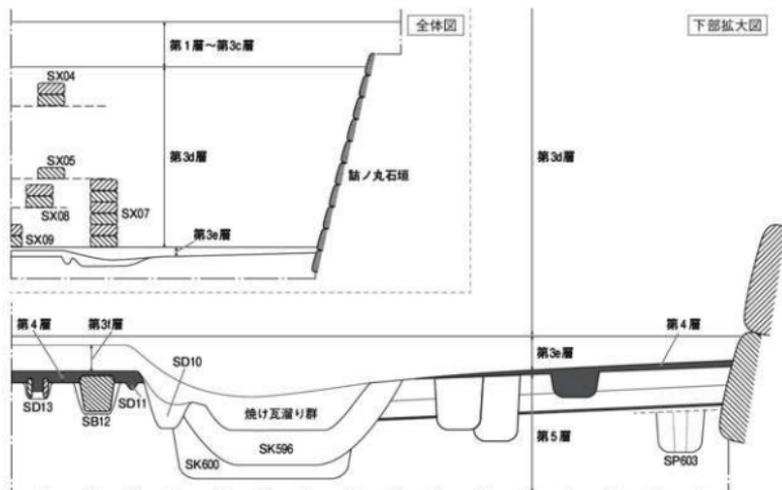


図3 地層と遺構の関係図

分した地層を追加しながら本調査の層序を記述する(表1)。

第3d層：にぶい黄褐色～褐色細粒砂質シルト・シルト等の偽礫を主体とする整地層で、豊臣期大坂城の詰り丸の石垣を埋めるため、層厚約6mに達している(図版1)。1624(元和10)年に開始された大坂城再築工事の第2期普請(本丸地域)に当る。多くが上町屋内の海成層を掘削、搬入したものと考えられ、破碎された貝殻片を多く含む。本層の断面観察から、本層の構築には複数の段階があり、各段階で先に土の高まりを築き、次にその周囲を埋める工程が認められた。これらの高まりの構築に伴って、積み石や石列(SX04～09)が検出された。

第3e層：暗オリーブ色細粒砂質シルトに瓦片や割石片を多量に含む整地層で、層厚は5～10cm程度である。特に石垣周辺では固く締まっている(図版7)。上位の偽礫を主体とした大規模な整地作業に先行して行われた地盤沈下防止のための地業と考えられる。OS84-17次調査でも石垣東側でも検出されているが、本調査で一定の広がり確認されたため新たに第3層内で細分した。

第3層：ほとんどが焼け瓦を均した整地層で、層厚は20～30cm程度である。調査区東南部の後述するSB12から北側5～6mの範囲を覆っていた(図版6)。意図的に瓦を混ぜて固く整地したと考えられる第3e層と異なり、火災にあった建物の瓦をその場で均した状況であるが、後述するSD10を挟んで第4層とは時間差があるため、第3層内で細分する。

以上の第3層からはごく少量の金箔押し瓦、焼けた瓦を含む軒丸・軒平瓦のほか、備前焼、肥前陶器、中国産青花等の陶磁器も出土した。地層は徳川期であるが、遺物の多くは豊臣期に属するものであろう。

第4層：大坂夏ノ陣の被災後の片付けに伴う整地層で、焼土を多く含む。石垣周辺では建物が存在

しなかったため層厚数cm以下で、特に南面石垣周辺の西部ではほとんど分布しない(図版6)。本層からは金箔押し軒丸・軒平瓦や同菊紋飾り瓦、塼材等が出土した。

第5層：石垣周辺では暗オリーブ灰色細粒砂質シルトから黄褐色シルト質粗粒砂を主体に、上部から20～30cm程度下で堆積した焼け瓦と炭・焼土の混じる暗灰黄色粗粒砂の薄層を挟んでいる。この層は石垣の根石設置後に整地されたものであるが、焼け瓦の時期は未確認である(図版4)。調査区南部では緑灰色ないしオリーブ灰色の海成粘土偽礫を主体としている。これらは豊臣期の中ノ段を形成した整地層である。層厚160cm程度までを確認したが、下位層との境界は未検出である。

#### ii) 遺構

本調査では豊臣期の中ノ段の遺構と大坂夏ノ陣の被災状況、徳川期の本丸再築普請工事に関する調査等を行った。その結果発見された主な遺構について以下に記述する。なお、遺構の時期については調査時における層準の観察に基づいており、今後、出土遺物の検討を経て検証する必要がある。

#### a. 豊臣期

詰ノ丸石垣：本丸の最上段をなす詰ノ丸の東南角に位置し、調査では石垣の東面と南面が合わさる出隅部周辺が検出されている(図版2)。調査した石垣は基底長で東面7.7m、南面6.9mで、東面のうち調査区北壁から2m程度は本調査で初めて検出した範囲である。出隅部の角度は108°である。石垣最上部は徳川期以降に壊されているが、最も残りのよい東面北端で基底からの高さが5.9mである。石垣の傾斜は東面・南面ともに約65°で反りはなく、縦断面はほぼ直線である。

石垣の石材は主に花崗岩で、一部に閃緑岩や凝灰岩、砂岩等も用いられていた。多くの石の表面には高熱を受けた痕跡があった。矢穴のある築石は、東面ではOS84-17次調査で確認されていた1点で、南面では新たに2点が確認された(図版3)。また、新たに確認された転用石は南面の1点で、宝篋印塔の返り花のある台座の破片であった。

石垣は野面積みで、東面では乱積みであるが、南面はより大型の横に長い築石を多用し、横位に目地が通るように積んでいる。また、出隅部には建物の礎石や石棺未製品の可能性のある石材等大型の石を使用し、石材の長辺と短辺を東面と南面に交互に振り分けた算木積みであるが、出隅の稜線は揃

表1 総合層序表

大坂城の歴史		OS15-4			
昭和 大正		第0層	第0層	現代盛土	
	天守閣(徳川将軍司令部) 1931(昭和6)年	第1a層	第1a層	田金蔵移築、建物1 確認時など	田金蔵高輪移築 1929(昭和4)年 以降、建物2 1914(大正3)年 以降
	陸軍第四師団 1888(明治21)年	第1b層	第1b層	田金蔵移築 母基礎工事 の整地	配水地埋土 1892(明治25)年 以前
		第1c層	第1c層	(SX304)・ (SD310)を 埋める整地	
		第1d層	第1d層		
明治	丸京館台 1871(明治4)年	第2a層	第1e層	建物4に 伴う整地	大坂東潤園 1887(明治20)年 以前
		第2b層	第2a層		
		第2c層	第2b層		丸京戦争 1868(明治3)年 直後の整地
	丸京戦争 1868(明治3)年	第2d層	第3a層	第2a層と 一連の整地	
19世紀	新金蔵 1751(宝暦元)年	第3a層	第3b層	新金蔵・ 区潤園 (SX304) 掘造遺構	大坂城起築 1793(寛政5)年 ～道普請全同 1848(嘉永元)年
	徳川 期		第3b層	第3c層	大坂城再築 角切の地表 をなす盛土
大坂城再築 1620(元和6)年～ 1629(寛永6)年		第3c層	第3d-1層	石垣 普請盛土	第2期本丸普請 1624(寛永2)年 ～竣工 1629(寛永6)年
		第3e層	第3d-2層	本丸 一括盛土	
		第3f層			
17世紀	大坂夏ノ陣 1615(慶長20)年	第4層	第4層	大坂夏ノ陣 焼土層	1615(慶長20)年 ～1620(寛永3)年
	豊臣 期	大坂城築城 1583(天正11)年	第5層	第5層	大坂城築城 1583(天正11)年 盛土

わず、角脇石の位置には不揃いの自然石を充填する等、過渡期の算木積みの様相である。

石垣の根石には、東面の一部で掘形が認められたが、南面ではいずれの根石にも認められず、根石を据えながら周囲を整地していったと考えられる。このため、東面の掘形も根石の固定を目的とした根切りではなく、根石頂部の高さ調節等の目的が考えられよう。

第5層内遺構：OS84-17次調査でも本層内の遺構が確認されているが、本調査では南面石垣の裾に接する位置で、SP603が検出された(図版4)。掘形の深さは0.6m、柱痕跡は直径15~20cmである。

第5層上面遺構：本層準の遺構は豊臣期大坂城中ノ段の生活面に構築された遺構となる。夏ノ陣の際にはすでに埋まっていた遺構と、夏ノ陣によって被災した遺構とがある。

前者には詰ノ丸石垣周囲の土城群等がある(図版4)。埋土に焼土・炭等を伴わない遺構が該当すると考えられるが、上述のとおり石垣周囲の焼土層は薄く、特に西側では途切れた範囲も少なくない。そうした場所では夏ノ陣後の徳川期に掘削された遺構でも埋土に焼土が混入しないため、遺構の時期は埋土の特徴だけではなく、出土遺物も併せて判定する必要がある。

後者は豊臣期大坂城の最後の状況を示す遺構で、調査区南部のSB12・SD11・SD13等が該当する。

SB12は東西に長い礎石建物で、北側柱と西側柱の一部が検出されている(図版5)。北側柱は柱間13間(12.4m)以上、西側柱は同3間(2.1m)以上となる。東柱はないが、建物内部にも5箇所の礎石があり、これら全ての表面が焼けて焼土層で覆われていた。建物内部の礎石のうち1点は柱座を作り出したもので、寺院等の礎石を転用した可能性がある(図版5)。

SD11はSB12の北側0.5mの位置に平行する幅0.5m程度、深さ0.05m程度の浅い溝で、埋土に漆喰片を多く含んでいた。SB12の西側では不明瞭である。SB12に伴う雨落ち溝と考えられる。

SD13は概ねSB12に直交する方位の小規模な溝である。掘形に川原石を並べて幅0.15~0.20m、深さ0.10mの溝としたものである(図版5)。夏ノ陣による炭層で埋まっていた。

調査区内の中ノ段の高さは、南面石垣裾の西部が最も高く、TP+24.1m付近である。これに対し東面石垣裾から東へはわずかに低く傾斜して、調査区東壁でTP+23.7m前後である。一方、石垣から南東へは、さらにTP+23.4m付近まで低くなるが、SD11付近でTP+23.6m、SB12付近でTP+23.7m程度と再び高くなっている。こうした状況から、調査区内での夏ノ陣直前段階における中ノ段の地表面は、南面石垣とそれに対峙するSB12・SD13等の遺構に挟まれた一画が東へ向けて低くなっていたことが明らかとなった。

この位置では大型の土城SK600とその埋没後に掘削されたSK596が検出された。どちらも第4層との先後関係が不明のため層準による時期の判定ができず、出土遺物の検討が必要である。

#### b. 徳川期

第4層上面遺構：石垣周辺で第4層の偽蹟で埋まった小穴が2基あり、第4層形成時ないし形成直後に掘削されたものと考えられる。

その他、調査区南部では幅0.6~0.7m、深さ0.25m程度のSD10が検出された。埋土は機能時堆積層の水漬きによるシルトで、開口しながら埋まったものである(図版6)。SB12に平行することから付属する溝の可能性も考えられたが、SB12と同時に被災したSD13を壊していることと、開口していた

にも関わらず埋土に夏ノ陣の炭や焼土が含まれないため、徳川期の遺構と判断した。

また、SD10を覆う被熱した大量の焼け瓦を均した整地層(第3d層)と一部が掘り窪められた複数の瓦溜りを確認した。瓦溜りの位置は、おおむね上述のSK596と一致している。この瓦はほぼ全てが焼けており、夏ノ陣で被災した建物に由来するとみられ、前述のSB12に葺かれていたと推定される。

第3d層内遺構：調査区南部でSX04～09が検出された。積み石ないし石列の遺構で、第3d層を強固に積み上げるために構築された土留の一部をなすものと考えられる。

SX07：第3d層の基底で検出され、詰ノ丸南面の石垣に相対する位置に構築された盛土による高まりの東北角付近を形成した積み石である。矢穴のある築石をさらに割って基底に配し、一部に小型の石や土囊を積んで北向きの壁を作る等、強固な高まりを構築した後、石垣との間に埋めた土を固定するための土留を兼ねたものであろう(図版7)。SX08はSX07内の南部で検出されたため、部分的な補強のために石を積んだものの可能性がある。

SX09：SX07の南東側で調査区南壁際に一部が認められたため、全体は確認できなかった。やはり第3d層基底に構築されている。(図版8)。

SX05：SX07の頂部平坦面上にあり、東西方向に並ぶ石列である。石の間隔はまばらで積上げた状況も認められないが、北側にある高まりの裾に当ることから、盛土の作業中にその範囲を示すための目印と考えられる(図版8)。

SX04：東西に並ぶ石列で、上記の積み石ないし石列では最も上位で検出され、位置も東に外れている。西端付近は3段に石を積んで低い南向きの壁を作っている。石列の脇に矢穴のある築石を配していた。SX04の基底は固く踏み固められており、東へ向かって低く傾斜していた。第3d層内上部に形成されたある段階の作業面に当るものであろう(図版8)。

これらの遺構は、本層が軟弱な海成層の偽礫を主体とすることから、地層の圧密・変形等による沈降を防ぐために施工されたと考えられる。本層に先行して第3e層を形成していることも併せて、豊臣期大坂城を埋めた後に徳川期の天守台を構築するために、本丸普請が非常に強固であったことが窺える。

### 3)まとめ

本調査は豊臣期大坂城の石垣公開事業に伴う発掘調査の最終的な工程に当たり、豊臣期・徳川期の両方で多くの新たな知見を得ることができた。

豊臣期では中ノ段の地表面が平坦ではなく、一部が高く礎石建物や石組溝などの遺構が存在していた事が重要である。これらは仮設のものとは考え難く、今後、本丸における中ノ段の位置づけを考える上で非常に重要な発見であろう。また中井家「大坂御城小指図」には描かれていないことから、描かれた時期をはじめとする絵図の再検討を行う必要性も考えられる。

徳川期では第3d層内で積み石や石列の遺構を発見し、限定された範囲であるが、本丸造成の過程を明らかにする地層断面の情報を得られたことが重要である。これらによって徳川初期の土木技術を知ることができると同時に、石垣を構築する前段階の本丸造成の主体者を検討する資料ともなろう。

一方で、豊臣期以前の遺構に係わる情報は把握できておらず、豊臣期整地層(第5層)内の焼土・炭を含む整地層や焼け瓦の時期や性格についても今後の検討が必要である。

#### 引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所

2015a、「平成25年度特別史跡大坂城跡豊臣石垣公開事業にかかる発掘調査業務(OS13-11)報告書」:  
『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2013)』、pp.279-305

2015b、「平成25年度特別史跡大坂城跡豊臣石垣公開事業にかかる発掘調査業務(その2)(OS13-38)  
報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2013)』、pp.355-371

2016、「大坂城跡発掘調査(OS14-4)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2014)』、  
pp.173-208

2017、「大坂城跡発掘調査(OS15-4)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2015)』、  
pp.179-202

大阪市文化財協会1985、『特別史跡 大坂城跡』

2002、『大坂城跡VI』

2020、「令和元年度特別史跡大坂城跡豊臣期石垣公開事業にかかる発掘調査業務委託(OS19-5)  
完了報告書」

調査区北壁地層断面①  
(南東から)



調査区北壁地層断面②  
(南東から)



調査区北壁地層断面③  
(南東から)





豊臣期詰ノ丸東南部  
東面石垣(東から)



豊臣期詰ノ丸東南部  
南面石垣(南から)



豊臣期詰ノ丸東南部  
石垣出隅部(南東から)





矢穴のある築石1  
(東面石垣)



矢穴のある築石2  
(南面石垣)



矢穴のある築石3  
(南面石垣)





豊臣期整地層(第5層)内  
SP603断面(南西から)



豊臣期整地層(第5層)内  
焼け瓦堆積状況  
(南東から)



豊臣期整地層(第5層)  
上面遺構①(南から)





豊臣期整地層(第5層)  
上面遺構②SB12・SD11  
(北西から)



SB12(柱座のある礎石)  
(南西から)



豊臣期整地層(第5層)  
上面遺構③SD13  
(北から)





徳川期焼土層(第4層)  
分布状況(南東から)



徳川期第3層の  
焼け瓦集積状況  
(北西から)



徳川期焼土層(第4層)  
上面遺構SD10断面  
(東から)





徳川期第3e層の  
瓦堆積状況(南西から)



徳川期第3d層内遺構①  
SX07・08(北東から)



SX07基底の転用石





徳川期第3d層内遺構②  
SX09(北から)



徳川期第3d層内遺構③  
SX05(南東から)



徳川期第3d層内遺構④  
SX04(南から)





中央区東高麗橋46、47-2・3、48、48-2～5における建設工事に伴う  
大坂城跡発掘調査(OS20-2)報告書

調査個所 大阪市中央区東高麗橋46、47-2・3、48、48-2～5  
調査面積 223㎡  
調査期間 令和2年11月9日～12月8日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋 工、大庭重信

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は東横堀川に架かる高麗橋の南東約130m、豊臣氏大坂城惣構の北西部に位置する。上町台地の西斜面の裾は調査地の東約100mの松屋町筋付近と推定され、以西の大阪海岸低地は弥生時代以降、砂州やラグーンが形成され、各所で人間活動の痕跡が確認されている。調査地周辺でも多くの調査が行われており、近隣では今回調査地北隣のOS11-14次調査で大坂夏ノ陣で被災した礎石建物[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013]、北東側50mのOS07-8次調査で弥生時代中・後期の遺構や平安時代の柱穴、鎌倉時代の井戸や落込み[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009]、北側200mのOS11-16次調査で飛鳥・奈良時代の大溝や鎌倉・室町時代の建物や井戸・土坑[大阪文化財研究所2012]、南東側50mのOS13-3次調査で鎌倉時代の井戸群[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015]などが検出されており、豊臣氏大坂城以前にも古代難波津、中世渡辺津の存在が推定される、歴史上重要な場所である。

大阪市教育委員会が行った試掘調査では、地表下約1.75m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする近世以前の遺構面および遺物包含層が検出され、調査を実施した。調査区は敷地東部の南北14.0m、東西15.9mであり、事業者側により地表下1.7mまで掘削された後に調査に着手した。以下、現地地表下3.1mの深さまで人力で掘り下げ、遺構面の精査、遺構・遺物の検出・記録作業を行ったのち、調査区中央に深掘りトレンチを設けて下位の地層の確認・記録を行った。

本報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することによって得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準した。標高はTP値(東京湾平均海面値)を用いてTP±〇mと表記した。なお、本報告の遺物の記載は調査課学芸員小田木富慈美が担当した。



図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

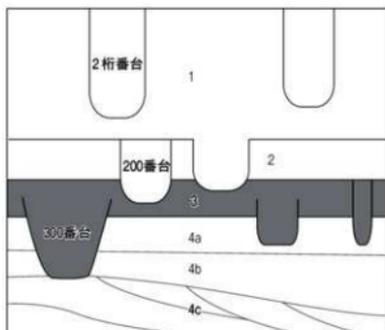


図3 地層と遺構の関係図

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

調査地の標高はTP+4.5m前後と平坦であり、そこから事業者側によって1.7mの深さまで掘削されたのちのTP+2.8mより調査を開始し、以下の地層を第1～4層に大別した。

第1層：黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂～礫を主体とし、下半に黄灰褐色(10YR4/2)シルト偽礫が集積する客土層で、層厚は最大で120cm残存していた。大坂町中屋敷替(1598～1599)の際の造成土で、上面で豊臣後期～徳川期の遺構を検出

した。

第2層：ぶい黄褐色(10YR4/3)炭混りシルト質細粒～中粒砂からなる整地層で、層厚は15cmある。上面で豊臣前期の遺構を検出した。上面の標高はTP+1.8mである。

第3層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)礫混りややシルト質細粒～中粒砂からなる古土壌で、層厚は20cmある。本層上面および層内で中世の遺構を検出した。

第4層：調査区中央に設けた深掘りトレンチで確認した海成砂層で、第4a～4c層に区分した。

第4a層は明褐色(7.5YR7/1)極粗粒砂～礫を含む細粒～中粒砂を主体とした堆積層で、TP+1.0～1.7mの間に分布し、層厚は最大で60cmある。上位の第3層とは漸移的で、上半は生物擾乱を受けている。西端の中位付近は極粗粒砂～礫が優勢となる。第4b層は上半が褐灰色(10YR6/1)粗粒～極粗粒砂、下半が灰白色(10YR7/1)細粒～中粒砂と粗粒～極粗粒砂の互層からなり、連続のよいラミナが水平ないしは西側(海側)へ傾く堆積層である。TP±0～+1.0mの間に分布し、層厚は50cm～100cmあり、西側で厚い。第4c層は褐灰色(10YR6/1)中粒砂～礫の互層からなり、西側(海側)へ傾斜する堆積層である。TP+0.5m以下に分布し、層厚は60cmまで確認した。堆積物の構造・粒形やラミナの傾きや各層の重なりから、第4c層は前浜堆積層、第4b層はバーム(汀段)付近の後浜堆積層、第4a層は浜堤堆積層とみられる。

### ii) 遺構と遺物

調査区の北半は、旧建物のPC杭や建物解体時のものとみられる攪乱で地層・遺構の遺存状態が良くなかったが、第1層上面、第2層上面および下面、第3層上面および下面でそれぞれ精査を行い、中世、豊臣前期、豊臣後期～徳川期の3時期の遺構を検出した。

#### a. 中世

第3層上面および第3層内で溝・土塋を検出した(図5・6)。

溝は調査区東端で検出したSD301、その西側でこれと並行するSD303・305がある。SD301は幅2.1～3.3m、深さ0.6mの北でやや西に振る南北方向の大溝である。西辺に沿って溝掘削当初のものと思われる深い掘込みが一部で確認できる。溝埋土は中位にやや暗色化したシルト質細粒～中粒砂層(図

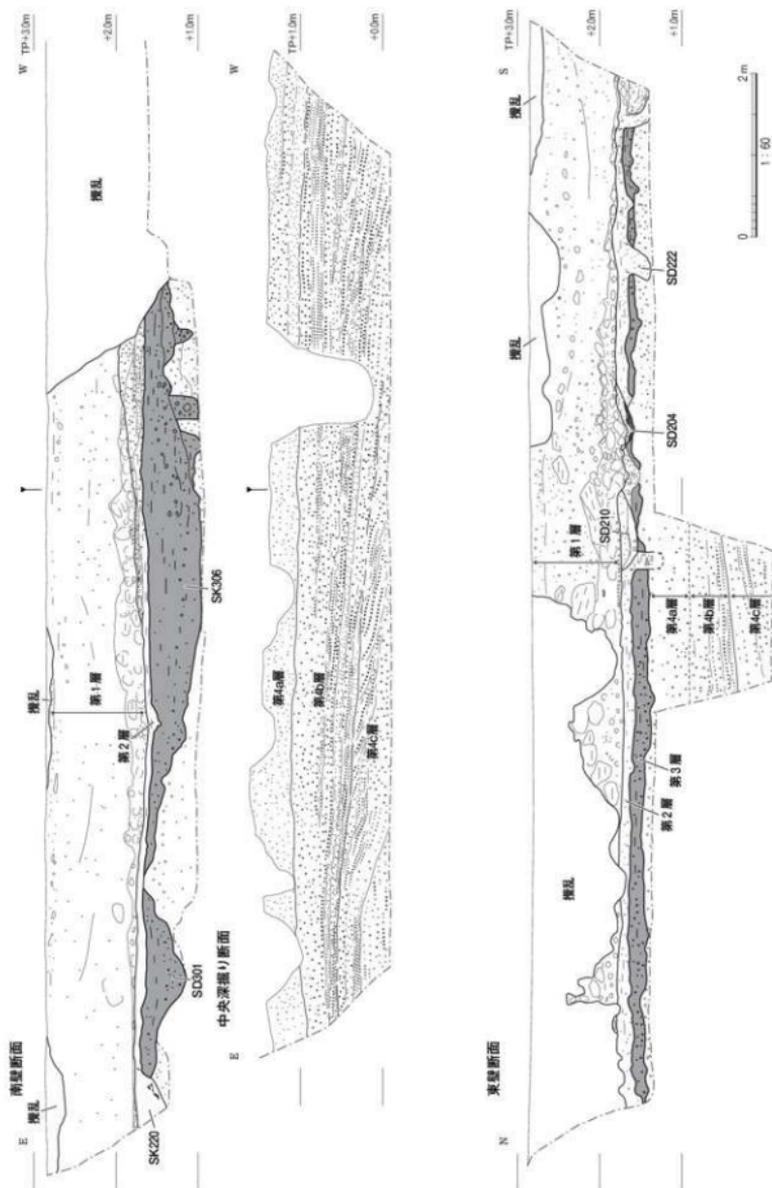


図4 調査区南壁・中央深掘りトレンチ・東壁地層断面図

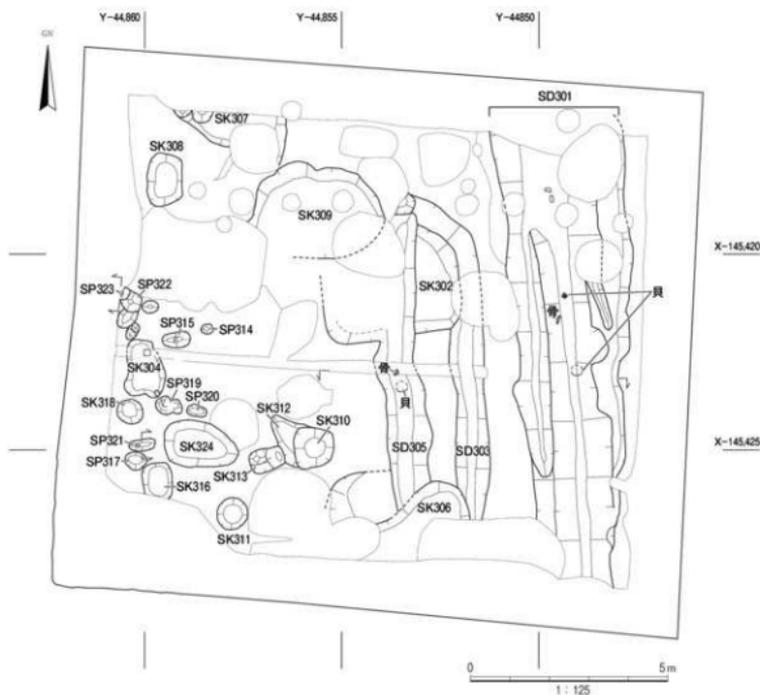


図5 中世の遺構(第3層上面および層内)平面図

6-9層)が堆積しているが、総じて基盤層に由来する粗粒堆積物が優勢で、水が流れたり溜まった痕跡は確認できないことから、水路ではなく区画を目的とした溝と考えられる。以下で述べるように、大量の瓦が出土しており、東側の寺域を区画した可能性がある。

SD301からはコンテナバットで約21箱の遺物が出土した。この内訳は、土師器・須恵器1箱、瓦器・古瀬戸・備前焼など2箱、常滑焼壺1箱、瓦質土器羽釜4箱、瓦質土器播鉢・壺1箱、瓦10箱、礫2箱であり、半数近くを瓦が占める。また、骨片やシジミ貝の集積を確認した。骨片は骨の質から人骨と推察される。このうち1-76を図化した(図7-11)。

先に遊離資料1-4・26について記述する。1-3は須恵器である。1は杯Bの蓋、2は杯Bである。7世紀末-8世紀初頭に属するものである。3は古墳時代後期の杯身で、6世紀末に属するものである。4は瓦器椀の底部で、内面には斜格子状のヘラミガキを施す。12世紀前半に属するものである。26は土師器羽釜で、口縁部は短く直立し、端部は丸い。13世紀後半に属するものであろう。

以下はSD301が機能した時期の遺物である。5-10は土師器皿で、5-7は小型品、8-10は大型品である。5・6は底部中央が凹む皿で、口縁部をヨコナデし、端部をつまみ上げている。7は丸底である。8-10は口縁部が外反するもので、端部の形状は様々である。

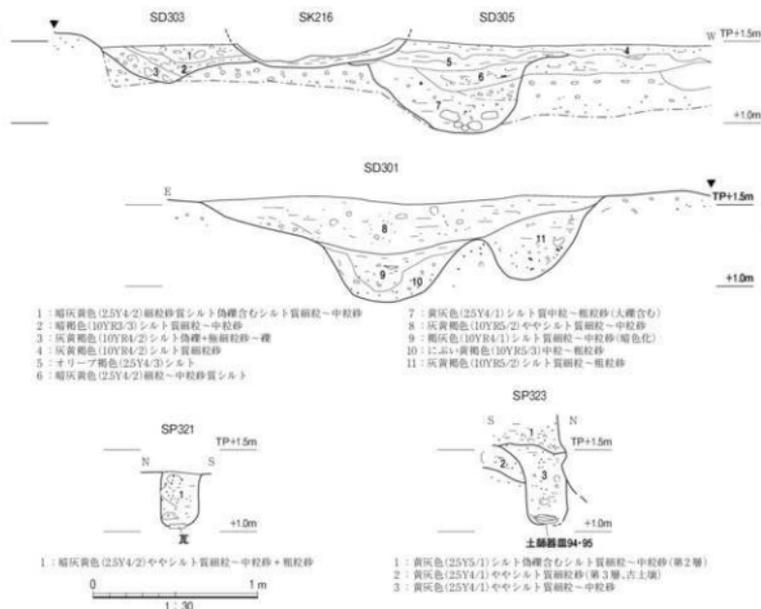


図6 中世の遺構断面図

11・12は中国産白磁である。11は皿底部で高台に挟り込みを有し、高台内に「大カ」の刻書を有する。12は碗底部で、高台内には「月」の墨書を有する。13は中国産青白磁の小碗底部で、内面に型押しで花文を施す。14は中国産青磁の碗である。

15～20は古瀬戸である。15は平碗、16は鉦皿、17は折縁深皿の口縁部である。18は折縁深皿の底部で、内面の施釉は粗雑である。19は壺ないしは鉢の底部である。20は小型の袴腰形香炉で、三脚を有し、底部外面を糸切りする。

21～23は備前焼である。21・22は播鉢、23は甕である。24・25は瓦質土器の甕である。24は口縁部が長く外反する。25は口縁部がごく短く端部は丸い。

27～45は瓦質土器の羽釜である。27・28は短く内傾する口縁部の直下に幅の狭い鐙が付くものである。29～39は口縁部が短く内傾し、外面に3段の稜を有するものである。このうち29～32は口縁部または鐙に1ないし2個の円孔を穿つものである。このタイプは口径が20cm未満である。33は口縁部外面の稜の断面が円弧状を呈するもので、口縁部内面まで刷毛目を施すものである。34～39は口径が20cm以上を測るもので、このうち34・35は口縁部が比較的短いものである。36・37は口縁部が長く、34・35に比べて最下段の稜線から鐙の取りつく位置までの間隔が広いものである。40～45は口縁部外面に2段の稜線を有するものである。口縁部の長さによって、比較的長いもの40・43・44とこれ以外の41・42・45に分けられる。46～51は瓦質土器の播鉢である。46は小型品で、片口を有する。47は

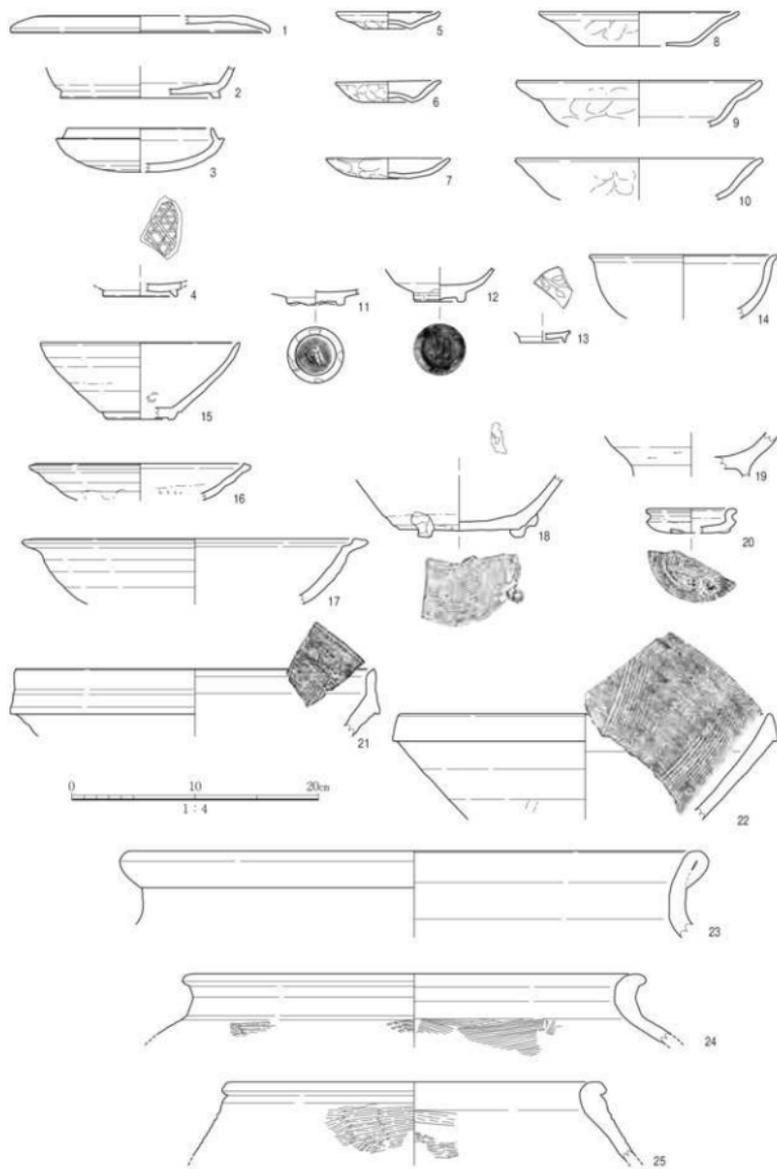


图7 SD301出土遗物实测图(1)

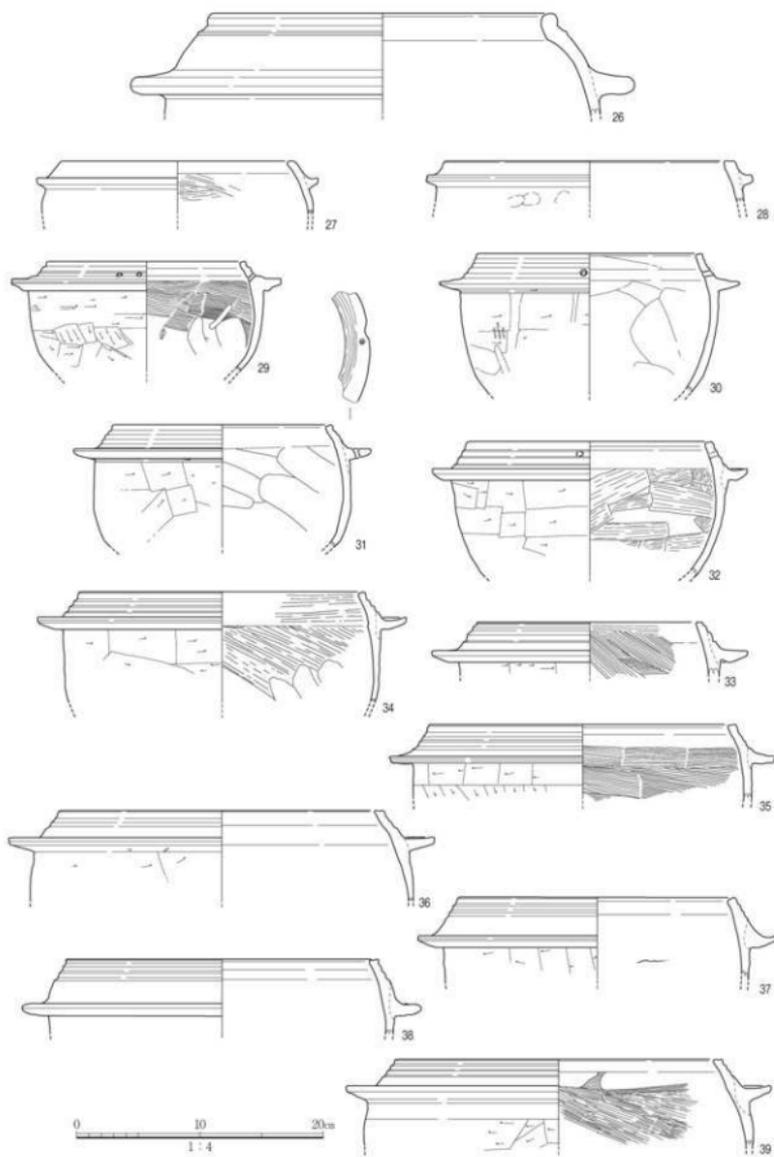


图8 SD301出土遗物实测图(2)

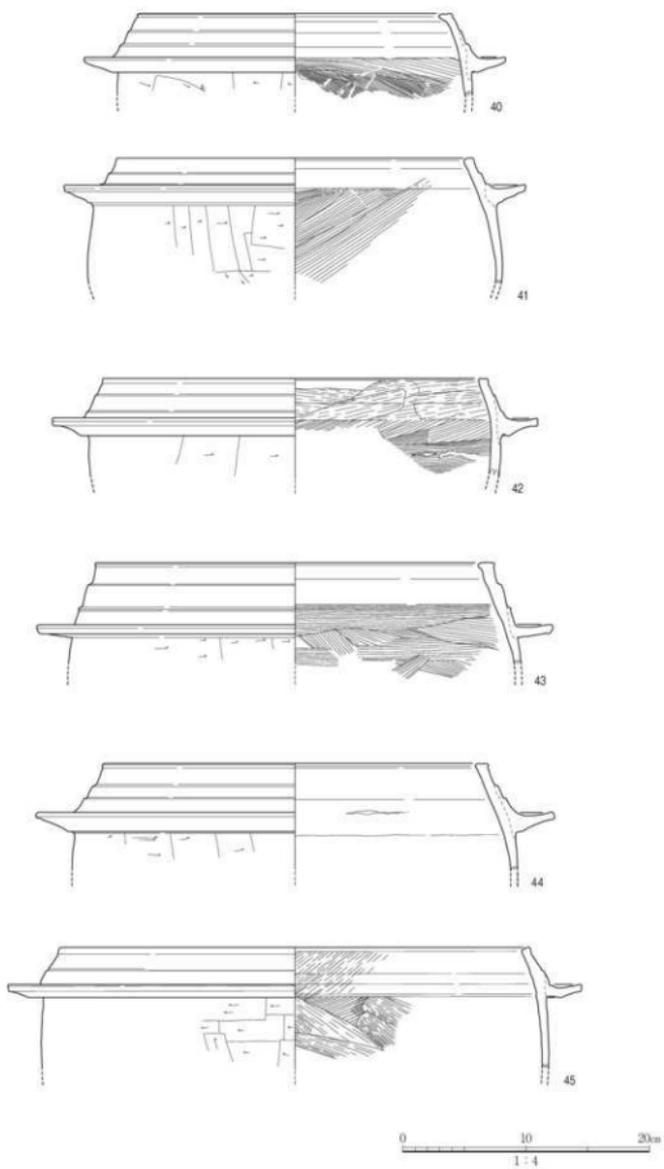


图9 SD301出土遗物实测图(3)

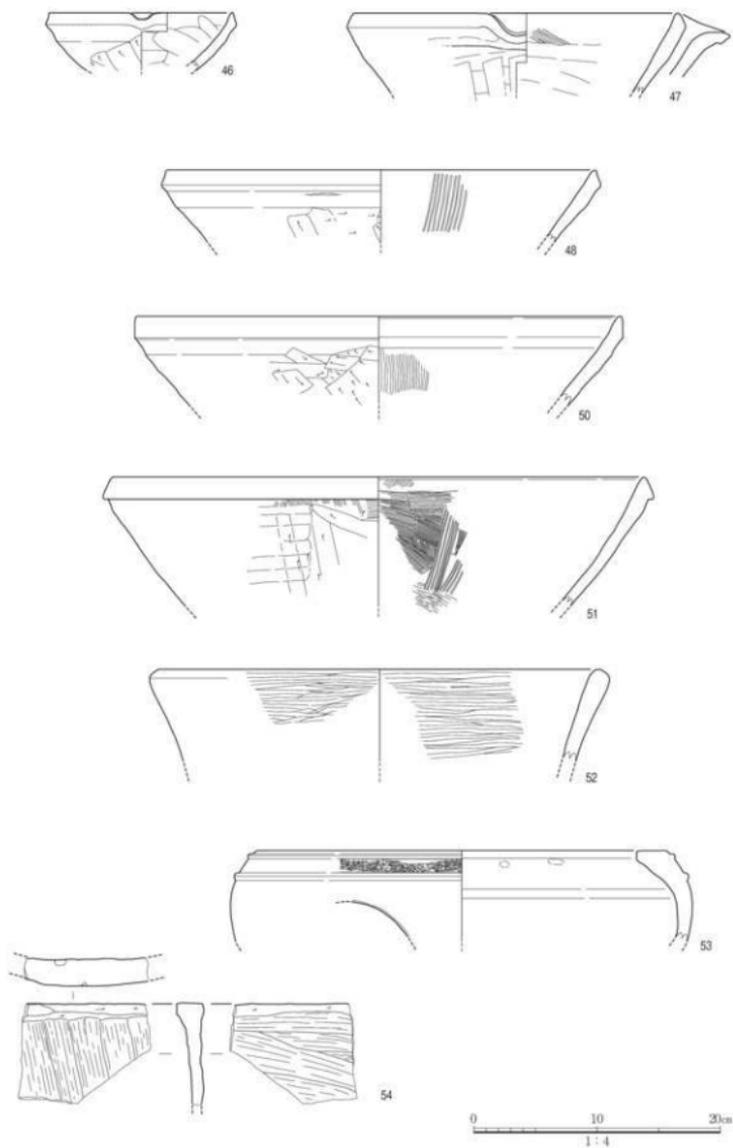


图10 SD301出土器物实测图(4)

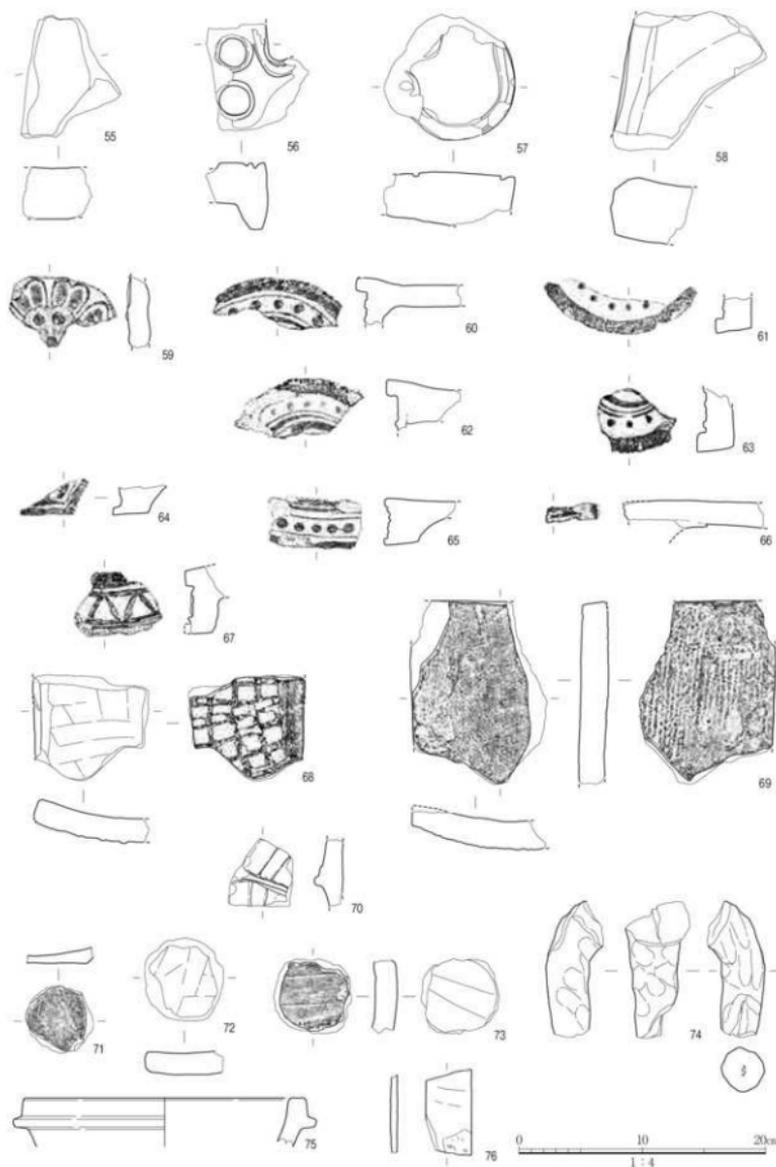


图11 SD301出土遺物実測図(5)

口縁端部の稜線があまい。52・53は奈良火鉢である。53は口縁部にスタンプ文様を施し、外面には透かし孔を有する。54は瓦質土器の井戸側である。

55～70は瓦である。なお、瓦のほとんどは平安時代～南北朝期までの丸・平瓦で、軒瓦はごくわずかである。55～58は鬼瓦の一部とみられる破片である。55の外面には煤が付着する。59は平安時代以前に遡る連華文軒丸瓦である。60～63は鎌倉時代～南北朝期の巴文軒丸瓦とみられ、珠文部分が残存する。64～67は軒平瓦である。64は唐草文、65は連珠文、67は鋸歯文を施す。68・69は平安時代以前と考えられる平瓦である。70は薄い瓦質製品であり、線刻で文様を施す。71～73は陶器や瓦を円板状に加工した土製品で、71は古瀬戸、72・73は瓦を二次加工している。74は棒状の不明土製品で、てづくねで整形している。形象埴輪の一部である可能性がある。75は滑石製石鍋、76は砥石である。

以上の遺物のうち、土師器の特徴は14世紀後半と考えられるTJ00-2次調査のSD477・SE202出土遺物や[大阪市文化財協会2002]、14世紀末～15世紀前半のOS11-16次調査の第8層上面遺構出土遺物と類似する[大阪文化財研究所2012]。また、瓦質土器には15世紀初頭～第1四半期とされるCU94-2次調査のSK13・17出土遺物[大阪市文化財協会1996]と類似するものが多い。これらからみて、溝の存続時期は14世紀後葉～15世紀前半と考えておきたい。

SD303は幅0.8m、深さ0.8m、SD305は幅1.0m、深さ0.6mの南北溝で、1.7m間隔において並行する関連する遺構と考えられる。それぞれ中位に泥質なシルト質細粒～中粒砂ないしは細粒～中粒砂質シルト層が堆積しており(図6-2・6層)、溝機能時には水が溜まっていたようである。北側で浅い土壌SK302と連結し、以北へは延びないことから、これと関連する溝と考えられる。また、南側には不整形な落込み状の土壌SK306があるが、SD303・305がこれと連結していたか重複していたのかは確認できなかった。SD305からはシジミ貝の集積のほか、ウマもしくはウシの脛骨が出土した。出土遺物はSD305の77・78、SD303の79を図化した(図12)。77は古瀬戸で口縁部が大きく開く花瓶である。78は常滑焼の甕で、口縁部は断面し字で受け口状を呈する。頸部から肩部にかけてはなだらかに開く。13世紀中葉であろう。79は土師器皿である。内外面には指頭圧痕が顕著に残る。口縁部は底部からやや屈曲して立ち上がる。

土壌は、調査区中央から北西部・南部にかけて分布する大型の土壌(SK302・306・307・309)のほか、南西部を中心に分布する小型の土壌群がある。また、後者のエリアには直径0.2m以内のさらに規模の小さい遺構も存在し、これらを小穴として区分した。

SK302は北西側の輪郭が不明瞭であるが、一辺3.5mの方形土壌に復元され、深さが最大で0.3m前後ある。上述したように南側のSD303・305と連結し、SD303はSK302の東辺外周を巡り、SD305はSK302内で東辺が段差となって残り、SK302内の東半は溝と対応するように西側に向かって階段状に低くなる。埋土は細粒砂質シルト層で、踏込み等により乱れていたことから作土の可能性もある。SK302から出土した遺物は、80～86を図化した(図12)。80・81は土師器皿である。いずれも外面の指頭圧痕が顕著である。82は瓦質土器の挿鉢で、口縁部は断面三角形を呈し、稜線が明瞭である。83は瓦質土器の甕底部で、平底である。84は底部を糸切りする古瀬戸の甕である。85は中国産白磁の皿で、高台に挟りこみを有する。86は中国産青磁の碗で、口縁部外面には圈線を有する。

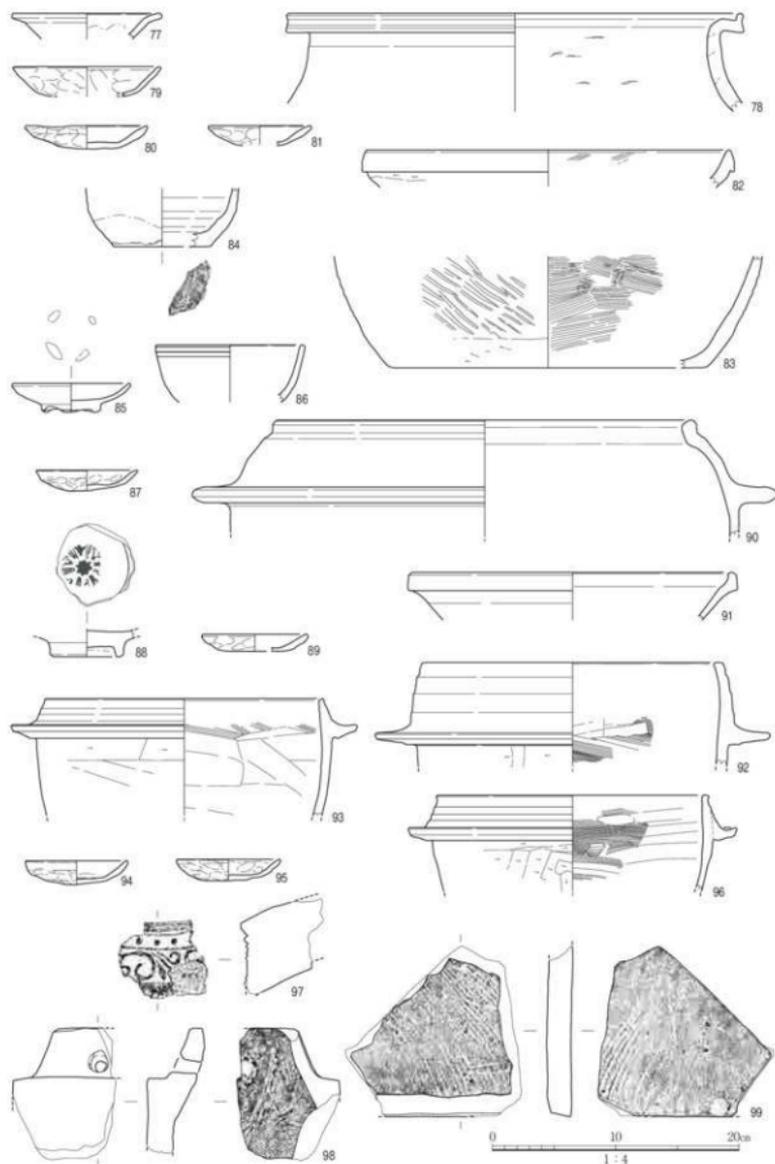


图12 第3层上面遺構出土物実測図

SD303(79)、SD305(77・78)、SK302(80~86)、SK309(87・88)、SK308(89~93)、SP323(94・95)、SK306(96~99)

SK309はSK302の北西側で検出した土壌で、南辺の輪郭が不明瞭であるが、平面が東西3.2m、南北2.3mの楕円形土壌に復元され、深さが最大で0.4mある。SK302との重複関係が判然とせず、一連の遺構の可能性も残されている。出土遺物は87・88を図化した(図12)。87は土師器皿である。底部は丸底気味で、内外面の指頭圧痕が顕著である。88は中国産青磁の碗である。底部内面に印刻花文が見られる。

SK307はSK309の北西側、調査区北壁付近で検出した土壌で、東西幅が2.8m、深さ0.3mあり、部分的に深い箇所がある。埋土の中位に偽礫化した白色シルトが連続していた。

SK306は調査区中央南端で検出した落込み状の土壌で、上位層の遺構に削平され落ちの北端を確認したにとどまるが、調査区南壁断面では東西幅が7.0m以上、深さが最大で0.7mと規模が大きい。埋土はシルト質細粒砂層で、中位付近にシルト偽礫が連続的に分布する。また、上部で瓦や拳大の礫が集積していた。出土遺物は96～99を図化した(図12)。96は瓦質土器の羽釜である。97は均整唐草文の軒平瓦である。平安時代以前に遡る。98は丸瓦、99は平瓦である。両面に孤線状痕があり、粘土板から素材を切り離す際にコビキの手法を用いている可能性がある。

調査区南西部には平面が円形ないしは不整形形で1.0m前後の土壌SK304・310・313・316・318・324が密集し、やや北側に離れてSK308がある。深さはSK310が0.6m、それ以外が0.3m前後である。埋土中に機能時堆積層は認められない。SK310・312・313は重複しており、SK310が最も新しい。また、SK304は北東端と南東端の底から平石が出土した。特に北東端のものは一辺15cm、厚さ6cmの正方形に加工した凝灰岩で、礎石を土壌内に廃棄したものか、あるいは正置した状態であったため本来の位置をとどめる礎石の可能性もある。出土遺物はSK308から出土した89～93を図化した(図12)。89は土師器皿である。90は13世紀代に属する土師器の羽釜である。91は13世紀代に属する東播系須恵器のこね鉢である。92・93は瓦質土器の羽釜である。92は口縁部が長く、体部が守胴なタイプである。

これらの土壌群と近接する小穴はSP314・315・317・319～323がある。平面が直径0.2～0.3mの円形ないしは楕円形、深さ0.2～0.5mある。柱痕跡は確認されなかったが、SP321は底に平瓦を敷いていたことから柱穴の可能性もある。調査範囲が狭いため建物を復元することは難しいが、上述したSK304の平石と合わせて小規模な建物が存在した可能性がある。また、SP323の底には土師器皿を2枚、下を正置、上を倒置した状態で重ねて埋納していた。土師器皿94・95はいずれも底部は丸底気味で、内外面の指頭圧痕が顕著である(図12)。

以上、第3層上面および層内で検出した中世の遺構は、東に南北大溝、中央に耕作に係る可能性のある南北溝および浅い土壌、南西に建物の一部の可能性のある小穴や土壌が分布していた。第3層中および各遺構から出土した遺物は一部に13世紀代以前に遡る遺物を含んでいるが、南北大溝SD301が機能した時期と同じ14世紀後葉から15世紀前半にかけてのものが最も多い。

#### b. 豊臣前期

第2層上面で溝・井戸・土壌・小穴を検出した(図13・14)。

溝は調査区東半で検出した東西方向のSD204・209・210・222・223、調査区西半で検出した南北方向のSD219がある。

調査区東半で検出した東西溝のうち、北側のSD204・210は幅0.6m、深さ0.2mあり、ともに西側で途切れていた。埋土はSD204が第1層、SD210が第2層で、埋没には時期差がある。また、南側のSD222・223は第2層内の遺構で、幅0.2～0.3m、深さは0.1m未満であるが、一部が0.3mと急に深くなる箇所がある。SD209はSD222と一連の溝と考えられる。SD204から出土した遺物のうち、100～103を図化した(図15)。100は瀬戸美濃焼の灰軸内禿皿である。101は産地不明の壺底部で、高台を有する。内面には自然軸が付着する。古瀬戸の可能性がある。102は備前焼の搦鉢である。103は軟質施釉陶器で、馬の人形の体部である。鞍は剥離している。全体に馬具が丁寧に表現されている。手綱や尻繫の部分や鞍の後輪は黒色、尾は赤色で彩色されている。焼成は堅緻、胎土は精良である。類例を知らない。

調査区西半で検出した南北溝SD219は幅0.2m、深さ0.1m前後あり、途中で攪乱により削平されているが、南半では西側が0.1m程高くなる段差の下端に位置する。西側の高い部分は細かな単位で整地された平坦面をなし、段の東端には拳大の平石が1.2～1.3m間隔で南北に並ぶ。このことから、平石を礎石とした建物が段の西側平坦面に存在し、段の下に位置するSD219は建物に伴う排水用の溝の可

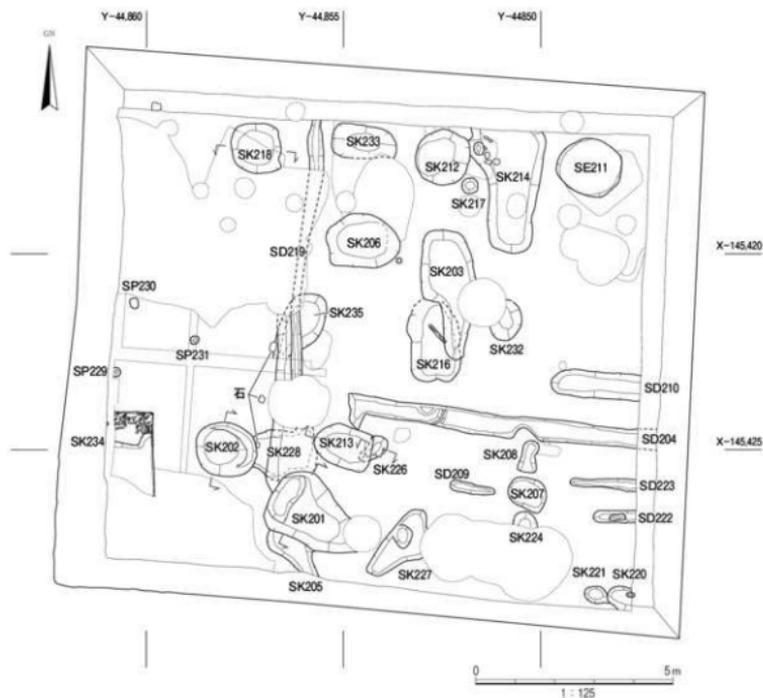


図13 壺屋前期の遺構(第2層上面)平面図

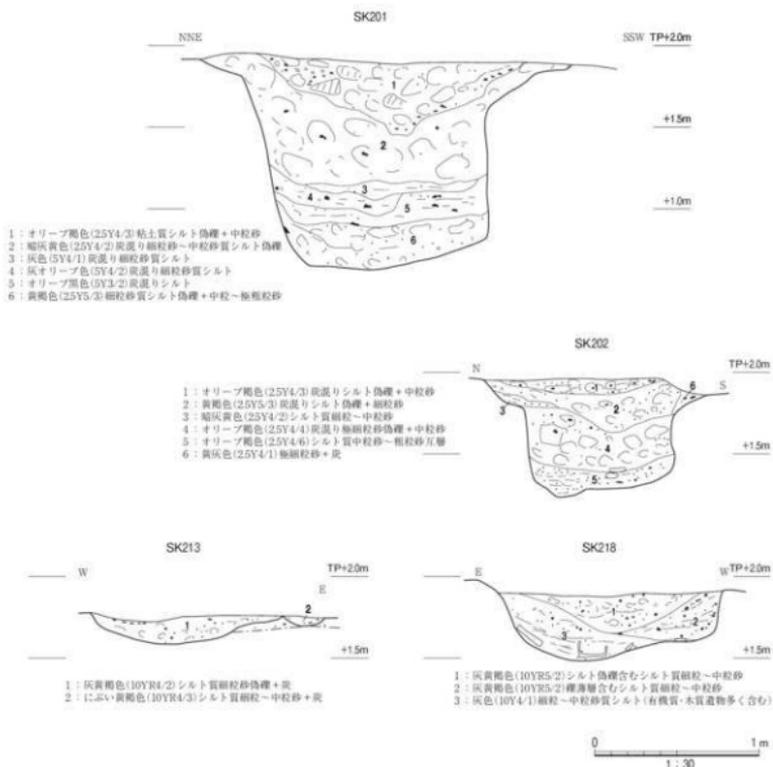


図14 豊臣前期の遺構断面図

能性がある。

土壌は調査区全域で検出したが、形状や埋土の特徴、分布からいくつかのグループに分けることができる。

まず、調査区南西部には平面の長軸が1.0m以上の不整形で深さが0.2m前後と浅く、埋土中に炭粒を含むという特徴をもつ土壌SK205・213・226・227・228が分布する。スラガや炉壁・鋳型などの鋳造関連遺物が出土するものが含まれることから、鋳造作業に伴う廃棄土壌と考えられる。SK205からは溶解炉などの鋳造関連遺物が多数の拳大の石とともに集積して出土した。SK213・226・228は重複関係にあり、SK213が最も新しく、SK228は上述した段や礎石の可能性のある平石の設置に先行するものである。

SK213から出土した遺物は135~139を図化した(図17)。135は瀬戸美濃焼の灰軸丸皿である。136は土師器で大和型羽釜の口縁部である。137~139は鋳造に関連する遺物である。なお、以下の鋳造関

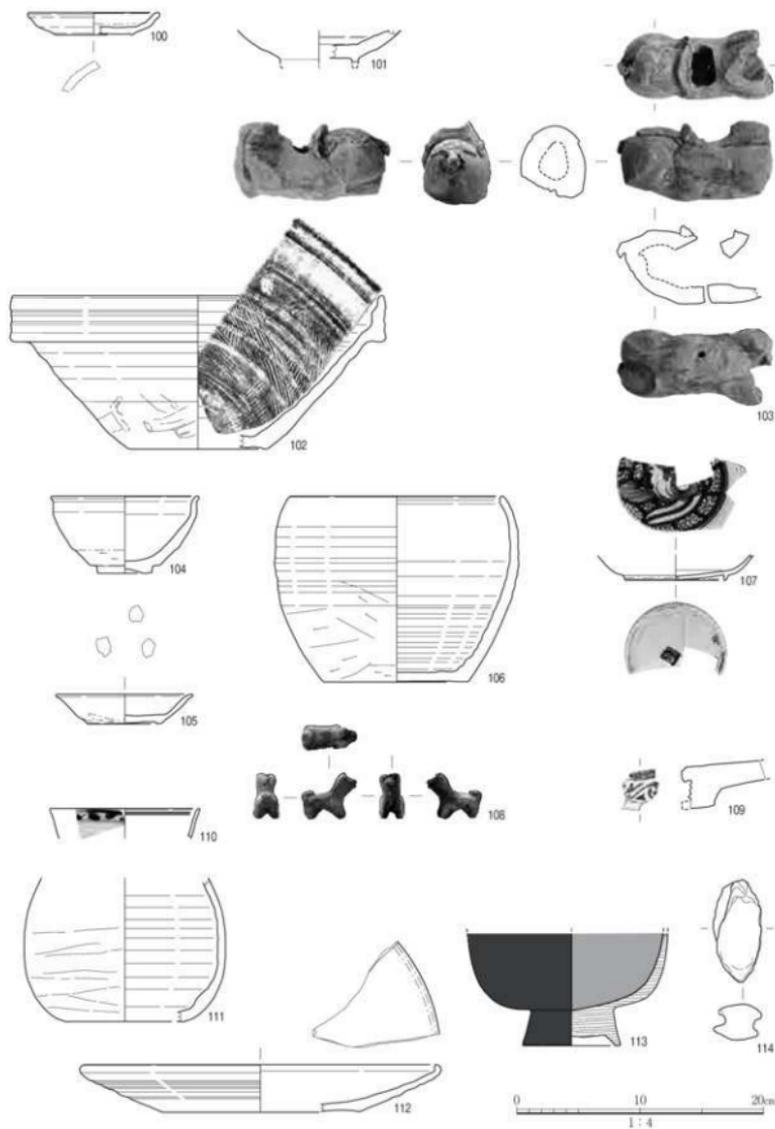


図15 豊臣前期の遺構出土遺物実測図(1)

SD204(100~103)、SK203(104~109)、SK216(110~112)、SK206(113・114)

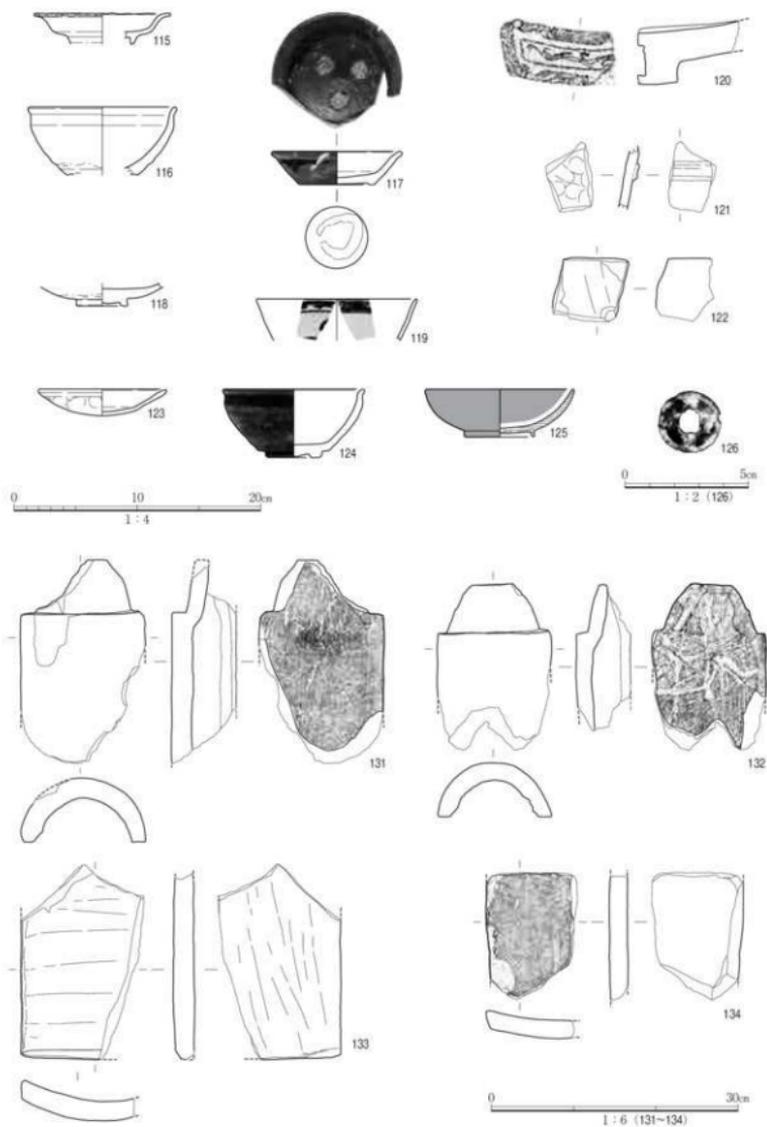


図16 豊臣前期の遺構出土遺物実測図(2)  
 SK221(115)、SK214(116~122)、SK218(123~126)、SK235(131~134)

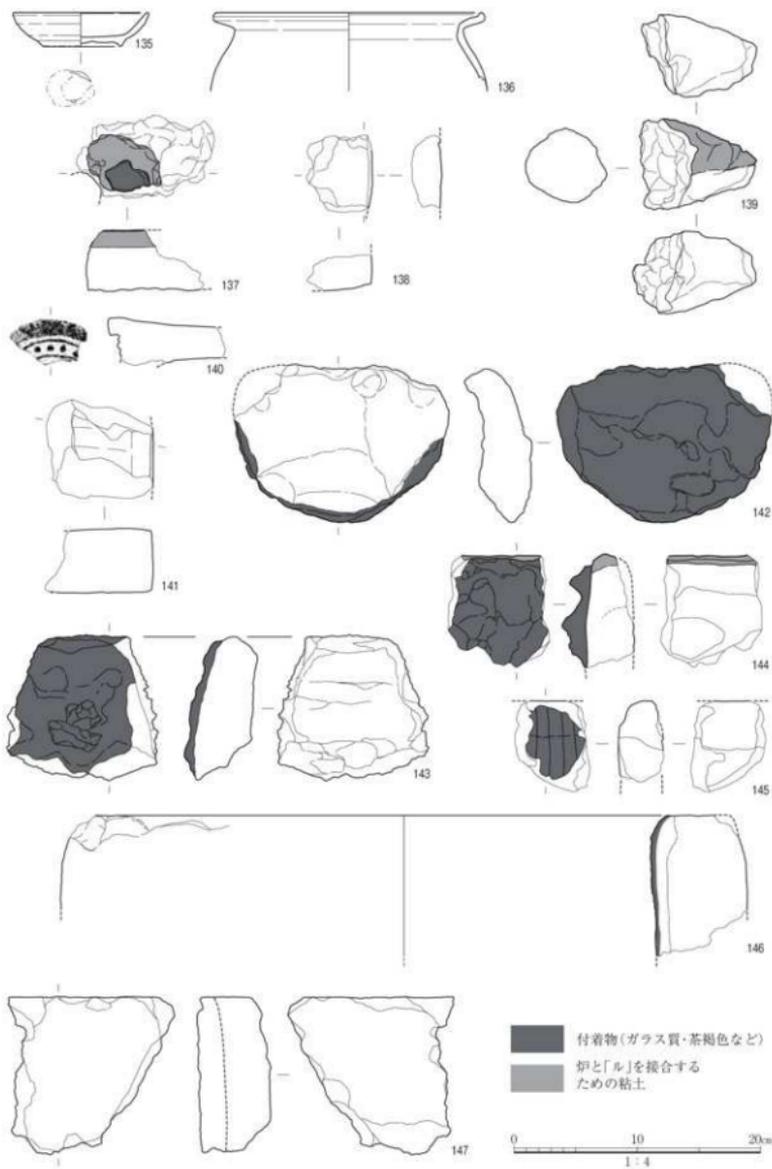


図17 豊臣前期の遺構出土遺物実測図(3)  
SK213(135~139)、SK205(140~146)、SK234(147)

連用語については、[大阪市文化財協会2004]による。137は挽型による鋳型で、鍋底部の湯口にあたる部分であろう。クロミが残る。138は鞆先の鋳型の外型で、側片部に当たる破片とみられる。139は鋳型焼成用の支脚で、通常よりもかなり大型である。大型の鋳型作成時に使用したものであろう。

SK205から出土した遺物は140～146を図化した(図17)。140は巴文軒丸瓦である。141は土師質の土製品で、埴の可能性が高い。142～146は鋳造に関する遺物である。142は鋳造用溶解炉の最下段で溶けた地金を溜める「ル」の口縁部を閉塞するための土製品である。同様の土製品はOS86～20次調査など周辺でも出土している[小田本富慈美2021]。143～146は溶解炉である。143・144は「ル」口縁部片である。145も「ル」である可能性が高いが、付着物は少ない。146は「ル」の上に載せる炉中段である。直径は外径で60cm程度になるとみられる。内面の付着物の観察からは、上端部に当たると考えられる。

SK234は調査区南西端で検出した深さ0.1m前後の方形土壙で、東西1.0m、南北2.0mまで確認し、西側は調査区外、南側は攪乱によって破壊されていた。東側辺に横板を当て、これを5cm間隔の細かいピッチで木杭を打ち込んで固定し、床面の北半には径5cm前後の石や土器を敷き詰めていた。SK234からは溶解炉が出土し、鋳造に関連する遺構の可能性が高い。147は溶解炉で、中段の上端部に当たるとみられ、内面の付着物は剥離している(図17)。SK205出土の146と同一個体の可能性がある。

SK235はSK228の北側で検出した、平面が1.0×2.0m、深さが0.2mの楕円形土壙である。第2層掘削中に検出し、SD219に切られていることから、周辺の他の遺構よりは時期が古い可能性がある。埋土からは丸・平瓦が出土しており、131～134を図化した(図16)。131・132はコビキAの丸瓦である。133・134は平瓦である。

また、鋳造と関連する廃棄土壙と重複・近接して分布し、深く掘られた円形ないしは楕円形の土壙にSK201・202・206がある。規模は、SK201が平面1.6m×2.0m以上、深さ1.4m、SK202が平面1.5m前後、深さ0.7m、SK206が平面1.1×0.8m、深さ2.8mあり、いずれも偽磔で埋め戻されていた。SK206から出土した遺物は113・114を図化した(図15)。113は漆碗である。外面は黒漆、内面は朱漆を塗布し、高台は分厚い。114は遊離資料で、工字状土錘である。

一方、調査区の東半から北半にかけては鋳造関連遺物を含まない遺構が分布する。

このうち、SK203・216・218・233は深さ0.2m前後と浅く、埋土中に有機質なシルトの薄層を挟む土壙である。一定期間窪みとしてオープンな状態にあり、ごみ捨て場として使用されたと考えられる。SK203とSK216は別遺構として記録したが、東西両辺がほぼ一致することから、一連の遺構の可能性もあり、その場合は南北3.8m、東西1.5mの長方形土壙となる。SK203から出土した遺物は104～109を図化した(図15)。104・105は瀬戸美濃焼である。104は天目碗、105は鉄釉の皿である。106は備前焼の水指である。口縁部には蓋受けがある。107は中国産青花の皿である。108は大型土製品である。109は唐草文軒平瓦である。104はSK212、105はSD204・SK216、106はSD204・SK214・216、107はSD204・SK206から出土した破片とそれぞれ接合した。SK216から出土した遺物は110～112を図化した(図15)。110は中国産青花の碗である。111・112は備前焼のらっきょう徳利底部と平皿で

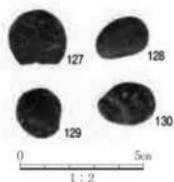


写真1 SK218出土黒基石

ある。

SK218は調査区北西部で検出した直径1.2m、深さ0.5mの円形土壌で、最下部には有機質な細粒砂～中粒砂質シルトが堆積しており(図14-3層)、上部(同1層上面)から木製箸が集積して出土した。木製箸の周辺からはウリの種子が多数出土し、一回の宴席で使用したものをまとめて投棄した可能性がある。箸は最小個体数で50本、25セットある。これ以外の遺物として123～130を図化した(図16、写真1)。123は土師器皿である。口縁部をつまんで成形し、端面内面を窪ませている。124は瀬戸美濃焼の天目碗である。125は浅い漆碗である。内外面とも朱漆を塗布する。126は宋銭で元豊通宝である。このほか、SK218からは黒基石127～130が出土している。

SK212・214・217は調査区北東部で検出した土壌である。SK212が直径1.2m、深さ0.6mの円形土壌で、シルト質の礫で埋められていた。基盤の砂礫層が土壌埋土にほとんど含まれていないことから、砂礫採取を目的としたものの可能性がある。SK217は直径0.4m、深さ0.2mの円形土壌で、外縁に木質が遺存することから埋桶と考えられる。SK214は平面が東西1.2～1.9m、南北3.1m以上、深さが最大で0.2mある土壌で、西傾斜面に拳大の礫が集積しており、土壌底には白色シルト礫層が点在していた。出土遺物は116～122を図化した(図16)。116・117は瀬戸美濃焼の天目碗と鉄軸皿である。118は中国産白磁の皿、119は中国産青花の碗である。120は唐草文軒平瓦である。121は古墳時代後期の円筒埴輪片で、遊離資料である。122は砥石である。

SK207・208・224・220・221・232は調査区南西部で検出した土壌で、平面の長軸が0.5m前後の規模の小さいものが多い。SK207・208・224は南北に、SK220・221は東西に並んでいた。このうち、SK221から出土した115を図化した(図16)。中国産白磁の皿である。口縁部は輪花状を呈する。

小穴は調査区南西部でSP229～231を検出した。前述した細かな整地を行う平坦面で確認したもので、直径0.2～0.3m、深さ0.1m未満で、いずれも微細な木質遺物を含む有機質な埋土である。

以上、第2層上面および層内で検出した豊臣前期の遺構は、調査区南西部の鑄造関連遺物が出土するエリア、調査区南東部の東西溝や小型の土壌が分布するエリア、調査区中央から北半にかけての廃棄場として使用された土壌が分布するエリアに大別される。鑄造関連遺物に関しては、原位置を保持するのではなく、付近で操業していた工房からの廃棄物と考えられるが、SD219西側の細かな整地を行う平坦面は工房の一部で、その一角で検出したSK234も作業に係る施設であった可能性もある。

#### c. 豊臣後期～徳川期

第1層上面で井戸・土壌・小穴を検出した(図18)。

井戸はSE01～05の5基を検出した。

SE01～03は調査区中央南端で東西に並んでおり、同じ敷地内で継起的に掘り直され使用されたものであろう。直径1.5～2.0mの掘形をもち、井戸側はSE01・03が木製、SE02が瓦製である。出土遺物からSE03は18世紀後半、SE02は近代に廃絶したと考えられる。SE04は調査区中央西寄りで検出した直径1.0mの掘形をもつ井戸で、井戸側は木製で、17世紀末から18世紀初頭の陶磁器類が出土した。SE05は調査区中央東寄りで検出した直径1.3mの井戸で、井戸側は瓦製で、17世紀後半の陶磁器類が出土した。

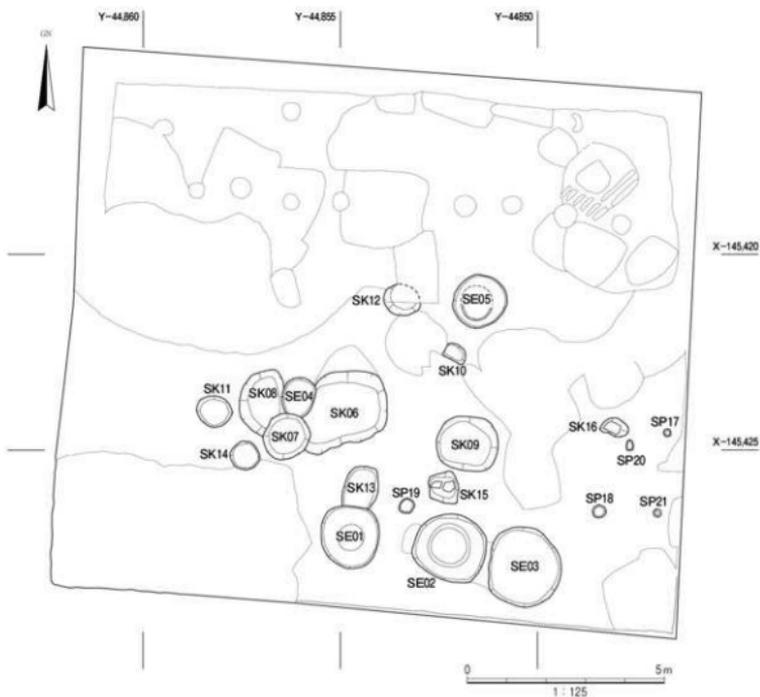


図18 豊臣後期～徳川期の遺構(第1層上面)平面図

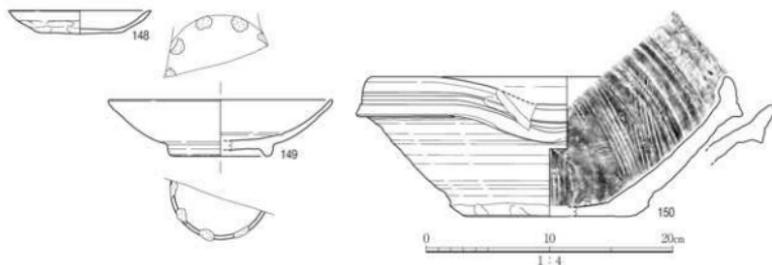


図19 SK07出土遺物実測図

土壇は調査区中央を中心にSK06～16を検出した。

SK13は南端がSE01によって破壊されているが、平面が東西0.9m、南北1.1m以上の隅丸方形、深さが0.4mの土壇で、内側にシルト・中粒～極粗粒砂を貼り、その上に炭と赤色化した粘土が堆積していたことから、炉と考えられる。また、SK15・16は小型土壇の底に平石を敷いており、礎石の可能

性がある。それ以外の土質は埋土の特徴からゴミ穴と考えられる。出土遺物から年代が判明するものは、SK06・07・09が豊臣後期、SK14が17世紀前半の徳川期で、SK07出土の148～150を図化した(図19)。148は土師器皿である。底部は平底気味で、口縁端部内面に面を持つ。149は朝鮮半島産白磁の皿である。150は備前焼の播鉢である。口縁帯は短く、口縁端部内面は窪みが浅い。

小穴は調査区南西部でSP17～21を検出した。直径0.2～0.3m、深さ0.2m前後あり、明確に組み合うものはないが、上記のSK15・16とともに建物の柱穴の一部の可能性がある。

d. 各層出土遺物(図20)

第2～3層より出土した遺物を以下で記載する。これらの多くは豊臣前期に属するものであるが、



図20 包含層出土遺物・遊離資料

第3層(151・152・163)、第2～3層・第2層(153～162・164～170)、SE211(171)

一部16世紀後葉以前に遡るものを含んでいる。151・152は中国産白磁である。151は木瓜形の皿である。152は口縁部が輪花となる皿である。以上は16世紀後葉に属するもので、第3層から出土しているが、上位層に属するものであろう。153～155は中国産青磁である。153は碗ないしは鉢の底部で、軟質焼成で釉の発色も悪い。同安窯製の可能性がある。154は碗の口縁部、155は小型の碗ないしは壺であろう。これらは15世紀代に遡る



写真2 第2層出土木製品

ものであろう。156～159は中国産青花である。156・157は碗で、156の底部は饅頭心である。157は口縁部片である。158・159は皿である。158は底部が碁筒底となる。159は兩龍文を施す。160は瀬戸美濃焼の丸碗である。161は肥前陶器で鉄絵の碗である。豊臣後期に降るものが混入した可能性がある。162は瓦質土器の香炉で、外面に花文様の刻印を有する。奈良火鉢であろう。163は瓦質土器で香炉とみられる。器壁は薄い。164・165は大型土製品である。166は唐草文軒平瓦、167は巴文軒丸瓦である。これらの瓦は鎌倉～南北朝期に属し、下位層に伴うものであろう。168は木製品で横櫓である。このほか第2層からは用途不明の木製品172が出土している(写真2)。樹皮を巻いたもので、柄に巻き付けたものの可能性がある。169は須恵器杯Bの蓋である。8世紀中葉であろう。170は須恵器甕の頸部である。内面には細かな同心円文当て具痕が見られる。古墳時代中期末であろう。

このほかSE211から出土した特徴的な遺物について記述する。171は須恵器で鉢の底部とみられる。外面には多数の刺突を施す。古墳時代後期～飛鳥時代に属するとみられる。

### 3)まとめ

今回の調査成果は以下の3点にまとめられる。

第1に、中世の生活面の基盤層で、前浜からバーム付近の後浜、浜堤へと変化する海成砂層を確認した。調査地付近の大坂海岸低地ではこれまで2本の砂州(砂州A・B)が復元されているが[趙哲済2014]、今回検出したものはこれよりも西側の上町台地に近い場所にある。今回調査地の南東側で行われたOS13-3次調査でも同様の堆積層が確認されており[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015]、この砂州の形成時期や広がりについて今後検討して行く必要がある。

第2に室町時代(14世紀後葉～15世紀前半)の南北大溝、およびこれと同時期の遺構群を検出した。南北大溝SD301からは大量の瓦が出土した。一帯は俊乗坊重源創建の浄土堂の推定地で、13世紀末には文献に「渡部寺」の名前がみえ、調査地周辺でも中世瓦の出土が多い[宮本佐知子1999、黒田慶一2009]。SD301もこうした寺院施設を区画する溝であった可能性がある。

第3に豊臣前期の鍋・犁先銚型を含む各種鑄造関連遺物が出土し、調査地南西部を含む西側でこの時期の鑄造工房が存在していたことが判明した。

本報告をなすにあたり、大阪市立自然史博物館中条武司氏・鴻池新田会別所秀高氏に現地検討を通じて海成層の形成過程についてご教示いただいた。また、安部考古動物学研究所安部みき子氏より出土動物遺体を、大阪歴史博物館の岡本健氏より中世瓦の年代についてそれぞれご教示いただいた。

## 参考文献

- 大阪市文化財協会1996、『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』]
- 大阪市文化財協会2002、『天神橋遺跡の調査』：「大阪市埋蔵文化財発掘調査報告—1999・2000年度—」, pp.181-190
- 大阪市文化財協会2004、『菊田4丁目所在遺跡発掘調査報告』]
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009、『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)』, pp.103-113
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013、『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)』, pp.327-338
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015、『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2013)』, pp.245-266
- 大阪文化財研究所2012、『大坂城跡XIV』]
- 小田木富慈美2021、『近世都市大阪と鑄物師 ～考古学的知見と文献史料からの検討～』：「大阪市文化財協会研究紀要」第22号, pp.43-66
- 黒田慶一2009、『重源の“浄土堂”いずこ?』：大阪市文化財協会編「華火」139号, pp.1-2
- 趙哲済2014、『難波砂州北部～天満砂州南端部の表層地質に関する覚え書き』：大阪文化財研究所・大阪歴史博物館編「大阪上町台地の総合的研究」, pp.23-36
- 宮本佐知子1999、『出土瓦から見た難波京から大坂築城まで』：「大阪市文化財協会研究紀要」第2号, pp.323-337

南壁・中央深掘り東西  
地層断面(北から)



中央深掘り東西地層  
断面(北西から)



東壁・中央深掘り東西  
地層断面(北西から)





第3層下面遺構検出状況  
(南から)



SD301検出状況  
(北から)



SD301シジミ貝検出状況  
(北から)





第2層上面遺構検出状況  
(南から)



調査地のようすと  
第2層上面遺構検出状況  
(東から)



SK205遺物出土状況  
(東から)





SK234検出状況  
(北から)



SK218遺物出土状況  
(南から)



第1層上面遺構検出状況  
(南から)





中央区船越町二丁目20における建設工事に伴う  
大坂城跡発掘調査(OS20-3)報告書

調査個所 大阪市中央区船越町2丁目20  
調査面積 約50㎡  
調査期間 令和3年1月12日～1月21日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋 工、平田洋司

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣期大坂城の惣構西部に位置する。上町台地の西斜面に当り、西の松屋町筋に向けて傾斜が強い地域となっている。近隣の調査としては道路を隔てた南のOS17-7次調査では、現地地表下約4mまでの調査を行い、豊臣前期以前の自然堆積層上の上位で各時期の整地層が確認された。豊臣前期の土壌、豊臣後期の井戸・土壌、徳川期17世紀前半～中葉の作土層、17世紀後葉の礎石建物、18世紀前葉の礎石建物・土壌などが検出されている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2019]。北東のOS87-33次調査では、現地地表下7mまでの調査を行い、各時期の整地層とともに、7世紀中葉の金属加工に関する遺物や豊臣前期の井戸が検出された[大阪市文化財協会2003]。当地域は斜面地に当ることから、段丘層および中世以前の遺構は地中深くに埋没しており、豊臣期以降、城下町の造成に際して各時期に整地が施されている場所といえる。

今回の調査地では大阪市教育委員会によって試掘調査が行われ、現地地表下1.7m以下に近世以前の整地層と遺構面が確認されたため、本格的な発掘調査を行うこととなった。現地における調査は令和3年1月12日から開始した。大阪市教育委員会の指示により、敷地南西部に南北10m、東西5mの調査区を設定した。排土置場の確保のため、調査区を南北に分割して調査を行うこととした。重機による掘削は後述の第7層上面までとし、以下は安全のために壁面に沿って余地を残し、人力による掘削を行った。適宜、遺構検出・掘削作業、記録作成作業を行い、1月21日に現地における調査を完了した。

以下の本文等に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP+○mと記した。また本報告で用いた方位は、現場で作成した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することにより世界測地系座標に乗せたものであり、座標北を基準とした。



図1 調査地位置図

図2 調査区位置図

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3)

調査地の現況地形は平坦で、地表面の標高はTP+7.4~7.6mである。部分的な掘削も含め、調査では現地表下3.4mまでの地層を確認し、第1~7層までに細分した。

第1層：現代の整地層および攪乱で、層厚は薄い部分で60cm、厚い部分で180cmである。

第2層：焼土層で、層厚10cm未満で調査区西南部にのみ部分的に遺存する。第二次世界大戦時に伴うものと考えられる。

第3層：シルト偽礫を多く含む黄褐色(2.5Y5/6)細粒~中粒砂からなる整地層で、層厚15cmで調査区西北部にのみ部分的に遺存する。18世紀中葉以降に位置づけられる。本層上面の遺構として規模の大きな土塀などがある。

第4層：焼土層で、層厚10cm未満で調査区北西部にのみ部分的に遺存する。遺物は出土しなかったが、近隣の調査との対比から妙知焼(1724年)に対応する可能性がある。

第5層：シルト偽礫・炭を含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂からなる整地層で複数に細分可能である。層厚は20~40cmである。17世紀後葉~18世紀初頭に位置づけられる。本層内の整地層上面の遺構として土塀がある。

第6層：炭を多く含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂からなる整地層である。層厚は20cm未満で、

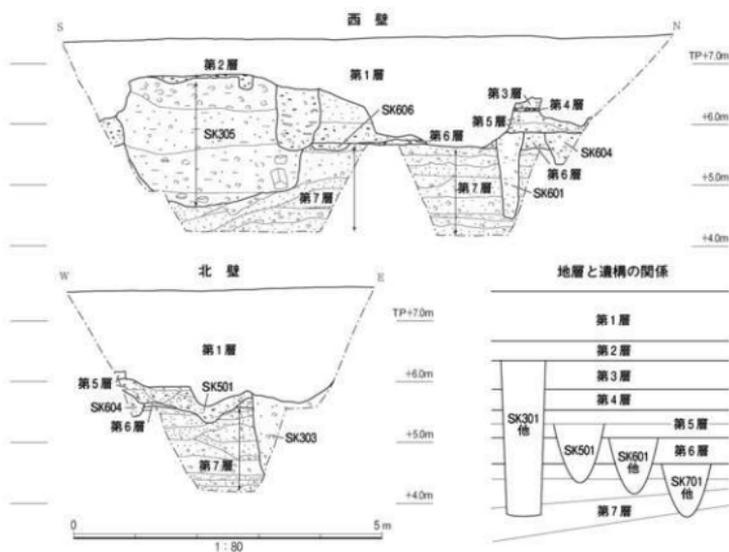


図3 地層断面図

部分的に遺存する。17世期中葉～後葉と考えられる。本層上面の遺構として土壇などがある。

第7層：シルト偽礫を多く含む細粒砂主体の整地層である。本層以下は部分的な掘削でのみ確認した。層厚は140cm以上である。各層は北が高く南側に向けて下がる傾斜となっており、北側から南側へ土が投下されたといえる。部分的に水成層の薄層を介在することから、整地の期間中に降雨などによる土砂の再堆積があったと推定できる。遺物は出土しなかった。本層上面にて土壇・溝が検出された。厚い均質な整地層であること、および近隣の調査成果から、上面に大坂夏ノ陣と考えられる焼土層は認められなかったが、1598(慶長3)年の整地層と考えられる。なお、南のOS17-7次調査では本層より下位に豊臣前期と考えられる水成層が確認されたが、今回の調査地では到達していない。

#### ii) 遺構と遺物(図4・5)

遺構の検出作業は第7層上面にて行った。そのためより上位に本来の遺構面があるものも多く含まれている。調査区壁面や埋土の観察をもとに記述する。

第7層上面の遺構と考えられるものには以下のものがある。

**SK701** 調査区南東端で検出した東西0.5m以上、南北1.2m以上の平面形が不整形の土壇である。深さは0.3mである。埋土は上部がシルト偽礫主体、下部が炭を含むシルト質細粒砂である。17世紀中葉の土師器・肥前陶器・肥前磁器のほか瓦片が出土した。1は土師器皿で口縁部に煤が付着する灯明皿である。

**SK702** 調査区南東端で検出した東西0.5m以上、南北0.5m以上の土壇である。深さは0.3mである。遺構の重複関係からSK701に先行する。遺物は出土しなかった。

**SD703** 調査区北端で検出した幅0.3m、深さ0.1m未満の東西方向の溝である。西をSK601、東をSK603によって切られる。遺物は出土しなかったが、埋土の状況から第7層上面の遺構の可能性はある。

これら第7層上面の遺構は17世紀中

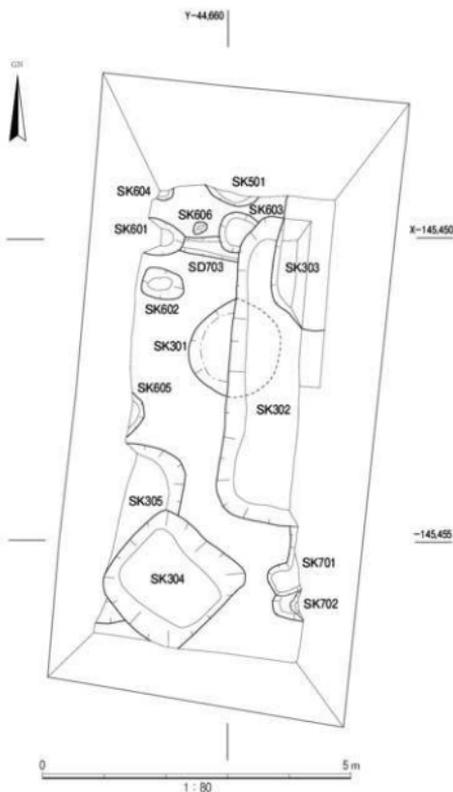


図4 遺構平面図

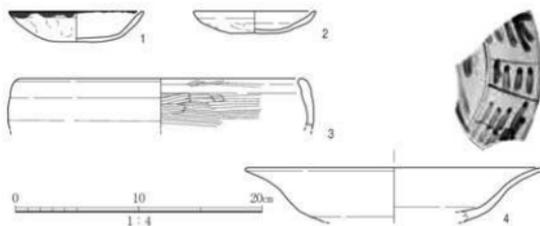


図5 出土遺物実測図  
SK701(1)、SK601(2~4)

葉に年代の一端がある。

第6層上面の遺構と考えられるものとして以下のものがある。

**SK601** 調査区西北部で検出した南北0.6m、東西0.7m以上の土壌で、深さは1.4mと深い。埋土はシルト偽礫・炭を多く含むシ

ルト質細粒～中粒砂である。土師器・肥前陶器・肥前磁器などが出土した。

2・3は土師器で2は皿、3は焙烙である。4は肥前磁器染付皿である。これらの遺物は17世紀中葉～後葉に位置づけられる。

**SK602** 調査区西北部で検出した、東西0.7m、南北0.5m、深さ0.2mの土壌である。平瓦片が出土したのみで、時期は決定できないが、埋土のようすから本層上面の遺構と考えられる。

**SK603** 調査区北端で検出した直径0.6m、深さ0.2mの平面形が円形の土壌である。丹波焼・肥前磁器細片のほか、砥石・瓦片が出土した。17世紀後葉に位置づけられる。

**SK604** 調査区北西端で検出した土壌である。東西・南北ともに0.3m以上、深さは0.5mである。遺物は出土しなかった。

**SK605** 調査区西端で検出した、東西0.3m以上、南北0.7m以上、深さは0.2mの土壌である。埋土は炭を含むシルト質細粒砂である。遺物は出土しなかった。

**SK606** 調査区北端で検出した、直径0.2～0.3m、深さは0.2mの土壌である。遺物は出土しなかった。第6層上面の遺構の時期は17世紀中葉～後葉と考えられる。

壁面の観察から第5層内の整地層上面に遺構面があるものとして以下のものがある。

**SK501** 調査区北端に位置する。東西2.0m以上、深さは0.6m以上で、傾斜の緩い土壌である。遺物は少量であるが、17世紀後葉の肥前陶器・肥前磁器細片のほか、瓦片が出土した。

第5層の遺構の時期は17世紀後葉に年代の一端があり、第4層が妙知焼の可能性あることから、18世紀初頭までのものを含む可能性があるといえる。

第3層上面の遺構と考えられるものとしては以下のものがある。

**SK301** 調査区中央部で検出した直径1.6mの円形の土壌である。検出面からの深さは0.8m以上で、第3層上面からは2.4m以上ある。井戸の可能性もある。19世紀代の肥前磁器・瓦片などが出土した。遺構の重複関係からSK302に先行する。

**SK302** 東西1.2m以上、南北5.0mの平面形が方形の土壌で、深さは東壁の観察から1.6mである。埋土に人頭大以上の石を多く含むことから重機で掘削したため、遺物の詳細は不明であるが、SK301との関係から19世紀以降に位置づけられる。

**SK303** 調査区東北端で検出した東西0.9m以上、南北2.1m以上の平面形が方形の土壌で、深さは

東壁の観察から2.6m以上である。埋土はSK302と同様で、重複関係からSK302より新しい。肥前陶器・関西系陶器・瀬戸磁器などが出土し、19世紀後葉に位置づけられる。

SK305 調査区西南端で検出した東西1.0m以上、南北3.0m以上の平面形が方形の土壇で、深さは西壁の観察から2.1mである。埋土に人頭大程度の石を多く含む。肥前磁器片が出土した。

SK304 調査区西南端で検出した一辺2.0mの平面形が方形の土壇である。検出面からの深さは0.8mであるが、遺構の重複関係からSK305より新しく、深さはSK305とほぼ同じの2.1mに復元できる。土師器・瓦質土器・関西系陶器・肥前磁器など18世紀後葉以降の遺物が出土した。

第3層上面と考えられる遺構は、第7層上面まで達する規模の大きなものしか平面的には検出できていないが、18世紀後葉～19世紀後葉に位置づけられる。

### 3)まとめ

今回の調査は小規模な面積のものであり、深く掘削することはできず、豊臣前期に遡る遺構面を確認することはできなかった。また、豊臣後期以降の各時期の土地利用の実態も面積が狭く、不明な点として残された。一方で、調査地が周辺同様、段丘層が深くに埋没しており、豊臣期に大規模な整地によって、急な傾斜面をなす調査地周辺が嵩上げされていること、また、徳川期以降にも度重なる造成が行われたことが追認された。

調査地周辺では、豊臣期以前の遺構面は深くに埋没していることから、これまでの開発によっても壊されずに残存している可能性が高く、今後の周辺の調査成果が期待できる地域である。

### 引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2019、「中央区船越町二丁目52-2における建設工事に伴う大坂城跡発掘調査（OS17-7）報告書」：「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2017)第1分冊」、pp.359-368
- 大阪市文化財協会2003、「OS87-33次およびその周辺の調査」：「大坂城跡Ⅳ」、pp.151-156



西壁地層断面  
(南半：東から)



西壁地層断面  
(北半：東から)



最終掘削状況  
(南半：北から)





最終掘削状況  
(北半：北から)



第7層上面  
(南半：北から)



第7層上面  
(北半：南から)





中央区北浜東 2 - 13・14における建設工事に伴う  
大坂城跡発掘調査(OS20-4)報告書

調査個所 大阪市中央区北浜東2-13・14  
調査面積 112㎡  
調査期間 令和3年1月28日～2月19日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋 工、積山 洋



査に限られることになった。

調査面積、調査期間等は冒頭に記したとおりである。

以下の本文等に示す標高値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、 $TP \pm \bigcirc$ mと記した。また本報告で用いた国土座標値は現場で作成した街区図を1/25000大阪市デジタル地図に合成することにより世界測地系座標に乗せたものであり、方位は座標北を基準とした。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3～6)

現地表面の標高は $TP+3.8\sim 4.0$ mである。以下で述べる地層は、第1・第2層が人為的な盛土による近世の整地層である。この整地層は厚さが約2mに及び、多数の薄い盛土層で構成されていたが、北区で検出された南北溝SD09を伴う遺構面より上位層をまとめて第1層とし、下位の盛土層をまとめて第2層とした。第2層上面の高さは北端で $TP+1.3$ m、南端で $TP+2.0$ mである。下位層の第3層は水成層であり、上面は $TP+0.4\sim 0.6$ mで検出された。最終的に $TP-0.2$ mまで掘削したが、地山である上町層は検出されていない。

第0層：現代の整地層である。層厚は140～160cmである。機械で掘削した。

第1層：層厚は南端で50cm、北端で90cmである。本層中で検出された礎石建物SB05の生活面を境として、上位層を第1a層、下位層を第1b層と二分した。本層はa・b層ともに褐色系のシルト・砂などを主体とし(註1)、炭・灰により黒色化した薄層を含む厚さ10～20cmほどの盛土層多数から成る。北区では人力による平面的な遺構検出は第1a層中で開始した。この遺構検出作業において、豊臣後期のSK03および徳川期後半にいたる時期の遺構が検出された。ただ、この区分は調査後設けたもので、調査時点では一括して掘り下げた。第1a層上面の生活面は失われていたが、そこから掘り込まれたと推定できるSK03には多量の焼土偽礫が含まれており、これが大坂城が落城した慶長20(1615)年の夏ノ陣の焼土であると考えられる。また本層出土の軒平瓦からも、第1層の年代の下限は豊臣後期である。

第2層：層厚は南端で140cm、北端で80cm以上である。本層中で検出された礎石11・12より上位層を第2a層、礎石13までを第2b層、さらに下位層を第2c層とする。本層も上町層に由来する黄褐色系のシルト・砂を主体とする多くの薄層で構成される。第1層と異なるのは、全体に南から北へ降る傾斜が強く、かつ黒色化した薄層をやや多く含むことなどである。第2a層上面で南北溝SD09や粘土壁SX10が検出され、さらに下部層で礎石11～13が検出された。

SD09出土の陶磁器により、第2層は豊臣前期の盛土層である可能性が高く、文禄3(1594)年に始まる惣構築造以後と位置づけられる(註2)。

第3層：南区で掘削した深掘りトレンチで検出した地層である。 $TP+0.6$ m以下に堆積しており、層厚は最大60cm余で、2層に細分される水成層であり、北側の大川の水面がこの地に及んでいたこと

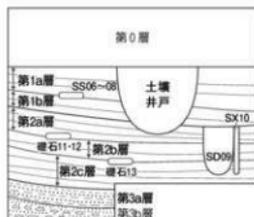
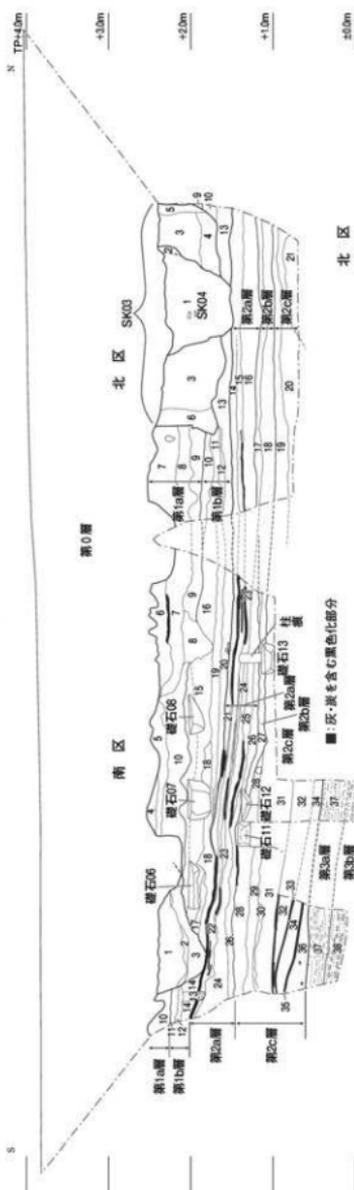


図3 地層と遺構の関係図

西壁



北区

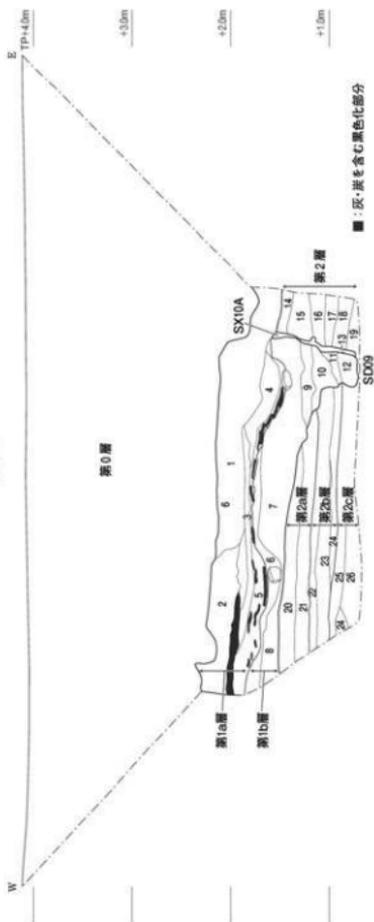
- 1 : 黄褐色(10YR5/6)粗粒砂・褐色と黄土を多く含む
- 2 : 土赤・黄褐色(10YR5/6)粗粒砂・灰黄褐色(10YR6/2)中粒砂
- 3 : 土赤・黄褐色(10YR5/6)粗粒砂・黄褐色(10YR4/7)中粒砂
- 4 : 土赤・黄褐色(10YR5/6)粗粒砂・粗灰黄褐色(2.5Y5/2)粗質シルト
- 5 : 黄褐色(10YR5/6)粗粒砂
- 6 : 土赤・黄褐色(10YR5/6)粗粒砂
- 7 : 土赤・黄褐色(10YR6/0)砂混り粘質シルト・黄褐色(2.5Y5/4)粗粒砂
- 8 : 灰黄褐色(10YR5/2)粘混り粘質シルト・褐色(10YR4/6)シルト混り粗粒砂
- 9 : 灰黄褐色(2.5Y6/2)粘混り粘質シルト・暗黄褐色(10YR6/6)シルト混り粗粒砂
- 10 : 土赤・黄褐色(10YR5/6)粗粒砂
- 11 : 土赤・黄褐色(10YR5/6)粗粒砂
- 12 : 灰黄褐色(10YR5/2)粘混り粘質シルト・黄褐色(10YR5/6)粗粒砂
- 13 : オリーブ褐色(2.5Y4/1)~土赤・黄褐色粗粒砂・褐色(黄を含有)
- 14 : 黄褐色(2.5Y6/2)粘混り粘質シルト・黄褐色(10YR5/6)粗粒砂
- 15 : 黄褐色(10YR5/6)粗粒砂
- 16 : 黄褐色(2.5Y5/2)粗粒砂・黄褐色(2.5Y5/2)シルト混り粗粒砂
- 17 : 黄褐色(10YR5/6)粗粒砂・オリーブ褐色(1.5Y5/1)粘質シルト混り中粒砂・土赤・褐色(2.5Y6/3)粗粒砂
- 18 : 土赤・黄褐色(2.5Y6/2)粗粒砂・黄褐色(2.5Y4/1)粗粒砂・黄褐色(2.5Y5/2)粘混り粗粒砂
- 19 : 土赤・黄褐色(10YR5/6)シルト混り中粒砂・土赤・黄褐色(2.5Y6/3)粗粒砂
- 20 : 黄褐色(10YR4/6)シルト混り中粒砂・黄褐色(2.5Y5/2)粘混り粘質シルト
- 21 : 褐色(10YR4/6)シルト混り中粒砂・黄褐色(2.5Y5/2)粘混り粘質シルト

南区

- 22 : 褐色(10YR5/1)砂混りシルト
- 23 : 灰褐色(2.5Y7/3)中粒・粗粒砂・粗灰黄褐色(2.5Y4/2)粗粒砂
- 24 : 灰黄褐色(2.5Y6/6)粗粒砂
- 25 : 明褐色(7.5YR5/6)粗粒砂・オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂
- 26 : 明褐色(7.5YR5/6)シルト混り中粒砂・黄褐色(2.5Y5/2)粗粒砂
- 27 : 土赤・黄褐色(2.5Y6/4)シルト混り中粒砂・黄褐色(2.5Y5/2)粗粒砂
- 28 : 明褐色(7.5YR5/6)粗粒砂・灰褐色(2.5Y4/1)粗粒砂・黄褐色(黄を含有)
- 29 : 黄褐色(2.5Y5/6)中粒砂・土赤・黄褐色(10YR5/0)粗粒砂
- 30 : 黄褐色(2.5Y5/6)中粒砂・褐色(黄を含有)・土赤・黄褐色(10YR5/6)粗粒砂
- 31 : 土赤・黄褐色(2.5Y6/4)粗粒砂・黄褐色(2.5Y4/1)粗粒砂・黄褐色(黄を含有)
- 32 : 黄褐色(2.5Y5/4)粗粒砂
- 33 : 褐色(10YR5/2)シルト混り中粒砂・灰黄
- 34 : 土赤・黄褐色(2.5Y6/4)中粒砂・灰オリーブ色(5Y6/2)シルト混り中粒砂
- 35 : 土赤・黄褐色(2.5Y6/4)粗粒砂
- 36 : 灰褐色(7.5Y7/2)粗粒砂
- 37 : 灰褐色(7.5Y7/5)粗粒砂・シルト・粘土(ラミナリ)層・一部にラミナリ層
- 38 : 黄褐色(2.5Y5/5)粗粒砂・粗粒砂・シルト
- 39 : 灰白色中粒砂(白化0.5)
- 40 : 灰白色中粒砂(白化0.5)
- 41 : オリーブ褐色(2.5Y4/4)砂混りシルト・明褐色(7.5YR5/8)砂混りシルト
- 42 : オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト混り粗粒砂・黄褐色(10YR4/6)砂混りシルト
- 43 : オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト混り粗粒砂・黄褐色(10YR4/6)砂混りシルト
- 44 : 灰黄褐色(2.5Y5/2)砂混り粘質シルト・灰オリーブ色(5Y6/2)粘質シルト
- 45 : 灰黄褐色(2.5Y5/2)砂混り粘質シルト・黄褐色(2.5Y5/3)粗粒砂
- 46 : 灰黄褐色(2.5Y5/2)砂混り粘質シルト・黄褐色(2.5Y6/4)粗粒砂
- 47 : 灰黄褐色(2.5Y7/2)粘土・黄褐色(10YR5/6)粗粒砂
- 48 : 灰黄褐色(2.5Y7/2)粘土・粘質シルト・黄褐色(2.5Y5/4)砂混りシルト
- 49 : 黄褐色(2.5Y5/6)~暗褐色(10YR5/6)粗粒砂
- 50 : 土赤・黄褐色(10YR5/6)粗粒砂・粗灰黄褐色(2.5Y5/2)粘混り粗粒砂

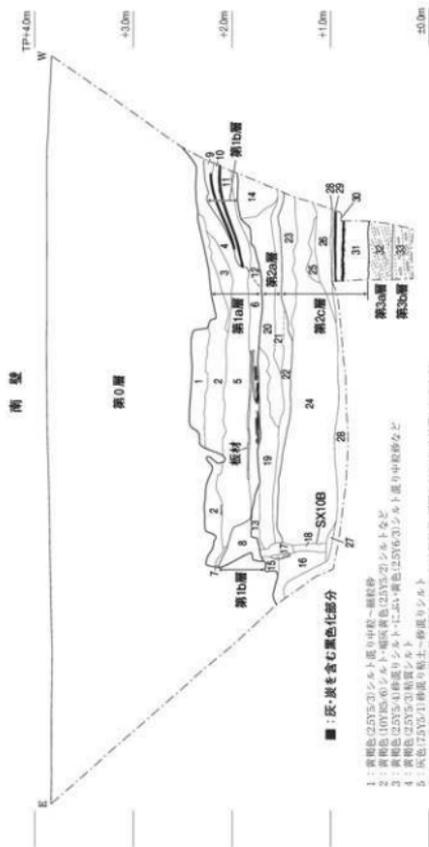
図4 西壁地層断面図

北壁



- ：灰・炭を含む黒色化部分
- 1：L25a、黄褐色100YR5.4/1砂混りシルト、褐色2.5YR4.4/0粗粒砂
  - 2：L25a、黄褐色2.5Y5.2/1シルト混り粗粒砂
  - 3：L25a、黄褐色2.5Y5.2/2シルト混り粗粒砂
  - 4：L25a、黄褐色2.5Y5.2/2シルト混り粗粒砂
  - 5：L25a、黄褐色2.5Y5.2/2シルト混り粗粒砂
  - 6：L25a、黄褐色2.5Y5.2/2シルト混り粗粒砂
  - 7：L25a、黄褐色2.5Y5.2/2シルト混り粗粒砂
  - 8：L25a、黄褐色2.5Y5.2/2シルト混り粗粒砂
  - 9：L25a、黄褐色2.5Y5.2/2シルト混り粗粒砂
  - 10：L25a、黄褐色2.5Y5.2/2シルト混り粗粒砂
  - 11：L25a、黄褐色2.5Y5.2/2シルト混り粗粒砂
  - 12：L25a、黄褐色2.5Y5.2/2シルト混り粗粒砂
  - 13：L25a、黄褐色2.5Y5.2/2シルト混り粗粒砂
  - 14：L25a、黄褐色2.5Y5.2/2シルト混り粗粒砂
  - 15：L25a、黄褐色2.5Y5.2/2シルト混り粗粒砂
  - 16：L25a、黄褐色2.5Y5.2/2シルト混り粗粒砂
  - 17：L25a、黄褐色2.5Y5.2/2シルト混り粗粒砂
  - 18：L25a、黄褐色2.5Y5.2/2シルト混り粗粒砂
  - 19：L25a、黄褐色2.5Y5.2/2シルト混り粗粒砂
  - 20：L25a、黄褐色2.5Y5.2/2シルト混り粗粒砂
  - 21：L25a、黄褐色2.5Y5.2/2シルト混り粗粒砂
  - 22：L25a、黄褐色2.5Y5.2/2シルト混り粗粒砂
  - 23：L25a、黄褐色2.5Y5.2/2シルト混り粗粒砂
  - 24：L25a、黄褐色2.5Y5.2/2シルト混り粗粒砂
  - 25：L25a、黄褐色2.5Y5.2/2シルト混り粗粒砂
  - 26：L25a、黄褐色2.5Y5.2/2シルト混り粗粒砂

図5 北壁地層断面図



■：灰・炭を含む黒色化部分

- 1：黄褐色(25Y7.5/3)シルト層の中粒～粗粒砂
- 2：黄褐色(25Y7.5/3)シルト層の中粒～粗粒砂
- 3：黄褐色(25Y7.5/3)砂層の中粒～粗粒砂
- 4：黄褐色(25Y7.5/3)砂層の中粒～粗粒砂
- 5：灰色(25Y5.5/1)粘泥質粘土～砂混りシルト
- 6：黄褐色(25Y7.5/3)粘泥質粘土～砂混りシルト
- 7：黄褐色(25Y7.5/3)粘泥質粘土～砂混りシルト
- 8：黄褐色(25Y7.5/3)粘泥質シルト・オリーブ褐色(5Y6/3)シルト・明褐色(7.5Y6.5/8)砂混りシルトなど
- 9：黄褐色(25Y7.5/3)砂層の中粒～粗粒砂
- 10：黄褐色(25Y7.5/3)砂層の中粒～粗粒砂
- 11：黄褐色(25Y7.5/3)砂層の中粒～粗粒砂
- 12：黄褐色(25Y7.5/3)中粒～粗粒砂・灰褐色(2.5Y4.2/2)粗粒砂など
- 13：黄褐色(25Y7.5/3)中粒～粗粒砂
- 14：明褐色(25Y6.6/4)中粒砂・オリーブ褐色(25Y4.3/1)砂混りシルト
- 15：明褐色(25Y6.6/4)中粒砂・オリーブ褐色(25Y4.3/1)砂混りシルト
- 16：黄褐色(25Y7.5/3)粘土・灰褐色(25Y5.5/1)砂混り粘質シルト
- 17：黄褐色(25Y7.5/3)粘土・灰褐色(25Y5.5/1)粘泥質シルト
- 18：黄褐色(25Y5.3/1)粘土
- 19：黄褐色(25Y5.3/1)粘土
- 20：黄褐色(25Y5.3/1)粘土
- 21：黄褐色(25Y5.2/1)粘土
- 22：黄褐色(25Y5.2/1)粘土
- 23：黄褐色(25Y5.2/1)粘土
- 24：黄褐色(25Y5.2/1)粘土
- 25：黄褐色(25Y5.2/1)粘土
- 26：灰褐色(25Y6.2/4)中粒砂・黄褐色(25Y4.1/1)シルト層の中粒砂
- 27：黄褐色(10Y6/4)粘土
- 28：黄褐色(10Y6/4)粘土
- 29：黄褐色(10Y6/4)粘土
- 30：黄褐色(10Y6/4)粘土
- 31：黄褐色(10Y6/4)粘土
- 32：黄褐色(25Y5.5/1)粘土

図6 南区清露地層断面図

を示す。第3a層は灰色の細粒砂～シルト～粘土から成り、ラミナが明瞭にみられた。ラミナはわずかに北へ低く傾き、また東へ明瞭に低く傾斜していた。第3b層もラミナがみられる黄褐色細粒砂層であるが、上町層に由来するシルト等の偽礫を多く含んでいた。ラミナは北と東へわずかに低く傾き、偽礫は比較的扁平なものであった。本層の年代を示唆する遺物は出土していない。

なお、本層の下位、TP-0.2mの深さで灰白色の砂層がみられた(図4 南区39層)が、著しい湧水により記録できず、詳細は不明である。地層の断面調査は、これより深くは不可能で、上町層は検出されなかった。

## ii) 遺構と遺物

### 第2層に伴う遺構と遺物(図4～7・10)

**礎石13**：第2c層上面で、南区西壁断面で検出された花崗岩の礎石である。南北約0.4m、東西0.3m以上の規模で、その上に太さ11cmの柱が遺存していたが、腐朽が著しく、この柱が丸いのか、それとも豊臣期によくみられる四角い柱であるかは不明である。この礎石は、南区の31層上面に据えられ、第2b層下部の27層に覆われていた(図4)。礎石が埋まったのちも、柱が24層段階まで残っていた可能性が高い。南区は後世の攪乱が著しく、これに組み合う他の礎石は発見されなかった。

**礎石11・12**：やはり南区西壁断面でのみ検出された2個の礎石で、ほぼ接する位置関係にある。いずれも上面が平坦であり、傾いていない。石材は花崗岩である。**礎石11**は南北0.3m、東西0.4mの大きさで、南区の28層上面(第2c層上面)に据えられていた。**礎石12**は南北0.4m弱、東西0.2m以上の大きさで、同27層上面(第2b層上面)に据えられていた。両者は据え付けた層位はわずかに異なるが、26層に覆われる点は同じであり、2個の礎石が同一建物の特殊な一角を構成するのか、別の建物の礎石なのかという点は不明である。またこれらに組み合う他の礎石は検出されなかった(註2)。

**SD09**：第2a層上面で、北区で検出された南北溝である。幅約0.4m、深さ0.6mの規模である。近代以後の攪乱により長さは北壁から1.5mしか確認されなかったが、攪乱壕の断面観察により、さらに南へ1.5mほど連続していたことがわかる。この溝は、その東西で盛土の稼相が異なること、後述のSX10に沿っていたこと、さらに直上の第1a層(図5の4層など)にも溝状の落込みがあることから、敷地境の溝なのかかもしれないが確定的ではない。だが、南区の調査ではこの溝は明確でなく、南壁断面では認められなかった。埋土は4層に分かれ、砂・シルト偽礫などで埋まっていたが、最下層(図5-12層)から出土した青花皿1(図10)は太い筆使いで染付を施す粗製の中国南方産であり、豊臣前期に散見されるタイプである(註3)。

**粘土壁SX10**：第2a層上面で、北区で検出された幅0.1m以下の直立する帯状の粘土の遺構である。SD09の東辺に沿っていた。この粘土は南区にも連続し、攪乱壕の南北2個所の断面でも認められた(最大幅0.12m)が、南端では北区のそれより少し東へずれていた。北壁～中央をSX10A、南壁で確認した粘土壁をSX10Bとしておく(註4)。当初、これらは土留め用の板材(堰板)の痕跡かと考えたが、埋まっている土は複数種の粘土偽礫が主体であり、板材が土中で腐朽したとは考えにくい。類例をさぐると、西方約300mのOS11-16次調査で発見された「粘土枠」[大阪文化財研究所2012]があげられる。その工法は、要所に礎石と柱を立て、薄い粘土の壁で繋いだ方形枠を多数設け、その内部を土砂で埋

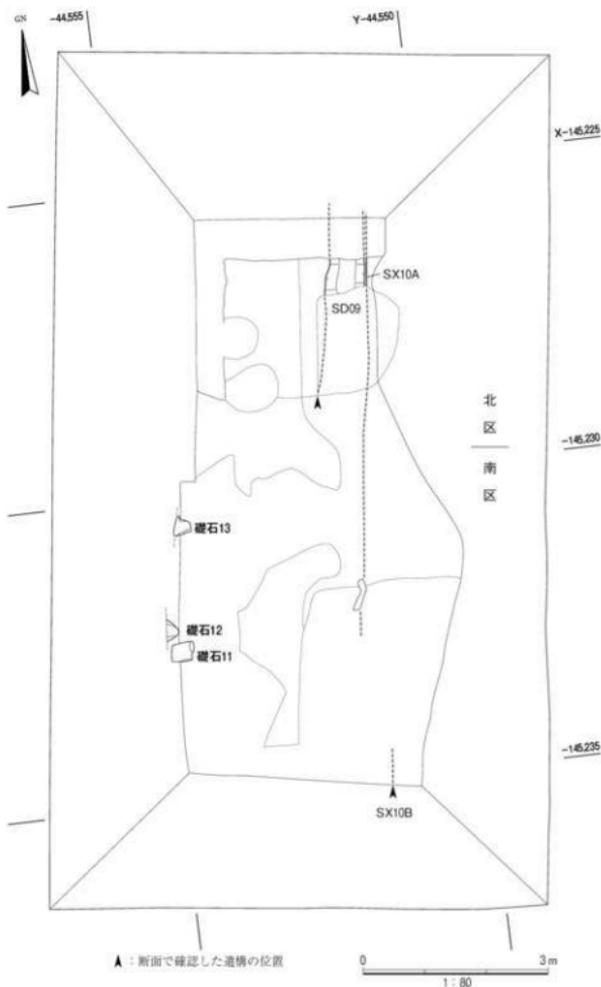


図7 第2層に伴う遺構平面図

めたとされる。今回の調査地では礎石や柱はみつからなかったので、ここでは「粘土壁」とした。

第2層出土の遺物：豊臣期に多くみられる備前焼細首壺(いわゆるらっきょう徳利)や、丸瓦、平瓦の破片が出土しているが、ごく少量である。

第1層に伴う遺構と遺物(図8・10)

SB05：第1b層上面の礎石建物で、南区の西壁断面で礎石3個(礎石06～08)が南北に並んで検出さ

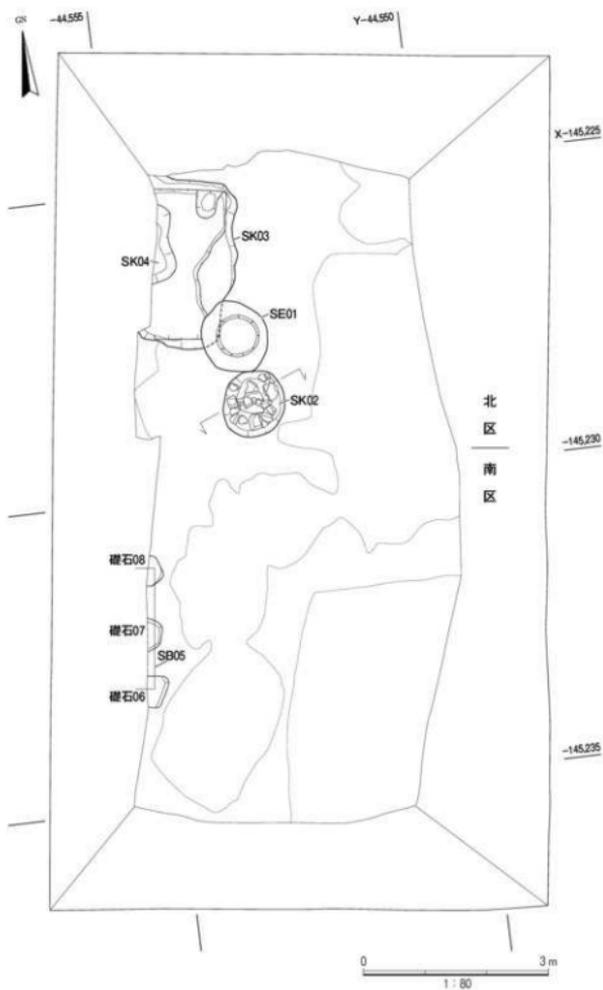


図8 第1層に伴う遺構平面図

れた。平面的な広がり是不明である。第1層中の下部層に属し、砂による地業(図4-南区15層)を施し、礎石を据えていた(註5)。礎石07・08の石材は花崗岩である。礎石06から08の芯々距離は2.05mであるが、実際の柱配置は当時の1間とみることができる。豊臣期の1間は、太閤検地では6尺3寸といわれ、また柱根が遺存していたOS87-40次調査[大阪市文化財協会2003c]では、曲尺で6尺6寸(2.0m)、6尺3寸3分(1.92m)などの例がある。柱間寸法はその二分の一と短く、砂による基礎地

業も勘案すると、この建物は倉または何らかの重量物に耐えられる施設であった可能性が高い。

SK03・04：第1a層上面から掘り込まれたと考えられる遺構である。SK03は北区の北西部で検出された東西1.3m以上、南北2.7m余、深さ0.7～0.8mの大型土壇である。地下式の穴倉かと思われ、埋土には北東部を中心に多くの焼土を含んでいた。南北の壁面には直立する層がみられ(図4-北区5・6層)、壁土かと考えたが、構成土は礫～粗砂で木舞の痕跡はなく、やはり焼土の小塊を含んでおり、その性格は不明である。SK04はSK03より新しい土壇で、東西0.5m以上、南北1.3m、深さ0.8m余、やはり焼土を含む。

SK03出土の遺物は、以下のとおりである。瀬戸美濃焼織部向付15(図11)は脚部のみであるが、内面に鉄絵がみられる。青花碗16は陶胎、粗製で、見込みの文字は「常」かもしれない。飾り瓦17は小破片ながら、鬼板の右肩部とみられ、肉厚な花卉らしき装飾がみられる。被熱により、黒色の炭素が失われている。軒平瓦18は、三葉文の中心飾りから反転する唐草が伸びる。平瓦19・20は凹面・凸面とも丁寧なナデで仕上げる。長さは26.5cmで、ほぼ同一規格である。このほか、備前焼甕・壺、丸瓦などがある。16は豊臣前期的であるが、15の存在から、遺構の年代は豊臣後期である。したがって、SK03を埋めた焼土は慶長20(1615)年の大坂夏ノ陣に伴うものとみられる。なお、SK04の細かい年代は不明である。

SE01：北区で検出された井戸で、瓦製の井戸側を積み上げていた。掘形は直径約1.2mで、井戸側は直径0.7m弱の規模であるが、完掘していない。江戸時代でも19世紀以降であろう。掘形から出土した軒平瓦23は豊臣期に遡るものかもしれない。

SK02：北区南端で検出された深い土壇である。東西1.0m、南北1.1mで、深さ2.0mである(図9)。主に上部に大量の石を投棄していた。井戸かとも思われたが、井戸側の痕跡は認められなかった。出土遺物は肥前磁器や瀬戸美濃焼、瓦類などであるが、肥前磁器碗21、軒椀瓦22などを図化した。21は見込を蛇の目軸剥ぎする18世紀前半～中頃の碗で、この遺構の年代を示すものである。22は瓦当径7.8cmと復元され、文様は右巻きの巴文である。

以上のほか、南区南壁の第1b層上面で遺構とみられる落込み(図6-5・6層)が見られたが、攪乱等により平面的確認はできなかった。

第1層出土の遺物：第1b層下部(図4南区-20層)から出土した備前焼播鉢6は、口縁部がやや薄手であり、厚手で短く立ち上がる豊臣後期に多いタイプと異なる。以下の遺物は第1a層から出土した可能性が高いが、2～5・7・8は先述したように第1b層と区分できていない。2～4は瀬戸美濃焼で、折縁ソギ皿2、天目碗3、丸碗4などがあり、5は丹波焼大平鉢、7は巴文軒丸瓦、8は葉形を残す下向きの三葉文を中心飾りとする軒平瓦で、唐草の反転は3である。9～14は第1a層に属する

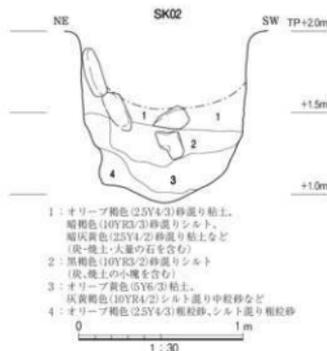


図9 SK02断面図

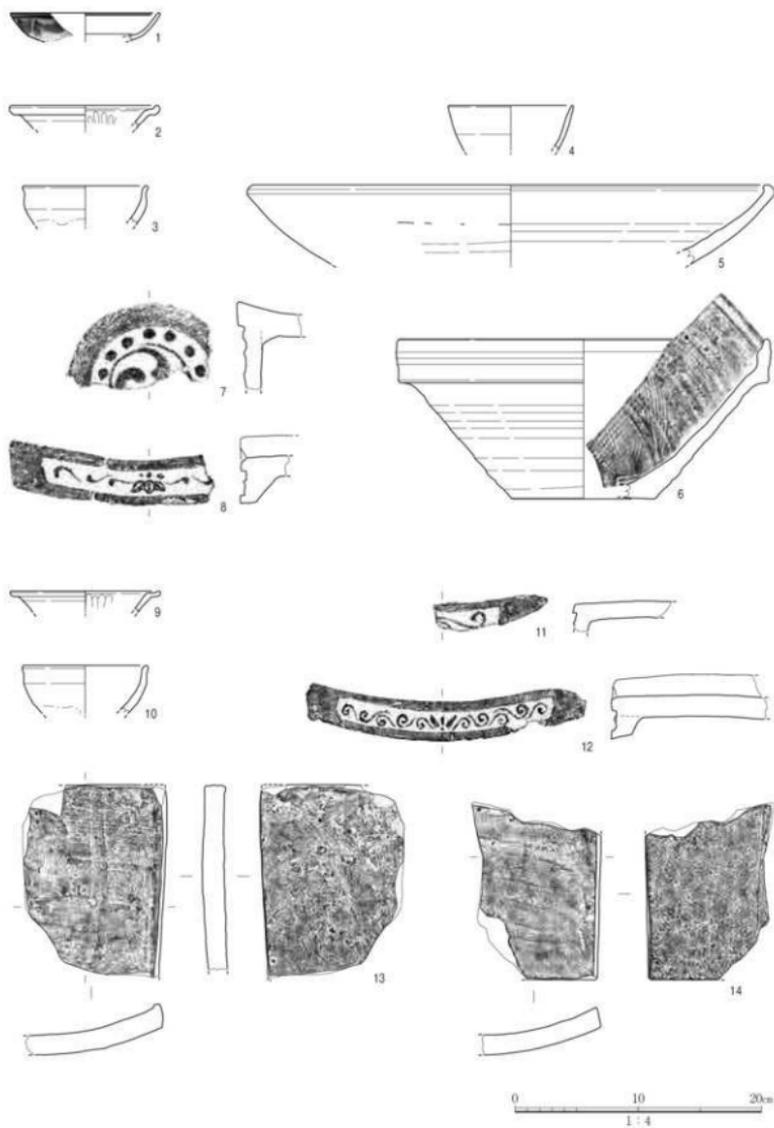


図10 出土遺物実測図  
SD09(1)、第1層(2~8)、第1a層の落込み(9~14)

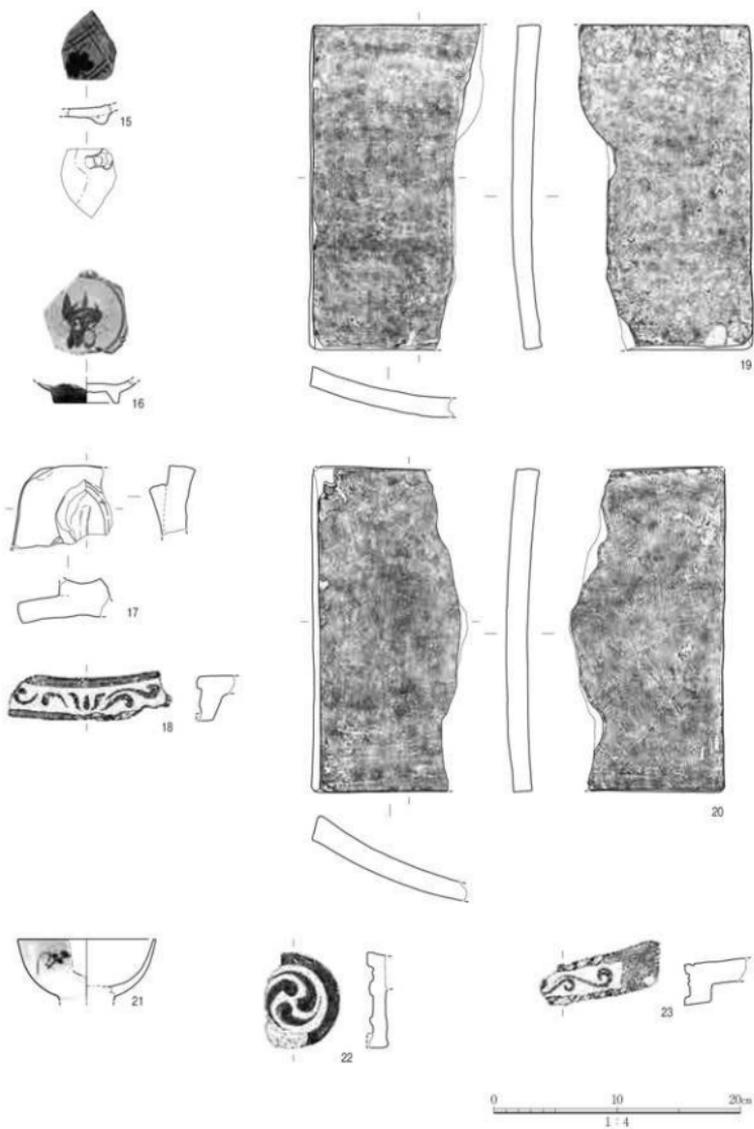


图11 出土遗物实测图  
SK03(15~20)、SK02(21·22)、SE01(23)

南区南壁の落込み(図6第5層)から出土した。瀬戸美濃焼は折縁ソギ皿9、天目碗10があり、他は軒平瓦11・12、平瓦13・14である。軒平瓦はいずれも脇区が広いのが特徴である。12は「顎貼付け技法」[山崎信二2000]が明瞭な瓦当部に、三葉文の中心飾りに唐草文が左右に5反転する。ほぼ同じ文様の瓦が南西60mのOS87-78次調査[大阪市文化財協会2003a]で出土し、豊臣後期の瓦とされている。それは12より平瓦部・瓦当部のカーブがやや深く、唐草文の反転がより重層的なので、同范ではないが、同系統である。13には凹面に横方向の条線がみられ、丸瓦におけるコビキB(粘土板を切り出す際の鉄線切の手法)の痕跡に似る。14は丁寧にナデ仕上げしている。以上の陶器は豊臣前期的であるが、軒平瓦は豊臣後期的である。

### iii) 検討

#### 1. 土地造成の変遷

今回の調査では、第1層、第2層とも複数の遺構面の存在が知られた。いずれも豊臣期であるが、ここで少し整理しておく。

第1a層の上面から掘り込まれたとみられるSK03は豊臣後期最終段階の大坂夏の陣の焼土などで埋められていた。第1a層が慶長20(1615)年以前の盛土であることは間違いない。第2層は豊臣前期の盛土とみられるが、最初の盛土は第2c層であり、推定0.8mほどの厚さである。これは文祿3(1594)年開始の惣構建設時の盛土層である可能性が高い。この盛土によって調査地は陸化し、惣構北端が整備され、礎石11・13を伴う建物が建設された。

第1・2層の年代幅(約20年)間に、さらに2~3面の遺構面が確認された。下位層から順にみると、第2b層上面の礎石12、第2a層上面のSD09は出土した青花(図10-1)により豊臣前期とみられるが、第2層の最上層部であるSD09の埋立てと粘土壁SX10による盛土は前期か後期か、判然としない。第1b層についても確証がないが、豊臣前期と後期を区分する慶長3(1598)年の町中屋敷替えに伴う土地造成である蓋然性が高い。その厚さは30~40cm程度である。この場合、SD09の埋立てが、町中屋敷

替えに連動していた可能性もある。なお、第1層の陶磁器が豊臣前期的であることは、南西至近に位置するOS87-78次の第4層と同じ特徴であり、前期の遺物を含む土砂で造成したのであろう。また、先述のOS11-16次調査で検出された粘土枠遺構も、慶長3年の工事によるとされている。

このほかに注目されるのは第3a・b層である。本層はいずれも水成層であり、調査地が当時はまだ大川南岸の水面下にあったことを示す。その第3b層にはシルトなどの偽礫が比較的多く含まれていた。この偽礫は人為的に水面下に投入された可能性が高いが、やはり水面下で形成さ

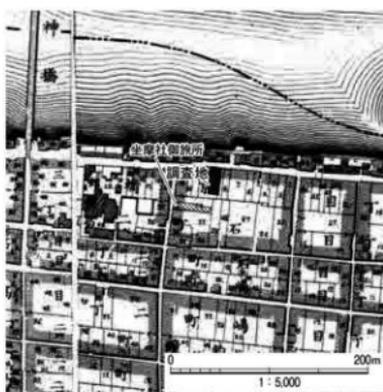


図12 調査地位置図(内務省1888『大阪実測図』より)

れた第3a層に覆われ、当地は陸化に至っていない。したがって本層の偽礫は、調査地のすぐ南隣まで埋立てによる造成が行われた残余が水中に没した可能性を示す。

第3b層の年代は不明であるが、先述のOS87-78次調査と対比すると、上面が豊臣前期の整地層である第6層、室町時代以前とされる第7層などが注目される。南のOS85-28次調査ではこの第7層上面で本願寺期と推測される南北堀SM701(幅8m、深さ2m)が検出されている(註6)。

## 2. 旧地形と坐摩社

次に注目されるのは、調査地の南隣に位置する坐摩社の御旅所である。坐摩社は古代の摂津西成郡に一社しかない式内社であり明神大社であった。秀吉の大坂築城に際して移転し、現在は中央区久太郎町に所在するが、この御旅所が坐摩社本来の位置であるとするのが、『摂陽群談』(1701年)以来の通説である。そうだとすれば、すでにみたように坐摩社は古代の難波津、中世の難波津のほぼ岸辺に立地していたことになる。

坐摩社御旅所は現地形でTP+6~7mに位置する。その南隣、OS85-28次調査地の現地表面もTP+6.5m前後であり、ここでは上町層(地山)は南端にてTP+4.2mで検出されたものの、大きく北へ落込む旧地形が検出された。この落込みを埋積した地層(先述の第7層)は8層に細分され、最下層は奈良時代であったとされる[大阪市文化財協会1986]。坐摩社の位置が変わっていないのであれば、その最下層のレベルはTP+2m前後である(図11)。

上町層は今回の地点ではTP-0.2mまで掘り下げてでも検出されず、OS85-28地点との距離約50mで上町層は4.4m以上落込む急斜面となっている。東隣のOS88-113次をはじめ、土佐堀通の南に沿った調査地ではいずれも上町層がみつからず、唯一、東方のOS13-29次調査[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015]でみつまっている。それはTP+4.6mから北へ落ち込む崖面であった。坐摩社の立地は、それほどではないが、敷地の北端が大川(難波堀江)の波に洗われるような立地であった。これが上町台地北端西部の様相である。

坐摩神は難波の神であるばかりか、平城宮や平安宮の神祇官西院で祀られる宮中神でもあった(註7)。宮中にも神坐を有する地方の神は、ほかに東生郡の生国魂神と、丹波の礪石意神だけであり、坐摩神(および生国魂神)が宮中で神聖視されていたことを示している。中世になると、坐摩社には渡辺惣官に任じられた渡辺源氏が深く関与し、また熊野街道九十九王子の起点となった渡辺王子(雀津王子)にあたるともいう。坐摩社の旧地はまだ確定したとはいえないが、熊野街道(いわゆる御蔵筋に比定される)が調査地の東100m弱にあることから、この付近に社地が一定の広がりをもて存在したこ

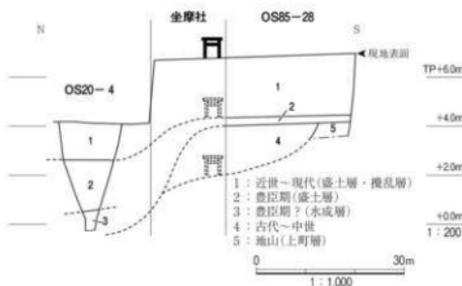


図13 坐摩社と調査地

とは認めてもよいであろう。

### 3) まとめ

今回の調査成果は以下のとおりである。

第一に、豊臣前期・後期の整地層や礎石建物跡などが重層してみつかり、最大で5時期にわたる二期の遺構面が検出されたことである。

第二に、薄い粘土の方形枠の内部を土砂で埋めるという土地造成法に類似する粘土壁が発見されたことである。

第三に、上町台北端西部の旧地形の変遷が、部分的ながら判明したことである。

第四に、隣接する坐摩社について、周辺部を含めた知見を深めることができたことである。

この地域は調査例が多いとはいえ、まだ不明なことがはるかに多い。今後とも、更なる調査の進展が期待される。

### 註)

- (1) この地点での盛土には、目前の大川の川ざらえによる盛土(近世のいわゆる砂持ち)と、近隣の土層を客土するものが考えられる。前者なら水中で流されてきた砂が主体であると予想される。後述するSB05の基礎地業等に供された砂(図4-南区15層)などは、それであろう。これに対して、後者なら段丘層のシルトや砂が主体となる。調査地の第1・2層の主体であるシルト・砂と類似するのは上町層である。
- (2) 各礎石の細かい層位関係は本文のとおりである。これにはいくつかの解釈が可能である。ひとつは、礎石13と11・12は層位が異なるので、年代も異なるとする見方である。ただ、その差はわずかである。もうひとつは、礎石13を覆わない盛土(図4-南区30~28又は27層)の存在から、これらの盛土ののち、同時にこれらの礎石を据えたとする見方である。この場合、礎石13は27層に覆われているので、26層に覆われる礎石11・12より先に埋没したことになるが、それでも地上に柱が残っていたから、可能性としてはありうる。もし同時存在であれば、礎石13と11・12は同一建物を構成していた可能性もある。ただ、礎石11~13の柱間寸法はそれぞれ約2.20m、礎石12~13では1.80mとなり、後述する通常の1間(1.9~2.0m)とは合わない。
- (3) SD09は第2a層上面の遺構であるが、埋土に機能時堆積層がみられなかったこと、特に溝ざらえを想定すべき事情も考えにくいことから、短期間で埋められたと思われる。ただ、その時間幅は不明なので、第2a層~第1b層は連続的であったかもしれないし、わずかな期間でも生活面となっていたかもしれない。
- (4) SX10A・Bが東西にずれているのは、ふたつの可能性が考えられる。ひとつは、両者が別の遺構ではないかということである。もうひとつは、今回の調査地が東西ふたつの敷地から成っており、SX10A・Bがその敷地境(図2)と一致する可能性も考えられる。なお、南壁でみられたSX10Bは粘土壁ではなく、偶然この位置に打ち込まれた杭跡ではないかという指摘もある。
- (5) 図4-南区15層は、礎石の上下で明確に二分できなかったが、下部には粗粒砂・極粗粒砂が目立っていた。この部分は地業にあたとみられる。
- (6) この堀SM701は、今回の調査地のすぐ南西隣で大川に合流していたとすれば、坐摩社御旅所を横切ることになる。

- (7) 『三代実録』貞観元年(859)正月27日条、「延喜式」神名帳などによれば、宮中坐摩神の祭神は生井神・福井神・綱長井神・波比祇神・阿須波神の五座である。なお、9世紀初頭の『古語拾遺』では、生国魂神(生嶋)に注して「是大八洲之霊、今生嶋巫所し奉し齋。」とし、続いて坐摩に注して「是大宮地之霊、今坐摩巫所し奉し齋也。」としている。坐摩神・生国魂神は一対のごとくであり、かつ両神が特殊な位置づけにあることが理解される。

#### 参考文献

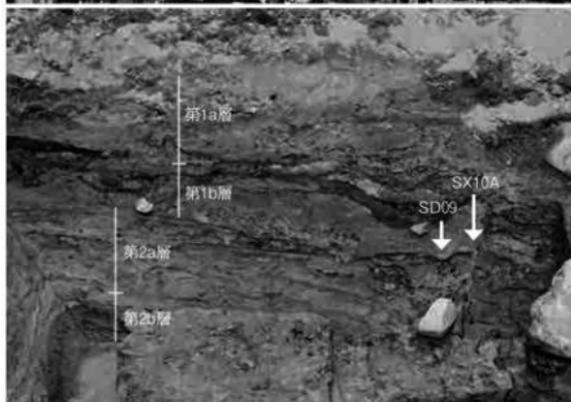
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015、「大坂城跡発掘調査(OS13-29)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2013)』、pp.327-344
- 大阪市文化財協会1986、「日本商事㈱社屋新築に伴う大坂城跡発掘調査(OS85-28)略報」
- 大阪市文化財協会2003a、「OS85-28次および87-78次調査」：『大坂城跡Ⅵ』、pp.38-60
- 大阪市文化財協会2003b、「OS88-113次およびその周辺の調査」：『大坂城跡Ⅵ』、pp.27-37
- 大阪市文化財協会2003c、「OS86-22次およびその周辺の調査」：『大坂城跡Ⅵ』、pp.66-97
- 大阪文化財研究所2012、「大坂城跡Ⅳ」、pp.1-115
- 内務省1888、「大阪実測図」
- 山崎信二2000、「中世瓦の研究方法」：『中世瓦の研究』、pp.10-37



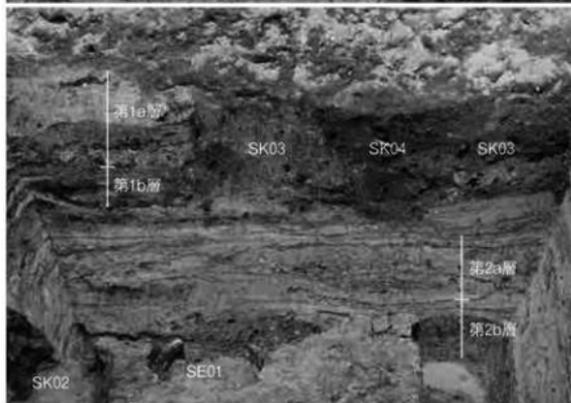
調査地の空中写真  
(上が北、国土地理院  
ホームページの  
地理院地図より)



北区北壁地層断面  
(南から)

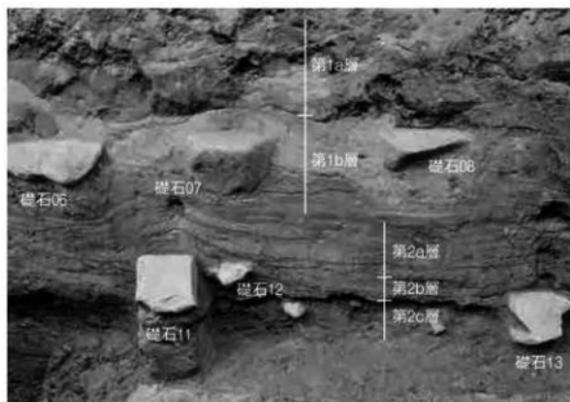


北区西壁地層断面  
(東から)

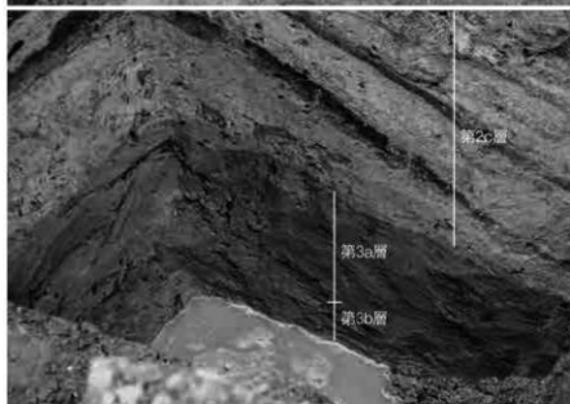




南区西壁断面  
(東から)



南区南西隅の深掘り  
地層断面  
(北東から)



南区南壁の粘土壁SX10B  
(北から)





礎石13  
(東から)



北区第1層及び  
上位層の遺構  
(南から)



南区全景  
後方コンクリート壁上に  
坐摩社御旅所  
(北から)





中央区森ノ宮中央一丁目416-1・2における建設工事に伴う  
大坂城跡発掘調査(OS20-5)報告書

調査個所 大阪市中央区森ノ宮中央1丁目416-1・2  
調査面積 32㎡  
調査期間 令和3年2月15日～19日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋 工、大庭重信

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地はJR森ノ宮駅の南側、玉造筋に面した東側にあり、上町台地東縁の裾部に立地する(図1)。豊臣氏大坂城惣構の南東部に位置し、玉造筋を境に西側は縄文・弥生時代の遺跡として著名な森の宮遺跡があるが、両者は一連の縄文時代～近世の複合遺跡である。

周辺の主な調査成果を挙げると、調査地北西側200mのMR1～4次調査地は縄文時代後期から弥生時代にかけての貝塚や埋葬人骨が見つかった学史的に著名な調査であり[森の宮遺跡発掘調査団1973、難波宮址顕彰会1978]、その東隣には縄文時代の石鍾が見つかったMR94～8次調査地がある[大阪市文化財協会1996]。調査地南側80mのOS94～20次調査地でも弥生時代の遺構が検出されており、弥生時代中期の木製の織未成品などが見つまっている。また、古代では南西側100mのMR85～3次調査地で飛鳥時代の柱穴や溝が、北側200mのMR94～6次調査地で奈良時代～平安時代初めの遺物を含む流路が検出され、墨で人物を描いた須恵器杯蓋や銀装刀子といった興味深い遺物が出土している[大阪市文化財協会2002]。豊臣期大坂城の時期の遺構としては、調査地北西側80mのMR13～4次調査地で豊臣前期の石垣が検出されている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015]。

当該地で大阪市教育委員会が事前に行った試掘調査によって、現地表下約2.1m以下の深さで本格的な調査を必要とする中世以前の地層が確認されたことから、発掘調査を実施することになった。

敷地内は事前に事業者側によって土留め・杭打設作業、および調査範囲が現地表下2.0mまで掘削されており、令和3年2月15日より調査に着手した。調査区は敷地内東半の東西8m、南北4mの範囲である(図2)。以下、層位毎に遺構・遺物の検出・記録作業を行いつつ、地表下2.5mまで平面調査を行い、2月19日に調査を完了した。

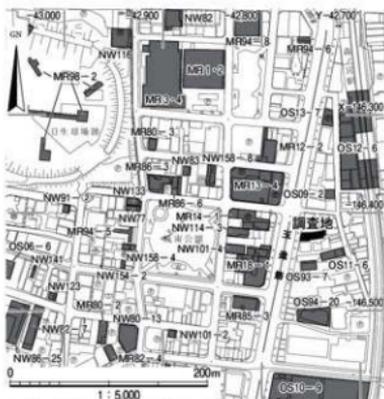


図1 調査地位置図

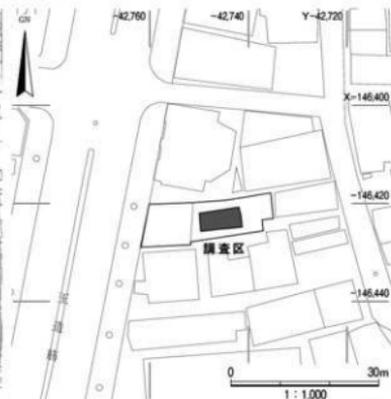


図2 調査区位置図

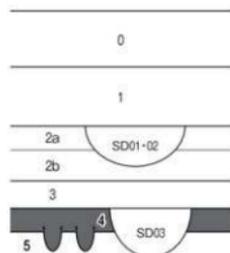


図3 地層と遺構の関係図

報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することによって得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用いてTP±0mと表記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

調査地の現地表面はTP+3.4m前後と平坦であり、TP+2.0m以下、TP±0mまでの地層を第0層～第4層に区分した。

第0層はTP+2.0mより上に分布する、現代の盛土および攪乱埋土で、部分的に深くまで及んでいる。

第1層は上部が灰色細粒砂質シルトの偽礫、下部が灰色シルト～細粒砂質シルトの偽礫と中粒～粗粒砂からなる盛土層で、層厚は最大で60cm確認した。平面調査を行っていないため出土遺物は捕集できていないが、周辺の調査や下位層との関係から豊臣期の盛土と考えられる。

第2層は第2a層と第2b層に区分される。第2a層は灰色シルト～細粒砂からなり、層厚は20cmある。基底付近に細粒砂の薄層が分布するなど自然堆積の構造を残すが、上部は泥質となり攪乱されていることから作土化されている可能性がある。第2b層は上部が灰色砂混りシルト～シルト、下部が灰オリーブ色シルト質中粒～粗粒砂を主体とする作土層で、層厚は30cmある。層中に瓦器片を含み、本層上面で豊臣期の遺物を含むSD01・02を検出したことから、第2層の時期は中世～豊臣期と考えられる。

第3層は西半が灰オリーブ色粘土質中粒～粗粒砂、東半が灰オリーブ色粗粒砂～灰色砂混りシルト質粘土からなる作土層で、層厚は20cmある。層中には須恵器杯B蓋1・2、杯B3・4や丸瓦5、平瓦6など8世紀代の比較的大きな土器・瓦の破片が含まれるが(図5)、瓦器の小片が数点出土しており、時期は中世まで下る可能性がある。

第4層はオリーブ黒色粗粒砂混りシルトからなる古土壤で、層厚は5～10cmある。弥生時代中期の土器・石器を含み、本層上面で同時期のSD03、本層下面で本層内から掘られた柱穴や土壌を検出した。SD03の上部からは少量であるが古墳時代中期から古代にかけての土師器・須恵器が出土している。本層上面の標高はTP+0.8～0.9mで西側がやや高い。

第5層は灰白色粗粒砂～礫からなる自然堆積層で、上方細粒化する。上部は上位層からの生物擾乱によって乱れていた。層厚は70cmまで確認した。

### ii) 遺構と遺物

#### a. 弥生時代

第4層上面および下面で遺構検出作業を行い、第4層上面遺構としてSD03、第4層内遺構としてSK04・05、SP06～14・16・17、SD15を検出した(図6)。

SD03は調査区中央で検出した南北方向の大溝で、幅は4.0～4.4m、深さは北端で0.8m、南端で0.5mあり、途中で0.3mほどの段差がある。溝の東西両端もやや深くなっており、溝底は平坦でない。埋土は上部と下部に分けられ、それぞれ下半(図4-11・13層)に比べて上半(10・12層)が泥質で有機質



図4 調査区北壁地層断面図

- 1 : 灰色(SY4.1)硬砂岩(厚5.0m) (第1層)
- 2 : 灰色(SY4.1)シルト・ロースト硬砂岩(厚1.0m) (第2層)
- 3 : 黄褐色(SY3.5)シルト・ロースト硬砂岩(厚1.0m) (第3層)
- 4 : 灰色(SY4.1)シルト・ロースト硬砂岩(厚1.0m) (第4層)
- 5 : 灰色(SY4.1)硬砂岩(厚1.0m) (第5層)
- 6 : 灰褐色(SY4.1)硬砂岩(厚1.0m) (第6層)
- 7 : 灰褐色(SY4.1)硬砂岩(厚1.0m) (第7層)
- 8 : 灰褐色(SY4.1)硬砂岩(厚1.0m) (第8層)
- 9 : 灰褐色(SY4.1)硬砂岩(厚1.0m) (第9層)
- 10 : 灰褐色(SY4.1)硬砂岩(厚1.0m) (第10層)
- 11 : 灰褐色(SY4.1)硬砂岩(厚1.0m) (第11層)
- 12 : 灰褐色(SY4.1)硬砂岩(厚1.0m) (第12層)
- 13 : 灰褐色(SY4.1)硬砂岩(厚1.0m) (第13層)
- 14 : 灰褐色(SY4.1)硬砂岩(厚1.0m) (第14層)
- 15 : 灰褐色(SY4.1)硬砂岩(厚1.0m) (第15層)
- 16 : 灰褐色(SY4.1)硬砂岩(厚1.0m) (第16層)

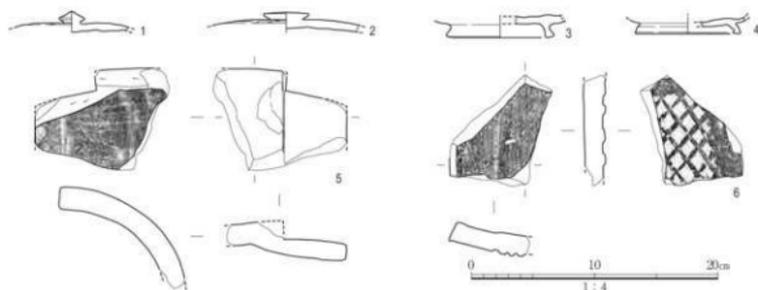


図5 第3層出土遺物実測図

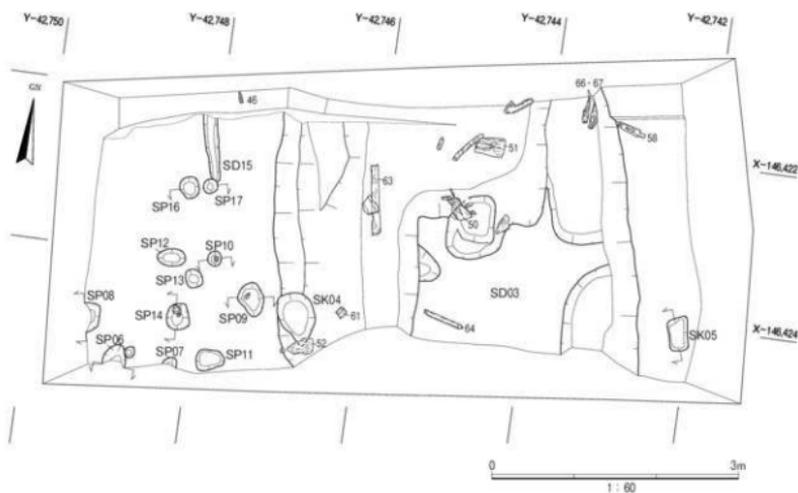


図6 弥生時代の遺構平面図

に富む。明瞭なラミナは確認できず、土砂の流入による堆積と排水環境が反復しつつ埋没したと考えられる。このことから、SD03は常時水が流れていた水路ではなく、排水もしくは区画を目的とした溝と考えられる。SD03からは弥生時代中期の土器・石器・木製品が多く出土した。上部には大量の弥生土器とともに少量であるが古墳時代中期～古代の須恵器・土師器が伴っていることから、溝は古代まで窠みとして残存していたようである。

弥生土器は7～45を図化した(図7・8)。

7～15は広口壺である。7・8は口縁端部に波状文、頸部に櫛插直線文を巡らすもので、8は口縁端部下端にキザミメを施し、頸部内外面にヘラミガキを加える生駒西麓産胎土の土器である。9は無文で、口縁端部の下端に幅2 cm程の粘土を貼り付けて帯状に肥厚させている。11～13は口縁端部の上下をやや拡張し、下端にキザミメを施す。14は口縁端部に波状文、15は口縁端部を下垂させ、綾杉状

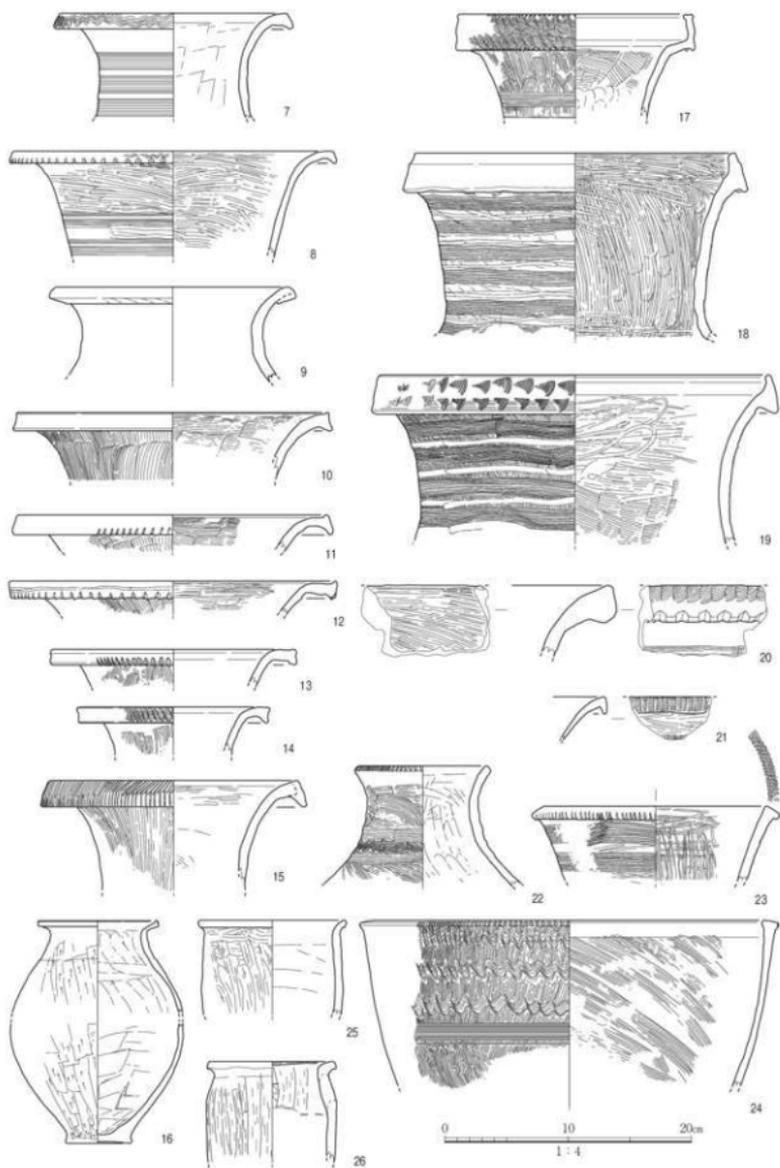


图7 SD03出土遗物实测图(1)

のキザミメを施す。10～15は頸部外面にタテハケを施し、頸部には文様を持たない器種と考えられる。

16は無文の広口短頸壺で、頸部から口縁部が短く外反する。体部外面に縦方向のヘラケズリを加えている。

17～19は受口状口縁をもつ広口壺である。中型の17は受口部分を明瞭に屈曲させ、大型の18・19は屈曲部が厚く、受口部下端がやや下垂する。文様は、17が受口部に櫛描波状文を巡らせたのち上下端にキザミメを施し、頸部に櫛描直線文を、18が頸部に直線文、19が受口部に扇形文、頸部に直線文をそれぞれ巡らす。18は櫛描文ののち頸部内外面にヘラミガキを密に施す生駒西麓産胎土の土器である。

20は大型の広口壺で、口縁端部の上半に扇形文、下端にキザミメを施し、頸部外面に直線文を施す。21は生駒西麓産胎土の広口壺で、口縁端部および頸部外面に簾状文を巡らす。

22は細頸壺で、口縁端部にキザミメ、頸部外面にハケ調整ののち櫛描直線文と波状文を交互に配する。器形から近江や伊勢湾沿岸の土器の影響を受けたものと考えられる。

23・24は直口の鉢である。23は口縁端部に波状文とキザミメを施し、体部に直線文を施すもので、色調が赤褐色で他の土器とは異なる。24は大型品で、口縁端部にキザミメ、体部上半に波状文を3条、直線文を1条施し、体部下半にはヘラミガキを加えている。

25・26は小型の甕で、器壁が厚く、口縁部を短く折り曲げており、体部外面には植物繊維状の原体でナデを施す点で共通する。ともに外面には煤が付着している。

27～43は中型の甕である。27～31は口縁部を緩やかに外反させ、体部外面に粗いタテハケ、口縁部内面に同様の原体でヨコハケを施す摂津・山城系の甕である。27は口縁端部にキザミメを施す。30は体部内面にヨコハケののちヘラミガキを加え、31は頸部にハケののちヨコナデを施している。32～37は口縁部を「L」字状に屈曲させ、体部外面にヘラミガキを施す甕である。35～37は生駒西麓産の胎土である。38は口縁部の外反度が弱く、体部内外面にハケ、口頸部外面に横方向のヘラミガキを施す甕で、生駒西麓産の胎土である。39～41は口縁部を「く」の字に屈曲させ、体部外面に細かいタテハケを施すもので、40・41は口縁部上端を強いヨコナデによりつまみ上げている。39は口縁部が短く、器壁も40・41と比べて厚手である。42は体部外面にヘラケズリを加え、結晶片岩の混和材を多く含む紀伊産の甕、43は体部外面の上半に櫛描直線文と波状文を、口縁端部にキザミメを施す播磨・瀬戸内系の甕である。

44・45は口縁部を「く」の字に屈曲させる大型の甕である。45は完形に復元でき、体部外面の上半にタテハケ、下半にヘラミガキを施す。体部内面の調整は上半がハケ、下半がヘラケズリである。

以上の土器のうち、18・22・27・28・32・33・39は下部層、16は南壁、24は北壁から出土し層序不明で、それ以外は上部層から出土した。下部層から出土した土器は数が少ないものの大きな破片のものが主体で、ほぼ第Ⅱ様式のもので占められ、上部層から出土したものは第Ⅱ様式のものも含まれるが第Ⅲ様式(摂津Ⅲ-1様式、[森田克行1990])のものが主体となり、破片の数も多い。このことから、SD03は弥生時代中期前葉に掘削され、中期中葉にはある程度埋没し、最終的に窪地が土器の廃棄場となったと考えられる。

石器は石鏃48、石庵丁49が出土した(図9)。

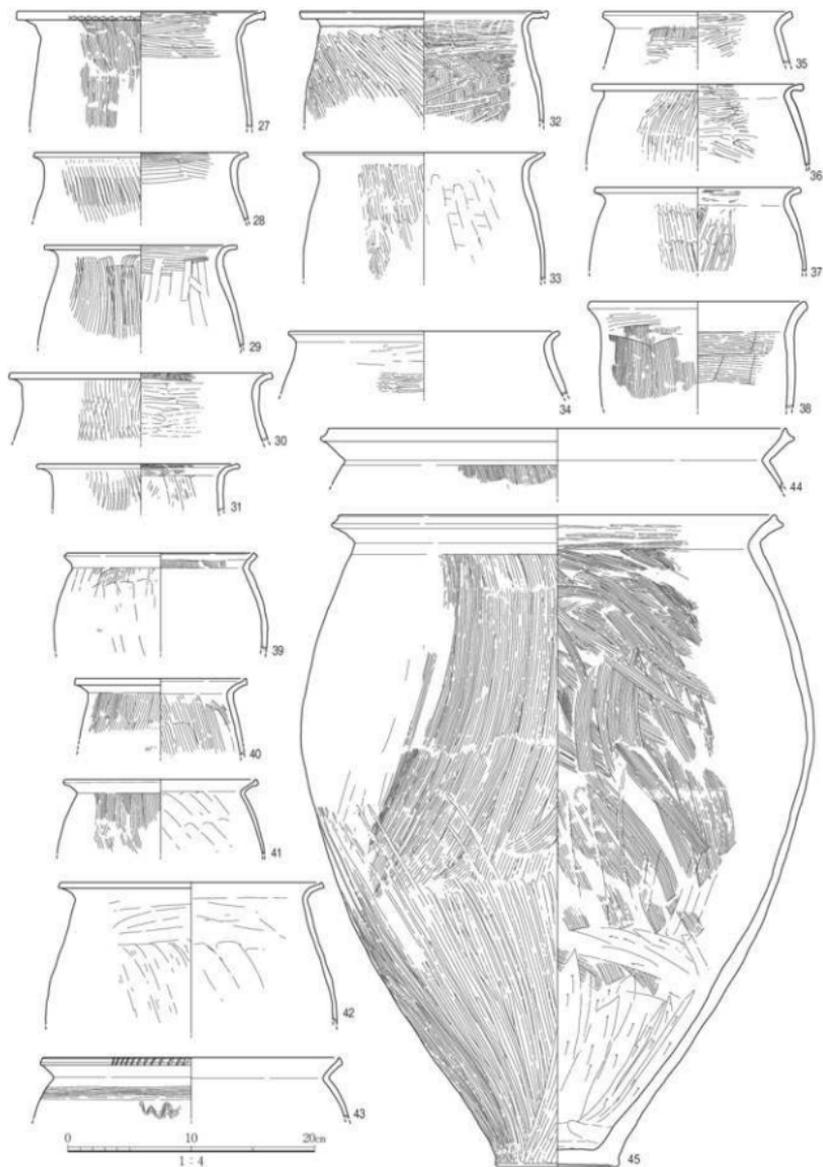


图8 SD03出土遗物实测图(2)

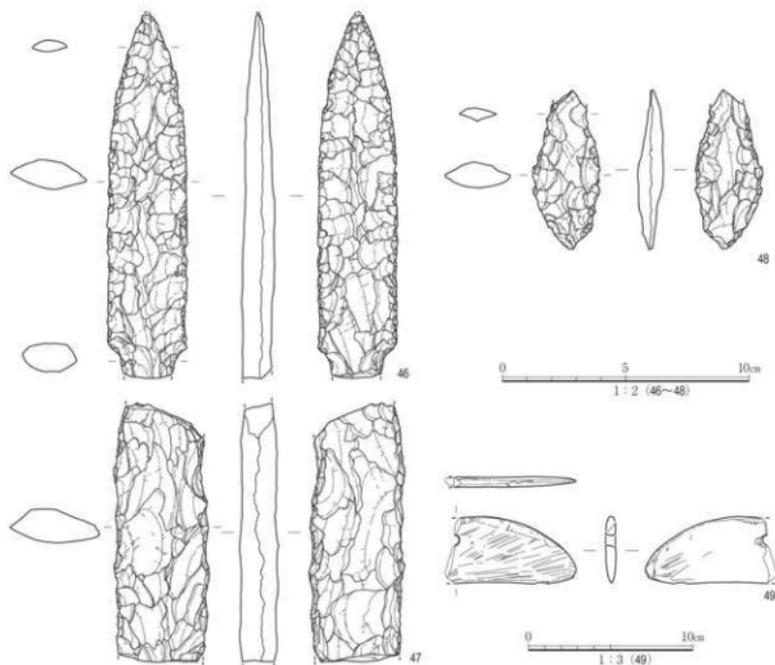


図9 SD03および第4層出土石器実測図  
第4層(46・47)、SD03(48・49)

48はサヌカイト製の凸基無頸式石鏃で、先端が欠損しており、残存長6.5cm、最大幅2.7cm、最大厚1.0cmある。未成品の可能性もある。49は結晶片岩製の磨製石庖丁である。48は上部層、49は下部層から出土した。

木製品は50～67を図化した(図10～12)。

50～52は柄穴が開けられていない直柄平楯の未成品で、いずれも樹種はアカガシ亜属で(註1)、柁目取りで製作されている。50は長さ36.2cm、最大幅18.5cmあり、側面に柄と身を結束するための抉りを入れている。柄孔部分の周囲が三角形に隆起しており、最大厚は4.9cmある。隆起部分の上端は身の先端よりも3.0cm内側にある。51は長さ34.8cm、最大幅21.8cmあり、平面が台形をなす。柄孔部分の周囲が三角形に隆起しており、最大厚は3.9cmある。隆起部分の上端が身の先端と一致する。52は刃部が欠損するが、刃部に向かって開く平面が台形のものと考えられる。柄孔部分周囲の隆起は50・51と異なり刃部付近まで延びており、上端は身の端よりも1.4cm内側でやや丸みをもつように仕上げられている。隆起部分の最大厚は3.6cmである。

53は上端付近に円形孔をもつ木製品で、厚さ1.4cm、上端面は丸みをもつ。樹種はアカガシ亜属である。小片のため用途を特定することは難しいが、柄をもつ農具もしくは工具の身と考えられる。54

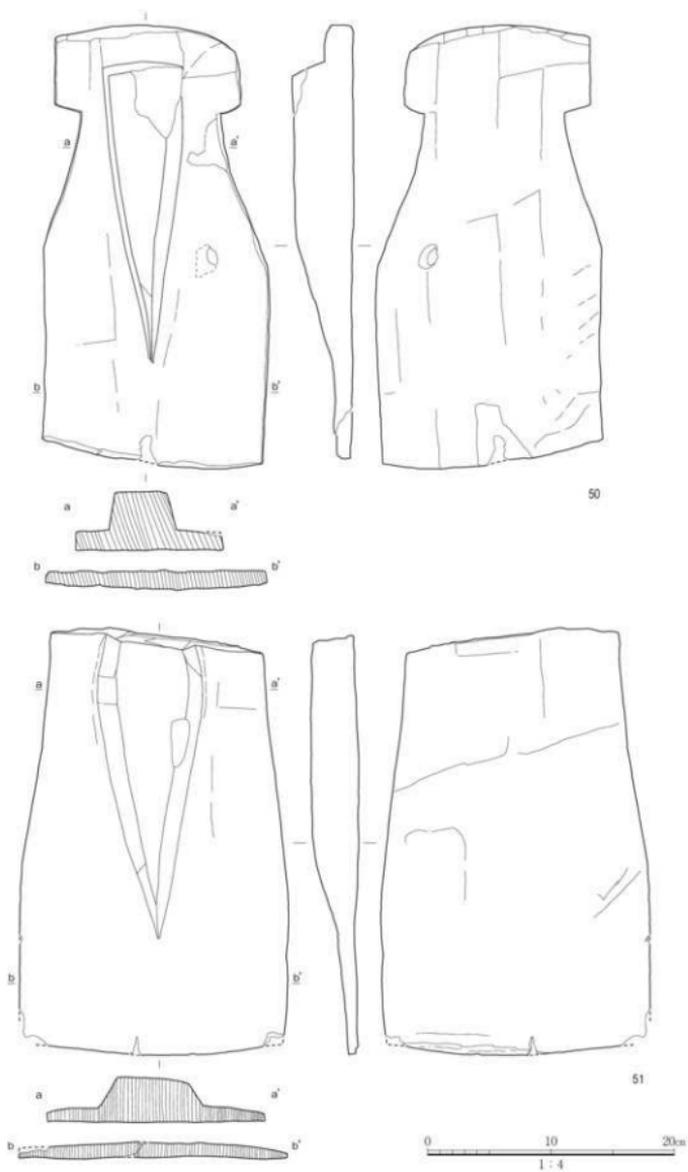


图10 SD03出土遗物实测图(3)

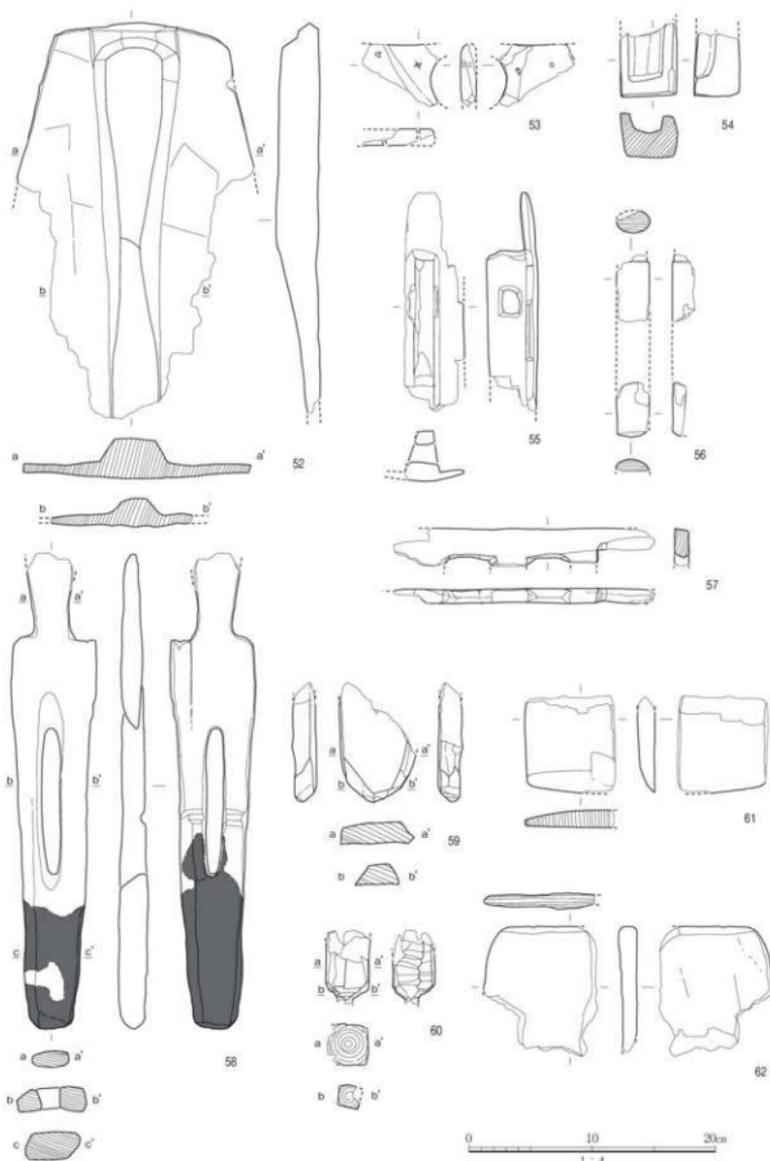


图11 SD03出土遗物实测图(4)

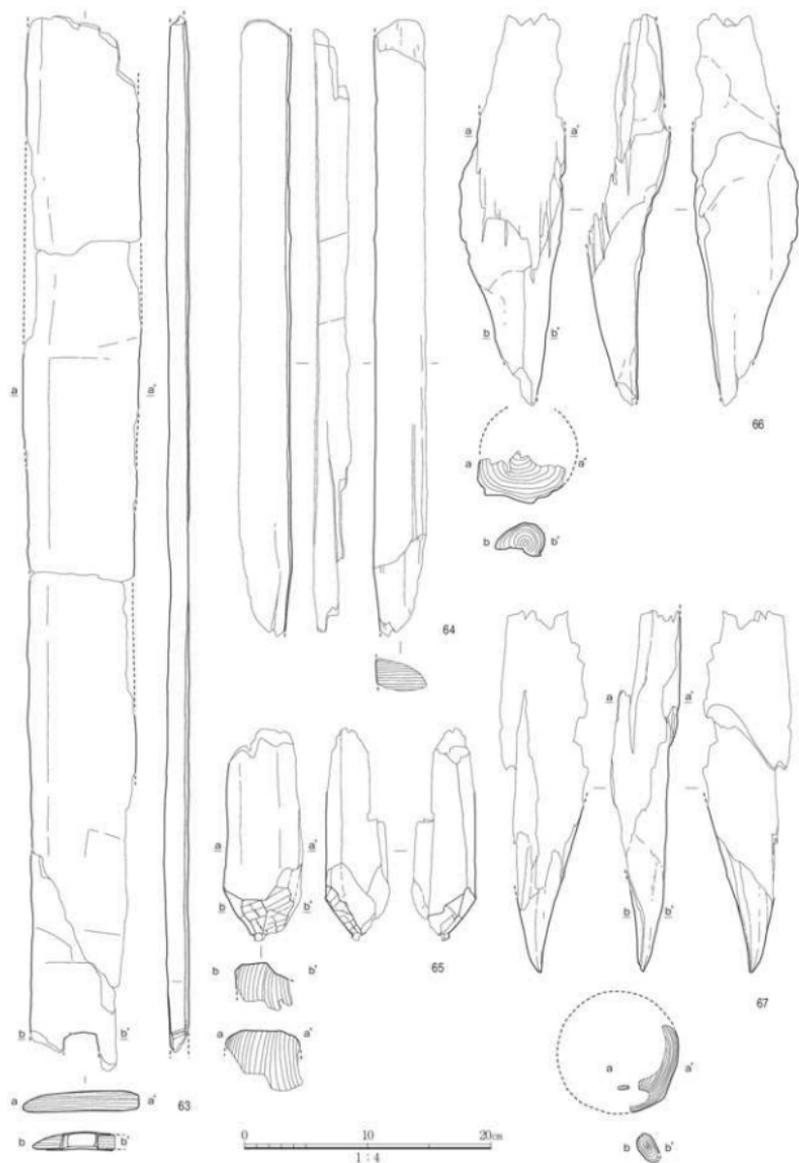


图12 SD03出土遗物实测图(5)

は長方形の小型刳物容器で、残存長6.0m、幅4.6cm、高さ3.7cmある。樹種はケヤキである。55は小型の桶もしくは罎と考えられ、幅7.0cmに復元され、残存長は17.8cmある。高さ4.2cmの隆起部分の側面には1.8×1.6cmの方形の孔を開けている。樹種はマツ属複雑管束亜属である。56は工具の柄とみられ、幅2.7cm、厚さ1.8cmの断面楕円形をなし、上端に段をつくる。樹種はアカガシ亜属である。57は厚さ1.2cm、長さ21.0cm以上の板材に2.1~2.8cm間隔で幅3.5~3.8cmの方形孔を開けたもので、樹種はコウヤマキである。欠損部位が多く用途は不明であるが、建築部材の可能性はある。58は残存長38.9cm、最大幅7.0cm、最大厚2.3cmあり、図の上半を茎状に加工し、中央に長さ12.0cm、幅1.2cmの細長い孔をもち、片面には孔と直交する方向に浅い溝がある。また、図の下半は炭化している。樹種はスギ材である。鋤のような形態であるが、幅が狭いことから鋤ではなく用途は不明である。

59~62は板状ないしは角材状の木製品で、破片のため用途が特定できないものである。59は板材の先端を台形状に加工したもので、60は角材の端を斜めに四方から斜めに加工したもので、61は板材の一辺を片刃状に加工したものである。樹種は59がサカキ、60がマツ属複雑管束亜属、61がイヌマキ、62がクスノキである。

63・64は建築部材の一部とみられる大型の板材である。63は残存長86.1cm、幅9.3cm、厚さ1.8cmあり、一方に幅2.8cmの柄穴が開けられている。樹種はコナラ節である。64は残存長50.3cm、残存幅4.2cm、残存厚3.0cmあり、樹種はカヤである。65は先端を杖状に加工したもので、樹種はスギである。

66・67はモミ属の節で、66は残存長32.0cm、最大厚が8.5cm、67は残存長29.5cm、最大厚が7.2cmある。人為的な加工痕はないが、66・67は方向をそろえて並んだ状態で出土し、先端が尖っていることから杭材として利用された可能性もある。

以上の木製品は、53・55~57・59・63が下部層、50~52・58・61・64~67が上部層から出土し、54は北側溝、60は南壁、62は北壁から出土したため詳細な層準は不明である。土器と比べて下部層からの出土が多く、また、図化資料以外にもSD03からは加工木や自然木が多く出土している。また、SD03の上部層からは直柄平鋸の未成品が3点出土し、うち2点(50・51)は周囲より深くなる溝中央北半で近接して出土しており、SD03埋没後の窪地を貯木施設に利用した可能性もある。

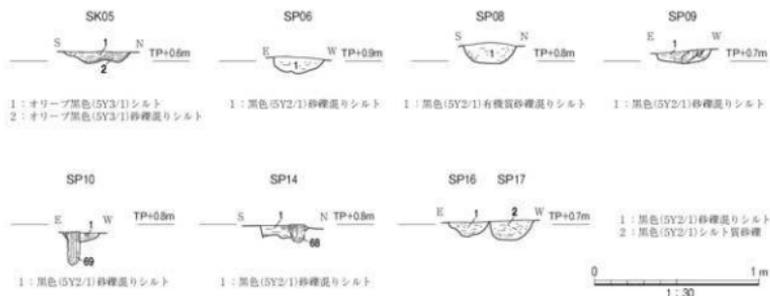


図13 弥生時代の遺構断面図

SD15はSD03西側の第4層下面で検出した南北溝で、幅0.1~0.18m、深さ0.1m前後あり、調査区内で途切れている。埋土は有機質に富む黒色砂礫混りシルト層である。

SK04はSD03の西屑で検出した平面が0.4×0.6mの楕円形で、深さ0.25mあり、他よりも規模が大きいことから土壌として区別した。埋土は黒色砂礫質シルト層である。SK05は調査区東端のSD03東側で検出した平面が0.2×0.4mの長方形土壌で、深さ0.07mある。埋土は他の第4層内の遺構とは異なり、上半に泥層が堆積している(図13)。

SP06~14・16・17は調査区西半のSD03西側で検出した小穴で、直径0.1~0.3m、深さ0.1m前後のもので占められ、埋土は第4層と同じ黒色砂礫混りシルトで共通する(図13)。SP09・10・14には柱材が遺存しており、組み合うものはないが、建物の柱穴が含まれていると考えられる。

68はSP14、69はSP10の柱材である(図14)。ともに丸木材を用いて先端を杭状に加工している。68は直径が13.1×8.8cmの楕円形で樹種はサカキ、69は直径が6.3cmで樹種はクスノキである。

これ以外の第4層内の遺構から出土した遺物は少なく図化できるものはないが、第II~III様式の弥生土器で占められており、SD03と同時期のものと考えられる。SD03東側は調査範囲が狭く不明点が

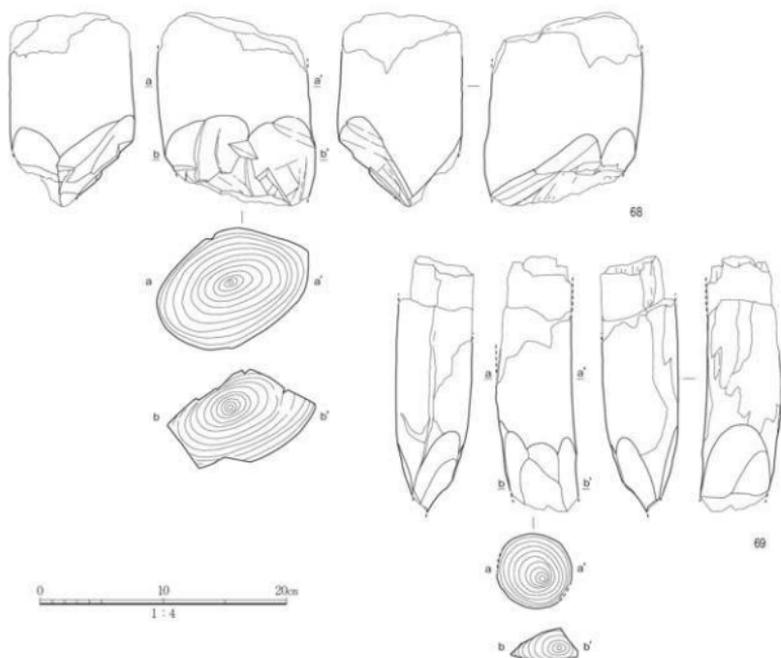


図14 弥生時代の遺構出土遺物実測図  
SP14(68)、SP10(69)



図15 調査地周辺の弥生時代の遺構・遺物の分布

ここで周辺の調査成果から今回見つかった弥生時代中期の遺構を位置づけておく。図15は[趙ほか2014]で示された調査地周辺の弥生時代後期の古地図に弥生時代前・中期の遺構・遺物の分布を示したものである。遺構・遺物は南北2箇所に分布がわかれ、北部は貝塚が形成されたMR1～4次や

多いが、SD03東側で建物の柱穴などが多く検出されており、第4層上面の標高が東より西がやや高いことから、SD03は居住域の東縁を区画していた可能性がある。

第4層から出土した石器として46・47を図化した(図9)。46は先端および基部を欠損するがほぼ完形のサヌカイト製大形尖頭器で、残存長14.8cm、最大幅3.2cm、最大厚1.3cmあり、基部に幅2.0cmの茎を有する。重量は71.5gである。側縁は茎部以外の全体に細かな摺打によって刃を付けている。用途は茎をもつ短剣と考えられる。47は両端が欠損したサヌカイト製大形尖頭器で、残存長10.5cm、最大幅3.6cm、最大厚1.5cmある。46よりも調整が粗いが、側縁全体に刃を付けていることから、製品と考えられる。

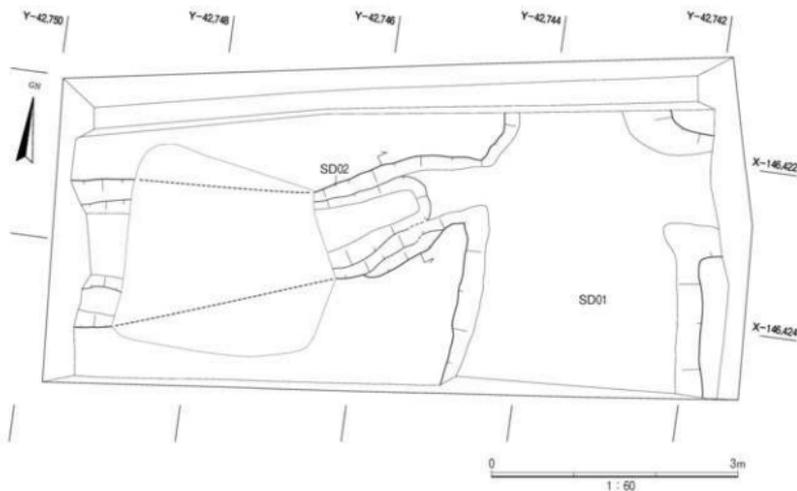


図16 豊臣期の遺構平面図

谷内から大量の土器が出土したMR98-2次調査地を中心とし、I～IV期までの遺物が連続して出土する。また、南部は今回の調査地を中心にII・III期の遺構・遺物が出土する。地形的には東の水成、西の湿地に挟まれた南北に延びる砂州ないしは自然堤防上にあり、こうした微高地を居住域と



- 1: 黄灰色(2.5Y6-1)植物遺体含む細粒砂
- 2: オリーブ灰色(5Y3-1)シルト
- 3: 灰色(5Y5-1)細粒砂質シルト
- 4: 灰オリーブ色(5Y6-2)細粒～中粒砂
- 5: 灰色(7.5Y4-1)細粒砂質シルト
- 6: 灰色(5Y6-1)中粒～粗粒砂
- 7: 灰オリーブ色(5Y6-2)細粒砂
- 8: 灰色(7.5Y4-1)無細粒砂
- 9: オリーブ灰色(7.5Y3-1)細粒砂
- 10: 灰色(7.5Y4-1)中粒
- 11: 灰色(7.5Y4-1)細粒砂～シルト

図17 SD02断面図

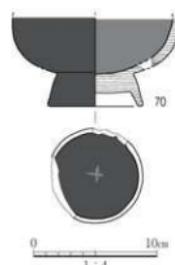


図18 SD01出土遺物実測図

したと考えられる。今回検出した南北溝も居住域の東端を画したものとみられるが、微高地の東西幅は狭く西側の湿地とも近接することから、居住域は西側へはさほど広がらず、微高地に沿って南北に広がっていたと推測される。

#### b. 豊臣期

第2a層上面でSD01・02を検出した(図16)。

SD01は調査区の西半で検出した南北溝で、幅2.0～3.2m、深さ0.4mあり、水成の細粒～粗粒砂で埋まっている。出土遺物は漆器椀70が出土した(図18)。

SD02は調査区の西半で検出した東西溝で、東側でSD01と連結する。幅0.8～1.8mあり、SD01と連結する付近は溝底がSD01とほぼ同じであるが、連結部より西側約0.5mに段差があり、以西は約0.3m低くなる。埋土は溝機能時のシルト層(図17-10層)が下半に堆積し、その上に細粒～粗粒砂を主体とした水成層が堆積している。

SD01・02は水の流れのある灌漑水路と考えられ、SD01が地形に沿った幹線水路、SD02がこれに取り付け支線水路であろう。また、SD01がSD02と連結する反対側の東辺も緩やかではあるが溝状に広がっており、SD01以東にも支線水路が連結していた可能性がある。

### 3) まとめ

今回の調査では、調査範囲が狭いものの弥生時代中期の南北大溝SD03を検出し、第II・III様式の土器とともに各種木器・石器が出土するという成果が得られた。SD03の西側では複数の柱穴を検出し、溝は居住域の東端を区画したと考えられ、周囲の地形復元からこの時期の居住域は南北に延びる自然堤防ないしは砂州上に広がっていた可能性がある。また、木製品には直柄平楸の未成品が3点含まれており、SD03埋設後の窪地が貯木場に利用された可能性がある。

#### 註)

(1)報告した木製品の樹種は、鳥取大学地域学部 中原計氏に同定していただいた。

#### 参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015、「森の宮遺跡・大坂城跡発掘調査(MR13-4)報告書」:『平成25年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』, pp.25-35
- 大阪市文化財協会1996、「森の宮遺跡」Ⅱ
- 大阪市文化財協会2002、「大坂城跡」Ⅵ
- 趙哲済・市川創・高橋工・小倉徹也・平田洋司・松田順一郎・辻本裕也2014、「上町台地とその周辺低地における地形と古地理変遷の概要」:『大阪上町台地の総合的研究-東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型-』, 巻頭図版3
- 難波宮址顕彰会1978、「森の宮遺跡 第3・4次発掘調査報告書」
- 森の宮遺跡発掘調査団1973、「森の宮遺跡-第1・2次調査報告」
- 森田克行1990、「摂津地域」:寺沢薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年』近畿編 木耳社, pp.77-191

北壁地層断面および  
弥生時代の遺構検出状況  
(南から)



弥生時代の遺構検出状況  
(東から)



SD03地層断面  
(南から)

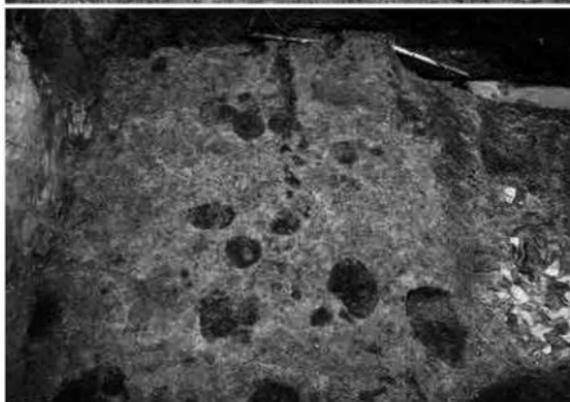




SD03木製楯未成品出土状況  
(南から)



調査区西部弥生時代の遺構  
検出状況(南から)



豊臣期の遺構検出状況  
(東から)





中央区上本町西三丁目15-4における建設工事に伴う  
上本町遺跡発掘調査(UH20-3)報告書

調査個所 大阪市中央区上本町西3丁目15-4  
調査面積 約186㎡  
調査期間 令和2年10月1日～11月19日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋 工、平田洋司

### 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は上本町遺跡の北端部に位置し、市内の主要幹線道路のひとつである上町筋に面している。地形的には上町台地の頂部に当り、段丘層が浅く検出される地域である。また、豊臣期大坂城では惣構南堀付近で、城内への入口として「天王寺口(八丁目口)」が上町筋に開いていたとされる。周辺では、多くの調査がなされており、古代から近世にかけての各時期の遺構・遺物が確認されている。なかでも上町筋を隔てた東側で行われたOS93-3次調査では、大坂城惣構堀と考えられる堀が検出された〔大阪市文化財協会2002〕。堀の北肩に当り、幅は25m以上、深さは検出面から5m以上(現地表面から約8m)である。また、ボーリングのデータでは、現地表面から約11m下に底と推定される地層が確認されている。出土物は少量の瓦片と木片のみであるが、遺構の重複関係からは15世紀代の土壌より新しく、17世紀後半の土壌より古い。遺構の位置や規模、時期から判断して惣構堀と判断できるものである。

今回の調査地では、令和2年6月25日に大阪市教育委員会により行われた試掘調査によって、現地表下1.0m以下で、近世以前の遺構面・遺物が確認され、堀の埋土と推定される整地層が認められたことから、本格的な発掘調査を行うこととなった。現地における調査は令和2年10月1日より開始した。大阪市教育委員会の指示により、東西26m、南北7mの調査区を設定した。調査計画書では東西に二分し、反転して調査を行う予定であったが、排土置場の確保のため三分割せざるを得なかった。必要に応じて西区・中区・東区と呼称する。調査は西区から開始した。重機による掘削は後述の第3b層上面までとし、以下は基本的に人力による掘削を行ない、部分的に重機による掘削を併用した。適宜、遺構検出・掘削作業、記録作業を行いながら、調査を進めた。第5層上面までの調査を終え、第5層

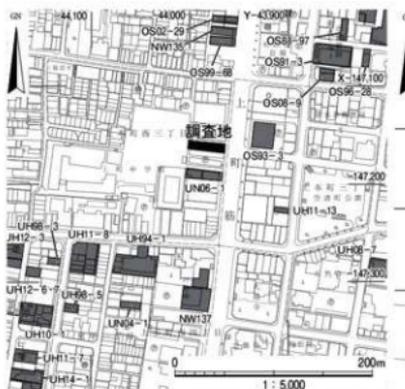


図1 調査地位置図

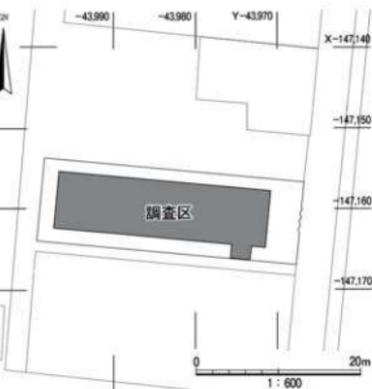


図2 調査区位置図

が地山由来の偽礫主体の整地層であることから、当初は本層以下を堀の埋土と判断した。下位の地層の把握のため、深く掘削する必要があることから、一旦、西区東半を埋戻し、西半において重機による掘削を開始した。結果、第5層は徳川期の整地層であり、第5層を除去後に堀の肩と大坂冬ノ陣後の埋め立てに係わる埋土が検出されることが判明した。そこで、肩の位置の確認と、埋土の掘削を行った。堀については検出面から全体に1m程度の掘削とし、以下は部分的な掘削を行った。西区東半については、再度、埋戻し土の除去を行い、同様の調査を行った。

西区の調査結果から、調査区の南端付近で堀の肩が検出されるであろうこと、検出のためには土量が相当量出ることが予測できたため、効率よく調査を行うべく、中区・東区については、中区全体で第5層上面まで調査を終えたのちに、先に西半について下位の掘削を行い、西半を埋戻し、東半の下位の調査を行い、東半を埋戻して東区に移り、同様の作業を行った。また、調査期間を確保するため、中区・東区における当初の重機掘削は第4層上面までとした。調査の最終日には、調査区南東部において東西2.5m、南北1.6mの調査区の拡張を実施した。堀の肩は徳川期に削平されており、段丘層の標高は周辺の調査に比べて低かったため、さらに外側(南側)での傾斜の有無を確認することが目的であったが、検出されなかった。このため調査面積は当初の182㎡から186㎡となった。現地における調査は11月19日に終了した。

以下の本文等に示す標高はTP値(東京湾平均海面値)で、TP+○mと記した。また本報告で用いた方位は、街区基準点を用いたトラバース測量によって得られたもので、座標北を基準とした。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3)

調査地の現況地形は平坦で、地表面の標高はTP+19.2~19.4mである。部分的な掘削も含め、調査では現地表下4.2mまでの地層を確認し、第1~6層に区分した。

第1層：現代の整地層および攪乱で、層厚は20~60cmである。

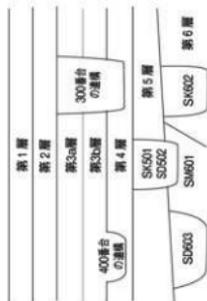
第2層：近代の整地層で、層厚は20~60cmである。複数の地層からなる。

第3層：第3a層・第3b層に区分した。第3a層は地山に由来する偽礫を多く含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒~粗粒砂などからなる整地層である。層厚は20~30cmである。第3b層は地山に由来する偽礫を多く含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質中粒~粗粒砂などからなる整地層で、層厚は20~30cmである。第3a層上面からは土壌など多くの遺構が掘込まれている。本層からの出土遺物は少ないが、上下の遺構出土の遺物の年代から17世紀後葉に位置づけられる。

第4層：炭を含む褐色(10YR4/4)シルト質中粒~粗粒砂などからなる作土層で、層厚20cm未満で中区以東に遺存する。本層上面の遺構として溝・土壌などを検出した。17世紀後半に位置づけられる。

第5層：地山層である第6層に由来する偽礫を多く含む褐色(10YR4/4)細礫混り中粒~粗粒砂、黄褐色(10YR5/6)シルト質粗粒砂など複数の層からなる整地層である。層厚は40~80cmで、北側ほど厚く堆積する。堀の肩部を削平しつつ、堀埋土の低い部分を埋め立てている。本層上面の遺構として溝・土壌などがある。

地層と遺構の関係図



中区東壁

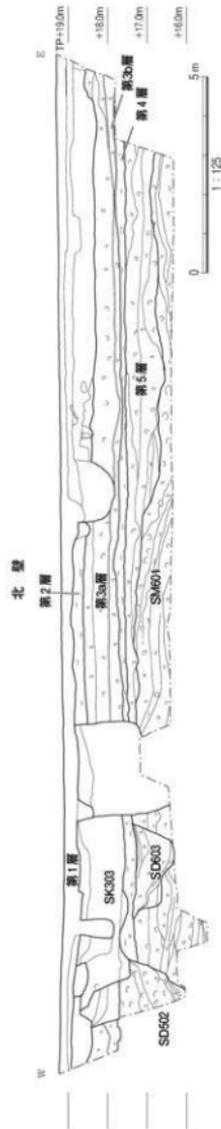
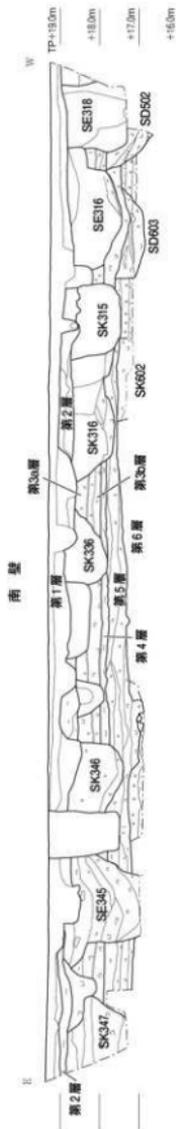
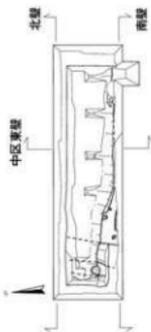
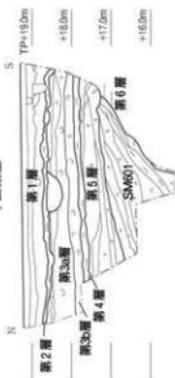


図3 地層断面図

第6層：上部は明黄褐色(10YR6/6)細礫、下部は黄橙色(10YR7/8)細粒砂からなる地山(段丘構成層)である。層厚は200cmまでを確認した。本層上面で検出された遺構としては堀がある。

ii) 遺構と遺物(図4-13)

a. 第6層上面の遺構

第6層上面の遺構として、堀・土壇・溝がある。

**SM601** 幅5.0m以上、深さ2.0m以上の東西方向の堀である。南肩と北に下がる斜面を検出した。後述のとおり豊臣期大坂城惣構の南堀であると考えられる。安全のために、平面的な掘削は1m程度にとどめ、5箇所において部分的な深掘りを行った。肩は調査区内で検出されたが、第5層の整地によって削平されており、本来の肩はさらに南にあったと考えられる。肩のラインは凹凸がありつつも直線的であるが、調査地西端より約11m付近を境として、いくぶん屈曲するようにも見える。北側では現在の街区と同じ方向であるが、南側では西でやや北方向に振れる。斜面の角度は深掘りを行った5箇所においては、35~55度とばらつきがあるが、上記屈曲点近くの傾斜が緩く、東と西に強くなる。ただし、これらは巨大な施設のごく一部のみの観察に過ぎないため、評価は差し控えたい。埋土は斜面に沿って炭を含む薄い自然堆積層がある以外は地山に由来する偽礫主体の埋戻し土で、南側から投入されている。なお、検出した範囲では掘り直しの痕跡はまったく認められなかった。ただし、掘削できた範囲はわずかであり、また、掘り上げられた可能性も否定できない。中区以東では埋戻し土中に焼土・炭が確認されたが、冬ノ陣の際のものか、掘り直しがあり、さらに埋められた夏ノ陣のものであるかは不明である。埋土上面は堀の内側に当る北側ほど低くなっている。完全に平坦には埋めなかったのか、時間の経過とともに陥没したのかは不明であるが、第5層の段階で堀の内側に向けて排水溝と考えられる溝が掘られるなど、堀の内部は埋戻されたのちも周囲より一段低い地形となっていたようである。

埋土からの出土遺物は多くないが、土師器・備前焼・瀬戸美濃焼・肥前陶器・中国産青花・瓦片などがある。1~5は土師器で、1は灯明皿、2は大皿、3は大和型土釜、4は羽釜、5は鍋である。6は瓦質土器羽釜で15世紀代のものである。7は瀬戸美濃焼皿、8は肥前陶器碗である。9・10は中国産青花皿である。11は口縁部が端反りの李朝白磁皿である。12は砥石で、両面に研ぎ溝が見られる。13は巴文軒丸瓦である。瓦片は出土遺物の中でもっとも多い。14はアカニシである。15は球状の土製品である。これらの遺物は豊臣後期に位置づけられる。

**SM601**は位置、規模、形状、出土遺物等から判断して、豊臣期大坂城の惣構南堀であることは疑いえないであろう。東のOS93-3次調査では北肩が検出され、今回の調査地では南肩が検出されたこととなる。一連であったとすると幅は27~28m程度、両調査ともに本来の肩が削平されているため、本来の規模は30mをいくぶん超えていた可能性が高い。OS93-3次調査との関係は後述する。

**SK602** 調査区南端で検出した。遺構の北端がわずかに調査区にかかっているのみで形状は不明であるが、東西2.0mである。垂直に近く落込み、深さは0.3m以上である。第6層上で検出し、第5層によって覆われている。埋土は地山由来の偽礫を多く含む粗粒砂~細礫の埋戻し土である。平瓦片が出土したのみで、時期は不明である。

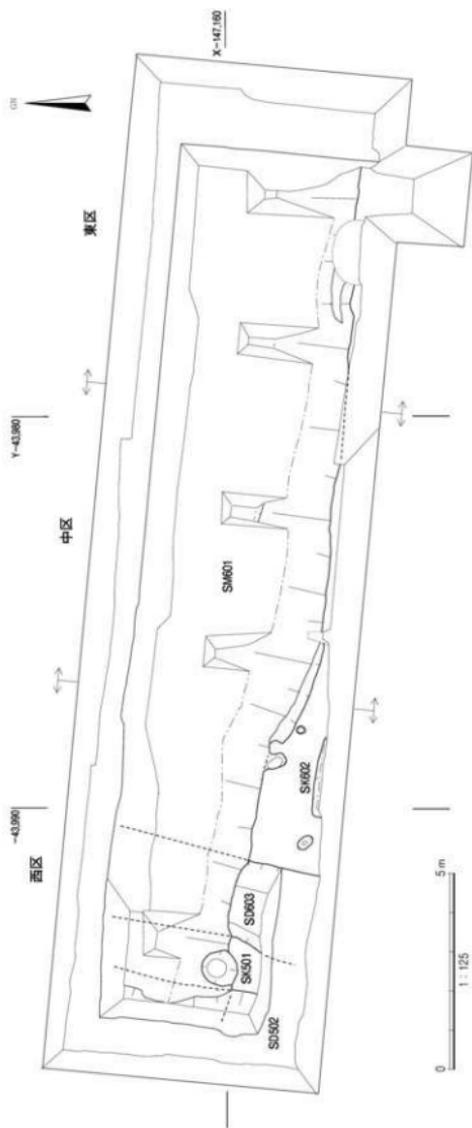
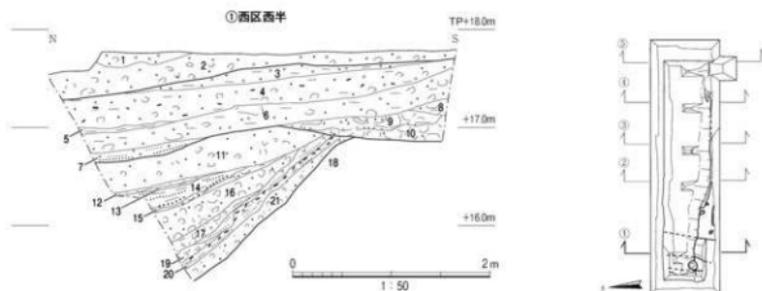
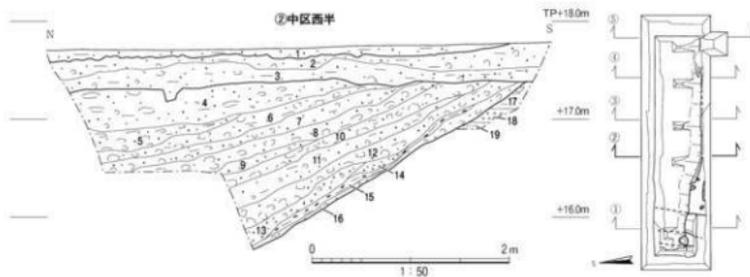


図4 第6層上面・第5層上面突出の遺構



- 第5層
- 1: 浅黄色(5YR7.5/3)細礫混り粗粒砂
  - 2: シルト礫多量含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細礫混り粗粒砂  
SD501
  - 3: 褐色(10YR5/6)細礫混りシルト質粗粒砂
  - 4: 炭・シルト礫多量含む暗オリーブ褐色(2.5Y4/4)細礫混りシルト質粗粒砂
  - 5: オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト
  - 6: シルト礫多量含む暗オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粗粒砂～細礫
  - 7: 浅黄色(2.5Y7/4)細礫混り細粒～中粒砂
  - 8: シルト礫多量含む灰白色(5Y7.2)粗粒砂
  - 9: シルト礫多量含む明黄褐色(2.5Y6/6)細礫混り細粒～中粒砂
  - 10: シルト礫多量含む浅黄色(2.5Y7/3)細礫混り細粒～中粒砂

- SM601
- 11: シルト礫含む黄褐色(2.5Y5/6)粗粒砂
  - 12: 黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂
  - 13: 黄褐色(2.5Y5/3)シルト
  - 14: シルト薄層含むにふい黄色(2.5Y6/4)中粒～粗粒砂
  - 15: シルト礫含む黄褐色(2.5Y5/6)粗粒砂
  - 16: シルト礫多量含む暗オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂
  - 17: シルト礫含む暗オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質中粒砂
  - 18: オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂
  - 19: シルト礫含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒砂
  - 20: 炭含むオリーブ黒色(5Y3/2)シルト質中粒砂
  - 21: シルト礫含む灰白色(7.5Y7/1)砂粒砂～細礫



- 第4層
- 1: 炭含む黄褐色(2.5Y5/6)シルト質中粒～粗粒砂
- 第5層
- 2: シルト礫少量含むにふい黄褐色(10YR5/4)シルト質中粒～粗粒砂
- SM601
- 3: シルト礫少量含む黄褐色(10YR5/6)シルト質中粒～粗粒砂
  - 4: シルト礫多量含むにふい黄褐色(10YR5/4)シルト質中粒～粗粒砂
- 第6層
- 5: 炭含む褐色(10YR4/4)シルト質中粒～粗粒砂
  - 6: シルト礫多量含むにふい黄褐色(10YR5/4)シルト質中粒～粗粒砂
  - 7: シルト礫多量含む黄褐色(10YR5/6)シルト質中粒～粗粒砂

- 8: シルト礫多量含む黄褐色(10YR5/7)シルト質中粒～粗粒砂
  - 9: シルト礫含むにふい黄褐色(10YR5/5)シルト質中粒～粗粒砂
  - 10: シルト礫多量含む黄褐色(10YR5/6)シルト質中粒～粗粒砂
  - 11: シルト礫多量含む褐色(10YR4/4)シルト質中粒～粗粒砂
  - 12: シルト礫多量含む黄褐色(10YR5/8)シルト質中粒～粗粒砂
  - 13: シルト礫含む褐色(7.5YR4/6)粗粒砂～細礫
  - 14: 暗灰黄色(2.5YR5/2)粗粒砂～細礫
  - 15: 炭多量含む黒褐色(2.5Y3/2)シルト
  - 16: シルト礫含むにふい黄色(2.5Y6/4)中粒砂
- 第6層
- 17: 黄色(2.5Y8/6)細粒砂
  - 18: 浅黄色(2.5Y7/4)細粒砂
  - 19: 黄褐色(10YR7/8)細粒砂

図5 SM601断面図(1)



第4層

1: 灰含む褐色(10YR4/4)シルト質中粒～粗粒砂

第5層

2: 灰・シルト偽礫含む褐色(10YR4/4)シルト質中粒～粗粒砂

3: シルト偽礫含む褐色(10YR4/5)シルト質粗粒砂

4: シルト偽礫含むふい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂

5: シルト偽礫含む褐色(10YR4/6)細礫混りシルト質中粒～粗粒砂

6: 黄褐色(10YR5/6)中粒～粗粒砂

7: シルト偽礫含む褐色(10YR4/6)シルト質中粒～粗粒砂

8: シルト偽礫含む黄褐色(10YR5/6)シルト質中粒～粗粒砂

9: 黄褐色(10YR5/6)細粒～中粒砂

SM601

10: 灰・焼土・シルト偽礫含む黄褐色(25Y5/6)中粒～粗粒砂

11: 灰・焼土・シルト偽礫含む黄褐色(10YR5/6)中粒～粗粒砂

12: シルト偽礫含む褐色(10YR4/6)中粒～粗粒砂

13: シルト偽礫多く含む褐色(10YR4/6)中粒～粗粒砂

14: シルト偽礫多く含む黄褐色(10YR5/6)中粒～粗粒砂

15: 灰・焼土含む褐色(10YR4/5)シルト質中粒砂

16: 灰・シルト偽礫含むふい黄褐色(10YR6/4)シルト質粗粒砂

17: シルト偽礫多く含む明黄褐色(10YR6/8)粗粒砂

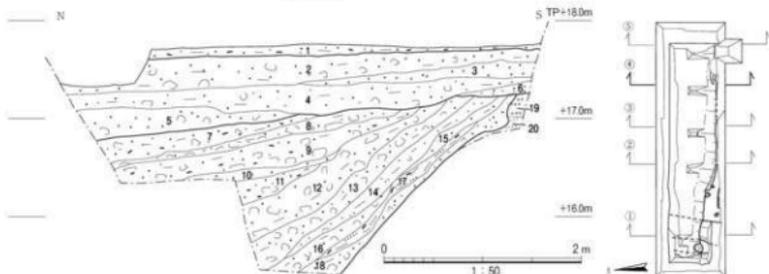
第6層

18: 黄色(2.5Y8/6)細粒砂

19: 浅黄色(2.5Y7/4)細礫

20: 黄褐色(10YR7/8)細粒砂

④東区西半



第4層

1: 灰含む褐色(10YR4/4)シルト質中粒～粗粒砂

第5層

2: シルト偽礫含むふい黄褐色(10YR5/4)シルト質粗粒砂～細礫

3: 黄褐色(10YR5/5)粗粒砂～細礫

4: シルト偽礫含む黄褐色(10YR5/6)シルト質中粒～粗粒砂

5: シルト偽礫多く含む明黄褐色(10YR6/6)粗粒砂～細礫

6: シルト偽礫含む褐色(10YR4/4)シルト質中粒～粗粒砂

SM601

7: 灰・焼土・シルト偽礫含む黄褐色(10YR5/6)シルト質中粒～粗粒砂

8: シルト偽礫多く含む黄褐色(10YR5/6)シルト質中粒～粗粒砂

9: 灰・焼土・シルト偽礫含む褐色(10YR4/4)シルト質中粒～粗粒砂

10: シルト偽礫多く含む褐色(10YR4/6)シルト質粗粒砂

11: 灰・シルト偽礫含む褐色(10YR4/4)シルト質中粒～粗粒砂

12: シルト偽礫多く含む黄褐色(10YR5/6)シルト質粗粒砂

13: シルト偽礫多く含む黄褐色(10YR5/6)シルト質中粒～粗粒砂

14: シルト偽礫多く含むふい黄褐色(10YR5/4)中粒砂

15: におい黄褐色(10YR4/3)中粒～粗粒砂

16: シルト偽礫多く含むふい黄褐色(10YR5/3.5)粗粒砂

17: 灰多く含む灰黄褐色(10YR4/2)シルト質中粒砂

18: シルト偽礫多く含むにおい黄褐色(10YR5/4)中粒～粗粒砂

第6層

19: におい黄褐色(10YR6/4)粗粒砂～細礫

20: 淡黄色(2.5Y8/3)細粒砂

図6 SM601断面図(2)

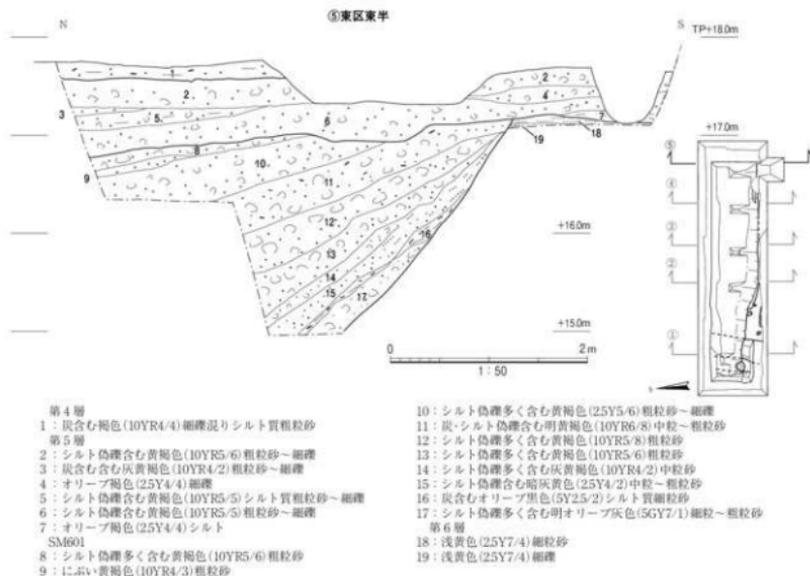


図7 SM601断面図(3)

**SD603** 調査区西部で検出した東西方向の溝である。**SM601**の埋土を掘り込んでおり、第5層で覆われる。西区西半での当初の深掘りの際に、**SM601**の埋土とともに重機で掘削してしまったため、正確な形状は不明であるが、第6層上で検出した部分と、断面の観察等から復元した。幅2.3m、深さは南側で0.6m、北側で1.0mであるが、もともとの地面が北側の方が低いため、底の標高としては調査区の南北幅5mの距離で北側が0.6m低くなっている。埋土は、北側では加工時形成層である地山に由来する偽礫主体であるが、南側では自然堆積層で水流の痕跡が認められることから、南側から堀の内部である北側の低地への排水の機能があったと考えられる。土師器・肥前磁器・瓦片が出土した。第5層との関係から、17世紀中葉と考えられる。

#### b. 第5層上面の遺構

大坂冬ノ陣の和睦で堀が埋立てられたのち、さらに第5層により整地が行われている。この際の整地は、高い南側を削平するもので、堀の肩部や肩部に近い埋土も削平されている。一方、堀の内部で埋立て後にも低い部分であった調査地北端部では、埋め立てが行われている。低い土地であったところを開発し、屋敷地を広くとるため、雑壇的な造成を行った可能性がある。

第5層からは土師器・瓦質土器・備前焼・瀬戸美濃焼・肥前陶器・肥前磁器・中国産青花・瓦片などが出土した。16は肥前磁器染付碗、17は肥前陶器搦鉢である。18は中国産青花碗である。19は丹波焼搦鉢である。20は凸面に格子タタキを有する平瓦片で古代のものである。これらの遺物は17世紀中葉までのものである。

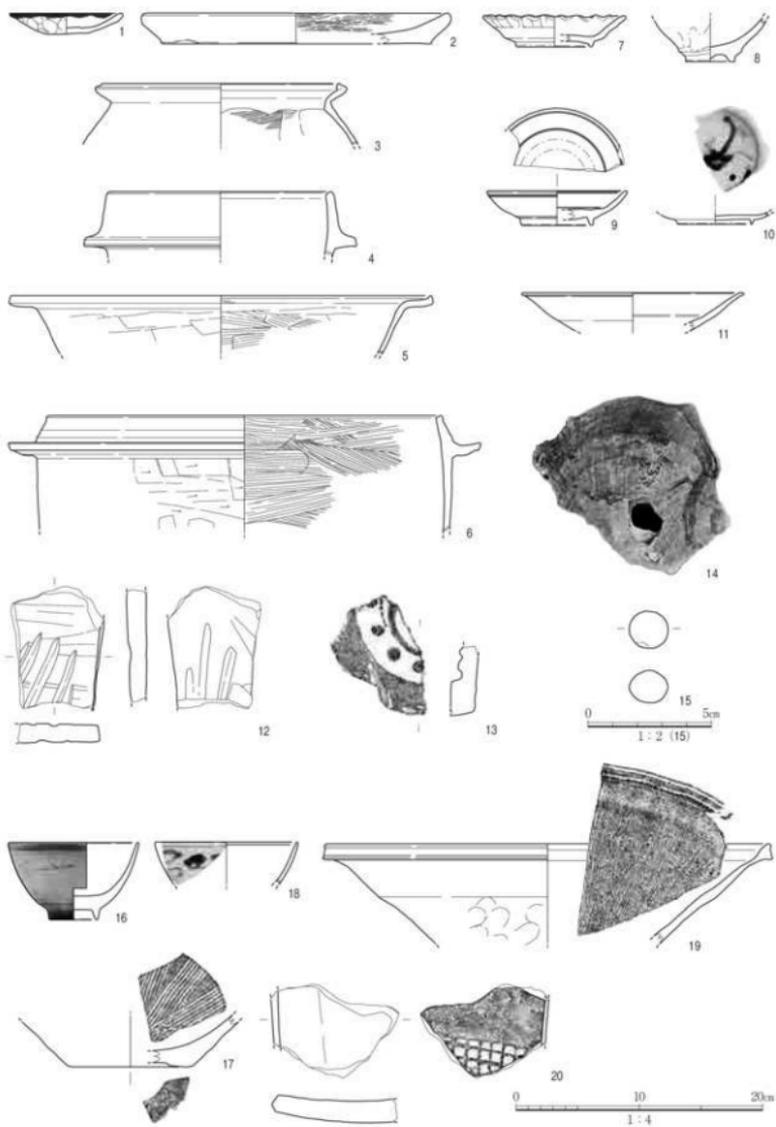


图8 出土遗物实测图(1)  
SM601(1~15)、第5层(16~20)

西区では断面の観察から本層上面に遺構面がある遺構を確認した。ただし、堀の位置するところでは、重機による掘削を行ったため、第5層上面での平面的な検出はできていない。

**SK501** 直径1.0m、深さ0.4mの平面形が円形の土壌である。深さは、0.5mである。平瓦片が出土したのみである。

**SD502** 調査区西端で検出した南北方向の溝である。第5層の最上部に掘込み面がある。幅1.7m以上、深さは1.8m以上あり、北に向かって急激に下がっている。また、肩部の傾斜も急であり、**SD603**に比べるとしっかりとした溝の印象を受ける。埋土は下部が水流の痕跡を示す粗粒砂層、上部が埋戻し土である。埋戻し土は地山偽礫主体である。西側は調査区外であるが、埋土に水流の痕跡が認められることから、西へ下がる斜面ではなく溝と判断した。機能としては**SD603**と同じく北への排水であろう。土師器・肥前陶器片が出土した。肥前陶器は17世紀中葉と考えられる。なお、調査区のすぐ西、今回の調査地の敷地西端に南北方向の背割下水があり、何らかの区画が踏襲されているのかもしれない。また、敷地南側には東西方向の背割下水があり、**SM601**のラインと一致する。

#### c. 第4層上面の遺構

作土層である第4層上面では、西区で土壌のほか、中区・東区で小溝群を検出した。なお、第4層は中区以東にのみ遺存する。

**SK425** 直径2.0mの平面形が円形の土壌で、深さは0.3mである。南部は**SE316**によって失われている。埋土はシルト偽礫を多く含む粗粒砂からなる埋戻し土である。土師器片・肥前磁器片が出土した。

**SK424** 直径1.0mの平面形が円形の土壌で、深さは0.1mである。埋土は第3b層の整地層である。遺物は出土しなかった。

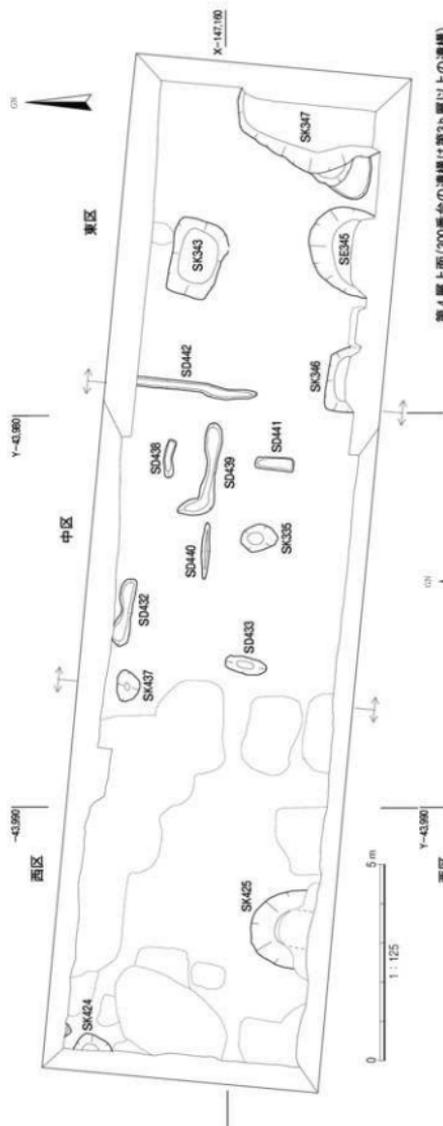
**小溝群** 幅0.2～0.4m程度、深さ0.1m未満の東西、もしくは南北方向を主とする溝である。図ではSDの遺構表記に400番台の遺構番号を付している。埋土は第3b層である。第4層が作土層であることから畝間溝の可能性はある。

これらの遺構からは遺物は出土しなかったが、上下層の地層および遺構出土遺物から、17世紀中葉～後葉に位置づけられる。

#### d. 第3b層上面の遺構

西区では第3b層上面から遺構検出作業を行った。ただし、壁面の観察では確実に第3b層上面の遺構は確認できず、第3a層上面以上に掘り込み面がある。また、中区・東区では第4層上面から遺構検出作業を行ったため、深い遺構しか確認することができなかった。図9で中区以東で遺構が希薄に見えるのはそのためである。なお、西区の第3b層を除いては、第3層は重機により除去したこともあり、第3層からの出土遺物は少なく時期が特定できるものはないが、第3層上面の遺構の出土遺物から17世紀後葉に位置づけられる。第3層上面の遺構としては埋土に炭を含むものが多く、ゴミ穴としての役割が推定できる。以下、主要なものを記す。なお、深さについては壁面で確認できる遺構は壁面の観察による深さを記している。それ以外は実際の検出面からの深さを記しているため、本来の深さは0.4～0.6mほどプラスする必要があることを断っておく。

**SK317** 西区西南端で検出した土壌である。東西1.1m以上、南北1.1m以上の平面形が方形で、深



第4層上面(300番台の遺構は第3b層以上の遺構)

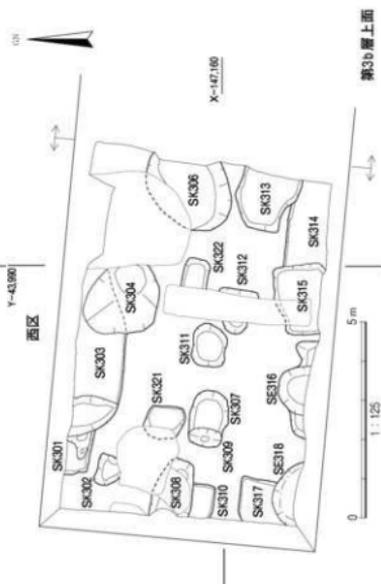


図9 第4層上面・第3b層上面検出の遺構

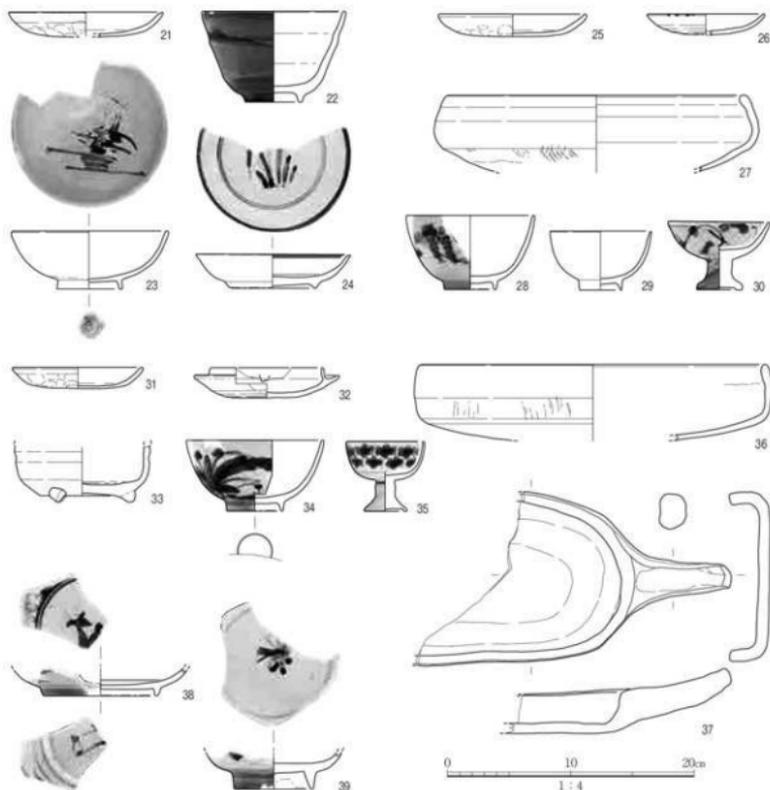


図10 出土遺物実測図(2)

SK317(21~24)、SK321(25~30)、SK346(31~37)、SE318(38・39)

さは0.5mである。底部は平坦である。埋土には炭を多く含む。土師器・肥前陶器・肥前磁器・瓦片が出土し、17世紀後葉に位置づけられる。21は土師器皿である。22・23は肥前陶器で、22は碗、23は京焼風の碗である。24は肥前磁器染付皿である。

SK308 西区西端で検出した東西1.5m以上、南北1.0m、深さは0.4mの土壌である。土師器・肥前陶器・肥前磁器など17世紀後葉の遺物が出土した。

SK314 西区から中区にかけて検出した土壌である。東西2.0m以上、南北0.8m以上の土壌で、深さは0.9mである。土師器・肥前陶器・肥前磁器など17世紀後葉の遺物が出土した。

SK321 西区で検出した東西0.8m、南北1.0mの土壌で、深さは0.4mである。底部は平坦で、埋土は炭を含む埋戻し土である。土師器・丹波焼・軟質施釉陶器・肥前磁器など17世紀末葉の遺物が出土した。25・27は土師器で、25は灯明皿、27は焙烙である。26は軟質施釉陶器灯明皿である。28~30

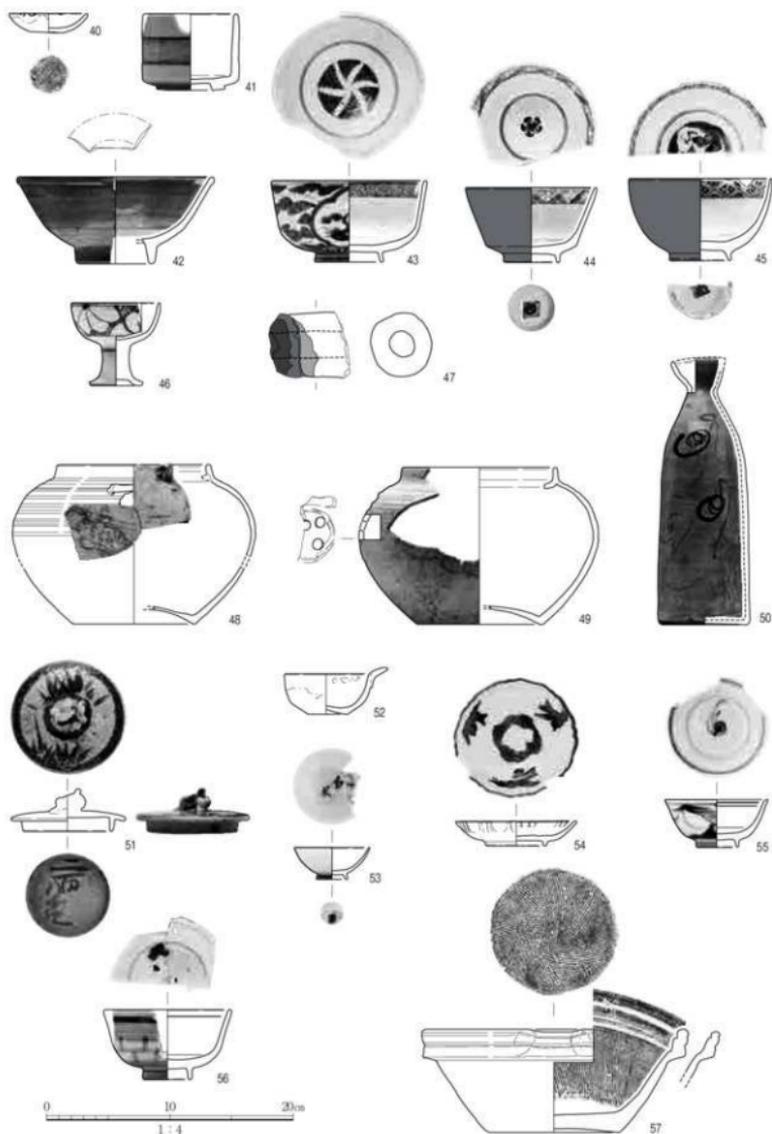


图11 出土遗物实例图(3)  
SK303(40~47)、SK304(48~57)

は肥前磁器で、28は染付碗、29は白磁碗、30は染付仏飯具である。

SK346 東区で検出した東西1.6m、南北0.7m以上、深さ1.2mの平面形が方形の土壌である。土師器・備前焼・丹波焼・肥前陶器・肥前磁器・軟質施軸陶器など、17世紀末葉の遺物が出土した。31・36・37は土師器で、31は皿、36は焙烙、37は十能である。32・33は軟質施軸陶器で、32は灯明皿、33は香炉である。34・35は肥前磁器で、34は染付碗、35は染付仏飯具である。

SK311 西区中央で検出した東西1.0m、南北0.8mの土壌で、深さは0.1mである。肥前陶器・肥前磁器など18世紀初頭の遺物が出土した。

SE318 西区西南端で検出した井戸である。直径は1.5m以上で、深さは1.6m以上である。丹波焼・肥前磁器・中国産青花など18世紀前葉～中葉の遺物が出土した。38は肥前磁器染付皿、39は中国産青花鉢である。

SE316 西区南端で検出した直径が1.2mの平面形が円形の井戸である。深さは1.4m以上である。備前焼・肥前陶器・肥前磁器など18世紀中葉の遺物が出土した。

SK315 東西2.0m、南北1.2mの平面形が方形の土壌である。深さは0.5mである。土師器・備前焼・肥前陶器・肥前磁器など18世紀中葉の遺物が出土した。

SK306 西区東端に位置する東西2.0m以上、南北2.5mの土壌で、深さは0.8mである。土師器・肥前陶器・肥前磁器など18世紀中葉の遺物が出土した。

SK313 西区東端に位置する東西2.0m以上、南北1.0mの土壌で、深さは0.6mである。土師器・備前焼・肥前陶器・肥前磁器・土人形など18世紀中葉の遺物が出土した。

SK343 東区で検出した東西2.0m、南北1.3mの平面形が方形の土壌で、深さは0.6mである。埋土には多量の炭を含む。丹波焼・軟質施軸陶器・肥前陶器・肥前磁器など18世紀中葉の遺物が出土した。

SK303 西区北端に位置する東西5.0m、南北1.2m以上の土壌で、深さは1.0mである。土師器・備前焼・丹波焼・肥前陶器・肥前磁器・瓦など18世紀後葉に位置づけられる遺物が多く出土した。特に瓦片は多量である。40は軟質施軸陶器灯明皿、41は関西系陶器筒茶碗である。42は肥前陶器刷毛目鉢である。43～46は肥前磁器で、43は染付碗、44・45は青磁染付碗、46は染付仏飯具である。47は輪の羽口である。

SK304 西区北側で検出した南北2.0m、東西1.9m以上の平面形が円形の土壌で、深さは0.8mである。土師器・備前焼・肥前陶器・肥前磁器・瀬戸焼磁器・関西系陶器など19世紀中葉の遺物が多数出土した。48・49は土師器土瓶である。50・51は関西系陶器で、50は網徳利、51は染付蓋である。51の内面には墨書がある。52は関西系陶器と考えられる小鍋である。鉄漿滲の可能性がある。53は関西系磁器小杯である。54・55は瀬戸美濃焼磁器で、54は染付皿、55は染付碗である。56は砥部焼染付碗である。57は明石焼播鉢である。

SK347 東区東端で検出した土壌である。多くは調査区外のため規模は不明であるが、東西1.5m以上、南北3.5m以上で、深さは0.8m以上である。掘削した深さでは井戸側などの構造物は確認できなかったが、壁面は垂直に近く下がるため、井戸の可能性はある。土師器・丹波焼・肥前陶器・肥前磁器・瓦片など19世紀前葉の遺物が出土した。

e. SM601について

今回検出したSM601は位置、規模、構造、時期などから豊臣期大坂城惣構南堀に比定することには問題がないだろう。今回の調査地から上町筋を挟んで東に位置するOS93-3次調査において見つけていた堀との関係を少し見ておきたい。

両遺構の位置関係を示すと図12のようになる。まず、OS93-3次調査で検出された堀について記しておく。報告書では調査の成果と図中のAの地点でのボーリング調査の所見をもとに、幅は少なくとも25m以上、深さは現地表面から8m（遺構の検出面から5m）以上で、Aの地点で現地表面から11m（遺構の検出面から8m）とされている[大阪市文化財協会2002]。肩の傾斜は50～55°であり、この間の埋土はすべて北から南へと下がっている。ただし、調査上の制約から実際に埋土の掘削を行ったのは、肩のラインから16m南までである。埋土は確認されていることから、南肩がOS93-3次調査地を越えることは間違いないが、深さに係わる情報はボーリングデータのみであることは注意を必要とする。また、報告書記載の堀の肩のラインとA地点の距離は図で測る限り、報告書に記載の25mではなく22mである。なお、図のB地点では大阪市教育委員会の試掘によって現地表下0.6mで地山層が検出されていることから幅は45mは超えない。このことからOS93-3次調査の堀は、幅22m以上で、45mまでであることがわかる。

ここで今回の調査結果を加えると、両者の位置関係は極めて示唆的であり、この距離の間隔で別の堀として屈曲し、南北に食い違うという余地は想定しにくく、両地点の堀は同一ライン上に位置する

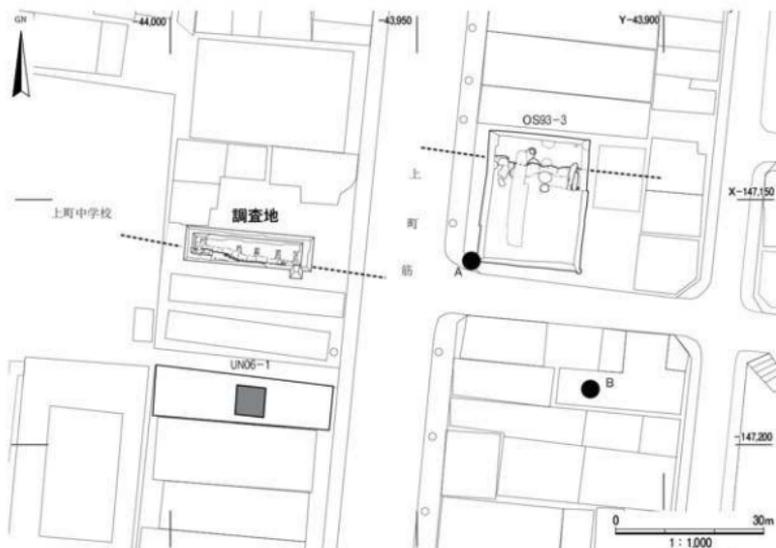


図12 OS93-3次調査との関係

と考えるのが自然とも思える。両調査地で検出した堀のラインは現在の街区にほぼ沿うような方位であり、この場合、堀の幅は27~28mに復原できる。今回の調査地では、西部において少し北側に振れていたが、この振れを反映したとしても、OS93-3次調査の南での堀の幅が30mをはるかに越えることはなく、OS93-3次調査の南にある東西道路上に南肩ラインが位置すると考えられる。なお、前掲の報告書ではA地点のデータを北肩から南に下がる途中の数字として図示しているが、もっとも深い部分は北肩とA地点との間にあり、南肩に上がる途中の数字と考えると、この地点での深さ8mを消すには傾斜角55°の場合で5.6m、50°の場合で6.6mの水平距離となり、A地点までの距離22mと足すと、ほぼ想定通りの堀幅となる。ボーリングデータからも両地点の堀は同一ライン上にある可能性が高いと考えられる。

なお、間にある上町筋は惣構の虎口のひとつである天王寺口(八丁目口)が通じていたとされる場所である。両者の堀が接続するかどうかによって虎口の位置が変わってくる。両者の堀が接続しないとすれば、虎口は上町筋内にあることとなる。この場合、余地的に食違虎口の形は取れないため、平入りの虎口となる。城内と場外を結ぶ重要な地点であるため、単なる平入りの虎口ではなく、櫓形等の防御施設を必要としたであろう。次に、両堀が接続する場合、上町筋を北上すると行き止まりとなり、東あるいは西に折れたところに虎口があったといえる。図13は「浪華戦闘之図」の内「大坂冬の陣配陣図」である。これによれば上町筋を北進し、堀に当って西に折れた場所に虎口が描かれている。大阪歴史博物館蔵の「大坂冬の陣配陣図」なども同様の表現である。これらによれば、東から延びる堀が上町筋付近で途切れるとともに、

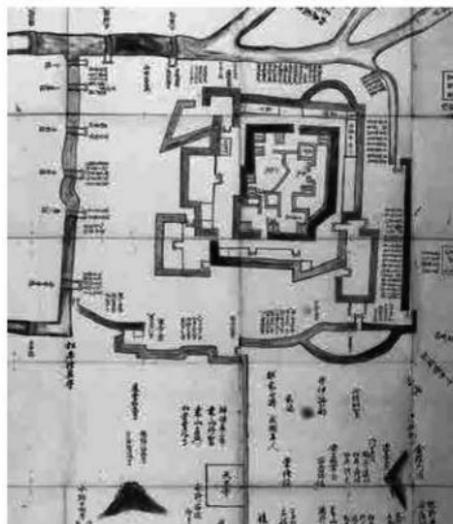


図13 「大坂冬の陣配陣図」(「浪華戦闘之図」の内)  
〔大阪城天守閣2015より〕

南に下がった位置から新たに東西方向の堀が西へと延びる。この間が虎口として表現されている。これらの絵図が正しければ、今回調査地の西方、南に下がった位置に虎口と東西方向の堀が存在したと推定できる。該当する調査地点はないが、今回調査地の南約30mではUN06-1次調査が行われている〔大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008〕。現地地表下0.8mで地山層が検出されており、この位置には堀は存在していない。

西には上町中学校があり、この想定に立てば有力な候補地となろう。上町中学校の敷地は、今回調査地のある上町筋沿いの敷地よりも1mほど下がっている。また、今回検出した堀の南肩

に沿って、東西方向、排水路と想定したSD501に沿って南北方向の背割下水があることは、この地点が区画として意味がある場所であったからなのかもしれない。ただし、現状ではこれ以上の知見はなく、今後の調査の進展に期待したい。

今回の調査で堀を検出したことにより、OS93- 3 次調査の堀の調査結果、ボーリングデータが再評価できたこと、それにより堀幅が復元できたこと、少なくとも両堀は同一直線上にある可能性がきわめて高いことは明らかにできたと考える。

### 3)まとめ

今回の調査の大きな成果は豊臣期大坂城惣構堀の検出である。OS93- 3 次調査の近隣で、かつ南屑を発見したことにより、これまで推定によっていた堀の幅の復元に大きな一助となった。今後、惣構を復元していくにおいて重要な調査となったといえよう。一方で上町筋をまたいで堀が連続する可能性が強く、虎口の位置や構造に関してあらたに問題を提起することとなった。

しかしながら、いまだ惣構の位置については推定の域を出なく、データ不足の感は否めない。いうまでもなく堀は深い遺構であり、これまでの開発によっても破壊されず、地中に痕跡を残している可能性が高い。また、地山層が高く検出できる調査地周辺においては、ある程度の深度を掘削すれば、単純に地山層が検出できたか否かという点での評価もできる。本格的な調査を経ずとも試掘調査の際にも十分データの収集が可能な地点であり、今後のさらなるデータの蓄積に期待したい。

### 引用・参考文献

大阪市文化財協会2002、「清水谷地区の調査」：『大坂城跡VI』、pp.219-233

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「上本町北遺跡発掘調査(UN06-1)報告書」：『平成18年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.31-33

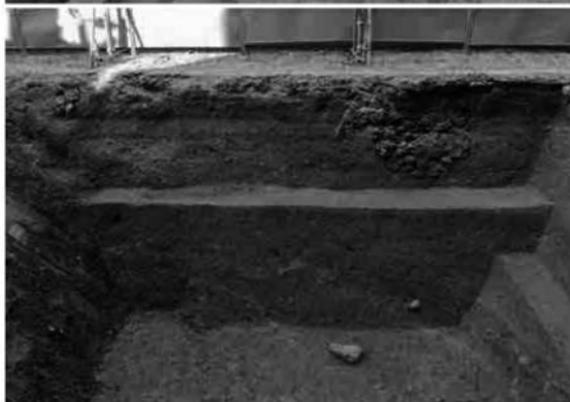
大阪城天守閣2015、「大坂城戦史」大坂の陣400年記念テーマ展図録



北壁地層断面  
〔西区〕  
(南から)



北壁地層断面  
〔中区東半〕  
(南から)



北壁地層断面  
〔東区西半〕  
(南から)





第6層上面  
〔西区〕  
(西から)



第6層上面  
〔西区西半〕  
(西から)



第6層上面  
〔中区西半〕  
(西から)





第6層上面  
〔中区東半〕  
(西から)



第6層上面  
〔東区西半〕  
(西から)



第4層上面  
〔西区〕  
(西から)





第4層上面  
〔中区〕  
(西から)



第4層上面  
〔東区〕  
(西から)



第3b層上面  
〔西区〕  
(西から)





天王寺区清水谷町 5-2・5-6 における建設工事に伴う  
大坂城跡発掘調査(OS19-7)報告書

調査個所 大阪市天王寺区清水谷町5-2・5-6  
調査面積 120㎡  
調査期間 令和2年3月16日～4月2日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋 工、白井翔太郎

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は、北側の長堀通を上町台地東縁部に向けて東へ延びる「上町谷」と、南側の空清町に沿って延びる「清水谷」とで挟まれた高台の末端に位置する(図1)。空清町一帯では、谷地形を利用して豊臣期大坂城の惣構堀が掘削されており、調査地南側に位置する清水谷公園の中で行われたNS00-19次調査では、惣構堀の整形の跡とみられる落込みが検出されている[大阪市文化財協会2002]。調査区北側で行われたNW87-18・OS98-19次調査では、いずれも豊臣期の櫓や溝、掘立柱建物など、当該期の惣構内の様相を示す遺構が発掘されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1989・2000]。また、約150m西には難波宮宮城南門から南に走る京の中心大路が推定されており、OS98-19次調査で7世紀前半の須恵器を伴う柱穴を検出するなど、古代の遺構の発見も期待される地域である。

本調査地では、大阪市教育委員会による試掘結果の結果、地表下約0.6mの深さの地山上面から柱穴や井戸などの遺構が確認されたのを受けて、発掘調査を実施することになった。調査区は大阪市教育委員会の指示により比較的残存状況が良いとされた敷地内の中央北寄りに、10m×8.5mの長方形から南側に5.5m×4m張り出した多角形として設定された(図2)。調査は令和2年3月16日より重機掘削を開始したが、試掘によって検出された遺構の再確認のため、大阪市教育委員会文化財保護課の立会のもと、西側にさらに約0.7m拡張した。また、調査中トレンチ東端から東壁にかかる落込みを検出したことから、2m×2mの拡張区をトレンチ北東に設けた。作業の手順については、現代擾乱層を重機を用いて掘削し、以後は人力によって遺構を検出、掘削した。適宜写真撮影、実測図作成等の記録作業を行い、4月2日に調査を終了した。



図1 調査地位置図

(古地形復元は[趙哲清ほか2013]による)

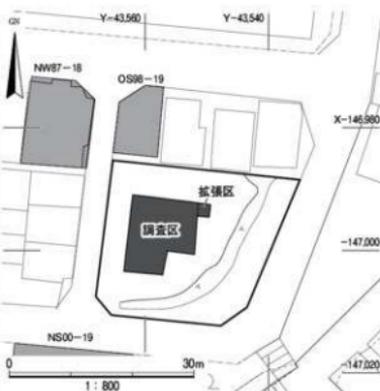


図2 調査区位置図

本報告で用いる方位は現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+〇mと記した。

## 2) 調査の結果

### i) 現況地形と層序

#### a. 現況地形

前述のように、調査地は「上町谷」と「清水谷」に挟まれた高台の末端に立地する。調査地から道路を挟んで東側と南側は急斜面で低くなり、石垣や塀が築かれている。調査地内は、南側から北東にかけて外周に沿って最大約2m掘り込まれており、調査区域を含む中央から北西にかけて2/3程度が高台として残る。調査地の現地表面はTP+17.0~17.5mで、南東から北西に向かってゆるやかに下がっている。

#### b. 層序(図3・4)

現代の攪乱層の直下で地山層が検出された。層序は以下の通りである。

第0層：現代の攪乱層である。層厚は60cmから最大で190cmに及ぶ。

第1層：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細礫・偽礫・炭混りシルト質粗粒～中粒砂からなる現代の盛土層である。拡張前は東に向かって落ちる落込みの遺構と見ており拡張の根拠としたが、拡張区の掘削の際、コンクリート片が出土したことから現代の地層とした。

第2層：地山層である。攪乱による削平の少ない個所には密に締まる砂礫層が残存するが、その下に堆積する浅黄色(2.5Y7/3)のシルト質砂礫～細粒砂層を調査面として検出した。固化していないが、この層の下にはサンドパイプを伴う褐色粗粒～細粒砂が、調査面下40～100cmまで堆積しているのを

掘削断面から確認した。後述する遺構はすべて本層上面で検出されたものである。

#### ii) 遺構と遺物(図5～7)

本調査で検出された遺構は、近世以降の小穴・溝・井戸・土壇である。調査地は東西で遺構の様相が異なり、東部では溝やゴミ穴、西部では柱穴や井戸の生活痕跡が確認された。

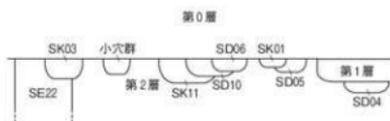


図3 地層と遺構の関係図



- 1：浅黄色(2.5Y7/3)細礫・偽礫含むシルト質中粒～細粒砂(地山)
- 2：にぶい黄褐色(10YR4/3)偽礫・細礫混りシルト質粗粒～中粒砂(SD06)
- 3：灰黄褐色(10YR4/2)偽礫・中～細礫含むシルト質粗粒～中粒砂(SD05)
- 4：黄灰色(2.5Y4/1)偽礫を多く細礫含むシルト質粗粒～細粒砂(SD04)

図4 地層断面図

調査区東部では、南北方向の溝やゴミ穴が集中して検出された。溝は井戸や柱穴とは離れて掘られており、埋土はいずれも偽礫・細礫含むシルト質粗粒～中粒砂あるいは細粒砂である。現況地形は東へ低くなり、台地の縁辺部に敷設された排水溝と考えられるが、上半は大きく削平されており断定はできない。

SD06は幅100～120cm、深さ20～30cmの溝である。遺物は肥前磁器染付の猪口1、肥前磁器染付碗2、堺播鉢3が出土した。3は口縁部のみ残る。内側には小さな突帯があり、直下の掘り目をナデによって軽く消す。体部の残りが悪く外面の削りは確認できないが、端部は平たいためⅡ型式に属すると思われる[白神典之1992]。18世紀後半の遺構である。

SD10は北東に湾曲する深さ20cmの南北方向の溝で、東肩部がSD06に切られる。関西系陶器、土師質の焙烙、堺播鉢が出土した。SK07は東西100cm以上、南北80cm、深さ15cmの楕円形の土壌である。にぶい黄褐色(10YR5/3)の焼土・細礫・炭含む粗粒～中粒砂で埋められる。肥前磁器碗や皿が出土した。SK11は深さ10cmの不整形の土壌である。北部をSK07、東部をSD10に切られる。遺構北部で部分的

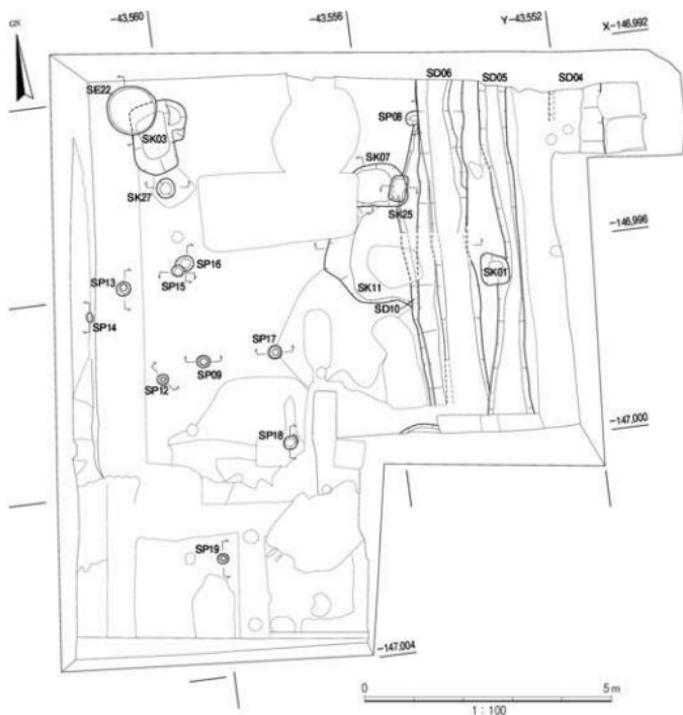
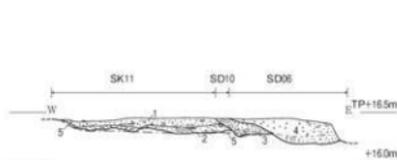
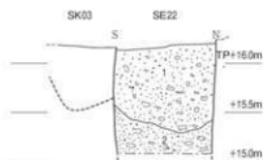


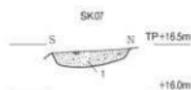
図5 遺構平面図



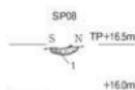
- 1 : 黄褐色 (25Y5/3) 礫層・土層含むシルト質粗粒～中粒砂
- 2 : 暗灰黄色 (25Y4/2) 細礫・角礫を多く含むシルト質粗粒～中粒砂
- 3 : オリーブ褐色 (25Y4/4)・黄褐色 (10YR5/6) 細～中礫・角礫を非常に多く含むシルト質粗粒～中粒砂
- 4 : オリーブ褐色 (25Y4/4) 細礫多く角礫を含むシルト質粗粒～中粒砂
- 5 : 浅黄色 (25Y7/3) シルト質粗粒～細粒砂 (地山)



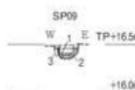
- 1 : オリーブ褐色 (25Y4/3) 中～細礫・角礫を多く、多少の灰・焼土含む粗粒～中粒砂
- 2 : 黄褐色 (10YR5/6) 細礫・角礫を多く含むシルト質粗粒～中粒砂



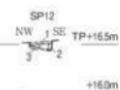
- 1 : にぶい黄褐色 (10YR5/3) 焼土・細礫・灰を含む粗粒～中粒砂



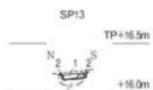
- 1 : オリーブ褐色 (25Y4/3) 細礫・中～細礫を含む粗粒～中粒砂



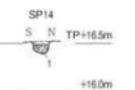
- 1 : 暗褐色 (10YR3/2) 細礫・角礫・焼土盛り粗粒～中粒砂
- 2 : にぶい黄褐色 (10YR4/2) 細礫・角礫・角礫を多く含む粗粒～中粒砂
- 3 : 明黄褐色 (10YR7/6) 細礫を含む粗粒～中粒砂 (地山)



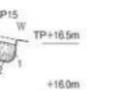
- 1 : オリーブ褐色 (25Y5/3) 細礫・角礫盛り中粒砂
- 2 : にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細礫・角礫・焼土・灰盛り粗粒～中粒砂
- 3 : にぶい黄色 (25Y6/4) シルト質中粒砂



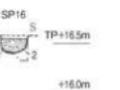
- 1 : 黄褐色 (10YR5/6) 細礫・焼土・角礫盛り粗粒～中粒砂
- 2 : にぶい黄褐色 (10YR6/4) 灰・灰土色土を含む角礫・細礫盛り中粒砂
- 3 : 明黄褐色 (10YR6/6) 中粒～細粒砂 (地山)



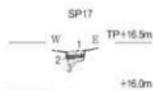
- 1 : 褐色 (10YR4/4) 細礫・焼土・角礫盛り粗粒～中粒砂
- 2 : にぶい黄色 (25Y6/4) 焼土・細礫盛りシルト質中粒砂 (地山由来)



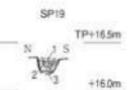
- 1 : 褐色 (10YR4/4) 細礫・焼土・角礫盛り粗粒～中粒砂
- 2 : にぶい黄色 (25Y6/4) 焼土・細礫盛りシルト質中粒砂 (地山由来)



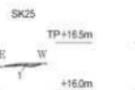
- 1 : にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細礫盛り粗粒～中粒砂
- 2 : 暗褐色 (10YR3/2) 焼土・角礫を多く含む粗粒～中粒砂



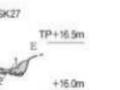
- 1 : にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細礫・焼土・角礫を多く含む粗粒～中粒砂
- 2 : にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細礫・角礫を含む粗粒～中粒砂
- 3 : 浅黄色 (25Y7/4) シルト質中粒砂 (地山)



- 1 : にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細礫・角礫を多く含む粗粒砂盛りシルト質中粒砂
- 2 : 黄褐色 (10YR5/6) 細礫・角礫を含む粗粒砂盛りシルト質中粒砂
- 3 : 浅黄色 (25Y7/4) シルト質中粒砂 (地山)



- 1 : オリーブ褐色 (25Y4/3) 中～細礫・灰・土層碎片含む粗粒～中粒砂



- 1 : 浅黄色 (25Y7/3) 角礫盛りシルト質粗粒～中粒砂
- 2 : 浅黄色 (25Y8/4) シルト質中粒砂 (地山)



図6 遺構断面図

に炭や焼土が混り、遺物が多数出土することから、ゴミ穴とみられる。遺物は、肥前磁器碗蓋4、肥前磁器の段重5、瓦質土製品6を図示した。6は外面に波状の線刻が、確認できるだけで八本縦に走る。用途は不明である。SD10、SK07・11はいずれも18世紀中葉以降の遺構である。

SD05は幅40cm～100cm、深さ30cmの溝である。棧瓦や関西系陶器が出土しており、19世紀初頭の遺構と考えられる。SK01はSD05を切る東西55cm、南北50～60cm、深さ30cmの平面形が台形を呈する土壌である。肥前磁器碗や埴摺鉢が出土した。

SD04は拡張区から検出された。現代に大きく攪乱されており、幅100cm、深さ15cm程度の底部のみが残存する。溝底は西側のSD05・06に比べ、かなり低くなっている。遺物は7～11を図示した。7は肥前磁器色絵染付碗である。外面は色絵が描かれ、内面は染付で、見込に果実文、口縁部には雷文が描かれる。体部には焼継がされている。8は肥前磁器の広東碗である。外面内面ともにねじ花文、見込みに蝶を描く。9は肥前磁器の皿である。見込に五弁花文、底部には渦渦がみられる。10は肥前磁器の皿である。輪花形で、内側には富士山と蒸気船が染付で描かれている。11は関西系陶器の灯明受皿である。以上の遺物から、19世紀初頭の遺構と考えられる。

調査区北西部では、井戸・土壌を検出した。

SK03は東西80～110cm、南北150cm、深さ70cmの不整形の土壌である。焼土や偽磔、大～細磔に加えて遺物が多数廃棄されており、ゴミ穴である。遺物は、肥前磁器染付の小杯・碗12、関西系磁器の小杯・碗14、碗15、関西系陶器碗16・灯明受皿17、信楽焼の甕18、瓦質の円筒形焔炉19を図示した。12の外面には、帆船や山、釣りが描かれ、内面は渦文が口縁を巡る。13はコンニャク印判が見込にも外面にも使用されている。外面では、絵柄の異なる印判が等間隔に並ぶ。15の外面には松の間に「福壽」、見込に「天正歳制」が書かれる。19は体部下半に楕円形の窓があり、内面中位にはこの窓の上辺に合わせるように突帯が巡る。口縁部は半円状に挟られ、内面には半円の中間点に当る位置に支え用の突起が貼り付けられている。以上の遺物から、19世紀前半の遺構と考えられる。

SE22は直径100cmの井戸である。深さは110cmまで確認したが、底は未検出である。瓦が多く出土したが、正確な時期を特定できる遺物は出土しなかった。SK03に切られることから、19世紀前半以前の遺構である。

SK27は直径40cm、深さ15cmの土壌である。浅黄色(2.5Y7/3)偽磔混りシルト質粗粒～細粒砂で埋められ、土師器片が出土した。

調査区西部中央から南部にかけて、柱穴・小穴が散在して検出された。各々の直径は、SP16の長軸が40cmと大きく、SP12・19が20cmと小さいが、他は概ね30cmである。SP09・12・13・17・18・19には直径10cm前後の柱痕跡が確認される。遺物は、SP08から平瓦片、SP09から瓦質土器片、SP16から瓦片、SP18から土師器片が出土しているが、いずれも時期を特定できない。このうち、埋土から対応すると考えられる柱穴はSP09とSP17である。土色は少し異なるが、いずれも細磔・偽磔含む粗粒～中粒砂で埋められた掘形と、細磔・偽磔・焼土混り粗粒～中粒砂で埋められた柱痕跡を確認した。柱間は150cm、方位はE0.5°Sとほぼ正東西である。調査区東部の溝の方位はN3～4°Eとなり、これらの柱穴と対応しているとは判断できない。既往の調査を探せば、調査地北隣のOS98-

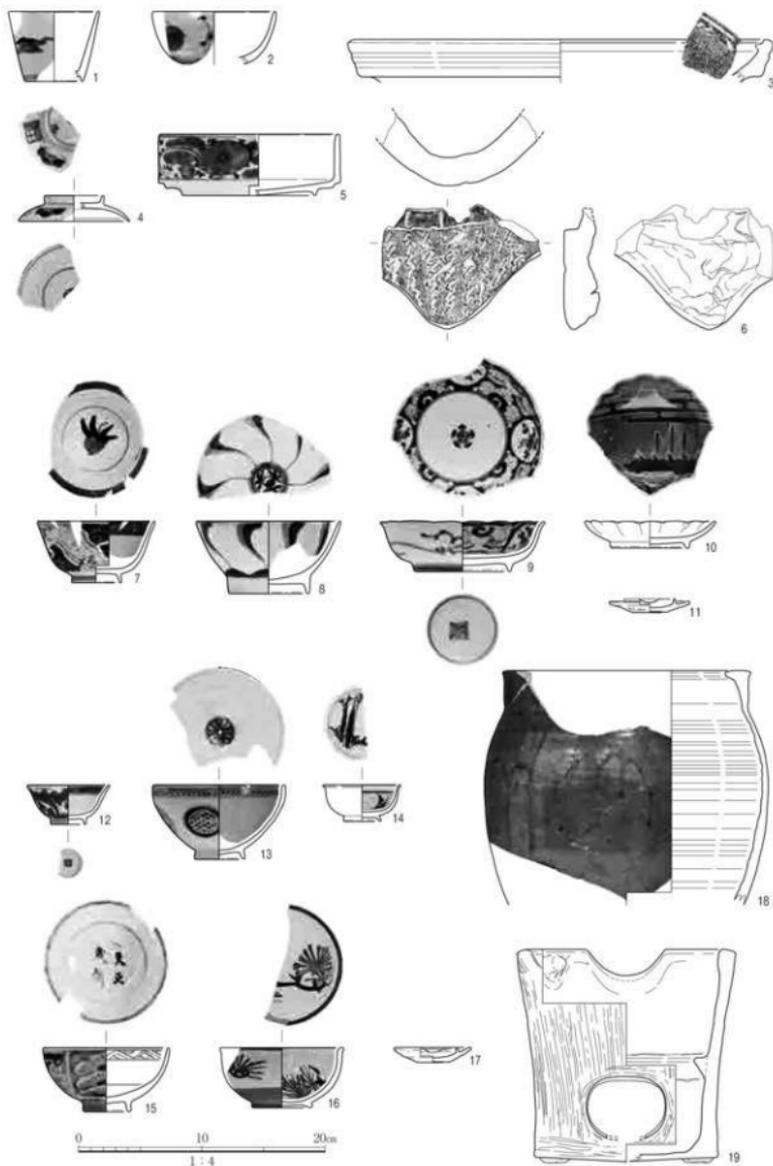


图7 遗物实测图

SD06(1~3)、SK11(4~6)、SD04(7~11)、SK03(12~19)

19次調査で検出された明治時代の柵SA01に柱間寸法や掘形の直径、柱痕跡の直径は類似するが、方位がN3°Eと異なっている。以上から、柱穴の時期を明確にすることはできなかった。

### 3) まとめ

今回の調査では、18世紀中葉から19世紀にかけての溝・井戸・ゴミ穴などの遺構を確認した。柱穴の時期を特定することはできなかったが、当該期において生活域とその周辺とで異なった遺構分布がみられることを確認した。期待された豊臣期大坂城の惣構に係わる遺構や古代の遺構は検出されなかったが、近世後半における本調査地の土地利用のあり方について、その一端を示すことができた。

### 引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1989、「安達邸建設に伴う発掘調査(NW87-18)」:『昭和62年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』, pp.115-125
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2000、「山中氏による建設工事に伴う発掘調査(OS98-19)」:『平成10年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』, pp.43-47
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2002、「難波京朱雀大路跡の調査(NS00-19)」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告書—1999・2000年度—』, pp.41-42
- 白神典之1992,「堺摺鉢考」:『東洋陶磁 第十九号』, pp.82-103
- 趙哲済・市川創・高橋工・小倉徹也・平田洋司・松田順一郎・辻本裕也2013,「上町台地とその周辺低地における地形と古地理変遷の概要」:脇田修『大阪上町台地の総合的研究—東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型—』



地山上面遺構完掘状況  
(北から)



北壁地層断面  
(南東から)



拡張区北壁地層断面  
(南から)





天王寺区大道一丁目6-9 他における建設工事に伴う  
四天王寺旧境内遺跡発掘調査(ST20-1)報告書

調査個所	大阪市天王寺区大道1丁目6-9他
調査面積	180㎡
調査期間	令和2年4月16日～5月15日
調査主体	一般財団法人大阪市文化財協会
調査担当者	調査課長 高橋工、南秀雄、橋本稔、浅田洋輔

## 1) 調査に至る経緯と経過

四天王寺旧境内遺跡は市内を南北に延びる上町台地の河底谷に接し、緩やかに南へ傾斜する平坦地に位置する古墳時代～近代の社寺跡・集落遺跡である。調査地は四天王寺西大門の南西約150mに位置する。当遺跡の周囲は、北から東にかけて広がる平安時代から近世の集落遺跡である上本町遺跡、南に中世の集落遺跡である大道1丁目所在遺跡、西に奈良時代から中世の集落遺跡である俗人町遺跡が隣接し、古代から近世の遺跡に囲まれた地域である。また、調査地がある四天王寺西大門周辺は、平安時代後期に浄土信仰の広まりとともに西方浄土を思って修行する日想観の修行地として信仰を集めた地域である。

調査地がある四天王寺旧境内遺跡西南部における調査では、当地の南東に約60mのST90-2次調査で鎌倉時代～豊臣期の井戸や土塼、蔵状遺構など[大阪文化財研究所2015a]、北に約40mのST92-7次調査で中世の井戸や柱穴のほか近世の遺構[大阪文化財研究所2015b]、東に約20mのST92-10次調査で中世の溝や柱穴、掘立柱建物[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1993]、南に約70mのST12-5次調査で平安時代前期の井戸と中世の溝を検出している[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015]。このように今回の調査地周辺では多くの遺構が検出されている。四天王寺に関する遺構としては、ST90-2次調査及びST92-10次調査において四天王寺伽藍周辺地を区画したと推定される溝が検出されている。また、周辺の調査では井戸をST90-2次調査では現代のものを含めて19基、ST92-7次調査では六角形に組んだ木製の井戸側を持つものを含めて3基、ST12-5次調査では3基検出しており、平安時代から近代に至るまで四天王寺周辺における人々の生活の痕跡が見受けられる。



図1 調査地位置図



図2 調査区配置図



図3 地層と遺構の関係図

当地における建設工事に先立ち、大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、現地表より0.6m下において遺構が確認され、遺構の下の地層から瓦器や土師器片を検出したため本調査を行うこととなった。当地は中央に2m以上のコンクリート基礎を用いた建物があったため、こ

れを挟んで調査区を東西12m、南北8mの北区と東西12m、南北7mの南区に分けて調査を行った。機械掘削は客土層(第2層)下面まで行い、それ以下は人力により掘り下げた。北区より調査を行い、適宜写真撮影や図面の作成など記録保存をしたあと北区を埋戻した。北区の埋戻しが完了した後、南区の調査を行った。

なお、本報告で使用する標高はT.P.値(東京湾平均海面値)であり、本文・挿図中では「TP+〇m」と示す。また、座標については現場において記録した周辺街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。執筆は遺構と遺物(9世紀~14世紀)を浅田洋輔、遺物(15世紀~18世紀)を小田木富慈美が行った。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

調査地の現況地形は北西から南東へ傾斜しており、高さはTP+18.1~18.5mで南東が0.4m低くなっていた。北区南壁と南区南壁の地層断面に基づいて層序を述べる。

#### 北区

第1層：暗褐色細粒砂からなるコンクリート片などを含む近・現代客土層であり、建物解体工事などに伴う攪乱である。層厚は20~50cmである。

第2層：暗褐色細粒砂からなる2~5mmの細礫混じりの客土層であり、層厚は10~30cmである。

第3層：褐色細粒砂からなる地層であり、層厚は10cmである。局所的な広がりであるため後述する第4層との前後関係は不明である。この層の上面から18世紀のSK13が掘り込まれている。

第4層：暗褐色細粒砂からなる地層であり、層厚は10~20cmである。局所的な広がりであるため先述した第3層との前後関係は不明である。この層の上面から17世紀のSK21が掘り込まれている。

第5層：褐色細粒~中粒砂からなる上町台地の地山層である。下層には自然堆積物の貝殻層を含む。

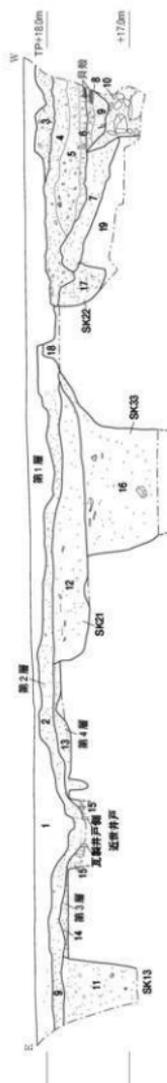
### ii) 遺構と遺物(図5~19)

第3層・第4層はともに局所的な広がりのみであり面で押さえることができなかったため、遺構の検出は第5層上面で行った。北区・南区ともに近現代の攪乱が多く、その下から古代~近世の土壘や井戸などを検出した。

#### a. 古代(9世紀)

SE20 北区の中央部北端で検出した直径0.8m、深さ0.8m以上の素掘りの井戸である。埋土は3層に遺物を含み、1・3層に偽礫が混じる。遺物は土師器・須恵器・黒色土器・瓦が出土した。1~3

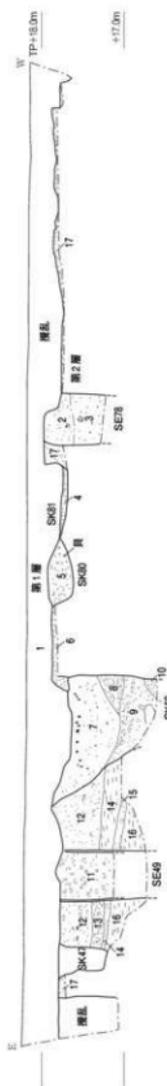
北区南型



- 11: 凝灰色 (10YR5/3) 細粒砂 (近現代産)
- 12: 灰褐色 (10YR4/3) 角礫多量混り中粒一粗粒砂
- 13: 褐色 (10YR3/3) 中粒砂 (瓦片を含む)
- 14: 褐色 (10YR3/4) 細粒砂
- 15: 灰褐色 (10YR5/3) 角礫多量混り粗粒砂
- 16: 灰褐色 (10YR5/3) 角礫多量混り粗粒砂 (瓦片を含む)
- 17: 灰褐色 (10YR5/3) 角礫多量混り粗粒砂 (瓦片を含む)
- 18: 褐色 (7.5YR4/6) 角礫混り中粒粗粒砂 (瓦片を含む)
- 19: 土褐色 (10YR6/4) 中粒粗粒砂 (瓦片を含む)

- 1: 凝灰色 (10YR5/3) 細粒砂 (近現代産)
- 2: 灰褐色 (10YR4/3) 角礫多量混り粗粒砂
- 3: 褐色 (10YR3/4) 中粒粗粒砂 (瓦片を含む)
- 4: 凝灰色 (10YR5/3) 角礫多量混り粗粒砂
- 5: 土褐色 (10YR4/3) 角礫多量混り粗粒砂 (瓦片を含む)
- 6: 灰褐色 (10YR5/3) 角礫多量混り粗粒砂 (瓦片を含む)
- 7: 凝灰色 (10YR5/3) 角礫多量混り粗粒砂 (瓦片を含む)
- 8: 凝灰色 (10YR5/3) 角礫多量混り粗粒砂 (瓦片を含む)
- 9: 褐色 (10YR4/4) 細粒砂 (瓦片を含む)
- 10: 土褐色 (2.5Y4/3) 中粒粗粒砂 (瓦片を含む)

南区南型



- 11: 褐色 (10YR4/4) 角礫多量混り中粒一粗粒砂
- 12: 灰褐色 (10YR5/3) 中粒粗粒砂 (瓦片を含む)
- 13: 褐色 (10YR3/3) 中粒粗粒砂 (瓦片を含む)
- 14: 褐色 (10YR3/4) 中粒粗粒砂 (瓦片を含む)
- 15: 灰褐色 (10YR5/3) 角礫多量混り粗粒砂
- 16: 灰褐色 (2.5Y5/3) 角礫多量混り粗粒砂
- 17: 明褐色 (10YR6/4) 中粒粗粒砂 (瓦片を含む)

- 1: 土褐色 (10YR4/3) 細粒砂 (近現代産)
- 2: 灰褐色 (10YR4/3) 角礫多量混り粗粒砂
- 3: 灰褐色 (10YR4/3) 角礫多量混り粗粒砂
- 4: 灰褐色 (10YR4/3) 角礫多量混り粗粒砂
- 5: 灰褐色 (10YR4/3) 角礫多量混り粗粒砂
- 6: 凝灰色 (10YR5/6) 細粒砂
- 7: 灰褐色 (10YR5/3) 角礫多量混り粗粒砂
- 8: 灰褐色 (10YR5/3) 角礫多量混り粗粒砂
- 9: 凝灰色 (10YR5/3) 角礫多量混り粗粒砂
- 10: 凝灰色 (10YR5/3) 角礫多量混り粗粒砂



図4 地層断面

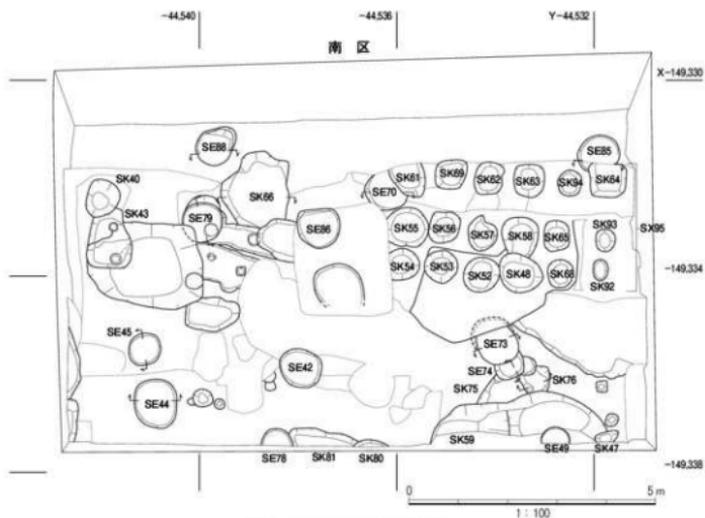
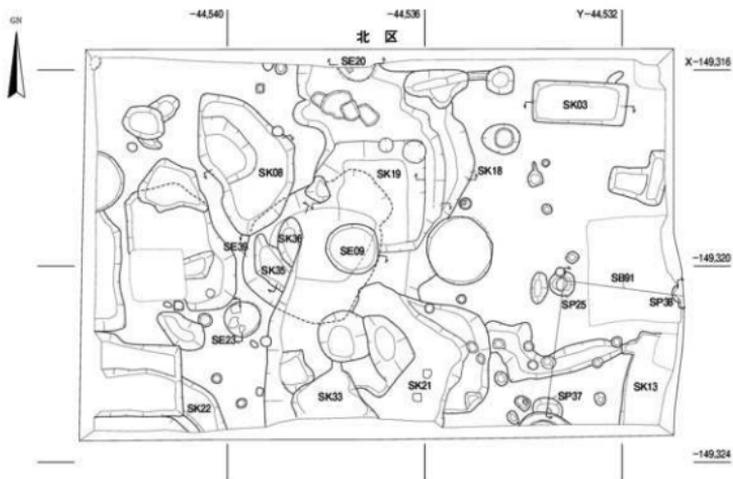


图5 第5层上面遺構平面图

は土師器碗である。4は土師器皿である。5は土師器羽釜である。6は黒色土器碗である。7は灰軸陶器皿である。8は丸瓦である。縄叩き痕をナデ消した後に縦方向と横方向に1条ずつ筋状の凹凸が入るヘラケズリを施す。

SB91 北区の南東で検出したSP25・SP37・SP38の柱穴からなる掘立柱建物である。SP25・SP37には直径0.2~0.3mの柱痕を残す。遺物はSP25より土師器が出土した。土師器皿と思われる破片は小片であるため時期が不明であるが、残存する底部内面及び体部外面にいいねいにナデを施していることから古代の遺物ではないかと考えられる。

b. 中世(13世紀~14世紀)

SE79 南区の北西で検出した直径0.8m、深さ1.0m以上の素掘りの井戸である。埋土は1層に焼土・炭化物が多く混ざり、5層に瓦器や土師器などの遺物を多く含む。安全のために5層の途中で遺構掘削を終了したため遺物をすべて回収していないが遺物コンテナ4箱分の遺物が出土した。時期は13世紀後半~14世紀前半のものであり、出土層位は下層の5層にまとまっている。以上のことからこれらの土器はこの時期にまとめて投棄されたものと考えられる。遺物は土師器・須恵器・瓦器・国産陶器・中国産磁器・瓦が出土した(図10~12)。9~33は土師器皿である。33は耳皿であり、口縁部の一部を

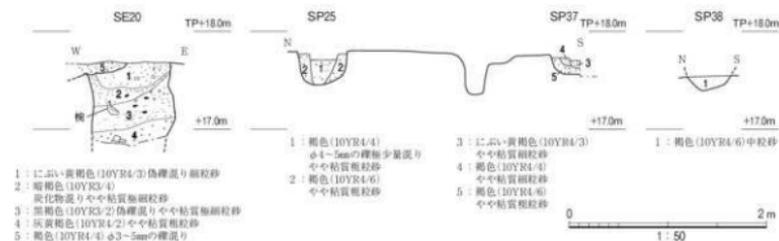


図6 古代遺構断面図

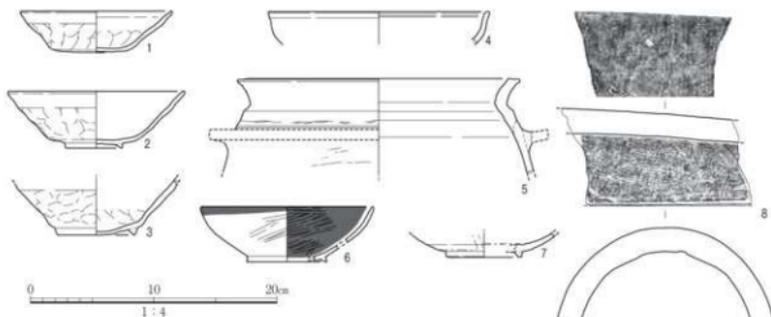


図7 古代の出土遺物実測図  
SE20(1~8)

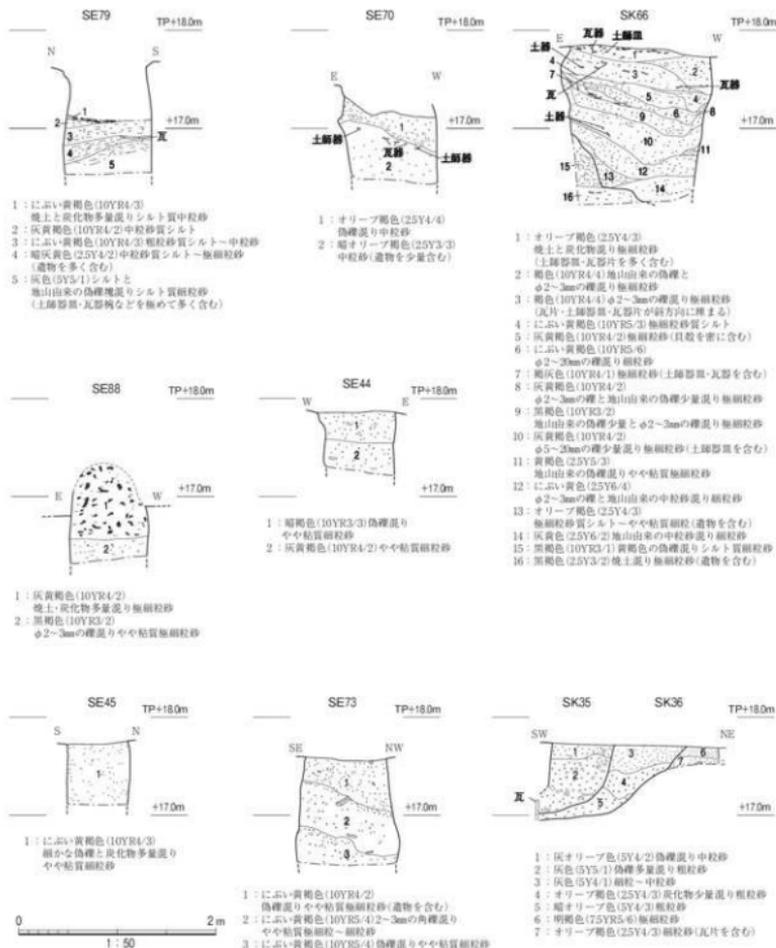


図8 中世遺構断面図(1)

上に立ち上げている。34は瓦器皿である。35～58は和泉型瓦器碗である。34～54は高台を有しているが、その多くは高台部分が退化している。これらの高台は少量の粘土紐を貼り付けたのみでほとんど機能していない。55～58は高台が退化して無くなっている。59は瓦器鉢である。60は瓦器片口鉢である。61は瓦質土器羽釜である。62は中国産青磁皿である。63～67は丸瓦である。66は玉縁に釘穴を施す。68～72は平瓦である。

SE70 南区の北中央で検出した直径0.9m、深さ0.9m以上の素掘りの井戸である。井戸側を検出で

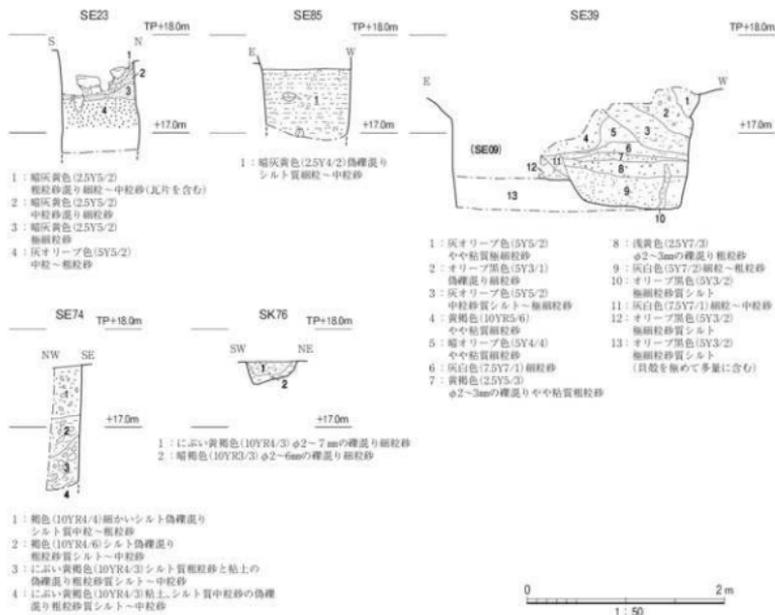


図9 中世遺構断面図(2)

きないので素掘りの井戸と判断したが、出土遺物に瓦質土器井戸側材を含んだ元々は井戸側を有していた可能性もある。遺物は土師器・須恵器・瓦器・国産陶器・中国産磁器・瓦・砥石が出土した(図13)。73~85は土師器皿である。86~88は和泉型瓦器碗である。88はの高台は少量の粘土紐を貼り付けたのみでほとんど機能していない。89は厚手の平瓦である。凹面に布目痕と模骨痕を残すことから古代のものであると考えられる。90は瓦質土器の井戸側材である。

SK66 南区の北中央やや西寄りで見出した直径1.4m、深さ1.6m以上の土壌である。土師器皿や瓦器碗などが完形のものを含めて多く出土した。埋土の下層には地山由来の礫層が混じる。埋土の上層から下層にかけて全体に遺物を含むため、この遺構は廃棄土壌ではないかと考えられる。遺物は土師器・須恵器・瓦器・国産陶器・中国産磁器・瓦が出土した(図13)。91~95は土師器皿である。96は瓦器皿である。97~101は和泉型瓦器碗である。102は瓦器鉢である。103は瓦器鍋である。104は瓦器三足羽釜である。105・106は中国産青磁碗である。107は丸瓦玉縁である。凸面に横方向の縄目を施す。

SE88 南区の北西で見出した直径0.7m、深さ2.5m以上の素掘りの井戸である。現代の擾乱によって大きく削られている。埋土は1層に焼土・炭化物が多く混じる。この遺構からは焼けた壁土が出土しているため、火災などによって生じた瓦礫を井戸に廃棄したのではないかと考えられる。遺物は土師器・須恵器・瓦器・国産陶器・中国産磁器・瓦・壁土が出土した(図14)。108・109は土師器皿である。

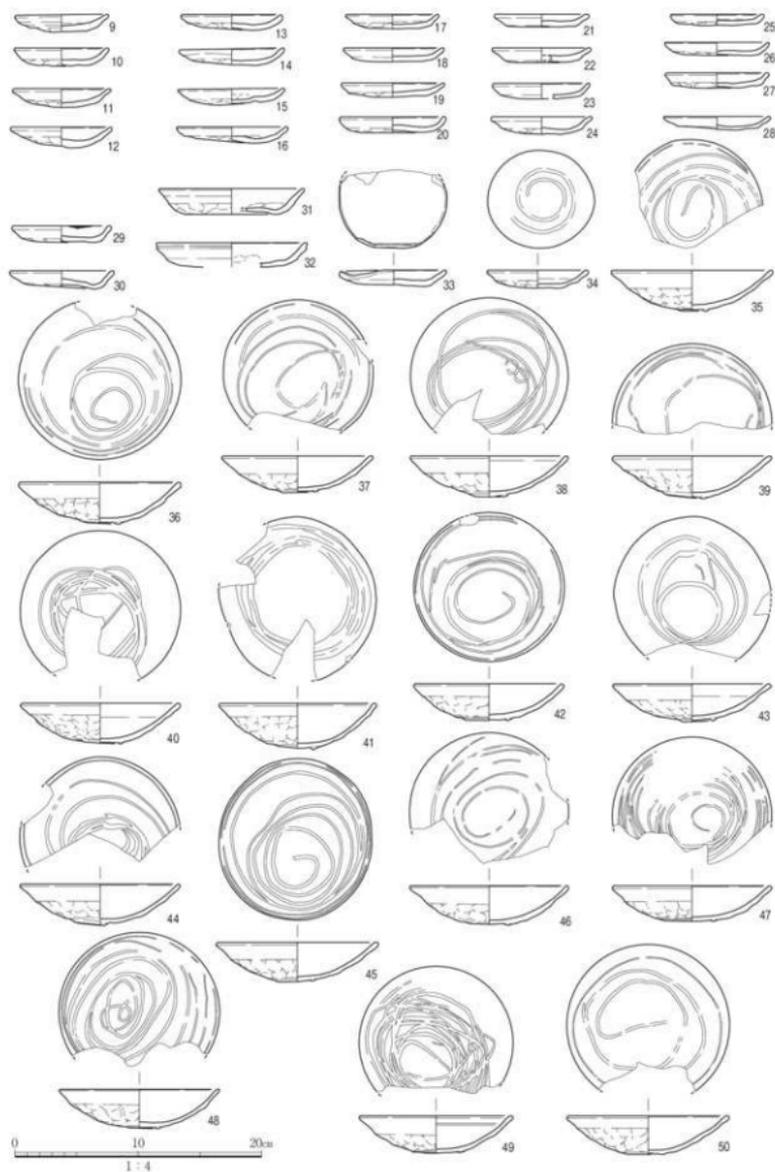


图10 中世の出土遺物実測図(1)  
SE79(9~50)

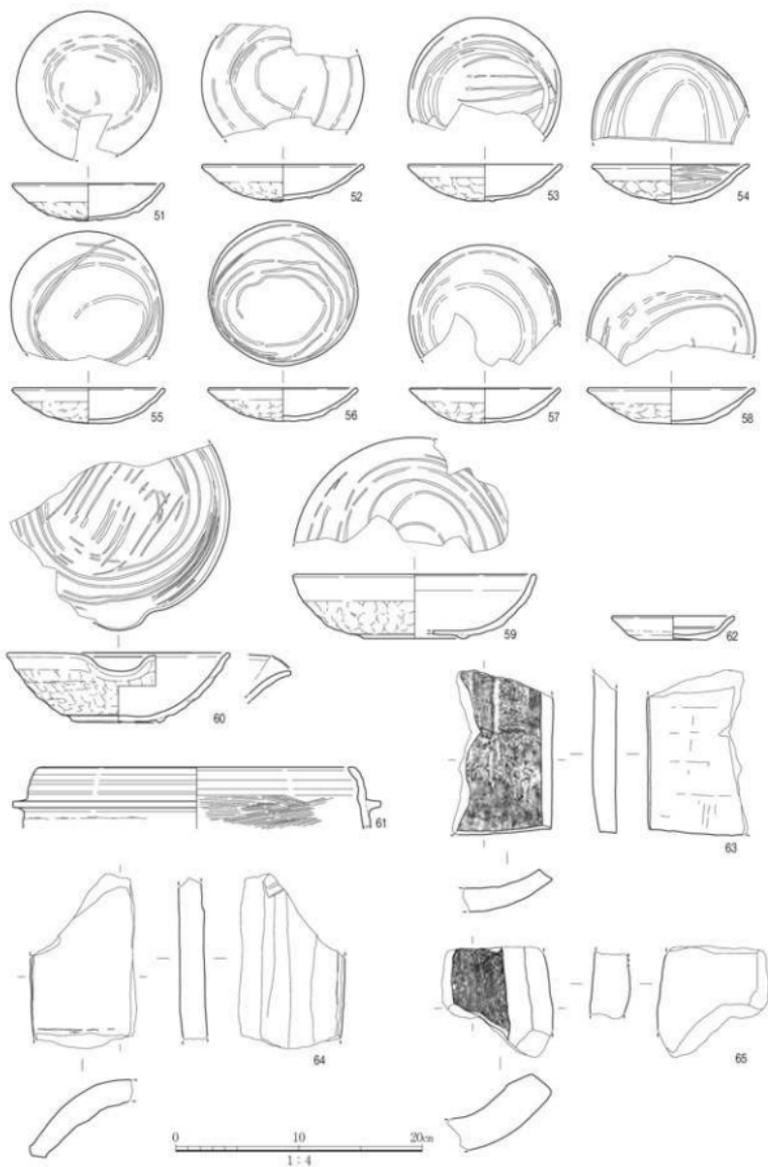


図11 中世の出土遺物実測図(2)  
SE 79(51~65)

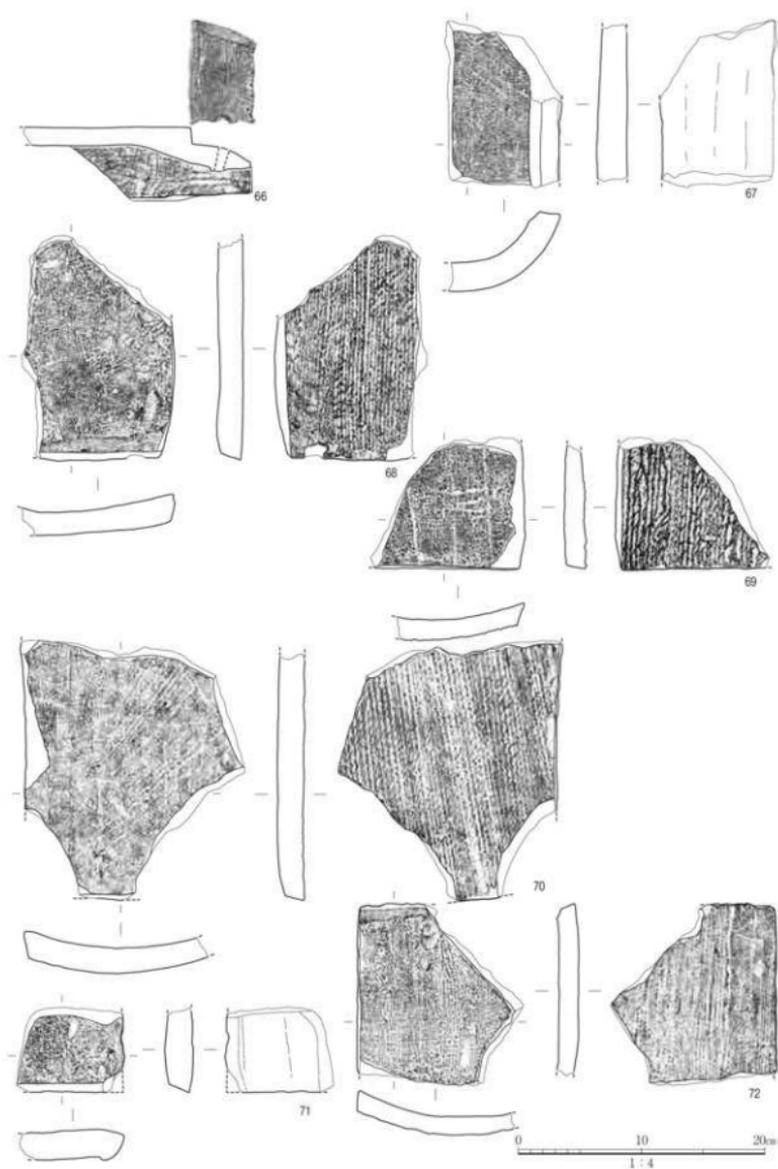


図12 中世の出土遺物実測図(3)  
SE79(66~72)

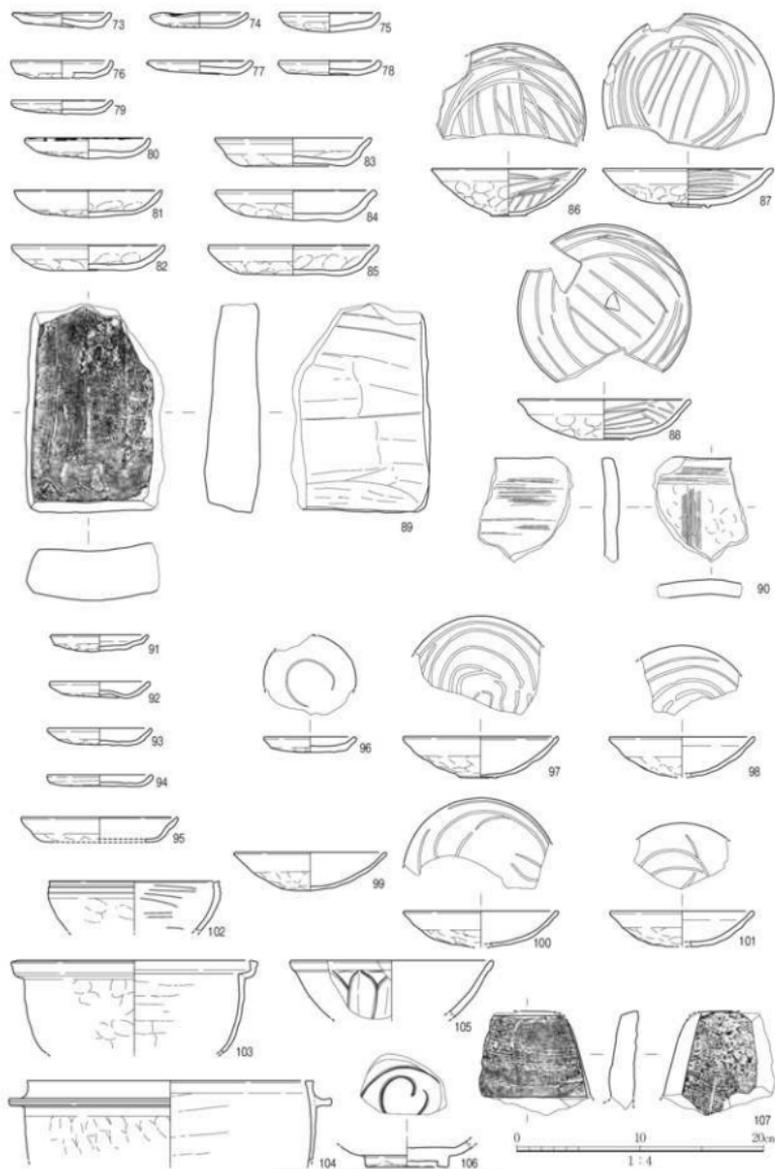


図13 中世の出土遺物実測図(4)  
 SE70(73-90). SK66(91-107)

口縁部付近には煤が付着する。110～113は和泉型瓦器甕である。110の高台は粘土紐を貼り付けたのみでほとんど機能していない。114は瓦器羽釜である。115は瓦質土器甕である。116・117は中国産青磁甕である。118・119は平瓦である。119は凸面全体に多量の離れ砂が残る。

SE44 南区の南西隅で検出した直径0.8m、深さ0.6m以上の素掘りの井戸である。遺物は土師器・須恵器・瓦器・瓦が出土した(図14)。120は土師器皿である。126は三巴文軒丸瓦である。

SE45 SE44の北に隣接する直径0.6m、深さ0.6m以上の素掘りの井戸である。埋土には偽礫、炭化物が多く混じる。遺物は土師器・須恵器・瓦器・国産陶器・瓦・壁土が出土した(図14)。127～129は土師器皿である。128は口縁部に煤が付着する。

SK75 南区の南東で検出した切合い関係にある遺構のうち最も古いものである。複数の遺構によって切られているため規模は不明である。遺物は土師器・須恵器・瓦器が出土した。

SK76 南区の南東で検出した長軸0.5m以上、深さ0.2m、平面形が楕円形の土壌である。遺物は土師器・瓦器・瓦が出土した。

SE74 南区の南東で検出した直径0.6m、深さ1.2m以上の素掘りの井戸である。北側をSE73によって切られている。埋土は1層・2層にシルト偽礫、3層・4層にシルト質中粒砂・粘土の偽礫が混じる。遺物は土師器・須恵器・瓦器・国産陶器・瓦が出土した。

#### c. 中世(15世紀)

SE86 南区の中央部の攪乱によって削られている深さ2.0m以上の素掘りの井戸である。遺物は土師器・須恵器・青磁・国産陶器・中国産磁器・瓦が出土した(図15)。132～134は土師器皿である。外面は口縁部近くまでユビオサエで仕上げ、口縁端部は軽く外反する。135は常滑焼の壺底部である。136は備前焼の播鉢である。

SE73 南区の南東で検出した直径0.8m、深さ1.1m以上の素掘りの井戸である。埋土は1層に遺物を含み、各層に偽礫が混じる。遺物は土師器・須恵器・瓦器・瓦・石製品が出土した(図15)。137は土師器皿である。138は瓦質土器の播鉢で、口縁部は緩やかな断面三角形を呈し、外面の稜は緩い。外面には粘土紐接合痕跡を残す。142は自然石の形を残して加工された黒色粘板岩製の大型硯と思われる。硯だとすれば陸に当たる部分が残存している。硯面は平面が方形で、縁を一段高く突帯状に仕上げている。143は八分割面の石臼である。本遺構は15世紀代の遺構群の中では最も新しい。

SK35 北区の中央で検出した長軸1.1m以上、短軸0.5m、深さ1.7mの平面形が不整形な土壌である。東側を現代攪乱や隣接する遺構によって切られている。断面を観察すると下部が遺構検出位置より南側に大きく入り込んでおり、壁面が崩落したことにより埋土が入り込んだ可能性が考えられる。埋土には2層に遺物を含み、各層に偽礫が混じる。遺物は国産陶器・瓦が出土した(図15)。139は備前焼の播鉢である。口縁部断面形は三角形に近く、15世紀代でも古相を呈する。この遺構から出土する遺物は後述するSE39の遺物より古相を呈しているが、遺構の切合いで見るとSK35が新しいので混入遺物であると考えられる。

SK36 SK35の北側に隣接する長軸0.9m、短軸0.5m、深さ1.8mの平面形が楕円形の土壌である。南側を隣接する現代攪乱や遺構によって切られている。埋土は3層に遺物を少量含み、4層に炭化物

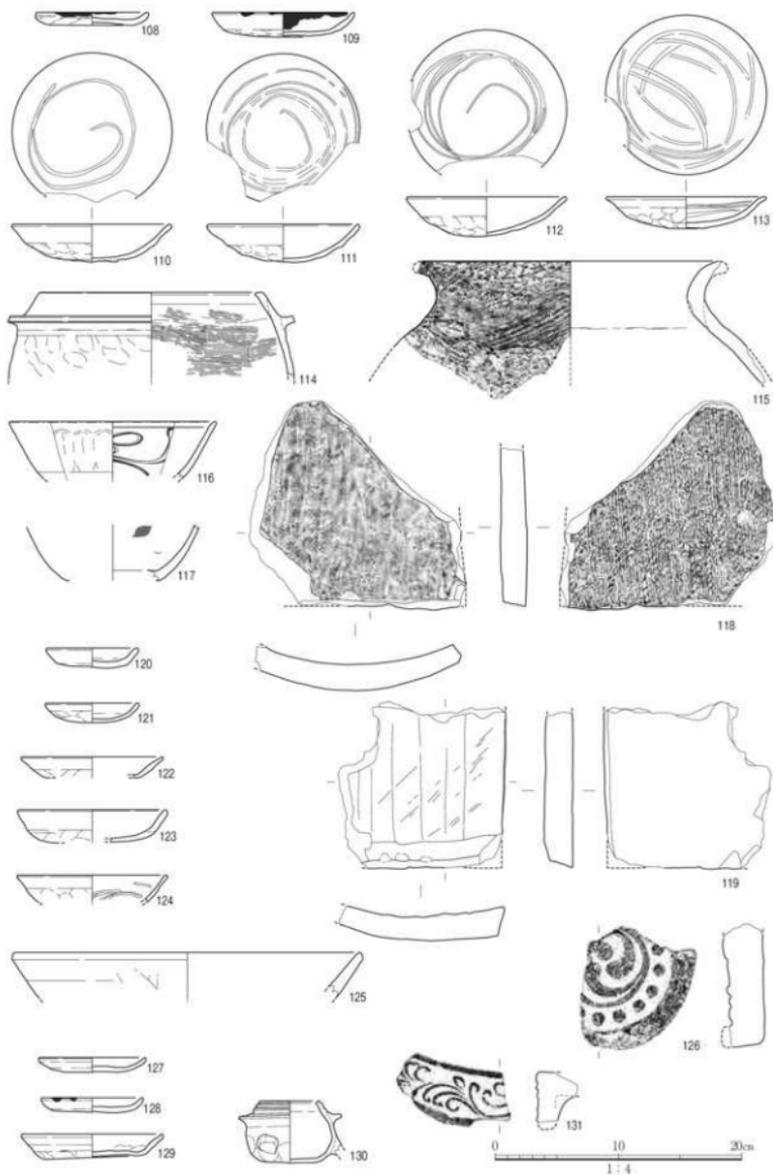


图4 中世の出土遺物実測図(5)

SE88(108~119)、SE44(120・126)、SE09(121~125・131)、SE45(127~129)、SE42(130)

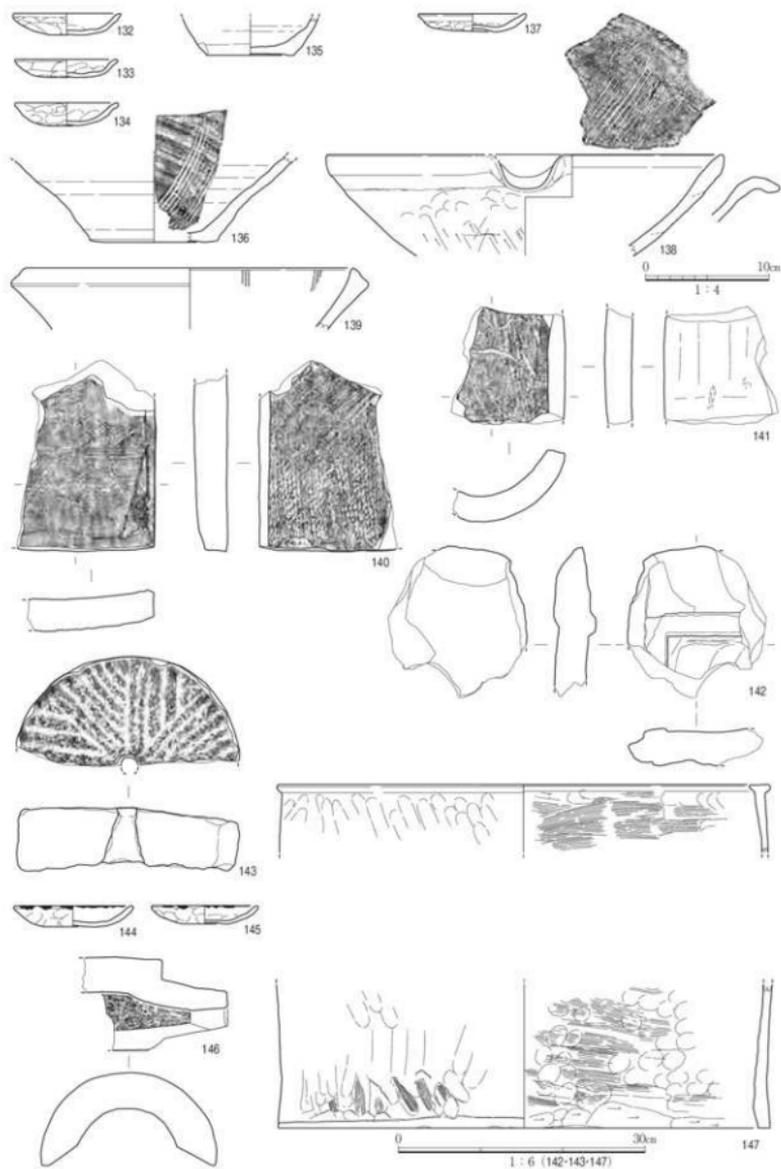


図15 中世の出土遺物実測図(6)

SE86(132~136), SE73(137・138・142・143), SK35(139・140), SK36(141), SE23(144~146), SE49(147)

が少量混じる。遺物は土師器・須恵器・瓦器・瓦が出土した(図15)。140は平瓦である。凸面の縄叩き痕をヘラケズリによって部分的に消している。141は丸瓦である。

SE23 北区の南西で検出した直径0.7m、深さ1.0m以上の素掘りの井戸である。埋土は1層に遺物を含む。遺物は土師器・瓦が出土した(図15)。144・145は土師器皿である。外面をユビオサエしており、凹凸が著しい。口縁部は内湾ぎみに仕上げる。146は丸瓦である。玉縁付近が残存する。

SE49 南区の南東隅で検出した井戸である。掘形は長軸2.0m以上、深さ1.2m以上の楕円形で、東寄りに直径0.6mの瓦質土器の井戸側を3段分確認した。井戸側の埋土には偽礫が多く混じる。遺物は井戸の掘形から土師器・須恵器・瓦器・中国産磁器・瓦が出土した(図15)。147は瓦質土器の井戸側材である。直径は約60cmで、口縁部はT字状を呈する。外面は縦方向の板ナデとハケ調整、内面は横方向のハケ調整を施す。

SE85 南区の北東隅で検出した直径0.8m、深さ0.7m以上の素掘り井戸である。調査区北端の現代攪乱によって大きく削られている。遺物は土師器・須恵器・瓦器・国産陶器・中国産磁器・瓦が出土した(図16)。148は土師器皿である。口縁部は屈曲して直線的に開く。底部には粘土の接合痕跡が残る。149は中国産白磁の皿底部である。内面には目跡を有する。高台内には墨書で記号を施す。150は中国産青磁の碗、151は同皿である。152は備前焼の大甕である。口縁部は直立し、玉縁状を呈する。

SK59 SE49の西に隣接して検出した長軸1.6m、深さ1.3m以上の土壌である。埋土は1層に礫と偽礫・焼土・炭化物、2層・3層に地山由来の偽礫が混じる。切合い関係にあるSE49との前後関係は、南区の南壁断面を見ると、SE49を切り込んでいることからこの遺構が新しい。遺物は土師器・須恵器・瓦器・国産陶器・中国産磁器・瓦・ミニチュア土製品・炭が出土した(図16)。153は土師器皿である。口縁部は内湾気味で、端部を軽くつまんでいる、154は瓦質土器の播鉢である。口縁部の断面形は三角形で、外面の稜は鋭く、下方に突出する。155は備前焼の大甕で、口縁部は直立する。

SK22 北区の南西隅で検出した土壌である。近代攪乱であるSK01により削られている。埋土には焼土・大型の偽礫が混じる。遺物は土師器・須恵器・瓦器・国産陶器・中国産磁器が出土した(図16)。156・157は土師器皿である。156は底部中央が膨らみ、口縁部は屈曲して端部を厚く仕上げる。157は底部と口縁との境が明瞭で、口縁端部内面が弱く窪む。158～160は瓦質土器である。158は羽釜である。159は奈良火鉢で、外面には花文様の刻印を有する。160は播鉢である。161は備前焼の播鉢である。

SK33 北区の中央南端に位置するSK21の底面で検出した直径1.3m、深さ1.1m以上の土壌である。土師器・瓦器・瓦質土器・中国産磁器・国産陶器・瓦が出土した(図16)。162～166は土師器皿である。162はいわゆるへそ皿で、底部中央に焼成後の穿孔がある。163・164は外面に二段のユビオサエを施し、体部と口縁部の境は緩やかに屈曲する。165・166は口縁部が緩やかに外反し、端部をわずかにつまんでいる。166の底部は黒変している。167～169は瓦質土器である。167は羽釜である。168は播鉢である。169は大型の奈良火鉢で、口縁部外面には刻印帯を有する。170～172は中国産青磁である。170・171は口縁端部が外反する碗と鉢である。172は鉢または皿底部で、底部内面中央を釉剥ぎする、173は古瀬戸の天目碗である。口縁部は短く直立し、体部は直線的である。174は古瀬戸の香炉である。

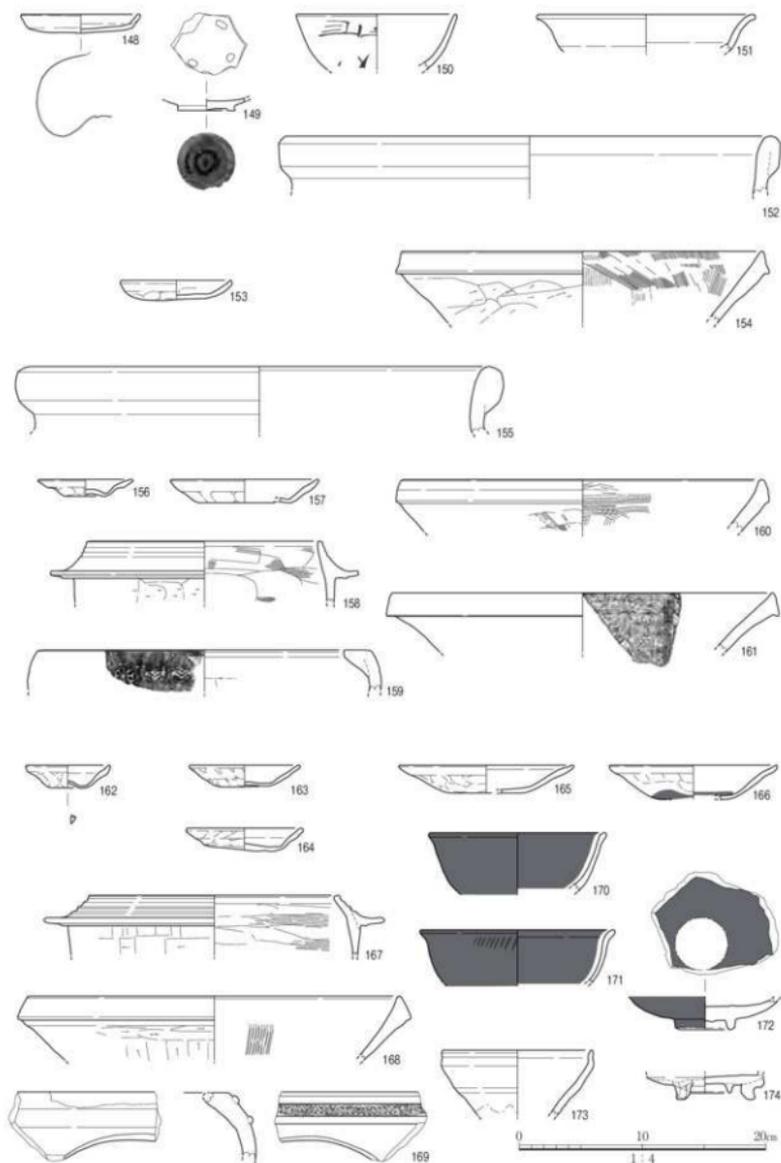


图16 中世の出土遺物実測図(7)

SE85(148~152)、SK59(153~155)、SK22(156~161)、SK33(162~174)

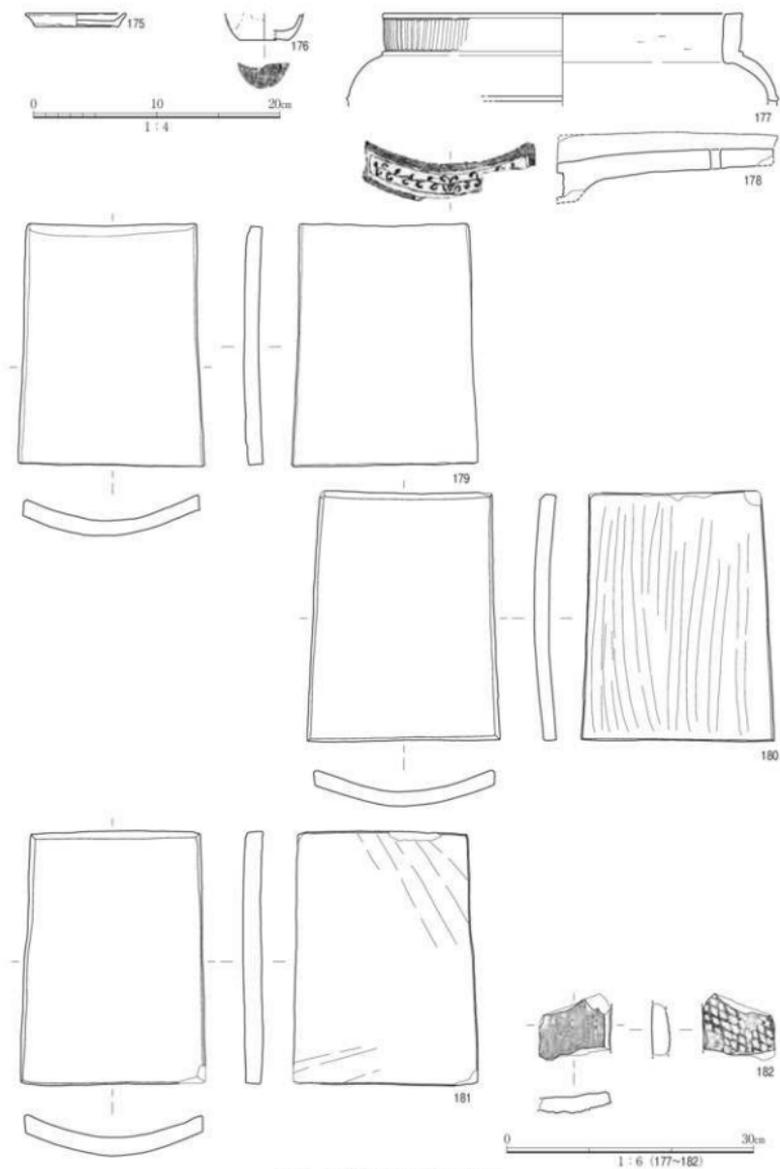


図17 中世の出土物実測図(8)  
SE39(175~181)、SK47(182)

SE39 北区の中央で検出した長軸3.4m、短軸2.8m、深さ1.3mの井戸である。多数切り合う遺構や攪乱の下層より検出した。水溜としてTP.+16.4mで検出された上町層中の自然堆積物と考えられる貝殻層を掘り込んでいる。遺物は土師器・瓦器・国産陶器・瓦が出土した(図17)。175は土師器皿である。底部は平底で、口縁部が強く屈曲し、短く開く。176は古瀬戸の壺底部で、外面を糸切りしている。177は瓦質土器の風炉で、奈良火鉢である。178は軒平瓦である。179~181は平瓦である。180は凹面にうっすらと布目が残り、181は凹面に離れ砂が残る。

SK47 南区の南東隅で検出した長軸0.5m、深さ0.6m、平面形が楕円の土壇である。隣接するSE49を切り込んでいる。遺物は土師器・瓦器・国産陶器・瓦が出土した(図17)。182は平瓦である。凸面には格子叩きを施す。他の遺物に比べ時期が古く、混入遺物ではないかと考えられる。

その他本来の遺構に伴う遺物ではないが、特徴的である遺物について以下で報告する。北区の中央で検出したSE09からは18世紀前葉の陶磁器細片に混じって14世紀の遺物が主に出土した(図14)。121~123は土師器皿である。124は和泉型瓦器椀である。125は常滑焼の鉢である。131は唐草文軒平瓦である。

南区の中央部南で検出した明治時代の遺構であるSE42からは近代の遺物に混じってミニチュアの瓦質土器三足釜が出土した(図14)。130はミニチュアの瓦質土器三足釜であり、14世紀の特徴を残している。この時代に作られたものが混入したものと考えられる。

#### d. 近世(17世紀~19世紀)

SK19 北区の中央で検出された長軸3.9m~2.6m、深さ0.7mの平面形が不整形の土壇である。南

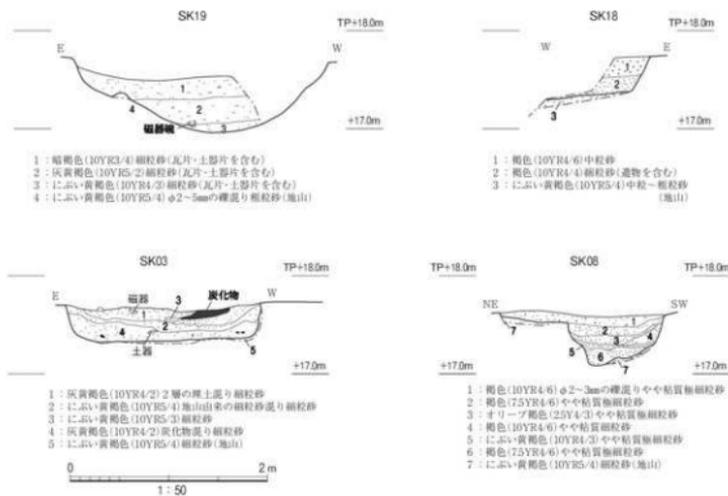


図18 近世遺構断面図

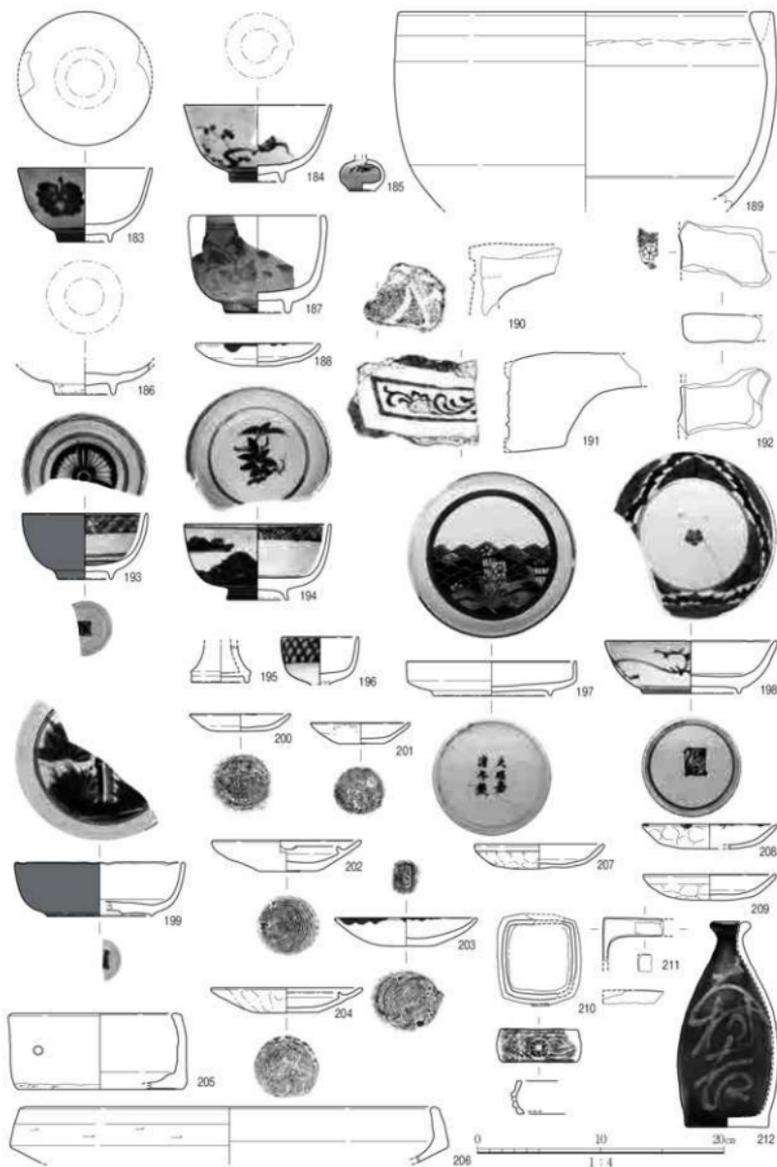


図19 近世の出土遺物実測図

SK19(183-191), SK18(192), SK03(193-211), SK40(212)

西部を現代の攪乱によって切られている。埋土は1層～3層に遺物を含む。遺物は土師器・須恵器・瓦器・国産陶器・肥前磁器・陶磁器・瓦が出土した(図19)。183～186は肥前磁器である。183・184は染付碗である。185は染付の小壺である。186は青磁の皿である。187は肥前陶胎染付の碗である。188は土師器皿である。口縁部には煤が付着し、灯火具として使用している。底部内面には圏線状のナデを施す。189は同混炉である。以上は18世紀前半に属する。190は単弁蓮華文軒丸瓦である。間弁部分が残存する。191は唐草文軒平瓦である。

SK18 北区の中央北端で検出された土壌である。遺構の大部分を近現代の攪乱とSK19によって切られている。埋土は2層に遺物を含む。遺物は土師器・中国産青磁・中国産白磁・肥前磁器・瓦が出土した(図19)。192は平瓦で、端面に六弁花状の刻印を有する。

SK03 北区の北東隅で検出した長辺2.0m、短辺0.8m、深さ0.4mの炭化物を多く含む地層が互層状に重なった平面形が長方形の土壌である。埋土は1層にブロック状の偽礫・炭化物、3層に炭化物が混じる。遺物は土師器・国産陶器・肥前磁器・軟質施軸陶器・瓦・小型土製品・鉄製品・石製品が出土した(図19)。193～199は肥前磁器である。193は青磁染付の碗である。194は染付の碗である。195は瑠璃釉の御神酒德利、196は染付の仏飯具である。197～199は皿である。197は色絵染付の皿である。198は染付の皿で、口縁部は輪花となる。199も口縁部が輪花となる青磁染付である。200～204は軟質施軸陶器の灯明皿・受皿である。このうち203の底部内面には「□山」の刻印を有する。205は備前焼の鉢で、外面に「○」の窯印を施す。206は土師器の焙烙である。207～209は土師器皿である。210は軟質施軸陶器の飯事道具である。211は石製硯である。以上は18世紀後半に属する。

SK40 南区の北西隅で検出した直径0.7m、深さ0.6mの土壌である。遺物は丹波焼が出土した。212は丹波焼の三合德利である。外面にはイッチンで「大村吉」「西官カ」と記す。19世紀前半であろう。

SK08 北区の北西で検出した長軸3.0m、短軸1.7m深さ0.5mの平面形が不整形な土壌である。遺物は瓦裂井戸側が出土した。

SK21 北区の中央南端で検出した長軸4.5m、深さ0.4mの不整形な土壌である。遺物は土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・国産陶器・中国産磁器・肥前磁器・銅銭が出土した。出土遺物から時期は17世紀である。

SK13 北区の南東隅で検出した長辺2.0m以上、短辺1.1m以上、深さ0.9m以上の平面形が長方形の土壌である。遺物は土師器・瓦器・国産陶器・中国産磁器・肥前磁器・ミニチュア土器・瓦が出土した。出土遺物から以降の時期は18世紀である。

SX95 南区の北東で検出したSK48、SK52～58、SK61～65、SK68・69、SK92～94の18基からなる土壌群である。埋裏遺構と考えられ、それぞれの土壌が6基ずつ3列に並ぶ。調査区外となっているため調査していないが、土壌群はまだ東側に延びているのではないかと考えられる。北側の6基と南側の12基の間には40cm程度の幅が空いていることから、6基以上2列が1つの単位であり、北側は現代攪乱により削られているがもう1列存在したのではないかと考えられる。これらの土壌からは土師器・陶磁器など18世紀～19世紀前半の遺物が出土した。

### 3) まとめ

今回の調査ではおもに13～16世紀代の遺構群を検出した。特筆すべき遺構としては19基検出された井戸である。周辺の既往の調査と同様に今回の調査でも古代から近世にかけての井戸を多数検出した。これらのうち井戸側を有するものは瓦製の井戸側を持つ2基のみであり、ほとんどは素掘りの井戸である。しかし、瓦質土器の井戸側材が出土している井戸もあることから他の井戸も本来は井戸側を有していた可能性がある。今回検出した井戸の中でも、SE79からは遺物コンテナ4箱分の瓦器椀・土師器皿などが出土している。出土層位は下層の5層にまとまっていることから13世紀後半～14世紀前半にまとめて投棄されたものと考えられる。

今回の調査で検出した遺構について時期ごとにまとめる。古代の遺構は北区のSE20とSB91のみであり、南区は空地であったと考えられる。中世前半の13世紀から14世紀は南区に遺構が集中する。南区の西側に井戸や廃棄土壌が集中することからこの近辺において屋敷地などの土地利用があったのではないかと考えられる。この時期に掘られた井戸はおおよそ5m四方の中に納まっている。これらの井戸は上町台地の砂層を掘り込んだ素掘りの井戸だったことから、短期間で壁面の崩落等により使用できなくなったため、繰り返し近くで井戸が掘られたのではないかと考えられる。中世後半の15世紀は北区中央より南側にかけて広く遺構が分布している。これらの遺構のうち、この時期に切合い関係にある遺構があることから、調査地周辺において土地利用が進んだ結果短期間のうちに遺構がある場所に別の遺構が構築されたのではないかと考えられる。近世前半は遺物の細片を含めてもほとんど遺物が出土しなかった。このことからこの時期には調査地は空地になっていたと考えられる。近世後半には南区の中央より北側にかけて広く遺構が分布する。北区には廃棄土壌が集中し、南区にはSX95の埋塞遺構がある。このことからこの時期には空地であった調査地周辺が市街化によって土地利用がなされるようになったと考えられる。

このように中世には西方信仰の修行地である日想観の修行地として栄えた四天王寺西門周辺の影響を受けて調査地周辺も栄えていたが、近世前半には空地となっていたようである。しかし、近世後半に四天王寺周辺の市街地が広がると再び土地利用がなされるようになったと考えられる。今後の調査事例の増加により四天王寺周辺における土地利用について詳細が解明されることが期待される。

### 参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1993、「児島正男氏による建設工事に伴う四天王寺旧境内遺跡発掘調査(ST92-10)略報」：「平成4年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.91-100
- 大阪文化財研究所2015a、「ST90-2次調査」：「大阪市北部遺跡群発掘調査報告書」、pp.120-129
- 2015b、「ST92-7次調査」：「大阪市北部遺跡群発掘調査報告書」、pp.116-120
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015、「四天王寺旧境内遺跡発掘調査(ST12-5)報告書」：「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2013)」、pp.467-478



北区地層断面  
(北東から)



南区地層断面  
(北東から)



北区遺構完掘状況  
(南から)





南区遺構完掘状況  
(西から)



南区埋戻遺構  
SX95検出状況  
(東から)



南区土壌  
SK66断面  
(北から)





天王寺区生玉前町305-12・13における建設工事に伴う  
上本町遺跡発掘調査(UH20-1)報告書

調査個所 大阪市天王寺区生玉前町305-12・13  
調査面積 60㎡  
調査期間 令和2年6月1日～6月9日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋工、浅田洋輔

## 1) 調査に至る経緯と経過

上本町遺跡は、市内を南北に延びる上町台地に位置する弥生時代から近世にかけての集落遺跡である。周辺は北に難波宮跡、東に難波京朱雀大路跡や堂ヶ芝廃寺、南に四天王寺旧境内遺跡や摂津国分寺跡、西に俗人町遺跡など弥生時代から近世にかけての遺跡が密集している地域である。

調査地周辺の調査(図1)では、古代については南西に約80mのUH13-13次調査では東西方向の溝と並行する柱穴を検出し、7世紀後葉以降の難波京の条坊に則した地割と遺構を検出している[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015]。北東に約60mのUS06-1次調査では奈良時代に井戸を備える大型の柱穴を持つ建物群が継続して存在し、長岡京へ遷都した後も平安時代初頭まで建物群の一部が継続していることがわかった[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008]。東に約100mのUH10-5次調査では難波京東西路に並行する区画内の溝とともに溝にかかる橋の橋脚や橋台の可能性のある柱穴などを検出した。遺物は奈良時代の難波市に関連すると考えられる製塩土器が出土している[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012]。中世については西に約30mのUH09-3次調査で奈良時代の井戸のほか中世後期の東西方向の溝状遺構などを検出した[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011]。近世についてはUH17-7次調査で中世の柱穴のほか、徳川期の高野街道に面した町屋を想定できる溝や柱穴、土壌などを検出した[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2019]ほか、南西に約20mのUH12-18次調査で近世の溝を検出している[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014]。このように調査地周辺では古代から近世にかけて遺構が多く残されている。

当地における建設工事に先立ち大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、地表下約1.4mにおいて土師器片を含む遺物包含層を確認できたため、本調査を行うこととなった。



図1 調査地位置図

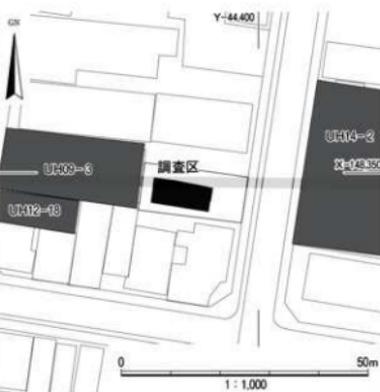


図2 調査区配置図

調査区は調査対象地が狭く十分な掘削土置き場を確保できなかったため、東西12m、南北5mの調査区を西側半分の1区、東側北半の2区、東側南半の3区に分けて調査を実施した(図2・6)。重機による掘削は現代の攪乱である第1層まで行い、それ以下は人力により掘り下げ、各層の上面における遺構の確認と整地層内に含まれる遺物の採集を行った後、地山である第5層において遺構の確認作業を行った。調査は1区・2区・3区の順に行い、適宜遺構の写真撮影と実測図による記録保存に努めた後、埋戻しを行い、次の地区の調査を行った。

本報告で使用する標高はT.P.値(東京湾平均海面値)であり、本文・挿図中では「TP+〇m」と示す。また、本報告書で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3～5)

調査地の現況地形はほぼ平坦で、TP+20.8m前後の高さであった。調査区南壁の地層断面に基づいて層序を述べる。

第1層：コンクリート片などを含む現代建物解体工事による攪乱に伴う地層である。層厚は60～250cmである。

第2層：にぶい黄褐色細粒砂からなる近世から明治時代の遺物を含む客土層である。層厚は10～30cmである。

第3層：灰黄褐色シルト質細粒砂からなる古代から近世の遺物を含む客土層である。層厚は20cmである。

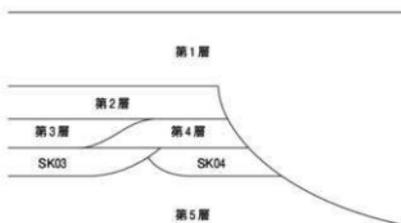


図3 地層と遺構の関係

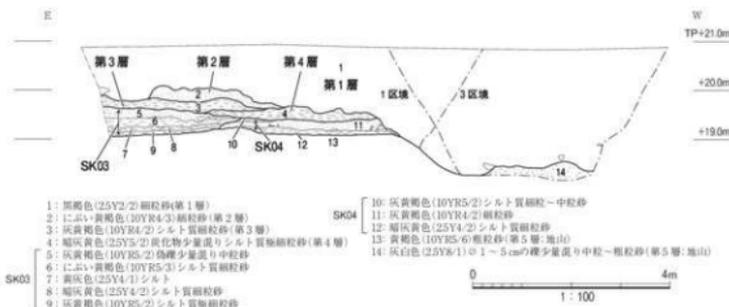


図4 1・3区南壁断面図

第4層：暗灰黄色シルト質極細粒砂からなり、炭化物を少量含む。古代から近世の遺物を含む客土層である。層厚は10～30cmである。

第5層：黄褐色粗粒砂からなる上町台地の地山層である。本層上面において遺構を検出した。

## ii) 遺構と遺物(図6～8)

当地西側のUH09-3次調査において現地表より0.5m下の第2層上面で近世の廃棄土壌などを検出しているため、この層準に対応する可能性がある第2層上面において遺構の有無を確認

した。第2層上面においては遺構が確認されなかったため順次掘り下げを行ったが、第3層・第4層上面においても遺構は確認されなかった。第4層の掘り下げを行った後、第5層上面において調査を行った。

調査地西側の1区は現代の攪乱により遺構面がほとんど残されていないが、東側の2・3区は遺構面の残存状況が比較的良好であった。以下、第5層上面で検出した遺構について報告する。

**SK01** 調査区中央付近で検出した長軸1.80m、短軸0.60m、深さ0.04mの不整形の土壌である。埋土にはふい黄褐色細粒砂である。遺構の南側は上から攪乱埋土が検出面にまで及んでおり、遺構の平面形も南側ははっきりととらえられず遺構の深さも極度に浅い為、攪乱により削平を受けているものと考えられる。遺物は出土しなかった。

**SK02** 調査区中央付近で検出した一辺1.40m以上、深さ0.10mの平面形が隅丸方形の土壌である。南側をSK01と現代攪乱に切られている。底面は西に向かって0.1m程低くなっている。埋土は上部が褐色炭化物が少量混る細粒～中粒砂、下部が暗灰黄色中粒砂である。遺構の南側は攪乱が第5層にまで及び、南東部をSK01によって切られていて遺存しない。遺物は土師器と軟質施釉陶器が出土した。3は軟質施釉陶器碗である。時期は豊臣期であると考えられる。

**SK03** 調査区南東隅で検出した深さ0.60mの平面形が楕円形を呈する土壌である。遺構の大部分が調査区外であるので正確な規模は不明である。埋土は最上部に偽礫が少量混り、以下の層はシルト質の埋土となっている。下部にシルト質の埋土が堆積していることから、遺構が掘削された後、水が溜まるような環境にあり、シルトが堆積した後埋め戻されたと考えられる。遺物は埴輪・須恵器・瓦・土管が出土した。1は横断面に曲線が見られないことから形象埴輪であると考えられる。2は須恵器大甕である。4は中世の平瓦である。両面に離れ砂が残る。5は近世の丸瓦である。出土遺物の中に明治時代の土管が含まれていることから遺構の時期は明治時代であると考えられる。

**SK04** 調査区南壁際で検出した土壌である。SK03と現代の攪乱により切られ、南側は調査区外のため土壌の規模は不明である。検出した部分の深さは0.30mであった。埋土は下から暗灰黄色シルト質粗粒砂(図4の12)、灰黄褐色細粒砂(同11)、灰黄褐色シルト質細粒～中粒砂(同10)の順に堆積していた。11層には東側を中心に少量の偽礫を含み人為的な堆積であることから、遺構が掘削された後、

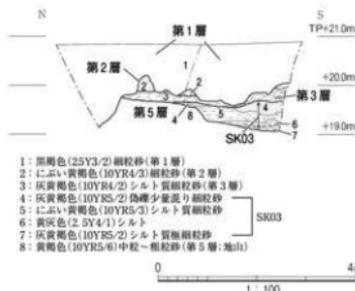


図5 2・3区東壁断面図

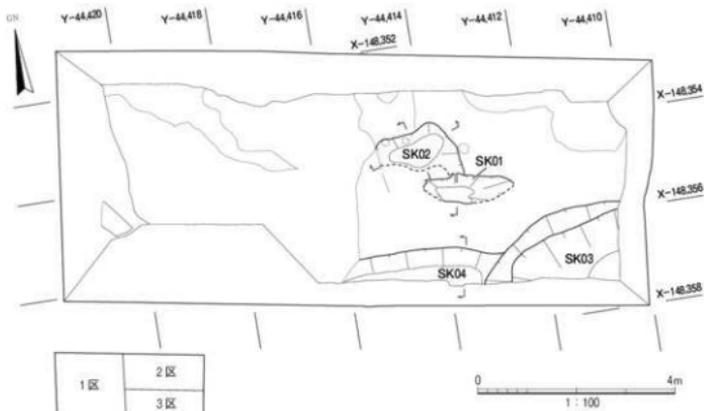


図6 第5層上面平面図

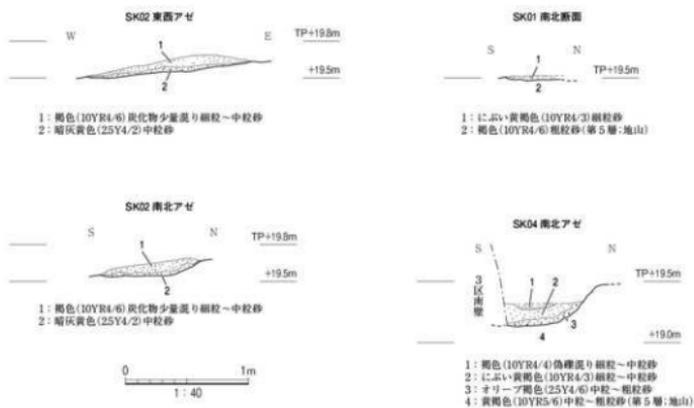


図7 遺構断面図

水が溜まるような環境にあり、シルトが堆積した後、埋戻しが行われ、窪んでいた場所に雨水などが溜まって最上層の埋土となったと考えられる。遺物は出土しなかった。

**各層出土遺物** 客土である第3層～第5層からは古代から近代にかけて多種多様な遺物が出土した。6は土師器皿である。7は黒色土器碗A類である。8は灰白色を呈する土師器碗である。9は中国産青磁碗である。10は中国産白磁小碗である。11は中国産白磁皿である。12は備前焼壺である。13は平瓦である。縦方向の縄叩きを施した後に端部付近に斜め方向の縄叩きを施す。これらの遺物の時期は6～8が9世紀、9が14世紀、10が15世紀、11・12が豊臣期、13が古代である。

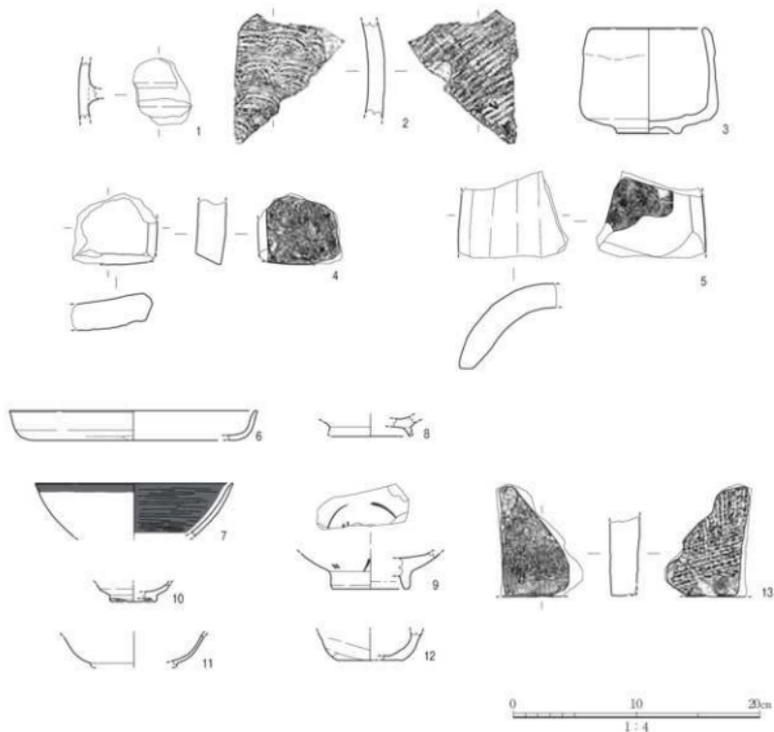


図8 出土遺物実測図

SK02(3)、SK03(1・2・4・5)、第4層(8~11・13)、第3層(6・7・12)

### 3) まとめ

今回の調査地はUH09-3次調査において検出された東西方向の溝状遺構SD301の延長線上にあたるが、隣接する調査地西側半分は現代攪乱により該当する層率がほぼ無くなっていたため続きは検出されず、その他の遺構も検出できなかった。それに対し、東側半分は複数の攪乱を受けているが、西側に比べ客土層以下の残存状況が良好であり、第5層上面において4基の遺構を確認した。そのうちSK01・02は大きく削平を受けており、遺構の残存状況は良好ではなかった。北側の2基に比べ、南側で検出したSK03・04は残存状況が良好であった。どちらの遺構も底部付近にシルトやシルト質細粒砂が堆積していることからこれらの遺構は掘削後、雨水などが溜まって底部付近にシルトが堆積した後に埋められたと考えられる。

今回出土した遺物から遺構の年代を検討すると、SK02からは豊臣期の軟質施軸陶器が出土している。一方、SK03は古墳時代から中世にかけての遺物に混じて明治時代の土管の破片が含まれていることから、検出された遺構は近代の遺構である。以上のことから今回検出した遺構は近世から近代

にかけてのものである。

第3層から第5層にかけての客土層が盛られた時代は、近世から明治時代の遺物に混じって多くの古代から中世の遺物を含んでいることから、明治時代以降に周辺の古代から中世の遺構がある土地を削ってその土で盛土をしたのではないかと考えられる。

今回の調査では具体的な土地利用がわかる遺構を検出できなかったが、周辺の調査では上町台地上での生活の様相がわかる遺構が検出される事例が多くなってきている。今後の発掘調査の成果により、上町台地上での具体的な土地利用について判明していくことが期待される。

#### 参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「上本町南遺跡発掘調査(US06-1)報告書」：『大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2006)』、pp.251-259
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011、「上本町遺跡発掘調査(UH09-3)報告書」：『平成21年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2009)』、pp.191-199
- 2012、「天王寺区上汐四丁目における建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査(UH10-5)報告書」：『平成22年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』pp.29-39
- 2014、「上本町遺跡発掘調査(UH12-18)報告書」：『平成24年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』pp.71-78
- 2015、「上本町遺跡発掘調査(UH13-13)報告書」：『大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2013)』、pp.521-530
- 2016、「上本町遺跡発掘調査(UH14-2)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2014)』、pp.305-316
- 2019、「上本町遺跡発掘調査(UH17-7)報告書」：『大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2017)第2分冊』、pp.99-106

3区南壁地層断面  
(北から)



3区東壁地層断面  
(西から)



1区完掘状況  
(東から)





2区遺構完掘状況  
(東から)



2区SK01・02  
検出状況  
(北から)



3区遺構完掘状況  
(東から)





天王寺区東高津町12-7 他における建設工事に伴う  
上本町遺跡発掘調査(UH20-2)報告書

調査個所 大阪市天王寺区東高津町12-7 他  
調査面積 約32㎡  
調査期間 令和2年8月24日～8月26日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋 工

## 1) 調査に至る経緯と経過

上本町遺跡は難波宮の南、上町台地の脊梁部に位置し、南北2.3km、東西0.8kmの範囲に広がる弥生時代から近世にかけての集落跡である(図1)。北は大坂城跡、南は四天王寺旧境内遺跡に接し、東は難波京朱雀大路跡に画されている。同大路跡の東には細工谷遺跡・摂津国分寺跡などが展開し、古代史上において重要な地域といえよう。近年においては、特に難波京に関する発見が相次いでおり、京の開発時期とその範囲、条坊の構造などについて関心が高まってきている。

今回の調査地は近鉄大阪上本町駅の北約150mに位置し、難波京朱雀大路跡の西約100mの地点にある。難波京の中心大路(いわゆる朱雀大路)については、前期難波宮の段階で京内を南北に全通していたとする意見があり、これに対して、起伏の大きい地形からの制約で、古代には全通していなかったとする考えがある。前者の立場をとるのであれば、調査地はメインストリートに面した街区である「坊城の地」に当たり、有力な貴族層の邸宅が構えられるような土地であったと考えられる。また、後者の考え方に立てば、調査地周辺は埋没谷である「味原谷」の中に当たり(図3)、京内にあっても開発が進まなかった土地とみられる(図2)。当地域の調査はこうした問題の手がかりをもつという意味で重要性を帯びるのである。目下、調査地周辺における既往の発掘調査は多くはない(図1)。東に80mのUH18-4次調査では「味原谷」を捉え、谷底の自然堆積層から7~8世紀前半の遺物が出土した[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2020]。南東のNS04-1・2次調査地は谷から外れるため地山層が高く検出され、近世の土採り穴が発見されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005a・b]。北西に250mのUH08-8次調査では、想定中心大路から約260mの位置で南北方向の溝が発見され[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]、大路から西へ一本目の坊路側溝と評価されている。



図1 調査地位置図



図2 調査区位置図



図3 埋没谷と調査地

記録作業を行った。

以下の本文等に示す標高はTP値(東京湾平均海面値)で、TP+〇mと記した。また本報告で用いた方位は、現場で作成した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより世界測地系座標に乗せたものであり、座標北を基準とした。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図4・5、図版上)

調査地の現況地形は平坦で、地表面の標高はTP+13.9m前後であった。調査地の地層は、旧建物の解体工事によって攪乱されており、これに伴う砕石層が0.5mの厚さで堆積していた。砕石層の下に以下の3層をみとめた。

第1層：灰オリブ色砂質シルトからなる整地層で炭・焼土を含み、層厚は15~20cmであった。第二次世界大戦時の空襲による焼跡を片付けた際の整地層である。

第2層：オリブ褐色細粒~粗粒砂からなり、層厚は7~25cmであった。上面でレンガ積の建物基礎や便所窠が検出され、遺構には焼土が充満していたことから、上記空襲によって罹災した建物を建築した際の整地層とみられた。

第3層：明黄褐色シルト質中粒~粗粒砂からなる地山層で、層厚は90cm以上であった。上方に細粒化していた。上面ではSX1~4、SK5が検出された。

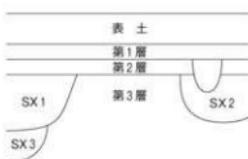


図4 地層と遺構の関係図

### ii) 遺構と遺物(図6~8、図版中・下)

SX1 調査区南西で検出された。東西5.80m以上、南北1.15m以上、深さ0.68mで、東部を大きく破壊されていた。埋土は大きく上層・下層に分かれ、上層は黄褐色細~中礫混り砂、下層は黄褐色細礫混りシルト質砂からなり、いずれも人為的に埋められていた。また、両層の間には自然堆積した明黄褐色極細粒~細粒砂

当該地において建築工事が行われることになったため、令和2年3月4日と7月15日に大阪市教育委員会によって事前の試掘調査が行われた。その結果、地山層の埋没深度が浅く、遺構も発見されたため、本格的な調査が必要であると判断され、本調査が行われることとなった。調査は令和2年8月24日から開始し、頭書の期間で行った。調査地内西部に東西8m、南北4mの調査区を設定し(図2)、後述の第2層下面(近代:地表面約0.9m)までを重機によって除去した。以下は人力により遺構の検出と掘り下げ、遺物の検出を行い、適宜に実測図と写真による

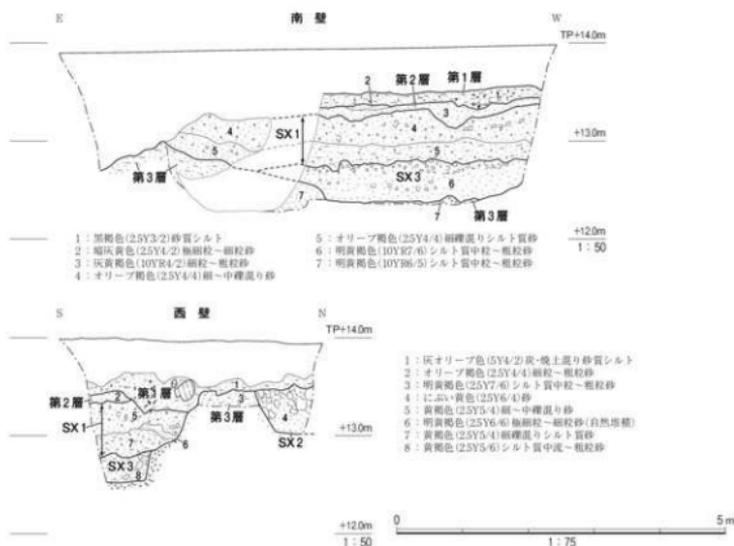


図5 地層断面図

が介在し、上層・下層の堆積の間に時間的間隙があったことを示している。肥前磁器染付・近世瓦が出土したが、どちらも細片で、18世紀以降のものである。

**SX2** 調査区北西で検出された。東西2.90m以上、南北1.34m以上、深さ0.51mで、東部を破壊されていた。埋土はにぶい黄色砂などからなり、人為的に埋められていた。土師器・須恵器・瓦質土器のほか肥前磁器が出土したが、いずれも細片である。1は肥前磁器染付碗の口縁部片で、コンニャク

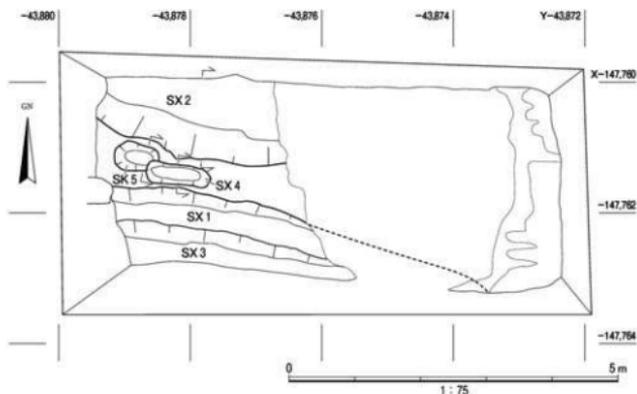


図6 第3層上面の遺構平面図

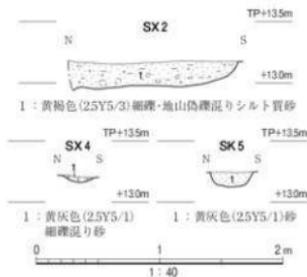


図7 遺構断面図



図8 出土遺物実測図

SX2 (1)、SX3 (2)

の規模や時期から考えて、壁土を採掘した土採り穴とみられる。

### 3) まとめ

今回の調査では、近世の土採り穴とみられる遺構が検出された。同様な遺構は上本町遺跡の南部では一般的にみられ、周辺では先述のNS04-1次調査でも発見されている。江戸時代後半に流行した数寄屋造り家屋に用いるのに好まれたいわゆる「天王寺土」を採った跡とみられ、上町台地南部の遺跡の特徴の一面を示す遺構といえる。

難波京に係る遺構・遺物は発見されなかった。ただし、今回の調査範囲は狭く、近世に改変も受けているので、もともと古代の遺構がなかったのか、あるいは、遺構はあったが破壊されたのかは判断できない。今後のこの地域での発掘調査の進展に期待したい。

### 引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005a、「難波京朱雀大路跡発掘調査(NS04-1)報告書」：「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)」, pp.149-156
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005b、「難波京朱雀大路跡発掘調査(NS04-2)報告書」：「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)」, pp.157-160
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「天王寺区上本町四丁目における上本町遺跡発掘調査(UH08-8)報告書」：「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)」, pp.365-370
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2020、「上本町遺跡発掘調査(UH18-4)報告書」：「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2018)第2分冊」, pp.109-124

印判と手書きによる施文を施す。17世紀末～18世紀初頭のものである。

**SX3** SX1の下位で検出された。東西3.69m以上、南北0.69m以上、深さは0.30mで、東部を破壊されていた。埋土は黄褐色シルト質中粒～粗粒砂からなり、人為的に埋められていた。肥前京焼風陶器の蓋片2が出土し、17世紀後半以降のものとみられる。

**SX4** SX1・2の間で検出された浅い落込みで、東西0.98m、南北0.26m、深さ0.11mであった。黄褐色細礫混り砂で埋められていた。遺物は出土しなかった。

**SK5** SX4に切られる土壌で、東西0.67m、南北0.38m、深さ0.13mで、黄灰色砂で埋められていた。遺物は出土しなかった。

遺物が出土しなかった遺構を除き、SX1～3は遺構

南壁地層断面(北東から)



第3層上面全景(東から)



SX 1～4・SK 5  
(南東から)





天王寺区勝山一丁目215-3、223における建設工事に伴う  
上本町遺跡発掘調査(UH20-4)報告書

調査個所 大阪市天王寺区勝山1丁目215-3、223  
調査面積 100㎡  
調査期間 令和2年12月14日～23日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋 工、大庭重信

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は、上本町遺跡南東部の上町台地東斜面に位置する。調査地は南西から北東方向に延びる「真法院谷」の谷頭付近に位置しており、西側には四天王寺旧境内遺跡が所在し、東側約100mには難波京朱雀大路跡の推定ラインが通る(図1)。

近隣の真法院谷の調査として、本調査地南東隣のUH09-5次調査では谷の東斜面と多量の鈎滓と羽口を含む15世紀の土壌を検出している[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011]。また、谷の外に当る本調査地南西側約70mのST96-4次調査では、8世紀の難波京条坊道路の側溝と考えられる南北溝や木製壺鍔と多数の墨書土器が出土した井戸、16世紀前半に築造された南北方向の堀および石垣などが見つかっており[大阪市文化財協会1999]、周辺は四天王寺とその周囲の古代・中世の人間活動が濃密な地域である。

建設工事に先立ち、大阪市教育委員会が行った試掘調査では、地表下約1.4m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする中世以前の遺構面および遺物包含層が検出され、これを受けて令和2年12月14日から調査を開始した。まず、東西10m、南北10mの調査区を設定し(図2)、現代の盛土層から近世の作土層までを重機で除去したのち、人力掘削に着手した。この段階で、調査区内の中央に東西方向の大型のコンクリート埋設物が存在することが判明し、撤去が困難であることから関係諸機関との調整の上、現地に残したまま調査を続行した。谷底までの地層の記録と、層位毎の遺構・遺物の検出作業を行い、12月23日に調査を終了した。

本報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することによって得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用いて



図1 調査地位置図

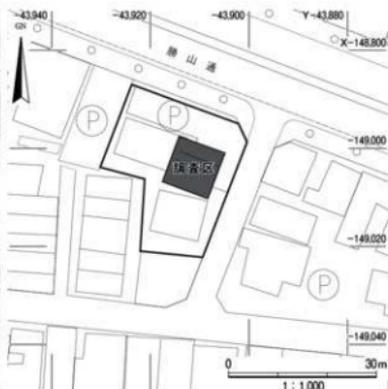


図2 調査区位置図

TP+○mと表記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

現地地表下3.5mまでの地層を第0～7層に大別した。

第0層:コンクリートガラを含む現代盛土層と近代の整地層を第0層と一括した。層厚は130cmある。

第1層:近世の作土層で、第1a・1b層に区分した。第1a層は黄灰色(2.5Y4/1)粗粒砂混りシルト質粘土からなり、層厚は最大で40cmある。本層上面でSE101を検出した。第1b層は黄灰色(2.5Y4/1)粗粒砂多く含むシルト質粘土からなり、第1a層よりも粗粒砂を多く含有する。層厚は30cmある。第1b層に帰属する遺構としてSK102、SD103・104を検出した。断面観察により、SK102は第1b層の途中まで遺構ラインが確認でき、SD103・104は第1b層の基底面で検出した。第1b層自体は耕起が繰り返され複数に細分しようが、一括して第1b層とした。重機で掘削したため、第1層に含まれる遺物は回収できていないが、後述するようにSK102からは18世紀後半の肥前磁器や関西系陶器が、SD104からは17世紀末～18世紀初頭の肥前磁器が出土している。

第2層:暗灰黄色(2.5Y4/2)砂混りシルト偽礫+砂礫からなる客土層で、層厚は40cmある。

第3層:褐色(10YR4/4)砂混りシルトからなる客土層で、層厚は10cmと薄い調査区全域に連続して分布する。

第4層:下部に砂礫が点在する、褐色(10YR4/4)砂質シルト偽礫からなる客土層で、層厚は30～50cmある。

第2～4層は谷を埋めた一連の客土層と考えられ、古代・中世の遺物も含むが、最も新しい時期の

遺物として第2層より瀬戸美濃焼、第4層より丹波焼などの豊臣期の陶器片が出土しており、これが客土時期の下限を示す。

第5層:中世の水成層で、第5a～5c層に区分した。第5a層は灰黄色(2.5Y6/2)ないし灰色(7.5Y4/1)の砂泥互層で、調査区北半では下位層を削って最大70cm厚さで堆積しており、谷斜面側の調査区南半では層厚25cmと薄い。第5b層は調査区南半の東壁でのみ確認した灰色(5Y4/1)シルト層で、層厚は30cmある。第5c層は灰色(5Y4/1)ないし灰黄褐色(10YR4/2)の砂泥互層で、層厚は最大で60cmある。

第5a～5c層からは古代の須恵器・土師器・瓦とともに中世後半(15世紀代)の土師器・瓦質土器・陶器・瓦などが出土した。また、第5c層からは碗形滓や輪羽口の破片が出土しており、南東側のUH09-5次調

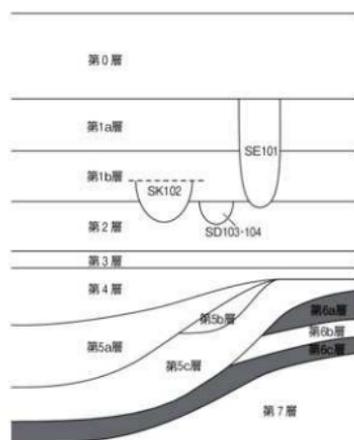


図3 地層と遺構の関係図

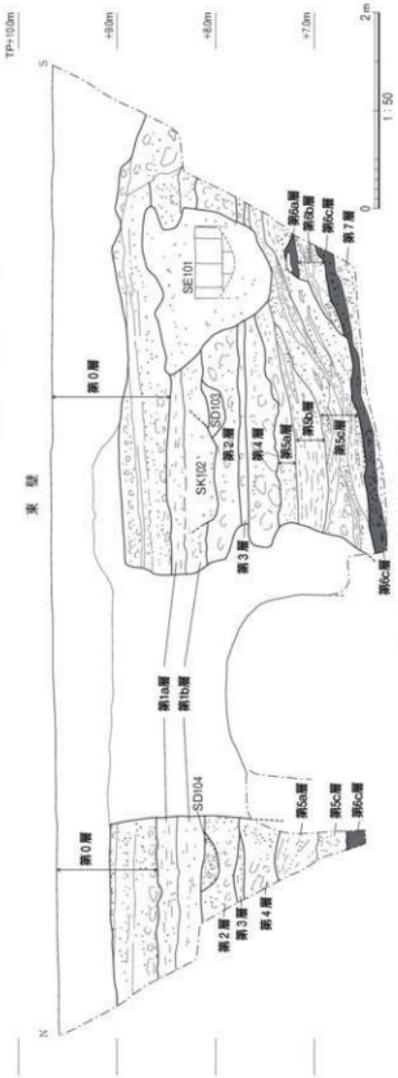
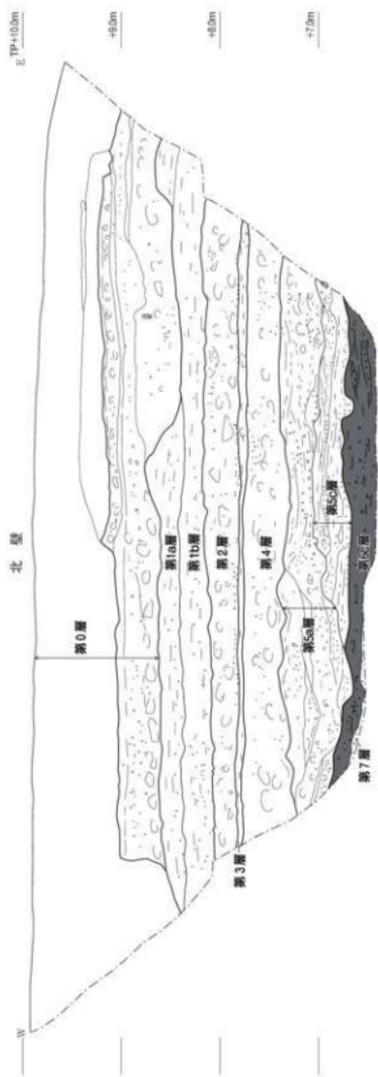


圖 4 調查區北壁東壁地層斷面圖

査で検出された15世紀の土壌から出土した多量の銹滓と羽口と一連のものと考えられる[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011]。

第6層：古代の古土壌および水成層で、第6a～6c層に区分した。第6a層はオリーブ黒色(5Y3/2)砂礫混りシルトからなる古土壌で、層厚は25cmある。調査区南部の谷斜面にのみ分布し、以北は第5c層によって削られていた。第6b層は水成の灰色(5Y5/1)ないし灰白色(5Y7/1)の砂泥互層で、層厚は30cmある。第6a層と同様、調査区南部の谷斜面にのみ分布し、以北は削平されていた。第6c層はオリーブ黒色(5Y3/1)砂礫混りシルトからなる古土壌ないしは湿地性堆積層で、層厚は10～30cmある。調査区全域に分布する谷の最下層の地層で、南部の谷斜面は土壌生成が顕著であるが、北部では層厚を増し、泥質化しつつ部分的に砂の薄層を介在するようになる。第6a～6c層からは古代の土師器・須恵器・瓦、および弥生土器が出土した。

第7層：黄灰色(2.5Y5/1)の砂礫層からなる、上町層と考えられる地山である。谷の斜面で層厚20cmまで確認した。上位層からの根拠によって擾乱されている。

#### ii) 各層出土遺物(図5)

谷内の第6層から第4層までの出土遺物1～20を図化した。

第6層からは弥生土器1・2、古代の土師器3および平瓦4が出土した。細別出土層準は1・2・4が第6c層、3が第6a層である。1・2は胎土から同一個体と考えられ、1は口縁端部をあまり肥厚させず、下端に原体による幅広のキザミを巡らす壺の口縁部、2は底部である。弥生時代中期前葉のものである。3は体部外面に斜め方向のハケメを施す甕、4は内面に布目圧痕を残す平瓦で、器面がほとんど摩滅しておらず、使用后早い段階に谷内に投棄されたものとみられる。

第5層からは5～19が出土した。細別出土層準は7～9が第5a層、それ以外は第5c層である。古代の遺物は土師器杯C6、須恵器杯B蓋7、杯B8、大甕9、重圈文軒平瓦17、平瓦18・19である。6は外面にヨコナデ、内面に放射状暗文1段を巡らすもので、平城京土器Ⅲに位置づけられる8世紀中葉のものである。7・8はやや古い8世紀前葉のものである。中世は土師器皿5、瓦質土器播鉢10、瓦質土器羽釜11、同甕12、常滑焼鉢13、備前焼播鉢14、巴文軒丸瓦15、唐草文軒平瓦16があり、最も新しい時期のものは15世紀代である。

第4層からは丹波焼播鉢20が出土した。豊臣期のものである。

#### iii) 遺構(図6)

##### a. 第7層上面

地山の上面で谷の南斜面を検出した。約50cmの段差をもって底に至り、底は北側にむかって緩やかに低くなる。また、段差の上端には平坦面があり、平坦面上の第5c層からは、古代から中世にかけての土器・陶器・瓦が集積しており、上述した10～19はそこから出土したものである。

##### b. 第2層上面

第1b層を除去した第2層の上面で、第1b層に帰属するSK102、SD103・104、第1a層に帰属するSE101を検出した。SK102は幅0.7～1.5m、深さ0.2mの東西に長い溝状の土壌で、途中で北側に折れ曲がり、東西長3.4mまで確認した。断面観察から第1b層内から掘られたもので、18世紀後半の肥前

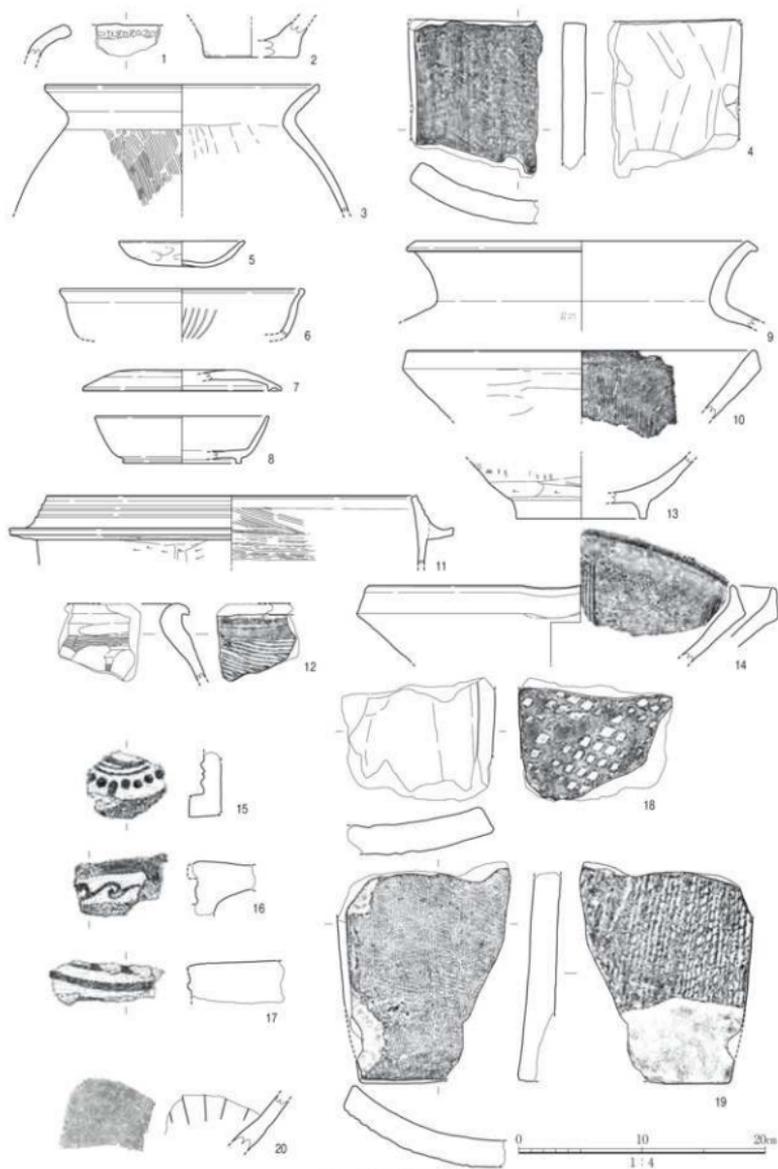


图5 出土遗物实测图

第6c层(1·2·4)、第6a层(3)、第5a层(7~9)、第5c层(5·6·10~19)、第4层(20)

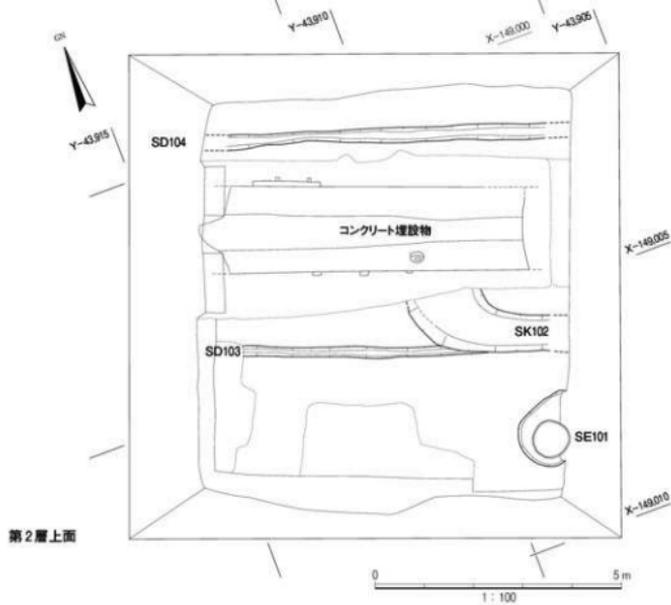
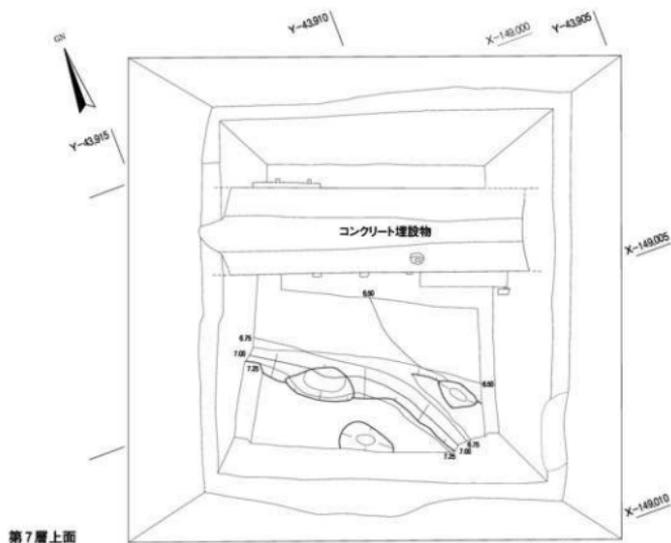


図6 遺構平面図

磁器や関西系陶器が出土した。SD103・104は幅0.2m、深さ0.2mの東西溝で、4.5mの間隔において並行する。第1b層基底面の遺構で、SD104からは17世紀末～18世紀初頭の肥前磁器が出土している。SE101は直径0.7mの井戸側に瓦を用いた井戸で、第1a層上面から掘られていた。遺物は出土していない。

### 3) まとめ

今回は、真法院谷内の調査であったため、明確な遺構は確認できなかったが、谷底と南斜面を確認し、谷の埋没過程を知ることができた。谷は古代には安定した環境であったようで、土壌生成が顕著な第6層を谷底で検出し、谷を埋める古代の造成土は確認できなかった。第6層の上には中世の流水を伴う砂泥互層である第5層が堆積し、15世紀を中心とした土器・陶器・瓦とともに8世紀の須恵器・土師器・瓦も廃棄されていた。これは周辺調査で確認されている四天王寺東側の古代・中世の人間活動に伴うものと判断される。第5層の上には谷の埋め立て時の客土層(第2～4層)が厚く堆積し、埋め立ての時期は出土遺物から豊臣期を下限となる。以上のように、今回の調査では、谷を埋め立てて平坦化するような大規模開発は古代・中世には確認できず、豊臣期以降に下るという結果が得られた。これが今回調査範囲の限定的なものか広域の状況を示すものかは、今後の調査によっても検討する必要がある。

### 参考文献

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011、「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告(2009)」:「上本町遺跡発掘調査(UH09-5)報告書」、pp.201-210

大阪市文化財協会1999、「大阪市内埋蔵文化財発掘調査報告-1996年度-」:「第2節 ST96-4次調査」、pp.85-



調査区東壁南半の地層断面  
(西から)



第7層上面遺構検出状況  
(南から)



第2層上面遺構検出状況  
(南から)





浪速区難波中二丁目20・21における建設工事に伴う  
難波御蔵跡・船出遺跡発掘調査(FD20-2)報告書

調査箇所 大阪市浪速区難波中2丁目20・21  
調査面積 200㎡  
調査期間 令和2年6月1日～令和2年7月17日  
調査主体 公益財団法人 大阪府文化財センター  
調査担当者 調査課長 岡戸哲紀、課長補佐 佐伯博光、主査 後藤信義

### 1)調査に至る経緯と経過(図1・2)

難波御蔵跡・船出遺跡は、大阪湾に面した砂堆上に位置する。明治11(1878)年に難波新川(難波入堀)と鑿川を連結するための工事中に、古墳時代に属すると考えられる全長約12mの刳船が出土したことから、船出遺跡として周知されるようになった。刳船は出土後、大阪城天守閣前に展示されていたが、戦時中に被災し現存しない。

また、当地付近は享保17(1732)年に、享保の大飢饉を受けて幕府年貢米の集散並びに救援米の貯蔵を目的として米蔵(難波御蔵)が設置された。難波御蔵は最終的には東西126m、南北324mの敷地に8棟の倉庫群と36m四方の船入が設けられた。享保18(1733)年には、この船入から道頓堀を経由して大阪湾につながる入堀川(難波新川)が開削された。この入堀川開削工事は飢饉による窮民が携わったと記されている。なお、平成29(2017)年の調査で船入護岸施設の石垣が検出されている。

さらに、天王寺銭座跡地に設置されていた天王寺御蔵(高津御蔵)は、多湿の地であったため米の痛みが激しかったことから、寛政3(1791)年にこれを廃止し、難波御蔵に移転させた。これにより難波御蔵は、13,000坪(約4,300㎡)の敷地に約30棟の蔵が建ち並ぶようになり、当時の人々の目を引き、「摂津名所図会」にも描かれている。

明治維新後は大蔵省の管轄となり、明治19(1886)年の地図には倉庫群と船入が記載されている。

難波御蔵の跡地は、明治37(1904)年には煙草専売局大阪工場として使用された。船入部には管理棟が、その周囲には南北・東西方向に細長い煉瓦造り建物が建ち並ぶ様子が大正13(1924)年の大阪パノラマ地図に掲載されている。既往の発掘調査により「大阪窯業」や「岸和田煉瓦」の刻印をもつ煉瓦が出土している。なお、この工場には2,000人近い従業員が勤務していたとされるが、第二次世界大



図1 調査地位置図

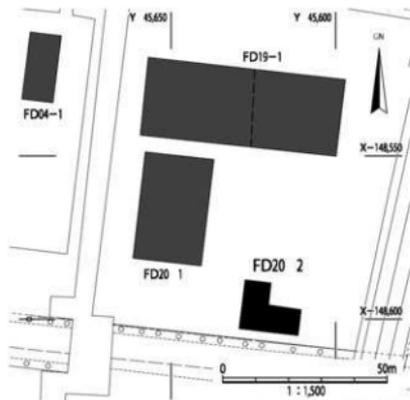


図2 調査区配置図

戦時の空襲により焼失した。

戦後、昭和25(1950)年に大阪スタジアム(大阪球場)が建設され、南海ホークスなどのホームグラウンドとして大阪府民に愛されてきたが、関西空港建設開始に伴う難波地区再開発計画の中で解体が決まった。その後、南海ホークスのダイエーへの売却によりフランチャイズ球場としての機能を失った。暫くは住宅展示場などに使用されてきたが、平成10(1998)年に解体され、平成15(2003)年に商業施設「なんばパークス」として生まれ変わった。また、平成17(2005)年にはなんばパークス二期工事が開始し、平成19(2007)年に二期部分が開業した。

今回の調査地は難波御蔵跡の南側に位置する。当該地は明治11(1878)年に、現在の株式会社ニッピの前身である合名会社大倉組皮革製造所が皮革製造工場を建設したことからはじまり、明治40(1907)年に合名会社大倉組皮革製造所・株式会社桜組・東京製皮合資会社が、合併と同時に福島組皮革製造所を買収して日本皮革株式会社が創立された。大阪支店・工場が昭和40(1965)年に西淀川区へ移転した後、昭和45(1970)年にナンバゴルフセンターが開場した。平成9(1997)年にゴルフセンターが閉鎖した後は住宅展示場として、さらに平成15(2003)年から令和2(2020)年まで貸駐車場として利用された。

なお、当該調査地の西側にはヤマダ電機が建設され、大阪ミナミの中心地として発展を遂げている。

今回の調査は試掘調査の結果から、遺構面の残存状況の良い個所について「L」字状の調査区(200㎡)を設けて実施した。令和2年6月1日から重機によって表土掘削を開始し、翌2日より遺構面の調査並びに人力掘削を開始した。同年7月7日にすべての調査を完了し、同日、大阪市教育委員会文化財保護課の立会を受けて調査を終了した。調査は遺構面が確認できるGL-2.0m付近までを平面調査の対象とし、これを行った。その後、GL-3.0m(TP+0m)まで掘削を行い、遺物採集および当該地における歴史的な古環境の復原に努めた。

## 2)調査の成果

### i)層序(図3)

第0層：明治時代以降に属する地層である。アスファルト片やコンクリート片を含む造成土や土坑状の攪乱のほか、整地層も認められた。

この整地層および攪乱内からは、多量の鉄滓や煉瓦を主体とした炉壁片をはじめ鑄造に関する品が出土した。当該地の南には明治23(1890)年創業の久保田鉄工所株式会社(現株式会社クボタ)の工場があったことから、これらの出土品は、それに関するものと推察される。

第1層：後世の攪乱による削平が著しかったため、調査区南東隅にのみ堆積が確認できた。上位は2.5Y6/4にふい黄 極粗粒砂・中粒砂混粗粒砂で、自然堆積層と考えられる。下位は5Y4/2灰オリブ 中粒砂混極細粒砂で未分化な土壌化層である。層厚は0.2mを測る。

第2層：近世の作土層である。調査区南西部では上下2層の作土層が確認できたが、調査区東半部では後世の削平により下層のみが残る。上層は5Y3/1オリブ黒 細礫・中粒砂混シルトで炭化物を含み、下位には鉄分の沈着がみられる。層厚は0.1mを測る。下層は2.5Y3/2黒褐 細礫・中粒砂・

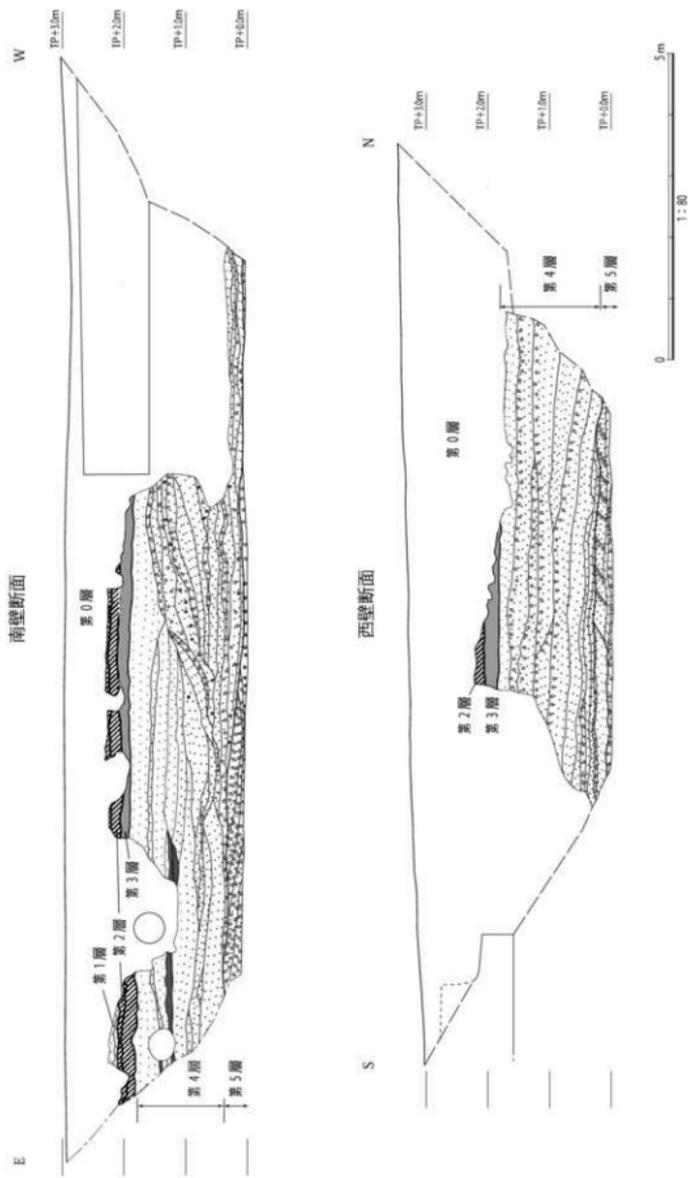


图3 调查区壁断面图

シルト混極細粒砂である。近世陶磁器の細片が出土した。層厚は0.15～0.25mを測る。

第3層：中世の土壌化層である。10YR4/3にぶい黄褐 極粗粒砂・粗粒砂混中粒砂で、土師器や瓦器の細片が出土した。層厚は0.3mを測る。

第4層：中世以前の風成層および沿岸成層による堆積層である。当該層は第5層の上面を南西-北東方向に浜堤状の高まりを築いたのち、浜堤の西側の低地部から徐々に風成層が堆積し、調査区全体が平坦化して安定する。上位は10YR6/6明黄褐 細粒砂混中粒砂と比較的細かい砂粒の堆積が認められる。低地部については粗粒砂や中粒砂を基調とした風成層で、調査区の南東部で確認できた。この低地部は堆積途上において一時的に湿地状態であったことが認められ、2.5Y4/1黄灰 中粒砂混粗粒砂が堆積する。また、南壁西半部や西壁には浜堤状の高まりが確認できた。この浜堤状の高まりは一度に形成されたものではなく、少なくとも4度の未分化の土壌化層を挟みながら形成されたことが看取できる。層厚は1.4mを測る。

第5層：沿岸成層の前浜の堆積層と考えられ、5Y6/2灰オリーブ 中礫・極粗粒砂混細礫層が堆積する。当該層は東から西、北から南方向に複雑な堆積を繰り返していたことが確認できたものの、TP+0mまでしか掘削できず、下層の堆積状況を把握することはできなかった。なお、調査区の西南部は低地となっており、2.5Y6/2灰黄 粗粒砂～中粒砂の水成堆積層が認められた。

## ii) 遺構と遺物

### 第4層上面(図4)

第3層を除去して検出したが、後世の攪乱や削平により遺構面の遺存状況は悪い。ピット1基(SP401)、土坑3基(SK401～403)を検出した。遺構面の標高はTP+1.7～1.8mを測る。

SP401 直径0.2m、深さ0.17mを測る。土師器皿や瓦器の細片が出土した。

SK401 平面楕円形を呈し、東西方向に長軸をもつ。長径0.66m、短径0.4m、深さ0.1mを測る。土師器皿や瓦器の細片が出土した。

SK402 SK401の北に位置する。遺構の北側は調査区外に広がり、西側は攪乱による削平を受ける。長さ1.3m以上、幅0.5m以上、深さ0.16mを測る。遺物は須恵器鉢片のほか、土師器皿や瓦器の細片が出土した。

SK403 調査区西辺部近くで検出した。後世の攪乱による削平を受けており、一部しか残存しない。長さ1.3m以上、深さ0.15mを測る。土師器皿、瓦器、瓦質土器の細片が出土した。

上記の遺構は出土遺物から15世紀に属すると考えられる。

### 第4層出土遺物(図5)

第4層は上位においては中世に属する土器片が少量出土したものの、主として古墳時代に属する土師器(1～15)・須恵器(16・17)・韓式系軟質土器(18～20)・製塩土器(21～26)・土鍾(27・28)が出土したほか、摩滅した弥生土器(29)などが出土した。

1～3は杯である。1は体部が内湾しながら立ち上がり、頸部は外方に開き、口唇部は上方につまみ上げる。2は体部が開き気味に立ち上がり、外反する口縁部をもつ。3は内湾する体部に短く外反

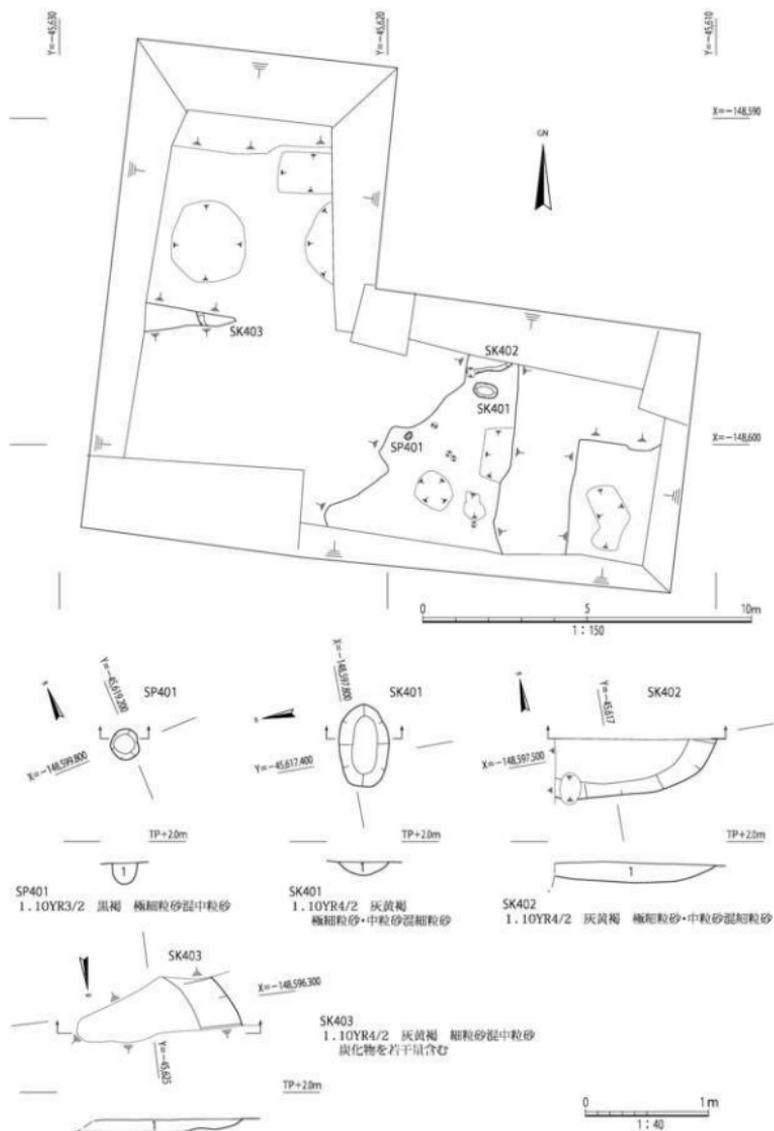


图4 第4層上面遺構平・断面图

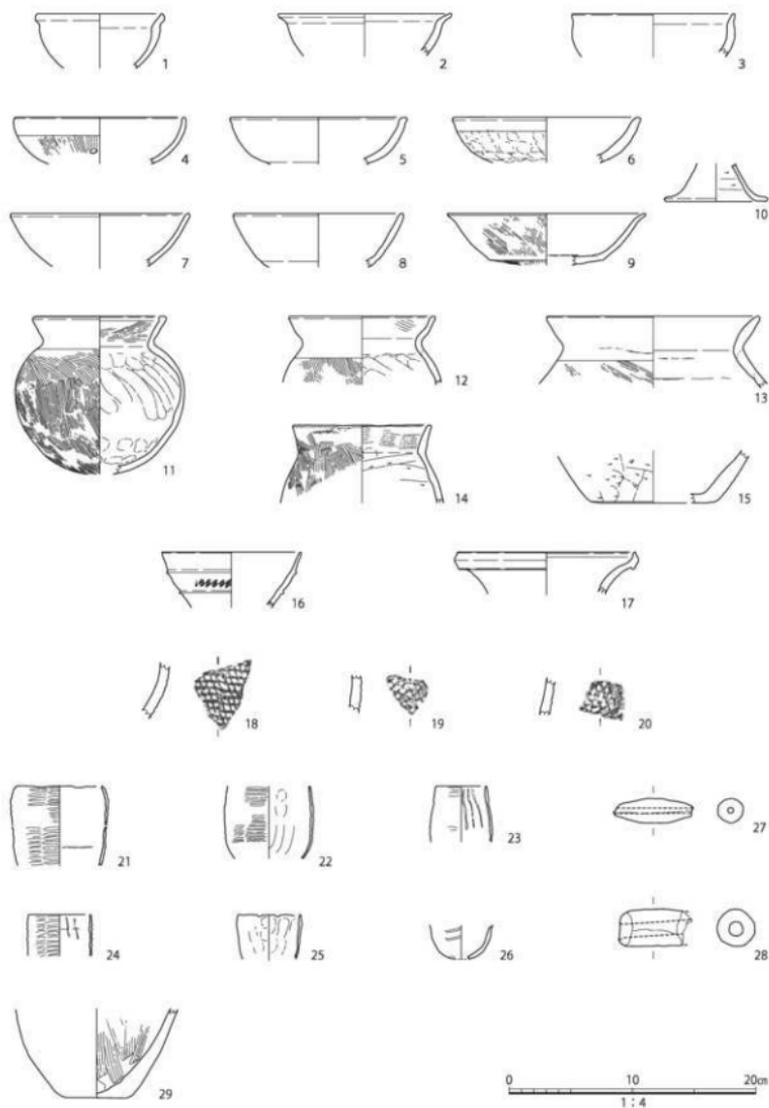


图5 第4层出土遗物实测图

する口縁部をもつ。4～10は高杯である。4～6は杯部が碗形を呈し、7～9は杯部が屈曲して立ち上がる。10は脚部で筒部は「ハ」字状に大きく広がり、脚端部は横方向につまみ出す。11～14は甕である。11・12は小形の布留形甕で口縁端部に返しをもつ。13は肥厚しながら外反する口縁部をもつ。14は肩部からまっすぐ外上方に立ち上がる頸部をもち、口縁端部は丸く収める。15は平底甕もしくは甎の底部である。外面はヘラケズリ調整を施す。これらの土師器はいずれも古墳時代中期に属すると考えられる。16は壺の頸部で2条の突帯間に波状文を施す。TK216型式からTK208型式に比定される。17は小形の甕もしくは壺口縁部である。口縁端部は上下方向につまみ出す。18～20は韓式系軟質土器の鉢体部である。外面に斜格子タタキを施す。3点とも同一個体の可能性がある。21～26は製塩土器である。いずれも薄手で截頭卵形をした丸底式である。21～24・26は外面にタタキを施す。25は内外面ともにナデ調整を施す。これらの製塩土器は土師器甕(11)の近くで出土しており、古墳時代中期に属すると考えられる。27・28は管状土錘である。27は紡錘形を呈する。孔径0.4cm、重さ20.5gを量る。28は筒形を呈し、一端は使用時の欠損が認められ、孔径1.1cm、重さは49.0gを量る。いずれも古墳時代前期から中期の所産と考えられる。29は弥生土器甕底部である。外面は摩滅が顕著で調整は不明であるが、内面には粗いハケ目が残る。弥生時代中期前半代に属すると考えられる。

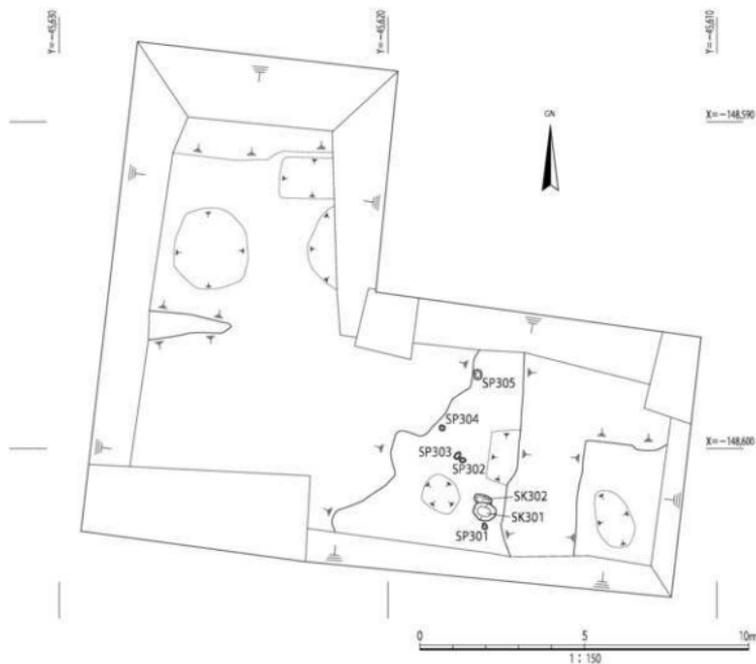


図6 第3層上面平面図

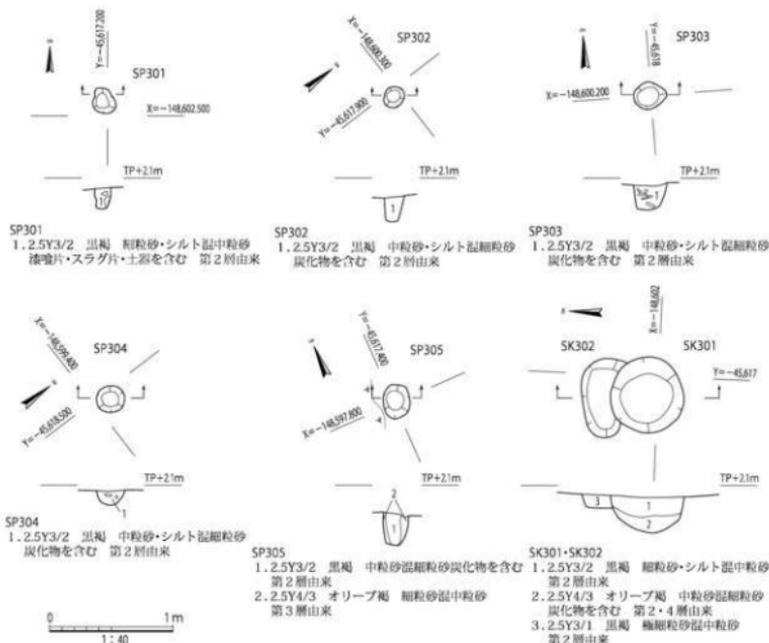


図7 第3層上面遺構平・断面図

### 第3層上面(図6~8)

第2層を除去して検出した。遺構は調査区中央部でピット5基(SP301~305)、土坑2基(SK301・302)を検出した。遺構面の標高はTP+2.0mを測る。

SP301~305 直径0.15~0.25m、深さ0.12~0.27mを測る。SP305のみ柱当りが確認できた。出土

した遺物は陶磁器片や煉瓦片も含まれており、近世以降に属すると考えられる。

SK301 平面円形を呈し、直径0.6m、深さ0.3mを測り、埋土は2層に分れる。遺物は陶器(30)、土人形(31)のほかにも不明鉄製品、燧石片などが出土した。30は京・信楽系の施釉陶器で筒形の猪口である。口径4.2cm、器高4.8cmを測る。草花文を施す。時期は19世紀後半と考えられる。31は土師質の土人形である。三味線を弾く女性である。高さ4.2cmを測る。

SK302 SK301の北に位置し、南半部はSK301によって削平を受ける。平面は不整形な楕円で、長径0.6m、深さ0.1mを測る。遺物は陶器蓋(32)が出土した。32は京・信楽系の蓋である。外面下半部は露胎する。最大径11.2cm、高さ2.4cmを測る。時期は19世紀に属すると考えられる。



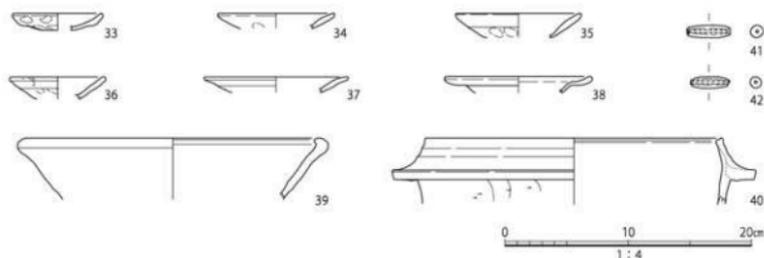


図9 第3層出土遺物実測図

### 第3層出土遺物(図9)

第3層からは土師器(33~38)・東播系須恵器(39)・瓦質土器(40)・瓦器(43~50 写真のみ)・土鍾(41・42)などが出土した。

33~38は土師器皿である。33は杯部が内湾しながら立ち上がり、端部は丸く収める。34は杯部がまっすぐ外上方に立ち上がり、口縁端部は面をもつ。35~38は杯部の中ほどで段を有する。16世紀に属する。39は東播系須恵器の鉢口縁部である。やや外反気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収めるが、内側につまみ出しをもつ。13世紀後半の所産である。40は瓦質土器の羽釜である。15世紀代に属すると考えられる。41・42は管状土鍾である。共に端部は使用時の欠損が認められる。41は孔径0.2cmで、重さは3.0gを量る。42は孔径0.2cmで、重さは1.5gを量る。43~50(写真図版)は瓦器碗の細片である。47・48は断面が扁平な台形状の、49・50は断面三角形の高台を有する。13世紀に属する。

### 第2層上面(図10)

調査区南東隅では第1層を、調査区中央部では現代盛土層を、調査区西端部では近現代の整地層をそれぞれ除去して検出したが、中央部においては層の上位が削平を受けていたため、溝や畝など耕作に伴う痕跡は確認できなかった。

### 第1層上面(図10)

第0層を除去して検出した。第1層の遺存が調査区南東隅のみであった。第2層の作土層を覆う洪水砂層および未分化の土壌化層が堆積する。

## 3)まとめ(図11)

今回の調査では、上町台地西側において砂堆が発達する状況と、それに伴う人々の活動の痕跡を明らかにすることができた。

まず、下層確認調査がTP+0m付近までしか掘削できなかったため第5層の全容をつかむことはできなかったが、周辺の調査成果などからTP+0m付近より下層は沿岸成層からなる海浜の前浜の堆積層を呈すると思われる。中礫や細礫を中心とした礫層が堆積しており、北から南方向へは高角に、東から西方向へは低角に進む斜交層理が確認できた。なお、調査区の南西部ではこの堆積作用がおよばず0.2mの深さをもつ窪地となっており、水成堆積層である細粒砂層が堆積する。

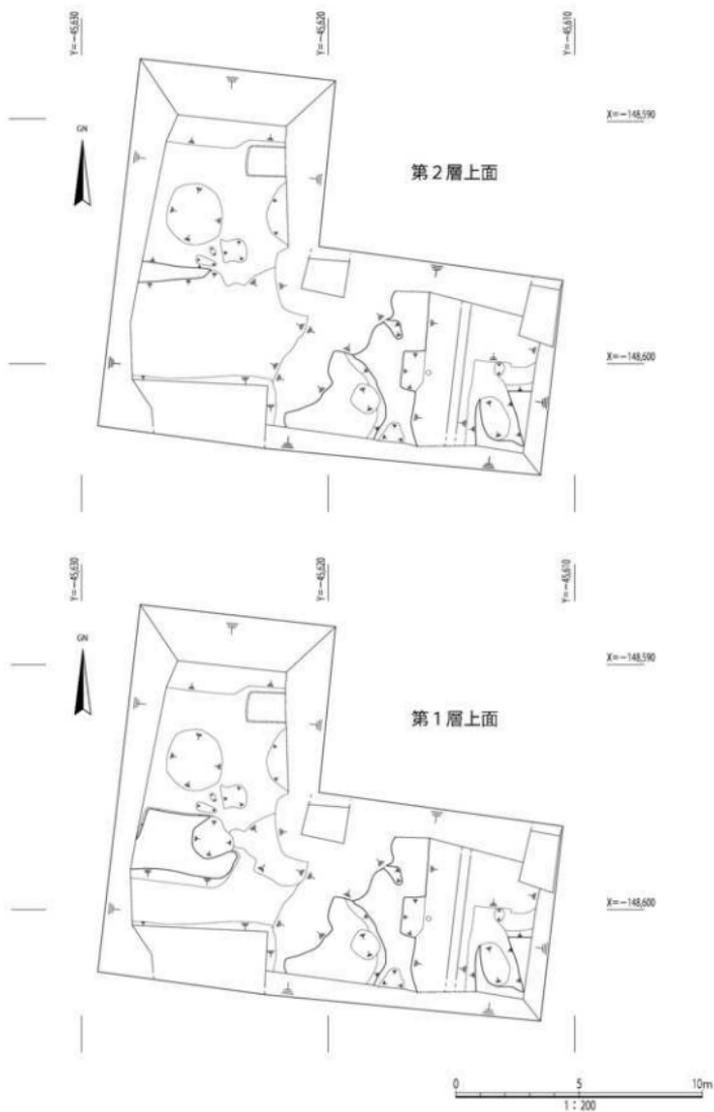


图10 第1·2層上面平面图

第4層は大きく2段階に分けることができる。まず第1段階では沿岸成層からなる海浜の後浜の堆積層にあたると考えられ、調査区の西半部に南東—北西方向に延びる浜堤状の高まりが形成される。この浜堤状の高まりは、上位に堆積する未発達な土壌化が認められる中礫層と、下位に堆積する極粗粒砂層が交互に堆積しており、少なくとも4度の未発達な土壌化層が形成されていることが確認でき、高まりが段階的に発達していったことがわかる。最終的にこの高まりは1.4mの高さを有するまでとなる。

そして、この一連の堆積作用が行われたのは弥生時代中期以降古墳時代中期にかけてと考えられる。この浜堤状の高まり上において遺構は検出されなかったが、層中より土師器、須恵器のほか製塩土器や土錘が出土したことから、近隣には土器製塩や漁撈に従事した集団の存在が推測される。

次に第2段階では、浜堤状の高まりおよびその東側にある低地部が風成層によって埋積し、平坦面が形成される。風成層は中粒砂から細粒砂を主体とした比較的小さい砂粒によって形成され、まず、浜堤状の高まりの東側に広がる低地部を西から東に向かって徐々に堆積していく様子が見て取れる。なお、低地部の埋積途上において、滞水し湿地状を呈する時期が存在したことが断面からうかがえる。風成層の堆積は浜堤状の高まりを完全に埋積した後もさらに堆積作用を続け、広く平坦面を形成し土壌化が発達するようになる。

そして、これらの風成層が堆積した時期は出土遺物から古墳時代中期から中世にかけてで、土壌化が進むのは13世紀から15世紀と考えられ、同時にピットや土坑などの遺構が検出されることから、何らかの活動がなされるようになる。

その後、近世には耕作地として利用されるが、当調査区周辺において本格的に開発が進み、市街地化するのは明治時代になってからである。

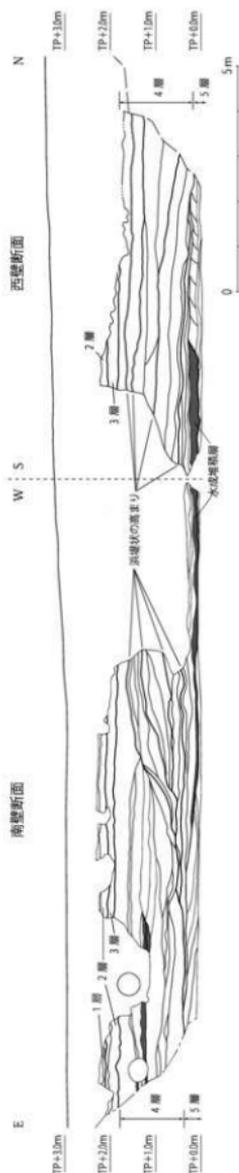


図1 調査区南壁・西壁断面合成図

## 引用・参考文献

川端直正編 1967、『浪速区史』

大阪市役所 1911、『大阪市史』第1巻

大阪文化財研究所 2012、『恵比須遺跡発掘調査報告』

2012、『難波1丁目所在遺跡B地点発掘調査報告』

大阪市文化財協会 2003、『船出遺跡』・『難波貝層遺跡』：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告—2001・2002年度—』

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会 2005、『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』

2006、『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2005)』

2009、『高津御蔵跡』：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

(2007)』

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所 2018、『難波御蔵跡』：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2016)』

2019、『難波貝層遺跡』：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

(2017)』第2分冊

大阪府 1930、『難波竊構内遺物包含層』：『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』第一輯

熊木洋太・鈴木美和子・小原 昇編著 1995、『技術者のための地形学入門』、山海堂

南壁地層断面東半部  
(北から)



西壁地層断面  
(東から)



第4層上面全景  
(西から)





第4層上面遺構  
完掘状況  
(北から)



SK401  
(南から)



第4層土師器甕(11)  
出土状況  
(北から)





第3層上面全景  
(西から)



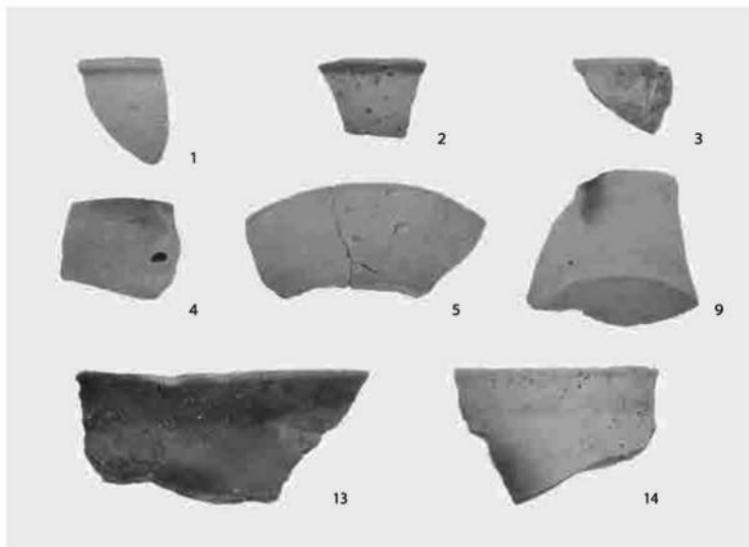
第3層上面  
遺構完掘状況  
(北から)



第2層上面全景  
(西から)





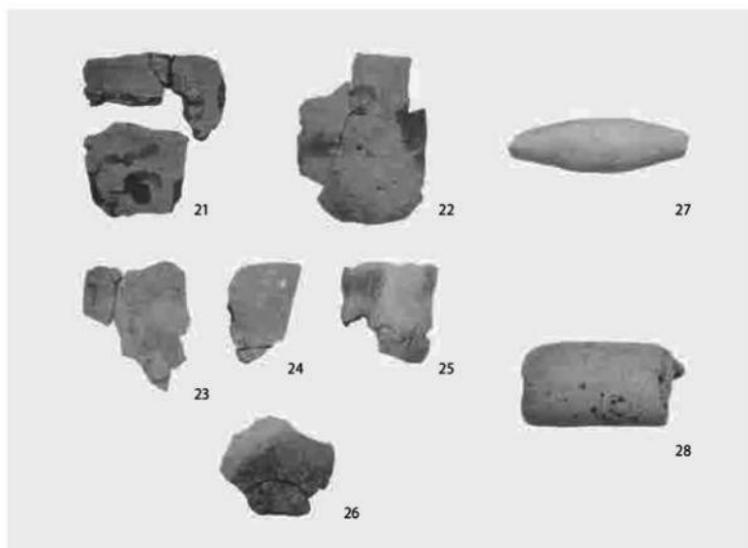


第4層出土遺物(1)

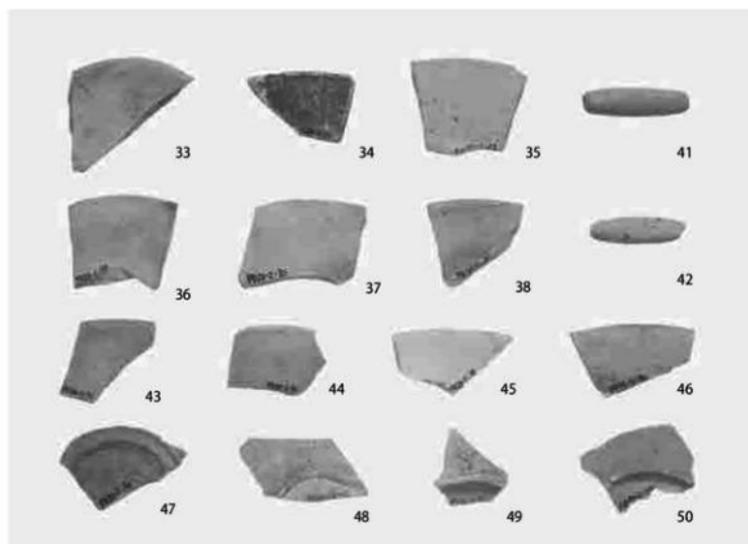


第4層出土遺物(2)





第4層出土遺物(3)



第3層出土遺物



淀川区宮原一丁目2-5・2-53・2-58における建設工事に伴う  
宮原遺跡発掘調査(MH20-1)報告書

調査個所 大阪市淀川区宮原1丁目2-5・2-53・2-58  
調査面積 400㎡  
調査期間 令和2年6月22日～9月1日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋工、浅田洋輔

## 1) 調査に至る経緯と経過

宮原遺跡は新大阪駅の北方に広がる中世の集落遺跡である。淀川の沖積地にある当地は京・大坂と中国地方を結ぶ交通の要衝であり、中世には宮原荘、宮原北荘、宮原南荘とよばれる荘園が存在した場所であると推定されている。

「宮原」の地名は1220(承久2)年の田畑のやりとりを記述した文書で初めて登場する。それ以降宮原荘に関する記述が複数の文書に存在する。宮原には宮原荘と宮原北荘と宮原南荘が存在していたことが分かっている。宮原南荘については詳細が不明であるが、宮原北荘については春日社領宮原荘・興福寺領宮原北荘としてあらわれている。南北朝時代の動乱以降武士勢力や農民層の抵抗が激化し、15世紀頃には摂津国西成郡守護が年貢の収納を請け負っており、武士勢力の侵略が一段と激しくなっていたとみられる[脇田修ほか1986]。

調査地周辺の調査では、調査地より西に約140mのMH94-2次調査において、古代から中世にかけての遺物とともに掘立柱建物や溝などを検出している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1996]。また、中世の遺構としては、調査地より北東に約230mのMH06-2次調査で検出した12世紀前半を中心とする中世前期の多様な遺物と集落を区画する可能性がある溝など[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008]、北東に約90mのMH09-3次調査で検出した15世紀の井戸[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011]、北西に約210mのMH16-1次調査で検出された中世の井戸や土壇、柱穴などがある[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2018]。このように調査地周辺には宮原荘に関する集落と考えられる中世の遺構が存在していることが推定される。

当地における建設工事に先立ち、大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、中世以前の遺構



図1 調査地位置図

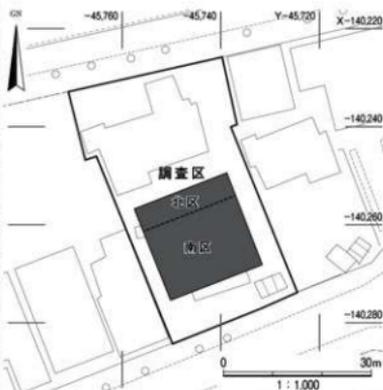


図2 調査区位置図

が確認されたため本調査を行うこととなった。十分な掘削土置場を確保するために調査予定の東西20m、南北20mを南より15m地点で南区と北区に分けて調査を行った。機械掘削は現代作土層(後述する第1層)下面まで行い、それ以下は地層の厚さに応じて機械及び人力により掘り下げた。調査は南区第2層上面より行い、適宜遺構の写真撮影と実測図作成などの記録保存を行った後に順次地層を掘り下げた。第5層上面まで調査を終わった後に埋戻しを行い、北区の調査を行った。北区においては省略し第3層上面から調査を行った。

なお、本報告で使用する標高はT.P.値(東京湾平均海面値)であり、本文・挿図中では「TP±〇m」と示す。また、座標については現場において記録した周辺街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3～5)

調査地の現況地形は、高さがTP+1.2～1.6m前後で所々に高低差があるものの全体的にTP+1.4m前後でほぼ平坦な地形となっている。調査区西壁の地層断面に基づいて層序を述べる。

第1層：ビニール片などを含む現代の地層であり、層厚は40～60cmである。

第2層：オリブ褐色極細粒砂などからなる明治時代の遺物を含む近代の地層である。層厚は30～70cmであり、南に向かって層厚が厚くなる。

第3層：暗灰黄色極細粒砂などからなる19世紀の遺物を含む近世の地層で、作土層の可能性はある。層厚は20～40cmであり、南に向かって層厚が厚くなる。

第4層：にぶい黄褐色細粒砂などからなる古土壌を主体とし、層中に偽礫を含む。層厚は20～40cmであり、南に向かって層厚が厚くなる。第4層上面において13～17世紀の遺構を確認した。

第5層：灰オリブ色細粒砂からなる自然堆積層である。第5層上面において10～12世紀の遺構を確認した。

### ii) 遺構と遺物

遺構の検出は南区が第2層上面、北区が第3層上面より行ったが、第2層上面は近代、第3層上面は19世紀の遺構しか存在しなかったため、宮原荘に関係する時期を含む第4層以下の遺構・遺物について報告する。なお、今回の調査では第4層上面で最も多くの遺構を検出したが、出土遺物や遺構の切合い関係などからこれを鎌倉時代と室町時代～徳川期の2時期に分けて記述する。出土遺物や切合いがなく詳細な時期が不明な遺構については両時期の平面図に薄いトーンで表現した。

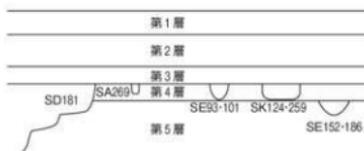


図3 地層と遺構の関係図

#### a. 平安時代(図5～7)

第5層上面において10～12世紀の遺構を検出した。

SP147 調査区の西部で検出した直径0.4m、深さ0.2mの柱穴である。直径0.1mの柱痕を残してい

TP+2.0m

+1.0m

0.0m

## 南区西壁



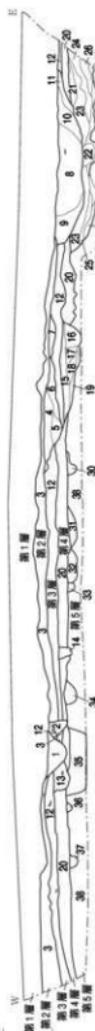
- 1: 暗灰黄色(2S3V4)の細粒砂
- 2: 暗灰黄色(2S3V4)の粗粒砂
- 3: 暗灰色(2S3V5)の粗粒砂
- 4: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 5: 赤褐色(2S3V4)の粗粒砂
- 6: 赤褐色(2S3V4)の粗粒砂
- 7: 赤褐色(2S3V4)の粗粒砂
- 8: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 9: 赤褐色(2S3V4)の粗粒砂
- 10: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 11: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 12: 暗灰黄色(2S3V4)の粗粒砂
- 13: 暗灰黄色(2S3V4)の粗粒砂
- 14: 暗褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 15: 暗褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 16: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 17: 暗灰黄色(2S3V4)の粗粒砂
- 18: 赤褐色(2S3V4)の粗粒砂
- 19: 暗褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 20: 暗褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 21: 暗褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 22: 暗灰黄色(2S3V5)の粗粒砂
- 23: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 24: 赤褐色(2S3V4)の粗粒砂
- 25: 赤褐色(2S3V4)の粗粒砂
- 26: 赤褐色(2S3V4)の粗粒砂
- 27: 暗灰黄色(2S3V4)の粗粒砂
- 28: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 29: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 30: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 31: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 32: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 33: 暗灰黄色(2S3V4)の粗粒砂
- 34: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 35: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 36: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 37: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 38: 暗灰黄色(2S3V4)の粗粒砂
- 39: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 40: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 41: 暗褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 42: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 43: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 44: 暗灰黄色(2S3V4)の粗粒砂
- 45: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 46: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 47: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂

TP+2.0m

+1.0m

0.0m

## 北区北壁



- 1: 明灰黄色(10YR6/6-10)の粗粒砂
- 2: 赤褐色(2S3V4)の粗粒砂
- 3: 赤褐色(2S3V4)の粗粒砂
- 4: 暗灰黄色(2S3V4)の粗粒砂
- 5: 赤褐色(2S3V4)の粗粒砂
- 6: 赤褐色(2S3V4)の粗粒砂
- 7: 赤褐色(2S3V4)の粗粒砂
- 8: 暗灰黄色(2S3V4)の粗粒砂
- 9: 赤褐色(2S3V4)の粗粒砂
- 10: 暗褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 11: 暗褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 12: 暗褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 13: 暗褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 14: 暗褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 15: 暗褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 16: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 17: 暗灰黄色(2S3V4)の粗粒砂
- 18: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 19: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 20: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 21: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 22: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 23: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 24: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 25: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 26: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 27: 暗灰黄色(2S3V4)の粗粒砂
- 28: 暗灰黄色(2S3V4)の粗粒砂
- 29: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂
- 30: 赤褐色(2S3V5)の粗粒砂

図4 調査区地層断面図

0 5m  
1:100

る。遺物は土師器皿1が出土した(図7)。欠損のない状態で出土したため、地鎮に使用されたのではないかと考えられる。時期は12世紀中頃である。

SE152 調査区の中央よりやや西で検出した直径1.8m、深さ1.6mの井戸である。攪乱により掘形の一部しか検出できなかったが、遺構検出面より0.5m下において曲物による井戸側が見つかった。調査終了前に深掘りを行ってTP-1.5mで底を確認した(図6)。遺物は黒色土器A類椀4が出土した(図7)。内面には粗めのヘラミガキを施す。時期は10世紀後半である。

SE136 調査区の中央付近で検出した直径1.3m、深さ0.8m以上の井戸である。残存状況は良くないが、方形縦板横棧組の井戸側を有する。遺物は土師器・東播系須恵器・瓦器・瓦質土器・中国産磁器が出土した(図7)。5は瓦器皿である。9は瓦器椀である。底部内面のヘラミガキの上に重ね焼きの痕跡が残る。11は中国産青磁碗である。出土遺物の時期は12世紀中～後半である。

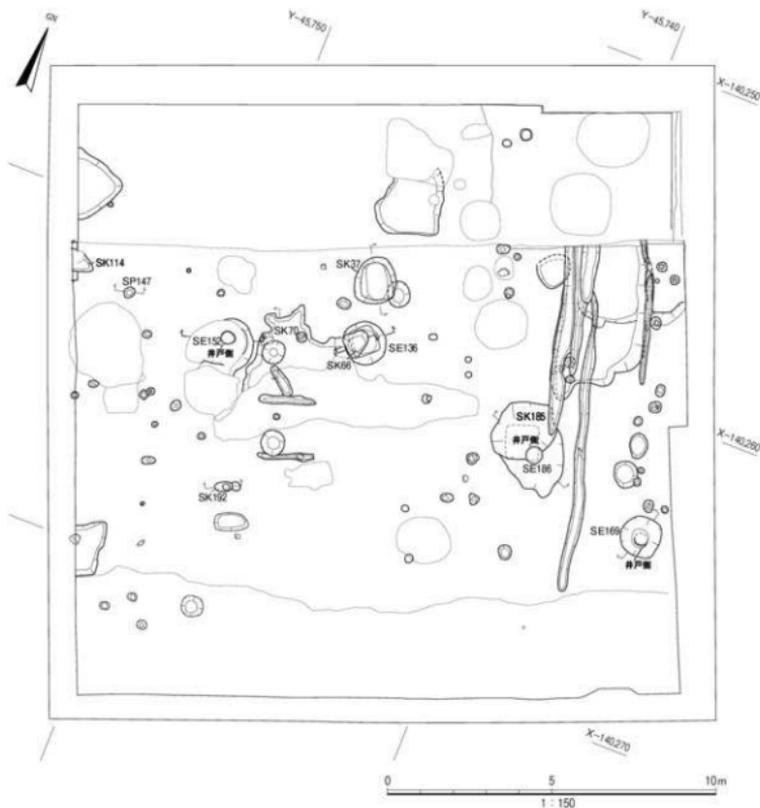


図5 平安時代の遺構平面図

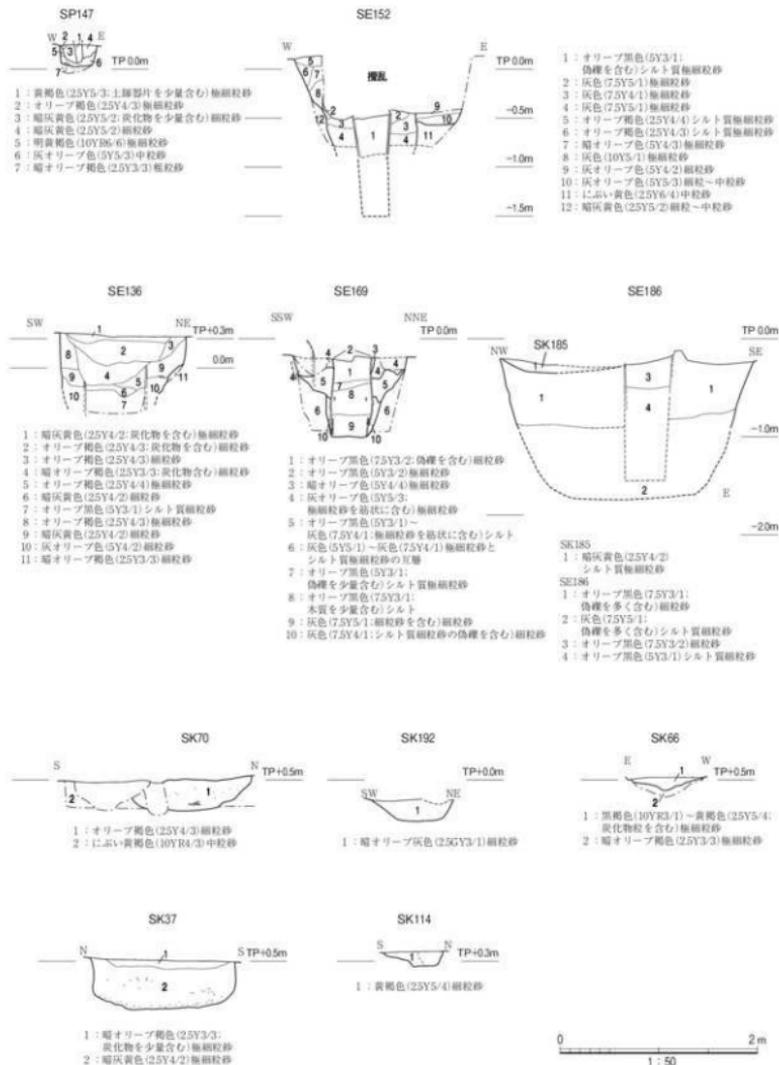


図6 平安時代の遺構断面図

SE169 調査区の南東部で検出した直径1.2m、深さ0.8mの井戸である。井戸側には上半に桶材を使用し、下半は曲物を重ねて使用している(図6)。遺物は土師器・瓦器が出土した。

SE186 調査区の東部で検出した長軸2.6m、短軸1.9m、深さ1.5mの井戸である。北西をSK185により削られている。井戸側に桶材を使用しており、籠が残っていて今回の調査で検出した桶材の中で最も残存状態が良いものであった。調査終了前に深掘りを行って底を確認した(図6)。遺物は土師器・東播系須恵器が出土した。

SK70 SE152の東側で検出した不整形な土壌である。攪乱によって南東部が削られている。遺物は土師器・中国産磁器が出土した(図7)。12は中国産白磁碗である。体部外面の高台付近には軸葉がかかっていない。時期は11世紀後半～12世紀前半である。

SK192 調査区の南西部で検出した長軸0.6m、短軸0.3m、深さ0.2mの平面形が楕円形の土壌である。遺物は土師器台付皿3がほぼ欠損のない状態で出土した(図7)。掘形底に正置した状態で検出したことから、地鎮に使用されたのではないかと考えられる。時期は11世紀後半～12世紀前半である。

SK66 SE136と重複する長軸0.9m、短軸0.7m、深さ0.1mの不整形な土壌である。遺物は土師器・瓦器・瓦質土器・国産磁器・瓦・壁土が出土した(図7)。2は土師器皿である。底部には糸切痕を残す。口縁部に煤が付着しており、灯明皿として使用したと考えられる。6・7は瓦器皿である。体部内面

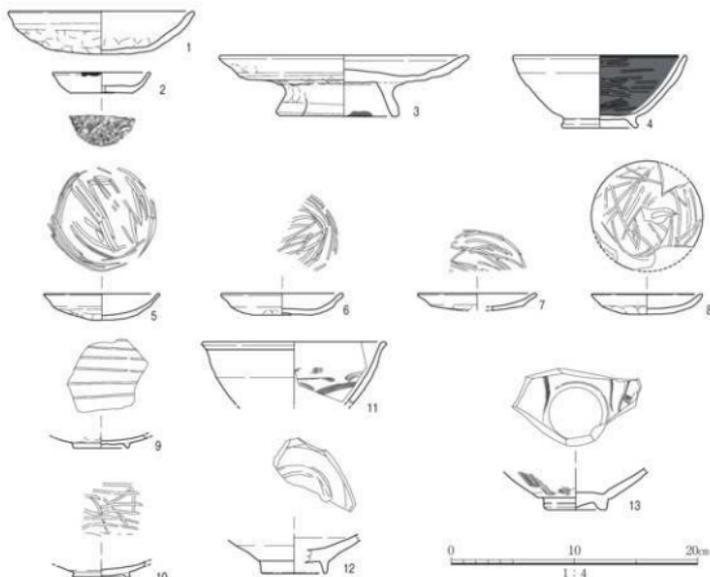


図7 平安時代の遺物実測図

SP147(1)、SE152(4)、SE136(5・9・11)、SK70(12)、SK192(3)、SK66(2・6・7・10)、SK37(13)、SK114(8)

から底部内面にかけて丁寧にヘラミガキを施す。10は瓦器碗の底部である。時期は12世紀中～後半である。

SK37 SE136の北側で検出した長軸1.4m、短軸1.2m、深さ0.5mの平面形が楕円形の土壇である。遺物は土師器・須恵器・東播系須恵器・瓦器・瓦質土器・国産陶器・中国産磁器が出土した(図7)。13は中国産青磁碗である。同安窯の製品であり、体部外面に柳描文、体部内面に劃花文を施す。高台は削り出しによって作られている。時期は12世紀中～後半である。

SK114 調査区の西端で検出した長軸0.6m以上、短軸0.7m、深さ0.15mの平面形が楕円形の土壇である。遺物は瓦器皿8が出土した(図7)。内面には乱雑にヘラミガキを施す。時期は12世紀後半である。

SK185 SE186の北半でこれと重複する、長軸2.3m、短軸1.7m、深さ0.1mの平面形が楕円形の土壇である。遺物は出土しなかった。

#### b. 鎌倉時代(図8～16)

第4層上面で検出した、12世紀末～13世紀後半の遺構・遺物を報告する。

SA268 調査区の中央付近から東にかけて検出した長さ8.3m以上の北で83°西に振る掘立柱塼である。東側が調査区外へ続く可能性がある。SP73・90・89・86の4つの柱穴で構成されている。柱穴の規模は直径0.3～0.5m、深さ0.1～0.2mである。それぞれの柱穴の間隔は2.8～3.2mである(図9)。SP73からは土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・中国産磁器が出土した(図13)。14は土師器皿である。27は中国産青磁碗である。龍泉窯系であると考えられる。

SA269 調査区の西部で検出した長さ4.8m以上の北から67°東に振る掘立柱塼である。南西側の調査区外に続く可能性がある。SP116・117・127の3つの柱穴で構成されている。柱穴の間隔は1.6～1.8mであると考えられるが、SP117とSP127の間に推定される柱穴の位置には攪乱が存在しており、削平された可能性がある。柱穴の規模は直径0.3～0.4m、深さ0.1～0.2mである。遺物はSP116から瓦器・瓦質土器、SP117から土師器が出土した。

SP221 調査区の北西端で検出した直径0.2m、深さ0.1mの柱穴である。遺物は土師器・東播系須恵器・瓦器が出土した(図13)。21は東播系須恵器のこね鉢である。

SP112 調査区の中央付近で検出した長軸0.5m、短軸0.4m、深さ0.1mの平面形が楕円形の柱穴である。柱穴の北東端に0.2m大の石を据えている。遺物は土師器・瓦器・中国産磁器が出土した(図13)。15・16は土師器皿である。16はコースター形の皿である。22は瓦器皿である。23は和泉型瓦器碗である。

SP115 調査区の西端で検出した長軸0.4m、短軸0.2m、深さ0.1mの土壇である。遺物は土師器皿17が出土した(図13)。底部内面を上にした状態で検出しており、地鎖に使用された可能性がある。

SP85 調査区の東端で検出した直径0.2m、深さ0.1mの柱穴である。遺物は瓦器が出土した(図13)。24は和泉型瓦器碗である。

SP134 調査区の中央よりやや南で検出した直径0.3m、深さ0.1mの柱穴である。中央に約0.1mの石を据える。遺物は土師器が出土した(図13)。18は土師器皿である。

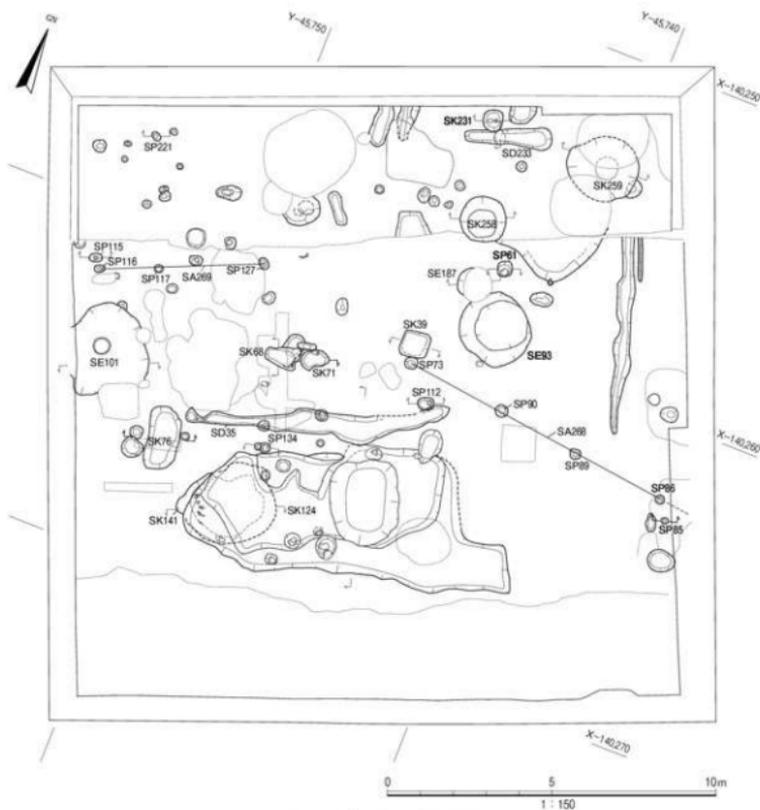


図8 鎌倉時代の遺構平面図

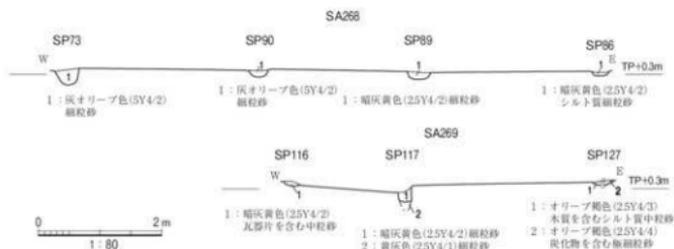


図9 掘立柱塼SA268・269断面図

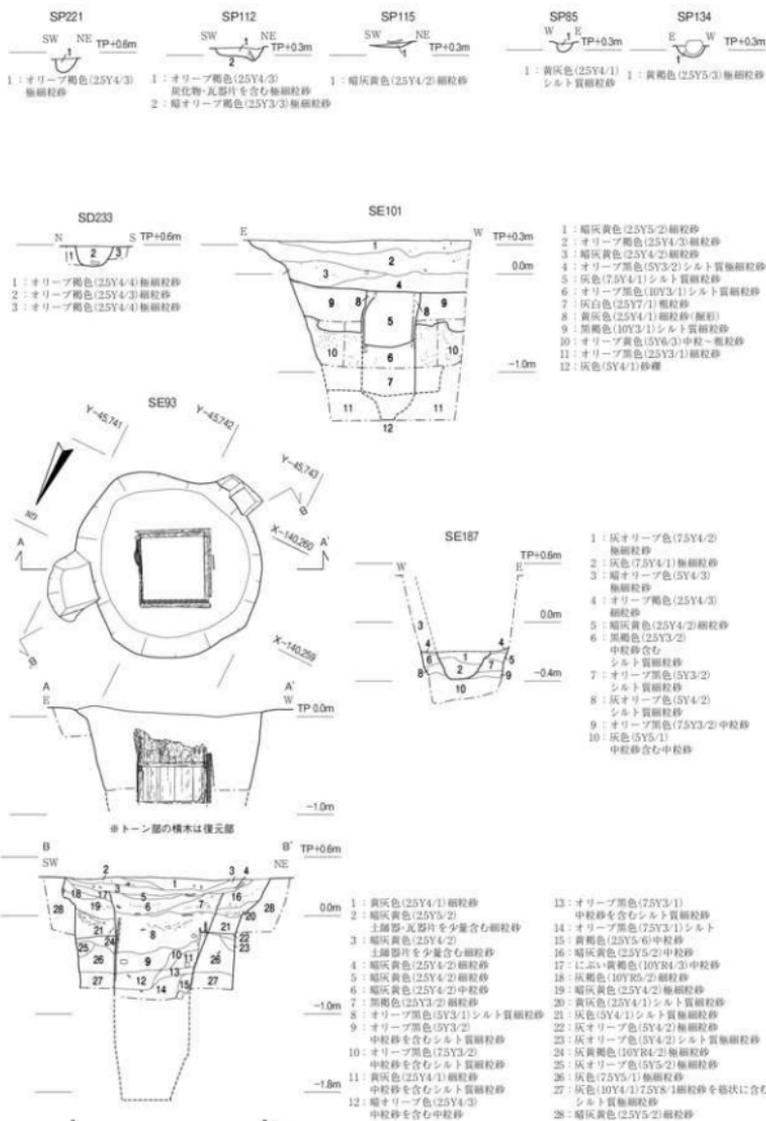


図10 鎌倉時代の遺構断面図(1)

SP61 調査区の中央付近よりやや北部で検出した一辺0.5m、深さ0.4mの平面形が隅丸方形の柱穴である。柱穴の南東部に石を据えている。遺物は土師器・瓦器が出土した(図16)。89は和泉型瓦器碗である。90は瓦器羽釜である。

SD233 調査区の北端で検出した長さ2.6m、幅0.4~0.7m、深さ0.2mの溝である。遺物は土師器・瓦器が出土した(図13)。26は椀型瓦器碗である。底部内面には斜格子状にヘラミガキを施す。

SD35 調査区の中央付近で検出した長さ7.8m、幅0.8m、深さ0.1mの溝である。遺物は土師器・瓦器・瓦質土器が出土した(図13)。19は欠損のない状態で出土した土師器皿である。20は土師器甕の底部分と考えられる。9世紀に属し、混入品と考えられる。25は和泉型瓦器碗である。

SE101 調査区の西端で検出した長軸2.8m、短軸2.5m以上、深さ1.8mの平面形が楕円形の井戸である。井戸側に桶材が使用されている。調査終了前に深掘りを行って底を確認した(図10)。遺物は土師器・東播系須恵器・瓦器・瓦質土器・国産陶器・中国産磁器・瓦が出土した(図14)。37は東播系須恵器甕である。全体が被熱によりにぶい褐色に変色している。45は中国産青磁碗である。

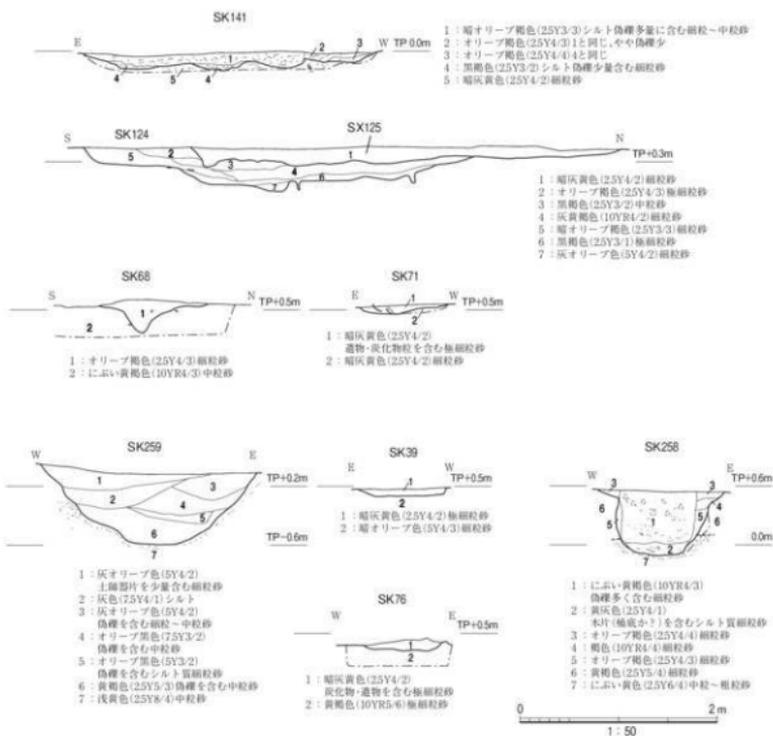


図11 鎌倉時代の遺構断面図(2)

SE187 調査区の北部で検出した井戸である。第3層上面の遺構により上部の大半が削られている。検出した井戸の底部付近では腐食した曲物と考えられる木質を確認したため井戸とみているが、今回の調査で検出している他の井戸に比べ底が浅く、別の用途の遺構である可能性もある。遺物は土師器・東播系須恵器・瓦器・銅銭が出土した(図14)。

28・29は土師器皿である。40は和泉型瓦器碗である。体部内面には口縁に対して平行にヘラミガキを施す。48・49は元豊通寶である。48は真書体、49は篆書体で書かれており、49は全体的に文字がつぶれて読みにくくなっている。

SE93 SE187の東側で検出した直径2.0m、深さ1.7mの井戸である。方形縦板横棧組の井戸側を有する。調査終了前に深掘りを行って底を確認した(図10)。遺物は土師器・黒色土器・東播系須恵器・瓦器・瓦質土器・中国産磁器・木製品が出土した(図14)。30~35は土師器皿である。36は黒色土器A類碗で、口縁部外面にも炭素が吸着している。時期は10世紀後半で混入品と考えられる。38は東播系須恵器こ

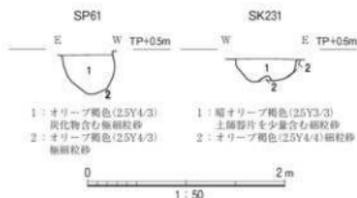


図12 鎌倉時代の遺構断面図(3)

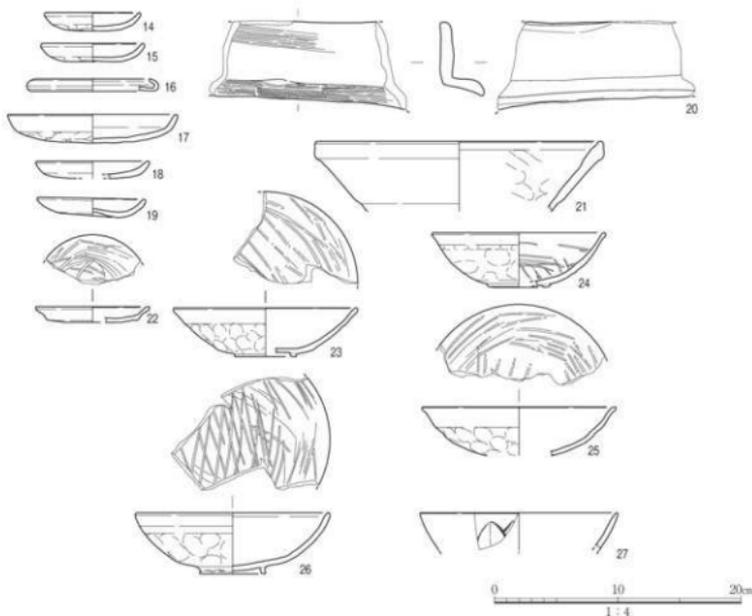


図13 鎌倉時代の遺構出土遺物実測図(1)

SP73(14・27), SP221(21), SP112(15・16・22・23), SP115(17), SP85(24), SP134(18), SD233(26), SD35(19・20・25)

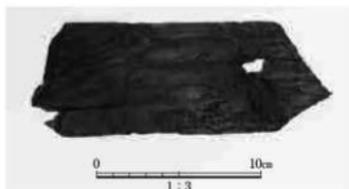


写真1 SE93出土木製品

ね鉢である。39は瓦器皿である。41～43は瓦器椀である。42・43の高台は粘土紐を貼付けて軽く整形しただけのものである。44は瓦質土器甕である。46・47は中国産白磁碗である。井戸備材ではないかと考えられる板材や角材の他に長さ18.0cm以上、幅7.0cm、厚さ0.3cmの頭部を尖らせた形状の不明木製品が出土した(写真1)。出土遺物の時期は12世紀中～13世紀

後半で、多くが13世紀代のものである。

SK141 調査区の南部で検出した直軸2.8m、短軸2.3m、深さ0.2mの平面形が楕円形の土壌である。若干時期が新しい他の遺構により上部の大部分が切られており、切り込んでいる遺構の下面から残存部分を検出した。遺物は土師器・東播系須恵器・瓦器・陶器・中国産磁器・石製品が出土した(図15・16)。60は東播系須恵器こね鉢である。62・63は瓦器椀である。62は和泉型瓦器椀であり、底部内面に平行にヘラミガキを施したのち、体部内面にヘラミガキを施す。63は瓦器椀の底部であり、底部内

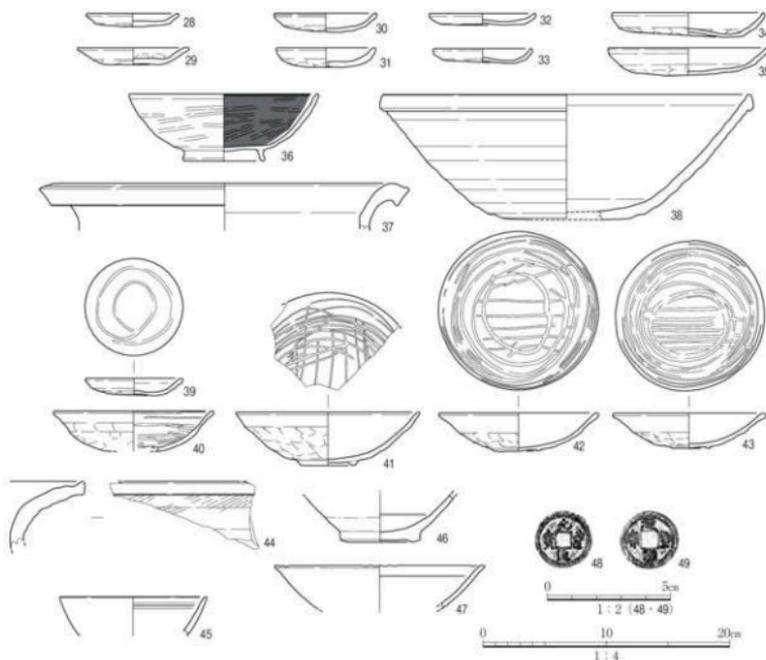


図14 鎌倉時代の遺構出土遺物実測図(2)

SE101(37・45)、SE187(28・29・40・48・49)、SE93(30・36・38・39・41・44・46・47)

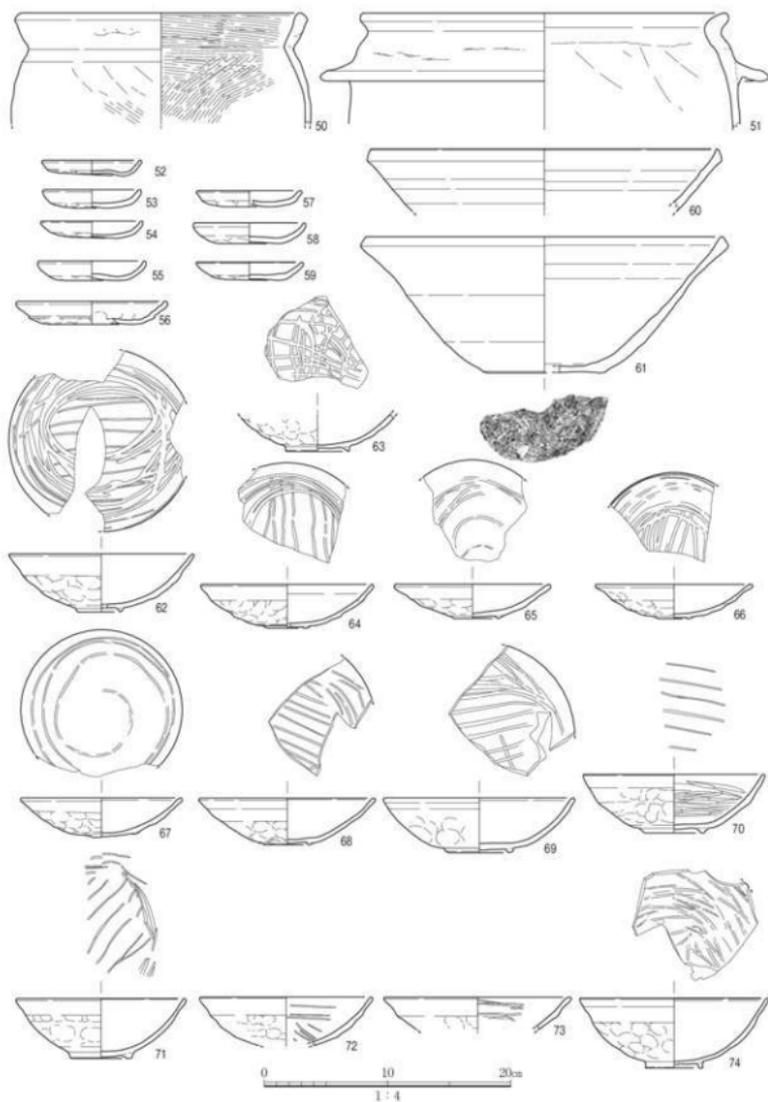


図15 鎌倉時代の遺構出土土物実測図(3)

SK141(60・62・63)、SK124(50・52-56・64-67)、SK68(68)、SK71(51・57・61・69-71)、  
SK259(72)、SK39(58・73)、SK76(59・74)

面には乱雑にヘラミガキを施す。82は中国産白磁碗である。85は砥石である。1面のみ使用痕がみられる。

SK124 調査区の南部で検出した長軸9.8m、短軸3.8m、深さ0.5mの平面形が不整形な土壌である。土師器・東播系須恵器・瓦器・瓦質土器・国産陶器・中国産磁器・石製品が出土した(図15・16)。52~56は土師器皿である。50は古代の土師器甕で、混入品であろう。64~67は和泉型瓦器甕である。いずれの瓦器甕も高台は粘土紐を貼付けて軽く整形しただけのものである。65・67の瓦器甕は焼成不良である。77・78は常滑焼甕である。口縁部付近や肩部に自然釉が付着している。78は頭部に粘土の接合痕が見られる。79・80は中国産青磁碗である。どちらも龍泉窯系と考えられる。81は中国産青磁皿

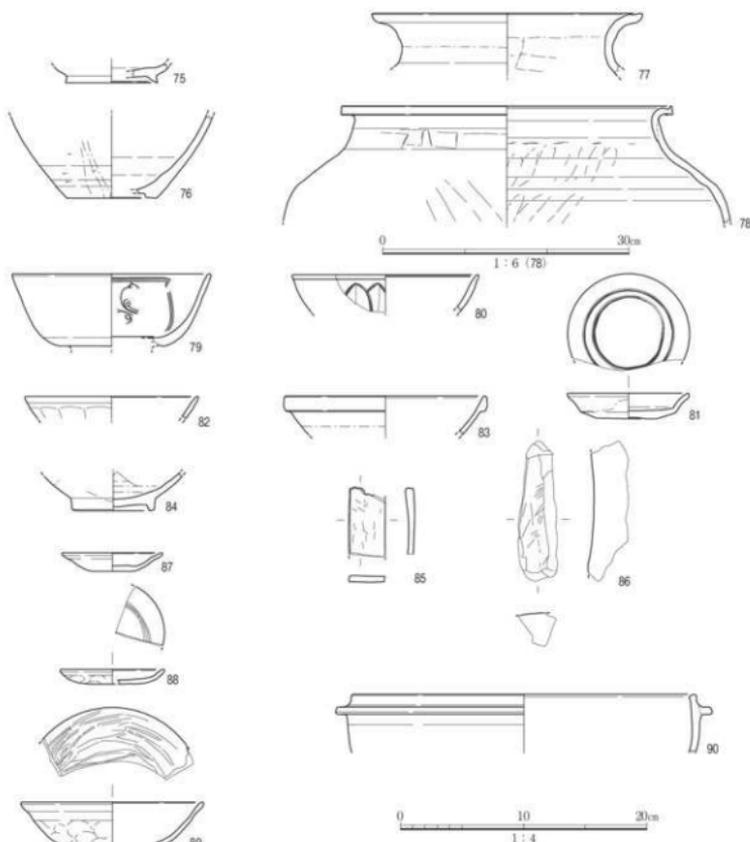


図16 鎌倉時代の遺構出土遺物実測図(4)

SK141(82・85)、SK124(77~81・83・86)、SK71(76)、SK39(75)、SK258(84)、SP61(89・90)、SK231(87・88)

である。同安窯系と考えられる。体部の底部付近は釉薬がかかっていない。83は中国産白磁碗である。86は砥石である。自然石を使用しており、1面のみ使用痕を確認した。以上の遺物はおおむね13世紀中～後半代に属し、土師器甕は混入品であろう。

**SK68** 調査区の中央付近で検出した長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.4mの平面形が不整形な土壇である。遺物は土師器・瓦器が出土した(図15)。68は和泉型瓦器椀である。高台は粘土紐を貼付けて軽く整形しただけのものである。

**SK71** SK68の東側で検出した長軸0.8m、短軸0.6m、深さ0.1mの平面形が楕円形の土壇である。遺物は土師器・東播系須恵器・瓦器・陶器が出土した(図15・16)。51は土師器羽釜である。57は土師器皿である。61は東播系須恵器こね鉢である。底部には糸切痕を残す。外面口縁部付近には自然釉が付着し、重ね焼きの痕跡がみられる。69～71は和泉型瓦器椀である。76は中国産陶器壺であろう。出土遺物の時期は12世紀末～13世紀前半である。

**SK259** 調査区の北端で検出した長軸2.1m、短軸1.9m、深さ0.8mの平面形が楕円形の土壇である。遺構の北部と南部をSE265とSE267により削られている。遺物は土師器・東播系須恵器・瓦器・国産陶器が出土した(図15)。72は和泉型瓦器椀である。体部内面の口縁部付近は水平に、底部付近は斜めにヘラミガキを施す。

**SK39** 調査区の中央付近で検出した一辺0.8m、深さ0.1mの平面形が隅丸方形の土壇である。遺物は土師器・瓦器・緑釉陶器が出土した(図15・16)。58は土師器皿である。75は緑釉陶器碗である。9世紀末～10世紀初頭であり、混入品である。73は和泉型瓦器椀である。

**SK258** 調査区の北部で検出した直径1.3m、深さ0.7mの土壇である。遺物は土師器・瓦器・中国産磁器が出土した(図16)。84は中国産白磁碗である。底部内面に釉剥ぎ痕を有する。

**SK76** 調査区の南西部で検出した長軸1.8m、短軸0.8m、深さ0.1mの平面形が隅丸方形の土壇である。遺物は土師器・東播系須恵器・瓦器・瓦質土器が出土した(図15)。59は土師器皿である。74は和泉型瓦器椀である。

**SK231** 調査区の北端で検出した直径0.6m、深さ0.2mの土壇である。遺物は土師器・東播系須恵器・瓦器・灰釉陶器が出土した(図16)。87は土師器皿である。88は瓦器皿である。底部内面に圏線状ヘラミガキを施す。

#### c. 室町時代～豊臣期(図17～19)

第4層上面で検出した15世紀～17世紀初頭の遺構・遺物を報告する。

**SB273** 調査区の西端で検出した掘立柱建物で、方位は北で19°西に振る。SP223・271・102・270・272の5つの柱穴で構成されている。3間×1間以上の掘立柱建物であり、南西側の調査区外に広がると考えられる。建物内には梁間に並行するSP272が存在している。柱穴の規模は直径0.2～0.5m、深さ0.1～0.2mである。柱穴の間隔は桁行が1.9～2.3m、梁間が2.1mであり、全ての柱穴には0.2～0.5mの石を据える。遺物はSP102から土師器・瓦器が出土した。出土遺物から時期を絞り込むことが出来ないが、後述するSD181と方位がそろったことから、この段階の遺構と判断した。

**SA275** 調査区の中央付近からやや西部で検出した長さ11.1m以上の北から35°東に振る掘立柱塼

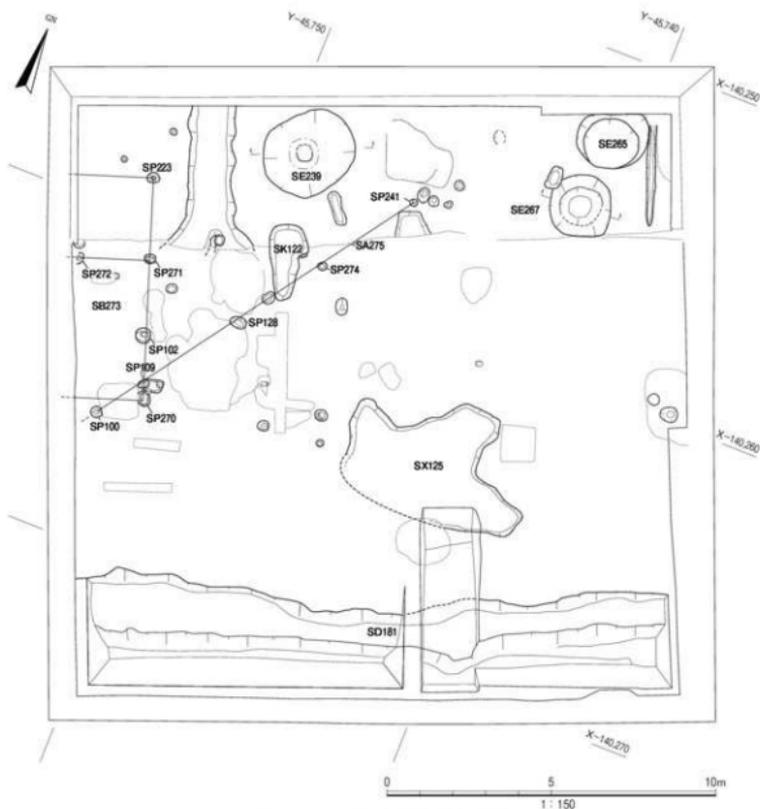


図17 室町時代～豊臣期の遺構平面図

である。南西側の調査区外に続く可能性がある。SP100・109・128・274・241の5つの柱穴で構成される。それぞれの柱穴の間隔は1.5～1.7mであると考えられるが、SP109とSP128、SP128とSP274、SP274とSP241の間は推定される柱穴の位置に攪乱やSK122が存在しているため削られてなくなっている可能性がある。柱穴の規模は直径0.3～0.5m、深さ0.1～0.2mである。遺物はSP109から土師器が出土した。この段階のものとしたが、SB273やSD181と方位がずれることから、古い段階の遺構の可能性もある。

**SD181** 調査区の南東端で調査区に並行するように検出した幅4.5m以上、深さ1.1mの溝である。反転復元すると溝の幅は9.0m以上となり、かなり規模の大きな溝である。溝の埋土は底部に水成層が存在しないことから、空堀のようなものであった可能性がある。埋土の下から4分の3程度は北から南に向かって傾斜する堆積であることから北側から土を入れていき、ある程度溝が埋まった段階で残

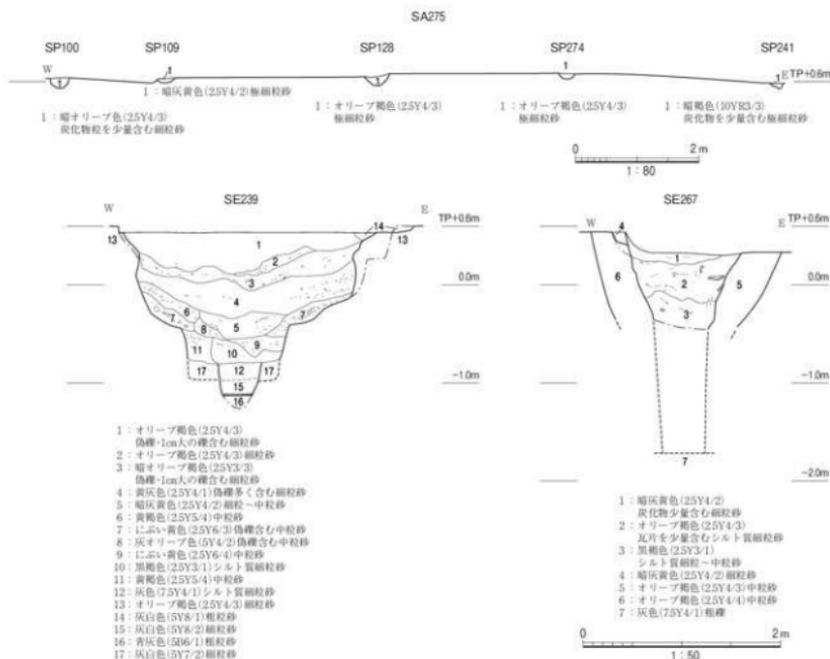


図18 室町時代～豊臣期の遺構断面図

りを整地するように水平に埋めていったと推定される(図4、西壁断面図33・34・36～44・46～48層)。今回の調査地は宮原遺跡の遺跡範囲の南端に位置することから、この溝は宮原荘を継承する中世後期の集落を区画する溝であった可能性が考えられる。

遺物は土師器・東播系須恵器・瓦器・瓦質土器・国産陶器・中国産磁器・瓦・石製品・木製品が出土した(図19)。97は備前焼の大甕で、時期は15世紀中頃である。98は肥前陶器皿である。底部内面の4箇所に胎土目を有する。時期は豊臣後期であり、出土した遺物の中で最も新しいものであることから、SD181はこのころまでに埋め立てられたと考えられる。99は中国産青磁碗である。遺物の時期は14世紀末である。101・102は丸瓦である。102は凸面に縄叩き痕を残す古代瓦である。103・104は平瓦である。103は胎土に石粒を多く含む古代瓦である。凸面にわずかながら縄叩き痕を残す。狭端の凹面側を斜めに削り、穴をあけている。104は凹面にコビキ痕を残す。105は瓦製品であり、扁平で分厚いことから塼である可能性がある。木製品は曲物の底板や漆椀などが出土したが、図化する遺物はなかった。

SE267 調査区の北端で検出した直径1.8m、深さ2.3mの井戸である。井戸側材は確認できなかったが、掘形埋土と井戸側内埋土を確認した(図18)。遺物は木製品が出土したが図化する遺物はなかった。前段階のSK259を切っていることからこの段階の遺構に含めた。

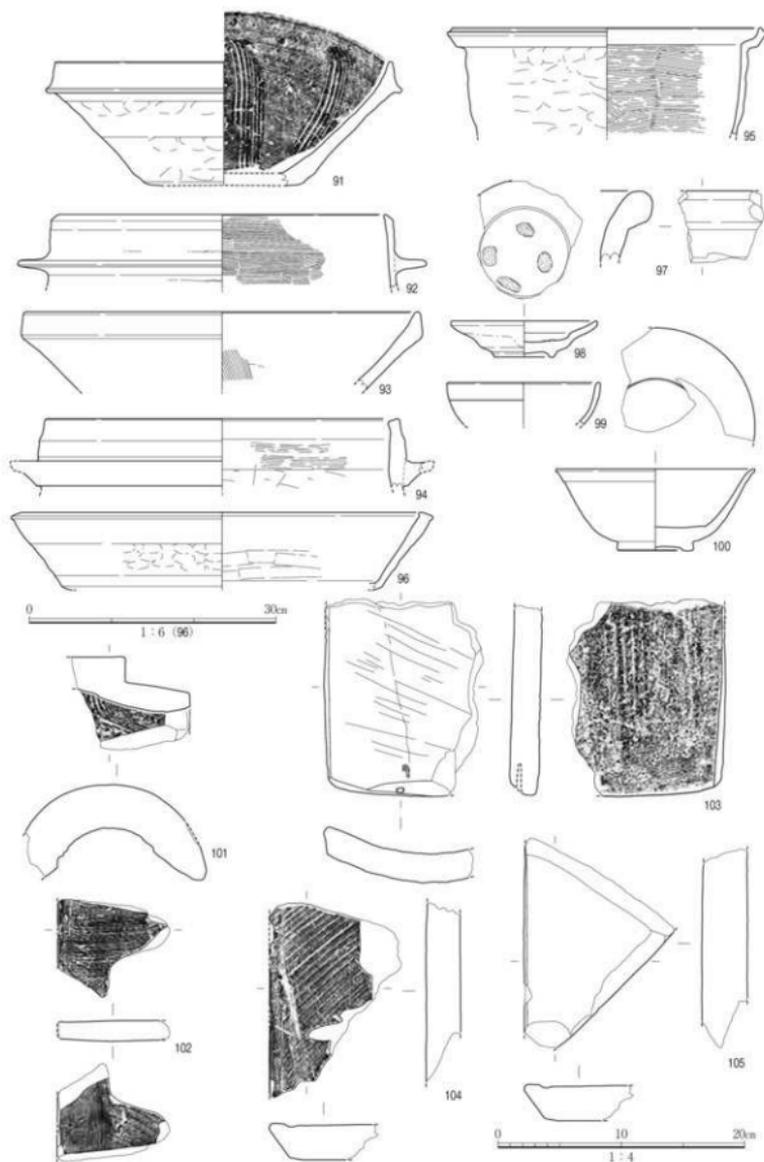


図19 室町時代後半～豊臣期の遺構出土遺物実測図

SD181(97～99・101～105)、SE265(91)、SE239(92・93)、SX125(94・96・100)

SE265 調査区の北端で検出した直径2.2mの井戸である。15世紀代の備前焼播鉢91が出土した(図19)。

SE239 調査区の北西端で検出した直径2.7m、深さ1.8mの井戸である。遺構の検出面よりTP-0.8mで曲物を検出した。断面の観察によると、TP-0.6mまで大きく播鉢状に掘り込まれていることから井戸側を抜き取った際に開いた穴を埋めたのではないかと考えられる(図18、1~8層)。調査終了前に深掘りを行って底を確認した。遺物は土師器・東播系須恵器・瓦器・瓦質土器が出土した(図19)。92-93は瓦質土器である。92は土師質焼成に近い羽釜であり、内面は全体にヨコハケを施している。93は播鉢である。出土遺物の時期は15世紀前半である。

SX125 調査区の中央よりやや南東部で検出した深さ0.2mの平面形が不整形な落込みである。13世紀の遺構であるSK124を切り込んでいる。遺物は土師器・瓦質土器・中国産磁器が出土した(図19)。94は土師器羽釜である。95は瓦質土器鍋である。体部内面にはヨコハケを施す。96は瓦質土器鉢である。100は中国産白磁碗である。出土遺物の時期は100を除き16世紀代である。

### 3) まとめ

今回の調査では多数の柱穴や土壇の他に、井戸や掘立柱建物、塀、溝などを検出した。

平安時代では10世紀の井戸であるSE152のほか、11~12世紀の土師器を埋納した遺構SP147、SK192を検出した。これらより、当地には「宮原」の地名が文献に登場する13世紀前葉よりも前から集落が存在していたことが分かった。

鎌倉時代の宮原荘に関する推定できる遺構としてSA268・269のほか多数の柱穴・土壇・井戸が挙げられる。塀は方位を意識したものがなく、同じ方位をとるものはない。出土遺物・遺構ともに当該期のものが最も多い。

室町時代になると遺物の出土量は減少し、当地において集落はいったん衰退するようである。15世紀にはいって再び遺構・遺物が多く確認されるようになる。これ以降、豊臣期にかけての宮原荘に関する遺構としては、SB273やSD181が挙げられる。SD181は幅4.5m以上で反転復元すると幅9.0m以上となり、かなり規模の大きな溝である。この溝は調査区の南西端に位置し、今回の調査区も宮原遺跡の南端に位置していることから、宮原荘を継承した中世後期の集落を区画する溝である可能性が考えられる。SB273とSD181は並行するように存在し、2つの遺構は現在の土地に沿って設定した調査区と並行している。明治時代の地図で見られる周辺地区の条里地割は北に対して西に振っていることからこれらの遺構も条里地割に沿って構築された可能性が考えられる。

このほか平安~室町時代にかけて多数の井戸を検出した。これらは全て井戸側などの施設を有するものであった。井戸側は方形縦板横棧組のしっかりとした構造のものや桶材や曲物を転用したのもなど多種多様なものが存在している。ほとんどの井戸はTP-1.5m付近の湧水する灰色粗礫層まで掘り込まれていた。

以上のように、今回の調査でも中世の遺構を多数検出し、集落が当地まで広がっていることが分かった。今後の近辺の調査成果の蓄積により宮原荘の詳細な姿が判明していくことが期待される。

## 参考文献

脇田修ほか1986、「大阪府の地名1」 株式会社平凡社

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1996、「新大阪森ビル建築に伴う発掘調査(MH94-2)」:「平成6年度大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.153-165

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「宮原遺跡における発掘調査(MH06-2)報告書:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2006)」、pp.297-303

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011、「宮原遺跡発掘調査(MH09-3)」:「平成21年度大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.61-66

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2018、「淀川区宮原一丁目7-5・7-6における建設工事に伴う宮原遺跡発掘調査(MH16-1)報告書」:「大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2016)」、pp.541-547

調査区西壁地層断面  
(北から)



調査区北壁断面  
(東から)



南区第5層上面遺構完掘  
状況(北西から)





北区第5層上面遺構  
完掘状況(北東から)



南区第5層上面井戸  
SE152曲物検出状況  
(北西から)



北区第4層上面井戸  
SE239断面(南東から)





南区第5層上面土壌SK192  
土師器台付皿出土状況  
(北東から)



南区第5層上面井戸  
SE186插材検出状況  
(南西から)



南区第4層上面井戸  
SE93方形縦板横棧組  
井戸側検出状況  
(北西から)





淀川区宮原一丁目 2-42・2-43における建設工事に伴う  
宮原遺跡発掘調査(MH20-2)報告書

調査個所 大阪市淀川区宮原1丁目2-42・2-43  
調査面積 60㎡  
調査期間 令和2年10月1日～7日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋 工、大庭重信



## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

地層の遺存状態が良好な東壁で主に地層の観察・記録を行った。調査地の現標高はTP+0.9m前後であり、現代盛土の第0層以下、TP-1.7mまでの地層を第1～7層に大別した。

第1層：第1a層と第1b層に区分される。

第1a層は黒褐色ないし暗灰黄色礫混り細粒砂質シルトからなる近世の作土層で、層厚は10cmある。本層下面で耕作溝および土壌を検出した。

第1b層は褐色極細粒砂質シルトからなる作土層で、耕作にかかわる溝の埋土としてのみ確認した。15世紀頃の瓦質土器・瓦器・土師器を含む。

第2層：にぶい黄褐色極細粒～細粒砂を主体とする氾濫堆積層で、調査区南半で検出したNR05を最大60cm埋積し、北半でも10cmの厚さで分布する。最も新しい時期の遺物として8・9世紀頃の土師器が出土した。

第3層：にぶい黄褐色礫混りシルト質細粒～中粒砂からなる古土壌で、層厚は10cm前後ある。小型丸底壺1(図6)などの古墳時代前期の土師器を少量含む。上面でNR05を検出した。

第4層：明黄褐色中粒砂～礫からなる氾濫堆積層である。層厚は10～20cmある。本層より下の層準からは遺物が出土しなかった。

第5層：褐色シルト質細粒砂からなる古土壌で、層厚は5～15cmある。第3層と比べて土壌生成は弱い。

第6層：黄褐色ないしは黄灰色シルト～礫からなる氾濫堆積層である。層厚は20cmあり、南側で粗粒化する。

第7層：本層は深掘りトレンチによって確認したもので、第7a～7c層に区分される。

第7a層は有機質な黒褐色シルトからなる湿地性堆積層、第7b層は黒褐色の植物遺体薄層と細粒砂の互層、第7c層は灰白色細粒～中粒砂からなる氾濫堆積層で、氾濫から湿地化までの一連の堆積層である。層厚は第7a層が20～30cm、第7b層が60cmあり、第7c層は60cmまで確認した。

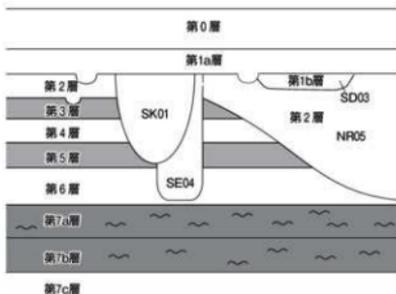


図3 地層と遺構の関係図

### ii) 遺構と遺物

調査区の東端および中央は現代の攪乱が深くまで及んでおり、調査区内のほぼ半分が現代に削平されていたが、それ以外の場所で第3層上面、第1a層下面、第1b層下面・第1b層基底面の遺構を検出した。

#### a. 第3層上面(図5左)

調査区の南半で東北東～西南西方向の自然流路NR05を検出した。調査区内では流路の北半を検出し、最大幅約3.0m、深さ0.6mを測

る。埋土は底付近に下位層を削る粗粒堆積物(図4-13・14層)が見られ、その上にシルト質極細粒砂層が薄く堆積したのち(同12層)、極細粒～細粒砂の互層(同11層)で全体が覆われている。出土遺物は古墳時代前期の土師器、古墳時代中・後期の須恵器の小片とともに、8・9世紀頃の土師器鉢2(図6)が出土し、この頃に埋没したと考えられる。なお、NR05が形成された基盤層の第3～6層は氾濫堆積と土壤生成が反復しており、氾濫堆積層の第6層は南側で粗粒化することから、調査区の南側にNR05に先行する自然流路があり、古墳時代前期頃から8・9世紀までの間、調査地は氾濫の影響を受ける川辺付近にあったことが推測される。

b. 第1a層下面および第1b層下面・基底面(図5右)

第1a層を除去した段階で遺構検出作業を行い、土壌・井戸・耕作にかかわる溝などを検出した。

第2層上位の第1b層基底面の遺構は調査区東端で検出したSE04がある。現代の攪乱によって上部が削平され、北部をSK01に切られているが、遺構の帰属層準は埋土の特徴と出土遺物の年代から判断した。掘形の直径は約1.0m、深さは0.8mあり、大半が調査区外に及ぶ。遺構の下半で曲物を一部確認し、井戸側に曲物を用いた井戸と判断した。調査区壁面内の井戸側内部を精査したところ、底付近から黒色土器A類椀3・4が出土した(図6)。口径は3が14.8cm、4が15.7cmを測り、平安京Ⅱ新に位置づけられる10世紀前葉のものであろう[古代の土器研究会編1993]。

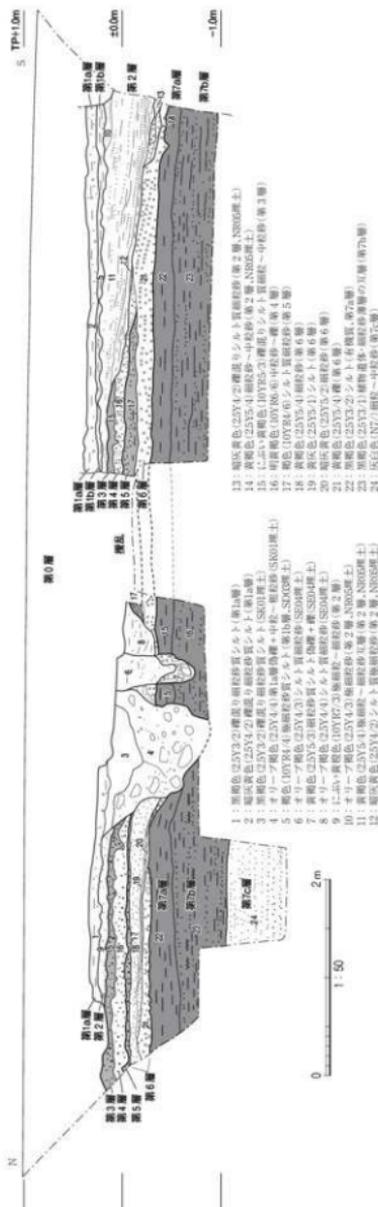


図4 調査区東端地層断面図

第1b層下面の遺構は第1a層を埋土とするSD03がある。調査区の東端で検出した南北溝で、長さ9.0m以上、幅0.2m、深さ0.1m未満である。中世後半の瓦器・瓦質土器・土師器の小片が出土した。埋土の特徴から耕作にかかわる溝と考えられる。

埋土の特徴から第1a層下面の遺構と判断したものはSK01・SD02および東西・南北方向の耕作溝である。SK01は東半が調査区外におよぶが、直径1.2m程の円形土壇と考えられ、深さは1.1mある。第1a層に由来する偽罫で埋められており、埋土から19世紀代の陶磁器片が出土した。SD02は幅0.3m、

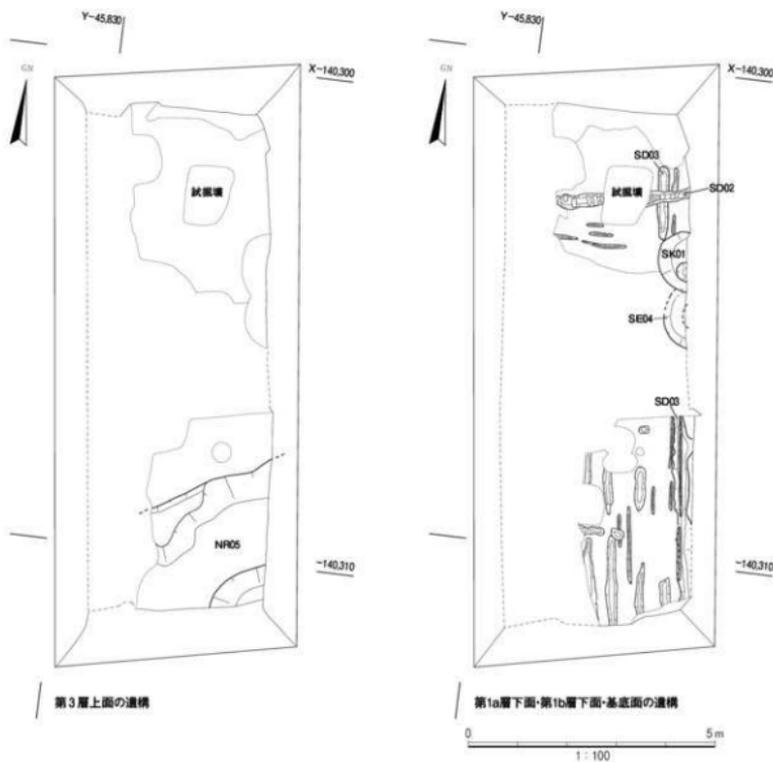


図5 遺構平面図

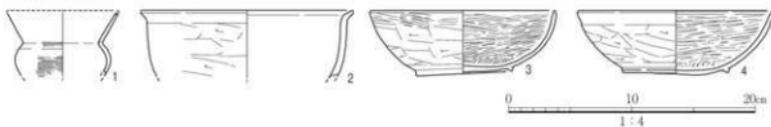


図6 出土遺物実測図

第3層(1)、NR05(2)、SE04(3・4)

深さ0.1mの東西溝で、底で溝掘削時の鋤痕を検出した。他の耕作溝よりは規模が大きいと同様の耕作にかかわる溝であろう。

### 3) まとめ

今回の調査では、検出遺構・遺物は少なかったものの、いくつかの新知見が得られた。

第1に、8・9世紀頃に埋没した自然流路の一部を検出し、古墳時代前期頃から古代にかけて、調査地の南側が流路域であったことが推測できるようになった。

第2に、出土量が少ないものの、第3層から古墳時代前期の土師器が出土し、東の西淡路1丁目所在遺跡や崇禪寺遺跡で検出されている古墳時代前期集落の活動域が宮原遺跡の範囲にも及んでいたことが判明した。

第3に、黒色土器が出土した10世紀前葉の井戸SE04は、中世宮原庄の前身となる集落形成の初期に当たるものである。MH94-2次調査やMH20-1次調査のように12世紀以前の遺構は遺跡範囲の南端で多く検出されており、流路埋没後、今回の調査地を含む以南に古い時期の集落が広がっていた可能性がある。また、中世後半以降、調査地は耕作地となっており、これは東側のMH94-2次調査地と共通する。東側のMH20-1次調査地で見つかっている15・16世紀の集落は今回の調査地まで及んでいなかったと考えられる。

### 参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1996、『平成6年度大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

大阪市文化財協会2021、『淀川区宮原一丁目2-5・2-23・2-58における建設工事に伴う宮原遺跡発掘調査(MH20-1)報告書』

古代の土器研究会編1993、『古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ』



調査区東壁地層断面  
(南西から)



調査区東壁深掘り地層断面  
(西から)



SE04断面曲物検出状況  
(西から)





第3層上面遺構検出状況  
(北から)



第1a層下面遺構検出状況  
(北から)



NR05完掘状況  
(西から)





東淀川区西淡路二丁目10-5・23・24における建設工事に伴う  
西淡路1丁目所在遺跡発掘調査(WA20-1)報告書

調査個所 大阪市東淀川区西淡路2丁目10-5・23・24  
調査面積 約112㎡  
調査期間 令和2年11月30日～12月14日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋工、平田洋司

## 1) 調査に至る経緯と経過

西淡路1丁目所在遺跡は淀川右岸のデルタ地帯に立地する。本遺跡の南東には弥生時代末～古墳時代前期の成果が目目される崇禪寺遺跡があり、西には平安時代～中世後半の集落・農業生産関連遺構が見つかった宮原遺跡がある。調査地は遺跡北東部に位置し、周辺では多くの調査が行われている。西に隣接するWA18-1次調査地では、弥生時代末～古墳時代前期の遺構群と奈良時代の遺構群が検出された[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2020]。西80mのWA12-1次調査地では、中世の井戸・土壇のほか、弥生時代末～古墳時代前期、飛鳥～奈良時代の遺物が検出された[大阪文化財研究所2014]。また、南西100mのWA06-1次調査地では、奈良時代の土壇、中世の溜池遺構のほか、古墳時代前期の遺物が確認された[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008]。

大阪市教育委員会が令和2年10月15日に行った試掘調査では、地表下約0.65m以下の深さで中世以前の遺構面および遺物包含層が検出されたため、本格的な調査を実施することとなった。調査は令和2年11月30日から開始した。大阪市教育委員会の指示に基づき、敷地東部に東西7m、南北16mの調査区を設定した。重機による掘削は後述の第4層上面までとし、以下はすべて人力による掘削とした。途中、適宜に遺構検出・掘削作業、記録作業を行いながら調査をすすめた。厚い氾濫堆積層である第6層以下は、3方向にトレンチを設定し、遺物の採取、堆積状況の観察を行った。12月14日に現地におけるすべての作業を完了した。

なお、本報告で用いた基準点は街区基準点を用いたトラバース測量で測位し、方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。また、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で $TP \pm \text{〇m}$ と記した。

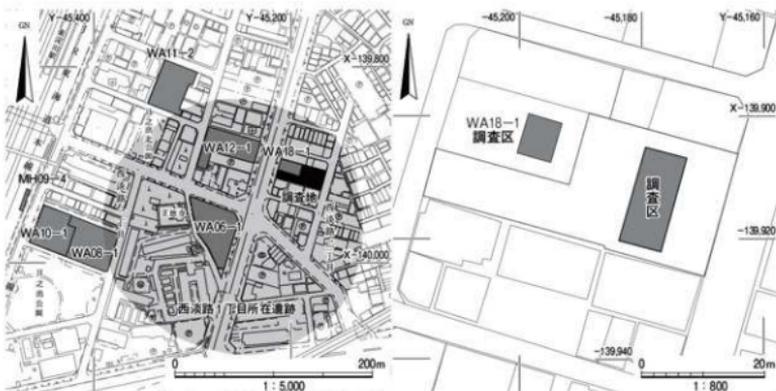


図1 調査地位置図

図2 調査区配置図

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・図版1)

現地表の標高はTP+2.2~2.3mとほぼ平坦である。部分的な掘削も含め、調査では現地表以下2.5mまでの地層を確認し、第1層~第6層に分類した。

第1層：現代盛土および攪乱層で、層厚は20~40cmである。

第2層：黒色(2.5Y2/2)粗粒砂混りシルト質細粒砂からなる近世以降の作土層で、層厚は最大10cmである。

第3層：暗褐色(10YR3/3)粗粒砂混りシルト質細粒砂からなる作土層で、層厚は10~30cmである。本層まで重機によって掘削したため詳細は不明であるが、平安時代までの遺物を多く含む。

第4層：にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂混り細粒砂からなる古土壌で、後述の第6層上面の自然流路NR601の埋土である第5層が土壌化したものである。調査地北側には遺存しない。層厚10cmで南側にかけて厚くなる。また、NR601より南側では踏込みや植物根等による攪乱が著しい。奈良時代中葉~後葉を主体とし、平安時代までの土器を含む。本層上面および本層の掘削中に奈良~平安時代の遺構を確認した。

第5層：北北西から南東方向の自然流路であるNR601の埋土で、にぶい黄褐色(10YR5/4)細礫、褐色(7.5YR4/4)細粒砂などからなる。もっとも厚い部分で層厚は80cmである。埋土の一部はNR601よりも南側にオーバーフローして堆積している。第5層の上部は土壌化しており、第4層として区分した。本層からは古墳時代中期~奈良時代中葉までの遺物が出土した。

第6層：褐色(7.5YR4/4)細粒砂、黄褐色(10YR5/6)細礫などからなる氾濫堆積層で、層厚は200cm以上である。調査区東北部にて植物遺体を介在しつつ、北東から南西に下がる堆積が認められ、南西に向かうにつれて傾斜は緩くなり、また上部ほど傾斜は緩い。水流の方向は北東からと考えられる。弥生時代末~古墳時代前期の土器が出土した。最上部からは、奈良時代の土器が出土しているが、上層からの混入の可能性もある。

### ii) 遺構と遺物(図4~10・図版2・3)

#### a. 第6層出土の遺物

氾濫堆積層である第6層からは以下の遺物が出土した。

1は壺で、頸部に櫛描直線文を施す。弥生時代後期中葉以降の近江・山城系のものである。2は二重口縁の壺である。3は脚台を有する小型の鉢で、外面にタタキを施す。4は鉢である。5は小型丸底壺である。6は鼓形器台で、山陰系のものである。7~10は甕で、7・8は口縁端部をつまみ上げる庄内期のもの、9・10は端部が肥厚する布留期のものである。11は古備系の甕である。

上記のように、第6層は弥生時代末~古墳時代前期の土器が主体である。ただし、最上部付近からは奈良時代の土師器・須恵器片も出土しており、NR601の遺物の混入でなければ、本層の形成の終了は奈良時代まで下る可能性がある。

なお、西のWA18-1次調査で弥生時代末から古墳時代前期の遺構が見つかったが、その標高はTP+1.2m付近である。今回の調査では、深い部分でTP-0.5mまで掘削したが、当該地表面には

地層と遺構の関係図

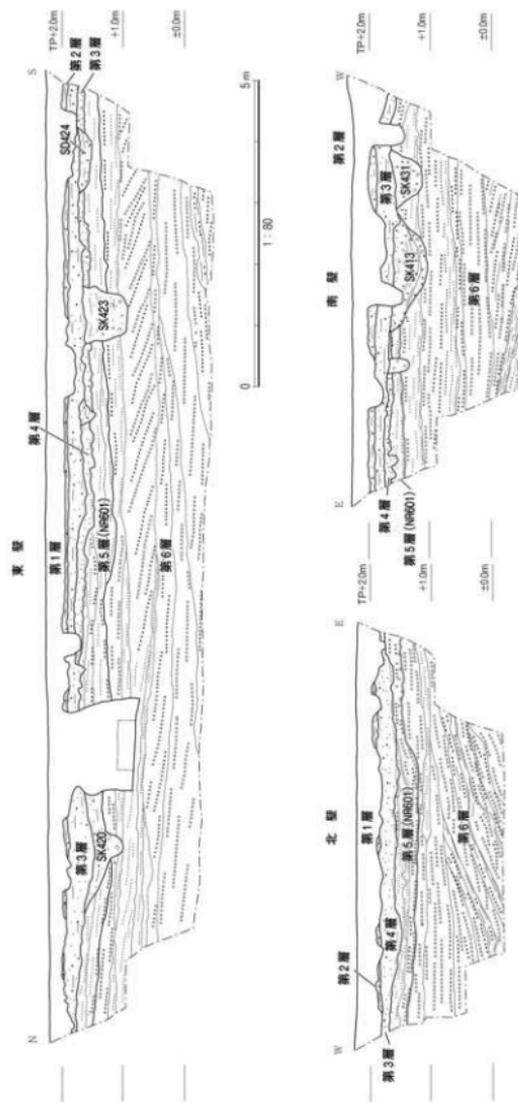


図3 地層断面図

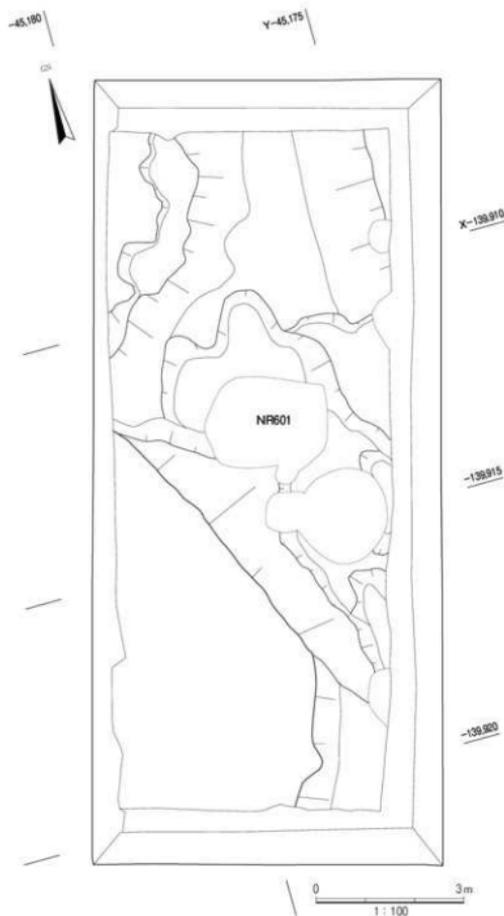


図4 第6層上面の遺構

墨書がある。18～20は須恵器で、18は杯蓋、19・20は杯である。18・19は飛鳥時代、20は奈良時代のものである。21はイダゴ壺である。

以上のことから、古い遺物がどれだけ本層の年代を示しているかは不明であるが、第6層形成後、奈良時代中葉にかけてNR601が形成され、埋没したと考えられる。

#### c. 第4層の遺構と遺物

第4層はNR601の埋土の上部が土壌化したものである。第4層上面および掘削中、第5層上面に至るまでに多くの遺構を検出した。壁面の観察ではその多くは第4層上面のものであるが、検出面と遺

違っていない。両調査地の標高には少なくとも1.7mの差があるといえる。

#### b. 第6層上面の遺構と遺物

NR601 北北西から南南東に向けて流れ、北西から南東へと蛇行する自然流路である。第6層の堆積で生じた窪みの部分にさらなる氾濫の際などに流路が形成されたものであろう。埋土である第5層は第6層に連続して堆積しているが、幅8.0mほどが第6層を削り込んでいる。攻撃斜面となる調査地中央付近が0.8mともっとも深く、粗粒な堆積となっている。また、調査地南部には本流路からオーバーフローしたと考えられる砂礫が堆積している。埋土の上部は細粒砂主体で、土壌化している。

古墳時代中期～奈良時代中葉までの土師器・須恵器が出土した。12～17は土師器である。12・13は外反する口縁を有する甕で、古墳時代中期、5世紀代のものであろう。14は杯である。15～17は鉢で、16の底面には

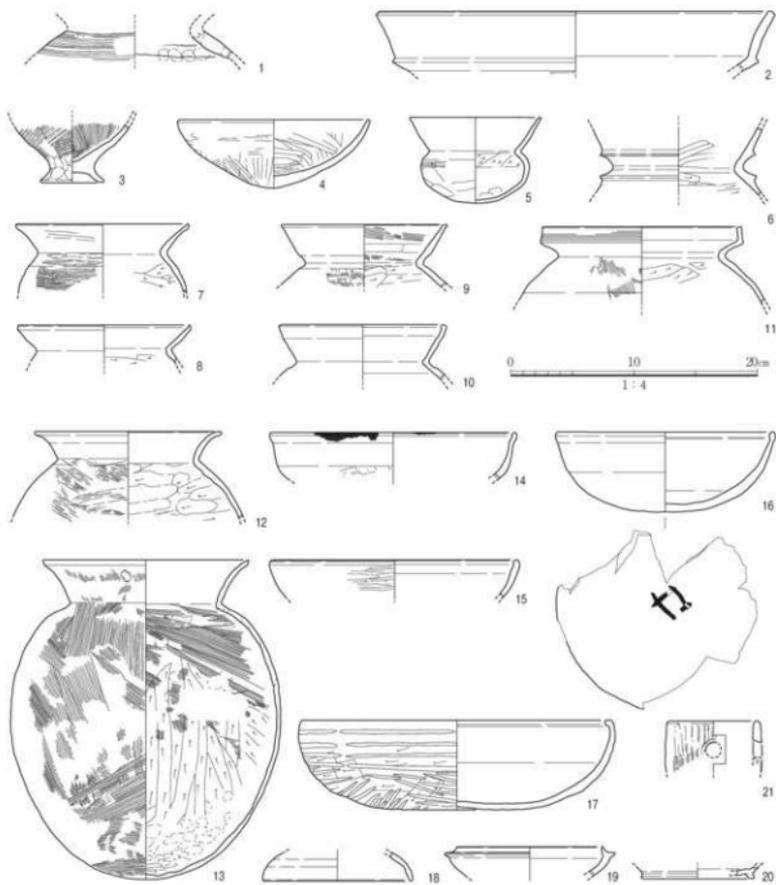


図5 出土遺物実測図(1)  
第6層(1~10)、NR601(12~21)

物の新旧が整合せず、本来第4層上面で認識すべき遺構であるが、第4層掘削中および除去後に確認できた遺構もあり、第4層の遺構として一括して記す。遺構の時期は奈良時代中葉～後葉にかけてのものが多く、平安時代のものも存在する。ただし、埋土は似通っており、出土遺物の少ない遺構は遺物が直接時期を示さない可能性がある。以下、おもなものを記す。

SD424 調査区南部で検出した幅1.7m、深さ0.5mの北西-南東方向の溝である。北西に向かって低くなる。第4層除去時点で検出したが、壁面の観察によって第4層上面の遺構であることが判明した。埋土は下部がシルト偽礫を含む加工時形成層、上部が粗粒砂主体の機能時堆積層である。土師器・

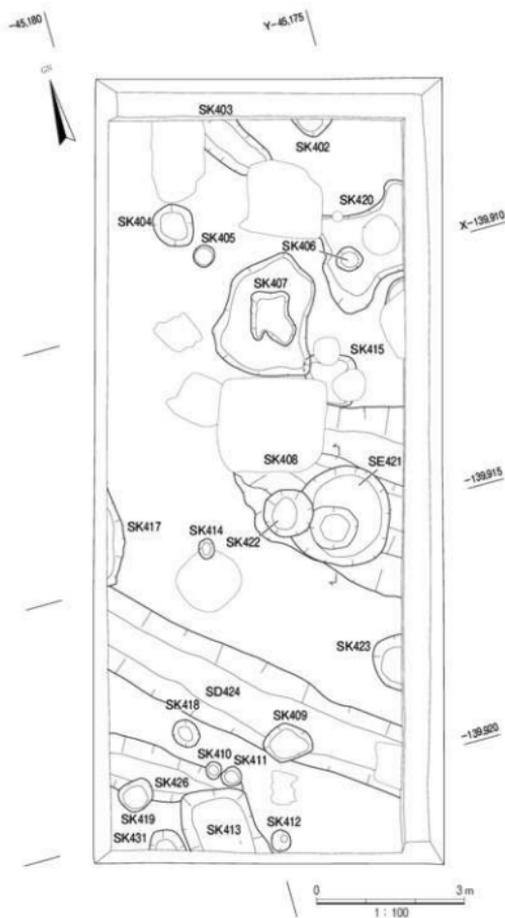


図6 第4層の遺構

下部で認められた。廃棄に際し、抜取りのためか、掘形上部は壊され、その後、埋戻されている。土師器・須恵器・製塩土器など8世紀後葉の遺物が出土した。28～34は土師器である。28～30は杯で、28は掘形を壊した際の埋戻し土から出土した完形品である。30は底部片で、外面に3条の墨痕がある。後述する第4層出土の80と同じ表現であろう。文字か意匠であるかは判別できない。31は皿、32は鉢である。33・34は甕で、33はほぼ完形である。35～39は須恵器で、35～37は蓋、38は杯、39は壺である。40・41は製塩土器である。

SK422 SE421の西に位置する直径0.6mの平面形が円形の土壇で、深さは0.6mである。遺構の重

須恵器片が出土した。22・23は甕で庄内～布留期のものであるが、他に奈良時代と見られる土師器杯片が出土しており、遺構の時期は奈良時代以降と考えられる。

SK418 調査区南部で検出した直径0.5m、深さ0.4mの平面形が円形の土壇である。埋土は埋戻し土である。土師器椀24が出土したが、遺物はこの1点のみである。

SK426 調査区南部で検出した土壇である。南北1.4m、東西2.0m以上で、調査区外に続く。深さは0.3mである。遺構の重複からSK413・419に先行する。埋土はシルト偽礫を含む細粒～粗粒砂である。土師器・須恵器・土錘など奈良時代中葉以降の遺物が出土した。25は土師器杯、26は須恵器杯蓋、27は管状土錘である。

SE421 調査区中央部で検出した。直径2.0m、深さ1.3mの平面形が円形の井戸である。井戸枠は直径0.6mである、腐食しているが桶状の木質遺物が最

複関係からSE421より新しい。土師器・須恵器片が出土したが、遺物量は多くない。42・43は土師器で、42は杯、43は脚部に面取りを施した高杯である。

SK410 調査区南部に位置する直径0.3m、深さ0.2mの平面形が円形の土壌である。第4層上面で検出した。埋土はシルト偽礫を含む埋戻し土である。土師器・製塩土器が出土したが、遺物は少量である。44は土師器杯である。

SK411 SK410の東に位置する。直径0.4mの平面形が円形の土壌で、深さは0.1mと浅い。土師器・製塩土器が出土したが、遺物は少量である。45は口径が大きい淡路・播磨系の製塩土器である。

SK403 調査区北端に位置する幅0.9m、長さ1.8m以上の溝状の土壌である。深さは0.2mと浅い。奈良時代中葉～後葉の土師器・須恵器片が出土した。46・47は土師器甕で、47は完形である。

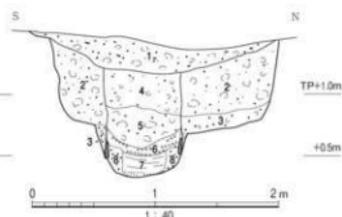
SK407 調査区北部に位置する東西2.0m、南北2.5mの平面形が不整形の土壌で、深さは0.2mである。第4層の上面で検出した。埋土はシルト偽礫を少量含む細雑泥りの粗粒砂である。奈良時代中葉～後葉の土師器・須恵器片が出土した。48～50は土師器で、48は杯、49は高杯、50は羽釜である。51・52は須恵器で、51は杯蓋、52は杯である。53・54は製塩土器で、53は淡路・播磨系のものである。55は軽石で、使用のためか全体に磨滅している。

SK413 調査区南部で検出した東西1.5m、南北1.2m以上の土壌である。第4層の上面で検出した際は一回り小さく認識していたが、壁面の観察によって復元した。深さは0.6mで、埋土は下部付近にシルトの自然堆積層があるが、多くは偽礫を多く含む粗粒砂混りの細粒～中粒砂で、上部には炭を含む。土師器・須恵器・製塩土器が出土した。56は土師器杯、57は須恵器杯Bである。58は製塩土器である。

SK419 調査区西南部で検出した直径0.7mの平面形が円形で、深さは0.3mの土壌である。第4層の上面で検出した。埋土は偽礫を含む細粒～中粒砂である。土師器・須恵器片が出土した。59は土師器杯である。60・61は須恵器杯である。

SK420 調査区東北部に位置する南北2.7m、東西2.0m以上の平面形が不整形な土壌である。深さは0.5mである。奈良時代中葉を主とする土師器・須恵器片が出土した。62・63は土師器で、62は皿、63は把手付の鍋である。64～66は須恵器で、64は杯蓋、65は杯B、66は甕である。

SK408 調査区中央部、第4層の上面で検出した。東西4.0m以上、南北4.0mで、NR601の最上部の窪みに堆積したものであろう。深さは0.2mである。土師器・須恵器・製塩土器が出土した。67～70は土師器である。67は椀で、奈良時代末葉～平安時代初葉のものであろう。68は皿もしくは高杯である。69は土師器蓋で、内・外面ともに暗文を施す。須恵器に近い硬質の焼成である。70は甕である。71～73は須恵器で、71は杯蓋、72・73は杯である。74・75は製塩土器である。



- 1 : 炭・細粒砂偽礫含む褐色(10YR4/4)細粒～粗粒砂
- 2 : 細粒砂偽礫多く含む褐色(10YR4/4)細粒～粗粒砂
- 3 : 細粒砂偽礫少量含むオリーブ褐色(2.5Y4/6)粗粒砂
- 4 : 細粒砂偽礫少量含む暗褐色(10YR3/4)細粒～粗粒砂
- 5 : 細粒砂偽礫多く含む暗褐色(10YR3/4)細粒～粗粒砂
- 6 : オリーブ褐色(2.5Y4/6)細礫
- 7 : 黒褐色(2.5Y3/2)シルト(上部)～細粒砂(下部)
- 8 : 暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂

図7 SE421断面図

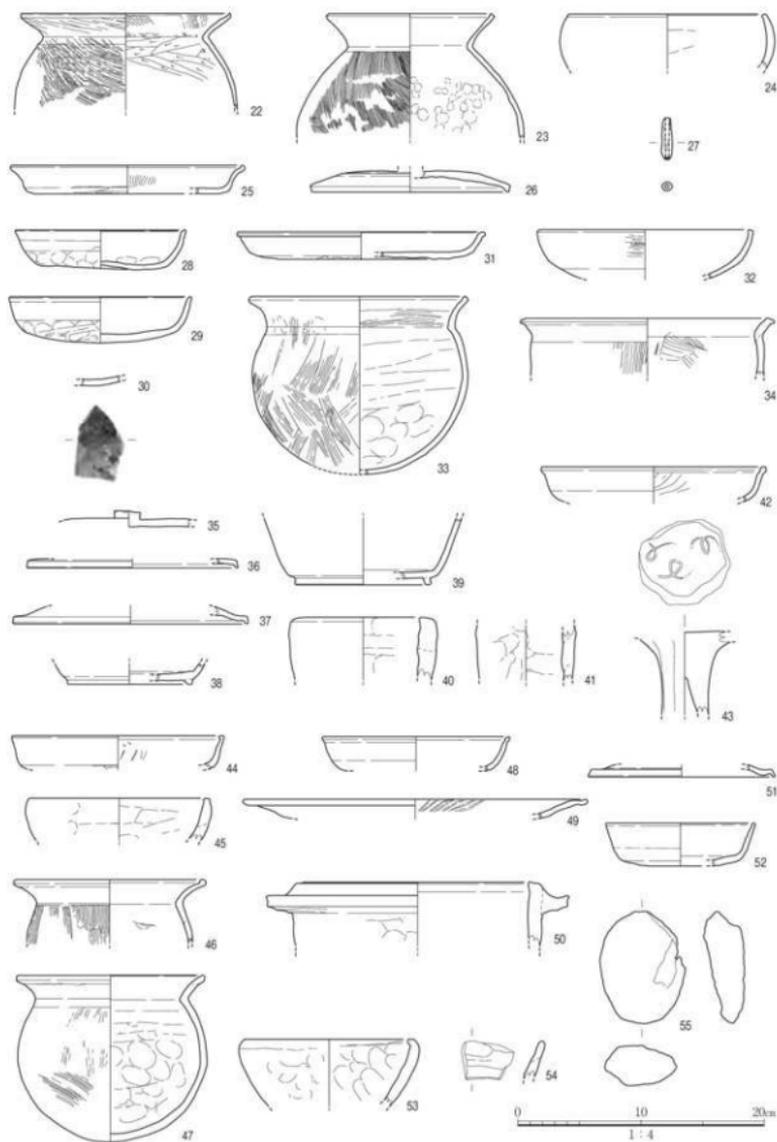


图8 出土器物实测图(2)

SD424(22·23), SK418(24), SK426(25~27), SE421(28~41), SK422(42·43), SK410(44), SK411(45), SK403(46·47), SK407(48~55)

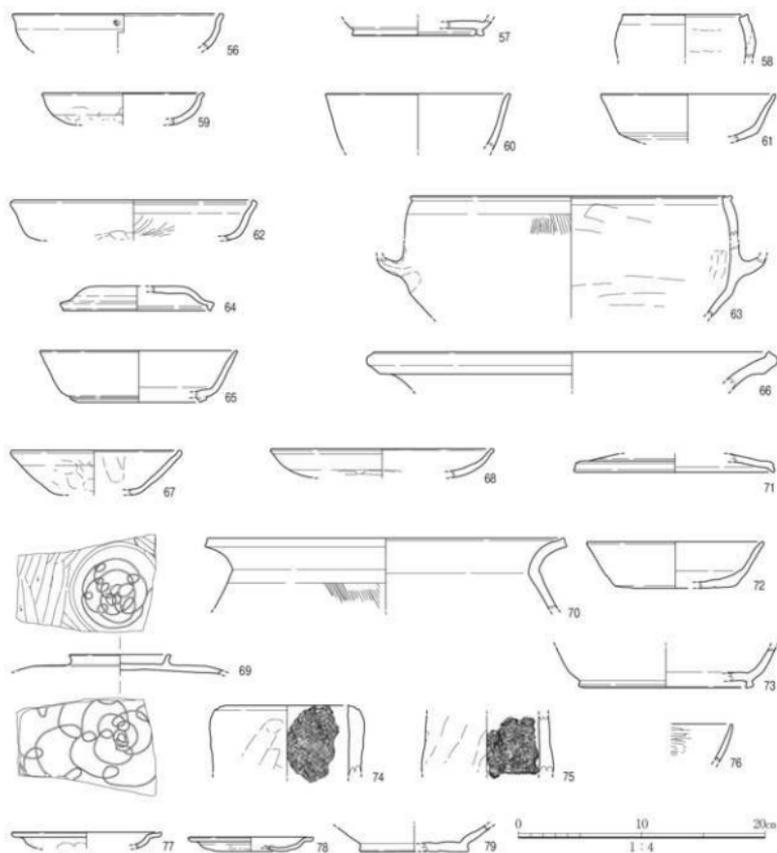


図9 出土遺物実測図(3)

SK413(56-58)、SK419(59-61)、SK420(62-66)、SK408(67-75)、SK423(76)、SK415(77)、SK405(78-79)

**SK423** 調査区南部で検出した直径1.0mの平面形が円形の土壇で、深さは0.2mである。土師器・須恵器・黒色土器が出土した。76は黒色土器A類の椀で内面にミガキを密に有する。奈良時代末葉～平安時代初頭のものであろう。

**SK415** 調査区中央部で検出した土壇である。直径1.0mの平面形が円形で、深さは0.3mである。埋土は偽礫を多く含む埋戻し土である。土師器片が出土したが、少量である。77は土師器で、いわゆる「て」字口縁の皿である。平安時代、10世紀中葉～後葉のものであろう。

**SK405** 調査区北部で検出した。直径0.4mの平面形が円形で、深さは0.4mである。土師器片が出土した。78は皿、79は回転台土師器皿である。

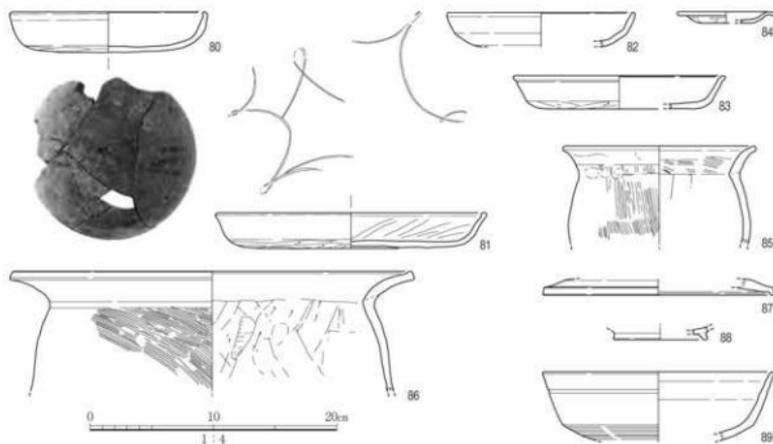


図10 出土遺物実測図(4)

第4層(80~89)

SK409 調査区南部に位置する。東西1.0m、南北0.7mで、深さは0.1mである。土師器高杯片が出土したが、細片のため時期は不明である。

SK404 調査区北部で検出した直径0.7mの平面形が円形の土贖である。深さは0.5mで、埋土は偽礫を多く含む埋戻し土である。土師器細片が出土したのみで詳細は不明である。

上記遺構群が検出された第4層からは古墳～平安時代までの遺物が出土した。遺物の主体は奈良時代中葉～後葉のものである。おもなものを記す。

80～86は土師器である。80～83は杯で、80の外面には墨書による3本1単位の縦位の線が2方向にある。84は「て」字口縁の皿である。85・86は甕である。87～89は須恵器で、87は杯蓋、88は杯B、89は鉢である。これらの遺物は、認識できなかった遺構のものも含まれている可能性がある。

### 3) まとめ

今回の調査では、多くの成果を得ることができた。西のWA18-1次調査で検出された弥生時代末～古墳時代前期の遺構群は検出されず、少なくとも当時の地表面はWA18-1次調査地に比べ、1.7m以上低いことが判明した。この地表面を埋める氾濫堆積層から出土した土器には他地域の土器が多く含まれるなど、南東の崇禪寺遺跡と同様の特徴がある。厚い氾濫堆積層によって調査地が覆われたあと、窪みを埋めるように奈良時代中葉までに小規模な流路が形成される。この流路が埋没したのちに奈良時代～平安時代の遺構が認められるようになる。氾濫を契機として、微高地が形成され、居住に適した場所となったのであろう。遺構・遺物の量も多く、集落の中心に近いと考えられる。また、墨書土器など通常の集落とは異なる性格の遺物も出土しており、西の宮原遺跡を含めた周辺の開発との関係が注目されよう。また、製塩土器の多さも注目される。

今回の調査地周辺では古代の遺構は密に存在していることが予測される。遺跡として周知されている範囲は広くないが、重要な成果が期待される地点である。現地表下浅くで古代の遺構群が検出されることもあり、今後も周辺の開発の際には注意しておく必要があろう。

#### 引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「市営日出住宅建設に伴う西淡路1丁目所在遺跡発掘調査(WA06-1)」:

『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2006)』、pp.307-313

大阪文化財研究所2014、「西淡路1丁目所在遺跡発掘調査報告Ⅲ」、pp.1-18

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2020、「東淀川区西淡路二丁目10-6における建設工事に伴う西淡路1丁目所

在遺跡発掘調査(WA18-1)」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2018)第2分冊』、pp.185

-193



北壁地層断面  
(南東から)



南壁地層断面  
(北西から)



東壁地層断面  
(南西から)





第6層上面  
(北から)



第5層上面  
(北から)



第4層上面  
(北から)





NR601北半  
(南東から)



SE421(東から)



SD424(南東から)





東淀川区下新庄三丁目162・163-1における建設工事に伴う  
下新庄遺跡D地点発掘調査(XS20-1)報告書

調査個所 大阪市東淀川区下新庄3丁目162・163-1  
調査面積 350㎡  
調査期間 令和2年7月13日～9月8日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋工、橋本稔

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は阪急千里線下新庄駅より南東へ約200mの距離にあり、すぐ北側には東海道新幹線が走る。北に神崎川、南に淀川が流れ、神崎川と淀川によって形成されたデルタ地帯にある。付近には神崎川の自然堤防上に立地する近世からの下新庄村があり、調査地はその南側に形成された後背湿地に位置する。周辺の遺跡としては、約600m東に弥生時代の上新庄遺跡、約900m南西に縄文・弥生時代の淡路遺跡がある。これまでの調査として下新庄遺跡では3地点が調査されている(図1)。

XS12-1次調査[大阪市文化財研究所2012]では中世から近世にいたる遺物包含層があり、阪急千里線下新庄駅南側のB地点のSXS18-1次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2020]では湿地から耕作地として利用される過程を確認している。C地点のXS13-2次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財研究所2015]では平安時代の池・土壌が見つかった。

本調査は、大阪市教育委員会による試掘によって、地表下約0.8mにおいて中世の土器片が確認されたため令和2年7月13日から開始し、9月8日に終了した。試掘の成果により、調査区内の攪乱の影響の少ない中央西端に南北25m、東西14mのトレンチを設定し、重機を用いて近代・現代の整地層から近代の作土層まで地表下1.0mを取り除いた。それ以下は人力により地表下2.4mに至るまで掘下げ・精査し、写真・図面等の記録を行い調査を終了した。

以下の本文等に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP+〇mと記した。また本報告で用いた国土座標(世界測地系)は事業主側により取付けを行い、図中の方位記号は座標北を示している。

なお、本文中の遺物の記述・観察は学芸員 小田木富慈美が行った。

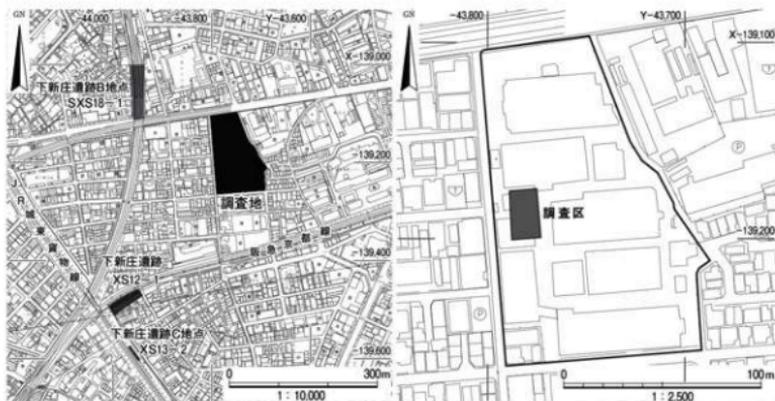


図1 調査地位置図

図2 調査区位置図

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3～5、図版1)

調査地は、工場を解体・整地した状態で、また調査地南側に汚染土壌の入替えもあり調査前の旧地形を示す正確な値ではないがTP+1.6～2.1m前後で概ね平坦な地形であった。近代・現代の地層を第0層として、地表下2.4mまでの地層を第1～7層に大別した(図3)。

以下、東壁および南壁地層の観察を基準とした各層の特徴を記す(図4・5)。

第0層：コンクリート・レンガを含む近代・現代の整地層および攪乱埋土である。層厚は70～160cmである。

第1層：第1a層・第1b層に区分される。

第1a層は、灰色(5Y4/1)シルト・細粒砂層である。洪水による堆積層と思われる(註1)。

第1b層は、オリーブ黒色(7.5Y3/1)細粒砂質シルト層で、層厚は10cmである。近代の作土層である。

第2層：灰色(7.5Y4/1)中粒砂質シルト層で、層厚は20～40cmである。近代の作土層である。

第3層：第3a層・第3b層に区分される。

第3a層は、灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質細粒砂層で、層厚は10cmである。畦畔SR305とその北側・南側に広がる近世の作土層である。肥前陶器小杯13、肥前磁器染付碗10・12、肥前青磁染付鉢15、萩焼ピラ掛小碗16、丸・平瓦、徳島産火打石、煙管吸口14、鉄製品17が出土した(図9)。13は透明釉を施す小杯である。10はいわゆるくらわんか茶碗で、12は一重網手文を施すものとみられる。これらは17世紀後半から18世紀前葉のものである。15は蛇の目円形高台を有する。17は釜または鍋の口縁部である。肥前青磁染付鉢15、萩焼ピラ掛小碗16は18世紀後半～19世紀初頭のものである。第3a層下面でSK303・304を検出した。

第3b層は、灰オリーブ色(5Y4/2)細粒砂質シルトの水成層である。図4・5には表されていないが、調査区中央部で第3a層と後述する第4a層の間で、5cm未満の層厚で分布する。第3b層上面でSK401を検出した。

第4層：第4a・4b層に区分される。第4a層は後述の畦畔SR405とその北側に分布する。第4b層はSR405南側に分布するが、第4a層の作土面より約10cm程低くなっている。

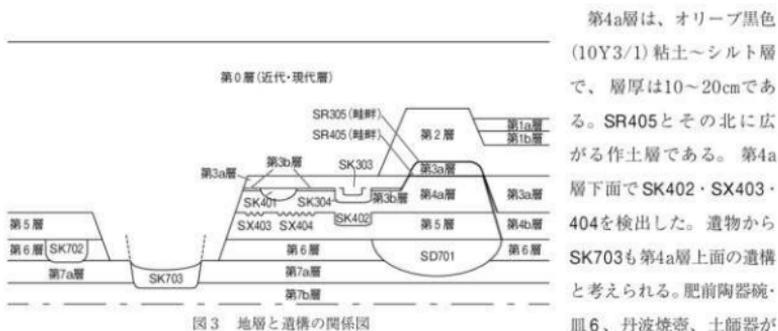
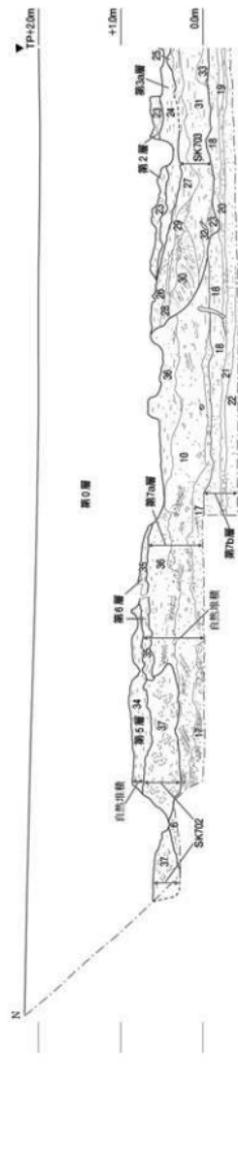
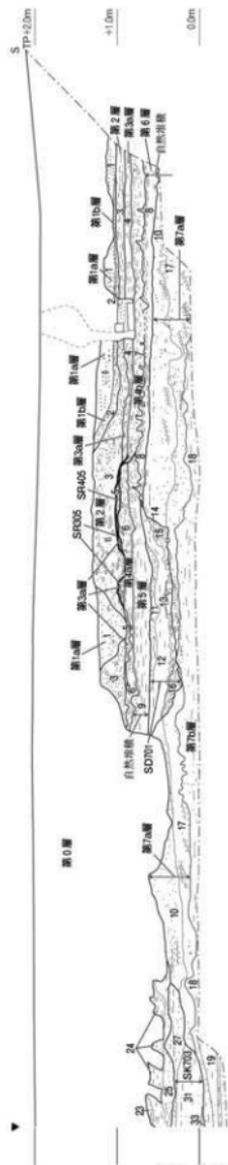


図3 地層と遺構の関係図



1. 灰色(SY4)シルト、細粒砂
2. オリーブ褐色(SY3)細粒砂質シルト(固結土)
3. 灰色(SY4)中粒砂質シルト
4. 灰キリ-ブ褐色(SY4)粘土-細粒砂質シルト
5. 灰キリ-ブ褐色(SY4)シルト-細粒砂
6. 灰キリ-ブ褐色(SY4)シルト-細粒砂
7. 灰キリ-ブ褐色(SY4)細粒砂質シルト
8. オリーブ褐色(SY3)粘土-灰色(SY4)粘土-シルト
9. 褐色(SY2)粘土
10. 褐色(SY2)シルト-中粒砂
11. 褐色(SY2)シルト-中粒砂
12. 灰キリ-ブ褐色(SY4)粘土
13. 褐色(SY2)粘土
14. 褐色(SY2)中粒砂
15. オリーブ褐色(SY4)中粒砂質シルト-質粘土
16. 褐色(SY2)中粒砂
17. 褐色(SY2)中粒砂
18. 褐色(SY4)中粒砂
19. 灰色(SY4)シルト-質細粒砂
20. 灰色(SY4)シルト-質細粒砂
21. オリーブ褐色(SY3)2層の上部を含む細粒-細粒砂
22. 灰色(SY4)中粒-細粒砂
23. 灰色(SY4)中粒-細粒砂
24. オリーブ褐色(SY4)粘土-シルト
25. オリーブ褐色(SY3)中粒砂質シルト
26. オリーブ褐色(SY3)中粒砂質シルト-粘土質細粒砂
27. オリーブ褐色(SY3)中粒砂質シルト
28. 褐色(SY4)シルト-中粒砂
29. 褐色(SY4)シルト-中粒砂
30. 褐色(SY4)シルト-中粒砂
31. オリーブ褐色(SY3)粘土質シルト-質粘土(本成)
32. 灰色(SY4)粘土質シルト-質粘土(本成)
33. オリーブ褐色(SY4)粘土質シルト(本成)
34. オリーブ褐色(SY4)粘土質シルト(本成)
35. 褐色(SY3)中粒砂質シルト(本成)
36. オリーブ褐色(SY4)中粒-中粒砂
37. オリーブ褐色(SY2)中粒砂質シルト-中粒砂

図4 東豊地層断面図



図5 南塚地層断面図

出土した。6は底部内面に胎土目痕を有する(図9)。これらは豊臣後期のものである。遺物から豊臣後期を上限とする作土層と考える。

第4b層は、灰オリーブ色(5Y4/2)細粒砂混り粘土～シルト層で、層厚は10～20cmである。SR405の南側に広がる。肥前陶器鉄絵皿7が出土した。鉄絵皿の底部外面に墨書を有する(図9)。これらは豊臣後期のものである。遺物から豊臣後期を上限とする作土層と考える。

第5層：黒色(7.5Y2/1)粘土からなる湿地の自然堆積層である。層厚は10～30cmである。東播系須恵器こね鉢1、瓦器碗2・3が出土した(図9)。1は体部片である。2・3は底部で、同一個体の可能性が高い。高台は低く断面台形を呈し、高台径は4.8cmである。これらは12世紀代のものである。上位層は豊臣後期を上限とする地層であり、中世(12世紀)から豊臣後期の間の堆積層と考える。

第6層：オリーブ黒色(5Y3/1)粘土と灰色(10Y4/1)粘土～シルト層からなる湿地の自然堆積層である。層厚は10～20cmである。上面検出遺構にSD701、SK702がある。

第7層：第7a・7b層に区分される。

第7a層は、暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト偽礫混り細粒～中粒砂を主としたラミナが観察できる。洪水による堆積層で、層厚は20～60cmである(図4、図版1中)。層中のラミナの傾きから洪水の流れの向きは南南西から北北東であることがわかる。

第7b層は、灰色(5Y4/1)シルト質極細粒砂を主とした水成層で、層厚は50cm以上である。中位のオリーブ黒色(5Y3/2)極細粒～細粒砂層では植物の茎・根を密に含み、植物が繁茂する湿地帯の様相を呈している(図4～21層、図版1中)。

## ii) 遺構と遺物

a. 第6層上面の遺構(図6・9、図版2上・中)

調査区南部にSD701、北東隅にSK702を検出した。SD701は幅2.1～2.8m、深さ0.4～0.5mの溝で北から東に74°振る。底面は西側が東側に比べてわずかに低く

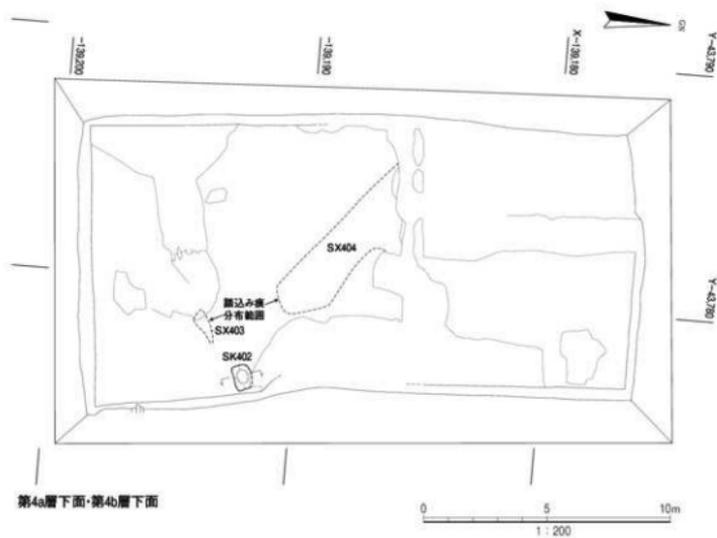
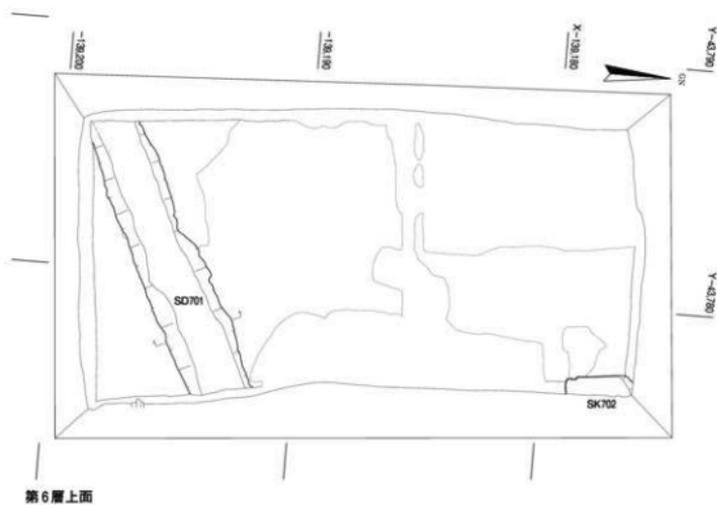


圖6 第6層上面・第4a層下面・第4b層下面遺構平面圖

なる。埋土は主に黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂混りシルト質粘土、暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂混り粘土である。土師器小皿4が出土した。器壁は薄く、器高が低い。胎土にはシャモットを含む。12~13世紀のものである。湿地に掘られた排水の溝で他方では灌漑にも利用していたと推測される。埋土は泥質で上土層(第5層)に類似し、ほぼ一連の堆積とみてよい。年代も第5層に近く、中世の遺構と推測される。

SK702は南北2.8m、東西0.8m以上、深さ0.4mである。オリーブ黒色(5Y2/2)細粒砂混りシルト偽礫を埋土とする。遺構の性格は不明であるが、SD701と同時期の遺構と考える。

b. 第4a層下面・第4b層下面の遺構(図6、図版2下)

第4a層下面ではSK402、SX403・404を検出した。

SK402は調査区南部の東壁際にあり平面形は方形の浅い土窟である。南北0.8m、東西1.0m、深さ0.2mである。中央がやや深く、オリーブ褐色(2.5Y4/4)極細粒砂質シルトを埋土とする。後述の畦畔SR405と平行した位置関係にあるが、遺構の性格は不明である。第4a層の年代から豊臣後期を上限とする遺構と考える。

SX403は牛跡による第4a層からの踏込みである。調査区南東部に南西方向に1.1m、北西方向に0.5mの楕円形の範囲で確認した。第4a層の年代から豊臣後期を上限とする遺構と考える。

SX404は牛跡による第4a層からの踏込みである。トレンチ中央付近で西北方向に長さ7.5m、帯状に幅2.0mの範囲で確認した。第4a層の年代から豊臣後期を上限とする遺構と考える。

第4b層下面の検出遺構はない。

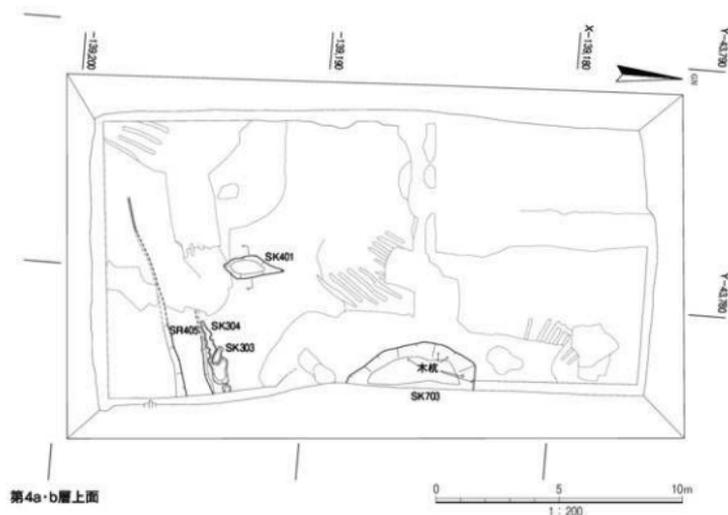


図7 第4a・b層上面遺構平面図

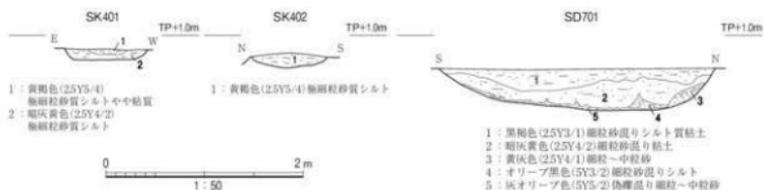


図8 遺構断面図

c. 第4a・b層上面の遺構(図7、図版3)

SR405は調査区南部で検出した第4a層上面の遺構である。北から東に68°に振る方位で北東方向に帯状に延びる畦畔で、下層のSD701とはほぼ重なる位置にある。西半は削平を受けているが、遺存していた東部では下幅は1.2~1.5m、高さは最大で0.1mである。上から灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質細粒砂、オリーブ黒色(7.5Y2/2)細砂混り粘土~シルトで構成されている。第4a層に含まれる遺物から豊臣後期を上限とする遺構と考える。

SK303は調査区南部で検出した第3b層上面の土壌である。平面形は西側がややくびれた方形をなす。南北0.3m、東西0.7m、深さ0.1mである。後述のSK304を切ることから、18世紀前半以降の遺構と考える。

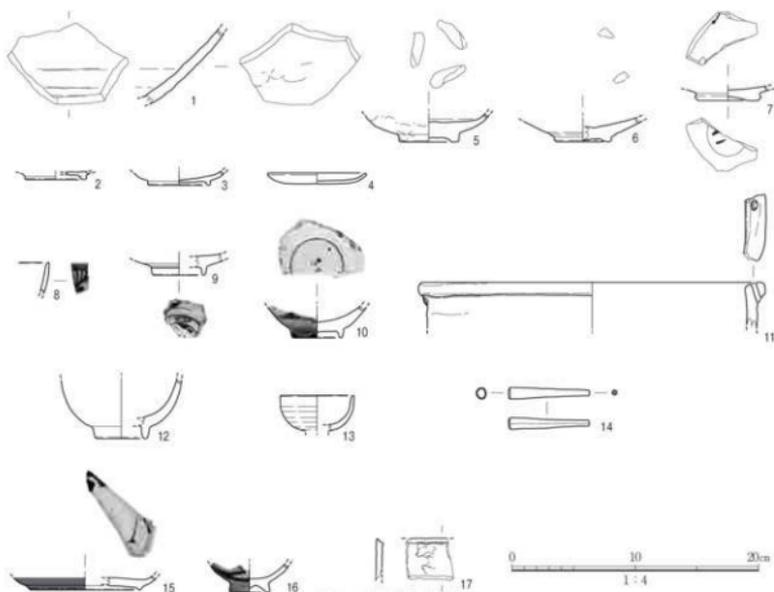


図9 出土遺物実測図

SD701(4)、SK703(5)、SK401(8・9)、SK304(11)、  
第5層(1~3)、第4a層(6)、第4b層(7)、第3a層(10・12~17)

SK304は調査区南部で検出した第3b層上面の土壌である。平面形は不整形で南西方向に長さ2.7m、北西方向に幅0.1～0.7m、深さ0.1mである。遺物は平瓦と土師器焙烙11がある。焙烙は[難波洋三1992]ではD類に分類され、18世紀前半のものである。遺物から近世の遺構と考える。

SK401は調査区南部中央の第3b層上面で検出した土壌で、平面形は菱形をなす。南北方向に2.4m、東西方向に1.0m、深さ0.1mである。埋土は上から黄褐色(2.5Y5/4)極細粒砂質シルト、暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒砂質シルトである。遺物は肥前磁器染付小碗8・9がある。8は扇文様を有し、9は底部片である。それらが、17世紀後葉～18世紀前葉に属する。遺物から近世の遺構と考える。

SK703は調査区中央東部で検出した。平面形が半円形をなし、南北5.2m以上、東西1.9m以上、深さ0.8mの土壌である。土壌は調査区外東側に広がる。埋土はオリープ黒色(10Y3/1)シルト質極細粒砂を主とする水成層である。直径4～5cmの木杭が周囲5箇所に設置され、そのうちの1本は残存長50cmであった。土留め用の杭と推測される。肥前陶器皿5が出土した。底部内面に砂目圧痕が残り、体部との境に沈線を有する。徳川初期のものである。土留めがあり土壌底部が湧水層の砂層にまで達していることから水溜と推定される(図7、図版1下・2中下)。攪乱底での検出で、連続する地層がないため、層位からの時期判断はできなかった。遺物から第4a層上面の近世の遺構と考える。

#### d. 第3a層上面の遺構(図3・4)

SR305は、下幅1.9m、高さ0.13mのSR405よりやや幅の広い畦畔である。SR405と同位置にあり、土地区分の境界を引き継いでいる。平面では検出できず、東壁断面で確認した。第3a層に含まれる遺物から近世の遺構と考える。

### 3)まとめ

今回の調査により、植物が繁茂する後背湿地が洪水の堆積で埋まり、中世に湿地帯が溝による排水と灌漑で農地化したと考えられる。溝によって農地は区画され、溝が埋没する後も豊臣後期以後に同じ位置につくられた畦畔に土地境界は引き継がれたと思われる。それが踏襲され近世・近代に至るまで続いたのであろう。こうした状況は、淀川のデルタ地帯が湿地帯から農地化されていく過程の一端を示していると言えよう。

#### 註)

(1)大正6年の台風により下新庄村を含む西成郡一帯が洪水の被害を受けており、この時のものの可能性がある[東淀川区創設三十周年記念事業委員会1956]。

#### 引用・参考文献

- 大阪文化財研究所2012、「阪急京都線・千里線連続立体交差事業(淡路第5工区)にかかる埋蔵文化財発掘調査(XS12-1次)完了報告書」
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015、「下新庄遺跡C地点発掘調査(XS13-2)報告書」:「平成25年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.113-122

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2020、「下新庄遺跡B地点発掘調査(SXS18-1)報告書」：「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2018)第2分冊」、pp.389-392
- 難波洋三1992、「徳川氏大坂城期の塩烙」：大阪市文化財協会『難波宮址の研究』第九、pp.373-400
- 東淀川区創設三十周年記念事業委員会1956、「第八章大正時代」：「東淀川区史」、pp.91-92



東壁地層断面  
(北西から)



東壁地層断面  
第7a・7b層  
(西から)



第6層上面遺構検出状況  
(北から)





SD701(北東から)



SK702(北から)



第4a層下面・第4b層下面  
遺構検出状況  
(南から)  
白線は上：SX404  
下：SX403





第4a・b層上面遺構検出状況  
(北から)  
白線はSR405



SK703(北から)



SK703杭検出状況  
(南から)





住吉区長居東三丁目117-1における建設工事に伴う  
南住吉遺跡発掘調査(MN20-1)報告書

調査個所 大阪市住吉区長居東3丁目117-1  
調査面積 150㎡  
調査期間 令和2年5月18日～5月29日  
調査主体 一般財団法人大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋工、南秀雄、橋本稔

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は長居公園通り長居交差点より南へ約180m、あびこ筋に面した地点に位置する。上町台地の南端にあたり、南住吉遺跡内の東側に含まれる。南住吉遺跡は東西約1.6km、南北約1.0kmの範囲をなし、古代～江戸時代にわたる遺跡である。調査地の南約300mのMN87-21次調査[大阪市文化財協会1988]では古代の土壌、中世の溝が確認されている。西280mのMN17-1次調査[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2019]では平安時代後半および中世の耕作跡や土採り穴、17世紀末から18世紀前半の区画溝が見つかった。また東400mに位置する長居東2丁目所在遺跡のNE03-1次調査[大阪市文化財協会2005]では近世から近代にかけて掘削された粘土採掘場を確認している。

本調査は令和2年4月1日に大阪市教育委員会による試掘によって、地表下約0.35mにおいて古代の土器片が確認されたことをうけて実施した。令和2年5月18日から開始し、令和2年5月29日に終了した。調査に当たっては敷地内の攪乱の影響が少ない南東側に南北10m、東西15mのトレンチを設定し、重機により地表下0.35mまで近現代の整地層を取り除いた。そのあと近世・近代の作土層(後述の第1層)から調査を始め、人力により掘下げ・精査し、写真・図面等の記録を取った。

以下の本文等に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+〇mと記した。また本報告で用いた方位は、現場で作成した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより世界測地系座標に乗せたものであり、座標北を基準とした。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4・7、図版1中・下)



図1 調査地位置図



図2 調査区位置図



図3 地層と遺構の関係図

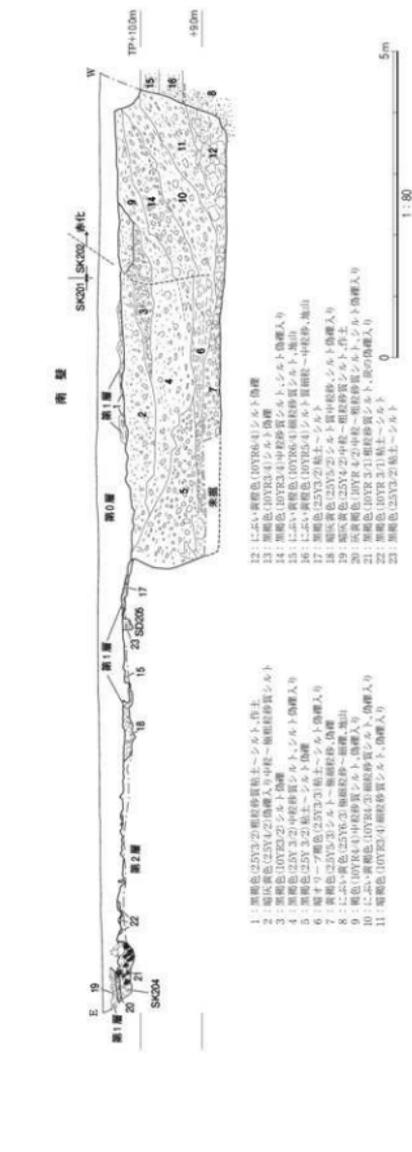


図4 南壁・東壁地層断面図

調査地の現況は、TP+10.6m前後でほぼ平坦な地形であった。

第0層：コンクリート片やレンガなどを含む近代・現代の整地層で、層厚は10～50cmである。

第1層：灰黄褐色(10YR6/2)シルト質極細粒砂、にぶい黄橙色(10YR5/3)シルト質極細粒砂、暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒～粗粒砂質シルトからなる近世・近代の作土層で、層厚は5～20cmである。調査地東部に分布し西部は削平されている。第1層の包含遺物として土師器、近代の磁器(蓋)、瓦片、井戸瓦、輪羽口があり、ミニチュアコップ型土製品2を図示した。

第2層：上位からにぶい黄橙色(10YR6/4)細粒砂質シルト層、にぶい黄橙色(10YR5/4)シルト質細粒～中粒砂層、にぶい黄色(2.5Y6/3)極細粒砂～細礫の順に堆積している。地山層で層厚160cmまで確認した。

## ii) 遺構と遺物

### a. 第2層上面(図4～7)

明治初期と推定される土壇9基を検出した。SK201～203、SK211・212の5基はその規模から土採り穴と考えられる。

SK201は調査地西側を南北に貫く方形の土壇で、中央がやや膨らむ。東西4.8～6.0m、南北10.0m以上である。深さは南端で2.0mである。なお調査に際しては安全性を考慮して、南端で土壇底部を確認した以外は深さ1.0mまでの掘削にとどめた。土壇の西壁に深さ1.0mまでに採掘時の昇降に使われた5段の階段が削り出しで造られており、幅0.5m、検出した範囲内では長さ2.5mである。掘削された地山層は南壁西端(図4)において深さ1.4mにいたるまで上から細粒砂質シルト、シルト質細粒～中粒砂、極細粒砂～礫の土質である。ほかの土壇と比べ細粒砂質シルト層より下層を掘削していることから、土質の差によって分けて掘削したのではないかと推測する。遺構はまず地山を中心とした偽礫混りのシルトで埋められ、その後やや偽礫が混じるシルトで埋めている。埋土中からは、弥生土器底部1、須恵器、13世紀以降の土師器皿3、14世紀頃の中国産青磁碗4、関西系陶磁器、肥前磁器、砥石、平瓦、丸瓦、瓦片、銚型、輪羽口片5がある。銚型、輪羽口片の銚造関連遺物から調査地周辺に銚造工房があったと思われる。明治初頭の遺構と考えられる。

SK202はSK201に先行して掘削された土壇で、東西3.0m以上、南北3.4m以上、深さ2.0mである。その東側をSK201が掘削しており、SK201とともに埋め戻されている。SK202部分においては土色が赤化していた。赤化の原因はわからない。

SK203は地山上部の細粒砂質シルトを採掘した土壇である。SK201に先行する。南北に舟底状の断面をなし南側に最深部が偏る。東西3.5m以上、南北3.5m、深さ0.7mである。埋土は暗灰黄色・褐灰色および黒褐色を呈する偽礫混りの細粒～中粒砂質シルトである。出土遺物として土師器焙烙16、肥前磁器小杯6、関西系磁器型紙摺り碗7～9・11、皿13、関西系陶器土鍋14、瀬戸美濃焼磁器染付蓋10、型紙摺り飯碗12、ガラス製品、土人形、備前焼、丹波焼、肥前陶器、平瓦、丸瓦、棧瓦、軒棧瓦、砥石、板石のほかには輪の羽口片などの銚造関連遺物が出土した。

SK204は東壁に沿う位置で検出し、南北9.0m以上、東西1.0m以上、深さ0.2mである。トレンチ外の東に延びる。埋土は暗灰黄色極細粒砂質シルトを中心に、炭を多く含み地山のシルト偽礫が混じる。

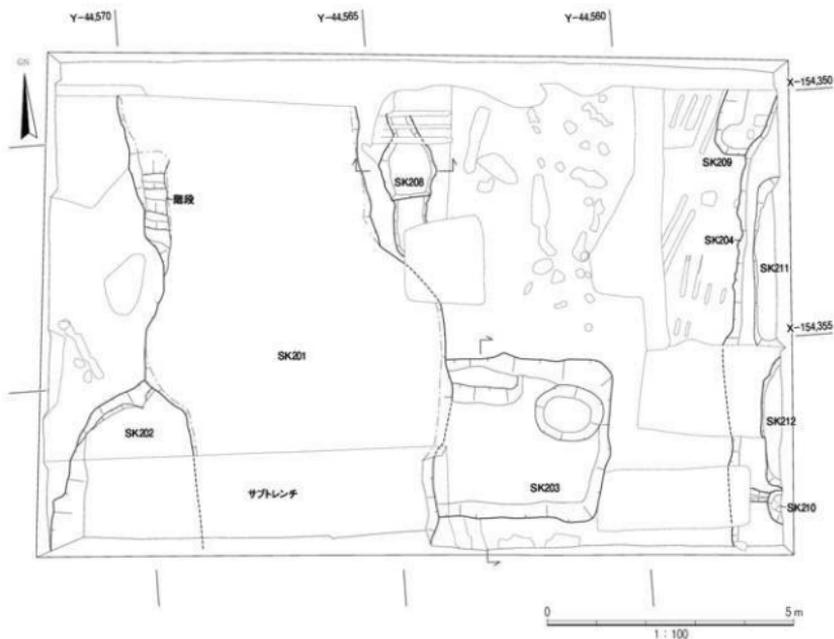


図5 第2層上面平面図

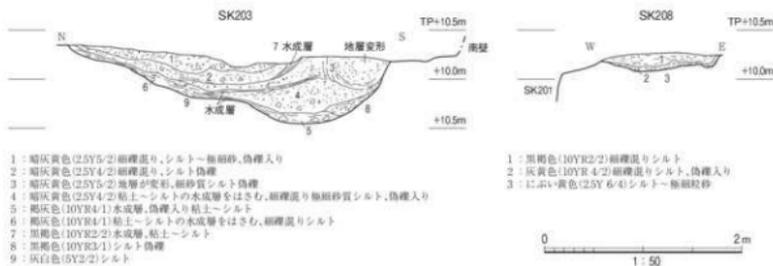


図6 遺構断面図

1: 暗灰黄色(2.5Y5/2)細礫混り、シルト～無細砂、偽埋入り

2: 暗灰黄色(2.5Y4/2)細礫混り、シルト偽埋

3: 暗灰黄色(2.5Y5/2)地層が変形、細砂質シルト偽埋

4: 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘上～シルトの水成層をはさむ、細礫混り無細砂質シルト、偽埋入り

5: 暗灰色(10YR4/1)水成層、偽埋入り粘上～シルト

6: 暗灰色(10YR4/1)粘上～シルトの水成層をはさむ、細礫混りシルト

7: 黒褐色(10YR2/2)水成層、粘上～シルト

8: 黒褐色(10YR3/1)シルト偽埋

9: 灰白色(5Y2/2)シルト

1: 黒褐色(10YR2/2)細礫混りシルト

2: 灰黄色(10YR4/2)細礫混りシルト、偽埋入り

3: にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト～無細砂

後述のSK211、SK212の上位に位置することから、それより新しい明治時代の遺構と考えられる。

SK208は南北に細長い土壌で平面形の中央部がやや膨らむ。幅0.4～1.1m、検出長2.9m、深さ0.2mである。炭を多く含む黒褐色・灰黄色の礫混りのシルトを埋土とする。須臾器片が出土したが周辺から流入した遺物と思われる。性格は不明であるが、後述のSK211・SK212と同様に炭が埋土中に含まれることから明治の遺構と考えられる。

SK209はトレンチ東北隅で検出した土壌である。SK204に先行する土壌で南北1.3m以上、東西1.2

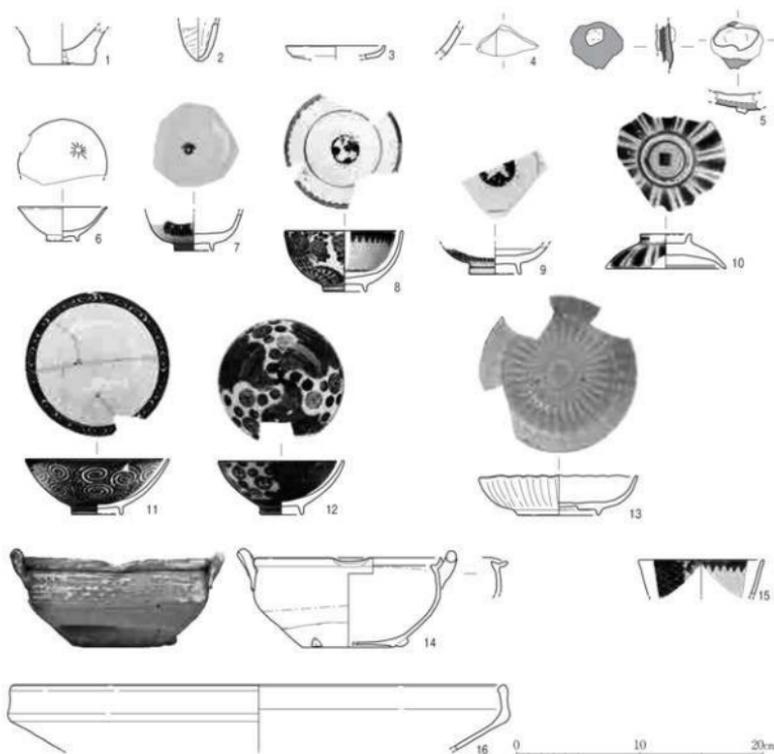


図7 出土遺物実測図

SK201(1・3～5)、SK203(6～14・16)、SK204(15)、第1層(2)

m以上で、深さは0.1mである。平瓦片が出土した。埋土は炭が多く混じる黒褐色の極細粒砂質シルト、灰黄褐色の極細粒砂質シルトである。地山の偽礫が混じる。

SK210はトレンチ南東隅で検出した土壌で南北0.65m、東西0.28m以上、深さ0.50mで、調査区外東側に延びる。平面形は楕円形と推測される。灰黄褐色・明黄褐色の粘土質シルトの地山の偽礫で埋められ、その上に炭を含む黒色、黒褐色シルト層が堆積している。出土遺物はなく、時期、性格は不明である。SK212より下層(図4東壁)にあたるため調査地内では最も古い遺構と考えられる。

SK211は南北3.5m、東西0.5m以上、深さは0.7mである。土壌は調査区外東側に延びる。埋土は暗灰黄色の極細粒砂質シルトを中心に、地山の偽礫と炭を多く含む黒褐色の粘土質シルトが混じる。

SK212は南北2.6m、東西0.5m以上で深さは0.7mである。土壌は調査区外東側に延びる。埋土はSK211とはほぼ同質の地層である。SK210～212は、ともにSK204の下位に位置する別の遺構と思われる。

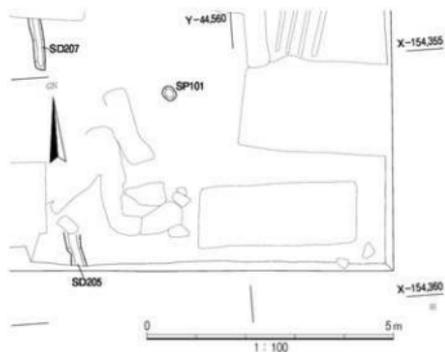


図8 第1層上面平面図

深さ15cmの溝である。溝の方向はやや西に傾き南北方向を示す。その北側の延長線上にSD207があり、幅20～25cm、深さ4cmである。溝の方向はSD205と同じ方向を示し、同一の溝と考えられる。いずれも埋土は灰黄褐色(10YR6/2)シルト質極細粒砂で、宅地化前の耕作に伴う溝である。

### 3) まとめ

今までに、長居東2丁目所在遺跡では近世から近代にかけての土採り穴を34基確認しているが、今回の調査においても同様の遺構を検出し、この時期における採掘地の範囲がさらに西に広がるのがわかった。近代・現代の開発によるもの以外にも土採りや耕作によって古代～江戸時代にかけての地層が削平を受けている。埋土に含まれる土師器片、須恵器片、弥生土器片などから古代～江戸時代における南住吉遺跡の存在が伺えるが、南住吉遺跡における時期の遺構は確認できなかった。今後の周辺の調査に期待したい。また出土遺物に中世の土師器皿や中国産青磁碗や鋳造関連遺物があり、東部の土壌埋土に炭も含まれることから、中世以降、調査地周辺に鋳造工房があったと思われる。

### 引用・参考文献

大阪市文化財協会1988、「MN87-21次調査」：「南住吉遺跡発掘調査報告」, pp.60-63

大阪市文化財協会2005、「長居東2丁目所在遺跡発掘調査報告」

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2019、「南住吉遺跡発掘調査(MN17-1)報告書」:

「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2017)第2分冊」, pp.239-244

る。

SK211、SK212の埋土から土師器、丹波焼、肥前磁器、瀬戸美濃焼磁器型紙摺り碗15、丸瓦が出土した。明治の遺構と考えられる。

#### b. 第1層上面(図7・8)

近現代の遺構としてピットSP101がある。直径28cm、深さ15cmを測り、暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒～粗粒砂質シルトを埋土とする。江戸時代の土師器片(大甕)を埋土に含むが、古い時期の遺物が混入したのと考ええる。SD205は幅20～30cm、

遺構完掘状況  
(東から)



東壁地層断面  
(南西から)



SK201~203・208  
(北から)





SK203  
(南から)



SK208  
(南から)



SD207  
(西から)





旭区生江三丁目129-2における建設工事に伴う  
生江3丁目所在遺跡発掘調査(IQ20-1)報告書

調査個所 大阪市旭区生江3丁目129-2  
調査面積 60㎡  
調査期間 令和2年5月11日～5月15日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋工、清水和明

## 1) 調査に至る経緯と経過

本調査地は旭区北緑を西流する淀川と平行する城北公園通の北側にあり、旧河床を整備した城北公園の南西部に接する生江3丁目所在遺跡に位置している。

本遺跡における既往の調査は非常に少なく、西緑部で大阪市教育委員会によるSIK18-1次調査が行われ、40mを現地表面下2.4mまで調査した例が唯一で、ほかは試掘調査のみである。この調査では時期不詳の小穴のほか中世・近世の作土層や遊離資料ながら弥生時代に遡る可能性のある土器片等が確認されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2020] (図1)。

今回の調査区は先行するIQ13-3・4次試掘調査地の東区を含む敷地の一面に当たる(図2)。大阪市教育委員会によれば、地表下約0.7m以下で古代・中世の遺構面および遺物包含層が検出されたため、発掘調査を行うこととなった。地層の年代や遺構・遺物の分布状況等地域の歴史の変遷の基礎資料を得ることを主な目的とした。

調査は令和2年5月11日から開始した。当初計画のとおり12m×5mの調査区を設定し、地表から約0.9m下の後述する第4a層上面までを重機で掘削した。その後、近世以前の地層で遺構・遺物の検出と写真・図面による記録作業を行って同年5月15日に機材を撤収し、現地における全ての作業を終了した。

また、本文中で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はTP値(東京湾平均海面値)でTP+〇mと記した。

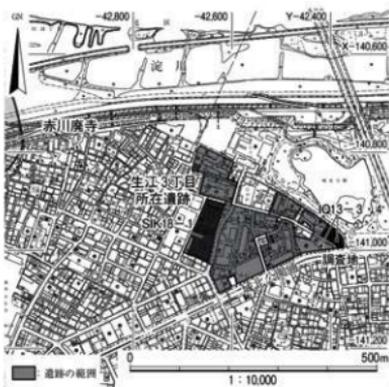


図1 調査地位置図



図2 調査区配置図

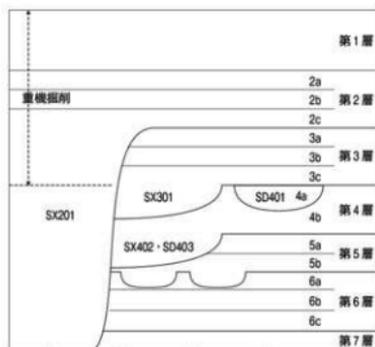
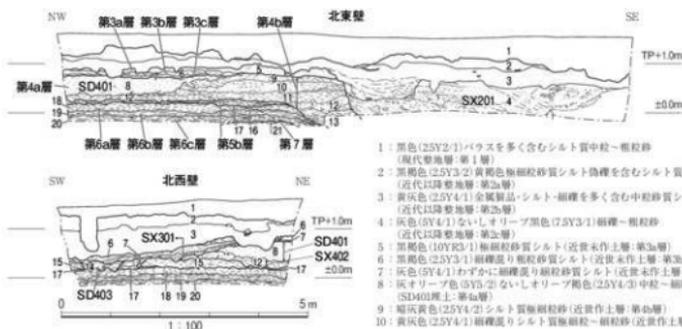


図3 地層と遺構の関係図

である。第2a層は黒褐色(2.5Y3/2)黄褐色極細粒砂質シルト礫層を含むシルト質細粒砂で、層厚は25 cm程度である。第2b層は黄灰色(2.5Y4/1)金属製品・シルト・細礫を多く含む中粒砂質シルトで、層厚は20 cm程度である。第2c層は灰色(5Y4/1)ないしオリブ黒色(7.5Y3/1)細礫～粗粒砂で、調査区東南部のSX201に堆積している。層厚60 cm以上である。シルト礫層とともに砂のラミナが認められ、やや離れるが淀川から浸染した残土であろうか。

第3層：3層に細分された近世末頃の作土層である。第3a層は黒褐色(10YR3/1)極細粒砂質シルトで、層厚はおよそ10 cm以下である。第3b層は黒褐色(2.5Y3/1)細礫混り粗粒砂質シルトで、層厚は5 cm程度である。第3c層は灰色(5Y4/1)わずかに細礫混り細粒砂質シルトで、層厚は5 cm程度である。第3c層下面で検出したSX301からは幕末に降る19世紀代の遺物が出土した。



- 1: 黒色(2.5Y2/1)バウスを多く含むシルト質中粒～粗粒砂 (現代堆積層・第1層)
- 2: 黒褐色(2.5Y3/2)黄褐色極細粒砂質シルト礫層を含むシルト質細粒砂 (近代以降地層・第2a層)
- 3: 黄灰色(2.5Y4/1)金属製品・シルト・細礫を多く含む中粒砂質シルト (近代以降地層・第2b層)
- 4: 灰色(5Y4/1)ないしオリブ黒色(7.5Y3/1)細礫～粗粒砂 (近代以降地層・第2c層)
- 5: 黒褐色(10YR3/1)極細粒砂質シルト(近世末作土層・第3a層)
- 6: 黒褐色(2.5Y3/1)細礫混り粗粒砂質シルト(近世末作土層・第3b層)
- 7: 灰色(5Y4/1)わずかに細礫混り細粒砂質シルト(近世末作土層・第3c層)
- 8: オリブ黒色(5Y3/1)ないしオリブ褐色(2.5Y4/3)中粒～粗粒砂 (SD401埋土・第4層)
- 9: 黄灰色(2.5Y4/2)シルト質極細粒砂(近世作土層・第4層)
- 10: 黄灰色(2.5Y4/1)細礫混りシルト質極細粒～細粒砂(近世作土層・第4層)
- 11: 黄灰色(2.5Y6/1)炭化物ラミナを含むシルト質極細粒砂(湿地性堆積層・第5a層)
- 12: 黄灰色(5Y4/1)炭化物ラミナを含むシルト(湿地性堆積層・第5b層)
- 13: 灰色(5Y4/1)第5・6層礫層・粗粒砂礫層を含むシルト質細粒砂 (遺構埋土か・第4層)
- 14: オリブ黒色(5Y3/1)第5・6層礫層を含む中粒砂質シルト(SD403埋土)
- 15: 黄灰色(2.5Y4/1)わずかにシルト礫層を含むシルト質極細粒砂(中世作土層・第5a層)
- 16: オリブ黒色(5Y3/1)植物遺体を多く含む極細粒砂質シルト(湿地性堆積層・第6層)
- 17: 灰色(5Y4/1)シルト質極細粒砂

図4 調査区北壁地層断面図

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

調査地はTP+1.6mで概ね平坦な地形であるが、調査地より北は淀川へ向かって緩やかに下る傾斜地となっている。

調査で確認された地層は、以下の7層に大別された。以下にその詳細を記す。

第1層：黒色(2.5Y2/1)栗石を多く含むシルト質中粒～粗粒砂の現代整地層で、層厚は40～90 cm程度である。

第2層：3層に細分された近代～現代の整地層

第4層：2層に大別されたが、下部の第4b層はさらに細分された。第4a層は上部が灰オリーブ色(5Y5/2)、下部がオリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒～細粒砂で、SD401の埋土に当る。第4b層は18世紀中葉以降の遺物が出土した近世後半の作土層である。3層に細分され、上部が暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質極細粒砂、中部が黄灰色(2.5Y4/1)細礫混りシルト質極細粒～細粒砂、下部が灰色(5Y4/1)細粒砂質シルトで、層厚は50cmである。下面でSX402やSD403等を検出した。

第5層：2層に細分された。上部の第5a層は作土層である。黄灰色(2.5Y4/1)わずかにシルト偽礫混りシルト質極細粒砂で、層厚は5cm以下である。下部の第5b層は自然堆積層で、上部が暗灰色(N3/)シルト、下部が灰色(5Y4/1)シルトである。層厚は5cm程度である。第5a層中からの擾乱を受けたため、一部に変形した炭化物ラミナを残すが一括して掘削した。出土遺物から13世紀代の中世に属する。

第6層：3層に細分された湿性堆積層で、出土遺物は無いが中世以前の地層である。第6a層は灰オリーブ色(5Y5/2)シルトで、層厚は15cm以下である。第6b層はオリーブ黒色(7.5Y3/1)炭化物ラミナ含むシルト～粘土質シルトで、層厚は10cm程度である。第6c層はオリーブ黒色(5Y3/1)植物遺体を多く含む極細粒砂質シルトで、層厚10cm程度である。

第7層：灰色(5Y4/1)シルト質極細粒砂の水成層で、層厚5cmまでを確認した。

ii) 遺構と遺物(図5～8)

a. 第6層上面の窪み

第6層上面で、第5b層で埋積された複数の不定形な窪みを検出した。深さは数cm～10cm程度である。両層ともに湿地性の自然堆積層であり、窪みは遺構でない可能性が高い。第5層を一括して掘削した際に、土師器小皿1、瓦器椀2が出土した。2の外面はヘラミガキがない和泉型のⅢ～3段階に属するもので、13世紀前半頃のものであろう。1も同時期とみて矛盾しない。

b. 第4b層下面遺構

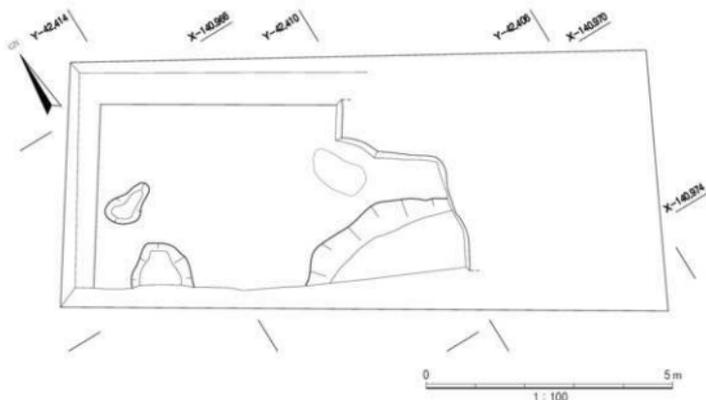


図5 第6層上面の窪み平面図

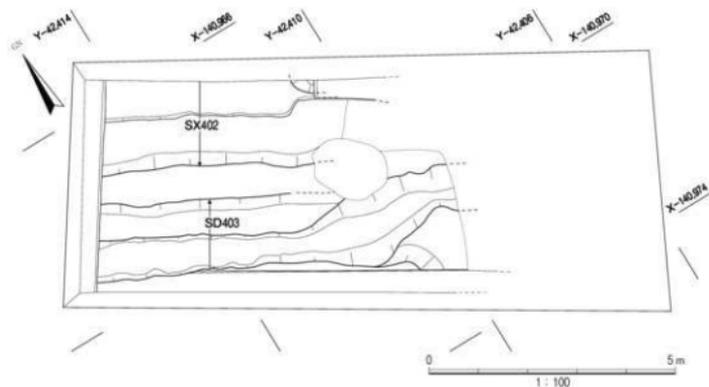


図6 第4b層下面遺構平面図

第5層の上面で第4b層下面遺構を2基検出した。SX402は北西-南東方向に延びており、北東側へ2段に深くなるが、全体形は不明である。上端からの深さは0.25m程度だが、調査区の北東壁では一部がさらに深くなっていて、別の遺構となるかもしれない。出土遺物には須恵器や瓦器の細片のほか、肥前陶器皿・片口片、肥前磁器碗・皿等18世紀中葉以降のものがある。

SD403は概ねSX402と並行する2段に深くなる溝で、内側の深い部分で上端からの深さは0.30m弱である。ただし、深い部分の南東部は東へ屈曲し、外側の浅いテラス部を壊しているため、別遺構の可能性もある。出土遺物には土師器皿・焙烙、須恵器細片、瓦器碗、瀬戸美濃焼細片、中国産青花碗3のほか堺播鉢4等、18世紀中葉以降のものがある。3は漳州窯産の青花碗で、底部内面がやや影らんだ17世紀代のものである。これらは何らかの耕作に係る遺構であろう。

c. 第3c層下面・第4b層上面遺構

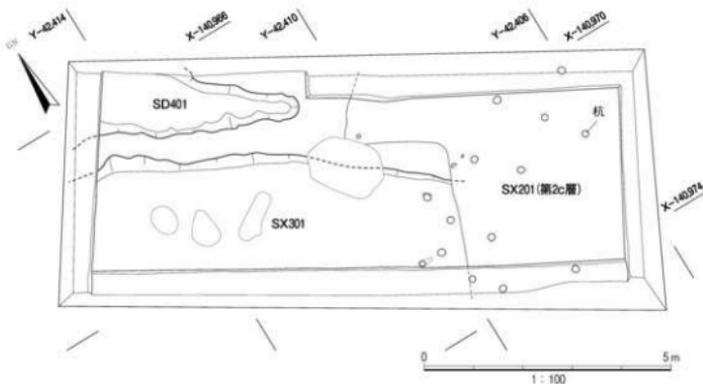


図7 第3c層下面・第4b層上面遺構平面図

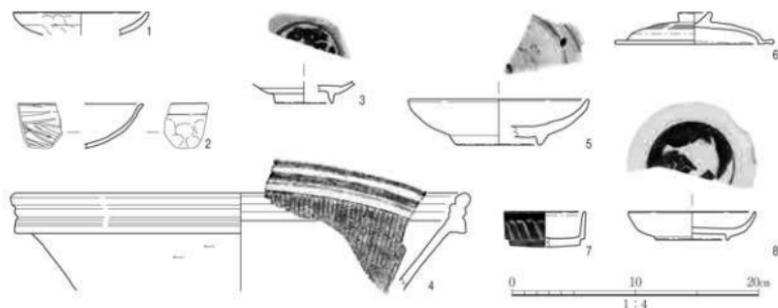


図8 出土遺物実測図

第5層(1・2)、SD403(3・4)、SX301(5～8)

第3c層下面でSX301を、第4b層上面でSD401を検出した。SD401は南東-北西方向に延びる溝で、北西側へ深く、かつ幅も広く1.8mを超えている。何らかの耕作に係る遺構と考えられ、第4a層によって埋められていた。出土遺物にはミニチュア土製品・瓦片等がある。

SX301は南西側に低くなる浅い落込みで、全体形は不明である。何らかの耕作に係る遺構であろう。出土遺物には18世紀後葉の肥前磁器染付皿5、19世紀初頭の関西系陶器土瓶蓋6のほか、関西系磁器染付合子7、瀬戸美濃焼磁器染付小皿8等がある。19世紀前半のものが多いが、8は幕末に下る。SX301も何らかの耕作に係る遺構と推測される。

#### d. 第3a層上面遺構

調査区の東南部の第3a層上面でSX201を検出した。近代に下る遺構で、深さ0.95mまでを確認したが、底は未検出である。埋土の第2c層は砂などの偽礫を多く含む整地層であるが、ラミナが確認でき、水分を多く含む状態で埋積されたと考えられることから、河川の浸漬等による結果と推測される。

### 3) まとめ

本調査では、中世および中世以前に遡る湿地性堆積層を確認した。13世紀頃にはその上部(第5層)が開墾されて耕作地となったと考えられる。同時期の土師器・瓦器片が上位層からも出土しており、比較的近辺に集落の存在が想定される。

その後は、近世後半の18世紀中葉以降から幕末の耕作に関連する遺構が見つかった。溝や落込み等で、建物や井戸はなく当該地は耕作地であったと考えられる。

SIK18-1次調査地で出土した弥生土器の可能性のある土器片に関連するような遺構・遺物は確認できなかったが、本遺跡の内容は不明な点が多く、引き続き周辺域の調査を進める必要がある。

#### 引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2020、「生江3丁目所在遺跡発掘調査(SIK18-1)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2018)」第2分冊、pp.393-394



北西壁地層断面  
(南東から)



第6層上面  
掘削状況(南東から)



SX402・SD403  
掘削状況(南東から)





SX 402・SD403  
掘削状況(西から)



SX 301・SD401  
掘削状況(南東から)



SX 301・SD401  
掘削状況(西から)









## 第 2 部



## 鷺洲2丁目所在遺跡発掘調査(SEE20-1) 報告書

調査箇所	福島区鷺洲2丁目5-30
調査面積	16㎡
調査期間	令和2年4月16日
調査担当者	課長 鈴木 慎一、櫻田 小百合

### 〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は淀川の河口域に位置する(図1)。周辺では西約400mの地点で海老江遺跡のEE16-1・2次調査、北約300mで鷺洲5丁目所在遺跡のEE18-1次調査が行われている(図1)。EE16-1・2次調査では、湿地の排水のために掘られたクリークと推定される中世後半～近世初頭の大溝が見つかっており、この溝を掘削して以降に一带の耕地開発が進むようすが確認されている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2018a・b]。また、EE16-1次調査では下層確認により陸化の過程が明らかになるとともに、干潟の堆積層から出土した木材の放射性炭素年代測定により、弥生時代末～古墳時代前期には陸化が始まっていたことがわかっている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2018a]。

今回の調査は、建設工事に先立ち大阪市教育委員会が令和元年10月2日に実施した試掘調査において、現地表面から1.0m以下に中世以前とみられる遺構面が確認されたため、新たに鷺洲2丁目所在遺跡として埋蔵文化財包蔵地に追加するとともに、本調査を行うこととなった。

調査は令和2年4月16日に行った。東西4m、南北4mの調査区を設定し、第5層上面まで重機により掘削し、これ以下については平面的に遺構の確認作業を行いながら第6層上面まで人力により掘り下げた。これらの作業と並行して実測図の作成および写真撮影による記録作業を行い、同日中に埋め戻しを行い現地での作業を完了した。

本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とし、現地で作成した調査区位置図を「大阪市地形図」にあてはめて求めたものである。地層断面図は現地表面を基準に作成し、図3・5の地層断面図には、国土地理院の提供する「地理院地図」における調査地東側道路面の標高をもとに算出した現地表面の標高を参考値としてT.P.値(東京湾平均海面値)でTP±0mと表記して示した。

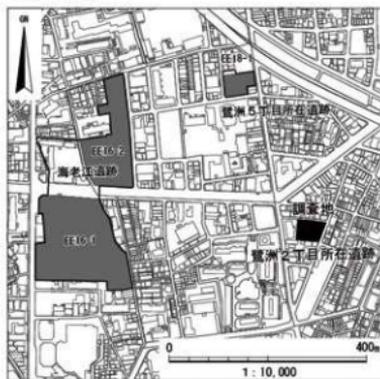


図1 調査地位置図

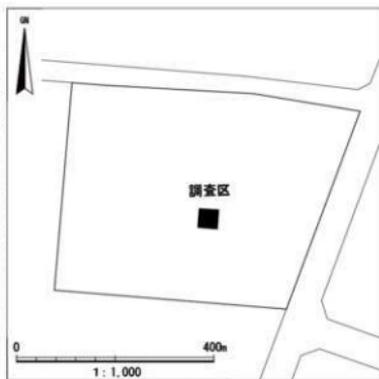
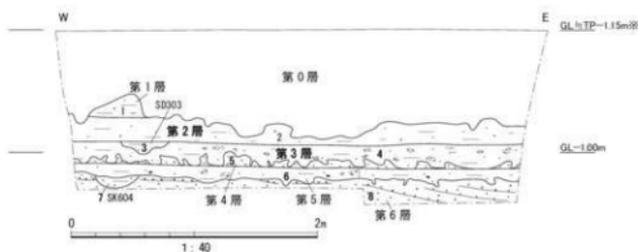


図2 調査区位置図



- 1:わずかに細礫を含むオリブ黒色(SY3/1)細粒～極細粒砂質シルト【第1層】
- 2:わずかに細礫を含む灰色(7.SY4/1)細粒～極細粒砂質シルト【第2層】
- 3:オリブ黒色(SY3/2)細粒～極細粒砂質シルト【SD303】
- 4:灰色(SY5/1)細粒砂礫礫を含む黒褐色(2.SY3/2)シルト質細粒砂～細粒砂質シルト【第3層】
- 5:灰色(SY5/1)中粒～細粒砂【第4層】
- 6:わずかに植物片を含むオリブ黒色(GY3/1)シルト質細粒砂【第5層】
- 7:オリブ黒色(7.SY3/1)わずかにシルト質中粒砂【SK604】
- 8:灰色(SY5/1)細礫～細粒砂【第6層】

図3 北壁地層断面図

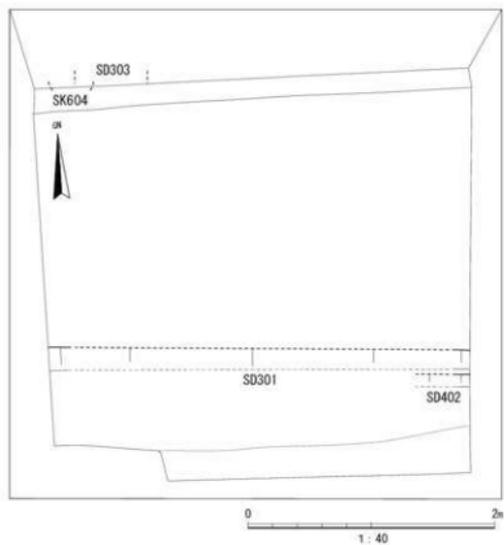


図4 遺構平面図

## (調査の結果)

### 1. 層序 (図3・5、図版上・中・下)

調査地における調査時点での地表面は東側道路面よりやや下がっており、標高はTP-1.2～1.3m前後であった。

第0層は現代の盛土層で層厚は52～87cmである。

第1層はわずかに細礫を含むオリーブ黒色の細粒～極細粒砂質シルトからなる近現代の作土層である。北壁付近にわずかに残存するのみで、層厚は最大19cmである。

第2層はわずかに細礫を含む灰色の細粒～極細粒砂質シルトからなる作土層である。本層から黒色土器あるいは瓦器の小片2、須恵器片3が出土した。本層の年代は出土遺物から中世の可能性があるが、遺物が少量であることから明確でなく、周辺事例の状況をふまえると近世に降る可能性もある。

第3層は細粒砂の偽礫を含む黒褐色シルト質細粒砂～細粒砂質シルトからなる作土層である。層厚は6～22cmで、下面には溝跡とみられる凹凸が確認できる。植物の根とみられる痕跡も認められることから、もとは湿地であったと推定される。本層以下は中世以前の地層と考えられるが、いずれも出土遺物がなく詳細な年代は不明である。

第4層は灰色の中粒～細粒砂からなる水成層で、層厚は最大12cmである。

第5層はわずかに植物片を含むオリーブ黒色シルト質細粒砂からなり、湿地性の堆積層とみられる。層厚は最大15cmである。

第6層は灰色の細礫～細粒砂からなる水成層で、層厚は20cm以上である。

### 2. 遺構と遺物 (図3～5、図版下)

確認した遺構は第3層上面のSD301・303、第3層下面のSD402、第6層上面のSK604である。平面調査を第5・6層の各上面で行ったこと、またSK604の位置する調査区北端部は側溝内であったことから、いずれも平面的な検出ではなく調査区の壁面で確認した遺構である。

SD301は調査区東壁および西壁で確認した東西方向の溝である。幅は0.8m以上、深さは0.16mで、耕作にかかわる溝とみられる。遺物は弥生土器とみられる1が出土した。外面にタキを施す甕の体部片とみられ、弥生時代後期～末に属するものであろう。出土遺物はこの1点のみで、直接遺構の年代を示すものは不明である。

SD303は調査区北壁で確認した東西幅0.4m、深さ0.1mの遺構で、耕作に関わる溝の可能性はある。

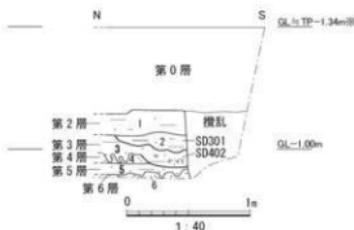
SD402は調査区東壁でSD301の下位に確認した遺構で、第3層を埋土とする。幅は0.38m以上、深さは0.1mで溝と推定される。

SK604は調査区北壁で確認した遺構で、東西幅0.36m、深さは0.1mである。

これらの遺構は、第2層およびSD301から出土した遺物の年代から、中世以前の遺構と推定されるが、全体的に遺物量が少なく詳細な年代は明らかでない。

### (まとめ)

今回の調査では、当該地が湿地から耕作地へと変遷するようすを確認することができた。SD301から出土した弥生土器とみられる1は遺構そのものの年代は示すものかは明らかでないものの、



- 1:わずかに細礫を含む灰色(7.5Y4/1)細粒～極細粒砂質シルト【第2層】
- 2:オリーブ黒色(5Y3/2)細粒～極細粒砂質シルト【SD301】
- 3:灰色(5Y5/1)中粒砂偽礫を含む黒褐色(2.5Y3/2)シルト質細粒砂～細粒砂質シルト【第3層】
- 4:灰色(5Y5/1)細粒砂【第4層】
- 5:わずかに植物片を含むオリーブ黒色(5Y3/1)シルト質細粒砂【第5層】
- 6:灰色(5Y5/1)中粒砂【第6層】

図5 SD301・402断面図(東壁南端部)

弥生時代末～古墳時代前期に陸化が始まっていたとする EE16-1 次調査の成果とは整合するものと考えられる。

淀川河口域における地形の発達と開発の歴史を考えるうえで基礎的な資料を得ることができた。

**【引用・参考文献】**

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所 2018a、「海老江 1 丁目所在遺跡発掘調査 (EE16-1) 報告書」

:『大阪 市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 (2016)』、pp. 107-124

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所 2018b、「海老江遺跡発掘調査 (EE16-2) 報告書」

:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 (2016)』、pp. 125-132

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会 2020、「鷺洲 5 丁目所在遺跡発掘調査 (EE18-1) 報告書」

:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 (2018)』、pp. 113-122

北壁地層断面  
(南から)



第6層上面全景  
(南西から)



出土遺物  
(1:SD301、2・3:第2層)





## 島之内2丁目所在遺跡発掘調査 (SS120-1) 報告書

調査箇所	中央区島之内2丁目 24-3・24-16
調査面積	16 m <sup>2</sup>
調査期間	令和2年6月12日
調査担当者	課長 鈴木 慎一、櫻田 小百合

### 〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は中央区島之内2丁目に所在し、中～近世の集落跡である島之内2丁目所在遺跡内にあたる。東横堀川と道頓堀川の交わる地点から北西に270 m程の場所にあり、地形的には上町台地西側に形成された浜堤上に位置する。

同遺跡内での既往の調査地は図1のとおりである。SI16-1次調査では浜堤間に形成された古代以前のラグーンとみられる地層が確認されており、古墳時代～古代の遺物が出土している〔大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2018a〕。SI16-2次調査では中世の土壇が確認されており〔大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2018b〕、遺跡内の開発は中世以降とみられる。SSI17-1次調査では17世紀前葉の水路とみられる南北方向の溝が検出されている〔大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2019b〕ほか、SI11-1・16-2・17-1次調査で徳川初期の遺構が確認されていることから〔大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013・2018b・2019a〕、慶長17(1612)～元和元(1615)年に道頓堀が開削された後に、本格的な開発が進んだものと考えられる。

今回の調査は、建設工事に先立ち大阪市教育委員会が令和2年5月26日に実施した試掘調査において、現地表面から0.85 m以下に近世以前の遺構面が確認されたことから本調査を実施することとなったものである。

調査は令和2年6月12日に実施した。東西4 m、南北4 mの計16 m<sup>2</sup>の調査区を設定し、第6層上面まで重機により掘削した後、平面精査および遺構掘削を人力により行い、実測図の作成および写真撮影による記録作業を行った。同日中に埋め戻しを行い、現地での作業を完了した。

本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とし、現地で作成した調査区位置図を「大阪市地形図」にあてはめて求めたものである。地層断面図は現地表面を基準に作成し、図3の

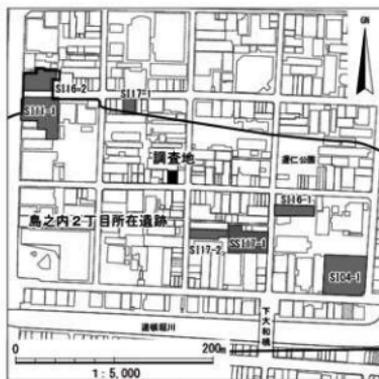


図1 調査地位位置図

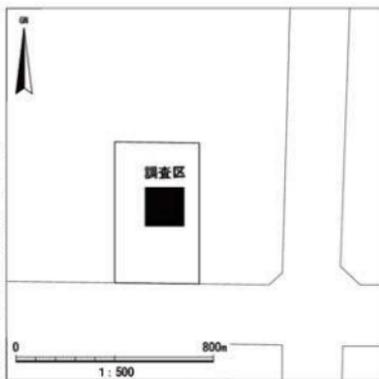


図2 調査区位置図

東壁地層断面図には、国土地理院の提供する「地理院地図」の調査地南側道路面の標高値をもとに算出した現地表面の標高を参考値としてT.P. 値（東京湾平均海面値）でTP±0mと表記して示した。

なお遺構番号は、第2・4～6層の各上面遺構にそれぞれ200番台、400番台、500番台、600番台を付し、帰属面の不明な遺構については2桁の遺構番号を付した。

#### （調査の結果）

##### 1. 層序（図3、図版1上・2下）

調査地における現地表面の標高はTP+2.96～3.15mである。

第0層は現代の盛土層で層厚は42～110cmである。

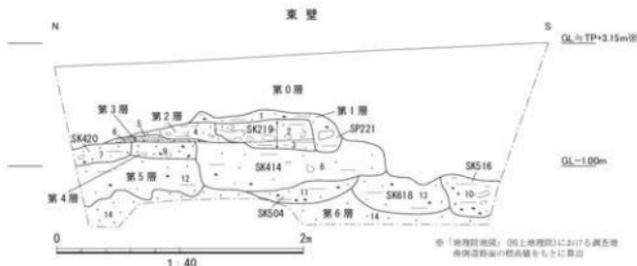
第1層は少量の炭を含む灰色（5Y4/1）細粒砂質シルトからなる整地層で、層厚は最大8cmである。

第2層は粗粒～細粒砂質シルト偽礫を含む灰色（5Y4/1）シルト質中粒～細粒砂からなる整地層で、層厚は最大16cmである。調査区東壁で本層上面のSK219、SP221を確認した。SP221は柱穴とみられ、第1層を埋土とすることから柱抜き取り後それほど間をおかずに第1層による整地が行われたものと考えられる。

第3層は明黄褐色（2.5Y7/6）細粒砂質シルト、多量の炭を含む黒褐色（2.5Y3/2）中粒～細粒砂の層厚2～4cmの薄層からなる整地層である。

第4層は炭・シルト偽礫を含むオリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂からなる整地層で、層厚は14cmである。出土遺物は土師器皿17、肥前磁器の染付碗18・20・21、皿22、瓶23、青磁染付碗19が出土した。これらの遺物から地層の年代は18世紀後半とみられる。なお、調査区東壁で本層上面の遺構SK414・420を確認した。

第5層は少量の炭を含むオリーブ褐色（2.5Y4/3）わずかにシルト質中粒～細粒砂からなる盛土層で、層厚は最大34cmである。遺物は瀬戸美濃焼陶器、肥前陶器のいずれも小片と平瓦が出土した。これらの遺物から地層の年代を判断するのは困難であるが、第5・6層上面の遺構の年代が



- 1:少量の炭を含む灰色(5Y4/1)細粒砂質シルト【第1層】
- 2:多量の粗粒～細粒砂質シルト偽礫を含む灰オリーブ色(5Y4/2)中粒～細粒砂質シルト【SK219】
- 3:黄褐色(2.5Y5/6)細粒～極細粒砂質シルト【SK219】
- 4:粗粒～細粒砂質シルト偽礫を含む灰色(5Y4/1)シルト質中粒～細粒砂【第2層】
- 5:明黄褐色(2.5Y7/6)細粒砂質シルト【第3層】
- 6:多量の炭を含む黒褐色(2.5Y3/2)中粒～細粒砂【第3層】
- 7:少量の炭・細粒砂質シルト偽礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒～細粒砂【SK420】
- 8:炭・シルト偽礫・粗粒～細粒砂質シルト偽礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒～細粒砂【SK414】
- 9:炭・シルト偽礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂【第4層】
- 10:炭・中粒～細粒砂質偽礫を含む灰色(5Y4/1)細粒～極細粒砂質シルト【SK516】
- 11:炭を含む黒褐色(2.5Y3/2)中粒～細粒砂質シルト【SK504】
- 12:少量の炭を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)わずかにシルト質中粒～細粒砂【第5層】
- 13:少量の炭を含む灰オリーブ色(5Y4/2)わずかにシルト質中粒～細粒砂【SK618】
- 14:オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂【第6層】

図3 東壁地層断面図

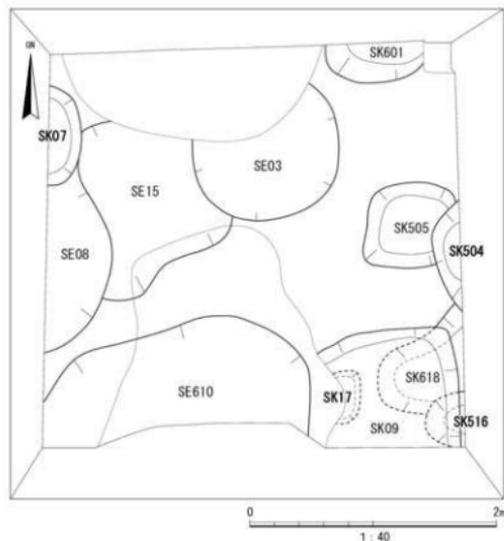


図4 遺構平面図

ら本層は18世紀前半～後半の間の地層と考えられる。

第6層はオリブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂からなり、層厚は30cm以上である。浜堤の地層とみられる。

## 2. 遺構と遺物(図4、図版1中・下、2上・下)

遺構の検出は第6層の上面で行った。検出した遺構は図4のとおりである。

検出した遺構のうち第6層上面の遺構としてSE610、SK601・618がある。

SE610は直径2.15m以上の井戸である。深さは0.80m以上で底は確認できていない。井戸側は抜き取られている。遺物は土師器、瓦質土器、肥前磁器、肥前陶器、瀬戸美濃焼陶器、備前焼、丹波焼、漆塗椀、瓦、瓦質の井戸側、石製品が出土した。1は土師器灯明皿、2は土師器甕、3は瓦質土器鉢、4は同火鉢である。5は肥前磁器碗で徳川初期に属するものとみられる。6は肥前陶器の刷毛目瓶、7は丹波焼の播鉢である。丹波焼播鉢7の年代から、SE610は概ね17世紀末～18世紀初頭に埋められたものとみられる。

SK601は調査区北東部で確認した、東西0.80m以上、南北0.32m以上、深さ0.25mの土壇である。出土遺物は土師器皿8・9、肥前陶器鉢10のほか、土師器の小片が出土している。18世紀前半頃の遺構とみられる。

SK618は東西0.70m以上、南北0.80m以上の土壇で、深さは0.36mである。遺構の年代は、SE610・SK601と概ね同時期の18世紀前半頃と考えられる。

第5層上面に属する遺構としてはSK504・505・516を確認した。これらの遺構の年代は18世紀後半頃とみられる。

SK504は東西0.23m以上、南北0.92m以上、深さ0.22mの土壇である。出土遺物は土師器皿のみである。

SK505はSK504に先行する土壌である。東西0.75m、南北0.70m、深さは0.30mで、炭・細粒砂質シルト偽礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)わずかにシルト質中粒砂を埋土とする。遺物は肥前磁器染付小杯11・碗12～14、青磁皿15、備前焼瓶類16、平瓦が出土している。一重網目文の碗14は17世紀代に属するとみられるが、出土遺物全体の様相から遺構の年代は18世紀後半頃と考えられる。

SK516は調査区南東隅で確認した、直径約0.5m、深さ0.34mの土壌である。

このほか、帰属層位は不明であるが、SE03・08・15、SK07・09・17を検出した。

SE03・08・15は切り合い関係があり、SE15がSE03・08に先行する。いずれも井戸側は抜き取られているものとみられる。掘り下げを行ったSE03・08は深さ0.80m以上で、底は確認できていない。SE03からは土師器、肥前磁器、関西系陶器が出土しており、このうち肥前磁器碗の年代から井戸が埋められた年代は19世紀末とみられる。

SK07は出土遺物がなく年代は不明である。SK09は出土した肥前磁器碗の年代から18世紀後葉の遺構とみられ、SK17はこれに先行する遺構であることから少なくとも18世紀後葉以前の遺構である。

#### (まとめ)

今回の調査では、おもに17世紀末～18世紀の遺構を確認した。検出した遺構は井戸と土壌で、なかでも井戸は限られた調査区内において19世紀末に埋められたものを含め計4基を検出した。当該地における土地利用のあり方の一端を知ることができたと考える。

#### 【引用・参考文献】

- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013、「島之内2丁目所在遺跡発掘調査(SI11-1)報告書」：  
『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)』、pp.375 - 384
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2018a、「島之内2丁目所在遺跡発掘調査(SI16-1)報告書」：  
『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2016)』、pp.361 - 366
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2018b、「島之内2丁目所在遺跡発掘調査(SI16-2)報告書」：  
『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2016)』、pp.367 - 378
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2019a、「島之内2丁目所在遺跡発掘調査(SI17-1)報告書」：  
『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2017)第1分冊』、pp.419 - 426
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2019b、「島之内2丁目所在遺跡発掘調査(SI17-1)報告書」：  
『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2017)第2分冊』、pp.293 - 294

東壁地層断面  
(西から)



第6層上面  
遺構検出状況  
(南西から)



第6層上面全景  
(北東から)





出土遺物 (1 ~ 7 : SE610)



出土遺物 (8 ~ 10 : SK601、11 ~ 16 : SK505、17 ~ 23 : 第4層)

## 大坂城跡発掘調査 (SOS20-1) 報告書

調査箇所	大阪市中央区天満橋京町27-3
調査面積	9㎡
調査期間	令和2年7月28日
調査担当者	課長 鈴木 慎一、櫻井 久之

### 〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は豊臣氏大坂城の惣構内の北端に位置し、大川南岸沿いの土佐堀通から南に40mほど入った場所にある(図1)。敷地の南側は北大江公園に接し、両者の間に上町台地の最北端であることを示す崖があり、現在は石垣や防空壕となっている。

周辺ではOS88-8次、OS13-29次などの調査が行われ、後者では大坂夏ノ陣に関係する焼土層のほか豊臣後期の溝・土壌が検出され、慶長3(1598)年の大坂町中屋敷替えに伴う厚い盛土が確認されている。

今回の調査地では、令和2年7月1日に敷地中央部で1箇所、試掘調査を行い、その結果、地表面下約1.9mに夏ノ陣の焼土層とみられる地層の存在が確かめられた。それを受けて事業者側と協議し、試掘壕の東側の位置に3.0m四方の調査区を設けてさらに調査を行うこととなった(図2)。調査は同月28日に入り、同日中に埋戻し・撤収を終えた。

### 〈調査の結果〉

#### 1. 層序(図3、図版1・2)

断面実測を行った調査区西壁断面の状況から述べる。

第0層：現代の擾乱で既存建物の基礎を解体撤去したときに生じたものである。

第1層：にぶい黄橙色(10YR6/4)粘土質シルトで数cm大の偽礫が全体に観察され、層厚50cm以上



図1 調査地位置図 縮尺1:3,000



図2 調査区配置図 縮尺1:1,000

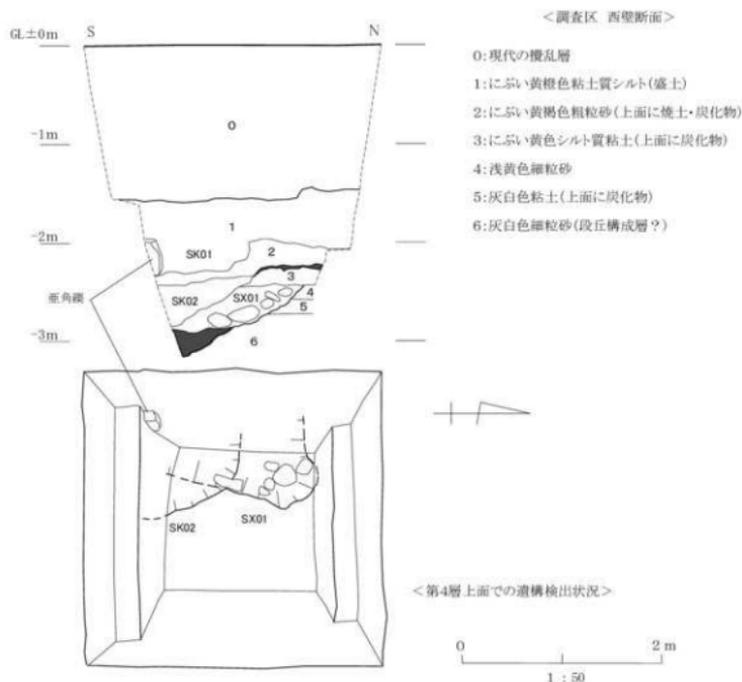


図3 調査区平面・断面図

ある。図版2下段の備前焼埴鉢1が出土した。

第2層：にぶい黄褐色(10YR5/3)粗粒砂層でよく締まっている。層厚は20～40cm。直上に炭化物・焼土が分布し、そこから古代の須恵器2・3、備前焼壺4・5、朝鮮半島産とみられる白磁壺6・7が出土した。当層直上に見られる焼土が試掘時に確認された焼土層に当たり、出土遺物から大坂夏ノ陣によるものと推測される。また、当層上面遺構として土壇SK01がある。

第3層：にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト質粘土層で最上部に厚さ数cmある炭化物層が覆う。層厚は約20cm。当層上面遺構として土壇SK02があり、基底面検出として遺構SX01が確認された。

第4層：浅黄色(2.5Y7/3)中粒砂層でよく締まっている。層厚は約15cmある。

第5層：SX01の掘形斜面で観察された灰白色(2.5Y8/2)粘土層で、厚さは約10cmある。最上部に炭層が見られる。

第6層：当層もSX01の掘形斜面で観察されたもので、灰白色(2.5Y8/2)細粒砂で非常によく締まっている。45cm以上の層厚があり、段丘構成層と推測される。

## 2. 遺構と遺物(図3・図版1・2)

第2層上面遺構：土壇SK01は調査区の南西隅を中心とし、半径1.10m、深さ0.35mある。外縁部が0.3mの幅で0.05mほど盛り上げられており、皿状に掘り込まれた中心部に高さ約0.4mの垂角礎を柱のように立てていた。遺構底面には炭化物が薄く分布し、第1層で埋められている。

第3層上面遺構：調査区南西隅に土壌SK02がある。検出状況から半径1.2mほどの円形平面をもつと思われる。播鉢状に掘り込まれ、0.4m以上の深さがある。肩口には第3層上面を覆う炭層が入り込んでいる。灰(5Y6/1)～灰黄(2.5Y6/2)色粘土質シルトを埋土とする。

第3層基底面遺構：調査区の西壁際にSX01が検出された。遺構の東端を検出しただけで全容がわからないが、播鉢状に0.8m以上の深さまで掘り込まれている。遺構はさらに西に向かって続いている。埋土は灰オリーブ(5Y6/2)色シルト質粘土で、下方には炭化物が多く含まれる。上方には拳大～人頭大の河原石が混入されている。厚手の玉縁をもつ丸瓦8が出土しており、豊臣前期の遺構と推測される。

#### 〈まとめ〉

今回は豊臣氏大坂城の惣構北端、かつ上町台地北端という場所での調査であった。検出された遺構の造られた目的を明確にできなかったが、豊臣期の土壌等が確認されるという成果があった。また、この時期の地層のなかに古代の遺物が混じってくるのも、古代の港津の存在が付近に想定される大川に面した上町台地先端部ならではと考えられる。一帯は大坂城関係の遺構だけでなく古代に関しても注目される場所といえ、今後の調査に期待が持たれる。

#### 参考文献

大阪市教育委員会・大阪市博物館協会大阪文化財研究所2015、「中央区天満橋京町における建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(0513-29)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.327-344





調査区と石垣・防空壕壁面(北東から)



調査区西壁断面(東から)



第4層上面檢出状況(東から)



第1層(1:備前焼播鉢、2:須恵器壺、3:須恵器蓋、4・5:備前焼壺、6・7:朝鮮半島産?白磁壺)、  
SX01(8:丸瓦)

## 大坂城跡発掘調査 (SOS20-2) 報告書

調査箇所	中央区谷町六丁目 31-2・8・22、46-1
調査面積	36 m <sup>2</sup>
調査期間	令和2年9月10・11日
調査担当者	課長 鈴木 慎一、櫻田 小百合

### 〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は大坂城跡の南部、長堀通と谷町筋が交わる谷町6丁目の交差点の南西約90mの位置にあたる。地形的には上町台地の高所部から西斜面への落ち際にあたり、敷地中央部に設けられた擁壁の東西で3m前後の高低差がある。調査地周辺は、近世には御用瓦師寺島家が瓦製作のために拝領した「寺島藤右衛門請地」にあたる。発掘調査例としては比較的少ないエリアで、これまでの調査としてはOS16-6・OS18-3次調査がある。OS16-6次・18-3次調査では、土探り後の埋立とみられる層厚2.5mを超える大規模な客土層が確認されている。客土層はOS16-6次調査では17世紀後半～18世紀前半と推定され、18-3次調査では客土の上部で18世紀代とみられる遺物が出土している〔大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2018、大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2020〕。いずれも客土層の上面では18世紀後葉の遺構が確認されており、OS16-6次調査では作業場付きの大型の竈が検出されている。

今回の調査は、建設工事に先立ち大阪市教育委員会が令和2年7月15日に実施した試掘調査において、現地表面から1.8m以下に近世以前の遺構面が確認されたことから本調査を実施することとなったものである。

調査は令和2年9月10・11日の2日間で実施した。東西6m、南北6mの調査区を設置し、事業主側でGL-1.5mまで掘削を行った後に着手した。重機により第8層上面まで掘削した後、これ以下の地層を人力と重機を併用して遺物採取を行いながら掘り下げた。これらの作業と並行して実測図の作成および写真撮影による記録作業を行った。調査終了後に埋め戻しを行い、現地での作業を完了した。

本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とし、現地で作成した調査区位置図を



図1 調査地位置図

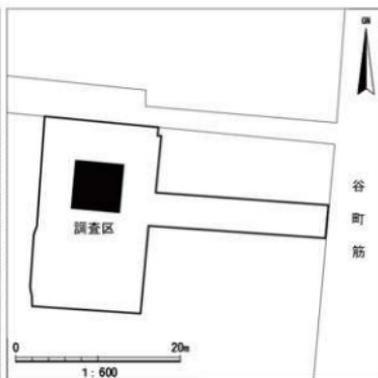


図2 調査区位置図

「大阪市地形図」にあてはめて求めたものである。本報告で用いる標高はT.P. 値（東京湾平均海面値）でTP±0mと表記する。

#### （調査の結果）

#### 1. 層序と遺物（図3～6、図版1～3）

調査地における標高は、敷地中央部の擁壁を境に東部では約TP+18m、西部では約TP+15mである。このうち調査を行ったのは建物新築部分の敷地西部にあたる。

第0層は旧建物解体後の盛土層で、層厚は60～170cmである。

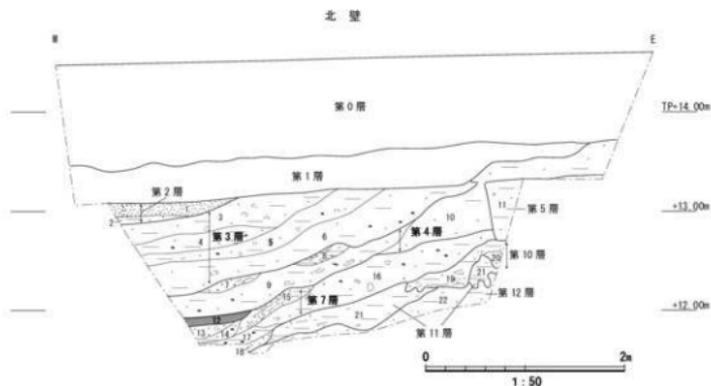
第1層は近代の盛土層である。層厚は最大40cmである。

第2層は燃焼残滓を主とする地層である。燃焼残滓は原型をとどめておらず何に由来するものかは不明である。調査区南西部では直径4m以上、深さ2.3m以上の大型の土塊SK00の埋土となり、ここを中心に調査区北西部にかけて分布する。瀬戸美濃焼磁器碗が出土していることから19世紀の地層であろう。

第3～10層は客土層である。いずれも東から西に傾く堆積状況を示しており、台地高所の東側から埋められたものと考えられる。客土された時期はいずれも18世紀代とみられるが、一括して埋められたものではなく、複数の単位が確認できることから、段階的に客土されたものと推定される。金属加工に伴う遺物や焼土、陶磁器を多く含む地層がみられることから、調査地周辺で生じた廃棄物を台地斜面の当該地に投棄したものと考えられる。

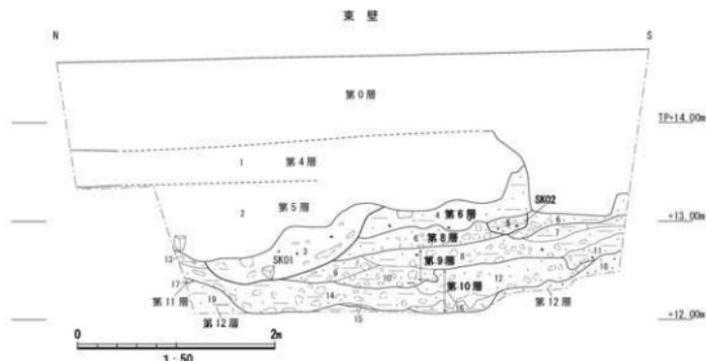
第3層はオリブ黒色・黒褐色・オリブ褐色の細粒砂質シルトからなる。層厚は最大80cmである。遺物は肥前磁器青磁碗4・染付碗18が出土した。

第4層は暗灰黄色細粒砂質シルト・暗オリブ色シルト質細粒砂を主とする客土層で、部分的に貝を多量に含む。層厚は最大約40cmである。本層からは土師器皿14・15、肥前磁器碗2・17、



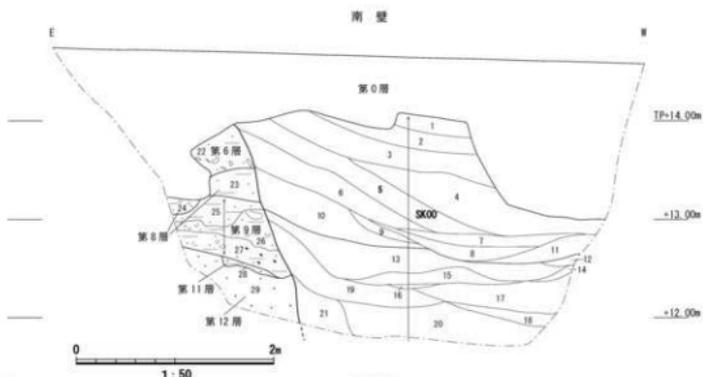
- |                                         |                                                      |
|-----------------------------------------|------------------------------------------------------|
| 1: 灰白色(10YR7/1)燃焼残滓〔第2層〕                | 12: 黒色(10Y2/1)炭〔第7層〕                                 |
| 2: オリブ黄色(5Y6/4)中粒～細粒砂質シルト〔第2層〕          | 13: 偽磁を含む黄褐色(2.5Y5/4)中粒～細粒砂〔第7層〕                     |
| 3: 偽磁を含むオリブ黒色(5Y3/1)細粒砂質シルト〔第3層〕        | 14: 偽磁を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂質シルト〔第7層〕                   |
| 4: 炭・偽磁を含む黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂質シルト〔第3層〕      | 15: 細粒砂・偽磁・焼土を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂質シルト〔第7層〕            |
| 5: 炭・偽磁を含む黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂質シルト〔第3層〕      | 16: 炭・焼土・漆喰を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂質シルト〔第7層〕              |
| 6: 炭・偽磁を含むオリブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルト〔第3層〕    | 17: 炭を含むオリブ黒色(5Y3/2)シルト〔第7層〕                         |
| 7: 偽磁を含む淡黄色(2.5Y7/3)粗粒～中粒砂〔第4層〕         | 18: 地山偽磁を含む明黄褐色(2.5Y6/6)細粒砂〔第7層〕                     |
| 8: 炭・細粒砂・偽磁を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂質シルト〔第4層〕 | 19: 地山偽磁を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂質シルト〔第10層〕                |
| 9: 炭・偽磁・焼土を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂質シルト〔第4層〕  | 20: 地山偽磁を多量に含む暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂質シルト〔第10層〕             |
| 10: 炭・貝を含む暗オリブ色(5Y4/3)シルト質細粒砂〔第4層〕      | 21: オリブ色(5Y5/6)極細粒砂質シルト〔第11層〕                        |
| 11: 炭・偽磁を含むオリブ黒色(5Y3/2)細粒砂質シルト〔第5層〕     | 22: 灰黄色(2.5Y7/2)・明黄褐色(2.5Y6/8)細粒砂～極細粒砂質シルト〔第12層(地山)〕 |

図3 北壁地層断面図



- 1: 炭・頁を含む暗オリーブ色(SY4/3)シルト質細粒砂【第4層】  
 2: 礫・偽礫を含むオリーブ黒色(SY3/2)細粒砂質シルト【第5層】  
 3: 炭・礫・偽礫を含むオリーブ黒色(SY3/2)細粒砂質シルト【SK01】  
 4: 炭・少量の偽礫を含む暗灰黄色(2. SY4/2)細粒砂質シルト【第6層】  
 5: 炭・偽礫を含む暗灰黄色(2. SY4/2)細粒砂質シルト【SK02】  
 6: 地山偽礫を多量に含むオリーブ色(SY5/4)わずかにシルト質細粒砂【第9層】  
 7: 地山偽礫を含むオリーブ褐色(2. SY4/3)細粒砂質シルト【第9層】  
 8: 炭・多量の地山偽礫を含む黒褐色(2. SY3/2)細粒砂質シルト【第9層】  
 9: 地山偽礫を含む黄褐色(2. SY5/6)中粒～細粒砂質シルト【第9層】  
 10: 地山偽礫を含む暗灰黄色(2. SY4/2)細粒砂質シルト【第9層】  
 11: 炭・地山偽礫を含む暗灰黄色(2. SY4/2)細粒砂質シルト【第9層】  
 12: 地山偽礫を含む明黄褐色(2. SY7/6)細粒砂質シルト【第10層】  
 13: 地山偽礫を含む暗灰黄色(2. SY4/2)細粒砂質シルト【第10層】  
 14: 地山偽礫を多量に含む暗灰黄色(2. SY4/2)細粒砂質シルト【第10層】  
 15: 地山偽礫を含む黄褐色(2. SY5/4)極細粒砂質シルト【第10層】  
 16: 地山偽礫を含む明黄褐色(10YR7/6)細粒砂質シルト【第10層】  
 17: オリーブ色(SY5/6)極細粒砂質シルト【第11層】  
 18: 黄褐色(10YR5/8)粗粒～中粒砂【第12層(地山)】  
 19: 灰黄色(2. SY7/2)・明黄褐色(2. SY6/8)細粒砂質シルト【第12層(地山)】

図4 東壁地層断面図



- 【SK00】  
 1: 地山偽礫・中～細粒粗含む黒褐色(2. SY3/2)極細粒砂質シルト  
 2: 地山由来の浅黄色(2. SY7/4)細粒～極細粒砂質シルト偽礫・細礫を含む粗粒～中粒砂偽礫  
 3: 黒褐色(2. SY3/2)極細粒砂質シルト  
 4: 地山由来の浅黄色(2. SY7/4)中粒砂・シルト質中粒砂  
 5: 地山由来の黄褐色(10YR8/8)中粒～細粒砂質シルト偽礫  
 6: 地山偽礫を含むオリーブ黒色(SY3/1)シルト質中粒～細粒砂  
 7: オリーブ黒色(SY3/2)シルト質細粒砂  
 8: 地山由来の浅黄色(2. SY7/4)わずかにシルト質粗粒～中粒砂偽礫  
 9: 赤色・白色の燃焼残滓を含む黒色(10YR2/1)中粒砂  
 10: オリーブ黒色(SY3/2)シルト質中粒～細粒砂  
 11: 地山偽礫を含むオリーブ黒色(SY3/2)シルト質中粒～細粒砂  
 12: 燃焼残滓を含む明暗灰色(SYR2/1)粗粒～細粒砂  
 13: 赤色・白色の燃焼残滓を含む黒色(10YR2/1)中粒～細粒砂  
 14: 暗赤褐色(2. SYR3/2)中粒砂(焼土)  
 15: 赤色・白色の燃焼残滓を含む黒褐色(SYR2/2)中粒砂

- 【SK00】  
 16: 暗赤褐色(SYR3/6)極細粒砂(焼土)  
 17: 黒褐色(10YR3/1)シルト質中粒砂  
 18: 赤色の燃焼残滓を含む暗赤褐色(2. SYR3/1)粗粒～中粒砂  
 19: 黒色(SYR1.7/1)細粒砂質シルト  
 20: 白色の燃焼残滓を含む赤黒色(10YR1.7/1)粗粒～中粒砂  
 21: 黒褐色(10YR2/2)シルト質細粒砂  
 22: 暗灰黄色(2. SY4/2)シルト質細粒砂【第6層】  
 23: 地灰色(10YR4/1)細粒砂質シルト【第8層】  
 24: 地山偽礫を多量に含むオリーブ色(SY5/4)わずかにシルト質細粒砂【第9層】  
 25: 地山偽礫を含むオリーブ褐色(2. SY4/3)細粒砂質シルト【第9層】  
 26: 多量の地山偽礫を含む黒褐色(2. SY3/2)細粒砂質シルト【第9層】  
 27: 炭・地山偽礫を含む暗灰黄色(2. SY4/2)細粒砂質シルト【第9層】  
 28: 黄褐色(10YR5/6)中粒砂質シルト【第11層】  
 29: 黄褐色(10YR5/8)粗粒～中粒砂【第12層(地山)】

図5 南壁地層断面図

関西系陶器碗3・土瓶16などの18世紀前半～後半の陶磁器が出土している。

第5層はオリーブ黒色細粒砂質シルトからなり、層厚は最大80cmである。肥前磁器皿12・碗蓋13が出土した。

第6層は暗灰黄色細粒砂質シルトからなり、層厚は最大50cmである。輪の羽口が出土している。

第7層は焼土を含む暗灰黄色細粒砂質シルトを主とし、一部炭層も認められる。層厚は最大40cmで、須恵器片9、肥前磁器皿10、関西系陶器碗11のほか、輪の羽口が出土している。焼土・炭のほか輪の羽口を含むことから、金属加工に伴う片付け層の可能性はある。

第8層は地山偽礫を多量に含むオリーブ色シルト質細粒砂からなり、層厚は最大約20cmである。本層からはイヌの骨・歯がまとめて出土した(註1)(図版3下)ほか、輪の羽口6、その他多量の陶磁器が出土した。

第9層は地山偽礫を含む黒褐色細粒砂質シルトを主とする客土層である。層厚は最大40cmである。輪羽口5、土師器釜19、土人形20、肥前磁器碗21～23、肥前陶器碗24、関西系陶器碗25・26、花瓶27、水注28、軟質施軸陶器の灯明皿29など多量の遺物が出土した。

第10層は地山偽礫を含む明黄褐色細粒砂・暗灰黄色細粒砂質シルトを主とし、層厚は最大約50cmである。肥前磁器碗8が出土している。

第11層はオリーブ色極細粒砂質シルトからなり、層厚は最大35cmである。岩相から人為的な地層であることから盛土層とみられる。本層からは須恵器杯Gの蓋1、土師器甕7が出土した。1は7世紀中葉の難波Ⅲ中段階〔佐藤隆2000〕に属するものとみられる。

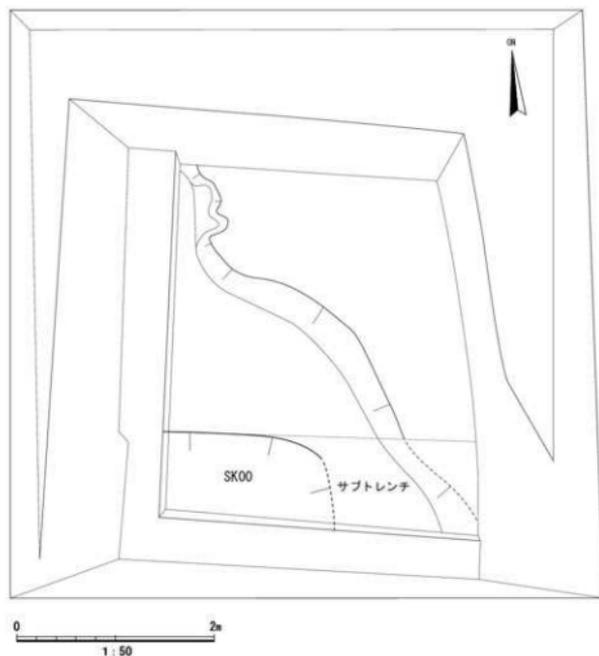


図6 第12層上面平面図

第12層は粗粒砂～極細粒砂質シルトからなる段丘構成層である。

〈まとめ〉

調査地は上町台地高所部から西斜面側にやや下がった位置にあたり、調査ではこの斜面地を埋める7世紀中葉および18世紀代の客土層を確認した。18世紀以降は、周辺で生じた廃棄物などが台地側から投棄されながら、段階的に埋め立てられていったようすが確認できた。盛土内には、樋羽口などの金属加工に伴う遺物や、動物骨、多量の陶磁器などが出土し、当時の人々の生活のようすや台地縁辺部における土地利用のあり方を知るうえで多くの知見を得ることができたものとする。

なお、今回の調査では7世紀中葉以降17世紀前半までの地層は確認できず、この時期の遺物もほぼ認められなかった。こうした状況が近世の土採りによるものであるのか、傾斜地にあたり積極的な土地利用が行われなかったのかといった点については、今後の周辺での調査成果の蓄積により明らかになることを期待したい。

（註1）樽野博幸氏よりご教示をいただいた。

【引用・参考文献】

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所 2018、「大坂城跡発掘調査（OS16-6）報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（2016）』、pp. 339-346

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所 2020、「大坂城跡発掘調査（OS18-3）報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（2018）第1分冊』、pp. 277-288

佐藤 隆 2000、「古代難波地域の土器様相とその史的背景」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第十一、pp.253-265





北・東壁地層断面および第12層上面まで掘削状況（南西から）



東・南壁地層断面および第12層上面まで掘削状況（北西から）



出土遺物 (1 : 第 11 層)



出土遺物 (2・3 : 第 4 層)



出土遺物 (4 : 第 3 層)



出土遺物 (5 : 第 9 層、6 : 第 8 層)



出土遺物 (7 : 第 11 層、8 : 第 10 層、9 ~ 11 : 第 7 層、12・13 : 第 5 層、14 ~ 17 : 第 4 層、18 : 第 3 層)



出土遺物 (19～29: 第9層)



出土遺物 (第8層出土動物(イヌ)骨)



## 大坂城跡発掘調査（SOS20-3）報告書

調査箇所	大阪市中央区農人橋一丁目 25-1
調査面積	36 m <sup>2</sup>
調査期間	令和3年1月25日～1月27日
調査担当者	課長 鈴木慎一 田中 裕子

### 〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は古代～近世の遺構・遺物が重層的に確認される大坂城跡に位置する。周辺での調査事例は、大坂城跡においては比較的少なく、調査地南西の南大江小学校において豊臣期のだるま窯9基と塀や暗渠・溝が検出されているほか（OS02-8）、金郷公園南の敷地で徳川期の井戸や石組溝が確認されている（OS89-40）のみである（図1）。

今回の調査は、建設工事に先立ち当該地で行われた試掘調査で、現地表下0.9 m以下で本格的な調査を必要とする近世以前の地層や遺物が確認されたことにより実施された。

作業は令和3年1月25日より着手した。調査区は敷地内に東西6m、南北6mの36 m<sup>2</sup>で設置した。GL-0.9 mまでの現代盛土を重機で除去し、以下を人力で掘り下げた。また、地層の堆積を確認するため、調査区の中央部に深掘りトレンチを設け、GL-3.0 mまで調査を行った。各層において、遺構・遺物を検出し、図面・写真等の記録作業を行った後、埋め戻しを行い令和3年1月27日に調査を終了した（図2）。

本報告で用いた方位は、世界測地系に基づく座標北を基準とし、建物の配置を基準として街区図に当てはめて求めたものである。標高はT.P. 値（東京湾平均海面値）を用い、本文および図中ではTP±〇mと表記した。

### 〈調査の結果〉

#### 1. 層序（図3・4、図版1・4）

調査地は上町台地上に位置し、東北が高く、西南に向かって下がる地形となっている。敷地内はTP+11.2 m前後で比較的平坦である。



図1 調査地位置図

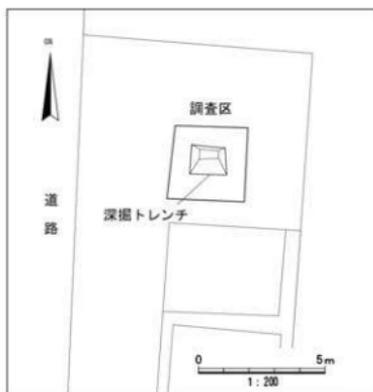


図2 調査区位置図

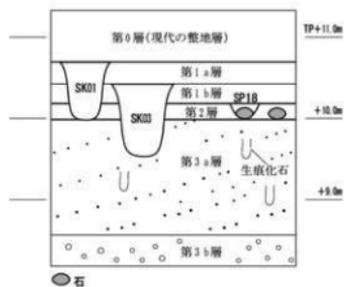


図3 地層と遺構の関係図

第0層 近現代の盛土層で、層厚88～106cmである。

第1層 近世盛土層である。第1a層と第1b層の上下二層に分かれる。第1a層は炭を含む灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂からなり、層厚は10～23cmである。第1b層は褐灰色(10YR5/1)中粒砂からなり、層厚は10～20cmである。第1層からは、一重網目文の肥前磁器染付碗や掻き揚げ痕のある土師器焙烙など、17世紀後葉までの遺物が出土した。

第2層 近世盛土層である。灰黄色(2.5Y6/2)シルト質中粒砂からなり、層厚は12cmである。調査区の西半分に分布し、肥前陶器25や備前焼26など17世紀前葉頃の遺物を含む。本層を外した下

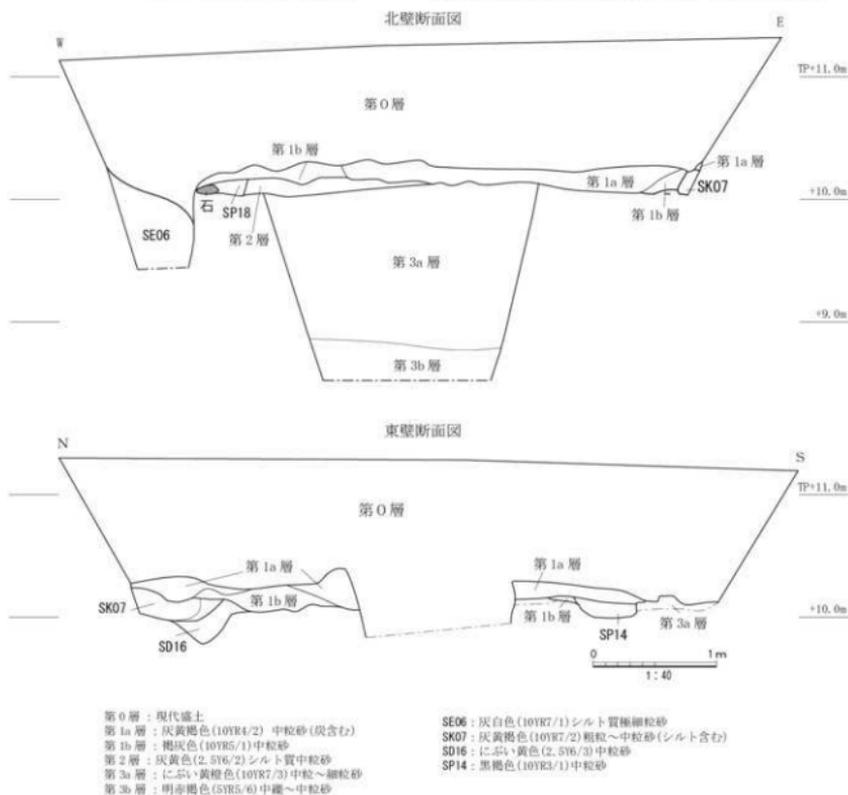


図4 調査区地層断面図

第0層：現代盛土  
 第1a層：灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂(炭含む)  
 第1b層：褐灰色(10YR5/1)中粒砂  
 第2層：灰黄色(2.5Y6/2)シルト質中粒砂  
 第3a層：にぶい黄褐色(10YR7/3)中粒～細粒砂  
 第3b層：明赤褐色(5YR5/6)中粒～中粒砂

SE06：灰白色(10YR7/1)シルト質極細粒砂  
 SK07：灰黄褐色(10YR7/2)粗粒～中粒砂(シルト含む)  
 SD16：にぶい黄色(2.5Y6/3)中粒砂  
 SP14：黒褐色(10YR3/1)中粒砂

より石を3点組み合わせた礎石列 SA201が、また本層上面より掘られた小穴に礎石を据えた柱列 SA202が検出された。

第3層 段丘構成層である。第3a、3b層の上下2層に分かれる。第3a層は層厚135cmで、にぶい黄褐色(10YR7/3)中粒～細粒砂からなり、巢穴とみられる生痕化石が確認できる。一部偽礫を含むことから堆積後に動いている可能性もある。第3b層は層厚35cm以上で、明赤褐色(5YR5/6)中礫～中粒砂からなる。

## 2. 遺構と遺物 (図5・6、図版2・3)

### i) 第2層の遺構 (図5)

第2層上面および層中で、礎石列や溝、小穴を検出した。

SA201 調査区西側で、第2層を外した第3層の上面で検出された南北方向の礎石列である。直径15cmほどの3つの石を組み合わせ配置してあった。

SA202 SA201に近い位置で検出された南北方向の柱列であるが、SA201とはやや軸が異なる。第2層上面より掘られたSP18やSP19などの小穴からなり、直径15cmほどの石を据え付けていた。

SA201・202はよく似た大きさの石を礎石として用いており、ごく近い時期に建て替えられた建築物の可能性が。第2層が17世紀前葉の遺物を含むことから、それに近い豊臣後期～徳川初期の礎石建築物とみられる。両者ともほぼ現在の敷地と同じ方向であり、現在に繋がる敷地割りも当該期まで遡る可能性が指摘できる。

SD16 調査区北東部に位置し、上層より掘られていたSK07に壊される。幅60cm、長さ200cm以上、深さ22cmの東西方向の溝である。埋土は灰白色(5Y7/1)中粒砂からなり偽礫を含む。

SP09 調査区南部に位置し、東西30cm、南北50cm、深さ48cm、埋土はにぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質中粒砂からなる。平瓦が出土した。

SP09と同様の埋土と深さをもつ小穴はSP08、SP11、SP13などがある。SP13からは軒丸瓦が出土した。

上記の溝や小穴からは時期の明瞭な遺物の出土はないが、検出時の状況や埋土から第2層上面の遺構とみられるため、SA201・202同様、豊臣後期～唐久川初期に属すると考えられる。

### ii) 第1b層上面の遺構 (図6、図版2)

第1b層上面の遺構として、楕円形の廃棄土塊SK02・03・07と小穴を検出した。

SK03 調査区南部に位置し、東西165cm、南北135cm、深さ46cmで楕円形を呈する。埋土は黄灰色(2.5Y4/1)シルトを含む粗粒～中粒砂からなり、一度に埋め戻された廃棄土塊である。

出土遺物は中国産青花碗1、肥前磁器染付碗2～6、同色絵皿、同青磁蓋物7、肥前陶器碗8、丹波焼すり鉢9、土師器皿10、焙烙11、輪羽口12、丸瓦・平瓦・道具瓦、石製品13・14などがある。2は体部外面に一重網目文が描かれる。3は芙蓉手の碗である。8は同形品が3個体以上ある呉器手碗である。10はいわゆるへそ皿である。11は掻き上げ痕があり、A類に属する(難波1992)。12は鍛冶用の輪羽口である。13はサヌカイト製で、火打石とみられる。14は砥石である。

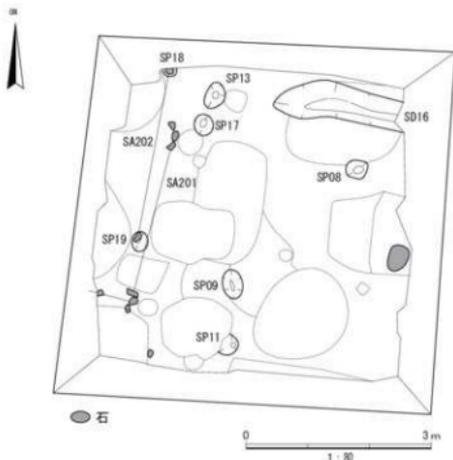


図5 第2層の遺構

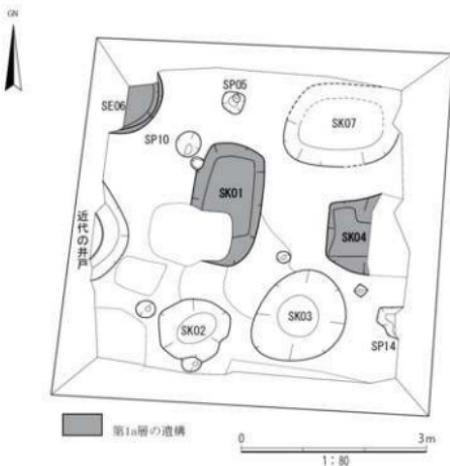


図6 第1層の遺構

**SK02** 調査区南部に位置する東西115 cm、南北100 cm、深さ35 cmの楕円形の土坑である。埋土は黄灰色(2.5Y4/1)シルト質中粒砂からなり、一度に埋め戻されている。

出土遺物は肥前磁器染付碗・小杯16・飯飯具15、同青磁碗・皿17、肥前陶器壺18・鉢19、土師器皿、瓦片である。17は見込みが蛇の目軸剥ぎされる。19は白色軸が付け掛けされている。

**SK07** 調査区北東部に位置し、**SD16**を壊している。東西180 cm、南北125 cm、深さ18 cmで楕円形を呈する。肥前磁器染付碗20、同白磁碗、平瓦が出土した。20は底部外面に「年製」の文字がある。

**SK02・03・07**はよく似た規模、

埋土でありをもつ廃棄土壌であり、出土遺物はいずれも17世紀後葉に属するといえる。

**SP05** 調査区北部にある柱穴で、直径20 cm、深さ27 cmである。埋土にはぶい黒褐色(10YR4/3)極粗粒～細粒砂で、柱痕跡が確認された。遺物の出土はない。

そのほか、**SP10**、**14**など本層準の小穴が複数みられた。

17世紀後葉には、当該地は屋敷地裏手などの廃棄土壌の掘られる一角に移り変わっていったようである。

### iii) 第1a層上面の遺構(図6、図版2下)

第1a層上面の遺構として、井戸や方形の瓦廃棄土壌が検出された。

**SE06** 調査区北西角で見つかった直径120～130 cmに復元できる素掘りの井戸である。深さは80 cm以上ある。灰を含む灰白色(10YR7/1)シルト質極細粒砂と漆喰片を含む明黄褐色(10YR6/6)細粒砂で埋め戻されていた。灰を含む埋土中からは、肥前磁器染付碗21、関西系陶器碗、備前焼甕、平瓦や貝殻などが出土した。21は体部外面にた唐草文様、見込みは松竹梅円文が描かれる。遺物の年代から18世紀中葉頃に埋められたとみられる。

**SK01** 調査区中央で検出された瓦廃棄土坑である。東西112 cm、南北200 cm、深さ44 cmで方形を呈する。埋土は黒褐色(2.5YR3/1)中粒～細粒砂質シルトからなり、一度に埋め戻されている。肥前磁器染付碗22・23・皿、肥前陶器甕24、関西系陶器碗・甕、巴文軒丸瓦のほか、大量の丸瓦・平瓦が出土した。22は外面下半に氷裂文が描かれ、見込みに五箇弁のコンニャク印判をもつ。23は外面体部にコンニャク印判による桐葉文がある。これらの遺物は18世紀中葉頃とみられる。

**SK14** **SK01**と同様の瓦廃棄土壌であり、大量の丸瓦・平瓦が出土した。

### iv) 各層出土の遺物、混入・採集品

第2層 肥前陶器碗25や備前焼甕26などが出土した。25は鉄軸が施され、天目碗の可能性がある。26はいわゆる水屋甕である。これらの遺物は17世紀前葉のものであろう。

第1層 27は瀬戸美濃焼の灯火具(たんころ)である。おおぶりで鉄色軸が施される。18世紀

代のものである。

v) 混入・採集品

そのほか、混入品としては第1層上部で見つかった須恵器甕 29 がある。体部の破片で、外面は縄目、内面は同心円当て具痕が確認できる。

28 は採集品で、篆書体の熙寧元宝とみられ、北宋時代の渡来銭である。

(まとめ)

・17 世紀前葉頃の南北方向の礎石列 SA201・202 および東西方向の溝 SD16、小穴群が確認できた。SA201・202 はあまり時期差を置かずに建て替えられた可能性がある。これらの遺構は豊臣後期～徳川初期に属するとみられ、当該時期において、現在と同様の町割りが行われ、屋敷地として利用されていた可能性が指摘できる。

・17 世紀後葉の遺物を含む廃棄土壌である SK02・03・07 と小穴を検出した。当該地は 17 世紀後葉には、廃棄土壌の掘られる屋敷地裏手などに相当したとみられる。

・豊臣後期～徳川初期にかけて礎石列のあった場所は、その後井戸 SE06 が掘られた。この井戸も 18 世紀中葉には埋め戻されている。同時期の遺構として、SK01 や 04 などの瓦廃棄土壌がある。周辺地域の中で比較的調査事例の少なかった当該地において、町割りの開始された時期及び近世町屋としての利用の実態とその変遷を知ることができた。

【引用・参考文献】

大阪市文化財協会 2003、「F 地区の調査 (OS89-40)」『大坂城跡』Ⅶ、pp. 321-324

大阪市文化財協会 2003、「大坂城跡 (OS02-8) 発掘調査報告」『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告—2001・2002 年度—』、pp. 49-74

難波洋三 1992、「徳川氏大坂城期の焙烙」『難波宮址の研究』九、pp. 373-400





北壁地層断面  
(南から)



第1・2層の遺構完掘  
(南から)



SA201・202  
(南から)



出土遺物 SK03 (1 ~ 14)



出土遺物

SK02 (15 ~ 19)、SK07 (20)、SE06 (21)、SK01 (22 ~ 24)



出土遺物

第2層 (25・26)、第1層 (27)、表採 (28)、混入 (29)



## 大坂城跡発掘調査 (SOS20-4) 報告書

調査箇所	大阪市中央区農人橋一丁目3-3 南大江小学校
調査面積	42㎡
調査期間	令和2年1月25日～28日
調査担当者	課長 鈴木 慎一、櫻井 久之

### 〈調査に至る経緯と経過〉

今回の調査地である市立南大江小学校(図1・2)では、平成14年度に敷地の南西部で本調査(SOS2-8次)が行われ、豊臣期の屋瓦を焼成した達磨窯9基が確認されるなどの注目される成果があった。校舎の東西棟とグラウンドの間に校舎増築が計画されたことを受け、計画地の埋蔵文化財の状況を確認するために令和元年10月に試掘調査(SOS19-1次)を実施した。その結果、グラウンド面から-100cmで焼土層が面的に広がりをもって見られ、近世前期頃の生活面の存在が窺えたことから今回の本調査となった。

調査区は増築校舎範囲の西寄りに南北3.5m、東西12.0mで設定し、グラウンド面から-2.5m程度の深さまで調査した。重機と人力を併用し掘り上がった調査区で写真撮影・実測を行い、その後埋戻しを行って現場での作業を終えた。

### 〈調査の結果〉

#### 1. 層序(図3、図版1・2)

SOS20-3次など周辺での調査から、南大江小学校北側の東西道路に尾根筋があり、そこから南に向けて傾斜して「龍造寺谷」の深部に向かう古地形が想定される場所に当たる。

第0層：現代の盛土および擾乱で、盛土の平均的な厚さは80cm程度。地表面の標高はTP+9.0m前後にある。



図1 調査地位置図 縮尺1:8,000



図2 調査区配置図 縮尺1:2,000

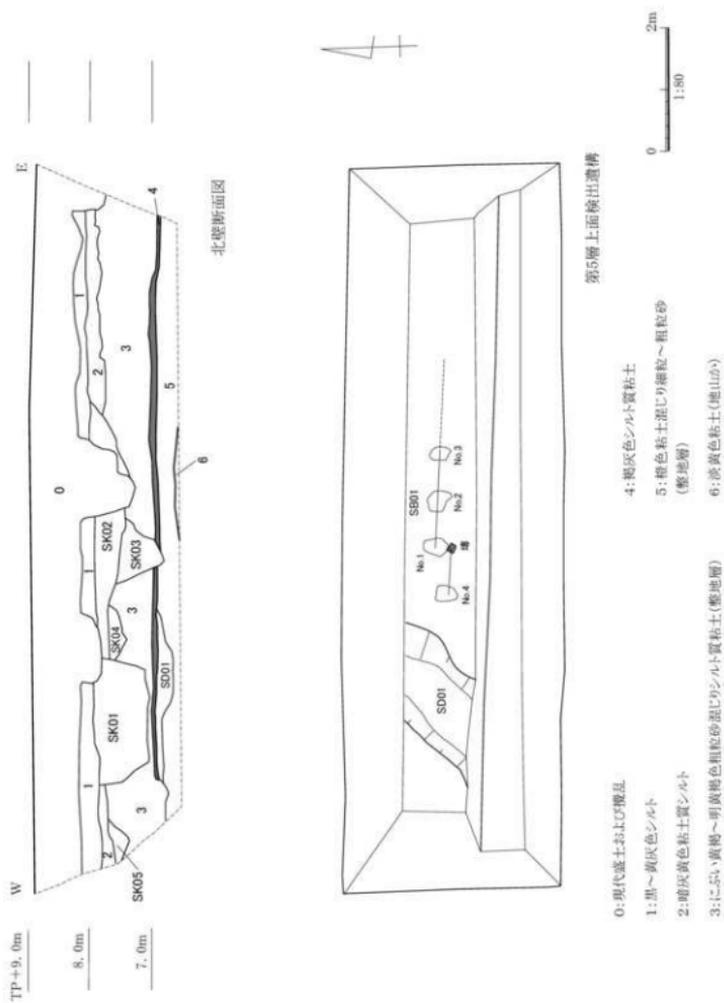


図3 調査区平面・同北壁断面図

第1層：黒色(2.5Y2/1)～黄灰色(2.5Y4/1)シルトの旧表土である。

第2層：暗灰黄(2.5Y5/2)色粘土質シルト層で、調査区東端付近では直上に炭・焼土が広がる。当層上面に土壌SK01・02がある。

第3層：にぶい黄褐(10YR5/3)～明黄褐(10YR7/6)色の粗粒砂混じりシルト質粘土で、地山層に由来する偽礫を多量に含んだ整地層である。層厚100cm前後で、全体的によく締まっている。遺物は殆ど含まれない。当層上面遺構になると考えられる土壌SK03～05がある。

第4層：褐灰(10YR5/1)色シルト質粘土層で、層厚5～15cmとやや幅があるが、調査区のほぼ全域に広がる。上面は生活面となっていたと考えられる。豊臣期のもので推測される瓦が出土した。

第5層：橙(7.5YR6/6)色粘土混じり細粒～粗粒砂の整地層である。上面に礎石建物SB01・溝SD01が検出された。図版2下段の大型の丸瓦(幅16.5cm、厚さ2.0cm、コビキB)が出土している。

第6層：淡黄(2.5Y8/4)色粘土層。地山層とみられ、TP+6.8mにあることから、調査地北東にあるSOS20-3次調査地からは3m以上下がっていることになる。「龍造寺谷」の斜面地にあることを示す。

## 2. 遺構(図3・図版1・2)

SK01・02は第1層基底面の土壌で、江戸時代後期～末のものである。前者は調査区西端にあり、北壁部では上端幅2.0m、深さ0.9mある。シジミの貝殻といった食物残渣や瓦が廃棄されている。埋土は黒褐(2.5Y3/1)色砂質シルト。後者は調査区中央部に広く皿状に掘られたもので、黄灰(2.5Y4/1)色砂質シルトを埋土とし、下部に瓦・炭・焼土が含まれる。

SK03～05は第2層基底面の土壌と考えられるもので、いずれも灰(5Y4/1)～灰オリーブ(5Y5/2)色の砂質シルトを埋土とし、断面形状が描鉢状になる。

SB01は礎石建物で調査区中央部の第5層上面に検出された。礎石は4つ(No.1～4)確認され、上面30～40cm大、みな花崗岩である。No.1～3は芯々間を75cm取って東西に並ぶ。No.4はこの軸線上から少しずれてNo.1の西側72cmの位置にある。No.1の南に接して塀が置かれており、この中心とNo.4の中心を結んだラインはNo.1～3による軸線と平行する。礎石の大きさから塀ではなく家屋のものと思われるが、礎石列の方向が妻側か平側かは明らかでない。塀は直角に成形された一角を有し、残存部が約14cm四方、厚さ3.8cmあり、焼成良く硬質である。OS02-8次調査では、八角形の刻印のある直角三角形をした塀が複数出土しているが、この塀には刻印は確認できない。

SD01 調査区西端部の第5層上面で検出された北東-南西方向の溝。幅124cm、深さ20cmあり、明黄褐(10YR7/6)色細粒～中粒砂で埋まる。埋土中に1cm程の厚さで炭層が広がる。平瓦・木片が出土した。

### (まとめ)

今回の南大江小学校内における調査では、以前の調査で検出された瓦窯を確認するには至らなかったが、同時期に存在したと考えられる礎石建物の存在が確認された。窯と建物は十数mの距離にあり、この建物は瓦窯の関連施設であったと考えられよう。上町台地斜面の谷の中を造成し、こうした瓦工房が設けられていた状況を推定することができる。現在、両者の間には背割り下水が通っている。そこは大坂築城時はまだ谷の斜面地であり、工房が存在していた時には今見られるように整った下水路ではなかったのではないと思われる。南大江小学校の敷地内は大坂城跡内でも注意深く調査を行っていく必要がある地点といえよう。

### 参考文献

大阪市文化財協会2003「OS02-8次調査」『大阪府埋蔵文化財発掘調査報告—2001・2002年度—』



調査区全景(西から)



調査区北壁断面(南西から)



礎石建物(北から)



出土遺物 第5層(丸瓦)

## 俗人町遺跡発掘調査 (SRJ20-1) 報告書

調査箇所	天王寺区逢阪一丁目 85
調査面積	25 m <sup>2</sup>
調査期間	令和2年10月5日
調査担当者	課長 鈴木 慎一、櫻田 小百合

### 〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は四天王寺の西、谷町筋から90mほど西に位置し、地形的には上町台地の高所部から西斜面への変換点付近にあたる。周辺での調査例としてはRJ02-5・12-1次調査などがあり、中世および近世の遺構・遺物が確認されている〔大阪市文化財協会2003・大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014〕。今回の調査地に最も近接するRJ02-5次調査では、14世紀を中心とする中世の井戸や埋土中に土師器皿を多量に含む池状の土壌が確認されている〔大阪市文化財協会2003〕。

今回の調査は、建設工事に先立ち大阪市教育委員会が令和2年9月16日に実施した試掘調査において、現地表面から0.45m以下に中世以前の遺構面が確認されたことから本調査を実施することとなったものである。

調査は令和2年10月5日に実施した。東西5m、南北5mの計25m<sup>2</sup>の調査区を設定し、第3層上面まで重機により掘削した後、平面精査および遺構掘削を人力により行い、実測図の作成および写真撮影による記録作業を行った。同日中に埋め戻しを行い、現地での作業を完了した。

本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とし、現地で作成した調査区位置図を「大阪市地形図」にあてはめて求めたものである。地層断面図は現地表面を基準に作成し、図3の南壁地層断面図には、国土地理院の提供する「地理院地図」の調査地西側道路面の標高値をもとに算出した現地表面の標高を参考値として、T.P. 値（東京湾平均海面値）でTP±〇mと表記して示した。

### 〈調査の結果〉

#### 1. 層序 (図3、図版1上)

調査地における現地表面の標高は約TP+20mである。

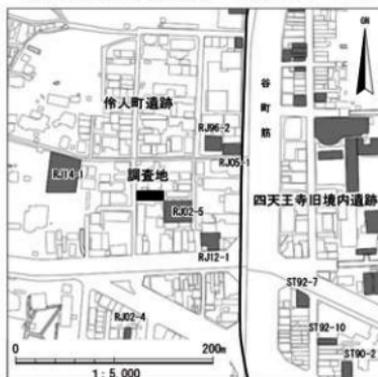


図1 調査地位置図

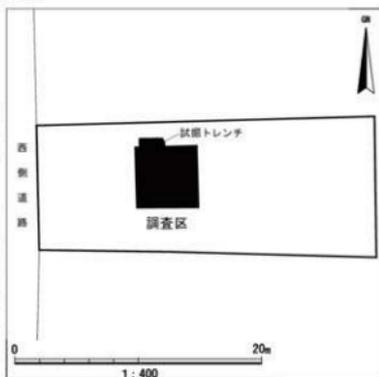


図2 調査区位置図

第0層は現代の整地層で層厚は約10～20cmである。

第1層はオリブ褐色(2.5Y4/3・4/4)およびにぶい黄褐色(10YR4/3)の細粒砂質シルト層からなる近代の盛土で、上部には焼土を含む。層厚は20～60cmである。

第2層は礫・炭を含むオリブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂質シルト層を主とする盛土である。調査区西半部は層厚15cm前後であるが、東半部は本層を埋土として一段落ち込んでおり層厚は30cmほどである。出土遺物はないが、本層の下位で検出したSK01が近世の遺構であることから、近世に盛土されたものと考えられる。

第3層は段丘構成層で、上部は明黄褐色(10YR6/6)細粒砂質シルトからなり、これより下位は黄褐色(10YR8/8)・明黄褐色(2.5Y7/6)・淡黄色(2.5Y8/4)の極粗粒～細粒砂からなる砂層である。

## 2. 遺構と遺物 (図4～6、図版1中・下、2上・中・下)

遺構は地山である第3層の上面で検出した。検出した遺構は図4のとおりである。

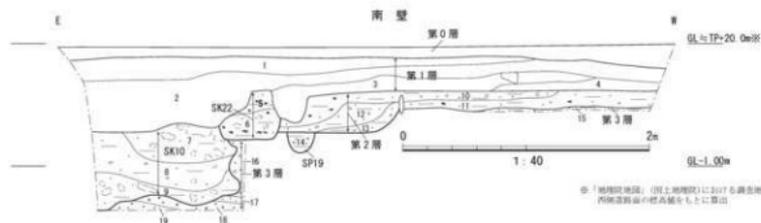
土壌はSK01・03・05・06・08・10・12・15・16・17を検出したほか、南壁で第2層上面遺構のSK22を確認した。

SK01は直径0.45m、深さ0.22mの土壌で、地山偽礫を含むオリブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルトを埋土とする。肥前磁器が出土していることから近世の遺構である。

SK03は直径約0.4m、深さ約0.3mの土壌で、地山偽礫を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂質シルトを埋土とする。遺物は瓦器碗8が出土しており、高台の形状から12世紀後半～13世紀に属するものとみられる。

SK05は試掘トレンチの北西隅で検出した土壌である。地山偽礫を含むオリブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルトを埋土とする。土師器片、瓦器片が出土しており、このうち瓦器碗は高台の形状から13世紀のものと考えられる。

SK06・08はSX07が埋められた後に掘られた遺構である。SK06からは瓦質土器とみられる9、丸瓦10、平瓦11が出土している。これらの土壌からは明確な近世の遺物は出土していないものの、



- 1: 中～細礫・炭を含むオリブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂質シルト【第1層】
- 2: 中～細礫・多量の炭を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂質シルト【第1層】
- 3: 中～細礫・炭を含むオリブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂質シルト【第1層】
- 4: 炭・細粒砂偽礫を含むオリブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルト【第1層】
- 5: 炭を含むオリブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂質シルト【SK22】
- 6: 炭・シルト偽礫・細粒砂偽礫を含む黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルト【SK22】
- 7: 地山偽礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂質シルト【SK10】
- 8: 中～細礫・少量の漆喰を含むオリブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂質シルト【SK10】
- 9: 漆喰を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂質シルト【SK10】
- 10: 中～細礫・炭を含むオリブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂質シルト【第2層】
- 11: 細礫・少量の炭を含むオリブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂質シルト【第2層】
- 12: 中～細礫を含む黄褐色(2.5Y5/4)シルト質細粒砂【第2層】
- 13: 中～細礫を含むにぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂質シルト【第2層】
- 14: 中～細礫を含む黄褐色(2.5Y5/4)シルト質細粒砂【SP19】
- 15: 明黄褐色(10YR6/6)細粒砂質シルト【第3層(地山)】
- 16: 中～細礫を含む黄褐色(10YR8/8)粗粒～中粒砂【第3層(地山)】
- 17: 淡黄色(2.5Y8/4)細粒砂【第3層(地山)】
- 18: 淡黄色(2.5Y8/4)極粗粒～粗粒砂【第3層(地山)】
- 19: 淡黄色(2.5Y8/4)粗粒～中粒砂【第3層(地山)】

図3 南壁地層断面図

埋土の状況から遺構の年代は近世に下る可能性がある。

SK10は東西1.8m以上、南北1.1mの隅丸長方形の土壇で、深さは0.7mである。地山偽礫や漆喰を含む細粒砂質シルトを埋土とする。出土遺物は土師器、国産陶磁器、瓦が出土しており、肥前磁器の広東碗が含まれることから18世紀末～19世紀の遺構と推定される。

SK12はSD09の下位で検出した土壇で、直径0.45～0.60m、深さは0.25mで、炭を含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂質シルトを埋土とする。須恵器甕の口縁部とみられる6、瓦器小皿7が出土しており、12～13世紀の遺構と考えられる。

SD02は調査区西端部で検出した南北方向の溝である。幅0.2m以上、深さ0.3m以上で、炭を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルトを埋土とする。

SD09は幅約0.3～0.5m、深さ0.07mの北西-南東方向の溝である。炭・極細粒砂質シルト偽礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルトを埋土とする。

SE11は直径0.85m、深さ1.45m以上の井戸である。井戸側は残存しておらず、抜き取られた後に埋め戻されたものとみられる(図5)。壁面が崩落したためかあるいは掘削時の意図的なものかは不明であるが、粒度の粗い砂礫層の地山を掘り込んだ下部はフラスコ状に広がっている。遺

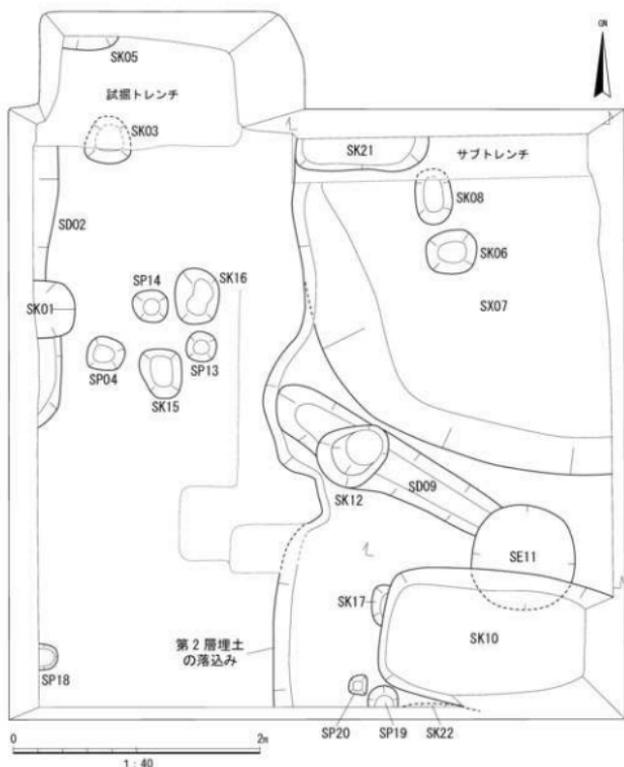
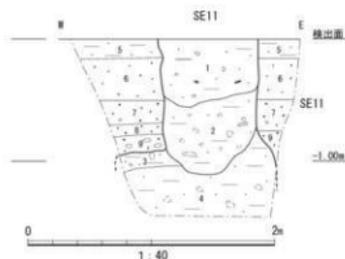
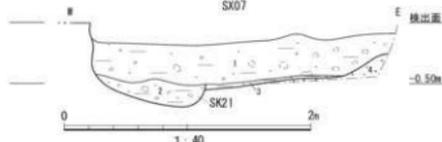


図4 遺構平面図



- 1: 中～細礫・炭を含む灰オリーブ色(SY4/2)シルト質細粒砂 [SE11]
- 2: 中～細礫・地山偽礫を含むオリーブ褐色(2.SY4/4)細粒砂質シルト [SE11]
- 3: 中～細礫・地山偽礫を含む暗灰黄色(2.SY4/2)細粒砂質シルト [SE11]
- 4: 地山偽礫を含む黄褐色(2.SY5/3)細粒砂質シルト [SE11]
- 5: 明黄褐色(10YR6/6)細粒砂質シルト [第3層(地山)]
- 6: 淡黄色(2.SY8/4)粗粒～中粒砂 [第3層(地山)]
- 7: 中～細礫を含む明黄褐色(2.SY7/6)極粗粒～粗粒砂 [第3層(地山)]
- 8: 淡黄色(2.SY8/4)粗粒砂 [第3層(地山)]
- 9: 中礫を含む淡黄色(2.SY8/4)極粗粒～粗粒砂 [第3層(地山)]

図5 SE11 断面図



- 1: 中～細礫・地山偽礫を含む褐色(10YR4/6)細粒砂質シルト [SX07]
- 2: 礫・地山偽礫を含む濃い褐色(10YR4/4)細粒砂質シルト [SK21]
- 3: オリーブ褐色(2.SY4/3)細粒砂質シルト [SX07]
- 4: 黄褐色(10YR5/8)粗粒～中粒砂 [第3層(地山)]

図6 SX07 断面図(北壁部)

と埋土が類似することから中世の遺構の可能性がある。

(まとめ)

今回の調査では、12～16世紀の中世の遺構および近世の遺構を確認した。中世の遺構が比較的密に分布する状況は周辺の調査例とも共通しており、調査地周辺における中世の土地利用のあり方の一端を知ることができたと考えられる。

#### 【引用・参考文献】

大阪市文化財協会 2003、「俗人町遺跡の調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告—2001・2002年度—』、

pp.13-16

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所 2014、「天王寺区逢阪一丁目における建設工事に伴う俗人町遺跡発掘調査 (RJ12-1) 報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 (2012)』、pp.345-364

物は土師器皿1・2、土師器片3、平瓦12が出土している。平瓦12は凹面には布目、凸面にはタギが確認できる。土師器皿2および平瓦12から16世紀頃の遺構と推定される。

SX07は調査区北東部で検出した東西2.5m以上、南北2.8m以上、深さ約0.5mの落込みである(図6)。底には細粒砂質シルトの泥が薄く堆積しており、この泥が堆積した後SK21が掘削されている。上部は地山偽礫を含む細粒砂質シルトで一括して埋められている。遺物は土師器甕4、瓦質土器甕5が出土しており、中世の遺構とみられる。

SP04は直径約0.3m、深さ約0.2mで、一定の深さがあることから柱穴の可能性も考えられる。土師器および瓦器の小片が出土していることから中世の遺構と考えられる。

このほか直径約0.15～0.30m、深さ0.10m未満の小穴SP04・13・14・18～20を検出した。

上記の遺構のうち出土遺物や遺構の年代について言及していないものについては、出土遺物がなく詳細な年代は不明であるが、中世の遺物を含む遺構



南壁地層断面  
(北西から)



第3層上面全景  
(北西から)



第3層上面全景  
(北東から)



SX07 断面 (北壁部)  
(南から)



SE11 断面  
(南から)



出土遺物  
(1 ~ 3・12 : SE11  
4・5 : SX07  
6・7 : SK12  
8 : SK03  
9 ~ 11 : SK06)

## 大國遺跡発掘調査(SDK20-1)報告書

調査箇所	大阪市浪速区大國一丁目128-1
調査面積	24㎡
調査期間	令和2年9月14日
調査担当者	課長 鈴木 慎一、小倉 徹也

### 〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は大國遺跡に位置し、近隣では以下の調査が行われている(図1)。調査地南側のDK09-2次調査地では古代において河口～浜堤の環境に立地し、その後離水して中世には区画施設とみられる溝、近世には柵が設けられていたことを確認している[大阪市文化財研究所2011]。調査地北東側のSX08-1次調査地では古代以前に形成された難波砂堆の堆積層を確認し、次第に離水して、難波砂堆の堆積層上面において古代に遡るとみられる土壌を検出している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]。

今回の調査は、建設工事に先立って実施した試掘調査により近世以前に属する遺構や遺物が確認されたため、本調査を実施することになった。調査範囲を確定するために再度試掘調査を実施し、敷地南西隅に調査区を設定して本調査を行うことになった。本調査は9月14日に、南北4m、東西6mの調査区を設定して実施した(図2・図版1)。現代の盛土層を重機で除去した後、人力により以下を掘り下げた。平面および地層断面の精査と遺構・遺物の有無を確認しながら調

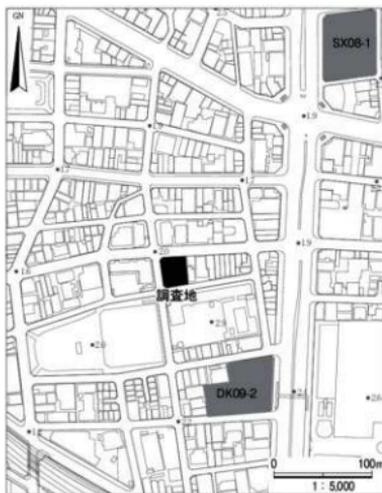


図1 調査地位置図

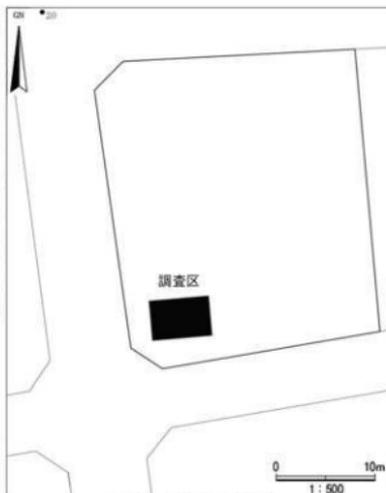


図2 調査区配置図

査を進め、遺構平面図および地層断面図の実測および写真撮影による記録作業を行った後、重機により埋戻しを行って現場での作業を終了した。

本報告で用いた方位、図1・2・5については現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。

#### 〈調査の結果〉

##### 1. 層序(表1、図3・4、図版1・2)

現地地表2mまでの地層を観察し、その結果に基づいて調査地の層序を組み立てた。以下に各層の層相や特徴を記し、層序表を表1、南壁地層断面を図3・図版1、東壁地層断面を図4・図版3に示す。

第0層は現代の盛土層および攪乱で、層厚は85~190cmである。

第1層は灰白色の中粒~粗粒砂からなる作土層で、層厚は約10cmである。上面で土塊SK01を検出した。

第2層は褐灰色の細粒~中粒砂からなる作土層で、細礫を含む。層厚は15~35cmである。

第3層は海成層で、第3a層と第3b層に区分し、さらに第3b層を上部・中部・下部に細分した。

第3a層は黄白灰色の極粗粒~中粒砂からなり、細礫を含む。層厚は約10cmである。第3b層上

表1 層序表

SDK20-1層序		層相	層厚(cm)	遺構	おこな遺物	時代
沖積層 (埋戻し層)	第0層	現代の盛土および攪乱	【盛土層】 【埋戻し】	85~190		現代
	第1層	灰白色 中粒~粗粒砂	【作土層】	ca.10	SK01 肥田細砂・肥田陶器片	近世
	第2層	褐灰色 細粒~中粒砂 細礫含む	【作土層】	15~35	SD01	中世 以前?
	a	黄白灰色 極粗粒~中粒砂 細礫含む (前浜堆積層)	ca.10			
	第3層 上部	灰白色 細粒~極粗粒砂 (上方細粒化、河口域で堆積?)	【海成層】	25~30		
	b 中部	黄灰色 細粒砂 (塊状、後浜堆積層)		30~35		
下部	黄白灰色 細粒~粗粒砂 (前浜堆積層)		≥20			

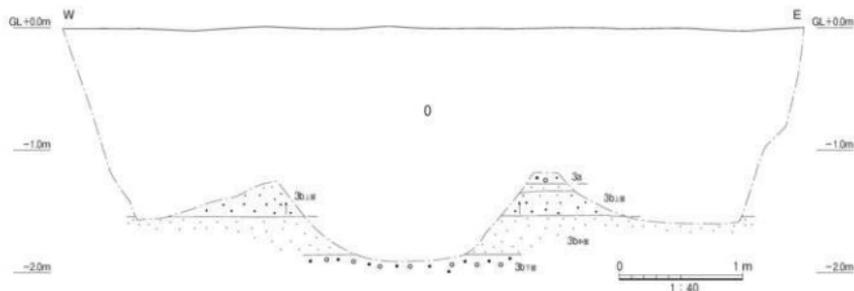


図3 南壁地層断面図

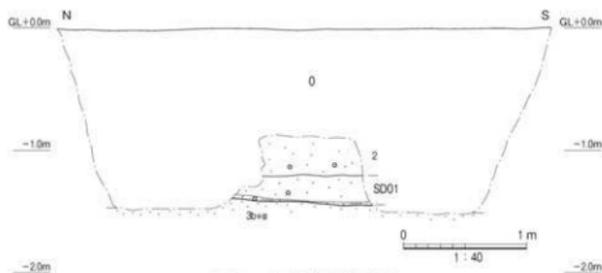


図4 東壁地層断面図

部は灰白色の細粒～極粗粒砂からなり、上方細粒化する。層厚は25～30cmである。中部は黄灰色の細粒砂からなり、分級が非常に良く、塊状である。層厚は30～35cmである。下部は黄灰白色の細礫～粗粒砂からなり、層厚は20cm以上である。第3a層上面で溝SD01を検出した。周辺の調査成果から本層は難構砂堆の地層であり、海浜部で河口域近辺の堆積層と考えられた。

## 2. 遺構と遺物(図5、図版2・3)

本調査では第1層上面で土壌SK01、第3a層上面で溝SD01を検出した。遺構平面図を図5、SK01およびSD01の遺構断面図を図6、遺構および遺物写真を図版2・3に示す。

SK01は検出した長さ2.3m、幅1.9m、深さは最大0.7mの土壌である。埋土は上部と下部に区分でき、上部は灰色の細礫～極粗粒砂混り粗粒～中粒砂からなり、下部は灰色の粗粒～中粒砂か

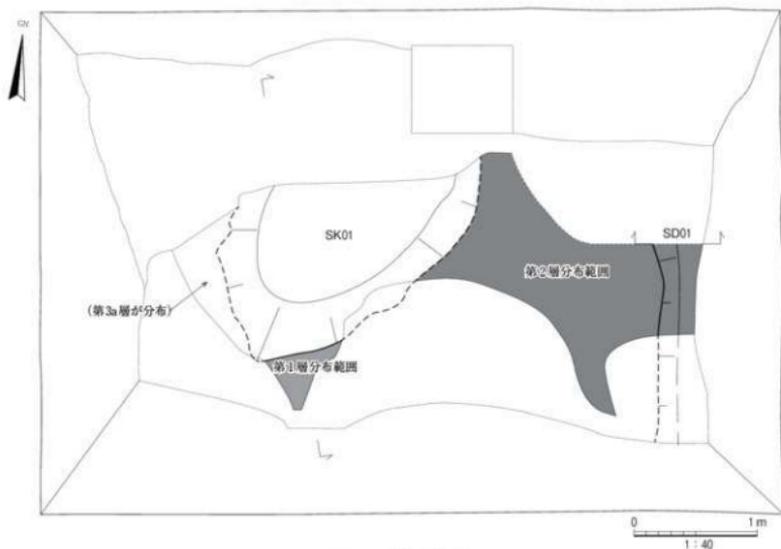


図5 遺構平面図

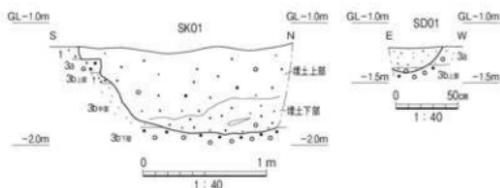


図6 遺構断面図

出した長さ1.6m、幅約0.4m、深さは最大0.2mであった。埋土は上部と下部に区分でき、上部は褐灰色の細粒～中粒砂からなり、細礫を含む。下部は褐灰色の細粒～中粒砂からなり、細礫とシルトを含む。層厚は0.02mで機能時堆積層とみられたが、遺物は認められなかった。

この他、第3層から摩耗した古墳時代の須恵器甕10が出土した。

#### 〈まとめ〉

今回の調査では、19世紀前半の土壌のほか、古墳時代の須恵器が難波砂堆の堆積層から出土し、これまでの調査成果とも調和的であった。古代から中世と確認できる遺構・遺物は検出できなかったため、この時期の環境は不明であるが、今後も周辺の調査について注意深く確認し、周辺地域を含めた環境の変遷と土地利用在り方について明らかにしていく必要がある。

#### 参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「数津遺跡発掘調査(SX08-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.449-453  
 大阪文化財研究所2011、『大田遺跡発掘調査報告』、pp.1-41

らなる。18世紀代の肥前磁器1・2・4・5、19世紀前半に属する広東碗3のほか、備前焼6、肥前陶器7、関西系陶器8・9、焙烙11、火打ち石12等が出土した。

SD01は南北方向の溝で、検



調査区全景(北東から)



南壁地層断面(北から)



遺構検出状況(東から)



土壙SK01検出状況(南東から)



東壁地層断面と溝SD01完掘状況(北西から)



出土遺物

SK01(1~2・4~5:肥前磁器、3:広東碗、6:備前焼、7:肥前陶器、8・9:関西系陶器、11:焙烙、  
12:火打ち石)、第3層(10:須恵器甕)



## 崇禪寺遺跡発掘調査（SSZ20-2）報告書

調査箇所	大阪市東淀川区東中島 六丁目 1059 番
調査面積	36 m <sup>2</sup>
調査期間	令和3年3月1日～3月3日
調査担当者	課長 鈴木慎一、田中 裕子

### 〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は弥生時代末～古墳時代前期の集落跡である崇禪寺遺跡の東端部に位置する。崇禪寺遺跡は大阪湾岸の砂州と淀川が形成した三角州によって陸化したところに営まれ、過去の調査で鉄製素環頭大刀が出土するなど弥生時代末から古墳時代前期にかけての中心集落の一つであった。調査地周辺では広範囲に庄内式～布留式期の遺物包含層や遺構、また古墳などが見つかっており、調査地北側の道路でも1958年に弥生時代の包含層が確認されている（大阪府教育委員会1982・2002ほか、図1）。

今回の調査は、計画された建設工事に先立ち当該地で行われた試掘調査で、現地表下0.4 m以下で本格的な調査を必要とする中世以前の遺構や古式土師器が確認されたことにより実施された。

作業は令和3年3月1日より着手した。調査区は敷地内に東西6m、南北6mの36m<sup>2</sup>で設置した(図2)。GL-0.4mまでの現代盛土を重機で除去し、以下を人力で掘り下げた。各層において、遺構・遺物を検出し、図面・写真等の記録作業を行った後、埋め戻しを行い令和3年3月3日に調査を終了した。

本報告で用いた方位は、世界測地系に基づく座標北を基準とし、建物の配置を基準として街区図に当てはめて求めたものである。標高はT.P. 値（東京湾平均海面値）を用い、本文および図中ではTP±〇mと表記した。

### 〈調査の結果〉

#### I. 層序（図1～3、図版1）

第0層 近現代の盛土層で、層厚約10 cmである。

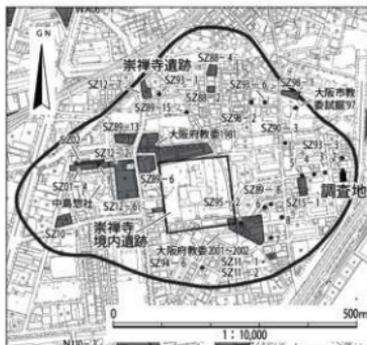


図1 調査地位置図

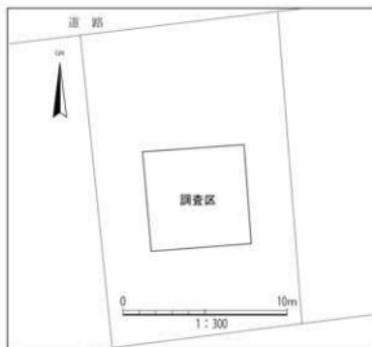


図2 調査区位置図

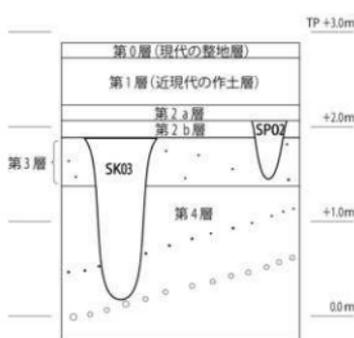


図3 地層と遺構の関係図

第1層 近世～近代作土層である。黒褐色(7.5 YR 3/1)シルト質細砂からなり層厚は約14 cmである。瀬戸美濃焼磁器などが出土した。

第2層 第2a、2bの上下2層に分けることができる。第2a層は灰褐色(10YR4/2)シルト質中粒～細粒砂からなり層厚は約16 cmである。炭・焼土を含み、第2b層を耕起した作土層と見られる。第2a層からは肥前磁器、関西系陶器1、瓦2など近世の遺物のほか、下層の混入として古式土師器やササカイト剥片3などが出土した。1は白泥、鉄絵、赤絵で色絵付けされている。18世紀代のものであろう。

第2b層は調査区南西部にのみ堆積する。灰褐色(7.5YR4/2)中粒砂からなり、層厚は約10 cmである。第3層をベースとする古土壤である。瓦器碗4のほか、古式土師器や弥生土器が出土した。

第3層 褐色(7.5YR4/3)シルト含粗粒～中粒砂からなり層厚は15 cmである。第4層をベースとした古土壤である。古式土師器5・6や弥生土器が出土している。

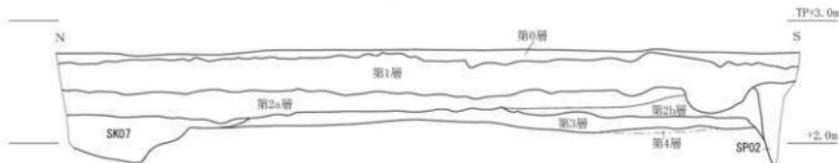
第4層 氾濫堆積層である。明褐色(5YR5/6)極粗粒砂からなり層厚は15 cm以上である。遺物の出土はない。

## 2. 遺構と遺物(図4、図版2)

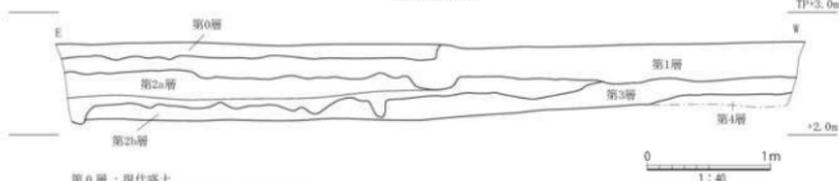
### i) 第3層の遺構

第4層上面で検出した遺構について以下に述べる。弥生時代～古墳時代前期の遺物が出土する

東壁断面図



南壁断面図



- 第0層：現代盛土  
 第1層：黒褐色(7.5YR3/1)シルト質細粒砂  
 第2a層：黒褐色(2.5YR3/1)シルト質中粒～細粒砂(小礫、炭・灰土含む)  
 第2b層：灰褐色(7.5YR4/2)中粒砂  
 第3層：褐色(7.5YR4/1)シルト質粗粒～中粒砂  
 第4層：明褐色(7.5YR5/6)極粗粒砂  
 SK07：褐色(7.5YR4/3)粗粒砂  
 SPOZ：褐色(7.5YR4/1)中粒砂質シルト(小礫、炭含む)

図3 遺構と地層の関係図

SK04～SK09と、平安時代の遺物が出土したSK03とがある。

SK04 調査区中央部に位置し、西側を攪乱で壊されている。東西85cm以上、南北173cm、深さ43cmで、埋土は褐色(10YR4/4)シルト含極粗粒砂からなる。古式土師器甕などの破片が出土した。

SP05 直径約40cm、深さ15cmの小穴であり、東半分が攪乱で壊されている。

SK06 調査区北西角に位置し、東西160cm以上、南北90cm以上、深さ35cmで、埋土は灰褐色(7.5YR4/2)極粗粒砂からなる。比較的浅く、自然のくぼみに第3層が堆積した可能性がある。

SK07 調査区北東角に位置し、東西70cm以上、南北80cm以上、深さ30cmで、埋土は褐色(7.5YR4/3)粗粒砂からなる。

SK08 東西84cm、南北80cm、深さ24cm、褐色(7.5YR4/4)シルト質極粗粒砂からなる。SK09を壊している。出土遺物は弥生土器壺7、土師器甕などが出土する。7は壺の底部とみられ、外面は縦方向にミガキが施される。

SK09 東西100cm、南北106cm、深さ53cmで、埋土は褐色(7.5YR4/3)シルト質極粗粒砂からなる。弥生土器の底部の破片のほか、土師器甕8、壺9などが出土した。8は口縁部の破片で端部が肥厚する。9は小型の壺の体部で、赤褐色を呈し、外面は横方向の細いミガキが施されている。

上記のSK04～SK09からは、弥生土器片のほか、庄内～布留式の土師器片が出土している。出土遺物は一定量あり、あまり摩滅してはいないものの、小さな破片が多かった。また本調査地より西に100mほどの地点で実施されたSZ15-1では、同時期の遺構のほか、須恵器が出土する土壌もみられたが、本調査地では須恵器の出土はなかった。検出された上記の遺構は弥生時代末～古墳時代前期に属するものといえる。調査地は当時の集落の縁辺部に位置していた可能性が考えられる。

同じく第4層上面で検出した土壌であるが、SK03からはより新しい時代の遺物が出土した。

SK03 調査区北端に位置する。東西123cm、南北136cm以上、深さ70cm、埋土は褐色(7.5YR4/4)シルト含む粗粒砂からなる。北壁断面の観察では、第3層上面より掘られていた。土師器皿10などが出土した。10はいわゆる手の字皿で平安時代のものであろう。

## ii) 第2層の遺構

SK01 東西130cm、南北100cm、深さ28cm、埋土は褐灰色(7.5YR4/1)中粒砂質シルトからなり、炭・中礫を含む。肥前磁器染付碗11、肥前陶器皿12・14、関西系陶器碗13などが出土した。11は体部外面に一重網目文が描かれる。12は三島手の皿である。13は半筒碗で、白泥と鉄絵で施文される。

SP02 東壁南端で検出した小穴で、直径30cm、深さ40cm、第2層上部の埋土で埋まっていた。肥前磁器白磁皿15や土師器皿などが出土した。15は見込みが蛇の目釉剥ぎされる。

これらの遺物は17世紀後葉～18世紀中葉のものであろう。

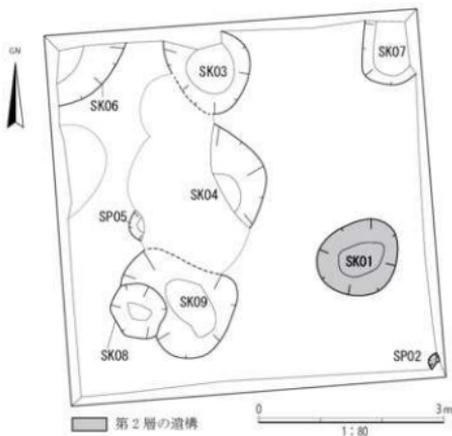


図4 遺構平面図

〈まとめ〉

・弥生時代末～古墳時代前期の土壌を確認した。出土遺物は一定量あるものの細かな破片が多く、摩滅が少ないことから、当該地は弥生時代末～古墳時代前期の集落の縁辺部であった可能性が考えられる。

・平安時代の土壌 SK03 を検出した。また、第 2b 層からは瓦器も出土している。調査地の西には中世の大古利であった崇禪寺があり、中世にも土地利用が行われていたといえよう。

・その後、近世以降は耕作地として利用されていたといえる。

以上、崇禪寺遺跡の集落の広がりや、当該地域の土地利用の変遷を知るうえで貴重な成果が得られた。

【引用・参考文献】

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所 2017、「崇禪寺遺跡発掘調査 (S215-1) 報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 (2015)』、pp. 341 - 348

大阪府教育委員会 1982、『崇禪寺遺跡発掘調査概要 I』

大阪府教育委員会 2003、『崇禪寺遺跡』



南壁地層断面  
(北から)



第2・3層の遺構完掘  
(北から)



出土遺物

第2層 (1～3)、第3層 (4～6)、SK08 (7)、SK09 (8、9)、SK03 (10)、SK01 (11～14)、SP02 (15)

## 平野環濠都市遺跡発掘調査（SHN20-1）報告書

調査箇所	大阪市平野区平野東一丁目5-3、10
調査面積	21㎡
調査期間	令和3年2月25日
調査担当者	課長 鈴木 慎一、宮本 康治

### 〈調査に至る経緯と経過〉

#### 経緯と経過

本調査地は平野東1丁目に位置し、中世から近世にかけての遺跡である平野環濠都市遺跡内に位置している。当地点の周辺では東から北東側のHN84-11次や84-13次、北西側のHN84-15、85-10次などの調査があり、弥生土器が出土しているほか、平安～室町時代、そして大坂ノ陣に伴う焼土層や関連の遺構・遺物など、各時代の状況が確認されている。

当地で計画された建築工事に先立ち、令和2年12月8日に実施した試掘調査の結果、近世以前の焼土層を含む遺物包含層が良好に遺存することが明らかになり、調査を実施することになったものである。調査は敷地南東で良好に地層が残存していると推測される場所で東西7m×南北3m、21㎡の調査区を設けて実施した。重機により近現代の盛土を掘削したのちに人力により掘り下げたのち遺構面の検出等を進め、図面作成や写真撮影などの記録作成作業を行った。調査は令和3年2月25日に行い、同日中に現地での作業を終えた。

### 〈調査の結果〉

#### 1. 層序（図3、図版1・2）

地層については部分的な確認も含め現地地表約2.2m付近までの地層を確認している。調査区の西部では現地地表下1.5m付近まで近現代の攪乱があったため、平面的な検出や地層の観察は主に東より



図1 調査地位置図 縮尺1:5,000



図2 調査区配置図 縮尺1:1,000

の箇所で行っている。

第0層：現代盛土で層厚は0.6～1.5mほどである。

第1層：暗灰色シルト質砂で、層厚は0.2m前後である。

第2層：赤褐色砂で焼土片を含む盛土層である。層厚は0.2m程度である。近世陶磁器等が出土している。

第3層：暗赤褐色シルト質砂で整地層で、焼土片や炭を含む。層厚は0.1m前後である。近世陶磁器類が少量出土している。

第4層：褐灰色シルト質砂で盛土層である。層厚は0.1～0.2m程度である。

第5層：黄褐色粘土～中粒砂で、盛土層である。層厚は0.2～0.3m程度である。

第6層：淡赤褐色粘土質シルト～シルト質砂で焼土を含む地層で部分的に堅緻である。層厚は0.1m前後である。

第7層：黄褐色砂質シルトで、層厚は0.3m前後である。須恵器鉢かともみられる1・2や瓦片3などが出土した。

第8層：褐色細粒砂質シルトで古代以降の地層で、層厚は0.3～0.4mである器の皿4、甕かともみられる5、羽釜6などが出土した。

第9層：黄褐色シルト質砂で盛土層である。

## 2. 遺構と遺物 (図3・図版1～3)

遺構の検出は深掘りを行った箇所のみであるが第9層、および第4層、3層上面で行った。

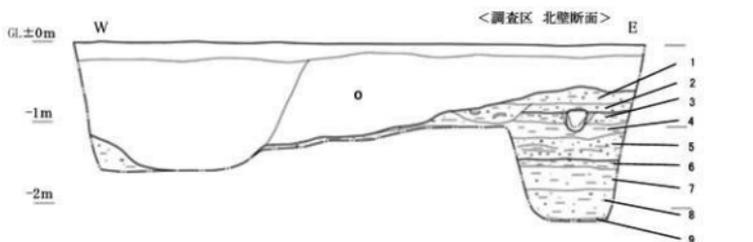
第9層の上面では礎石の可能性のある石01を検出した。石材は東西0.6m、南北0.5mほどの大きさで、上面は平坦である。周辺部に関連する石が広がるかは十分確認できなかった。第9層は人為的に動かされた砂礫からなり、また第8層には平安時代あるいは中世とみられる土師器片が見られ、これらの石材や開発は中世にさかのぼるとみられる。第8層、第7層は耕作土とみられ、中世には耕作に用いられていたと考えられる。

第6層とした整地層は部分的に焼けて堅くしまった部分があり、火災等により火を受けた可能性がある地層である。関連して遺構の検出は十分できなかったが、上下の地層の出土遺物の状況からみて中世でも後期等の焼土層である可能性がある。

その上には第5層、第4層とした盛土層があり、調査区の西側では第5層中で集石遺構SX02を確認した。0.3～0.4m程度の石材が2m程度の範囲に広がっていた。攪乱の底にあたるため、位置が変わっている可能性があるが、本来は何らかの構造物の一部であった可能性もあろう。付近からは中国産青花碗7が出土している。

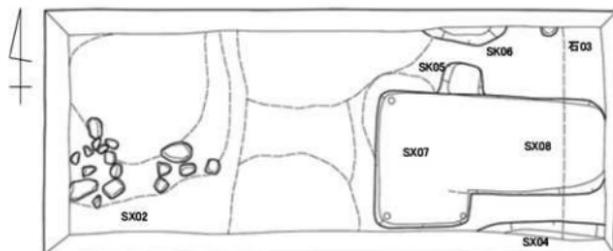
第3層は一部堅く焼けしまった整地層で、良好に伴う遺物がいないため詳細は不明だが、上下の地層の状況からみて大坂ノ陣に伴う焼土の可能性もある。周辺の調査では現地地表1m前後で確認された焼土層が大坂ノ陣に伴うものとみられており、対応するものかもしれない。第3層に関連しては礎石とみられる石材03が北側の壁面にかかって確認されている。

第1層・第2層に関連する遺構としては調査区東部で検出した落ち込みなどがある。第2層上面の遺構には瓦が含まれていたSX06、南東で一部が検出されたSX04、炭化物を含む埋土が見られたSX05などがある。第1層上面とみられるものとしてSX07・08があり、SX07は南北方向に、SX08は東西方向に長軸をとる。SX08が新しい可能性がある。ともに幅1.2m、長さ1.7～1.8mほどで、平面形が隅丸方形をとる。SX07では隅に直径0.1mほどの小穴があり、杭等を設置したものとみられる。その平面的な状況などから穴蔵等の可能性があろう。埋土からは18～19世紀代の陶磁器等のほか、一部近代に入る時期の資料も含まれており、遺構の形成は江戸時代の可能性もあるが近代に埋め戻されたようである。



- |                         |                                |
|-------------------------|--------------------------------|
| 0: 現代攪乱層                | 5: 黄褐色粘土～中粒砂(第5層)              |
| 1: 暗灰色シルト質砂(第1層)        | 6: 淡赤褐色粘土質シルト～シルト質砂、焼土を含む(第6層) |
| 2: 赤褐色砂、焼土片を含む(第2層)     | 7: 黄褐色砂質シルト(第7層)               |
| 3: 暗赤褐色シルト質砂、焼土を含む(第3層) | 8: 褐色細粒砂質シルト(第8層)              |
| 4: 褐灰色シルト質砂(第4層)        | 9: 黄褐色シルト質砂(第9層)               |

<第3層上面での遺構検出状況>



<第9層上面での遺構検出状況>

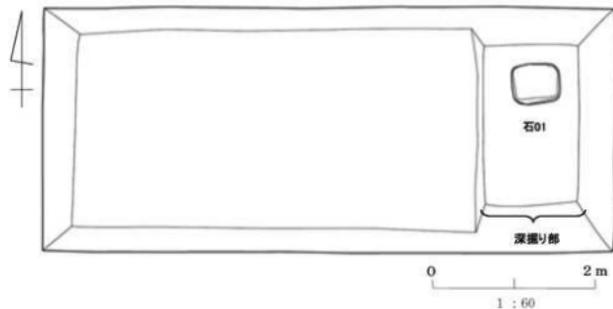


図3 調査区平面・断面図

(まとめ)

本調査地では現地表下約2.2mまでの状況を確認することができ、部分的ではあるが平面的に遺構の状況を確認した。

詳細な時期は不祥なものの中世にさかのぼる可能性のある礎石とみられる石が検出されたほか、中世には耕作に用いられた時期もあるほか、中世でも後期それ以降には整地され屋敷地となった可能性がうかがわれた。大坂ノ陣あるいはそれ以前の時期の焼土も確認された。今回の調査では遺構の広がりを十分把握することはできなかったが、中世以前にさかのぼる遺構がある可能性が改めて確認され、周辺での成果に資料を加えることができた。付近では小規模な調査が多く平野の変遷はまだ不明な点が多いが、今後とも成果を積み重ねて歴史像を豊かにしていくことが求められよう。

参考文献

大阪市・大阪市文化財協会1986『昭和59年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

大阪市・大阪市文化財協会1987『昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

大阪市・大阪市文化財協会1988『昭和61年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

大阪市文化財協会1999『大阪市内埋蔵文化財発掘調査報告—1996年度—』

大阪市文化財協会2009、『大阪市南部遺跡群発掘調査報告』



北壁・東壁断面および深掘り部の状況（南西から）



第9層石SX01検出状況（西から）



第3層上面完掘状況(南東から)



第3層上面完掘状況(南西から)



第2層上面検出状況(南西から)



第7層(1・2:須恵器鉢か、3:瓦)、第8層(4:土師器皿か、5:土師器甕か、6:土師器羽釜)、SX02付近(7:中国産青花碗)



## 長原遺跡発掘調査 (SNG20-1) 報告書

調査箇所	大阪市平野区長吉長原東三丁目 長吉長原東第4住宅40号棟用地
調査面積	25㎡
調査期間	令和3年2月9日～10日
調査担当者	課長 鈴木 慎一、宮本 康治

### 〈調査に至る経緯と経過〉

#### 経緯と経過

本調査地は長吉長原東三丁目に位置し、旧石器時代から中世にかけての遺跡である長原遺跡内に位置している。周辺では市営住宅の建て替えや区画整理事業等に伴い発掘調査がいくつかの地点で行われている地域である。本調査は市営住宅の建て替えに伴い令和2年3月25日に実施した試掘の結果、旧建物棟からはずれたところでは中世以前の地層が遺存することが明らかになり、新規の建物建設予定地点において本調査を実施することになったものである。調査は令和3年2月9日に開始し、調査区は敷地の南西で良好に地層が残存していると推測されるところで東西・南北5m、25㎡の調査区を設定して実施した。重機により新しい盛り土を掘削した後、人力も併用しながら掘り下げ、遺構・遺物の検出等を行い、図面作成や写真撮影などの記録作成作業を終え、翌10日に埋め戻し作業、復旧作業を行って現地での作業を終了した。

### 〈調査の結果〉

#### 1. 層序 (図3、図版1・2)

地層については部分的な確認も含め現地表下約3.2m付近までの地層を確認している。

第0層：現代盛土で層厚は1.5mほどである。

第1層：灰色粘土質シルトで旧耕作土である。層厚は0.2m前後である。

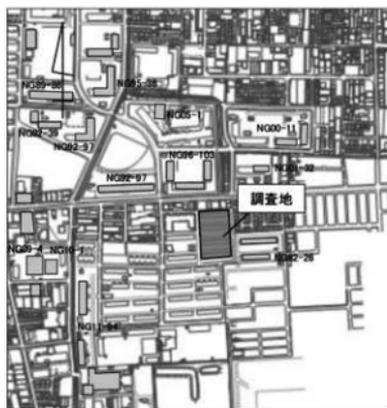


図1 調査地位置図 縮尺1:5,000



図2 調査区配置図 縮尺1:1,000

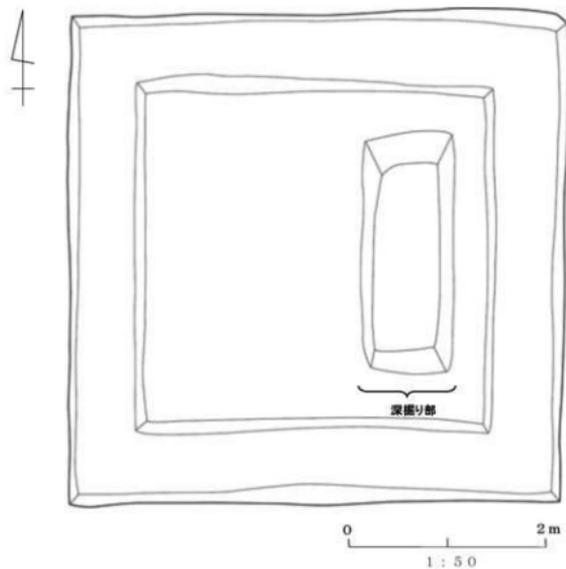
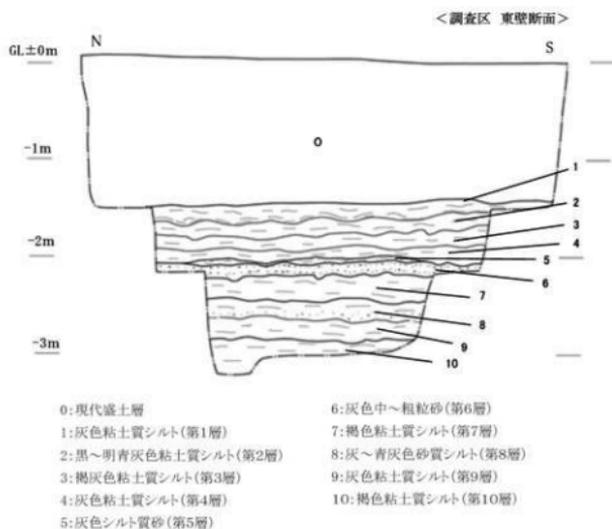


図3 調査区平面・断面図

- 第2層：黒～青灰色粘土質シルトで耕作土である。層厚は約0.2mである。
- 第3層：褐灰色粘土で耕作土で、層厚は0.2～0.3mである。
- 第4層：灰色粘土で層厚は0.2m前後である。
- 第5層：灰色シルト質砂で耕作土で、層厚は0.1m前後である。
- 第6層：灰色中～粗粒砂で水成堆積で、層厚は0.2m前後である。
- 第7層：暗褐色粘土質シルトである。層厚は0.2～0.3m程度である。
- 第8層：灰色シルト質砂である。層厚は0.2m前後である。
- 第9層：灰色粘土質シルトである。層厚は0.2m程度である。
- 第10層：褐色粘土質シルトで暗色帯である。層厚は0.3mほどである。

## 2. 遺構と遺物 (図3・図版1・2)

遺構の検出は第2層、第7層の上面等で行った。顕著な遺構は確認できなかった。第10～7層にかけては遺構は確認できていない。第4層より上位では地層の観察より耕作されていたことがわかった。また遺物としては第2～3層において瓦細片等を確認できたのみであった。

長原遺跡における標準層序との対比をみると、遺物が出土せず詳細は不詳であるが、標高等もあわせての推定では第10層とした暗色帯が長原7層あるいはそれ以下、第7層が長原第6層、第5層の砂層が第5層、第4層より上位が第4層より上位に対比される可能性がある。

### (まとめ)

本調査地では現地表下約3.2mまでの地層の状況を調査することができた。顕著な遺構や遺物は確認できず、詳細な時期は不詳であるが、現代盛土以下に旧耕作土以下の地層が残存していた。周辺での成果からみて、長原7層あるいはそれ以下に相当する地層まで確認したものとみられる。本調査地の状況では第7層以下では顕著な活動が確認できず、第4層より上位では耕作された状況がわかかれ、主に中世以降には耕作などで利用されていた可能性があるといえよう。周辺では市営住宅の建て替えや区画整理事業等に伴い発掘調査が行われているが、そのうち西方ではNG09-4次や同10-1次調査などで平安～鎌倉時代等の遺構が確認されている一方で、本地点および東側のNG82-26や北側の96-103次調査地等では遺構が顕著ではない地点もあり、そうした状況に類似する状況が確認されたといえよう。一帯における開発などの進展について資料を加えることができた。

### 参考文献

- 大阪市博物館協会大阪文化財研究所2012、『長原遺跡発掘調査報告』第24冊  
大阪市博物館協会大阪文化財研究所2013、『長原遺跡発掘調査報告』第27冊





北壁・東壁断面および深掘り部の状況（南西から）



第9層石SX01検出状況（西から）



---

大 阪 市 内 埋 蔵 文 化 財 包 蔵 地

発 掘 調 査 報 告 書 ( 2 0 2 0 )

発 行 日 令 和 4 年 3 月 31 日

発 行 大 阪 市 教 育 委 員 会  
(一財) 大 阪 市 文 化 財 協 会  
(公財) 大 阪 府 文 化 財 セ ン タ ー

編 集 大 阪 市 教 育 委 員 会 事 務 局 文 化 財 保 護 課  
(大 阪 市 北 区 中 之 島 1-3-20)

印 刷 株 式 会 社 カ ン プ リ

---

